

Nihon meicho zenshū; Edo
bungei no bu



日本名著全集
江戸文藝之部第廿弐巻

膝栗毛其他 上

この巻の装幀——

背及表紙意匠　太田三郎氏畫
見返し前附・後附　太田三郎氏畫
背文字　渡邊新三郎氏筆
扉文字　近藤雪竹氏筆
箱に用ひた圖案　小杉未醒氏畫

膝栗毛其他目錄

【上巻】

續膝栗毛……十返舍一九作

【下卷】

続々膝栗毛……………………十返舎一九作

解説

山口剛

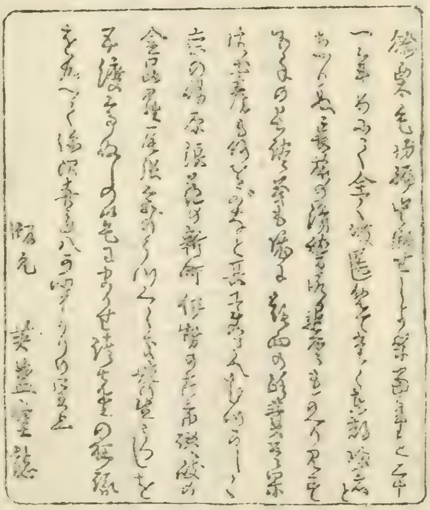
「東海道中膝栗毛」を正編として、その後をうけ嗣いだ「續膝栗毛」も年々に編を重ねて、文政五年には十二編出板といふ運びになつた。作者一九はこの編で彌次郎兵衞と北八、いふところの二人の騷士を江戸に歸らせることにした。おもへば長い道中であつた、二人が神田八丁堀の住居を立ち出でゝから、丁度二十一年目に當る。その間に「膝栗毛」の板元も村田屋から二轉し、三轉したが、今の板元はこれ等主人公の江戸安着を祝ふためとて、國貞の筆に成る美人畫を添へて顧客におくつた。それに附けた口上書は二世一九の作「奥羽一覽道中膝栗毛」に敷寫しにされてあるので、容易に見ることが出來る。

その敷寫しを、また寫眞に撮つたのが、こゝに揭げたものであるが、何分にも細字のこととて、讀みづらいやうに思はれる。活字におきかへることにする。

「膝栗毛初編出版せしより、當年迄二十一年めにて全く滿尾し、めでたく東都歸着となりぬ。長旅の滑稽御退屈もかへり見ず、下手の長談義も、既に趣向の路費盡果、御土產も何をがなと其工夫さ

へむつかしく、京の鴨原、浪花の新町、伊勢の古市、讃岐の金毘羅、尾張宮のうつくしき妓の生うつしを、五渡亭ぬしの筆にまかせ、諸先生の狂詠を加へて彌次喜多八が心ばかりの呈上

版元　英　盛　堂　述



板元が御土産物呈上をやつたのは何も商賣上手のみでなかつた。當代唯一の流行兒を主人公とする册子を賣り出すばかりか、あの長編物の首尾を自分の店で立てさせたのは、數多い江戸の地本問屋の中でも、特に選ばれたといふ感が强かつたらう。板元はその誇をも心祝の中に籠めてゐたのであつたらう。まして彌次北八はもう立派な民衆的英雄になりおほせてゐる。よし質こそ義經や辨慶の類ひと異なれ、贔屓の度合からいつたら、却つて此方に團扇があがる程の立者になり切つてゐる。板元たる者はまさに敬を致してこの人々の歸着を迎ふべきであつた。それに桃太郎の鬼島からの凱旋を待ちうける爺婆の心で、あの二人を歡迎する讀者があつた。成程彌次北八は一九の腹を借りたのに相違ない、また折々催生藥をさへ飲ませる慾深な板元の

手に懸つたに相違ない。しかし、あゝまで健かに生立たせ、二十一年の長旅を仕おほせるまでにしたのは、養ひ親、育ての親の讀者の慈悲である。それにその頃の讀者は今の新聞や雜誌の續き物に興がる手合とは違つて、わづかに毎年の春に出板される一編によつてのみ、彌次北八の旅の便を聞くだけであつた。そんなおぼつかない便を二十一年も待ちつゞけたのである。もし、板元があの二人を迎へる席に讀者をも招待しなかつたら、それこそ義理知らず、恩知らずと爪彈きもせられたであつたらう。

二

十返舍一九が「東海道中膝栗毛」の初編一册を世に出したのが享和二年、それから二十年を書きつゞけようとは、作者自身もゆめさら考へてゐなかつた。否、その東海道でさへも、五十三次に亘つて書き上げることが出來るか、どうかは大なる杞憂であつた。

「此の編は東都品川驛より漸く筥根驛に至つて畢る。その餘草稿出來あれども、帖數の過剩を厭ひて、飯盛の後釜に讓り、追焚して後編に著さんとす。」

何處までか知らないが、その餘の草稿が果してこの初編の序にいふやうに出來てゐたのであらうか。それはともかくも、大體の腹案はすでに成つてゐたやうに思はれる。彌次と北八は神風や伊勢參宮より足引の大和巡りして花の都に梅の浪花へと心ざして行くと本文を書き起してゐる。けれどその腹案が闇から闇に葬られずに濟むかといへば、誰も首をひねらねばならぬ初編出板當時の事情であつた。「膝栗毛」の趣向にみづから強い信を持する一九は、まづ永い間恩顧をうけた地本問屋蔦重に相談した。蔦重の返辭はつれなかつた、

黄表紙作者としては扱ふが、まだついぞその作で儲けさせて貰つたことのないその人を中本作者として認めよう筈がない。無名作者の悲哀のどん底から一九を救ひ出したのが村田屋治郎兵衛であつた。それも一九が板下も挿繪も一人で濟すために、出板費も大したことがないといふ理由の下に、瀬踏として出板したとのことである。

後編二册、翌三年の出板。「箱根驛より大井川に至つて終る。」初編の好評はなか／＼であつたが、未だ末を遂げるとまで運ばなかつたことは、後編の稱から推することが出來る。

三編二册、翌文化元年の出板。「道中岡部驛より舞阪に至り、荒井渡船にして一集終る。」こゝに大阪までを五編で滿尾させる豫定が立つた。凡例はそれを示してゐる。

四編二册、同二年の出板。後編に序して「一鞭たゞちに京城にいたる」といつた芍薬亭は、この編の序に於ていひ直してゐる。「嚮に野生二番目に題して、一鞭直に京城の大詰に至るといへるものは、大帳を不見の誤にして、此世界いまだ新井より桑名までの道行に終て、伊勢參宮のまはり仕掛、大津街道の御仕合は五編目の打出しに載たり。」

五編二册、同追加一册、同三年の出板。前の二册は桑名から山田まで。追加が出たので、芍薬亭は再度訂正の筆を執らずに濟んだ。また序していふ「今既五編追加成て長袖よく舞ふ古市の娛樂、長舌巧に囀る宮雀の滑稽を盡せり。」

一九はもう讀者に飽かれることを虞れる必要がなくなつた。讀者の一人の難にいふ、彌次北八が江戸出發以來髪結月代せぬはどうした譯と。すなはち一九に妙見町泊の趣向が成る。今はたゞ讀者の註文を受けてさ

へ居ればよい程に、「膝栗毛」の運びは樂になつたのである。

六編二册、四年の出板。伏見から京まで。「思ふところあつて、道順をかへて大阪を後にす」といふ。大阪に七年も居住してゐた一九は、その精しきを以て結尾を飾るためであつた。

七編二冊、五年出板。京見物。

八編三册、六年出板。大阪見物。「東海道中膝栗毛」はこゝに完きを得た。

「膝栗毛」の好評は早い頃から世間に摸倣の書を出させた。五編の附言に、「膝栗毛續編」といふが京に於て出板せられたことをいつてゐる。「予が爲の引札にして思はざるの幸甚なりき」と書く一九の得意が思ひやられる。七編の述意に「近頃此書に類せし版本さま〴〵出たりしを、予悉くもとめ得て閱するに、おの〳〵滑稽の花實を備へておもむき尤ふかし」とある言葉の裏をこそ讀むべきであつた。その板本の一例として文化四年板の「夷國滑稽羽栗毛」を見る。一九が予が爲の引札といふのは人を欺いてゐなかつた。

田助といふ放蕩者が淺草觀音に金を祈つて羽を授かる。それで羽衣を作つて貰ふために、飛んだり刎ねたり變つたりを賣つてゐる翁を尋ねる。

「田助「どうだ親方、おめへにちつと賴みたい事があるが、まづ一寸摘んで咄すところが斯うよ。わつちも每年々々つまらぬ事ばかり、そこで彌次郎北八が眞似をして膝栗で出かけようと思へども、路銀はなし、足も近頃は小足にちよこ〳〵走り、所詮金でもなけりや面白くなし、又其金はめつたに出來ず、金の代りに脇から羽をたんと貰ひやしたのさ。夫からの思ひ附きで、どうぞおめへに、アノ羽衣を拵へて貰ひ、それを着て飛んだり刎ねたり、一刎羽栗毛と出かけようと思ひやすが。おや父「是々もう皆まで聞くに及ばず、それは

何よりの思ひ付け、近年一九が膝栗毛の大當り、これは又其上を越す羽栗毛、おまへの御案じ奇妙々々。」

からして羽衣を得た飛行自在の身となつて悪所の仙郷へ遊ぶ「風流志道軒傳」などから假りた趣向立も、足地を離れてゐる落目は、つひに後編を出すに至らず、「閨中の段に羽衣を脱かず、エヽ惜しいの口舌に、羽をむしられ腹立ちて管をまき忽にお里が知れるなど様々のをかしみいふばかりなし」の豫告をさらしものにして退けたのである。

他の者がといふよりも、「膝栗毛」まがひを仕立てるのは一九その人であつた。文化六年、丁度八編出板の年には「滑稽江の島土



「東國滑稽羽栗毛」さし繪

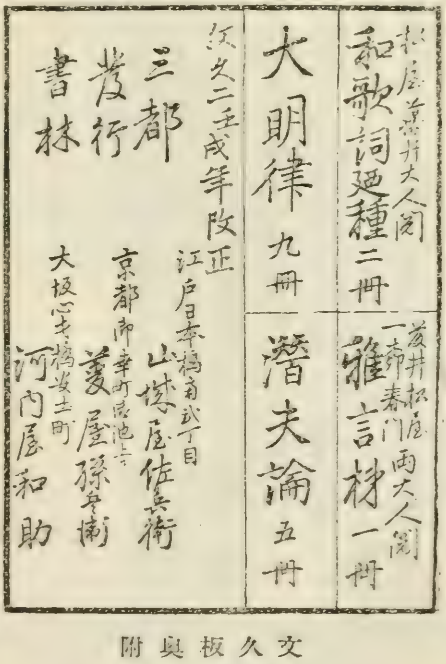
産」初編を出した。江島開帳をあて込んでの作なる故に、膝栗毛冊中の趣向に似かよひたる所のみなりと自らも斷らざるを得なかつた。しかし、同案におちてゐるのは、これだけでなく、「六阿彌陀詣」「堀の内詣」「雜司ケ谷紀行」どれもその類ひであつた。それどころか一九は東海道物にひき續いて、文化七年には「續膝栗毛」の筆を執り出したのである。

三

意外な好評は作者に油を乘らせる、そこへ讀者からはいろ／＼の註文が出る、作者の豫告は幾度か變更する。さうして「東海道中膝栗毛」は八編の長きに至つたのであつた。しかも板元が屢々廣告しておいた木曾街道筋、歸路の滑稽に言及するまでにはゆかなかつた。八編は「此度は木曾路にかゝり、草津の温泉に一回り遊び、善光寺へ廻り、妙義榛名へ參詣し、目出度く歸國したりける。此紀行は追て著はすべく、先は此にて筆をさしおき畢ぬ」と結んでゐるが、その木曾街道はまたぞろあと廻しにされた。「續膝栗毛」の初編二冊を金毘羅參詣とした爲である。金毘羅は當時の流行神であつた。板元はそれをあて込んで作者に囑したのであらう。しかも、一九が金毘羅信仰の事を知つて板元が特にこの紀行を勸めたとある序言は直に讀者に信ぜられるほど、もう讀者は一九の傀儡となつてゐた。

翌文化八年出板の二編二冊は宮嶋參詣であつた。一九の計畫は播磨路を經て木曾街道にかゝるにあつた。けれど腹稿が熟さないので、この年の出板を見合はさうとした。板元は免さなかつた。急場に合はせたこの編の趣向は一九としては意に滿たざるものであつた。人形を操る人形つかひの背後には板元といふ座元がゐ

て、「膝栗毛」繁昌の機を逸らしはさせなかつた。
三編二册、九年の出板。「此編は藝州宮嶋より中國筋、播磨名所巡の趣を著すべき順なれども、板元の望みにまかせて、すぐさま木曾路とこぢつけたり」と附言に見える。板元と作者と氣を合はせて宣傳大に努めた木曾街道には斯うしてとりかゝつた。この編は大津驛にはじまつて柏原に終つてゐる。
四編二册、十年の出板。寢物語村から加納まで。
五編二册、十一年の出板。加納から大久手まで。
今年、一九は「東海道中膝栗毛發端」を出した。さきに八編に豫告して「近頃此書に類せし販本是彼と出侍れば、その流行の圖をはつさずむかふ午には初編再販の催あれば、それに發端一册を增して二卷となし」といつたそれが、何等かの事情によつて延引してゐたのであつた。

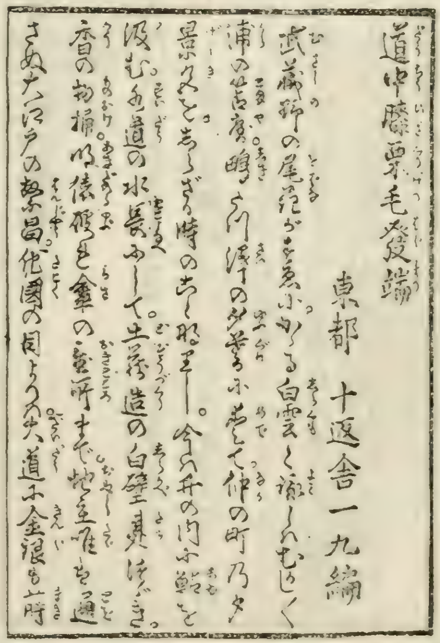


文久板奥附

「發端」は江戸出發以前に溯つて、彌次郎兵衞北八の素性を語る。行くさき／＼に滑稽を演ぜさせようばかりに伴れ出したあの二人の身上を洗つて見たところで何にならう。しかし、二人は當代高名の士となり切つ

た今である。「彌次郎兵衛喜多八の稱、異國の龍馬とひとしく、千里の外に轟たれば、渠等が出所を問ふ人あり、依て今その起る所を著し云々。」作者はすべての讀者の意を忖度してこの一編を作つたのである。

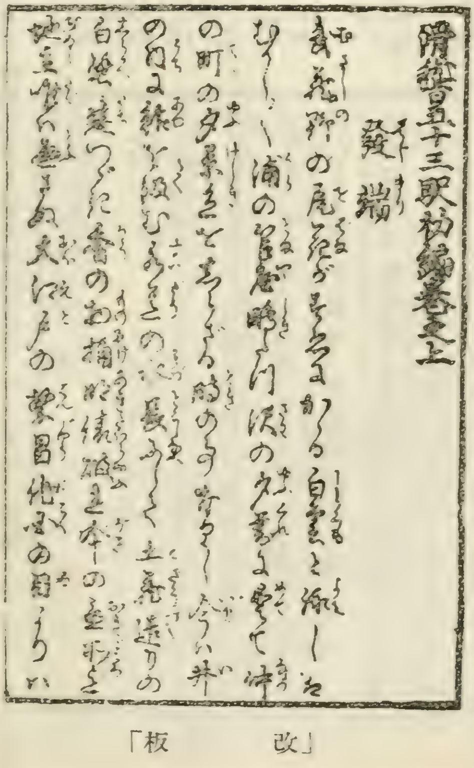
八編に於ける板元の豫告には、「原板ことの外摺つぶし候故再板仕候」ともある。膝栗毛の流行、特に東海道中は、この言葉の通りに幾度か摺り立て、摺り直しただけに、今も少なからず摺りの違つたものを見うける。その中でも文久二年の改板は注意すべきである。この書外題は「東海道中膝栗毛」とあれど、本文のはじめには「滑稽五十三驛（つぎ）」と見える。初編三冊、二編三冊、三編三冊、四編二冊、五編二冊、六編二冊、七編二冊、八編二冊、九編二冊、十編二冊、すべて二十四冊。もとより「發端」は初編の上册となつてゐる。本文に異る筋はないが、序の大部分、附言や凡例の類は省略されてゐる。また挿繪も描き改められて拙さを見せてゐる。こゝに舊板と改板の二三の例を掲げておく。


道中膝栗毛發端

東都 十返舎一九編

「舊板」

「續膝栗毛」六編二册、文化十二年の出板。大久手から妻籠まで。
七編二册、十三年の出板。美登野宿から贄川まで。
八編二册、十三年の出板。本山から大町まで。「従木曾路至善光寺」との外題角書。
九編二册、文政二年の出板。「善光寺道中」の角書、大町から善光寺詣。一九は洗馬から村井松本にいたり岡田かりやはらに出る本街道でなく、松本より成相新田、保高池田にかゝる絲魚川街道を舞臺とした。凡例にいふ。「近年此道旅人通行多く栗尾觀音松尾藥師宮城不動などいへる靈地ありて、殊にめづらしければ、予も一とせ此街道を經ておもしろく覺えたるまゝ卷中の彌次も此道に赴かしむ。」



「板　　改」

十編二册、三年の出板。「上州草津温泉道中」善光寺から草津入湯まで。
十一編二册、四年の出板。草津の出發から新町まで。本來はこの編で完成すべき筈であつたのが、今年は取ておきの趣向、武家方ならば具足餅といふ所を思ひきつてさらけ出し」と序にある通りの作者棹尾の努力

で、また來年を待たねばならなかつた。されば板元の言葉として斯うもしるしてあつた。

膝栗毛當年滿尾の積、先達て御披露申上候處、作者趣向相蒟み、諸數殊の外相増彫刻隙取候故、先例年之通二卷十一編となし差出申候。來年年十二編にて全く滿尾仕候に付、兼て申上候通兩人御土産の廉資本の內え差入封切御覽之御方樣え差上仕候。何卒從今御評判宜敷奉願上候

香　代　　　販　元　英　盛　堂　述

十二編三冊、文政五年の出板。本庄より王子廻りして江戸歸府まで。「戲作の書のかばかり編數をかさね、出せるは例なく、予が生前の悦び、偶中の幸なれば、めでたく筆をおさめぬ」と誌す一九のうれしさ。板元も祝儀の手をしめて、前觸通りに圖貞の美人畫を人々に贈つたのである。

四

一九が自負して戲作に例なしといふ「膝栗毛」の流行は少し離れてやゝ冷に觀る馬琴には大なる驚異であつた。されば例の「江戸作者部類」に「げに二十餘年相似たる趣向の册子の、かくまでに流行せしは前代未聞の事なり。只一奇といはまくのみ」と說いてゐる。馬琴はまた「一九は編每に潤筆十餘金を得て、且趣向の爲に、折々遊歷すとて板元より路費を出させしも尠からずと聞えたり」とも說いてゐる。その利得のためであつたか、隨分と豫告を裏切る一九であるが、「續々膝栗毛」出板の約を果さうとした。

勿論、一九は前の筋をうけて書く筈の「彌次郎兵衛北八此上かの材木伐出しの一件、山家にして諺にいふ

鳥なき里の蝙蝠としやれ散らす滑稽の趣向」をば、勝手にあらぬものにかへて了つた。それぱかりか、「膝栗毛」は東都へ歸着したまでで全部終つてゐるのを、書肆涌泉堂が頻りに、其續々編を需むるに拒み難くて、この筆を執ると空々しくいふのであつた。

それも無理はない。續編の筆を斷つた文政五年から、今年天保二年までにかれこれ一昔は經つてゐる。その間に中本界の形勢にも少なからず變動があつた。「膝栗毛」まがひの作はひき續いて世に出るものゝ、いづれは樣によつて葫蘆を畫くの類ひ。世間の興味の中心は「八笑人」などにある。聰明な一九は旅中の滑稽珍しからずとの名の下に、また旅行に思ひ立つ事もあるべしの言葉に托して從來の趣向を棄てゝ、彌次と北八二人の神田八町堀の裏店(うらだな)住ひの滑稽をうつし出したのである。

初編二册、少し間をおいて出した二編二册の趣向は「東海道中膝栗毛發端」と似通ふふしが多い。更にまた一九在來の作意を重複する點も隨分と多い。彌次と北八は江戸へ歸つても相變らぬ貧しさ、もとの八町堀



舊板さし

の一つ長屋の左次兵衞のところに落ちつく。左次はすでに「誹語堀之內」に用ゐられてゐた。「膝栗毛」の趣向を追ふその作では、彌次郎兵衞を一つ長屋の左次兵衞としたのである。今度また用ゐたのは、「一つ長屋の佐次兵衞殿、四國をめぐりて猿となるんの、二人の連衆は歸れどもお猿の身なれば置いて來たんの」とある謠の二人の連衆を、彌次と北八とにこぢつけるためであつた。二人は例の愛嬌者である、蚊帳のない夜を一人は五月幟の鯉の中て過し、一人は鬼の面を冠つて凌ぐといふ體たらく。又例の粗忽から古足袋を茶袋と思ひ違つて煮出す失敗から喧嘩となる。類を以て集る長屋仲間にはおはちとおかわを違つて喧嘩する夫婦もある。かつては三馬は一九の「膝栗毛」の趣向に倣つて「浮世風呂」を作つた。今は一九が「浮世床」の後を追ふのである。たゞ彼の寫生を此ではどこまでも滑稽でゆくところに大い相違が認められる。

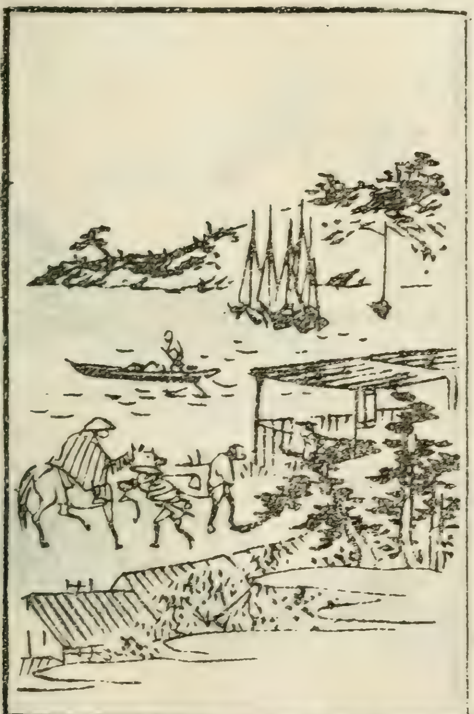


繪例一

彌次はまた佐次兵衞を尋ねて來た瞽女をせしめんとする。醜陋厭ふべき行爲から幾度か憂目に會ひながら

彼等はまだ懲りなかつた。しかも例の失敗に終る。讀者はまた同案を煩はしいとする。

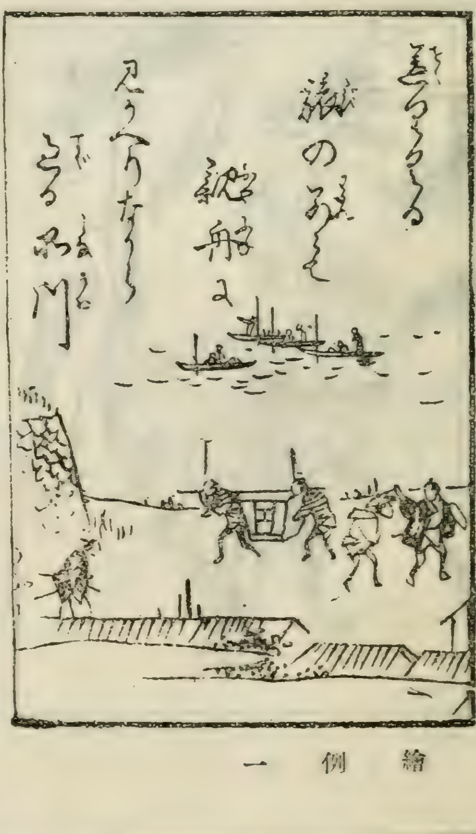
彌次は後家のもとに入聟となる。丁度臨月の後家は祝言の夜に産をする。それが死産にをはらぬところが「東海道中膝栗毛發端」との相違であつた。生れた子供をわが子として育てゝゐる彌次の家に一事變が起る。彌次を茶番の相手に賴みに來た侍横内杢右衛門によつて、後家の素性が割れる。駿河の淺畑の比丘尼であつたのである。杢右はもと婚約があるので、連れ戻さうとする。殊に女の父親は杢右の厄介になつてゐるだけに事が面倒になつた。こゝにも「發端」に於ける趣向が露はである。しかし杢右もまた法印であつた。二人の坊主がどうして髮を生したかと、知合ひに素断抜れる(すつぱぬ)をかしさは「發端」にはなかつた。さういふものゝ、これは互に慾づくで大盡と大家の後家の觸れ込みで見合をする。逢つて見ると、買ひ馴染の折助と辻君であつたといふ「世中貧福論」の中なる「邪の胸に緞蓋した破鍋後家の色喘」の二番煎じであつた。辻君と折助を比丘尼と法印にかへたのは、大詰に彌次と杢右を坊主頭にする趣向から出づ



改板さし

る。二人は女の父親を坊主にする、父親は巧にいひ拵へて、二人の髪を剃らせて化をうつ。狐をだまして結句だまされに終る落語の趣向がはめ込まれたのである。これも一九としては古い趣向である。「滑稽二日醉」の中に一度使つたものであつた。父親は泣く眞似するとて、茶椀の水で顏を濡らす、それを見てとつた北八は墨を入れた茶椀とおきかへて父親の顏を眞黑にする。いふまでもない狂言「墨塗」の趣向に據るものである。一九は同じものを「東海道」に用ゐ、また「木曾街道」にも用ゐた。三番煎じであつた。

一九は、この後を承けて「二編追加」一冊を出す豫定であつた。彌次が頼母子講をとつたので松山箭弓稲荷へ參詣の趣向、作者久々の道中の滑稽、おとがひの弛れぬ御用心と板元が觸込んだその三月頃は健康もぐつとすぐれず、その八月、即ち天保二年八月七日には腹稿をそのまゝにあの世に旅立つたのである。



繪例一

「續々膝栗毛」には三編二册がある。外題は從來のと少しく變つて「滑稽道中膝栗毛續々三編」とある。天保六年の出板、二世一九の作に係る。「續々」の初編二編には、彊弩の末をおもはせるものがあつた、しかし、流石に三編と日を同じうしていふべきでなかつた。

「三編」は必ずしも前の二編を承けてゐない。「彌次郎兵衞北八小梅の別莊に滑稽をつくす」と題する上卷には、彌次が母方の叔父の情で、北八もろ共小梅の寮に狂歌俳諧の宗匠茶番の相談相手といふ洒落をはじめたこと、同じ畠の能樂連中の狂言の强盜に脅されることなどが書かれてある。すべて「八笑人」などの世界である。「素人狂言をうけあふて房州におもむく」と題する下卷は更に甚しい。彌次の連中には房州へ役者として出掛けて大に款待せられる、と思つたのは狐に化されたのである。その趣向はどうやら三馬の「初物語」を思はせるであらう。或はそれを種として混かしたのである。さて彌次は叔父の名代として鹿嶋詣をする。もとより北八も一緒である。四編以下、道中のをかしさ、鹿嶋香取潮來を舞臺とすると



舊板さし

豫告したけれど豫告は實現されなかつた。作者が亡命したためである。

二世一九絲井鳳助は、禁を犯して仙石家騷動一件を綴つて、江戸を退轉せねばならぬ羽目に陷つた。その後ふつと消息を斷つて、何處に歿したかゞ明でない。その人の傳は天保四年板である人情本「仇競今樣櫛」の跋文を引くのがいろ〳〵の意味に於て都合がよいやうである。

「今の十返舍先生は、東武台籬に住す。上毛州黒河の里の產、姓は絲井名は武、始め夷曲歌を能して、故蜀山翁より送らるゝ雅名を、瀧絲丈と呼れしが、後春興とあらためられて號を梅園といふ。蹄齋先醒に隨ひては、畵筆に一風の好をあらはす。一號紀山人、また花輪堂、赤城子の諸號あり。一回は教訓亭の舍盟に遊びて、數十部の著述に妙案を盡し、其後前の十返舍重田一九老人、十字亭の別號をおくられ、今の先生其時の年才によりて、三九とは號られし也。(今の先生二十七歳の時前の老人考へられて三九子とは名づけられたり)然して半九子一寶子、一河子、一得子、一八子等の社友と交りて風流を盡されしが、前の老人遺狀して



繪例二

その雅名をば、三九主人に讓られたり。爰にその遺書を摸し載、四方の看官に是を告て、披露を跋に換るのみ。（遺書のうつし、解説二〇頁參照）

二代目の大先生と今からは絲井の水のたゝへまうさん

東武飯臺逸民

狂月舍のあるじ

四方正木誌

二世一九が前代の遺書までを持ち出さねばならぬほど、その改名は一部に於てやかましい問題であつた。「江戸作者部類」に「一九が戯作の弟子、半九三九と二人あり、その實名は聞知らず、師の歿後名號を受嗣んとて爭ひしが、半九は別に生業あれば、戯作はせでもあるべしとて、一九の後家此の黄白に易へて、一九が名號を三九に名のらすと聞きにき。



改板さし

此事傳聞なれば詳なる事を知らず、倘たつぬべし」と見えるも、その間の消息を語るものであつた。

「今様櫛」は三編から成つてゐるが、初編には紀山人と署名し、二編には十返舎一九、たゞし序には紀山人改二代目十返舎一九と署してゐる。三編はもとより十返舎一九、その編末にあの跋がついてゐるのであつた。



繪例

五

紀山人改め二世一九が退散の後にも、なほ江戸には二世一九と名乗る者がゐた。初代一九の門弟九返舎一八が一九の寡婦に請うて襲號したのである。この者はもと三馬の門に入つて三亭春馬とも號した。「戲作者小傳」の三亭春馬の條にいふ。

「三亭春馬　淺草山谷町に住居す、はじめ新吉原京町一丁目の妓樓にて大文字屋市兵衛といふ。養子にて

後離縁す、今業を替へて質屋となる。狂名加保茶浦成といひ、後元成といふ、淺草庵春村が弟子なり。また故十返舍一九の門人にて、九返舍一八と云ひける由、後は八文字屋となり、又二代目十返舍一九となる。」

春馬が市兵衛を通稱とするのは、養家先の名を襲つたためである。姓は磯部、源兵衛が通稱であつた。春馬が一九を名乘る時に、三九の二世一九を片寄せて、自らも二世を稱した。それがために二人の二世一九は往々に混淆せられる。「奥羽一覽道中膝栗毛」も三九の二世一九の作と信ぜられてゐた。幸に初編の草稿が故朝倉無聲氏の手に歸したことから、誤謬が正されたのである。草稿の表紙には源兵衛事十返舍一九作とあつた。それと弘化二年板「勸善飯」の奥附に源兵衛事春馬改十返舍一九作とあるのを參照して、あの作の眞の作者を確めることが出來たのである。



「今樣櫛」所載一九遺書

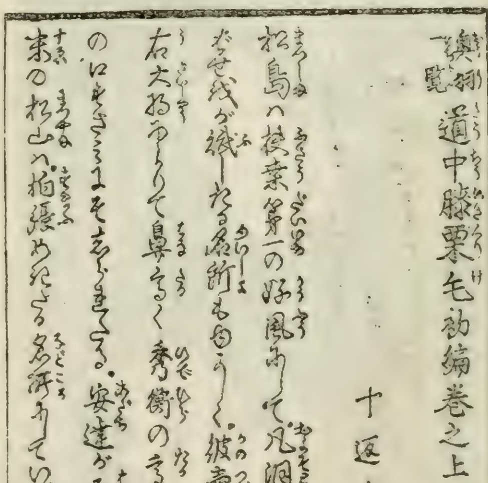
一九と膝栗毛とは切つても切れぬ仲であつた。弘化元年に改名した二世一九は直に「膝栗毛」の續續續編に筆を執り出した。奥羽一覽の序にいふ、

「世に戯作の册子いと多しといへども、雅に過ぎ、俗に滿ちて、觀棚切落共にヤンヤといふ少なし。それ

が中に旦那もめで、お三も興ずるは膝栗毛なり。既に年々編を重て、四十有餘年の今に至り、猶存在して世に興る。さるから板元忽に欲心を發し、おのれが改名を時に椿談の幸に旅中の滑稽を著せよと、壁に馬を乘りかけ云々。」作者はそれを斷る、けれど板元は免さないといふのである。

これは作者の舞文曲筆ではない、利に敏き板元として當然のはからひであらう。二世一九は斯うして筆を急いで弘化二年に初編が出來、五年即ち嘉永元年に賣出し、その後三年に五編を出すまで續刊した。

さても油斷のならぬ世の中である。他人の賣行きよい本の續編を書き綴る常習犯の爲永春水は、とうに先手を打つてゐた。彼は初代一九が棄てた「續編」十二編の案を拾ひ上げてゐた。こゝでは彌次と北八とは木曾路の浦和で便りを聞いた材木屋の手代となり、信濃の山の材木出しから浮世の基を開いて何不足ない商人となつた。よい程に切り上げて、おの〳〵が養子に家督を讓つて隱居となる。さて遠國は歩いたが、近在の


輿物一覧 道中膝栗毛初編巻之上

十返舎一九著

名所古跡をまだ見ないから、何でも此度は十里か二十里の所を東西南北と順路に廻るのである。これが「近郷道中滕栗毛」たる所以であつた。

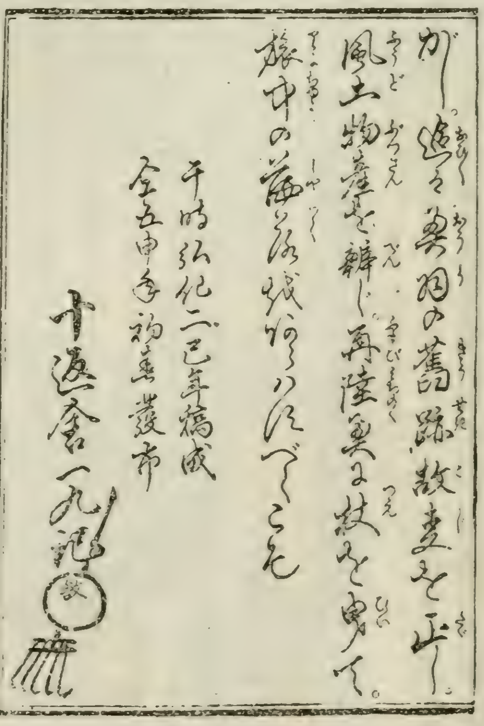
春水は「また恥をさらしに出て見様かノウ」といふ彌次の言葉をうけて北八に「さればサ、隱居の身分だから遠慮はないが流行におくれた此方等が十四年も以前の氣で出かけては覺束ないやうだ」といはせる。十四年は「續編」の十二編文政五年から起算するためてある。彌次の言葉「それは違ひのない事だ、殊に國々の高名家で十返舍一九を贔屓にして居たから、其緣で此彌次兵衞も北八も長旅が出來たが今の不案内な春水の手紙を貰つて田舍へ行つては何樣だらうか」北八「ナニナニ、それは世に從ふ人氣だから此方も其氣で出かけるはナ、其上にお前も此身も以前よりは狂歌も地口も上達したから昔より氣が丈夫だアナ」



「近郷道中滕栗毛」表紙

賣名の春水は彌次北八を横奪したばかりか、自分の鼻をも氣にしてゐる。成程二世一九と春水は親しい友達であつたから、二人の間には作の話も出たらうが、一九と名乘る手前、春水の尻馬に乘るのでないと聲明する要はあると、五年出板の「奥羽一覽」にも「二巳年稿成」と書いたのでないかと思はれる。二編また「弘化甲春稿成」としるしてあつた。

「日本名著全集」の第十九編をなす「膝栗毛其他」は初代一九の作に限る筈であつた。偶三九の二世一九の作に及んだのは「續々編」の名に繋がる緣に過ぎなかつた。故に「奥羽一覽」は收載の外にある。それも別に憾むの要がない。とても初代のと比較せられようもない拙さゆゑであつた。



「奥羽一覽」の序文

「奥羽一覽」では彌次郎兵衛北八が狂歌の先生鼻毛の延高と笠羅房を作つて奥羽の名所めぐりをすることになつてゐる。延高と笠羅房は初代一九の「方言修行金草鞋」中の人物、しかも奥州生れの者であつた。しかし、四人は小山宿にまで行かなかつた、この作は五編十五册で終つて、完成するに至らなかつたのである。

「奥羽一覽」が初代一九の後塵を拜する以外に、何もない事はいふまでもないが、作者は少しく標榜するところがあつた。凡例にいふ、「此編先師の文意にならふといへども、滑稽洒落においては餘りに品くだりたるは用ゐず。」またいふ「趣向は一時の戯作といへども舊跡故事風土物産の類はいさゝかも虚談をまじへず。」彼はまた引書標目として更科日記、廻國雜記、宗長紀行をはじめ四十六種を擧げ、なほ「是余古事記日本紀等の國史萬葉集歌書その外和漢の字書を採用すといへども、其書をこゝに略す云々。」

これはこの作者の好みだけでなかつた、弘化嘉永の頃は鼻もちのならぬ衒學をたわいのない滑稽と一つにして得意がるのが戯作者の常であつた。「近郷道中膝栗毛」もまた同じ傾向を有つ。「近國近在の名所古跡見物に出かけ神社佛閣の由來を尋ねありくのは風流で俗物らしくなくてよい」とその彌次等もいつてゐる。

初代の一九すでに歿して、「膝栗毛」の正しい滑稽は終つたのである。けれど「膝栗毛」の名は幾多摸倣の作と共にたえることがない。文久元年には「東海道中栗毛彌次馬」とて合巻仕立にしたものも出板せられた。その類はなほ二三にして足らない。

明治になつても、「膝栗毛」の名を負ふもの、似よつた名を呼ぶものが、少なからず出た。中に初代一九の滑稽道を得たものに假名垣魯文の「西洋膝栗毛」があつた。初編の出板は明治三年であつた。

彌次北八に男子がある。その二世共も旅好きで、房總常野近郷近在を普く經めぐつて奥羽の途中で死歿。そのまた悴等、これぞ三世の彌次北八が御時世につれてはるばると西洋まで出かけて親讓りの滑稽を盡すといふ趣向であつた。魯文が三世の彌次北八を立てたのは、「續々三編」―「奥羽一覽」の存在を考へてのことであつたらう。

凡例に「元祖十返舎一九が作なる道中膝栗毛の初編刊行なりて世に流布せしは享和二壬戌歳の春にして當年を去ること既に六十九年に及べり。滑稽の妙逆旅の奇至れり、盡せりと雖、所謂流行後れの類ひに落ち、目今の形勢に比すれば、人情齟齬することのみ多か



り。是に次て二世三世の一九等が膝栗毛あれども、時は文政と隔たり、弘化嘉永と遠退たれば、今はむかしとなりにたり云々」とある。その二世三世の一九といふのは、けだし三九、春亭の二人をさしていふのであらう。

五

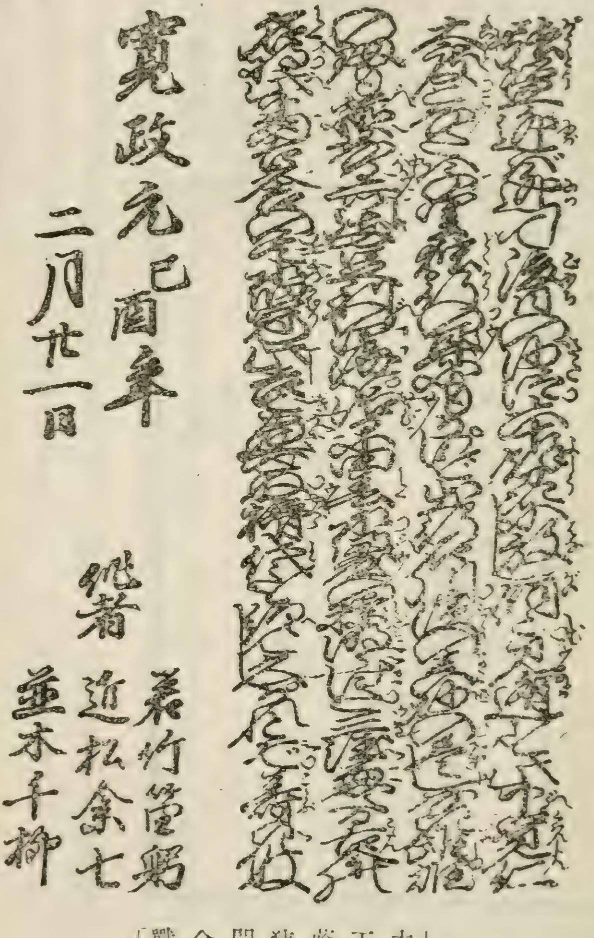
「膝栗毛」即一九と思はれるその著も、實は一九の作でないとやうな噂話は、往々にして聞されることであつた。西澤一鳳の「傳奇作書」に誌されたのもその一つである。

「扨も一九は貧くて仕方なきまゝ京傳方へ行きて食客となる。京傳小册の草稿を出して一九にあたへ、それを清書して書林に持ち行き、小遣ともなすべしと云ふ。一九是を淨書して早速書林に持ち行きて僅の料を取つて歸れり。此書東海道羇旅の滑稽を書いて、神戸八丁堀栃面屋彌次郎兵衞北八が洒落膝栗毛初編一册是也。其頃洒落本の小册は風來山人が六部の書の後、櫻川慈悲成が落し噺より京傳三馬等の作のみにて、旅の滑稽はなく、傾城買二筋道、仕懸文庫の類にして、吉原深川の媱情を書き、或は浮世床、浮世風呂のうがちのみなれば、膝栗毛の評よくて賣る事甚多し。書林は利を得て、一九に誂へ、二編三編と作させる故、作料自ら高く、伊勢參宮にて歸路に及ぶを、猶大坂迄出さんとて旅用を出して一九を登せ、歸府して八編の大坂に止る。歸路の木曾路はまだはやしと、金毘羅より宮嶋を誂へる。一九浪華より西を知らねば長崎紀行といへる老實の書をもて海陸の里數、挿畫は大約是より出し、滑稽洒落を書まじへ、續膝栗毛と稱へて、岐蘇道中を數編に出せり。初編より二編三編迄は趣向を惜しまぬが故、をかしみ多し。後々はよく滑稽の筋ありとも、次々にと引延すが故、先觸ばかり御出にて讀めども顧をはづす迄なく、いとも本意なき事ながら、滑稽

を書きし本に、是程編數を重ねしはいと珍し。僅三册の小本を書いて後、作料は數十金を取れりといふ、又書林より出すも妙なり。はじめ京傳の書すてを貰ひてより一九の作名は膝栗毛より弘まる。」

この記事の中には、幾つかの誤謬も指摘せられる、從つて膝栗毛初編の京傳作といふ說も遽に信ぜられない。しかし、筆者が信じて疑はなかつたことは、同じくだりの他の一條の書振と參照して考へられる。

「爰に又十返舍一九は若かりし時より身持放蕩にて、晝夜

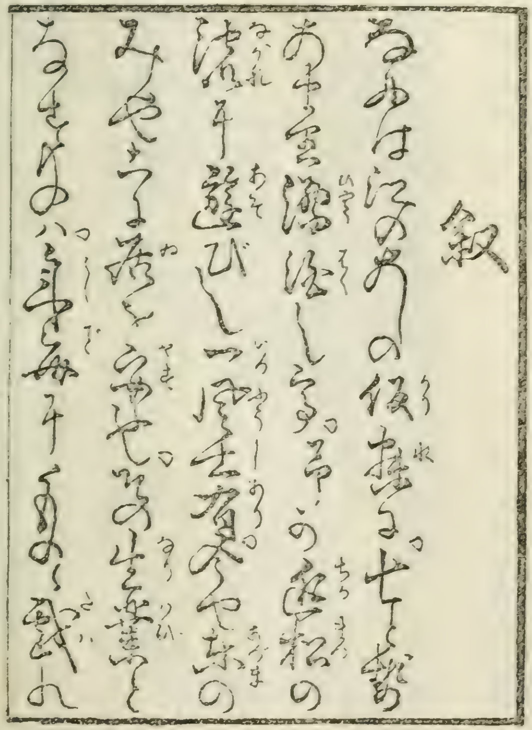


「木下蔭狹間合戰」

吉原に通ひて遊廓の癡情を愛る故に、女郎も浮氣となり、一九に馴染めば、餘の客落ちる。彼是の譯ありて、

大門口にて一九をとゞめ、以後廓中へ這入るまじとの證文を取り、今猶大門口の會所にありといふ。虚實わかち難けれど、夜話に聞しまゝ爰にしるす。」

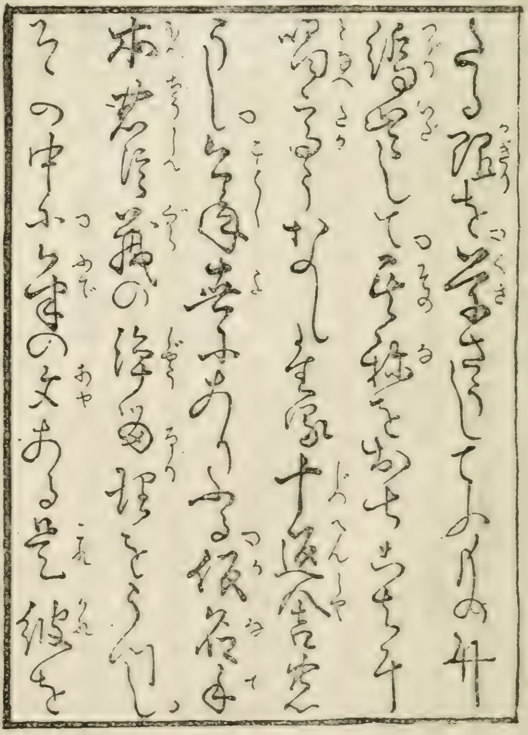
一九の作名は京傳の後楯があつてはじめて弘まると信ぜられる程、彼の出世は唐突であつた。殊に若き折の彼を知れる大坂の人々には一段の驚きであつたらう。「東海道」の七編の跋に「大阪に至りては作者殊に七とせ餘りも居住せし土地なる故」とあるやうに、そこには古い馴染の人もあつたらう。その人々は淨瑠璃作者としての彼を知つてゐる。寛政元年二月、道頓堀大西芝居にかけた「小田の結納 [illegible]蘇の色直」、「下陳狹間合戰」の作者の一人であり、近松余七の余七は一九の通稱與七から來てゐることを覺えてゐる。さまでの腕を見せずに終つた二十五歳の若者を、今高名の十返舍一九とは思ひ出せなかつたらう。「膝栗毛」初編刊行後一年の出板の作「忠臣藏岡目評判」に「難波江の



「忠臣藏岡」

あしの假寢に、七とせあまり漂泊して、予が近松の流に遊びし一風士あり。今や東の都に居を安うし、その生業となすものは、年毎にものゝ戲れたる眼を、草雙紙てふものに綴り出して、其稱をおちこちに唱高うなしたる十返舍のうし云々」とある近松東南の序文を讀んでも一應は疑ひもし、或は他の名家の補筆を信じたのであらう。

一九が大阪に居住したはじめは大阪町奉行小田切土佐守に隨身したため、致仕した後はその土地の材木屋の娘の婿になつたとのことである。それが離緣となつてから江戸に來たといふ。かつて一九は事情あつて、おのが素性を語つたことがある。



目評判」序文

「一九子姓は重田、字は貞一、駿陽の産なり。幼名を市九と云ふ。故に市を一に作り雅名とす若冠の頃より或侯館に仕へて東都にあり。其後攝州大阪に移住して志野流の香道に稱あり。十返舍之號黃熟香の十返しを全ひてこゝにいつる　今子細あつて、

みづから其道を禁ず。寛政六卯年復び東都に來りてはじめて稗史兩三部を著す耕書堂版それより年々に倍し、就中書法に精きを以て諸交通の案本數板あり云々」

これは「續膝栗毛」五編の末に、「板元西村永壽堂の名を以て發表したものであつた。その事情といふのは、墨川亭雪麿の著「稗史通」の記事に就いて深く憤つたためであつた。

文化十年のことである。雪麿は戯作者、浮世畫師の小傳ならびに印譜自筆の摸寫などを書き集めて「稗史通」二卷を著はした。師の墨亭月麿はそれを見て、誤りは多いけれど大體に於て善く出來てゐると評して、長亭五葉に見せた。五葉もよい出來と褒める。それから誰彼の手に轉々してはては一九の目にも觸れた。一九はおのが小傳の中の「或人曰一九子漂泊の內寺の門番にもなりたることあり」の一節に憤を發した。折から一九と雪麿と邂逅する場合があつた。一九は卒爾ながらさきつ頃貴君が書き終へるものを見たるに、われ等の小傳に寺の門番にもなりたるがあるとあつたが、あれは誰から聞いたのかといふ。雪麿は話した人は慥に知つてはゐたが、事面倒と見て、たゞ世の風說を聞いたまでと答へる。それは迷惑な、戯作を業とする者がさういふ事をいひ弘められては大に邪魔になる。おん身をも惡し樣に書いて作祿にも拘はるやうにするから、心得ておきなされといふ。あれは自分の心おぼえ、一時の樂しみといふだけである。それが偶漏れた譯であるが、もう人目に觸れないやうにするほどにと丁寧に詫びたけれど、醉を帶びた一九は幾度か同じ事をくりかへしながら罵倒を續けた。その日はとかうの間に別れたが、三五日の後、人々から斡旋せられて和睦の盃を擧げることとなつた。もとから交際のあつた二人は、これから一層の親しみを加へた。これは雪麿の言葉であつた。けれど雪麿としては、一九の憤は、事實を露はにしたためか、虛僞を傳へたためかはつひに解

き難き謎であつた。

翌十一年の「膝栗毛」は「續編」の五編と、「東海道」の發端であつた。續編には板元永壽堂の名に於て小傳を掲げた。さきに引用したのがそれである。その末文に

「或人稗史通と表題して新古稗史の作者畫工の出所事蹟等を摸寫せしを閲したるに、一九生の事に至りて甚謬誤あり、依てこれを誌し畢」

とある。「發端」にはなほ露はに、「稗史通」の著者として雪麿の名を擧げ、「稗史不通」を「實に勞して功なき稗史不通の書といふべし」と貶してゐる。

「金草鞋」にはなほ甚しいものがあつた。「予多年著述をなすといへども、虚を以て虚を傳ふを予が本意とす。雪麿の如きは虚を以て實に傳ふるの罪輕からざるべし。疚しい哉、素人井蛙の異説をまうけて眼下の事蹟をあやまる事、一犬虚を吼ゆれば、萬犬實を吼るの類なるべし云々。」たゞし、「稗史通」の誤謬の例として、擧げたのは「膝栗毛」が八編で終つてゐないといふだけであつた。つひに一語の門番云々に及ぶものがなかつた。

一度仲直した後に、なほ斯う惡しざまに書きなす一九の腹をば、雪麿は斯うも解した。一九が「稗史通」を見て憤念盛な折に、草稿が出來たためであらうと。けれど、草稿が出來た後でも削り去る餘裕は十分にある。一九は何故さうしなかつたか。雪麿は後日に於て何故削らせなかつたか。雪麿の言草こそはをかしかつた。「予はなか／＼是によりて粗人に名を知られたれば、右兩編（註、五編と發端）に記したる事を削去すべき念もなくてやみつ。」して見れば削らぬ一九にも同じやうな何等かの思はくはあつたらう。こゝに、ふとし

も思ひ浮ぶのは瀧澤馬琴が鈴木牧之に與へた手紙の文言である。

「十返舎貴宅に止宿の折の雜話、不佞略等あらましの趣汗顏仕候。一體一九とは深くも交り不申候へども、氣質は惡からぬ仁と見うけ申候。如仰一九は浮世第一の仁にて衆人に嬉しがられ候故、遊歷の先々にても餞別の所得格別なるべし。そこらの手段は中々不佞などの不及事に御座候。彼仁は寔に戲作一道の仁に候。書も少々は出來候故、おのづと愛相になり申候。但し文人のかたには遠し、學者のかたにはいよ／＼遠し。天晴の戲作者に御座候。十返舎は能を妬むことなく、おのれを飾り不申事は、尤賞すべきに覺申候。」

一九が牧之のもとに止宿したのは、文政の元年である。牧之に案内せられてわけ入る清水入山中の奇怪事が膝栗毛の一趣向となつたことは九編の凡例に見えてゐた。牧之は一九を浮世第一の仁と觀た。馬琴もそれに同じた。その浮世第一がおのれを飾らず、他の能を妬まないことにさせた。またその浮世第一が「稗史通」に憤慨し、更にあゝいふ處置をとらせたと解釋してもよいやうに思はれる。

一九みづからが草した小傳を介すべく執つた筆は、自然と「稗史通」事件にまで延びてしまつた。「戲作六家撰」によつて世に知られてゐるそれを、事々しく書きなしたのは、傳へられてゐる一九の逸話が眉唾物であることを注意しようためである。事は「膝栗毛」の性質に歸着する。

一九が歿した、遺骸を荼毘に附する、數道の星光が棺中から迸つた。遺言して會葬者を驚すために烟花を仕掛けたのであつた。斯ういふ話は今は誰も信をおかない。林屋正藏と一九とを混同したのであると知れわたつてゐるから。また傳へてあるやうは、何一つない室内の、白紙で張り詰めた壁には簞笥、床間、違ひ棚

の類を書き、後方には倉の入口までも書いてあつたとのこと。年始廻りをしようにも着物がなくて困つてゐるところへ讀者が來た、早速入湯を勸めて客が脱いだのを斷りなしに着濟して用を濟したとのこと。その他である。これは誰の話と一つになつたかと考へるまでもない。彌次郎兵衞北八の時行が混同したものらしく思はれる。世間が作中の人物から作者を推していつとなく出來上つた逸話であつたらう。世間をしてさう考へさせて、また考へても訂正しないところに一九の浮世第一がありはしなかつたか。「江戸作者部類」に「一九が行狀、彌次郎兵衞北八等に似たることあり、戯謔も思ひより出るもの歟」とあるが、酒好きの彼が醉ひ切つた時は知らず、戯謔の行狀はわざと意あつてのことでなかつたらうか。

少くとも作者は心あつて讀者をして作中の人物と作者を一つに考へさせようとする。作中の出來事を一九の實際とおもはせようとする。傳へられてゐるやうに、一九と旅をしたならばさぞ面白からうと、強ひて求めて道づれになつて、案外無口な、眞面目な、旅日記ばかり書いてゐるのに失望する手合があつたといふのは、彼の暗示の効果を實證してゐる。

「かくやいかにの記」によれば「膝栗毛發端」は元祿板の「萬人かづら」の巻四「婿住みの職敵、打おほせた嫁入の夜の礫」の趣向を踏襲したのであるとのこと。「發端」の中の佛を逆さに棺に入れた話は、一九以前また以後の噺本、わけて一九の作のものにも往々寓目されるものであるが、「萬人かづら」の中にその筋があつたか、或はとんだ嫁の番狂はせのくだりか、それとも駿河に關した事件であるか、それ等をとり合はせた全部であるか、まだつひに「萬人かづら」を手にだに觸れない今は、迂濶なことのいひよう筈はない。しかし、す

つかり江戸者で通してゐた彌次郎兵衞北八、京大阪で江戸子の氣焔をあげ詰めの二人を急に駿河者にしてしまつただけは、「萬人かづら」を片寄せても考へられない筋合でもなかつた。

東海道の正編でもさうであつたが、わけて木曾街道の續編となると、努めて作者みづからが紙上にまで顏を出さうとする。その續編の五編と出板の年を同じうする「發端」である。同じ傾向を有するに不思議はなかつた。彌次と北八とは一身同體であると誰も考へる今である。彌次北八を、一九の分身とまで思ひ込む今である。「彌次北八の畸行のくさ／＼は、多少の誇張こそあれ、一九その人の行動ときめてかゝる今とまで確信を有する一九は、讀者から彌次北八の出所を問はれたのを幸ひに、彌次を駿河の府中、北八を江尻の產としたのであらう。江尻はたかゞ尻喰觀音の地尻をきかしたまでの洒落であつたが、府中こそは作者自身の產地であつた。しかし、一九が駿河者と知らなかつたら、讀者には何の利目もない筈である。一九は折柄の五編に小傳を附して「駿陽の產なり」と斷つた。彼と此と讀み合はせさへすれば直に會得されると考へた。その考で筆を執つてゐる時は、「東海道」の後編にたゞ一言も彌次の故鄉といはないどころか、安部川町を初見物の、事毎に珍しがつたことも忘れて、彌次が「百二百の小判には何時でも困らぬほどの身代なりしが安部川町の色酒にはまり」その果に北八もろとも江戸に缺落したと書いてしまつたのであらう。忘れたか、矛盾に氣づかなかつたか、氣づいても、抗議を呈せられても、そこはのんきを表看板にしてゐる一九である。平氣でも一度「續編」の二編やうの言葉をくりかへすであらう。

「初編に彌次郎兵衞なる者、船中にて象頭山に祈誓し、禁酒したりし事を記せり。されど此卷にはさる體もなく、例の生酔となる事多し。如何せしや、必定再び祈りて、他の物と禁じ替へたるにや、作者も知らず、

覽者の批判あらん事、如何にとも詮方なし。」

府中から江戸へ來た彌次北八の身の上は「發端」に問ふべきであつた。大阪から移り住んだ江戸の一九に就ては、「江戸作者部類」が最も傳へて精きを得てゐる。

「寛政六年の秋の頃より通油町なる本問屋蔦屋重三郎の食客となりて、錦繪に因る奉書紙にドウサなどをひくを務にしてをり。」

「其性滑稽を好みて、聊うき世繪をも學得たれば、當年蔦重が誂て「心學時計草」と云ふ三册ものゝ草雙紙を綴らしめ、畫も一九が自畫にて寛政七年の新板とす。(此册子の趣向は石川五老が思ひを起して蔦重に說き示せしを、蔦重やがて一九に誂へて綴らしめたりといふ。「時計草」は吉原の晝夜十二時のことを綴りたり。文化中又六樹園五老が「吉原十二時」といふかな文を綴りて藏板にしたり云々。)是共初筆也。此册子頗世評よろし



地本問屋蔦屋
「繪本東都遊」所載

くありしかば、是より年々草雙紙の作あり。初は多く自畵にて板したれども、其畵拙ければにや、時好に稱はず、故に後には皆別人に畵せたり。」

一九の畵を拙しとする馬琴の言葉は、鈴木牧之に與へた手紙の「畵は少々は出來候」と照して見るべきである。北斎や豐國などと比べればこそ拙いけれど、まづは素人としては達者の方であつたらう。その素人藝が「膝栗毛」などには却つて恰好であつた。されば口繪には人手を借りたものゝ、他は大方一九の描くところ、自畵とも署してゐる。一九の草雙紙、精しくいへば黄表紙の數は極めて多い。量を以てすれば、決して他の作家に劣るものでない。たゞさまでの當りがなかつた。

「かくて寛政の季に至りて、長谷川町なる町人某乙が家に入夫となりて數年ありしに、又其所を離縁して更に妻を娶り、通油町鶴屋の裏なる地本問屋の會所を預りて、其所に住居ぬ。後の妻に女兒出生したるのみ。此女兒二八の頃より舞踏の師となりて、親の生活を資けしといふ。」

この娘である、さる大名から妾に抱へられようとしたのは。「同じ作者部類」の他の條下に「一九いなみて、かれあらでは吾が旦暮をいかゞせん、縱後に幸あるとも、さる事はねがはしからずとて、竟にまゐらせざりし也」と馬琴はいふ。

「文化のはじめ「繪本太閤記」に擬して「化物太閤記」といふ草雙紙を作りたる御咎めによりて罪あり、手鎖五十日にして赦されけり。」

こゝにいふ「化物太閤記」は正しくは「化物太平記」であつた。文化元年の出板。直に絶板を命ぜられた。罪は一枚繪草紙類に天正以來の武者等名前を顯して書くのは勿論、紋所合印名前などをまがはすことを禁じた

布令を犯したためであつた。

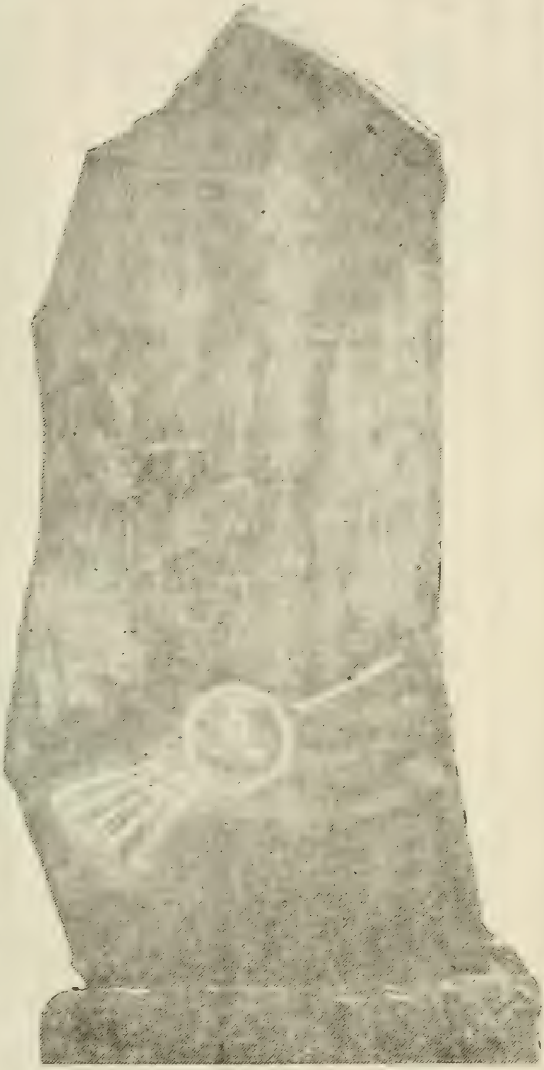
馬琴は一九の居宅に就いて言を添へる。「文政己丑の春三月の大火に會所も類燒したれば長谷川町邊なる新路の裏屋に借宅す。」己丑は十三年に當る。火は廿一日北風の烈しい巳の刻神田佐久間町より發して、翌朝に及び、南北一里餘東西二十餘町を焦土としたのである。一九の罹災が通油町であるとすれば、また深川佐賀町からかへつて來たのであつた。「續膝栗毛」十編の卷末に板元が名に於て舌代として「十返舍一九翁、是まで年來通油町に住居いたされ候處、此度勝手に付、深川佐賀町へ轉宅いたされ候云々」とある。一九の類燒はもう一度を數へられる。「東海道」の七編凡例中に見えてゐるのがそれである。

馬琴は一九の罹災の記事に續けて、「この頃より手足偏枯の症にて遂に起ず、天保二年辛卯の秋七月二十九日歿す、享年六十七歳なり」といふ。たゞし、一九の祥月命日は八月七日であつた筈。淺草善龍寺地中の東陽院の墓碑には「心月院一九日光居士、天保二辛卯八月上ノ七日」と刻されてゐた。辭世にいふ

　此世をばどりやおいとまにせん線とともにつひには灰左樣なら

翌三年、遺族門弟の手によつて、向嶋長命寺域內に記念の碑が建てられた。碑陰に男貞之の名がある。一九の子は「作者部類」にある後妻が生める一女のみではなかつた。或はそれに配したものかを詳にしない。また十返舍一九の名も見える。これは三九の改名した者である。

碑のおもてには、例の熊手形の判が中ほどに大く刻されてある。一九は明和二年の生れ、乙酉の歳に當る。その酉に因んで、酉の町の唐の芋と熊手を用ゐたのであつた。即ち丸形は唐の芋、中の貞は字の貞一から出



一九記念碑長命寺域内所建

てゐる。文字は斯う讀まれる。

なべての人のいかに異なりとおもふことも常となりてはめづらしからねど、いつとてもあかぬものは、月の夜と米の飯、さては筆と酒なるべし。

内損と腎虚とわれはねがふ也そが百年を生延しうへ　十返舎一九

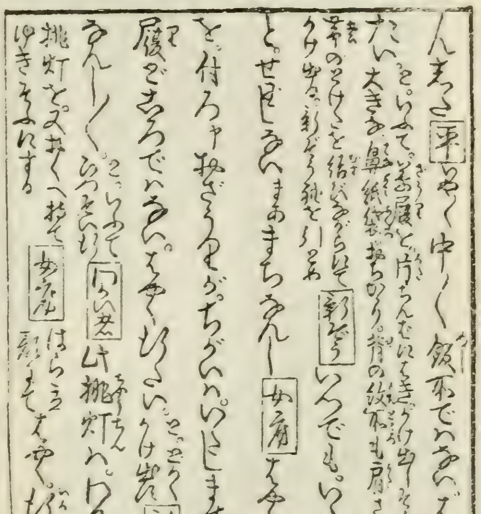
六

酒はともあれ、筆の世界に殘した一九の業績は少なからず存する。黄表紙、洒落本、讀本、さては噺本など、または「書法に精きを以て諸文通の案本數板あり」と自負する類ひ、その外くさ／＼はあるものゝ、何というても「膝栗毛」にとゞめを刺す。その「膝栗毛」のすべてを「日本名著全集」第十九卷に收載するに當つて、よしんば木板と活板の違ひはあるにしても、原本の趣を損はじと編輯部が校訂にいかに努力したかは承知しながら、なほ遺憾とする一點を擧げざるを得ない。この本の文字の小いのが累をなすことであつた。しかも、小きに多くを盛らうとするこの叢書の本來の性質からいうてやむなき事に屬する。それは讀まずとも原本を開けて見さへすればわかる。原本には小く二行に割つて書いてあるところが、彼此に散在する。さうしては讀みづらいの懸念から、やはり一行に組んで、その代り括弧の中に收めたのが、この「全集」の板式である。

原本の二行に割つて書いてある個所の多くは、前の言葉をトとうけて、人物の行爲やら、服裝やらの叙述である。歌舞伎の根本のト書に當る。して見ると言葉はそのまゝ白と考へてよい譯である。さういふ點からいへば、「膝栗毛」は一種の喜劇の脚本であつた。しかし、この形式は一九の創意に成るものでない。一九は

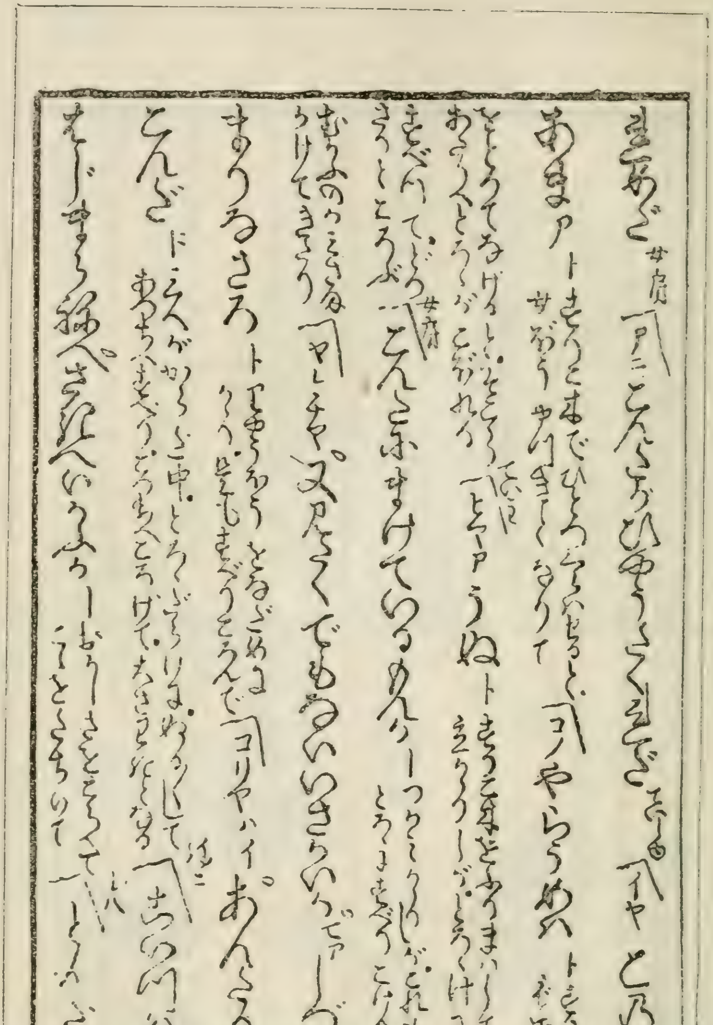
洒落本の傳統を承いたのに過ぎない。といふよりは、洒落本の世界の傾向をはやくも見てとつた機轉業といふ方がよい。洒落本は歌舞伎の根本から幾多の曲折を經てこの形式に達したのである。洒落本の典型を成したといふ「遊子方言」はもとよりこの板式であつた。

「遊子方言」が創めた洒落本典型の一つは、通の客と不通の客との對立から滑稽を導き出す事であつた。洒落本の洒落はいろ〳〵の義を有つ言葉であるが、少くとも滑稽の心を離れぬ限に於ては、この對立が守られてゐる。唯滑稽の新様を需めて、不通の客を種々の姿におきかへる。その最も普通なのは遠國者である。江戸の戯作者が江戸者に優越の地位を與へんとする贔屓よりも、文明批評がさうさせた。明和の「辰巳の園」が其仕組である。天明の「眞女意題」に至つては、國侍の國言葉に一々註釋をさへ附けてゐる。



「遊子方言」

通と不通の關係は、いつか江戸と田舍の關係に變つた。洒落を滑稽と解する洒落本の一方面では、江戸の廓と岡場所といふやうな狹い領域を脱して、片田舍にまでおし出すのが賢い手段であると考へられて來た。洒落本史上に喧い天明七年の「田舍芝居」、一九の「風流田舍双紙」の種本であるそれも、結局は上手にその潮



膝栗毛後編坤巻六十五枚裏

すつてんてんしらて アヽきつい むだ口。大へんがりくりくりくりく みなみなぎ
むれどもきうぶこぶく この おかみさんのむすめ こうかうきさう 内の母ィー
あつて出るるおん。おめんのきつりのきさん やうるをけきとつつあれば。
せんくるかくぞんあつら かりのわしやう ふきせんくようとがうくやーみ
うりのしやうのあがあかちがききんこうせしよ 何もさせるかのがほし。
やうくきんめうるの上下あつしさ。ぐしまいうとさせるがよいと。
アヽとう内の母がこうげちやのおめんめのとききてある上へ。きんめうるの
上下をきせ。それふて。お母ぐらをやうくまうつくさせけれど。やがて
あつまりきんやう 「そう ごんく 「あきやしくく
げんふかゝると
ト此内けしきの母がの中めて せものさう人 「ざんざく 「ざんざく
らうそらやるめらをふきさて
トうちよりこをむしやうふようきしてさわぎ。ワるが。この落のみくは
きうちのあるいろもありしが。あまりふりいもさまし/\くさわぎ
さる おとさは扇がり みんあつてあんとうのきうちきうり出し。
けれがきうちとも 何びきとうすく。このめの おとさ かどろきさうあて

続膝栗毛三編下巻十八枚裏

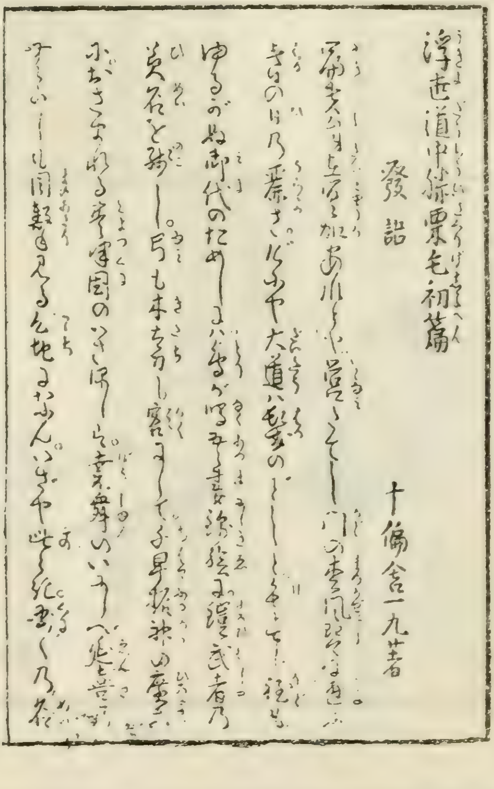
先に乘つたまでゞある。遊里と芝居の定式物の外に新しい世界を見つけ出した「田舍談義」は、たかゞその尻馬に乘つたに過ぎない。「東海道道中膝栗毛」出板の前年に當る享和元年には洒落本の本格からいへば變態である梅暮里谷峨の人情本がゝつたのが目立つばかり、勿論この變態も今の洒落本世界の沈滯を救ふ一策に相違ない。洒落本作者たる一九の大に考ふべき今である。こゝに一九は二重の陣立をした。一には洒落本のために筆を鼓し、一には新洒落本のために案をめぐらす。さうしての享和二年である。「商内神」「起承轉合」など十種の洒落本の出板、それと共に「膝栗毛」の初編の出板を見た。

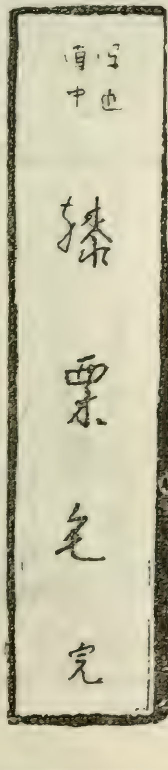
　今からは何年に屬するかは詳でないが、とにかくに享和直前の寛政年間の出板であることはたしかな「面美多勤身(おもひたつみ)」は、例の深川物ではあるが、深川の座敷に話されてゐるのは、伊勢詣の道中のくさ〴〵、所々の



「眞女意題」さし繪

遊里、殊には吉市の遊びであつた。話す二人は彌次と北八の面影さへある辰五郎と巳之介の人。狂歌かはりに發句さへ交へての話しぶりは、色眼鏡さへかければ、一名を「膝栗毛趣向種本」ともいひたくなる。その「面美多勤身」の作者は廓通交、廓集交の連名であるが、それを山旭亭眞婆行とあらため、書名までも變更したのが「東海道金和良路」である。機會はこゝまで迫つてゐるに拘はらず、なほ大事を踏む一九であつた。遊里に專らならぬために、わざと浮世を冠らせもした。こゝの浮世はいふまでもない世間といふだけのこと。凡例には正面を切つて「此書はすべて東海道往來之記、上貴人高官の通行





より、下拔參、物買の木賃宿、雲駕馬士の俗腸まで、其下情を穿て、悉く弘肴す」といひながら、なほこの世間といふことが果して世から迎へられるかどうかの懸念は本文の當初には「初編」とおきながら、題箋には「完」とのみしるしたのである。後編なほ「浮世」を冠せ、三編はじめて「東海道中」の角書をおいた。

洒落本から拔け出した浮世本ではあるが、「羈中旅客の滑稽」だけではものにはならう筈がない、つまりは「道旅傀儡の風色」を棄てゝはならぬ譯。されば一九は初編の凡例には「館伴女傀儡の風流泊々の遊戯、その可笑みを純にす」とも書いてゐる。さういふ趣向はすでに洒落本の中に見ることが出來る。ずつとの前の安永板、「變通輕井茶話」がそれである。その一名を「輕井茶話道中粹語錄」といふ、中仙道の輕井澤を舞臺にして、そこのおじやれの滑稽をうつしたものであつた。一九がこれを粉本にしたことは、後編の三嶋宿のくだりを讀み合はすれば極めて明瞭である。輕井澤の女郎が江戸の旅客を驚かす數々は、そのまゝにこゝの趣向となつてゐる。信濃の方言をもそのまゝにいはせてゐる。しかも一九はたゞ一片の辭に托して剽竊の名を遁れようとする。」この二人、まことに此間追分から來たと見えて、是は皆あつちの言葉なり。皆々をかしさを隱し、だんまりにて聞いてゐる。」前にいつた「面美多勤身」を「膝栗毛」の種本といふには、一應も二應も考へた上でなければならない。その書き出しの、

「君子之道、譬如レ行レ遠、必自レ邇、市中に道をゆづり、今や聖の御代に、つきせぬ濱の五十三次の浪も平にして、爰に戻々たり。旅客來ればちよん〳〵の幕を引く、妓者あり遊女代のながきことの葉を、すぐに永代橋と號しも誠と實の天びん針云々」

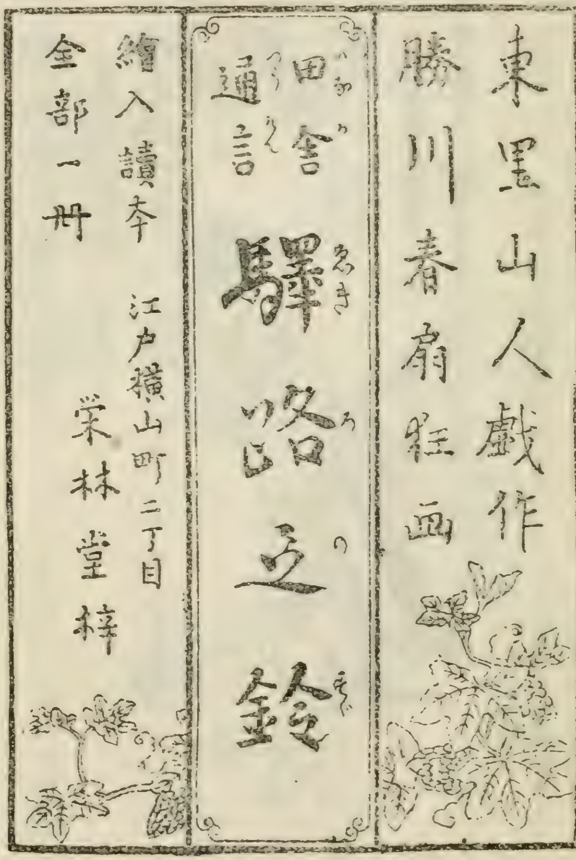
これが「膝栗毛」のと似てゐるとするのは、色眼鏡も餘りとはいへ、「變通輕井茶話」のは餘りに露はに過ぎる。それが剽竊であらうが、摸倣であらうが、とにかくに「膝栗毛」が酒落本のある傾向を早くも捉へた一證となりさへすればよいことであつた。

「膝栗毛」は酒落本と違つて田舍の讀者をも豫定せねばならなかつた。初編の見かへしに、「中ッ腹五十三次空尻道中記」とあるやうに、はじめは空尻なる故に、仕たい放題の所行から、いろ〳〵の滑稽をも生み出し、中ッ腹なる故に、江戶子の氣焰を擧げ、江戶子の眼で田舍を散々に笑ひこかさうとしたものではあつたらうが、田舍の讀者への氣兼ねは、後編の凡例に「驛々風土に隨て音律に淸濁の差別あり。俚言方語の通稱に異なる事あり。笑ふべきに非ず、古代の詞は却て田舍に殘れりと、徂徠翁の謂なり。」とて、古典を引用して、柄にもなく方言と古語との關係をいはせた。けれど、江戶も田舍もたゞ彌次北八の滑稽を歡ぶ世には、いらぬ遠慮であつた。一九は誰憚らず、彌次北八の失敗に江戶子の惡僻を笑はせ、彌次北八に田舍のをかしさを穿たせて、方言の如きは問題とするに足りなかつた。

方言が「膝栗毛」の問題となるのは別の意味に於てゞある。あらぬ方言が書れてある時に、その地方の人々は土地に拘はることゝ義憤さへ起す、訂正さへ申し込む。「膝栗毛」はその土地々々の忠實たる案內記であると見られるからである。「續膝栗毛」五編は木曾街道である。一九は「土人上古の遺風をうしなはず、言語都會に異なりといへども、又雅言のある事あり」と斷つてから筆執つた方言は未だ土地の眞實を傳へてはゐなかつた。一九は直に訂正すべく强ひられた。中に

「この木曾路は言すべて拗音にして、上聲多ければ、そは筆にあらはし難く、たゞ鄙言方語をその儘にて、

今年續六編の趣向を編りぬ。稿成りて後、信州松本の何某より、予がかたにいひおこせたるは、去年五編の著述、殊に俚言の違ひたる由を記して、主人の風俗難あることまで、精く書きおこせたるによりて、予猶去年の初秋の頃より思ひたちて、信州善光寺に參詣し、所々に遊歴して、是彼を見聞せしに、松本の人のいひおこせたると符合する甚多し。仍てこの次七編には目下予が聞おぼえたる儘を露すべし、と今よりその理を述る事しかり」とは六編に誌すところである。



一九の方言使用の成功に倣ふものが多かつた。こゝにはわづかに一例を擧げる。「驛路之鈴」これである。そこといはねど九州のある遊里を舞臺とする。趣向すべて方言のをかしさを專らにするにあつた。巻頭まづ

それに就いての注意をしるしてゐる。「浮世風呂」がすでに行はれてゐるその頃であるから、三馬の注意を眞似したのは勿論である。作者東里山人はこの作を以て一九を眞似してゐないといふ。「かの膝栗毛の尻馬にも不乘、舊觀帖の口眞似もせざれば、鳥に灸の患もなく、兩肆の猫の、韶陽魚を燒くとも、何ぞ手を灼ことあらんや」と序に見得を切る。その言葉の譃か誠かはとにかく、一言を要するは、いふところの「舊觀帖」である。この口眞似鳥は田舍言葉をしやべり散して、人々を笑はせようとした。角書して「浮世物眞似」とある。成和亭鬼武の作、文化二年の出板。その二編の序に鬼武がいふ、「上の卷は僕是を著し、中下の卷は十返舍哥々の筆力をものして、滿後編三卷を綴る。」一九亦これに參與したのであつた。この主人公は奧州者二人と越後者二



「驛路之鈴」

人であつた。江戸者の田舍見物を逆さに田舍者の江戸見物として、いよ〳〵滑稽の實を得ようとしたのであつた。

七

「膝栗毛」が江戸時代切つての愛嬌者になりおほせたのは、何も洒落本の狹い世界を蹴つて廣い浮世へ飛び出したといふだけではなかつた。それなら三馬の「浮世風呂」「浮世床」とどこが違ふといひたくなる。あの三馬の作を江戸以外の手合が讀んだなら、少くともある程度の反感は起らう。もう立派な「膝栗毛」まがひである「滑稽潮來婦志」にしてさへ、あまりに「江戸」が鼻につく。てんから「田舍」を見下す態度が横溢してゐる。あざ鐵とばか吉の二人、どれがそれかは知らねど、彌次と北八に當る二人は、津の宮の船宿で鯉のさしみを出された時に斯う話し合ふ。

吉「ハヽアあらはず鯉に木のめ酢みそ、へんぽうらいきてれつだ。一口食つて見や。鐵「こいつはおそれいり酒、あらひ鯉のとぐつた奴だ。二人「アハヽヽヽ。吉「斯う見た所はいゝ景色ぢやねへか。鐵「眞乳山から三圍を見通すより、モウ一盃あぶらをのせたのだ。」

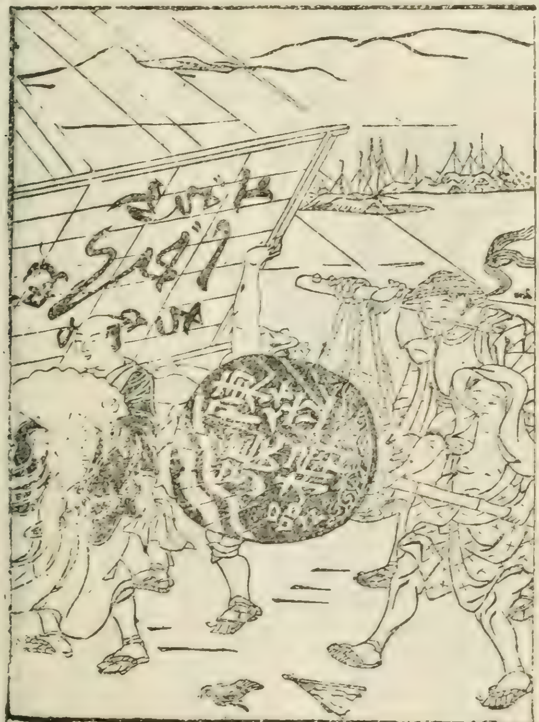
どこまでも「江戸」を背負つて歩く二人であつた。その一人の吉が江戸者は嫌ひだといつた潮來女郎に向つての惡態は斯うであつた。

「早く中宿をよこせ。下へおりると伊勢崎の油揚を尻ツきり引まくつんで、味噌をついたり、大根を洗つたりするざまで、江戸者は嫌ひだもすさまじい。江戸者が嫌ひぢやア、かて飯を食つて、白米のお飯は否だ

とぬかすだらう。斯ういつちやア、カラのやうだが、一分貮百の店賃を拂つて、喰く食ふといふ兒を持つて、常平生絹布で、おがみ舂の上白に魚を添へて食ねへきやア、癇癪の納らねへ東ッ子だ。眞菰の中に住みやがつて、はつつけ生靈お陀佛とはらぬが事た。早く中宿をよこしやアがれ。」

さういふ二人もつひには潮來の遊女屋で、さもしい喧嘩をして、江戸子の面よごしをする。作者が滑稽と外題に銘うつた譯合であつた。けれどその滑稽の底には、江戸子のどこやらを刺すものがある。諷諧諷刺であつた。そこが式亭小三馬が、「げに風來山人が戲作の正統」と家翁のために氣を吐く所以である。

一九の滑稽はたゞの滑稽である。別に諷するところのない滑稽である。氣散じな、ほんのうつけ笑ひに過ぎない。馬琴が「只村農野孃の解易くて、笑を催すを欣ぶのみならず、大人君子も膝栗毛の如きは看者に害なしとて賞美したりける。」といふのは、そこをさしての言葉である。い



一　童　川」

ふまでもない、「前代未聞」の流行はそれあるがためであつた。

隨分、「膝栗毛」は「江戸者」「田舍者」に對する諷刺と見られる。けれど浮世を第一とする一九は、その武器を用ゐない。諷刺はもろ刃である。餘程上手に使はなければ、相手を斬る前に自分を斬るの虞がある。さればとてその不利を承知しながら、使はずにゐられないやうな性根をば一九は持ち合はさなかつた。



代噺」さし繪

別に風來山人の正統を嗣いでゐるのでもなく、また江戸出板の本でもないが、後穿窟主人の「川童(かはたろう)一代噺」は諷諧の書であつた。寛政六年、大阪の出板である。その中の一章「障子の日覆大團(うちは)の事」を引くことにする。

『野の人は生きてかへるかわれ清水と古人の句も思ひ出さるゝ酷暑の朝の間涼しい内に、何ぞとんだ事をと案じ〳〵あるく一丁目すぢ、フト目にかゝる張手桶屋、「御亭主用心うちはがして貰ひたい、此位にして

隨分張りをかたうして、印は丸に川の字ぢや」、と直の極めもした上、「扨此看板の團が買ひたい、直はかまはぬ」といへば、亭主「ハイ夫はわたしが所の看板故、ぶんに念を入れまして、丈夫に致し、其通りに書付が致してござります、それを上げますと、又其通りを致して出さねばなりません」「それはさうぢやあろけれど、ちつと此方にも入用な事がある故ぢや、直は構はぬ、賣らつしやれ」とあれば、まんざら知らぬ顔でもなし、殊にけふの商旦那、また重ねての事もあるものと、「左樣ならば、いかやうとも仕ませう」といへば、「夫は過分」と、丁稚に其うちはを持して南へ向けて歩みゆく。長町筋を闕屋口へかゝる所に、「旦那お駕參んじましよかい／＼」に立ちどまつて、「なんと住吉迄あの團で跡からおれを煽いで來んか。休なしに煽きづめに仕たら、賃は望み次第にやるは。」「ハイ／＼わたし參じませう」「イヤわたくしが參ります」「イヤわたして御座ります」と三人が我一と丁稚が持つてゐる團を取つて煽きかける。「おのれ、おれが先へお籠參りませうといふたさかい、おれが行く」「おのれ、そんな我儘はならぬ」と掴み合ふ。太郎「コリヤ／＼其やうにせり合ふな、わいら三人ながら雇うてやるは。其代りに一人は跡から煽いで來ると、二人は上から日覆をきせて來るのぢや」「夫は有り難うござります」「その日覆は何處に御座ります」「夫はどこぞで障子を一枚買つて來い。三人ながら雇ひ賃は望み次第にやるぞ」「ハイ／＼」と走まはつて、煮賣屋の障子一枚買つて來る。「オヽ是でよい、斯うして持つて來い」と指圖にまかせ、二人は障子の兩端を持ち、日あしを覆うてゆくと、一人は跡から大團で煽ぐ。長町裏を今宮へ出、嶋田へかゝる所に、日はあたらず、大團で煽ぐ故、中々涼しく、「コリヤ存の外よい。賃の外に褒美に新家へいたらば、三文字屋で好次第の食悅さすぞ」「夫は有り難う御座います」と悅んで行く。所が歩き／＼大團で煽ぐ事故、思ひの外にしんどうなる。障子も又日

中になるほど上へさしあげねばならぬ故、手がかいだるうなつて、ちつと下へさげると儔陶しいと叱らるゝ故、力一杯手を延して、是も歩き〳〵故、段々と暑うはなる、汗は目へ入る、逆上して足はもつれる、ふらついては來る。「旦那さん、ちとお休み」といへど、「イヤ〳〵住吉まではすぐ行ちや」といはれてげんなり。往來の旅人住吉まゐり、大坂通ひの堺の肴屋、紀州飛脚も片よつて、是は雨乞のねり物でも來るかと見ているにも、少しもめいらず、扇遣ひをして、悠々と歩み行く。

後には三人ながら次第に手はかいだるし、のぼしはする。ヒイ〳〵いうて、漸々天下茶屋へ來て、「モシモシ旦那様、ちと爰でお休みなされませんか、わたくし共は、一向のぼして向うが見えません、汗拭きませうも兩手は塞がつてあり。目に汗はしゆみます、どうやらふら〳〵目まひが來ます」といへば、「扨々根の弱い者共ちや、三文字屋の事を思へ」といへば、旦那さん、「其樂しみがあればこそ、此じゆつない目を堪へます」と大笑ひして暫く勞れを休め、「サアどうぢや、モウいからうかい」「ハイ〳〵參りますで御座ります。是からは野ばかりぢやが、風がちとやんだ故持ようなるであろ、此街道程西風の強うあたる所は又五十三次にもござりません」といへば「風がやんだら、團は一倍力を入れて煽いてくれい。サア〳〵いかう」と立出れば、「風が靜つた」とさしあげつけて功者が出來たか、少しは初手よりは持ちよいやうに思へど、今度は團の方が「風がぬるい」と叱られて、惣身の力を兩手に入れ煽ぎ立て、やう〳〵新家へつくと泳ぎ着くやうに、三文字屋へこけ込み、夫から約束の通り、めい〳〵好みの肴に飲み次第の酒、燒石に熱湯かけるやうに食たり呑んだりの食悦、「コリヤ〳〵皆よう呑みや、まだ肴が足らずば、何なりと好んでさしたがよい。其鉢で呑みや〳〵」と叱られて、下地は好きなり、酒はよし、草臥た上の大酒にいつそ三人ながら足が立た

ず、こけたなりでの高嚊。太郎はにこ／＼笑ひ、「近年の面白さぢや。おれも幸晝寢時分」とくつたりと一寐入り、目を開いて見た所が、日も西へ落ちかゝりて涼しい風のそよ／＼に、丁稚を連れて立しなに見れば、皆三人は醉がさめず、算を亂した寐入りばな、遥かの後に三人は漸々目を覺し、肴や酒はしたゝか飲む、賃銀は十分に貰ふ、ほや／＼して歸りけるが、中にも年がましい男、餘り手を上げて歩いて延した上に、大酒した加減か、夫より大のかな聾となりけるが髮をおろして、胸に札をかけて、鉢坊主となり、さし上げた僻がうさらず、米入の箱を兩手で目より高くさし上げて「つんぼうに御報謝」といつて町々を走り歩き、しんどうせずに世を樂に暮しける」

長きを厭はずに抄するのは、たゞのをかしさでなしに、内に寓するところあるを讀まうためであつた。川太郎は駕舁共にだけ斯うするのでな



「通者茶話」

い。理不盡な茶屋にも、華美を誇る通客にも、何かしら痛い目見せずにはおかなかつた。畸行は單なる畸行でない、世を諷せんとするためであつた。少くとも作者後穿窟主人はさういふ態度を持する川太郎を書いてゐる。

その川太郎が「膝栗毛」の八編には河太郎として一役を受持つ。住吉街道に障子一枚を竪に持たせて、其蔭を行く洒落。一九は註して「浪花名代の洒物にてかゝる洒落をなして樂しみとし其名殘りたり」といふ。また北八をして「上方も馬鹿にやアされねへ、とんだ洒落者がある、奇妙々々」といはせた。「膝栗毛」では障子は一寸の洒落を見せて棄てられる。それを拾つて日覆にした彌次北八が思はぬ失敗を釀す種とのみなる。そこにはたゞをかしさのみが殘つてゐた。

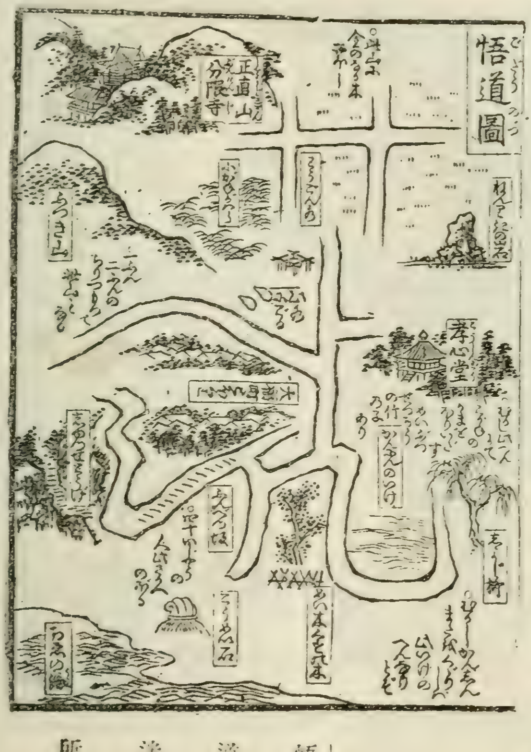


太郎」さし繪

「川童一代噺」の主人公川太郎は實在の人物である。本名河内屋太郎兵衞、大阪錢場の豪商であつた。その

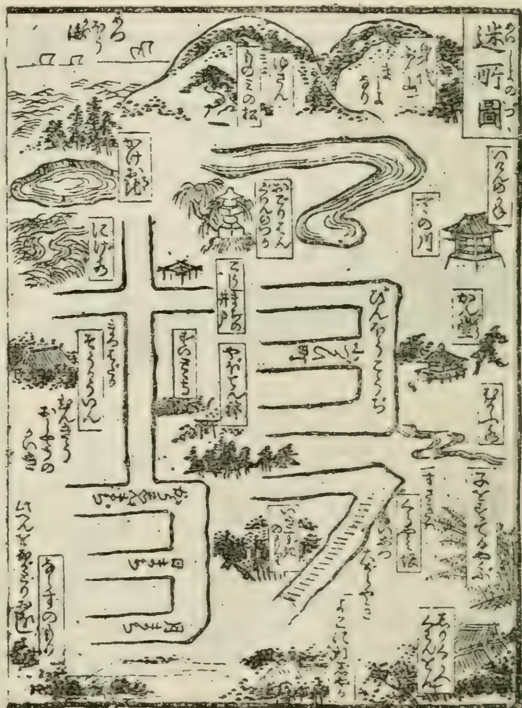
時行の數々は、寛政八年の「通者茶話太郎」からも知ることが出來る。その一つ、場所はやはり、住吉街道、新家まで約束した駕籠の底がぬけて尻もちついた茶話太郎は、「底がならても乘つていぬ」とをかしさ堪へて難題をいふ。雲助は「叟から歩んでいなつしやれ」と氣色ばむ。その張りがなほ面白く、「底のないも結句一興、かごの中で歩いてやる。おれが足に合ふ樣に、わいら二人は舁て來い。少しでも過不及して前が障るか、尻つくか、髭目がちよびと支へても、了簡ならぬが、サアよいか」と無理から舁き出させ、足とり揃へのつし〳〵と笑ひ顏ひとつせず、往來繁き市なかを晝日中ぞめいて通るのであつた。

この一條、題して「笑を捨て底なき竹輿(かご)に乘話」といふをやんわりと「膝栗毛」に持ち込んだのが、三編の底拔駕籠、褌で中程を括つて乘つてゆく趣向であつた。それは再び續編の四編に跋が舁ぐ駕籠の話に用ゐられ、三度七編の前脚の悪い馬の話に用ゐられてゐる。しかし、そこには大い相違が見られる。彌次北八等の行爲には、わざとを



「悟道逐所」

かしさを堪へて、をかしさを敢てする茶話太郎の腹は毛頭ない。世を諷し、人を戒めようなどいふ考は更になかつたのである。それは皆「通者茶話太郎」の著者鐵格子、「川童一代噺」の著者後穿窟主人と「膝栗毛」の著者との態度の相違であつた。河内屋太郎兵衛は天明の頃にはすでに死んでゐた。一九は大阪に來た頃にはもうその人はない。一九はその噂話を聞いて筆を執つたか、それともこれ等の著書から趣向を構へたかといふに、どうやら著書の上からしたやうに思はれる。すなはち作者共の好んで試みる諷諸を片寄せたところに一九の用意が存してゐたのである。



「獨案内

八

「膝栗毛」の初編が京傳によつて書れたか、どうかゞ、またこゝの問題になつて來た。鐵格子は「通者茶話

太郎」の序に「なま酔なるまゝに夜あかし硯にむかひ、蘋ぬしく源氏つれ〴〵など手にとれど、盲にひとし。やはり赤本の方おもしろし。かの玄妻其法師が博識なるも予がためには京傳にしかず」といつてゐる。寛政の頃から音に聞いて折紙附けた京傳ならではと、今流行の「膝栗毛」の作者を考へたのであつた。

その京傳は初紛出板の翌年、享和三年に「人間一代悟道迷所獨案内」といふ黄表紙を出してゐる。「此草紙は人間一生の道中母の胎内くゞりを出て父の恩の高き山にのぼり、母の恩の深き海を渡りてより、降居山安樂寺へいたるまでの道法ならびに脇道横道悟道迷所宿々泊々川々船わたし等、初心の旅人のために盡くしるす。其外まよひ易き道すぢ用心すべき所には繪圖にあらはして知らしむ」といふ趣向であつた。この趣向は、京傳その人の黄表紙「凸凹話(たかびく)」「東海道五十三驛人間一生五十年」と角書した寛政十年板の燒直しとも考へられる。それには東海道の名物が人間一生の何等かに附會されてゐた。こゝに揭げた例にも危險な荒井の渡があつた。さやまはりははや



京傳　凸」

まはりの洒落であつた。渡には向うにお城を見せてそれと知らせてゐる。ここまで運んだ案じを何故京傳は、寶暦の「善悪道中獨案内」また天明の「當世導通記」にまで戻して、「獨案内」としたのであらう。何といつても京傳は一九に比べて、流行おくれといふことが出來る。京傳はまだ「膝栗毛」の初編には緣遠いやうに思はれる。

京傳の趣向も、もとより東海道の旅の流行を追ふものであつた。けれど享和の日には教訓に結びつけるよりは、もつと街道筋そのものゝおもしろさ、いはゞ「羇中旅客の滑稽、道旅傀儡の風色」に興じたかつたのである。と見てとつた一九は幾多の先蹤をうち棄てゝ、つゆばかりも教訓がましいことをいはなかつた。それがまた「膝栗毛」の迎へられる一因であつた。

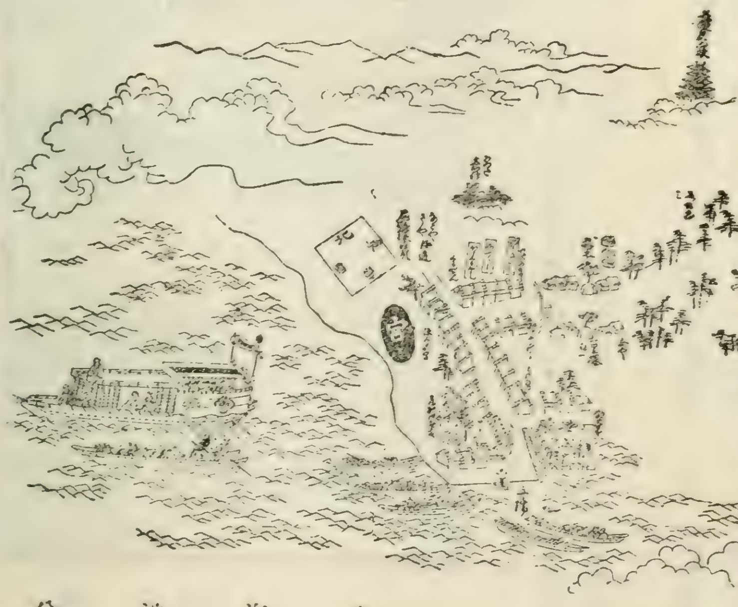


圖　「話

秋里籬島が土佐光貞、山口素絢、春泉齋なんどの諸名家の畫を加へた「東海道名所圖會」を出した寛政九年の頃は、東海道熱の高い時である。一九は「驛々風土の佳勝、山川の秀異なるは諸家の道中記に精しけれ

ばこゝに除く」といひながら、街道の實狀を必ずしも要としない滑稽の本でありながら、なほ幾度か東海道の實地踏査の報告をしなければならなかつた。讀者はそれを作者が東海道に對する良心と解した。「膝栗毛」をもやはり一種の案内記と考へてゐたのである。さればこの飜刻の底本としたものには缺けてゐるが、日本橋より品川へ二里。藤澤より平塚へ三里半。とやうに里程を書き加へてゐる摺本もあつた。

京と鎌倉との往來に見もし聞もしする節々を書き留めた物の本は多かつた。その鎌倉が江戸となつた時代は幾段とその數を增した。寛永の「竹齋物語」は姑く措く。萬治の「東海道名所記」ははじめからおもしろをかしい案内記として書れてゐる。案内の圖もとりぐ\に刊行せられる中に、元祿の「東海道分間繪圖」がある。「三分一町の積り」と銘うつて分厘の違ひなきを期した。けれどそれだけでは慰みに

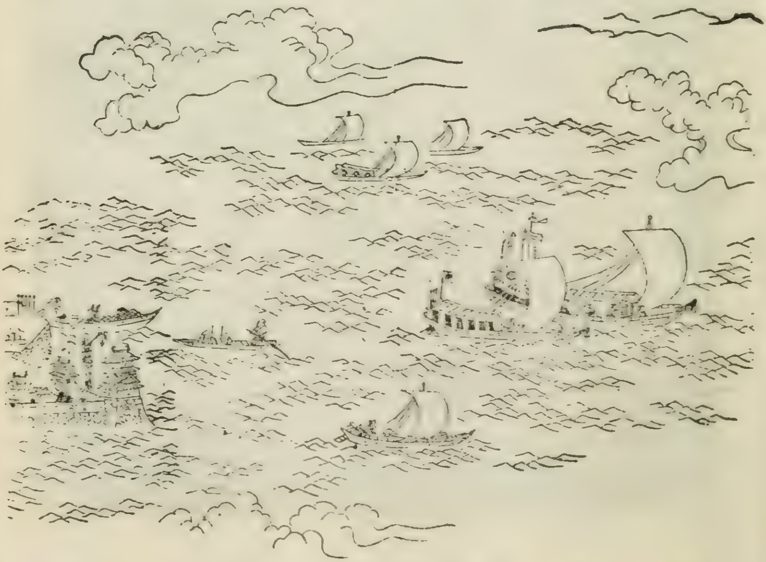


「東海道分

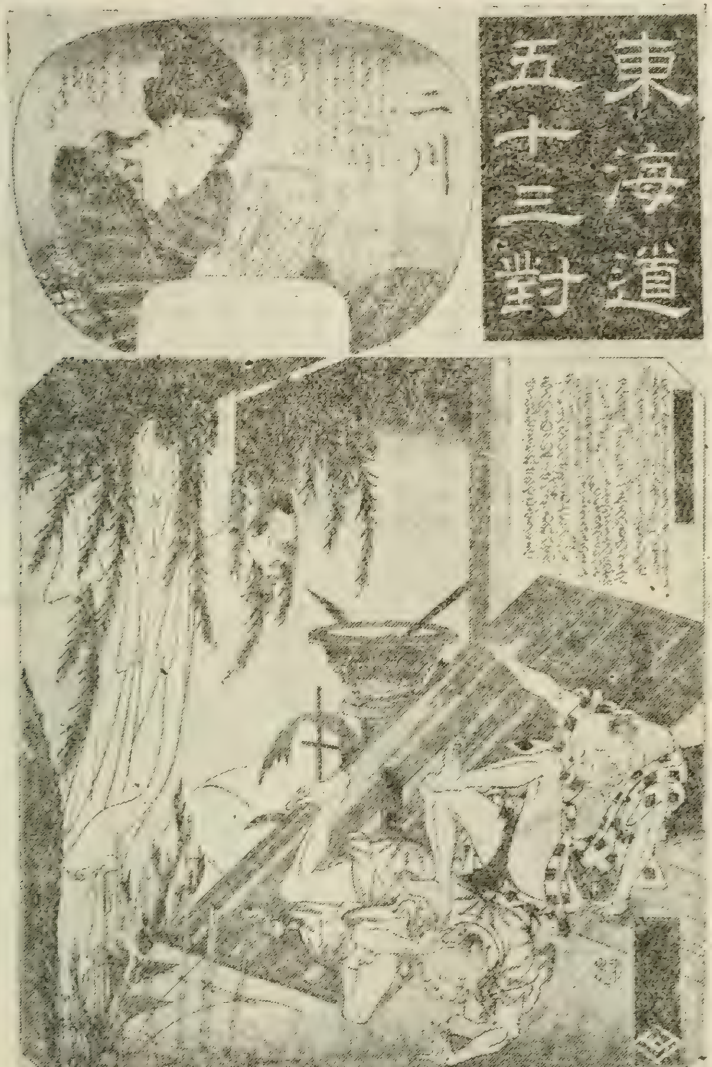
ならずとて、「右の圖を風俗に顯は」した。描くものは菱川師宣であつた。實用と趣味との交錯のうちにいろ／＼のものが生れて來る。「膝栗毛」は勿論それ等との間に因緣づけられてゐる、それどころか一九はよくそれ等の古板物を參照したのであつた。

數多い東海道物の中に、最も世の人々とうち解け合ふのは「膝栗毛」と廣重の錦畫であつた。一九は旅のおもしろさ、廣重は旅のわびしさ、その基調には大いけぢめこそあれ、五十三次に寄せたその頃の夢の姿を、あり／＼と今も目の前に浮ばせてくれる。時からいへばおくれて出ただけに、廣重は一九の後を追ふ形になつてゐる。しば／＼戲れの筆で彌次北八をつれ出してゐる。こゝには「東海道五十三對」の一葉を揭げる。「膝栗毛」を讀んでゐる娘の言葉として斯う書きそへてあつた。

「膝栗毛は幾度見てもをかしいねヱ、いま讀んでゐる所は二川だがね、これより前の干物をみて、幽靈



間繪圖」



廣重筆

だと思つてこわがる所が、をかしかつたよ「なにそこを讀んできかせろとかへ、そんならマア下の繪を御覽な、あの通りだよ」

廣重も亦「膝栗毛」の社會的勢力を利用したのであるが、更に「膝栗毛」が芝居の舞臺にまで上つたことも注意せねばならない。文政十年の河原崎座では「獨(たび)道中五十三驛」をはじめとして度々上演せられた。さては所作狂言にも仕組まれたのである。

斯ういふ東海道から見れば、木曾街道はあまりに惠まれてゐなかつた。籬島の「木曾街道名所圖會」は文化二年に出板せられたとはいふものゝ、まだ／＼六十九次は五十三次ほどに紹介されてはゐない。これを書いてゆく一九の態度はおのづから東海道に於けるのと異ならざるを得なかつた。東海道では他の道中記に讓つた驛々風土の佳勝山川の秀異を精しく記載した。さし繪も亦名所圖會がゝつて描いた。特殊な風俗には細やかな注釋を吝まなかつた。一面には立派な案内記をなしてゐた。二世一九の「奧羽一覽道中膝栗毛」がうるさいまで地理を說き、歷史を語り、物產を述べてゐるのは、この後をうけて、更に多く加へたためであつた。

一九は「金毘羅道中」の見かへしには、道中繪圖を附けておいた。地理を知らぬ多くの讀者の便利を考へたためである。「木曾街道」「草津道中」にはもとより詳細な道中繪圖を添へようとも考へたであらう。しかし、さうすると「膝栗毛」を滑稽の道場から追放することになる。「方言修行金草鞋」と同案になる。あれは合卷仕立の、童蒙の眼を喜ばせ、道中の地理の知識を授けるのが主である筈。それとこれとを一緒にすべきでないと、つひに繪圖をさしおいたであらう。

九

度合の違ひこそあれ、東海道も木曾街道もいはゞ馴染の劇場である。旅のをかしさといふ喜劇好きの觀客には、まづ何をおいても、上演の俳優が問題であつた。一九が拉れて來た彌次北八は一體何代目に當るかと聽きたい程、古くから殘る藝風であつた。

寛永の「竹齋物語」には二人の旅人がゐた。藪醫師の竹齋が、病者の寄り來ぬわびしさに、白眼之介といふ郎黨をつれて、京から江戸へ、氣散じの旅をした。

貞享の「新竹齋」には竹齋の子の竹齋と白眼之介の子睚眦介が父だちの下つた道を數々のをかしさばらまいての旅があつた。



三代目豐國筆

その笛齋匪眡介よりもずつと前の萬治の頃、二人の旅人が東海道を上る。世になし者のはて、青道心を起して、樂阿彌陀佛と名をつけた行脚僧、呼名をつめて樂阿彌と、芝口で道づれになつた大阪の手代であつた。四國遍路、伊勢、熊野、所々方々を經めぐつた樂阿彌は、まだ旅馴れぬ年若の色白男に道々の名所舊蹟さては旅の心得、世の中の道をも說ききかせる。それが「東海道名所記」であつた。

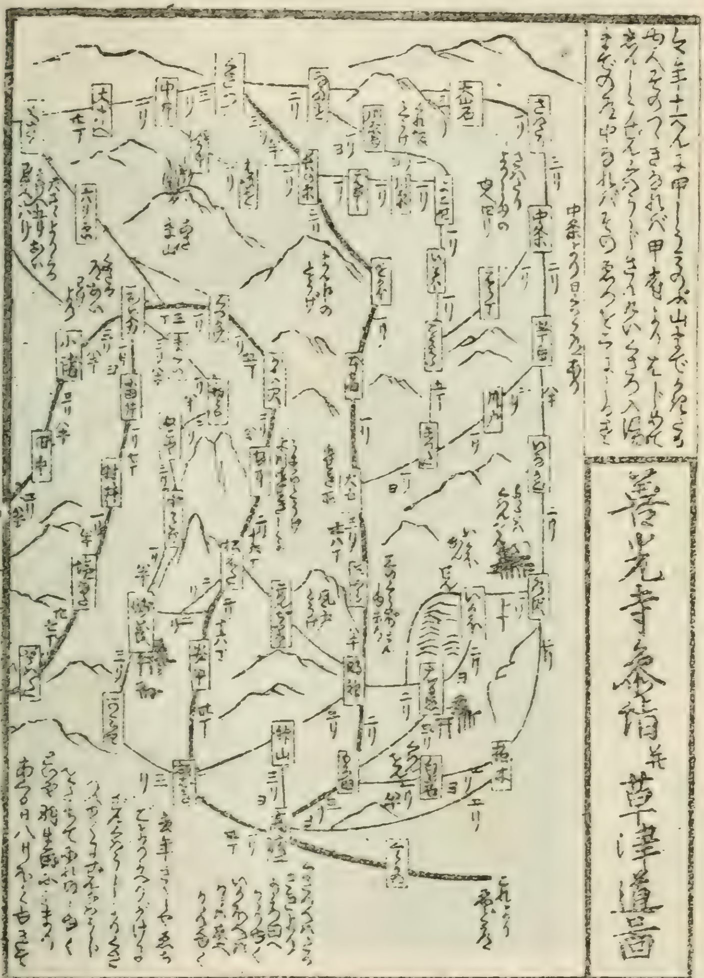


芝居繪 小田原之場

「東海道名所記」から道中案内をひき拔いたといふべきものに寶曆の「東海道驛路の鈴」があつた。これも同じ趣向の二人づれ、樂阿彌に當るのが風也といふ。も一人は例の無名であつた。「抑樂阿彌陀佛とは何者にてありけるやらん、顏も見知らず、行方も知らず」とある「名所記」の終末は、これには「彼風也坊雲と

や戍けん、風とやなりけん、あとも見えずうせにけり」とまで摸倣のあとをとゞめてゐる。

しかしこの系圖書は北八の役どころを考へると、そのまゝ承認されさうもなかつた。それでは北八の先代はあまりにツマにしか扱はれてゐないからである。彌次と北八とは一膝栗毛」劇に於ては、殆ど對立の形になつてゐる。さういふところから、彌次北八を能の狂言のシテアドにまで

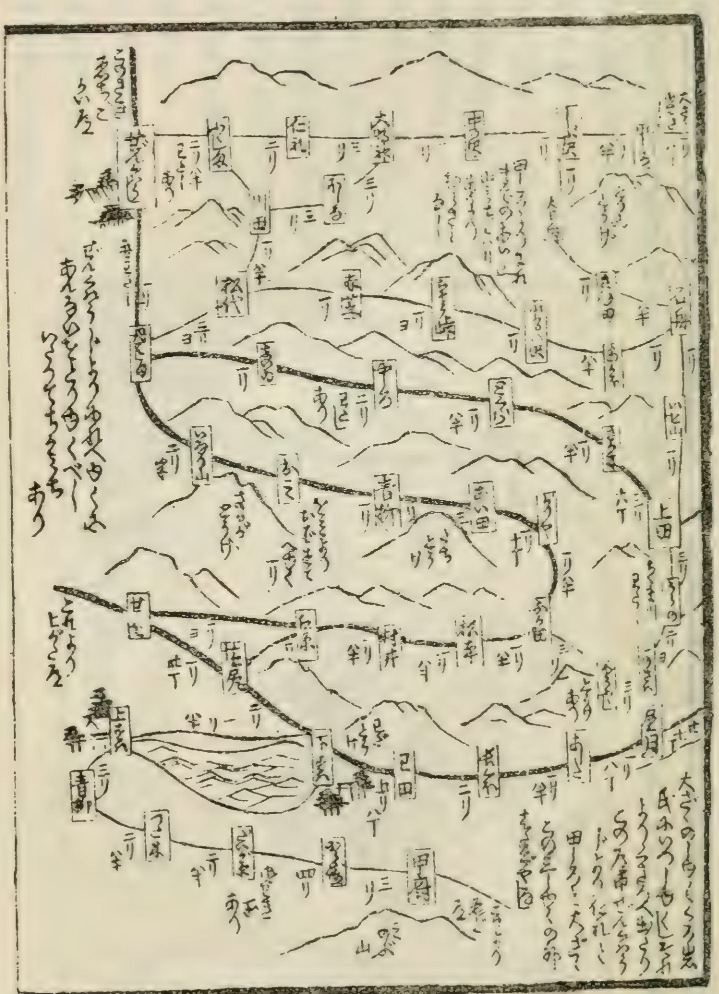


「金の草鞋」所載

溯らすべきであつた。

「東海道」の後編の冒頭には狂言詞がある。一九は狂言の形式を趣向の中においたのであつた。「膝栗毛」の姉妹編ともいふべき「方言修行金草鞋」には彌次北八に相當する鼻毛延高（はなげのびたか）、筑羅坊（ちくら）がシテ、アドとして書れてゐる。これも參照すべき一つである。

「シテ男、藍の紋付の布子柳行李を背負ひ、すべて旅裝束。



解說六三頁參照

アド僧　紺の木綿八德、これも旅の裝束出立。
案内者　伊勢綿の布子、紺の股引出立。」

題を「東都見物左衞門」といふ。いふまでもない、狂言の「見物左衞門」をもぢつたのであつた。

「シテ　罷出たる者はずんと奥の山家の者で御座る、われ等狂心執心で御座れば、狂名を鼻毛の延高と申ておそらく田舍ではわれ等につゞく者は御座るまい。されども歌人居ながら諸國の名所を存ぜぬほどに此度思ひ立ち、先大江戶一見致さうと存じて罷越してござるが、扨々獨旅と申す者は、さびしい者で御座る。いや幸の事ぢや、あれへ行かるゝ僧が御座る。言葉をかけて同道致さうと存ずる。なるならさきな人、待たしませ。アド僧　こなたの事で御座るか。シテ　いかにもそなたの事ぢや、そなたはどれからどれへ行かします。アド　身共は奥の者の御座るが、お江戶見物に罷出て



「東海道名所記」

ござる。シテ　是はいかなこと、身共もその通りぢや、同道致さう。アト一段とよう御座らう、身共名は筑羅坊と申て狂歌熱心の者でござるが、この度修行を思ひ立つてござる。シテ　扨々聞き及うだ筑羅坊殿か、身どももそなたと同國ぢや、鼻毛の延高と申す者で御座る。アド　これはいかなこと、そなたも隱れのない人ぢや、さてもよい道づれをもとめて御座る。何と斯様に申でござる。シテ　何とめされた。

アド自語。えどさあへつん出來べいよよつぱるかおもひ今度かはじめての旅。

シテ　これは一段とよう御座る、身どもも斯様に申しました。

自語。國さあをやくとう出來てきせちない旅もあだけて氣ばらしぞする。

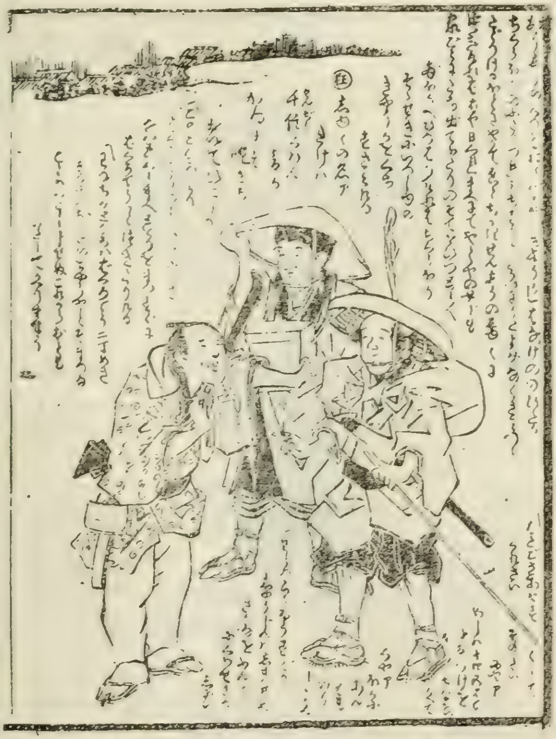
シテ　アド　さあ〱いかしませ〱」



「鈴の路驛」

彌次北八の先祖調べもさることながら、數多の飜案を指摘することによつて、「膝栗毛」と狂言の並々ならぬ關係が知られる。飜案せられたのは「どぶかつちり」「狐塚」「つんぼ座頭」「雁爭ひ」「鱸庖丁」「附子」「暇の袋」「筍爭ひ」「三人片輪」「墨塗」などである。

その例の一つ。「どぶかつちり」にはまづ沙門帽子に衣の勾頭が登場する。「罷出た事は此あたりに住ひする勾頭の坊でござる。きやうにござれば、今日はきく一をつれ、嵯峨へ參らうと存ずる。きく一あるか。」下ばかりのきく一が「これに居ります。」と答へる。二人は出かける科。徒歩渉りする川に來た心。勾「やい、きく一、負うて渡せ。」きく「こな樣もわたらしやれませい、さて。」



「金の草鞋」

半袴の道行人上場。「罷出たる は 道通りで御ざる。いや、座頭が座頭を負うて渡すと見えた。それがしが負はれて、わたりませうず。」道行人は勾頭のふりして負はれて川を越す科。勾頭がきく一に、何故おいて行つたと叱る。きく一「わ。勾頭樣、又今

のほどあひ越したよ、あしをまめに何故に又そちらへ行かしやつたぞ。はれさて、物好きな。目の見えぬものをば、あちらへこちらへさするぞ。面白いいぢやまでい。さ負はれさつしやれい。いえさて又、負はれさつしやれ。面白御座ろの。」きく一は勾頭を負つて川の中で轉ぶしぐさ。水に浸れた二人は酒筒をとり出して酒を飲む。道行人「いや座頭が酒を飲む體でござる。負はれた上に、又酒も飲ませう。」道行人は二人の隙を伺ひながら酒を飲む、と知らずに互に口小言をいひ合ふ。道行人「扨も〳〵、座頭といふ者は面白い者で御ざる。ちといさかはしませう。」勾頭にいろ〳〵の悪戯をし、はては頭をうつ。勾頭「やい、こゝなきく一めは、酒くれぬのみならず、おのれは何故にくはせたぞ。」きく一は辯解する。勾頭は聽かずに迫つてゆく。道行人「扨も〳〵よい慰みで御座る。ございて、いさかはする、ほんな面白い事は御座らぬ」二人は扨はと知つて追ひかける。きく一「勾頭様、御ざりませい、おのれ何處に居るぞ。」勾頭「やるまいぞ〳〵」道行人「わゝ。」三人退場。

この一番が三編の鹽井川のところ、彌次北八の二人が二人の座頭を馬鹿にするくだりとなる。その四人とこの三人とが無理もなく、趣向も細かに書きかへられてゐる。一九の飜案は大方斯うであつた。



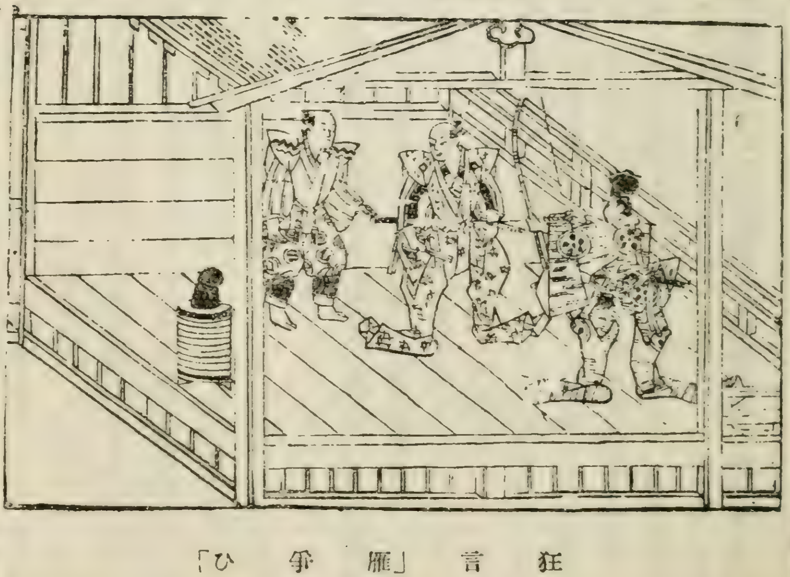
狂言「狐塚」

また の例。「雁争ひ。」熨斗目素袍、大臣烏帽子、小さ刀のシラの大名が出る。「罷出たるは此あたりに隠れもない大名で御座る。今日も野遊びに参らうと存ずる。（道行）誠に慰みは多けれど、殺生ほどよい慰みはあるまい。やあ、これに雁がをる。これから射ようか、何處から射ようか」。そこへ半袴上下腰帯のアドの男が出る。「罷出たる者は此あたりの者でござる、それがしは急用ありて、さる方へ参る。まづ急いで参らう。やあ、是に雁がある。これはとりたい物ぢや、何をしてとらうぞ、思ひ出した、礫をうたう。やあ、ゑい、さればこそ當つた。まづ雁はしてやつた」。アドが雁を持つゆからうとするのを、シテが留める。「いやいやそれは身共が、最前から睨み殺しておいた、遣ることはならぬ、おこせ」といふ。アドが争ふのを弓矢で射ようとする。「やれ、あぶない、出合々々」といふアドの聲に應じて、所の者が出る。長袴、小さ刀さしてある。「やい／＼、これは何事ぢや、聊爾を



狂言「どぶかつちり」

すな〳〵、これはどうした事ぞ。」所の者は二人の言葉を聞いて、仲裁をする。「まづ待たしませ〳〵、身どもがこれに居るからは、聊爾はさせぬぞ。兎角身どもが思ふは、そのやうにいうて埒があかぬ。この上はあの雁を、もとのところに置いて、も一度射て見さしませ。當つたら、そなた取りやれ。もし當らずは、そちへやる事はなるまい」とシテにいふ。シテもアドもその提議を承諾する。シテは射た、當らなかつた。シテ「それなら、是から射よう。さあ、射るぞ。南無三寶、當らぬは」。アド「そりやこそ當らぬぞ。まづ雁は身共がとつて歸らう。なう〳〵嬉しや〳〵。」シテ「やいやい、も一度射さして見よ。やれ待て〳〵。せめてその羽根なりと呉れ。」アド「羽根を何にするぞ。」テシ「羽箒にするは。」アド「いや〳〵、それもならぬぞ〳〵。」シテ「やれそれは聞えぬ。せめて羽根を呉れ〳〵。」三人退場。



狂言「雁爭ひ」

これを「續編」の八編、小岩嶽のくだりに比較して見る。北八は谷川を流れて來る雉子を見つけて、里の子供に取つて來させる。そこへ獵師が今鐵砲で撃つたのであるから寄せといふ。聲高の爭ひを聞いて所の者が三人まで出て來て獵師に加勢する。彌次が仲裁して、その鳥をも一度鐵砲で撃たせる、當つたら獵師の物、當らなかつたら北八の物と定める。勿論獵師にはづれはなかつた。北八は子供にやつた八文を棒に振つたとこぼし、彌次は「ホンニ、よもや、撃ちはしめえと思つたに、よく思へば、生きてかけ出す奴をも、うつてとる奴等だものを、ちつと動かねえ鳥をうつ位は、お茶の子の筈だ。コリヤ一番、おいらの智慧がなかつたはえ、ハヽヽヽ」と笑ひ出すのであつた。

そこには弓術に拙い大名に對する諷刺はなかつた。はじめから彌次の無智のみがある。羽箒にする羽根ほしのをかしさは、八文惜しみの滑稽に代はる。所の者の入れかへが彌次をして例の道化役を果させる。一九の飜案も、立派に前後の趣向と辻褄を合はせるだけの手際は見せてゐたのである。

「膝栗毛」の組織からいつて、狂言のはめ込みは別に不思議がなかつた。何故あゝまで多く飜案の題材にしたかと怪訝の念を起させるのは、八文字屋の氣質本であつた。「世間學者氣質」「世間手代氣質」「當世役者氣質」「當世宗匠氣質」その他が數へられる。こゝにはその一例として、「世間學者氣質」卷三の中から引くことにする。「後編」の蒲原の木賃宿の六部の話、風が吹き續くので金儲をするとて箱屋になるの一條の粉本である。

『手を組んで小便しに起る拍手に、空を眺めて內へ入るや否や、「まづ今の思案より明日は七つ過から小錢

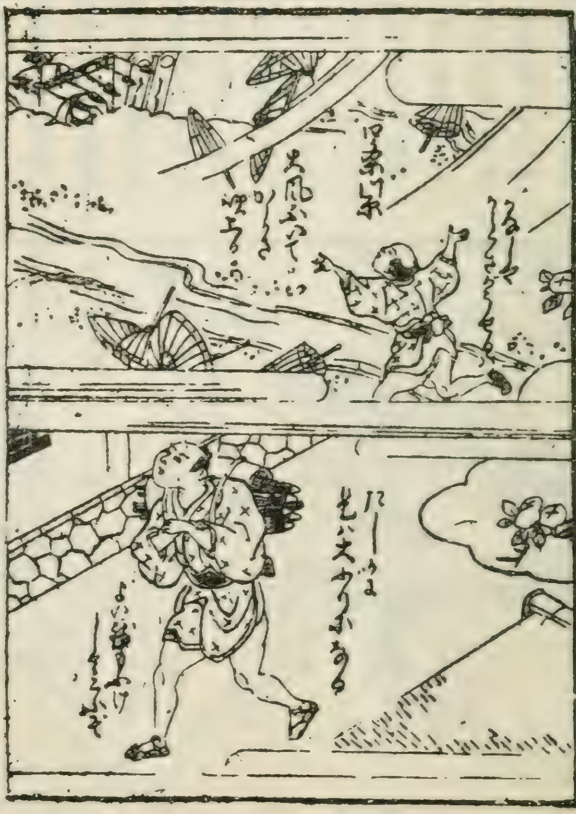
儲ける事がある。今天文を見るに、月が畢といふ星にかゝつて見える。月畢にかゝる滂沱たらしむといへば、明日は雨が降るに極つた。安傘を二十本ばかり向ひの傘屋で呑み込んで貰うて芝居戻りの客に賣れば、二百や三百の錢はつい儲けらるゝ」とそれをしほに寐入りて、扨あくる日は成程天文に僞なく、四つ過よりじた／＼降り出せば、三郎兵衞は又いきり出し、「なんときつい物か。天文の事なら、また是まで骨折て置いたしるしがある」と、早速向ひの傘屋へかけ付け頼むに、傘屋のみ込まず、「現銀賣切ならば安うして進じよ、こちも見らるゝ通りの貧乏傘屋で、二十本の傘は仲間で借つて來にやならぬ」といふを、佛頼むやうに云つて、小玉拾二三匁かたに入れて、二十本の傘を借り出し、八つ時分から四條河原をさして駈け出さるゝに、御旅町あたりまで行くとそろ／＼風が出て、よし峯よりも晴るゝ夕立のかなしさ、まだ下はしるけれども、空はくわん／＼照りつけるに、丁度芝居はての時分には、いつかな／＼傘はさしおいて、日傘が欲しい位の日和、「傘入らぬか」といへば、迎に來た丁稚背たけおうて、「駄賃なしならちと持つてほしい」ととび過ぎたこびつちよめと睨んで見ても埒が明いた口を塞ぎかねて、けたいの惡い今日に限つて、日の照りざまはと勿體ない日輪にまで不足のたら／＼云うて、業腹紛れ、河原で一ぱい飲んでのけう、と傘を床几におろして飲んでゐるに、風が次第に出て來て、屋根がそろ／＼めき／＼いひ出す。床几がくわたつくと思ふ中に、一しきりどつと吹いて來る天狗風に、傘がうすべりぐるめにばら／＼卷いて上る。是はならぬと鉢も燗鍋も踏みかへしてかけ出さんとすれば、酒屋の男が引とらへて「酒代を拂はしやれ」と引とむる。女共は跡からまた「めつさうな燗鍋と鉢を踏み破らしやつた、まどはしやれ」と取りつく。「其段ではない、傘がちると身代しまひぢや。こゝ放してくれ」と斷いうても聞かばこそ。「あの手で喰逃げするのぢやあらう」とくらは

しかゝるに、せう事なく巾着の底をたゝいて、一匁ほどな大黒銀と四五分の古銀を取出し、「まあ、是を取つて置て下され」とさし出すに、「まだ足らぬ」といふを、いろ〳〵に詫言いうて、やう〳〵かけ付け、あそこに三本、こゝに五本の傘拾ひ集めて、たつた八本、殘り十二本はどつちへ行つたやら知れず、是は夢かや、うつゝの三太郎のやうな顏付して内へ戻り、亭主と傘屋に目の出る程わめかれても、此上は逆さにふるうても鼻血は出ようが、銀といふものは大黒銀や古銀までとられて仕廻へば、「いつそ夜が寐よい」と減らず口が喰へいではとまた錢儲けの思案、「とかく今の世では有りふれた事ではゆかぬ。したが今日の大風で土ほこりの立て、人の目の中へはいれば、世間に盲が大分出來る。そこで三味線がよう賣れる。さうすると猫の皮がたんと入るによつて、世界中の猫が大分減る、さうなれば鼠があばれ出すによつて、自ら箱の類をかぢりを



世間學者」

る。爰で箱屋をしたらば、大分よかりさうなものぢや」と思案は仕出しても是も元手がなうては埒明ず。なんぞ元手入らずの錢もうけがありさうなものぢや、と分別のさきは人が賢うて、元手入らずの錢儲けより、算露盤入らずの早算用といふ半切刷りのちらしが大分はやりて錢儲けしたとの評判。三郎兵衛聞くより、「エ、無念な、わしが思案の先を折をつた」と下司の智慧は後へまはり遠い分別、極樂道中の道程、遣ひ錢日數の算用を思ひ付き云々』



氣質「さし給

この極樂道中の思ひつきを、一念發起の六部とひき直し、箱屋の思ひつきを、實行した後の失敗と書きかへたのが「後編」の趣向であつた。こゝの三郎兵衛はひき續く筋の中に動いてゐた。しかし、一九はその筋を外にし、傘の段をも切り放した斷章取義の態度を以てする。その態度はこの一條に對するだけではなかつた。

一九の飜案の對象はこれ等にとゞまらない。新古とり交ぜた典籍による。人の氣づく、氣づかぬに拘はらなかつた。氣附けば却つて飜案の手際を見て貰へると思つた。當時の戯作者の常である。「徒然草」の鼎の一段も「續編」四編の、腹にさした鍼が拔けなくなつた騷ぎに仕立直されてゐる。椀の兩端に錐を揉んで穴をあけ、元結を通す。それを鍼の上にかぶせて背中で結んで、鍼醫者が師匠のところへ連れてゆくといふのが山である。鼎の足の上に帷子を冠せて連れてゆくといふのが斯う變形した。强ひて滑稽を誘ひ出さうとするだけに、兼好のをかしさはいたく損はれてゐる。しかし、「奥羽一覽」の同じ飜案と比較すれば、さすがに初代だけの案と見直すことが出來る。二世一九は原の形から離れずに炭とりの大瓢を冠つて拔けなくなる騷ぎとなつてゐる。

一九が「膝栗毛」を述作するためには數多の古板



「奥羽一覽」さし繪

書をも渉獵したことであらう。「東海道名所記」も參照せられたことは、誰も氣づく無學の犬の話からも明に知ることが出來る。「かゝる所に大なる赤犬かけ出で、すき間なく吠えかゝる。男も肝をけし、樂阿彌も魂を失うて俄に虎といふ文字書きて見すれども、田舍育ちの犬なれば讀めざりけん、逃ぐる尻もとへ飛びつく。」と「名所記」にあつた。乙な手つきをしてお前何をすると訊ねられて彌次が「イヤ犬に取り卷かれた時は、宙へ虎といふ文字を書いて見せると、犬が逃るといふことだから、先刻から書いてゐるが、ねつから逃げやアがらぬ。此奴等ア皆無筆の犬ださうな」と答へたと「膝栗毛」の五編にある。さながら「名所記」の註釋である。

この無筆の犬の趣向は、狂言「犬山伏」にもあつた。「醒睡笑」にもあつた。その他にも見える。一九はそのいづれから取つたのであらうか。しかし、いづれにもせよ、古書漁りの證左にはなる。

一九の古書渉獵、少くとも街道物漁りはいろ／＼の點からいひ立てることが出來るが、こゝにはその著しい一例を擧げる。

師宣が畫いた「東海道分間繪圖」に就いては、さきに一言及ぶところがあつた。その大井川の圖は師宣も一段と注意して描いてゐる。三分一町の積りといふ道印の規定を破つて、とりわけて大く畫いてゐた。「諸大名樣方の御こしの樣子書き候故、分間より少しのび申候」との斷がある。その構圖を見て、一九は大方ならず悅んだ。三編大井川の渡の圖はそのまゝにそれを畫き出した。それでもなほもの足らずと、「金の草鞋」にも同じ繪を用ゐた。「成程お大名といふ者は偉い者、川をお越しなさるは大層々々、あの向うにずつと並んでゐる人は何のためだへ。」「あれはお越しなさるところの水勢をせぎるのさ」の言葉書きをも添へてゐた。

一九が古きに題材を求めながら、たゞさりげない戯の筆を執るといふのは、結局は一九の聰明の證據になる。少くとも「膝栗毛」はそれあるがために、永い壽命を保ちもし、一代の寵兒にもなつたのである。とうからその呼吸を呑み込んでゐる一九は、「東海道」の五編に、「こたび作者の技術にて、實に夜道といへることを、仕損じたることのあなれば、其事をもて、彌次郎兵衛北八が四日市泊の趣向とす」といひながら、實は例の八文字屋本の「當世芝居氣質」の一條を踏襲する。さうと知らぬ多くの讀者は、作者の言葉を眞にうけて、實際の話として嬉しがる。あまりに引き延し引き延したので、興味索然であると評せられてゐる「續編」には、殊に飜案が多かつた。その數は作者が自己の見聞によると斷る



「東海道分」

のと正比例してゐる。實虚交錯して皆讀者の心を魅了せんとする手段であつた。

一九みづからの經驗を述べて、しば〱趣向の種あかしをする「續編」の凡例その他に於て、氣づかれる一つは、勝手に事件と場所の關係を變更することである。そのどれを例としてもよいことであるが、九編には淸水入の怪は穴澤峠に、赤倉溫泉の禪の間違ひは新町泊に、大箍通の突腹は水内村に、大笹驛の心中未遂は善光寺泊に變更したと斷つてゐる。

さりとては亂暴な話である。外のものとは違ふ。旅行文學としての「膝栗毛」である。隨分案内記らしく、名所記らしくそれを扱ひもしてゐる一九である。それがその土地々々を重じてゐないと正面から決めてかゝるので



間繪「圖

ある。それでよく讀者が承知するものと、一應は考へられるが、その地方色とやらを念としないところに、「膝栗毛」の生命があつた。多くの讀者はたゞ東海道とか、木曾街道とか銘らてばよいのであつた。五十三次にしろ、六十九次にしろ、その土地の人々を除く外は、まづ芝居の書割程度で滿足してゐたのである。隨分寫實の細い筆を見せる廣重でさへ、よしんば色の調子で大いけぢめは出したにせよ、駿河の江尻の田植の景を、そのまゝに伯耆の大山としてゐるのではないか。まして一九は、一九の讀者は、その書割の前で演ずる喜劇を重じたのであつた。書割さへ變ればいつも同じ筋を演じても見飽きない悠長な人々であつた。古い本にある事だらうが、今の流行の落噺で聞いた事であらうが、その日を笑つて暮せさへすればよかつたのである。そして二十年を、子は親になるまで、年増が婆になるまで、彌次郎兵衞北八の道化役者を贔屓してゐたのである。一九はたえず贔屓客をあやつる絲を巧みに牽いてゐたのであつた。

一〇

第十九編としてこの書には、「膝栗毛」の他に「旅眼石」「江戸前噺鰻」「落咄彌次郎口」とを收めてゐる。皆一九の作であつて、とりどりに「膝栗毛」と深い因緣の絲を繫いでゐる。

「膝栗毛」が「竹齋物語」「東海道名所記」などの傳統にあるといふのは、狂歌物語の形式を有することに於ていはれる。竹齋も、樂阿彌も狂詠を巧みにしたとはいひながら、彼等の狂歌物語はまだものさびしかつた。彌次北八のやうに二人で詠み合ふといふ相手がないからである。その點からえて、「膝栗毛」は古い狂歌

物語に對して出藍の譽を誇つてよい筈であつた。「膝栗毛」の歡び迎へられた原因として、またこれをも數ふべきであつた。

一九はみづからの狂歌に對していふ。「巻中に著す夷曲歌は排設地口を專にす。故に嗤者は笑へ　予が風製落首體たるを以て、入金を會て出さず。却て其料を着服するは、是稱を取るより德を執て、慚を愧と思はざる、予が性質仕方がなし。」



十返舍一九肖像
「戯作六家撰」所載

この「東海道中膝栗毛」初編の言葉はまた「旅眼石」からも聞くことが出來る。「此に著すものは、當意

の部與を詮として、其部言、てにをはの拙きは、概落首體に相同じ。仍て此道に名たる君子の覧に備ふべくもあらず。たゞ兒女の爲に悉く畫を設けて、是に授ぜむことを欲す云々。」その「旅眼石」は享和二年、「膝栗毛」初編と同年の出板である。

「南總記行旅眼石」　一冊、中本

享和元年一月、一九は鹿嶋香取息栖の三社詣をした。一僕太吉を伴ふだけの膝栗毛の旅で、道すがら狂歌の友の誰彼を訪れる。そこに詠み殘した狂歌、また畫賛などはその畫の面影をも寫しとゞめたのが、この一册であつた。三社めぐりから銚子の磯めぐりをした一九は筑波日光に參詣して五月の末に江戸に歸つたとのことである。卷末にはまた各地の人々の餞別の歌の多くをも載せてゐた。こゝにまた馬琴が牧之に與へた手紙の一節を讀まうとする。

「如仰一九は浮世第一の仁にて、衆人に嬉しがられ候故、遊歴の先々にても餞別の所得格別なるべし。そこらの手段は中々不佞などの不及事に御座候。」「旅眼石」の記事は如實に馬琴の言葉の世間第一の仁を裏書する。これを見ることによつて、もの欲しげな馬琴と共に、餞別の所得格別と、せでもよい一九の算用までして見たくなる。

凡例中にまた本文の中に、「總行奇談」の著書があることをいつてゐる。山川の佳景、風土の秀麗はそれに讓つたとある。それが刊行せられたのであるかを明にしない。

この「旅眼石」も最初の計畫は二冊にする積りであつたらう。といふのは同年出板の黄表紙「的中地本問

屋」の繪から推察される。

「旅眼石」はいふまでもない一九のノートである。それに記された素材と趣向を立てた作物との關係を探し出すことも、一九を考へる上にはせねばならぬ一つであつた。享和二年出板の黄表紙「屈伸一九著」には本城の遊里に遊んで、千代鶴といふ遊女を相方にして、とんだ野暮を働くことが書いてある。その中にはしげつるといふ遊女の名も見える。ノートは直に中の蓬萊屋の鶴重を働かしたことを敎へる。ノートはまた「膝栗毛」の趣向をも敎へる。一九はさきに都にて求めた貫筒、公卿が便用のための器を、それと知らないで酒の吹筒とした。今度の旅には僕の太吉の腰につけさせた。野出といふところの寺で、人々と酒くみかはした。院主は一九にその吹筒の穢い譯を話した。また江戸でも大名衆は靑竹を火吹竹ほどに切つたのを、便用に持參することをも話した。それを書き留めた一九は、「膝栗毛」の四編に宮から桑名へ渡る舟の中の火吹竹として用ゐ、六編に淀の夜舟の急燒の失敗として用ゐたのである。これを特種と考へてゐる一九は、更に「續編」の三編に用ゐる。また十二編にも用ゐた。殊に後のはノートそのまゝに書き立てた。三人の似而非風雅者が下部に例の貫筒をさげさせて來る。彌次北八もその酒を飲む。正體を敎へるのは來あはせた旅僧であつた。



「的中地本問屋」

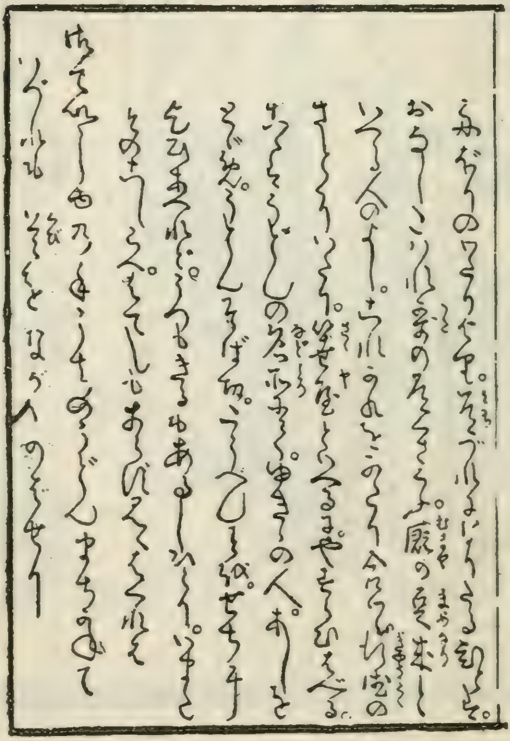
その言葉も口語と文辭の違ひこそあれ院主そつくりであつた。同じ貫筒の繪さへ本文中に挿入してあつた。

「旅眼石」はその後わづかに改竄して、再板といふ姿に於て、文化四年に出板もせられた。名を變へて「馬士の歌嚢」といつた。その名はすでに「的中地本問屋」の中に見えてゐた。角書して「五十三次」といひ、「全五冊」といふのがそれであつた。一九の豫定はつひに果されずに、こゝに「旅眼石」と一つになつたのである。一九はまづ序を書きかへた。「南總記行」と題したのを、さあらぬ風に出す今とて、序には三社詣をば、つゆばかりも見せなかつた。「予一とせ春のはじめつ方鳥が鳴く東の都を立出で、天さかる都の旅路に赴き、この一集をかいつけぬ」とのみいふ。多分「旅眼石」は賣れないで板元村田屋の持てあましものであつたらう。「膝栗毛」によつて有名になつた一九の作は、もう何でも迎へられる文化四年には、「賣物にせんもおもなけれど、又秘め置けるも本意なしとて、例の榮邑堂にそゝのかされて膝栗毛の北八彌次郎なるものゝ詠み出たる歌の樣にひとしければと云々」などとも書くのであつた。「旅眼石」は本文三十二枚、その最初の二枚は、三社詣に就いて細やかにしるしてある。



「的中地本問屋」

それを除いて直に舊板の三枚目からを、そつくり用ゐるために、それどころか、二枚目の裏も用ゐられるだけ用ゐようと巧みに末四行を活して本文のはじめとしたのである。勿論「旅眼石」の巻末の餞別の歌をば除いたのである。なほ「旅眼石」になくして、「馬士歌嚢」にのみあるものはすべて一括して、こゝに掲げておいた。

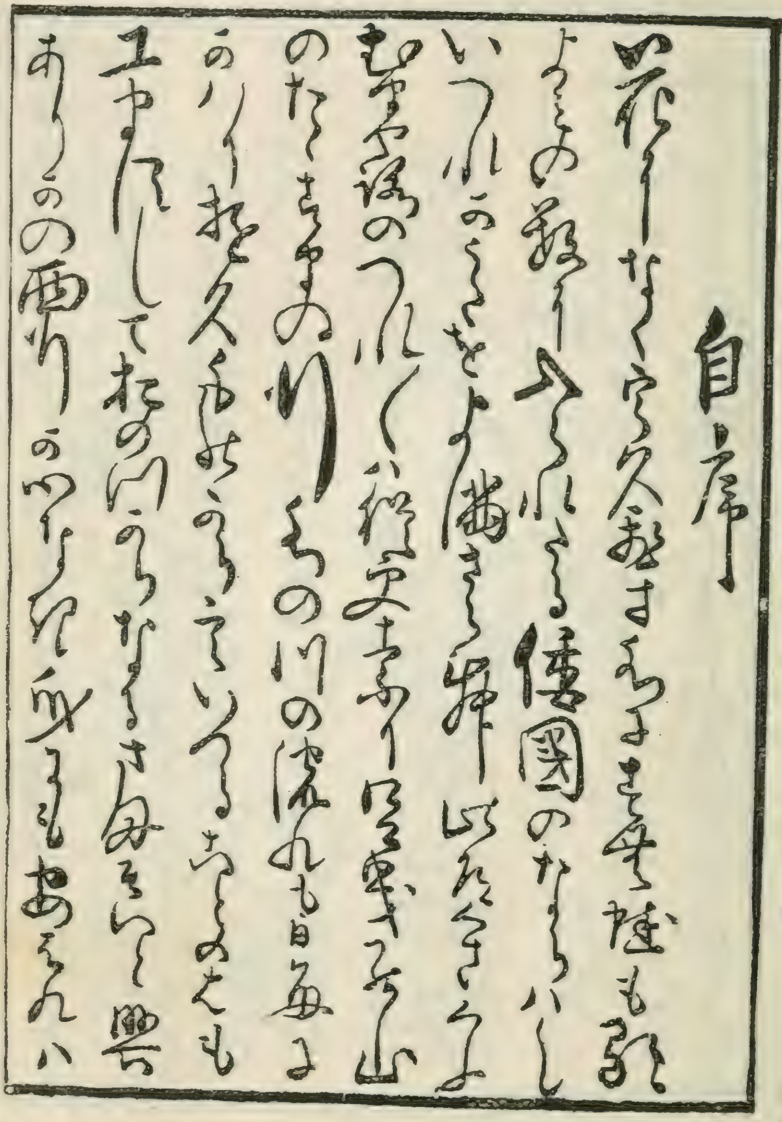


「旅眼石」二枚目裏

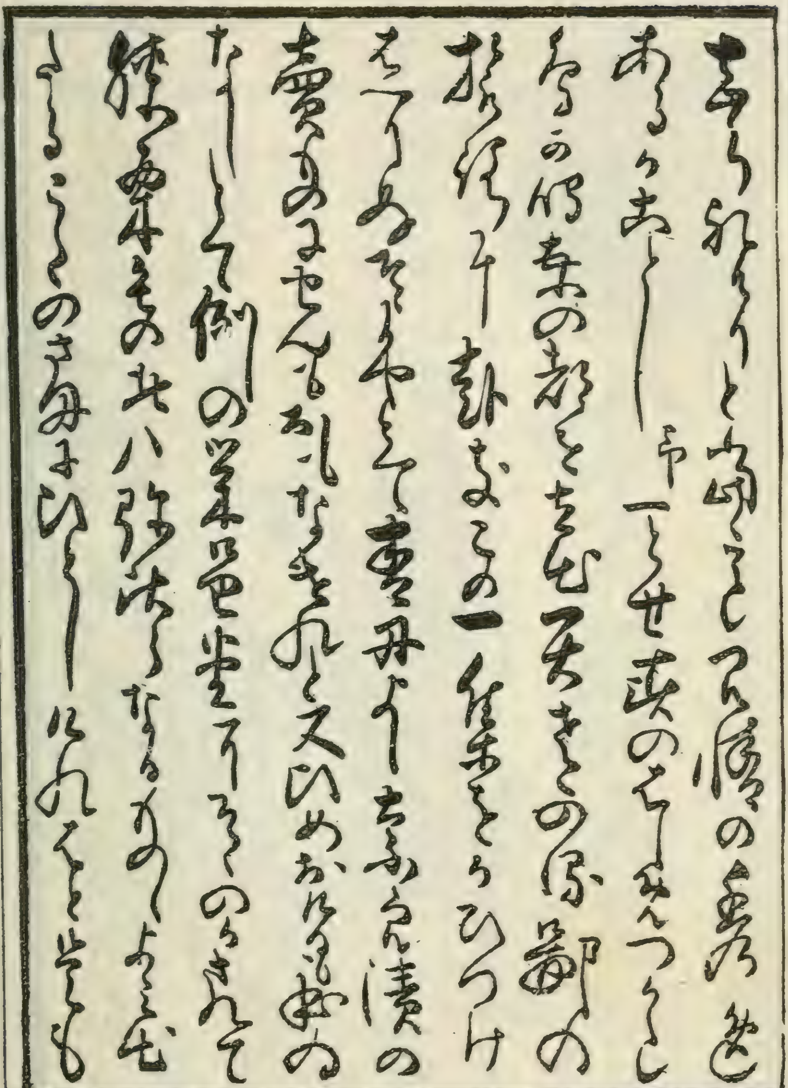
二

事件の結びに、また事件の中心に狂歌を置くがために狂歌物語ともいふべき「竹齋物語」「東海道名所記」の類は笑ひ話の集ともいふことが出來る。事件そのものが笑ひを目安としてゐるためである。「膝栗毛」もまた同じ形を有つ。たとへば「東海道」の後編、北八が夜道の失敗のあと、彌次が北八とやらは大方太棹だらうといふのは、筋に於てもさうなつてゐるが、はじめから落噺として獨立すべきものであつた。その類は甚多くいひ立てることが出來る。

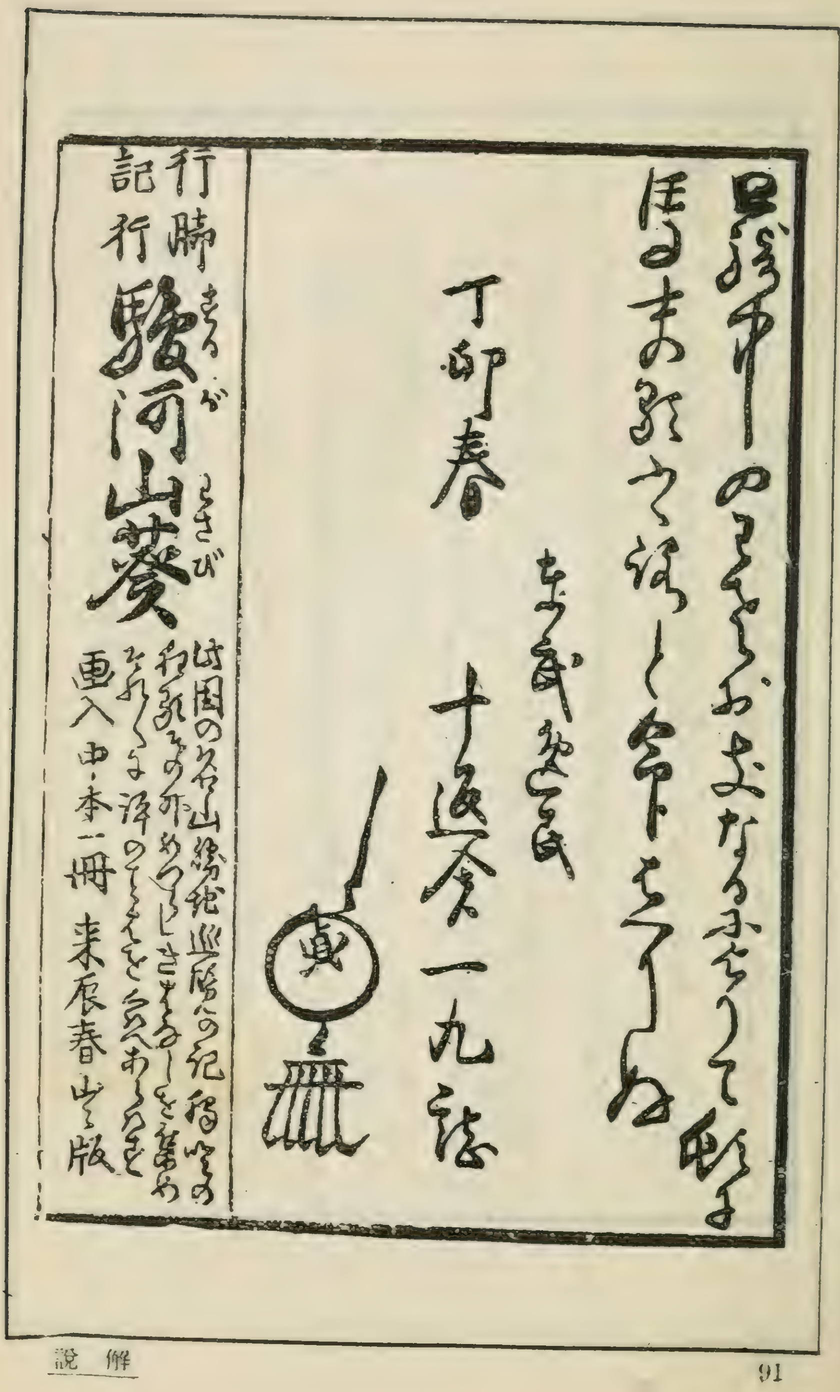

馬士の歌嚢
全一冊
總中記行獨詠
滑稽歌画賊集
凡而田舎之風
色或者奇説等
戯以會之
十返舎一九編
見かへし


自序

「馬士の歌」



「嚢　序　文

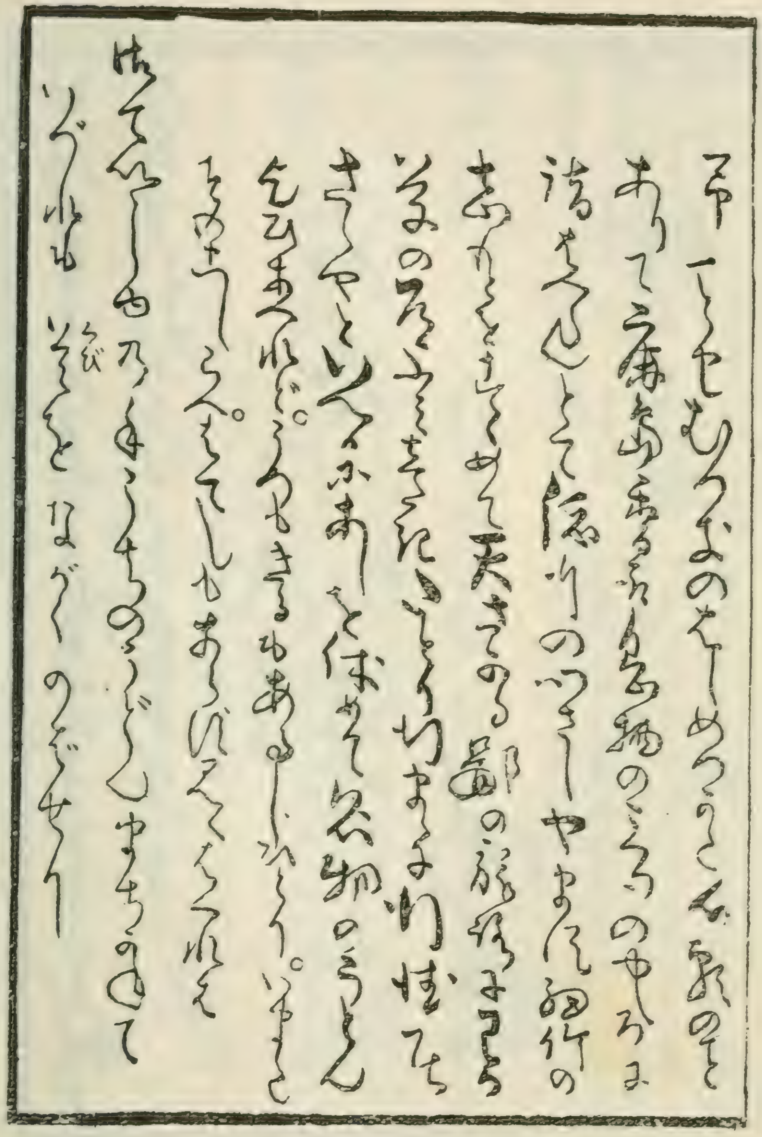


丁卯春

十返舎一九誌

行脚
紀行
駿河山葵（するがわさび）

画入中本一冊　来辰春出版



本文第一頁

または元祿前後の、或は安永天明前後の噺本の中から採り來つて潤色したのを一々指摘することによつて、「膝栗毛」と笑話、或は落噺とも概稱すべきそれとの關係を明にすることが出來る。こゝにはわづかに粉本となつた一例を擧げるにとゞめる。

「鍛冶屋の仁藏、盆正月のための小錢をあつけ、せめて一度は八坂の茶屋へ行きたしと思ひ、やう／＼二匁五分たまりければ、嬉しく思ひ、古褌に括りつけ、節句のごえんを待ちかね、八坂のあたり、何屋とかやへはひり、盃のうちにつく／＼思へば、我が褌の餘り穢きを恥かしく思ひ、金のこともうち忘れて、二階からそつと捨てけり。折ふし下に下女洗濯してゐけるが、これを見れば太閤様時代の木綿褌なり。下女のいふやう、もしこれはお客様のかといへば、仁藏、「いや／＼、それはおれがのではない。其括りつけてある金ばかりがおれがのぢや」といつた。」

正徳板の「輕口福藏主」、尤もこの話はその他にも見えてゐるのであるが、それの筋合を更に複雜にしたのが、「東海道」の五編追加であつた。更にまたその括りつけた金から來るをかしさを主としたのが、「續編」四編の趣向であつた。

剽竊といふか、換骨奪胎といふか、とにかくに、多くの噺本と交渉を有つ一九は、また噺本の作者でもあつた。もとより噺本は當時の作者が必ずや一度は執るべき筆であつた。しかも一九の作はなか／＼に多い。本編に收められたのは、その中の二部に過ぎないが、なほ一九のその方面の傾向を知るには十分であらう。

「江戸前噺鰻」二冊

文化五年の出板、黄表紙仕立。二世戀川春町の畫。序を除いて、すべて繪組の上に書れてゐる。黄表紙が五枚を一冊とする例によつて、これも序ともに十枚であつた。この形式は噺本に於てさまで珍しいことでない。黄表紙と噺本との關係もこゝから考へられる。

題名の噺鰻は放鰻をもぢつたもの、それを江戸前の鰻に結び合はせた酒落であつた。しかも、文化元年板の、三笑亭可樂の「東都直衞」とも聯絡して考へられる。

この作だけのことではないが、一九の噺には例の換骨奪胎が目立つてゐる。ことには一二を拾つて、その例に當てる。

「ある者火事に遭ひけるを見舞にゆきければ、其女房申しけるは、何にても惜きものは御座ないが、古今萬葉伊勢物語、是三いろを焼きたるが、何よりもをしき」といふたるよしを、友達の所にて語り出し、「さて〳〵やさしき事かな。さほどなる身上



「江戸前噺鰻」

にてもなかつたが、さだめて古よき人の娘か、又は名ある人のかゝれた物どもにてあらう」と此女房を殊の外に褒めければ、この友達の女房つく〴〵と聞きて、われも家を燒きて褒められんとて、あやまちの由にて、その夜家に火をつけ、悉く燒く。さてあくる日、知人諸親類集りて、「扨々にが〳〵しき事かな」と云ひければ、此女房いひけるは、「何にても別に惜きと思ふ物はないが、こぎね、まどごも、いせすりばち、此三いろが惜い事ぢや」といはれた。」

元和の頃の「醒睡笑」とほゞ時代を同じうするといはれてゐる「昨日能今日能物語」の一話が、世話がゝり、遊所がゝりになつたのが「江戸前噺鰻」の「とりはづし」であつた。

「噺鰻」の「茶代」の「十五助と致しませう」の落ちは、安永板の「鳥の町」の同じ題のをとつたのである。

「京者江戸見物に來り、馬喰町に宿をとり、供に連し男にいふやう、當所は道中と違ひ、茶屋へ寄つても茶代を二三文宛は置れぬ。明日から見物に出るが、茶屋へ寄つて六介と云つたら六文、八介と云つたら八文置けといひつけ、毎日遊山に出る、又觀音へ出かけ、閻魔堂の邊にて夕立に逢ひ、是おれは此茶屋に待つてゐるから、内へ行つて傘を取つて來いと云ひつけやり、二三町も行くと思ふと日和になる、アヽモそつと待てばよかつた、是亭主今八介が歸つたら、觀音の方へ來い、茶代も八介に拂つて來いというて下されと頼み行く。なんだあの人は滅多に八介々々と、ハア聞えた此中六介と云つたら茶代を六文、今日は手間どつた故八文といふ事であらうといふ所へ、傘を持つて來る。是、旦那は觀音にござつた、百介に茶代を拂つて來いとおつしやつた。十方もない、旦那はきつい無理いひ、爰にたつた三十四介。」

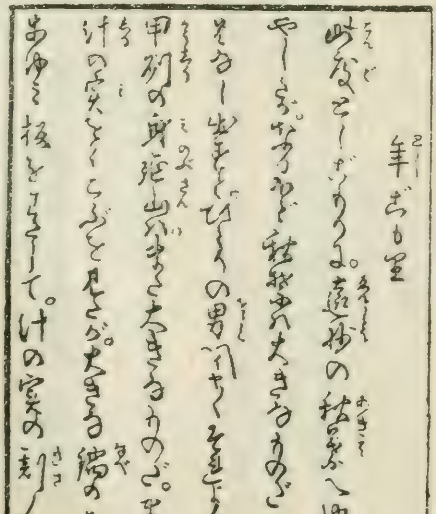
一九の作はこれをかなりに刈り込んでゐた。「膝栗毛」にこそ引き延す必要はあれ、たゞの噺としてはをかしさの効果を薄くするのを虞れたためであつた。

「落咄彌次郎口」一冊

文化十三年の出板。噺本の多くがそれであるやうに小本であつた。

「續膝栗毛」七八編出板のこの十三年頃は、彌次郎兵衞の名は世に響き渡つてゐる。それを利用した題名であつた。

「膝栗毛の彌次郎兵衞が、無差禮と方言の問屋からつけ出したる噺の本馬、お定りの貫目より輕口ながらしつかりと思ひつきたる新作ばかり仕入して、荷物の駄賃帳、雲助の鬼殺しの酒代にせんと編りし新板物」と序にいふのは、また落噺と「膝栗毛」の關係を語るものであつた。すなはちこの作は「膝栗毛」の本格から離れてその中に含んでゐる落噺の要素を獨立させたものといひ得る。勿論一九の噺の全部がさうであるが、これは殊に作者の言葉として聽くべきである。



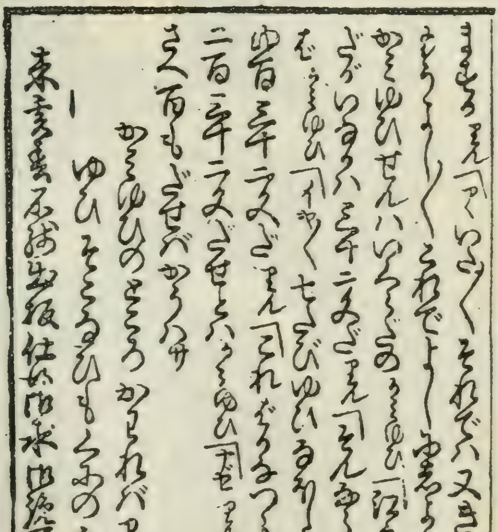
「彌次郎口」

一面からいへば「膝栗毛」は落噺の數々を五十三次、六十九次その他に排列し、それに彌次北八といふ人

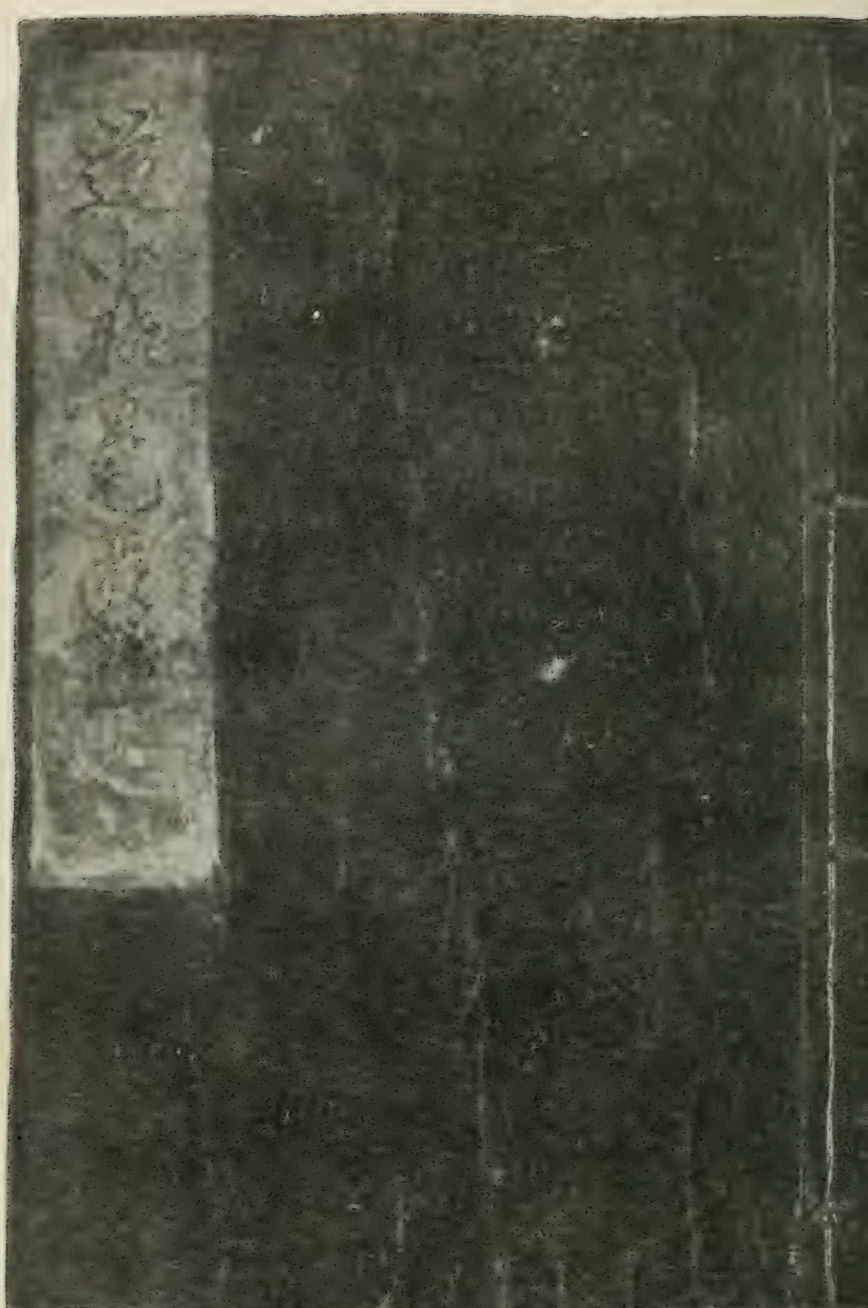


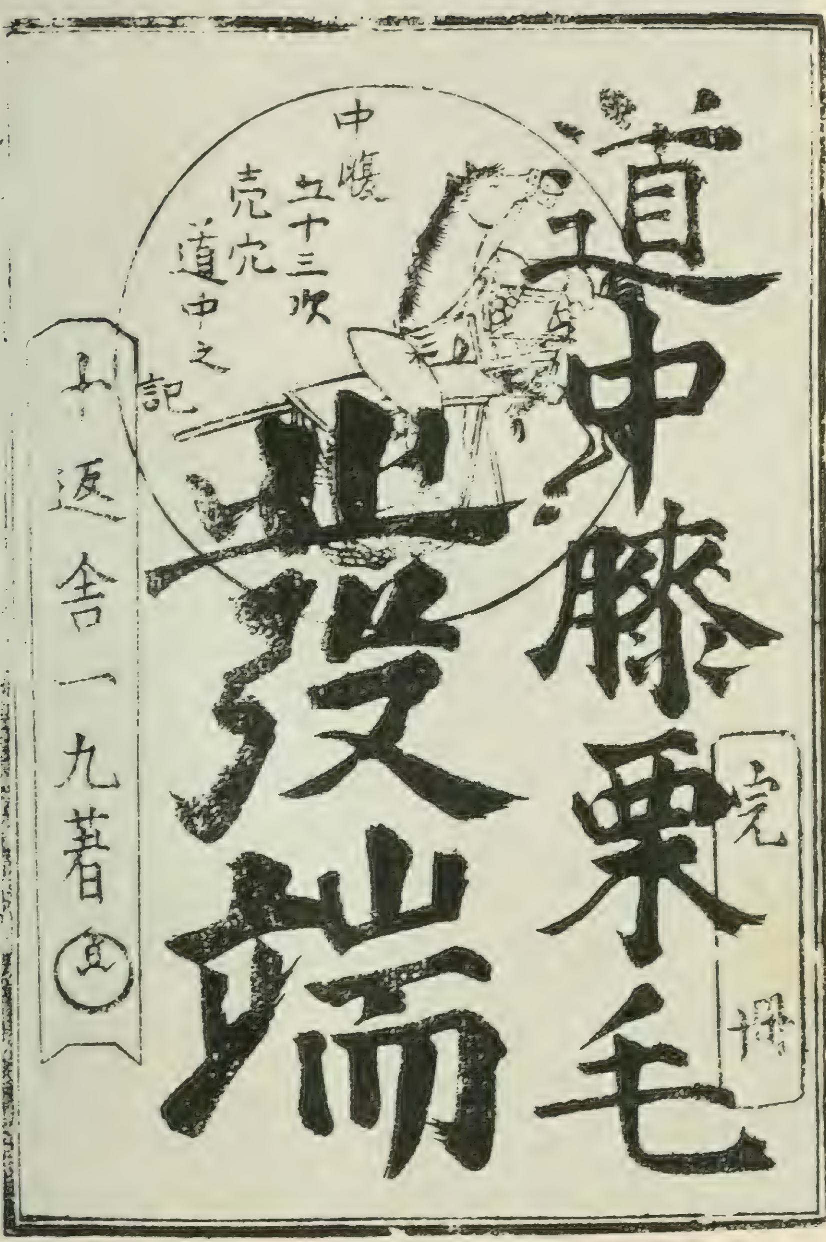
「驛路馬士唄」見かへし

物を設けて繋ぎ合はせただけである。全體としての筋は問題でなかつた。その性質をなほ一層徹せさせれば、「江戸前噺鰻」を畫いた戀川春町の畫作、「落噺驛路馬士唄」のやうになるべき筈であつた。それには熊吉、林右衛門の二人物はある。時につゞけた筋もあるが、五十三次の一次毎に一を置くだけである。「名所名物あらましにして、國々の訛、穴辯は年々の大冊に見ゆれば、此一冊は只一宿のをかしみをおとし噺につゞるのみ」と序にも斷つてゐる。その書は前編は文化十年、後編は翌十一年の出板であつた。この書の組織がすでに「膝栗毛」に負ふばかりでなく、その中の趣向もまた踏襲の外に出でなかつた。



「驛　路　馬　士　唄」





道中膝栗毛

発端

十返舎一九著

弥治郎賛

原来間漢徒

臉容串戯方

李八分著色且

随何皆不當

右

五返舎半九題



喜多八之賛

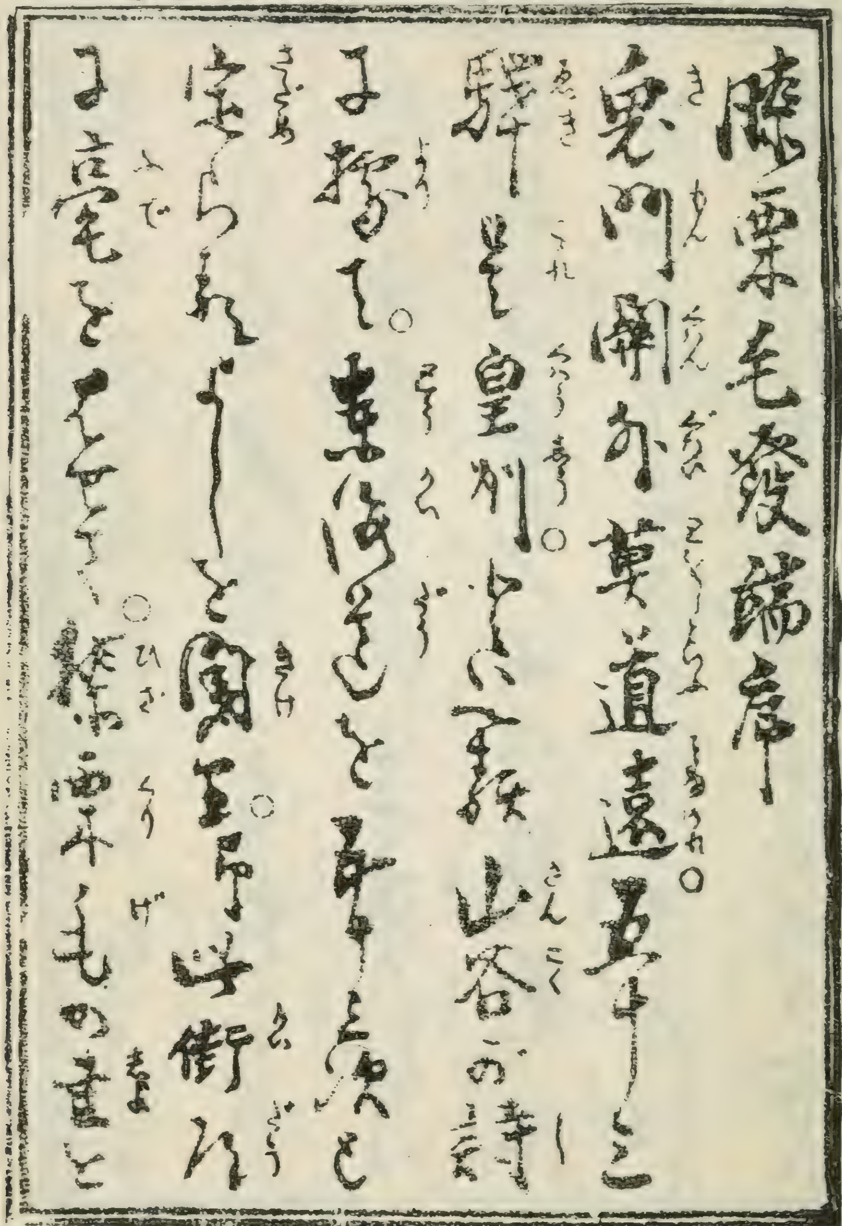
起頭是串童
掠陋主兒獄
生理李郎鬘
徂漢信步飛

右

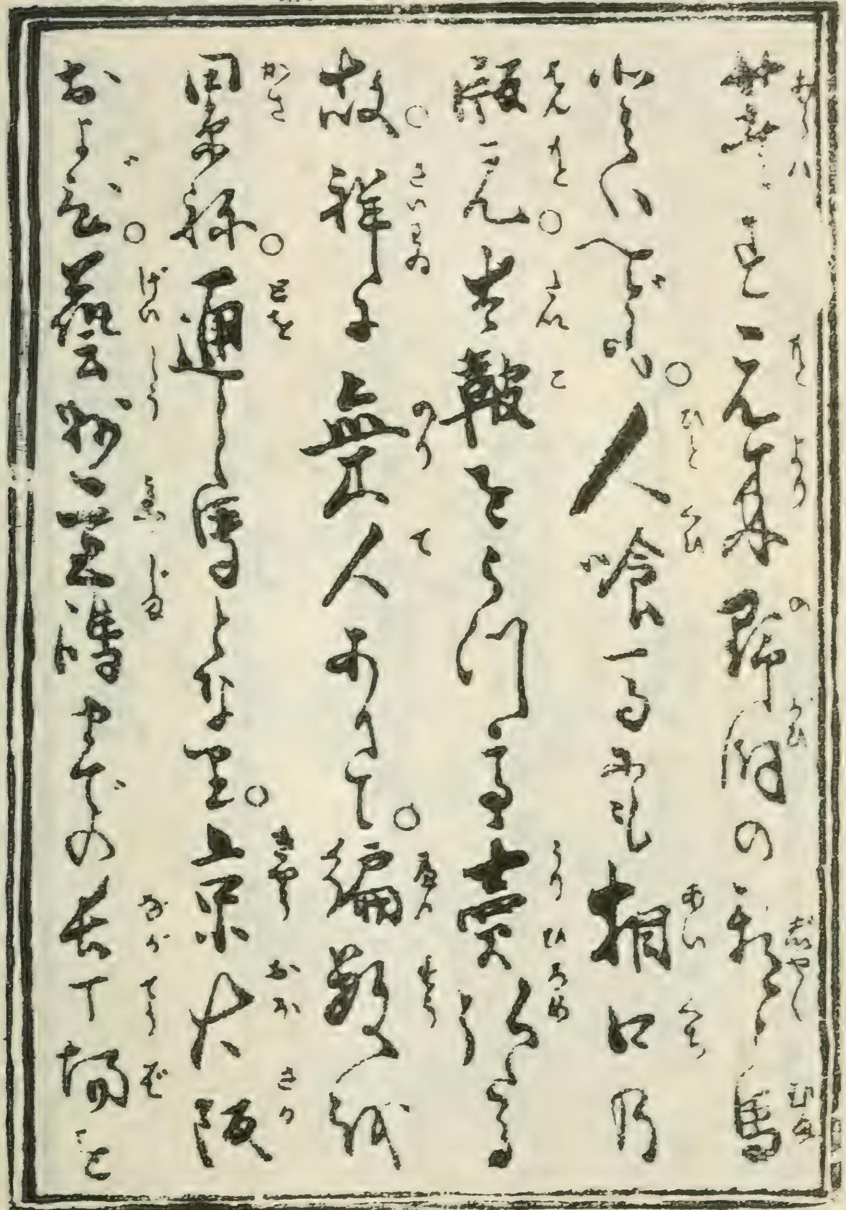
愚舎一得題



膝栗毛
發端序、
鬼門關外
莫道遠、
五十三驛
是皇州、
といへる
山谷が詩
に據て、
東海道を
五十三次
と定らる
よしを聞
り。予此
街道に毫
をはせて
膝栗毛の


膝栗毛發端序
鬼門關外莫道遠。五十三驛是皇州。といへる山谷の詩に據て。東海道を五十三次と定らるゝよしを聞り。予此街道に毫をはせて。膝栗毛の書と

書を著す元来野飼の邪々馬といへども、人喰馬にも相口の販元太鼓をうつて賣弘たる故、祥に乗人ありて、編数を累ね、通し馬となり京大阪および、藝州宮嶋までの長丁

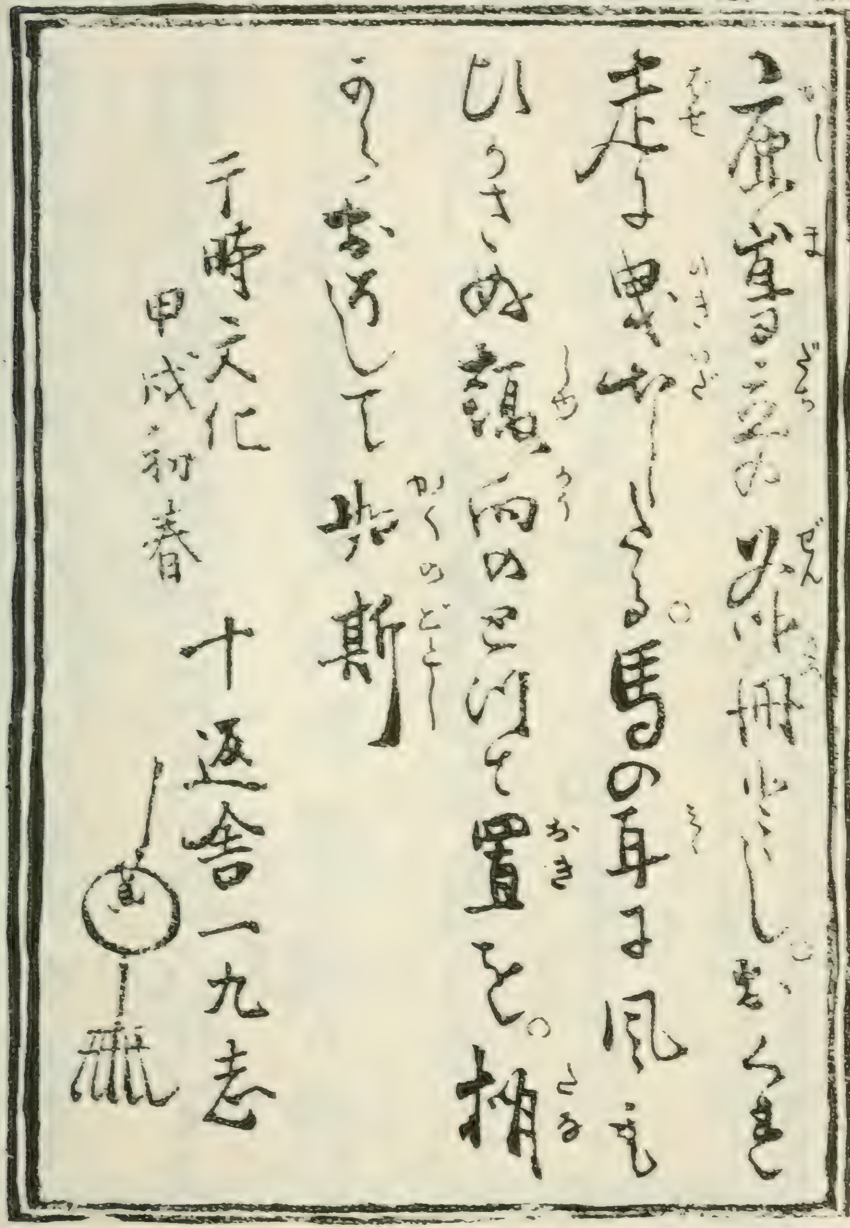


場を歴て帰がけの駄賃に、今年續五篇、岐蘇路にいたる。彌次郎兵衛喜多八の稱、異國の龍馬にひとしく千里の外に轟たれば、渠等が出所を問ふ人有依て今その起る所を著し、東都を鹿

歴て帰がけの駄賃に。今年續五篇岐蘇路にいたる。彌次郎兵衛喜多八の稱。異國の龍馬にひとしく。千里の外に轟たれば。渠等が出所を問ふ人有て今その起る所を著し。東都を

島立の前冊とし、おくれ走に曳出したる、馬の耳に風もひかさぬ趣向のとつて置を、栞からおろして如斯

干時文化
甲戌初春
十返舎
一九志



揚段　毛亜雰

累解

或人問ふ。弥治郎兵衛。喜多八らハ原何者ぞや。答曰何でもなし。弥治唯の親仁なり。喜多八ハもと駿河の江尻の産。尻喰観音の地尻にて生まるゝ因縁によつて。旅役者。花水多羅四郎が弟子として。串童となりたれど。尻癖わるく。其所に尻すはらず。尻の仕廻に尻に帆をかけて。弥治に随ひ出奔し。倶に戯気を尽すと而已。此書両士が東都神田の八丁堀に。店借し居たりし中の事を著し。終に旅行の発起とする所以の。馬鹿らしき事と。作者が寐酒の飲料に。餘計の著述をなすばかりなり――

越後奇話 氣の藥飴 全二冊 狂哥入近刻

越後なる田中日町なりし孫左衛門製と記せし氣の飴一曲を得てあまひおもろき趣向ありてかく素読して七不思議の由縁をあらはせる







近頃雪麿なるもの稗史通と題して
新古稗史の作者画工の出所事跡を
記しけるを閲しけるに悉く齟齬して實に不
学もて切なき稗史不通の書と謂べし
予が膝栗毛も八編而して終るを雪
麿が書には八續篇の出るよしをしる
すなるべし既に當年續五編に至れば
其あやまりをしるべし　一九

道中膝栗毛發端

東都　十返舎一九　編

武藏野の尾花がするゑにかゝる白雲と詠しは、むかし〳〵浦の苫屋、鴫たつ澤の夕暮に愛て、仲の町の夕景色をしらざる時の事なりし。今は井の内に鮎を汲む水道の水、長にして、土藏造の白壁建つゞき、香の物桶、明俵、破れ傘の置所迄、地主唯は通さぬ大江戸の繁昌他國の目よりは、大道に金銀も蒔ちらしあるやうにおもはれ、何でも一稼ぎと心ざして、出かけ來るもの、幾千萬の數限りもなき其中に、生國は駿州府中、栃面屋彌次郎兵衛といふもの、親の代より相應の商人にして、百二百の小判には、何時でも困らぬほどの身代なりしが、安部川町の色酒にはまり、其上旅役者華水多羅四郎が抱への鼻之助といへるに打込、この道に孝行ものとて、黄金の釜を掘出せし心地して悦び、戯氣のありたけをつくし、果は身代に迄途方もなき穴を掘明て留度なく、尻の仕舞は若衆と二人、尻に帆かけて府中の町を欠落するとて、

　借金は富士の山ほどあるゆゑに
　そこで夜逃を駿河ものかな

斯足久保の茶なることを吐ちらし、頓て江戸にきたり、神田の八丁堀に新道の小借家住居し、すこしの貯あるに任せ、江戸前の魚の美味に、豊島屋の劒菱、明樽はいくつとなく、長家の手水桶に配り、終に有金を呑なくし、是ではすまぬと鼻之助に元服させ、喜多八と名乘せ、相應の商人方へ奉公にやりしが、元來さいはじけものにて、主人の氣に入、忽ち小錢の立まはる身分となり、彌次郎は又國元にて習覺たりしあぶら繪などを書て、其日ぐらしに春米の當座買、たゝき納豆、あさりのむきみ、居ながら呼込で喰てしまへば、びた錢一文も殘らぬ身代、田舎より着つゞけの布子のそで、綿が出ても洗濯の氣を付るものもなく、是はあまりなるくらしと、近所の削り友達が打寄て、さるお屋鋪におすゑ奉公勤めし女、年かさなるを媒して、彌次郎兵衛にあてがへば、破鍋に綴蓋が出來てより、狽の口あいたやうなふくろびもふさぎてやり、諸事手健に人仕事などして、彌次郎を大事にかくる樣子、此女房の奇特なる心ざしに、彌次郎夜もはやく寢

て、随分機嫌をとりくらしけるが、うかうかとしてはや十年ばかりの星霜をふりけれども、薯蕷鰻にならず、相替らぬ貧報、されども屈詫せぬ氣性にて、売酒落にしやれちらし、近邊のなまけものどもの遊び所となりて、五合德利の寝姿ながし元に絶ず、べこ／＼三味線の音、不斷味噌桶のふたをあくる間とてはなかりける。（あるじ彌次郎兵衛はるすと見え、女ばうおふつ、ながしもとにあすのしかけしてゐると、うらだなの女ばうおちよま、ほそおびまへだれにて、たなつちりをふつて裏口よりさしのぞき、）おちよま「モシおかみさんへ、御無心ながら、醤油がすこしあらば、どうぞかしておくんなせへ。ホンニ夕べはでへぶお賑かでござりやした。わつちらが所の生酔どのを御覧じやれ。まだけへりやせんわな。此間の晩夜更て、路次の戸を破るやうに叩いたとつて、大屋さんのおかみさんが、あの口でごてへそうに小言をいひなすつたが、わつちらが所の野呂馬どのものろまなりやア、あのおかみさんもあんまりおちやアござりやせんかへ。ナント店賃の一年や二ねん溜つたとつて、一生やらずにおきやアしめへし、それをやかましくいふくらゐなら、溝板の腐つた所もどうぞするがいゝぢやアねへかへ。そして犬の



糞も、てん〴〵の内の前ばかり淩って、長家のものはなんだとおもつてゐるやら、ノウおくんさん（ト、むかうのうちのかゝしゆへ水をむけかけると、あがり口にかたあしおろして子どもにちゝをのませてゐる女ばう、やがておりて出かけ、）おくん「モシナあんまり大きな聲をして、そんなことをいひなさるな。奥のおけんつうが、今手やにいつたよ。アノおしやべりも又、大屋さんのおかみさんへいつそ追従ばかりいつて、長家のことをどうめへつたかうめへつたと、いゝ苦勞性ぢやアねへかへ。それに聞なせへ、此間からあそこの内へ來てゐた居候は、アノかみさんの妹だといふこつたが、ナニあれがおやしきに奉公してゐたもすさまじい。ちよつと見てもしれてありやす。ありやアおへねへ、ばんくるはせものだとよ。一昨日もどこか下谷のおやしきへ目見にいくとつて、つくり立て出ていつたが、ナアニよその隱居さまへ妾にいくので、支度金が七兩來たとさ。いやぢやアねへかへ。あの頬で妾も氣がつよい。わつちらもこの額のはげつてうがなくて、耳の際の痰瘤がもうちつとちひさいと、妾にでも出て支度金をとらうものを、ハ、、、、。おかみさん彌次さんはまだかへ。ヲヤヲヤ噂をいへば影がさすと、ソレ旦那



がおけへりだ(ト、ふたりはおのがうちへひつこむと、彌次郎立かへりて、)彌次「エ、この畜生めは、顧にかけておらが所の裏口に寐てゐらア。おふつ茶はわいてあるか。ふつ「ヲヤおめへ酒ばかりでおまんまはまだかへ。彌次「しれてあることさ。居酒屋へはよつたが居飯屋へはよらなんだ。ふつ「そして喜太八さんの所から、なんでたび〳〵呼にくるのだへ。彌次「おれに金をかしてくれろとつて。ふつ「ヲヤばからしいどうしたのだへ。彌次「あいつめが假宅へでもはまつたさうで、親方の金をちつとばかりつかひこんだといふこてだ。其尻がわれるとしくじるはあたりまへだが、こゝでしくじつては理屈のわりいことがあるといふ。なせだときいたら、あそこの番頭めが、此間疝氣が天窻へさしこんで、それなりにあたまがしやつきりとなつて死だといふ事だ。それに親方は年寄の癖に、美しい若いかみさんをもつて、腎虚してもうけふかあすかといふくらゐ、これも今にめでたくなるは必定、さうすると喜太八めが、その後家を請合て手にいれる仕様があるといつたがなるほどさういけば、あいつめはおかまをおこすはなしだが、そこではおいらもわりい事はなし、どうぞこゝでしくじらさねへやうにしてへものだがしかたがねへ。時に飯にしよう。何ぞ菜はねへか。ふつ「さつきのむき身殼汁さ。彌次「ナニ拔身が喰れるものか。しかしこいつもきらずとあればきづけへなしだ(ト、此内日もくれたるに、あんどうをともし、彌次郎ちやづけをくひかゝる時、としの頃五十あまりの侍、たびしやうぞくにて、)侍「イヤ卒爾ながら、駿河の府中からおざつた彌次郎兵衞殿は爰元でおざるかヤア。ふつ「ハイこつちらでござりますが、どつちからお出なさいました。侍「イヤハイ。氣遣ひなものではおざんないヤア(ト、三十ちかき女をつれてはいり、腰をかくるを見て、彌次郎きもをつぶし、)彌次「コレハ兵太左衞門さま、妹御をつれて何として御出府でござります。兵「あんとしてたア曲がない。このいんもうとめを、貴樣の所へ家入につれてまゐつたのでおざるヤア。斯ばかし申ては合點が參るまい。きさま國元にて、これなる身どもがいんもうとのお蛸と、密通をせられたといふこと、跡にて聞て腹立はいたしたれども、たんだひとりのいんもうとがこと、どうした縁でがな、貴樣でなくては添ぬと申すゆゑ、不便におもつて堪忍の胸を撫て、すいた男に添せずとおもひきはめ、わざわざめしつれて參つておざるヤア。此う

へからは、隨分といんもうとめを不便がつてやつて下さい。まづ祝つて冷酒でなりと盃をさせずに、サア〳〵はやく。おふつ「オヤ〳〵おめへさんどなたかはしらねへが、どこのくにゝかめつさうな、總體男といふものは、女に逢て二世の三世のと眞實らしくいひかけて、欺して見るは女をおとすおさだまりの口上、それをまんまことにして、駿河からわざ〳〵其男に添さうとつて、つれておこしなさるといふは、馬鹿氣きつてゐるぢやアござりませんか。又妹御も妹御、滿足な男でもあることか、わたしは仕方なしに添てはゐますけれど、色が黒くて目が三かくで、口が大きくて髭だらけで、胸先から腹ぢうに癬がべつたりで、足は年中雁瘡でざら〳〵して、イヤまた寢た時寢息の嗅いをとこ。彌次「ヤイ〳〵〳〵こいつめが、亭主を羅利骨灰にしやアがる。おふつ「オホヽヽヽ、それでも男といふものはすたらねへもので、女とさへいやア眼一でも鼻缺でも、たゞは通さぬ氣性、さだめし念比しられた人も邂逅にはありましたらうが、あんまりこのもしいをとこでもござりませんから、おまへさんがたのやうに、跡を追て來た人はひつとりもござりません。この狹い内に女房がふたり三人あつたら、大屋から根太がたまらねへ、店を明ろと追出されるでござりませう。人のしらねへうちに、はやくつれてお歸なされませ。兵「エレハイ最前からつべらこべらと、此女中よくしやべるが、其方は先何者だい。おふつ「アイわたしかへ、彌次郎兵衞の女房でござります。兵「アニ女房だい、見たくでもないヤア。これ彌次郎兵衞、お身女房をもつたか。エレエレ是非に及ばない、繩をかゝれ。國元へひいていかずに。(ト、くわいちうよりはやなはを取いだし立かゝれば、彌次郎やつきとして、)彌次「ナニ繩をかゝれたアどういふ理窟、わつちが女房をもつちア繩をかゝらにやアなりやせんかへ。とはうもねへ。モシエ鯵切を二本さしなさつたとつて、それが恐しいものでもござりやせんはな。兵「イヤお身、がいにかさ高にお出やるな。コリヤよくきけ。今度いんもうとをめしつれたは、家老中の指圖に依て罷越たぞ。其譯といふは、相役の横須賀利金太かたより、此いんもうとを婦妻に貰ひたきよし、媒をもつて申こした、身にとつては過分の聟ゆゑ、早速に同心して結納まで受をさめた所に、いんもうとめは一筋にこなたと夫婦の契約をしたうへは、たとへ親兄弟の差圖でも、ほかへ縁につ

かずこたアいやだといふ。身共魂消まいものか。ア、せず事がないと、それから共利金太かたへ使をつかはし、彌次郎兵衛と申すものといゝんもうとめが、密通をいたせし事神もつて存せず、それゆへ結納も受納いたせし所に、いんもうとめは密通の男ならでは添ないと申。しかれば妹が首を切てこなたへ持参仕らう。それにて御一分をたてられ、御了簡頼入と申遣せしに、先方も諸親類はじめ傍輩どもへ、兼てこなた妹御を妻に申受る筈と吹聴せし上は、世間體へ對し申譯のない仕合、女の首ひとつ受たとて、何の役にもたゝぬ事、此上は其元とうち果すより外分別なし。明晩阿倍河原において勝負を決せずとの返事、元來身共も覺悟のまへ、いかにもと挨拶せし所に、家老中より雙方をめされ、年來御主人の御知行を頂戴いたし居ながら、私の宿意をもつて討果さんとは、殿へ對して第一不忠、妹が兄にかくして夫を持しをしらずして、利金太に契約せしを不届とはいひがたし。いまだ婚禮もせないうちの事、互に一分のすたる事はないはず、自今以後兩人意恨を棄て、御奉公を大切に勤められよ。また妹おたことは、假初にいひ約束せし男の外、他へ縁さつくまじとは、まことに貞節のいたりと、



殿にも不便に思召れ、下地より馴染たる男に添せよとの御意、有難くお受申て、それより是まで罷越たる所、さきの男、今女房を持をるゆゑ、すご〳〵妹めをめしつれ歸りましたと、アニハイ兵五左衛門ともいはるゝ侍が、生頬さげて歸られずか。ヤアサア妹めを妻にいたせばそのとほり、いやといへば是非とも繩をかけて國元へ引つれ、家老中へ此段を披露し、一旦約せし利金太かたへおのれを渡さねば、兵五左衛門武士がたゝない。サアせずことがないと諦てなはをかゝれ。但しは踏付てめしとらずかヤア。彌次「ハア成程さうおつしやればきこえましたが、しかしそれはおめへさまの方の得手勝手、たとひこの身は三枚におろされ、切割まれて鹽辛にせらるゝ共、我を大切にして艱難辛抱する此女房を捨て、妹御を女房にもたれるものか。しかたがねへ。どうとも御勝手になせへまし（ト、かくごして兩手をうしろへまはせば、兵五左衛門たちかゝり、すでに彌次郎をいましめんとするを、女ばうおふつすがり付、）おふつ「モシモシ段々の様子を承りますれば御尤な事、去ながら現在夫が繩目にかゝり、永の道中に耻をさらし、お國でもしも命に拘ることやなどあつては、わたしの悲しさ。モシ今おまへのいひなさる



には、たとひ此身はどうなつても、難難辛抱した女房は捨られぬといひなさつたがわたしには千倍。もうなんにもいひませぬ。わたしには隙を下さりませ。あの妹御は駿河からの馴染とやれば、わたしよりはさきの事、添とおつしやるも無理ではない。サア斯わけていふ上に暇をもくれず、お侍さまの事にかゝる了簡なら、まづわたしからさきへ死ます（ト、なく／＼ながしもとのはうちやうをとつてひねくり廻すを、彌次郎おさへて、）彌次「コリヤ／＼何をする、馬鹿ものめが。おふつ「イエ／＼それでも。彌次「ハテさて、それ程に思ひ詰た事ならしかたがねへ。ちつとの間、暇を取て、親分の所へでもいつてゐてくれ。大事の女房を今さらうなどとは夢にもおもはねへ。はかねへ別れをするもみんなおれがわりいからだ（ト、さすがの彌次郎も、女房の手まへきのどくさに、かたかげへまねきて、いろ／＼にだましつすかしついひふくめ、すゞりばことりいだし三くだり半をかきてやれば、びんぼふ人のきさんじさ、きの身きたまゝくしばこにふろしきづつみひとつひつかゝへて、なみだながら、しほしほとして出てゆくと、兵五左衛門大小をとつてはふり出し、）兵「ヤレ／＼重荷をおろした。ナント彌次さんわしが仕打は妙でありませう。彌次「駿河ものゝ詞おそれ入た。いなか侍の出立、いかな後家の質屋へ見せても、百石取とは直打する男を、棒手振の芋七にして置は惜いもの。それに此又矢場のお蛸が、田舎娘の身振妙であつた。皆おれが自作の狂言でふたりを頼んで、女房に一ぱいくはせて出したも、あの陰氣ものに飽果たからの事、ひとつには急に十五両といふ金がなければならねへ事で、芋七貴様へふつと咄したら、さきさまのいふには、ソリヤさいはひの事がある。さる所の隱居が、内の腰元に手をつけ、孕した故、聟や娘の手前、しれぬ先にとて、表向いとまを出して、請人の所へ内證で預ておかれたが、どうぞ腹の子ぐるめに、金拾五兩つけて片付たいと、わしがたのまれて居るから調度よいが、しかし女房のある上へはどうもと、はなしについて、おれもその十五兩ほしい最中、たとへ腹には鬼の子がやどつてゐやうとも、金さへもつてくれば、年増女房にあきた所、こいつは妙だと此狂言をかいて、さきさまだちふたりを頼んで、まんまと上首尾にやりはやつたが、彼持參金のしろものは、いよ／＼急に來る筈か、どうだ／＼。いも七「イヤくるはずとも／＼。おめへも金が急ぐといふ、さきても腹が落さうだから一

刻もはやいがいゝと、せきこんでゐられるから、そこで今夜更てから、そつと駕でこゝへむけてくるはずにしておいた。ちよつぴり酒でも出さにやアなるめへが、内にとつたのがありやすか。彌次「ヤア／＼今夜くるのか。エヽそれは又早急な。それとしつたら、けふ髮月代でもしておかうものを。ドレちよつと髭ばかりでも剃て來よう。いも「アアコレ／＼今頃どこに髮結床があるものだ。そんなことよりは酒の支度でもするがいゝ。コレサおめへなにをまごまごする。彌次「イヤ何もしねへが、ちよつと爪でもとつておかう。いも「ナニ埒もねへ、そんなことはしねへでもいいじやアねへか。彌次「イヤそれでも十本みんなとらずとも、せめて二本の爪ばかりは。いも「ハヽヽヽおきやアがれ。大わらひだ（ト、此内、にはかにそこらとりかたづけるやら、火ばちにけしずみをおこしかけ、ねずみいらずから五合とくりをとりいだし、まづまちうけに、しらふではをかしいと、三人はなつきあはせ、のみかけてゐる折から、おもて口にいきづゑの音カッチ／＼。）いも「ヲヤもう來たさうな（ト、かどの戸をそつとあけてとんで出、）ヲッとこゝだここだ。駕の衆御大儀／＼。コレ一ぱいのんでござれ（ト、有合のはした錢をやつて、かごの者をさつそく追かへし、のつて來た女の手をとつてともなひはいり、）いも「サア嫁御のお出だ。お盃／＼。彌次「コレハいかいおせわ。いも「サアお壺さんそけへすわりなせへ。そこでおめへからひとつのんで、御亭主へさしなせへ。お蛸お酌／＼。コリヤア四海浪しづかにといひてへが謠はしらず、あした來て潮來でもやらかしませう（ト、此内、だんだんさかづきもすみ夜もふけたるに、）おたこ「いも七さん、わつちらアもうおひらきにいたしやせう。いも「ソレ／＼、此狹いうちに長居はおそれだ。コレおつぼさん今夜はゆるりと休なせへ。又あしたお目にかゝらう（ト、いとまごひし、おたこもろ共立出れば、彌次郎おくるふりしておもてにたち出で、）彌次「コレいも七、持參金のさたがないがどうする。いも「そこはぬからねへの　今のさきかごから出た時そつときいたら、あしたの晝時分隱居のはうから、くる筈に間違はないといふことだ。ソリヤノ請合きづけへなしに、今夜はしつかり樂みなせへ（ト、彌次郎がせなかをひとつくらはせて出てゆく。彌次郎兵衞かどぐちをしめて、）彌次「コリヤア寒くなつた。時に茶漬でもくはねへか。おつぼ「イヽエよろしうござります。彌次「そんならもうねようか。おつぼ「おとこを取りませう。彌次「ヲイ

ヲイおれが出してやらう（ト、戸だなよりやぶれふとんにかいまきなどとりいだす所に、おもての戸をトン〱〱。）彌次「エエ今頃にだれだ〱（ト、いひつゝもさては今おひ出した女ばう、此事をかぎつけてやふりこんできたるならんか、たゞしはおやぶんいさくさをいひにきたるか、何にもせよ見つけられてはめんだうなりと、今の女ばうにむかひ小ごゑにて、）彌次「コレ〱ひよんなことがある。此長屋の作法で長屋のものが娵をとると、長屋中の者が來て、其娵の尻をさすつて見るが定法。今そなたの來たことをどうしてしつてやら、それでさすりに來をつたに違ひはない。そなたは懐妊のよし。同じくはまだ今宵は來ませぬといつて見せたくねへが、どうであらう。おつぼ「ヲヤヲヤわたしはいやだのう。殊にたゞの身ではなし、しらないお人に此おいどを撫させる事はいやだねへ。彌次「そんならどこぞへかくしてへものだが、此通二階はなし。ヲットあるぞ〱。窮屈ながらちつとの間、こゝへ〱（ト、賣のこしのあき半櫃あるをさいはひ、ふたをあけてかのおつぼを入れ、もとのごとくふたしておき、やがておもてのかけがねをはづし、戸をあくれば、あんにさうゐして、北八せきこんでとびこめば、）彌次「ヤア北八か。エ、今時分にどうして來た。北八「イヤ



もう〳〵内に落着てゐられやせぬ。此間からおめへに頼んだ十五兩の金の事翌日は店おろしにかゝるゆゑ、ぜひぜひあすの朝まで、わつちが遣ひ込だ穴を埋ておかねばなりやせぬ。それが出來ねへと忽百日の說法屁ひとつ。おめへのいふには隨分心當りがあるから、讃談してやらうといひなさつたによつて、じつと待てゐたが、今もつてさたがないから、あんまり氣づけへさに、寢所からそつとぬけて來やしたが、いよ〳〵そのかねは出來やせうかね。彌次「しれたことよ。あしたの晝までにはきつと出かしてやる。そこへいつちやア男だ。なんぼこんなにしみつたれなくらしで居ても、さあといへば十兩や十五兩の目くさりがね、工面せうといつたがせうかにやア、ちげへはねへから落着て居さつし。北「そいつはありがてへ。其かはり百倍にして此恩を返しやす。此間からいふ通り、番頭はなくなる、親かたも今にめでたくなりやすから、跡で後家御を手に入さへすりや、すぐにわつちが旦那さま、どうか芝居の敵やくがいふやうなこつたが、是ばつかりは違なし。極々内々の所はもう出來かゝつてゐやすから、今が大事の所、爰で拾五兩のかねがねへと、しくじつて虻もとらず蜂もとらずだから、



どうぞおたのみ申やす。彌次「おれも手めへをおもふは身をおもふだから、其咄のとほりにいきさへすると互ひの爲だ。あすの晝時分には耳を揃へて拾五兩、きつと間にあはせてやるぞ（ト、此はなしのうち、はんびつのふたを内よりおしあげて、）おつぼ「モシ〳〵どうぞして下さりませ。腹がいたくてどうやら產さうになりました。アヽくるしい〳〵（ト、むしやうにうめき出せば、彌次郎大きにうろたへ、）彌次「エヽそいつはこまつたものだ。コレ〳〵きた八、手めへ子を產女の手傳をした事はねへか。北「ナニとんだことを。イヤ、かみさんがいつの間に孕んだのだ。さつぱりしらなんだ。隣のかみさんでもおこして來てたのむがいい。彌次「イヤ〳〵ちつと譯があつて、隣へもさたなしにこつそりとやりてへ。マアそこへ湯でもわかしてくれ。北「それは承知だが、なぜまたあんな窮屈な所へかみさんを入れておいたのだ。サア〳〵出なせへ〳〵（ト、はんびつの中から女の手をひつぱり、引き出さんとしけるに、おつぼきた八を見て、）おつぼ「ヤアおまへか嬉しや〳〵。わしが產月を心元なさに、こゝまで尋ねて來て下さりましたか（ト、しがみつくに、北八はびつくりしたかほ、彌次郎ふしんはれず。）彌次「コリヤ北八、手めへこの女とちかづきか。おつぼ「ハイわたしは此きた八さまのござる内に、おまんまたきをいたしてをりましたもの。いやだといふを無理無體、きた八さまに口說れまして、ツイ逢まして、かうした身になりました故、お隙をもらひ親もとへかへりましても、物堅い親、うちへは入ず、北八さまのもらひ分にて、親の手前を引とられ、餘所の內に預られてをりましたが、此事親方さまの耳に入らぬうち、わたしに拾五兩の金をつけて、外へ片付たいとの相談、わたしは迚も斯なるからは、いつ迄もはなれぬ氣でゐましたけれど、それではあなたのお爲になるまいと、得心づくでおもひきり、こゝろにそまぬこゝへ嫁入して來ましたのでござります（ト、くるしい中に、なみだ半分、いさいのはなし彌次郎きもをつぶし、）彌次「ヤアヤアそんなら親方のうちの引負、拾五兩なくては濟れぬといつたは、引負ではなくて、この女を片付代の十五兩か。北「さやう〳〵。彌次「エヽおきやアがれ、このべらぼうやらうめ。よくおれをとんだめにあはせやアがつた。北「ナニとんだめにあふものか。かねさへからねへけりやアいゝじやアねへかへ。彌次「いゝとはなんのことだ。コレ其金ゆゑに、おらア女房をさらけ出してしま

つて、今夜からひとりで寢にヤアならねへは。北「そのかはりまた若い女房をゆづつたから申分はあるめへ。彌次「たはことつくしやアがれ。あの女のつらがふた目とも見られるつらか。いめへましいやらうめだ（ト、まつくろになつてはらをたて、ひとつふたついひ募りて、彌次郎堪へず、北八にぶつてかゝる。北八もやつきとなつてからかつてゐるうち、おつぼはしきりにむしがかぶると見え、ウン／＼うなつて苦しがるをもかまはず、こなたにはやみくもと、つかみあうてゐる中、夜あけてなかうどの芋七、しやうばい物のかひ出しにゆくとて、このうちへおとづれたるが、何やらうちにはばつたくさ音して女のうめくこゑもきこゆるにぞ、いも七これはと、そとより戸をあけんとするにあかず、たゝいてもあけざれば、やにはにそとよりひつぱづしてはいると、彌次郎見るより、）彌次「ヤアいも七か、よくもよくも此やらうめと馴合て、おれをはめたな／＼、合點しねへぞ。すまねへぞすまねへぞ。いも「ナニはめたとは何の事だ。彌次「なんの事だもすさまじい。ふてへやつらだ（ト、又いも七にとつてかかるを、いも七はらをたて、小ぢからのあるにまかせ、彌次郎をねぢふせる。北八とりさへてもきかず、ごつたかへしてたばこぼんをふみくだくやら、どびんの茶をぶちまけるやら、二人やたらみつちやとさわぎたつるもの音に、きんじよとなりの人々おひ／＼かけつけ、かれこれととりさへるうち、おつぼはそこらをのた打まはりくるしみたるが、つひに血をあげて目をまはしたふれる。）北八「ヤアヤアおつぼどうした／＼。コレ芋來てくれ。可愛さうにどうかしたさうな。いも「コリヤ目をまはしたのだ。コレコレ水だ／＼。北「おつぼヤアイ／＼。となりのていしゆ「おつぼさまとはだれの事だ。モシ爰のかみさまはへ。いも「コレこの目をまはしたがかみさま。となり「ハア彌次さん、おめへのおかみさまか。彌次「アイわつちが女房のやうでもあり、又ないやうでもあり。となり「ハアきこえた。北八さまのかみさまか。北「アイわつちのかゝあのやうでもあり、又ないやうでもあり。となり「マアなんにしろ、どつちのだかしれない。おかみさまヤアイヤアイ。いも「コリヤつめたくなつた。もういけねへ。北「エヽいぢらしいことをした。彌次さん醫者をよびにやつてくんなせへな。となり「わたしが元宅さんでも呼で來てあげませうか。彌次「その序にお寺へもいつてもらひてへな（ト、此内いしやがくるやら、灸をするやら、よつてたかつてさま／＼にして見れども、むさんやおつぼはかほ色かはり、さつぱりいきはたえたるやうすに、北八おもはずなきい

だし、こかはいや只の身ではなし、今のさわぎに血があがつたのだらう。しかたがねへ。」時に彌次さんおめへも腹がたつたらうが、どうぞ了簡してこの取始末をしてくんなせへな。彌次「おれをばいろ〳〵な目にあはせる。北「なんば勘當同然にした女でも、斯なつては親の所へもしらせずばなるめへ。誰をやつたものだらう。いも「ソリヤアわしでもいつてやらうが、せんてへ是はどういふ譯かさつぱりわからねへ。おらが新道の肴やに預つてゐた女、餘所の隱居の妾だが、片付たい世話してくれろと賴れたから、こゝの内へ仲人したが、今きけばおめへの女房とはどうした理屈だ。北「マア〳〵あとでわかる。其肴屋といふはおいらが親かたの所の出入、預けておいたはやつぱりおいら。マアこれよりか、はやく親の所へしらせて



へ。それもその肴屋までしらせると、親の内へあそこからしらせてくれるから「そんならいつて來やせう〳〵ト、いも七は出てゆく。近所の人々手つだひて、そこらとりかたづけ、めい〳〵、やみをのべ、あいさつして、皆々ひとまづかへると「北「何にしろわつちはちよつといつて來よう。ゆうべそつと出た儘だから、おとはいいやうにたのみます〳〵、かみいれから金二歩出して彌次郎に渡し、出かけんとする所

へ傍輩の與九八來り、」「ヲヤ／＼北八どの爰にか。親かたがとう／＼今朝がた御臨終なされた。北「さうだらうとも。與九「それについておかみさまがおつしやるには、北八に暇をくれる。あれは平生心ざしのみだらなもの。旦那どのがしなれたら猶の事、女の主と侮つて、どのやうな不埒をせまいものでもないから、さう／＼請人の所へ引わたしてやれとの事。それはと傍からさま／＼取成をいつて見たが、どうでも貴樣はかみさまへ、なんぞいやらしい事でもいつたと見える。さうかして、日頃からいけすかねへ頬の皮の厚い男、顔を見るもいやだと、きさまの事をわるくいつて、七里潔敗いやだ／＼といつてござるからしかたがねへ。モシ彌次郎兵衞さまはあなたか。只今お聞のとほりでござりますから、北八どのは是でお



わたし申ます。彌次「承知いたしました。コレきた八あのとほりだが、それでいいか。北「イヤもうよくてもわるくてもしかたがねへ。しかし其筈ではねへつもりだに。彌次「くれ／＼もいめへましい業ざらしな野郎めだ。いつその事何も角もぶちまけようか。北「アヽコレコレ誤つた。をがむ／＼。與九「また折を見て訴訟のしかたもあらう。なんにしろけふは内が取込でゐるから、又その

うちに（ト、あいさつそこ〳〵にして與九八は出てゆくと、引ちがへていも七立かへり、）「サア〳〵親元へはしらせて來たが、是から買ものをせずはなるめへ。北「御苦勞御苦勞。迚ものことにわつちといつしよに來てくんねへ（ト、彌次郎へわたした二歩をとつて、いも七をひきつれ、はやをけその外の入用の品をとゝのへてくると、）彌次「ヲヤ手前も氣のきかねへ。序に酒もかつてくればいゝ。北「それをぬかるものか（ト、はやをけの中から、一升徳利にまぐろのさしみを取出し、まづのみかけてゐる所へ、あひながやのものだん〳〵大さかもりとなり、酒もあとからかひたして、のこらずなま醉となり卷舌にて、）いも「サア〳〵この元氣で佛を桶へさらけ込でしまはう。時に寺はどこだ。彌次「馬鹿アいへ。おいらが内に寺があつてたまるものか。北「そいつはつまらねへ。彌次「かまうこたアねへ。なんでも持出しさへすりやア、どこかしら寺があるだらう。北「それだとつて、葬禮をかついで寺町を呼つてあるいたとつて、かひてはあるめへ。いも「イヤそれもおもしろからう。わしは寺町へばかりあきなひにゆくが、呼やうが町とはちがひやす。マア今頃のしろものなら、死でいこ〳〵（新大根）ゆうれんさう（菠薐草）や、ばけぎ（分葱）や〳〵、卒都婆の干物に、石塔のたちうりなぞはよく賣るから、葬禮も買人がありませう。ハヽヽヽ。北「かはいさうに酒落所ぢやアねへ。サア〳〵はやく片付てくんなせへ（ト、たま醉大ぜい寄てたかつて、むだやらしやれやら出はうだいな事しやべりながら、佛ををけの中へをさめて香花を手向ける所へ、おつぼのてゝおや涙をふき〳〵たづね來りて、）「アイゆるさつしやりまし。わしやハアおつぼの親でござらア。北「是はようこそ先こちらへ。親「ヤレヤレ憂ことをしをりました。わしやハア田舎もんでござるから、義者ばつてむけちなくばい出しましたが、こんなになるべいたアおもひをりませなんだ。ドレ〳〵むすめはどこに居をります。ちよつくり頰サア見せてくれさつしやりまし。彌次「エ、おめへもうちつとはやく來なさればいゝに、モウ桶の中へさらけこんでしまつたものを、のう芋七。いも「イヤしかし、とつさんの身では見たいは道理々々、道理よ狐の子ぢやもののをとけつかるハヽヽヽ。さらばお開帳致さうか（ト、棺桶の繩をとき、ふたをあけて見すれば、おやぢめがねをかけ、つく〴〵と見て、）親「コリヤハアちがつた。アもし。彌次「ナニちがつたア。何がちがひやした。親「佛がちがひ申た。此佛にやア首がござらない。そしてわしの娘

は女でござるに、コリヤハア男の死人(しにん)と見え申て、胸髭(むなひげ)がはえてござらア。い〻「ナニ首(くび)がないとは、ドレ／＼ほんにコリヤア首がねへ。彌次(やじ)さんおめへどうした。彌次「ナニおいらがしるものか。そこらにやアおちてはゐねへかへ。親「ヤレハア此衆(このしう)はとんだ人達だ。サアうらが娘はどうさつせへた。しんだのなんのと空(うそ)ばつかしつかつしやる。サア娘を爰(こゝ)へ出しなさろ。彌次「出(だ)せとつて外(ほか)にやアねへ。とはうもねへおやぢめだ。親「コリヤハアすまない／＼。北「なる程とつさんのいふのは尤(もつとも)だ。何(なん)にしろ首がなくちやアつまらねへ。親「インネ／＼田舎(ゐなか)もんでこそあれ、うら頭(かしら)百姓もしたもんだ。お家主(いへぬし)どのへことわつて、ゐずい目(め)にあはせてくれべい(ト、だん／＼こわ高になり、やかましくいふゆゑ、そばに居あはせしひと／″＼、いろ／＼なだめても一向きゝいれず、大やさまがこのやうすをゐさいにきいてかけつけ、) 大や「さて／＼今聞(きゝ)ましたが大變なことでござる。何(なに)にいたせ、しんだ者の首のないといふは(ト、はやをけの内をのぞき見て、)「イヤ／＼親父(おやぢ)どの、きづかひさつしやるな。首(くび)はあります。親「あるとはどこにあります。大や「コリヤ佛(ほとけ)を逆(さか)さまに入(いれ)たのでござる。ハヽヽヽヽ。親「ハアそれで落着(おちつき)ました。コリヤどなたも御(ご)太儀(たいぎ)でござる(ト、これより夜にいりてそうれいをなし、あとねんごろに弔らひけるが、さてしもきた八は、せつかくしんぼうせし親かたの内を出されて、又彌次郎のかたに居さふらふとなり、たがひにつまらぬ身のうへにあきはて、いつその事まんなほしにふたりづれで出かけまいかとのさうだんをなし、友だちにたのみて金子をかりうけ、先づそのとしはめでたき春をむかへて、きさらぎのなかばより、いせさんぐうとおもひたち、東海道へと出かける。)

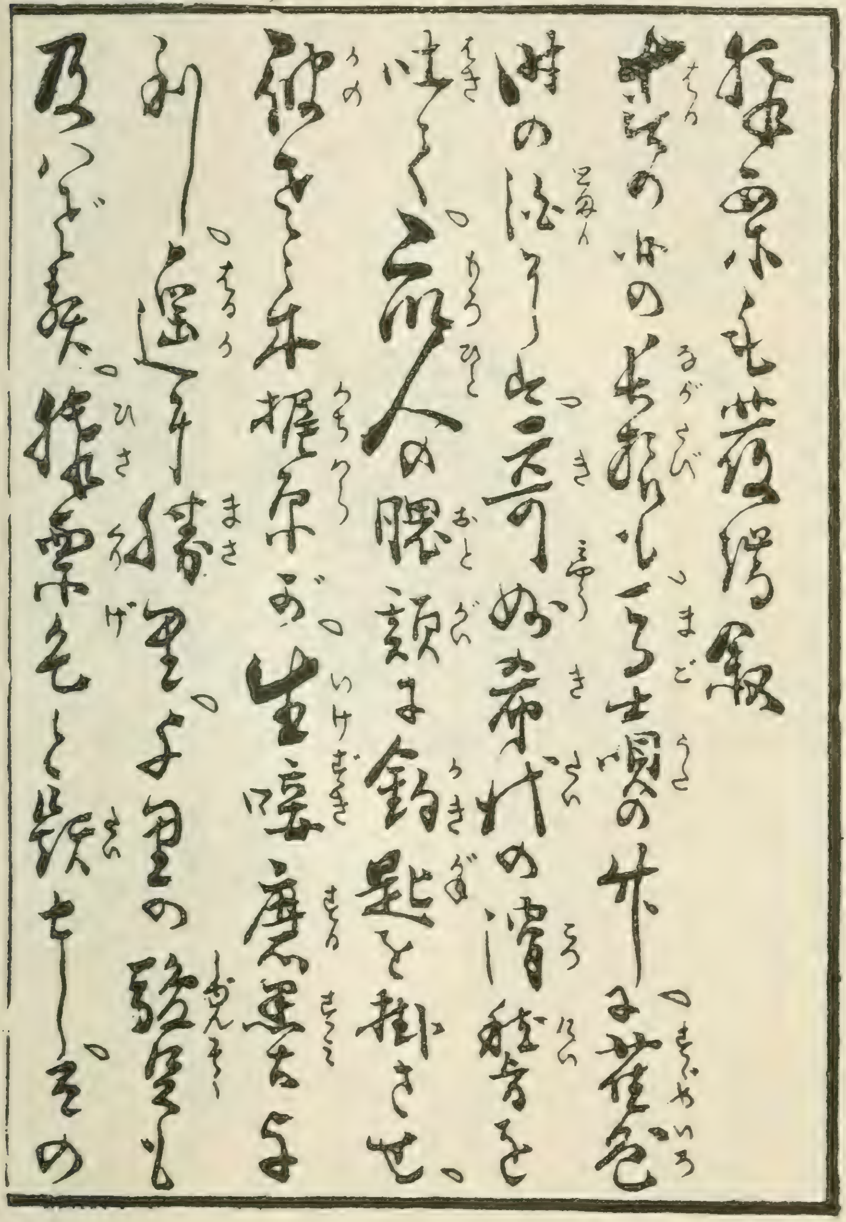
かしまだちの狂歌(きやうか)

難波江のよしあしゝとも旅なれば
おもひたつ日を吉日(きちにち)とせん

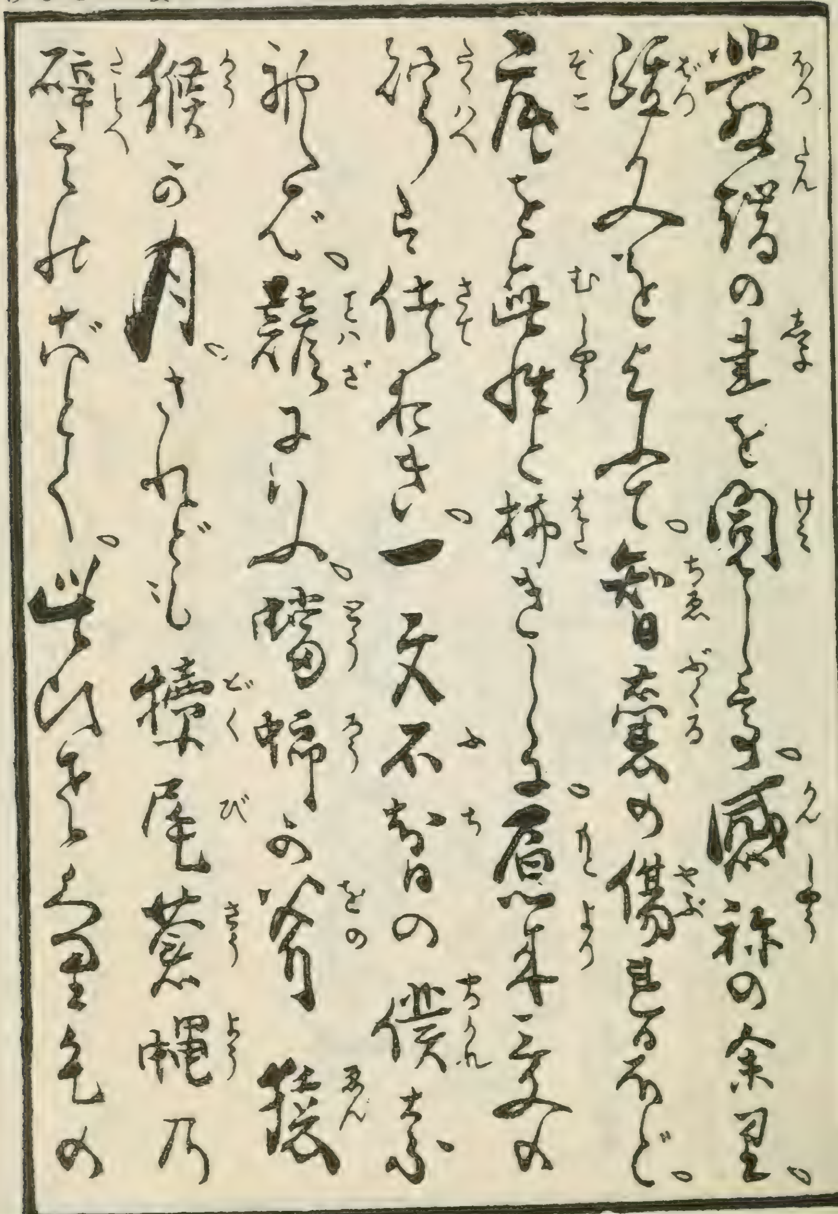
道中膝栗毛發端大尾

膝栗毛發端叙

春の日の長旅も、馬士唄の竹に雀色時の泊には、奇妙希代の滑稽を吐て衆人の腮顔に釣匙を掛させ彼佐々木梶原が、生唼磨墨より遙かに勝り、千里の駿足も及ばざる膝栗毛と題せし、その



發端の書を閲して感稱の餘り、跋文を乞ふて智嚢の傷れるほど底を無性と拂きしに、原來三文の貯は僭おき一文不智の僕なれば、謗にいふ蟷螂が斧猿猴が月、されども犢尾蒼蠅の譬のごとく、此ひざくりげ



の尻尾に執付(とりつき)、唯意氣なりをひつかく事しかり。
小船街
旭亭一桃

尾(お)を尾(しつぽ)に執付(とりつき)、唯意氣(いき)なりをひつかく事しかり。
小船街
旭亭一桃

岐蘇街道 膝栗毛 五編 十返舎戯編
全二冊出来

此書ハ洗馬加納驛より太田十三峠を至て終る
当年ハ作者いよ〳〵河ての内月析〳〵渡の川留像見ん宿の焼

傒喧花街山獄の茶和の写遠ひ大人よ白里の夜
猪のことし穴へと落る顔向ておきを棚ちうて
かくのおかし

書林

大阪心斎橋筋唐物町
河内屋太助

江都馬喰町二丁目
森屋治兵衛

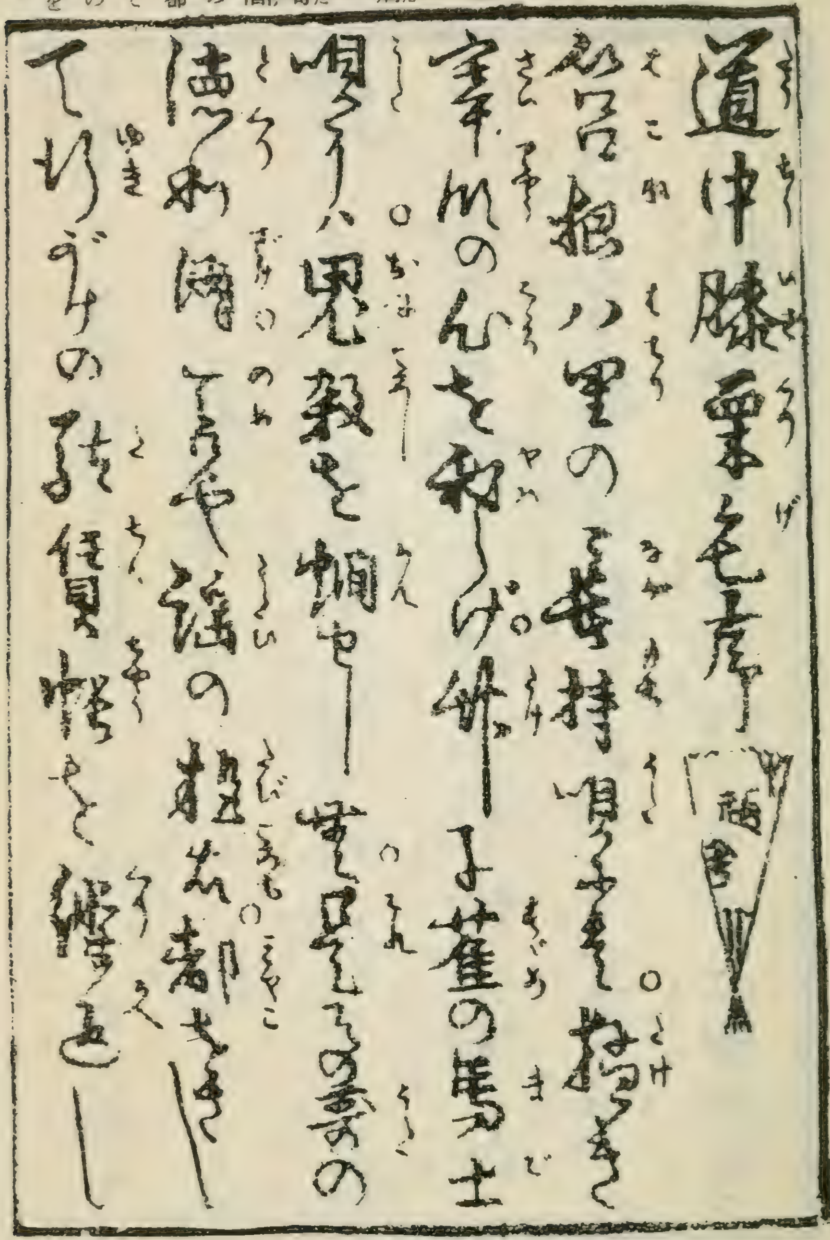
同 同所
西村屋與八

東海道中膝栗毛初編

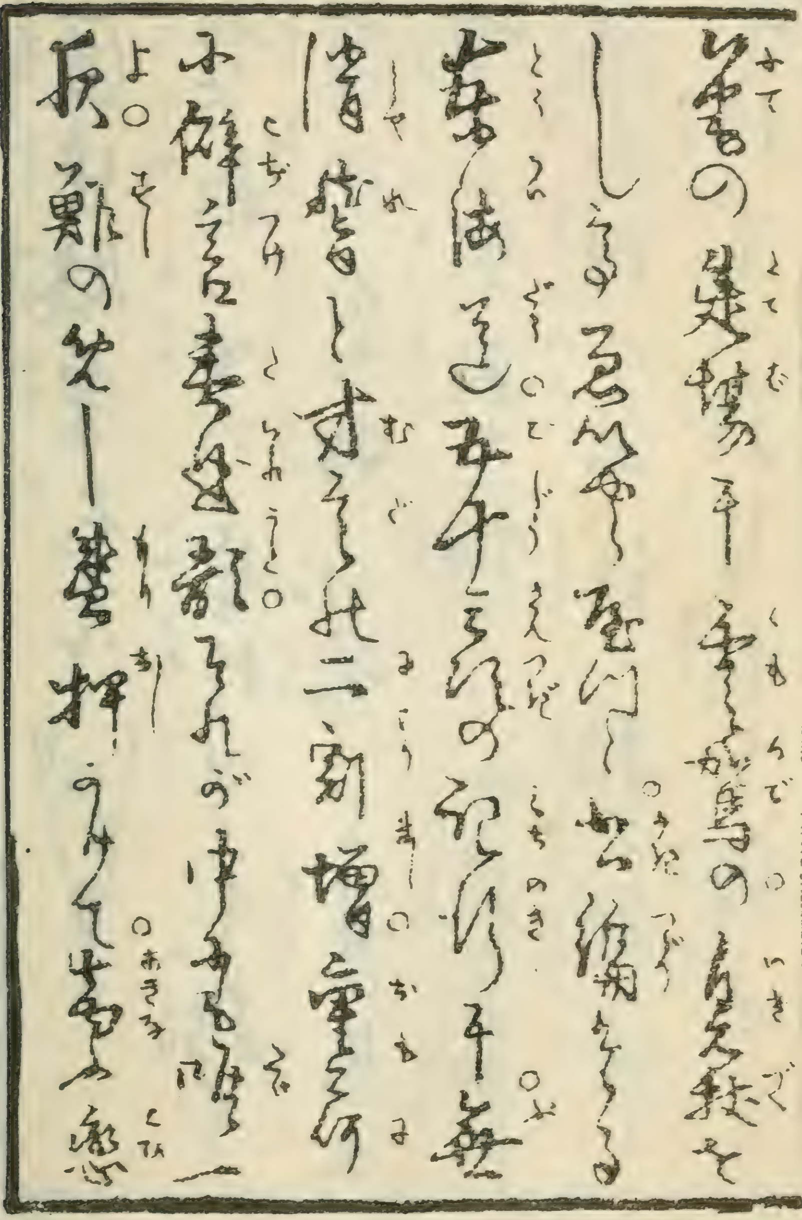
全

道中膝栗毛序

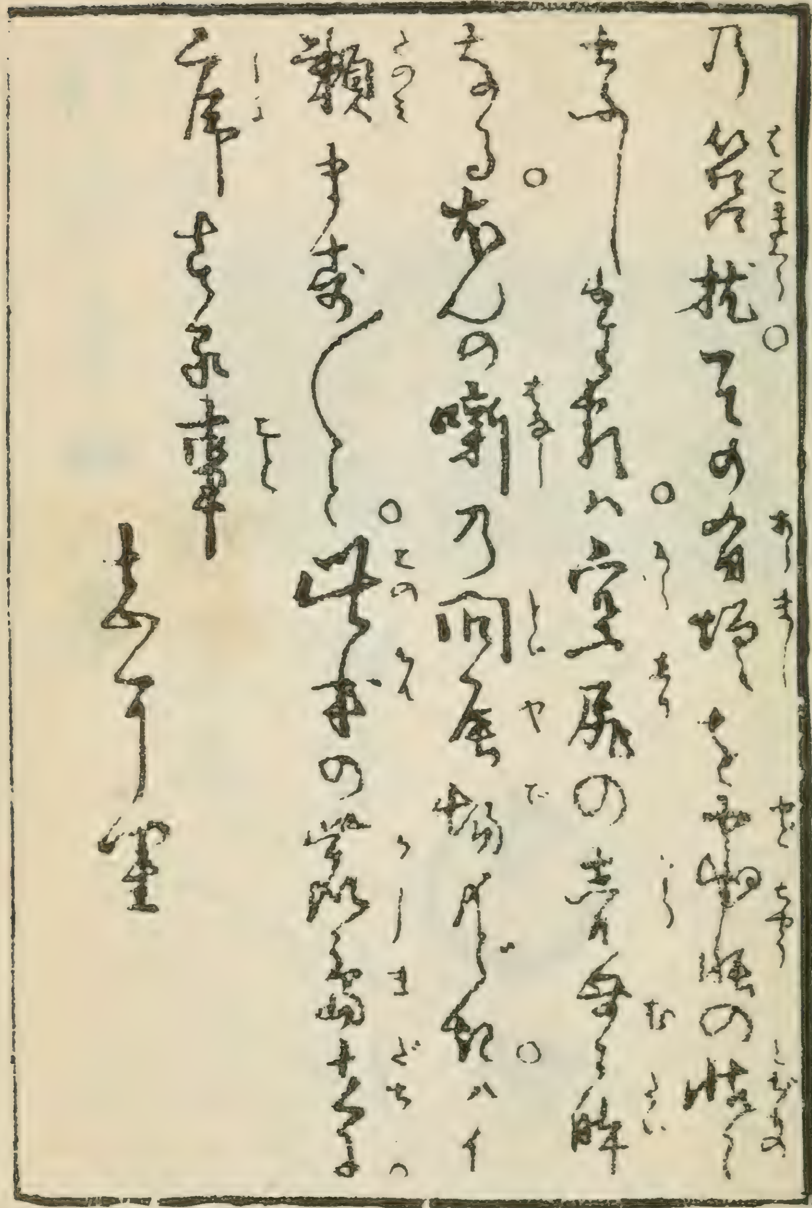
箱根八里の長持唄には、猛き宰領の心を和らげ、竹に雀の馬士唄には、鬼殺を燗せしむ。是その哥の徳利酒呑や謡の旅衣、都をさして行がけの駄賃幌を繰返し、



筆の建場に雲駕の息杖をしてえいやらやつと書編たる東海道、五十三次の記行に無滑稽と方言の二割増、重荷に俳言夷曲歌、それが中にも唯一夜、鮓のめし盛押かけて、商ふ戀の



筥枕、その有財を宿帳の帖となしたるは、空尻の売無躰なる、ほんの断の問屋場もどき、ハイ頼ますノ＼と此本の鹿島立に序する事しかり



維時
享和二載
壬戌孟陽
吉旦
十返舎
一九誌

維時享和二載
壬戌孟陽吉旦
十返舎一九誌



道中膝栗毛凡例

○此書ハすべて東海道往来の記上貴人高位の通行より下賤の物其外本陣旅籠泊雲助馬士の俗調を写て悉く弘著を

○驛々風土の佳勝山川の秀異ハあながち諸家乃道中記に精しけれバ此に除く所々の名物等物等に至りてハ聊其滑稽詞を加へ記さ

○波伴女偲偲の風流悠々の遊戯その有無く
を絶ずけ

○巻中には肴さく裏曲晋は挑設地にも専ら汲。
故に晒肴は気へ。予が風調景茶化肴倖するを以て。
入金を留て出さば却て其料を著鈸するは。
是孫を取より德を挑て慚を愧しく思はざる予が
性質仕方がなし

○此編は東都品川驛より猶く豊根澤

に至りて畢る。其餘草稿出来あれども
帖数乃多きを厭ひて。飯盛の跋を全に譲て。
遂禁して後編に著んと欲すれど幾年が
戯作の帖挙従に満尾に至らず是何分の怪
撰著旨略なりく書肆の私言一言に〳〵

凡例終

卷中書目

聞長持唄而懐女房所謂之話

一寸加礼坊主過而貪波縄話

加馬嗚鼻自周亜如在話

寄引鷹對叢童之話

小田原泊切斷之話

箱根山中洒落萬文話

上件



浮世道中膝栗毛初篇

發語

十偏舎一九著

富貴自在冥加あれとや營たてし門の松風、琴に通ふ春の日の麗さ、げにや大道は髮のごとしと、毛すぢ程もゆるがぬ御代のためしには、鳥が鳴吾妻錦繪に、鎧武者の美名を殘し、弓も木太刀も額にして、千早振神の廣前にをさまれる、豐津國のいさをしは、堯舜のいにしへ延喜のむかしも、目擊見る心地になん。いざや此とき國々の名山勝地をも巡見して、月代にぬる聖代の御德を、藥鑵あたまの茶呑ばなしに貯へんものをと、玉くしげふたりの友どちいざなひつれて、山鳥の尾の長旅なれば、臍のあたりに打がへのかねをあたゝめ、花のお江戸を立出るは、神田八丁堀邊に獨住の彌次郎兵衞といふのふらくもの、食客の北八もろとも、朽木草鞋の足もと輕く、千里膏のたくはへは何貝となく、はまぐりのむきみしぼりに對のゆかたを吹おくる、神風や伊勢參宮より、足引のやまとめぐりして、花の都に梅の浪花へと心ざして出行ほどに、はやくも高なわの町に來かゝり、川柳點の前句集をおもひいだせば、

高なわへ來て忘れたることばかり

と、よみたれ共我々は何ひとつ心がゝりの事もなく、獨身のきさんじは、鼠の店賃いだすも費と、身上のこらずふろしき包となしたるも心やすし。去ながら旦那寺の佛餉袋を和らかにつめたれば、外に百銅地腹をきつて、往來の切手をもらひ、大屋へ古借を濟したかはり、御關所の手形をうけとる。ふめるものは、見たふしやへさづけて金にかへ、がらくた物は、店うけにしよはせて禮をうけ、漬菜のおもしとすみかき庖丁は隣へのこし、ちぎれたれども、繩すだれと油壷はむかうへゆづりて、なにひとつ取のこしたるものもなく、まだも心がかりは、酒屋と米屋の拂をせず、だしぬけにしたればさぞやうらみん。きのどくながらも、是もふるきうたに、

さきの世にかたりをなすか今かすか
いづれむくいのありとおもへば

と打わらひつゝ、彌次郎兵衞また狂詩を口ずさむ。

雖非亡命可奈何
借金不報拂尻過

夫居本貫掛乞衆
常是川句成干戈

と打興じて、ほどなく品川へつく。
彌次郎兵衞、
海邊をばなどしな川といふやらんと、難じたる上の句に、北八とりあへず、

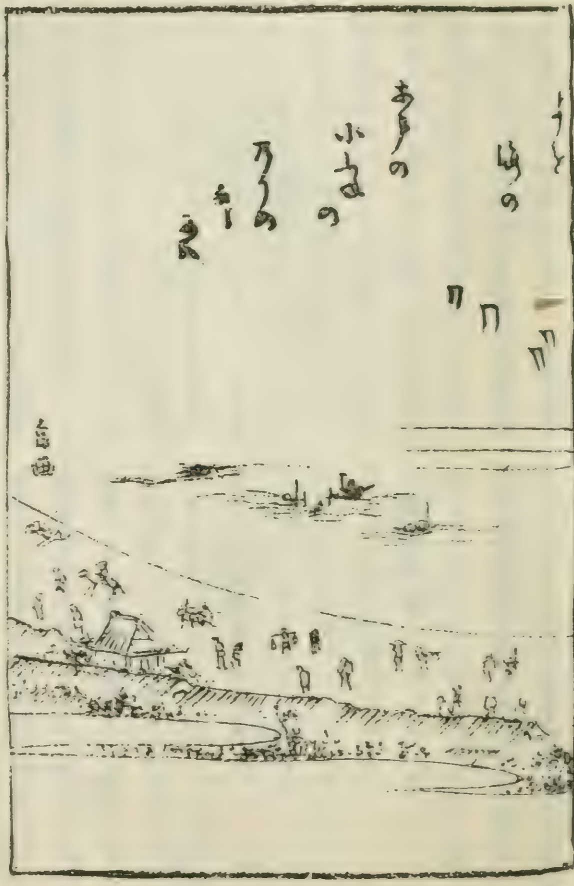
されば さみづの あるに まかせて
いと おもしろく 歩行とも なしに、鈴が森に至り、彌次郎兵衞、
おそろしや罪ある人のくびだまにつけたる名なれ鈴がもりとは

大森といへるは、麥藁ざいくの名物にて、家ごとに商ふ。
飯にたくむぎわらざいく買たまへこれは子どもをすかし屁のため

それより六郷の渉をこえて、萬年屋にて支度せんと腰をかける。萬年屋のたんな「おはやうございやす。彌次郎兵衞「二ぜんたのみます。北八「コッ彌次さん見なせへ。今の女の尻は、去年までは柳で居たつけが、もう臼になつたア。どうでも杵にこづかれると見える。そして めんえう道中の茶屋では、床の間にひからびた花をいけておくの。あのかけものをみねへ、なんだ。彌次「アリヤア鯉のたきのぼりよ。北「おらア又鮒がさうめんをくふのかとおもつた。彌次「コッむだをいはずと、はやく喰はつし。



汁がさめらア。北「ヲヤいつの間にもつてきた、ドレ〳〵(ト、ならちやをあり切さら〳〵としてやり、)彌次「もうおはちが零落した。北「又さきへいつてうめへものをしてやらう(ト、これよりふたりはぜにをはらひ、こゝをたちいでてゆくに、向ふよりお大名のぎやうれつ、さきばらひの男一人、六十位のおやぢ、一人は十四五のやつこ、いづれも宿の人足なり。)先拂「したアにしたアにかぶりものをとりませうぞ。北「かけおちものは下座をしねへでもいいと見える。彌次「なせ。北「ハテかぶりものは通りませうぞといふは。先拂「馬士、馬のくちを取ませうぞ。北「馬の口もとりはづしができるかのハ、、、、。先拂「あとの人せいがたかいぞ。彌次「おいらがことか、高いはずだ。愛宕の坂で九文龍とかたをならべた男だ。北「しやれなさんな。とんだめにあはうせ。彌次「アレ見やれ。どれもいゝ奴だ。まきばしよりでがうせいに尻がならんだは。何のことはねへ、葭町じんみちの土用ぼしといふもんだ。北「ヲヤ〳〵弓をかついでゐる人の笠を見ねへ。あたまと延引してゐらア。彌次「そしてアノ羽織の長さは、暖簾から金玉がのぞいてゐる。北「とのさまはいゝ男だ。さぞ女中衆がこすりつけるだらう。彌次「べらぼうめ、いろ〳〵なことにせわをや



くは。あなたがただとつて、やたらそんなことをしてつまるものかへ。北「ナゼそれだとつて、アレお道具を見ねへ。アノとほりにたちづめだは。ハヽヽヽ。サアお駕がとほつたからいかう（ト、たつて行過ると、しゆくはづれに、）馬かた「おや方、かへり馬だが乗つてくんなさい。彌次「安くば乗るべい。馬かた「さか手二百でいかう。じばで乗てくんなさい（ト、馬のねだんもさうだんができて、彌次郎も北八もこゝより馬にのると、二ひきならべてひきいだす鈴の音、しやん〳〵。馬、ヒインノ〳〵。）（ト、むかうよりくる馬かた）「ヘエ、畜生めはやいな。馬かたこちらの「くそをくらへ。馬かたさきの「うぬけつでもしやぶれ（ト、これがこのてやいの行ちがひのあいさつ、たがひにあくたいをいつてぎりをのべわかれる。彌次郎兵衛をのせたる馬かた。）「コレ伊賀よ、きのふ手めへとのんでゐたやらうは、アリヤア上の宿の房州だな。（このてやい、つねに名をいはず、みな、くに所のなをよぶ。北八をのせたる馬かた、大道にひよぐりながら、）「せんどのばんげにな、アノ房州めがかゝあがな、うらが親方の脊戸ぐちに、ばりをこいてゐたと思へ。あにがシヤア〳〵といふおとをきくと、うらも氣がわるく成たもんだんで、こいつなアかまふこたアなへ。ぶつちめてやらうと思つて、打くらつたげんきで、いきなりうぢよヲねぢやアげて、そこへぶつたふしたとおもへ。さうすると、かゝあめがきちをつぶしアがつて、コリヤアあにヲするとぬかしやアがつたから、エヽあによヲするも犬のくそもいるもんかへ。擲てしめるのだ。だまつてけつかれといふと、あにがアノづうたへたから、ひどへちからのある女よ。コノ野郎みやアと、おりよヲつゝこかしやがつたんで、エヽどうしやアがると、よこツつらア一つぶんなぐつて、厩の壁へおつたふして、のつかゝつたとおもへ。まだ小言をぬかしやアがるから、うらが親方の子にやらうとおもつて、もちよヲ買つて來がけだから、そのもちよヲ二ツ三ツ、かゝあめがくちへねぢこんだら、むしやむちやとくらやアがるから、其内にぶつちめた。さうすると最つとくれろといやアがつたんで、うらもそこらア探廻して、馬の糞たアしらずに、あいつがくちへおしこんだら、むによヲわるがつて、はらアたちやアがるまいか、うらもあんまり可愛さうだんで、とうう焼杉の下駄アひとつおつたふれたはな。いま〳〵しい。（此はなしに、二人も大きに興を催し、はやかな川のぼうばなへつく。）夫よりふたりとも馬をおりてたど

り行ほどに、金川の臺に來る。爰は片側に茶店軒をならべ、いづれも座敷二階造、欄干つきの廊下棧なとわたして、浪打ぎはの景色いたつてよし。（ちややのをんなかどに立て、）おやすみなさいやアせ。あつたかな冷飯もございやアす。煮たての肴のさめたのもございやアす。そばのふといのをあがりやアせ。うどんのおつきなのもございやアす。お休なさいやアせ。（二人はこゝにて、一ばい氣をつけんと、ちやゝへはいりながら、）彌次「きた八見さつし。美しいたべもんだ。北「ハヽアいかさまいゝ娘だ。時になにがある（ト、きた八そこらを見廻し、さかなをさしづしてさけをいひつける、むすめ前だれで手をふきふきしほやきのあぢをあたゝめ、てうし盃をもち出、）娘「これはおまちどほさまでございやした。彌次「おめへの燒た鯵なら味からう（ト、むすめ、フヽンとわらひながら、表のはうをむいてよびながらゆく。）むすめ「お休なさいやアせ。奥がひろうございやす。北「おくがひろいはずだ、安房上總までつゞいてゐる。彌次「北八見さつし。此さかなはちとござつた目もとだ（ト、打かへじ見て彌次郎、）

ござつたと見ゆる目もとのおさかなは
さては娘が燒くさつたか

きた八是をきゝて、おなじくこじつける。

味さうに見ゆる娘に油斷すな
きやつが燒たるあぢのわるさに

彼是と興じて爰を立出、いろいろ道草を喰ふ驛路の氣さんじは、高聲にはなしものしてたどり行ほどに、此宿はづれより十二三才斗のいせ參、跡になり先になりて、イセ參「だんなさま壹文くれさい。彌次「やらうとも、てめへどこだ。イセ「わしらア奥州。北「あうしうはどこだ。イセ「かさに書てあり申す。彌次「奥州信夫郡幡山村長松、ムヽはた山か。おいらも手めへたちの方に居たもんだ。はた山の與次郎兵衛どのは達者でゐるか。イセ「與次郎兵衛といふ人さアしり申さない。與太郎どんなら、わしらがとなりさアにあり申す。彌次「ヲヽその與太郎よ。其又うちにのん太郎といふ年寄のぢいさまがある筈だ。イセ「ぢゝいはあり申す。彌次「そして與太郎どのゝかみさまは、たしか女だつけ。イセ「おかつさまアをんなでござり申す。よくしつてゐめさる。彌次「今じやアなんといふかしらねへが、おいらがゐた時分は、名主どのは熊野傳三郎といつてな、そのかみさまが内に飼ておいた馬と色事をして、にげたつけがどうしたしらん。イセ「それがさアよくしつてゐめさる。庄屋どんのおかつさまア、内の馬

右衛門といふ男とつつぱしり申た。北「イヤ妙〳〵。彌次「コリャ小僧よ。なぜあとへさがる。くたびれたか。イセ「わしはひだるくてなり申さない。彌次「もちでもかつてやらう。こい〳〵（ト、五文もち五つ六つかつてやりながら、いよ〳〵づにのり、）彌次「なんと小ぞうよくしつてゐるだらう。イセ「アイ〳〵（ト、もちをしてやる。この内つれのいせ参り、これも十四五のまへがみ、あとからよびかける。）「ヲヽイ〳〵長松ヤイ〳〵、やつこのいせ参「きさいの〳〵。ツレ「ぬしやアもちよヲおれにもくれさい。イセ「さきへゆく人にかつてもらへ。あんでもあの衆が國さアのはなしをするを、ヲイ〳〵といつてゐると、ぢきにかつてくんさるはちやア。ツレ／イセ「ヲイうらもかつてもらうべい（ト、かけだして彌次郎に追付、）わしにももちよヲかつてくれさい。彌次「てめへはどこだ（ト、かさのかきつけを見て、）ハヽア是も奥州下坂井村、コレ手めへの村に、與茂作といふ親仁があらう。イセ「先もちよヲかつてくれさい。さうせないけりやア、こんたのいふことがあたり申さない。彌次「おきやアがれ。ハヽハヽ。北「こいつはかつがれた。ハヽヽ ト、打わらひてゆく程に、はや程ケ谷



の驛につく。両側より旅雀の餌鳥に出しておく、留をんなの顔は、さながら面をかぶりたるごとく眞白にぬりたて、いづれも井の字がすりの紺の前垂を〆たるは、扨こそいにしへ、爰は帷子の宿といひたる所となん聞えし。（たび人をのせたる馬士、なまけたるこゑにて、）「ふじの人穴馬でもはいる、なせにお方にや穴がない。ドウ／＼。とめ女「馬士どんおとまりかな。馬士「イヤだんなはむさしやだが、おまへのかほを見たら、ソレ此畜生めがとまりたがらア。ソレ／＼。馬「ヒヽヒン／＼（ト、行過ると、又あとよりたび人二三人、）とめ女「もしおとまりかへ（ト、引とらへて引ぱる。）旅人「コレ手がもげらア。とめ女「手はもげてるようございます。おとまりなさいませ。たび人「ばかアいへ。手がなくちやアおまんまがくはれねへ。とめ女「おめしのあがられねへはうが、おとめ申ちやア猶かつてさ。たび人「エヽいめへましい。はなさぬかと、（やう／＼にふり切て行と、又あとよりくるは旅僧。）とめ女「おとまりかへ。（旅僧此女のかほを見て、）「イヤもちつとさきへ参らう（ト、この跡よりくるは田舎道者。）とめ女「おとまりなさいませ。田舎「はたごさア安かアとまりますべい。とめ女「おはたごは二百ヅツ。田舎「イヤ／＼さうは出し申さない。そんだい湯はぬるくてもよくござる。平はついぞかへてくつたこたアござらないが。めしと汁は、たつた六七杯ヅツも喰やア、それでよくござるは。そん、だいにや、あしたの晝食は、この柳ごりに一ぱいつめてもらへば、もう外になんにも入申さない。はたごは百十六文ヅツも出し申さう。とめ女「そんなら外へおとまりなさいませさ。田舎「ハアとめざアいきますべい（ト、ゆき過る。）彌次郎兵衛きた八此體を見て、終始興に入る。彌次又こじつけるうた、

おとまりはよい程谷ととめ女
戸塚まへてははなさゞりけり

と、打わらひ過行ほどに、品野坂といふところにいたる。是なん武州相州の境なりときけば、

玉くしげふたつにわかる國境
所かはればしなの坂より

すでにはや、日も西の山のはにちかづきければ、戸塚の驛になんとまるべしと、いそぎ行道すがら、彌次「コレきたや、またつせへ。はなしがあらア。なんでも道中は飯盛をすゝめてうるせへから、こゝにひとつはかりごとがある。おいらは親仁なり、ぬしやア廿代といふもんだから、親子といつてもいゝくらゐだによつて、是から泊／＼では、

なんとおや子のぶんにしようぢやアねへか。北「ヲヽこれは妙だ。なる程それじやアすゝめねへでいゝ。そんならおとつさんといふのか。彌次「さうさ、貴様は諸事を息子きどりだが承知之助か。北「よし〳〵さういつて又、いゝたぼでもあつたら、此むすこをだしぬくめへよ。彌次「エヽばかアいはつし。ヲヤもう戸塚だ。笹屋にしようか。北「とつさんや。彌次「なんだ。北「こゝぢやア、ねつからお泊なせへといつて、ひつぱらねへの。彌次「ほんにそのはずだ。爰はどなたかおとまりと見えて、みな宿屋に札がはつてある。北「コウむかうの内がいきだせ。彌次「コレあねさん、泊てくれる氣はなしか。はたごや女「イエ今晩はおとまりで、あひやどはなりませぬ。彌次「なむ三さうだらう（ト、だん〳〵やどをさがせども、みなふさがり、とめぬゆゑ大きにこまり、まごつきあるき、

とめざるは宿を疝氣としられたり
大きんたまの名ある戸塚に

それより宿はづれにいたるに、漸くはたごやの合宿なきていに見ゆるあれば、やがてこゝにたよりて、彌次「なんとわしらを泊てくんなせへ。てい主「おふたりかへ。おとまりなされませ。當宿は、やどやはみなふさがりましたが、私かたばかりあたりませぬ。彌次「こんなきれいな内をなぜあてねへの。てい主「わたくしかたは、新宅でござります。ソレおなべお湯はどうだ（ト、此内、女、たらひに湯をくんで來り、やなぎごりふろしきづつみをさしきへはこぶ。）北「コウ彌次さん、じやアねへとつさん、おめへわらぢもいつしよにしておかう。彌次「ヲヽそして、おれが脚半もざつといすいでおきや。北「ナニ脚半をいすげか（ト、かほかな見ると、彌次郎兵衛目つきでしらせるゆゑ、口こととをいひながら、きやはんをあらひしまひ、）北「あねさんちやをひとつヅツくんな。（ト、下さしきへとほる、女盆にちやを二つもつて來り、）女「すぐにおゆにおめしなさいやせ。彌次「コウあの女のつらアみたか。眞中がへこんで、なんのことはねへ、ふみけへしの馬蹄石といふもんだ。北「そりやさうと彌次さん。彌次「ソレ女がきたは。北「ヲツトとつさん、湯へはいらねへか（ト、此内女さかづきをもつてくる。）彌次「ヲヤ酒か。えどものと見ると、どこでもかうするにはあやまる。北「ナゼ、酒を出しやア別にせにをとるか。彌次「しれた事よ（ト、いひながら手ぬぐひを取、湯へは入る。女すどりぶたと、てうしをもち出。）女「おひとつめしあがりませ。北「是は御ちさうだ。コウおいらが親父に、はやくあが

らつせへといつてくんな。女「ハイさやう申ませうと、（立て行。此内彌次郎兵衛湯よりあがりて、）彌次「ハヽアなんだ。コりやアのめるは。コレ手めへはやく湯に入つてきや。北「イヤのんでからはいらう。彌次「エヽてめへもいぢのきたねへもんだ。這入てきやな。（此内北八も湯へは入る。）てい主出て「是は何もござりませぬが、一つめしあがりませ。彌次「イヤ御亭主さん、これではめいわくだ。てい主「イエ時にかやうでござります。わたくしかたは、今迄外商賣をいたしてをりましたが、今度はたごやになりまして、すなはち今日が店開でござります。あなた方は、はじめてのおきやくゆゑ、それで祝つてひとつさし上ますのでござりますから、別に御酒代をいたゞくのではござりませぬ。おこゝろおきなくめしあがつて下さりませ。彌次「イヤ夫は先おめでたい。しかし御ちさうになつては、ちかごろきのどくだ。てい主「ナニサ御遠慮なう、今におすひものもできます。彌次「イヤもうおかまひなさるな。てい主「ハイ御ゆるりと、（ト、いひすてゝたつて行、北八ふろより出て、）北「やうすは殘らずあれにてきいた。おや方、たゞとはありがてへ。彌次「コレしやれずと、もう一ぺん湯へ這入てきや。そのうちにみなおれがのんでしまはア。北「さうだらうとおもつて、湯へはいつてゐても、あらふそらアねへ。ヲヤ足はまだ土だらけだ。まゝよ。サアはじめねへ。彌次「まうとつくに初てゐらア。ドレもうひとつ初直してからさゝう。北「イヤおいらはこれだ（ト、ちやわんについで、いきなしにぐつ〳〵とやらかし、）北「アヽいゝ酒だ。時に肴は、ハヽアかまぼこも白板だ。さめじやアあんめへ。漬しやうがに車えび、やぼじやアねへ。コウとつさん此しそのみがいつちうめへ。おめへは是ばつかりくひなせへ。彌次「ばかアいへ。そりやアあとへのこるにきまつたもんだ。時にもう吸ものが出さうなものだ。北「まちなよ（ト、ふすまのあひたから、かつての方をのぞき、）北「でるでる、今よそつてゐらア。ヲヤなむさん神さまへあげるのだ。イヤアくるぞくゐるぞ（ト、ひざをなほしてゐると、やがてをんな吸物をもつて出で、）女「おてうしをかへませう（ト、もつてゆく。ふたりながらすぐに吸物のふたをとつて、）北「ヲヤ赤みそたアしやれるは。よもや玉みそじやアあんめへ。時にてうしはどうだ。彌次「せはしねへ。たつた今もつていつたは。北「もうきさうなものだ（ト、此内、女が、てうしをもつてくると、ふたりながらなる口

ゆゑ、あひのおさへのとのみかけ、だん〴〵さけがまはつて、親子のあいさつも、なんだかむちやくちやとなる。)北「コウあねさんちつとあひをしてくんな。女「わたくしはいつかうたべませぬ。北「はてさコレさういはずと、そしてこん夜おめへと、ちよつとナ。これがかための盃だノウとつさん。彌次「せがれめは、もうよつたさうな。北「ナニよつたもきがつえゝ。アノ親父のつらはよ。ハヽヽヽ(ト、まきしたにてしやれる。女はきもをつぶしながら、うけたさかづきをほして、彌次郎兵衛かたへさす。)北「エヽおやぢのちくしやうめ。おもひざしにあづかつたな。コウ女中、のちにたのみます(ト、しなだれかゝる。女はあきれてさう〳〵にげだして行。)彌次「コウきさまアわりいをとこだ。女の前であんなことをいふなへ。北「ナぜいつちやアわりいか。わるかアいふめへ。おらアアノたへもんめがをかしな目つきをするので、もうおやこのえんがきりたくなつた(ト、此内に膳も出て、いろ〳〵あれども、あまり事なかければこゝに略す。なま中おやこのあいさつにて、はたごやの女まことゝおもひ、何をいつても、)とりあげねば、今更ひとりねの枕さみしく打ふしけるが、夜もふけゆくまゝに、勝手もしづまり、やまの神の小言いふ聲のみきこえて、此ふたり、寐もやらず。着たる夜着のあかつきかけて、千手観音の利生あらたに、かゆき所へ、ふすまもる風の手のとゞくもうるさく、ほろ酔の酒もさめて、今おもひ廻らせば、ひとりねにおはちのまはらざるも、めしもりの杓子あたりわるきゆゑにや、假の親子の遠慮ありしは、かへつて鳥目の徳つきたりとをかしくて、

一筋に親子とおもふをんなより
　只二すぢの銭もうけせり

斯口ずさみて打笑ひつゝかたむけし箱枕も、耳の根にいたくもひゞく夜明の鐘、はや表には、助郷馬の嘶く聲「ヒインン〳〵。馬の屁のおとブウ〳〵〳〵。長もちにん人そくのうた「竹にさあ引すゞめはアなアんあへ、ヲイ〳〵どうする〳〵。(此内、彌次もきたもおき出れば、やがて膳も出、こゝにもいろいろあれども、あまりくだ〳〵しければりやくす。それよりふたりは、そこ〳〵にしたくしてこゝを立出ると、向うよりつゞいてくるお大名の長持、引もきらず。)人「はこねさア引八里イはアなあんあへ。アツ〳〵どうだか〳〵。北「彌次さん見ねへ。おもさうなものをよくかつぐぜ。アノ尻をふるざまア。彌次「あのてやいが尻をふりまはすを見たら、チトふさいで來た。北「なぜ〳〵。彌次「死だ女房がことをおもひだして。北「おきやアがれ。ハ

ハヽヽ(ト、此内、むかうより、ちよんがればうず、やぶれたあふぎにて手をたゝきながら、)坊主「ヒヤア御ばんじやうの旦那がた、壹文やつて下しやいませ。彌次「つくな〳〵。坊「とこ〳〵〳〵よいとこな。北「コレつくなといふに、錢はねへは。坊「ナニないことがござりやしよ。道中なさるおかたには、なくて叶はぬせにと金、またも杖笠蓑桐油、なんぼしまつな旦那でも、足一本ではあるかれぬ。そのうへ田町の反魂丹、コリヤさつてやのしらみ紐、ゑつちうふどしのかけがへも、なくてはならぬそのかはり、古いやつは手ぬぐひに、おつかひなさるがお德用。彌次「エヽやかましい。ソレやらう(ト、はや、みちより壹文はふりだす。)坊「コリヤ四文錢とはありがたい。彌次「ヤ四文せにか。なむ三ばう三文つりをよこせ。坊主「ハヽヽヽ彌「いめへましい。(ト、此内はやふぢ澤になる茶みせに休み、)北「ばあさん團子はつめてへか、チトあつためてくんな。茶屋のばゝア「ドレやきなほしてしんぜますべい(ト、けしずみの火をかきさがし、灰のたつをもかまはずあふぎたてる。此うちふたりはほこりをはたき〳〵たばこのみゐると、六十ぐらゐのかつぱをきてふろしきしよつたるおやぢ、此みせ先にたちどまりて、)親仁「モシちつとものを問ますべい。江の島へはどういきます。彌「おめへえのしまへいきなさるか。そんならこりよヲまつすぐにいつての、遊行さまのお寺の前に橋があるから。北「ほんに、橋といやア、たしかそのはしの向うだつけ、いきな女房のある茶屋があつたつけ。彌「ソレソレ、去年おらが山へいつた時とまつた内だ。アノかゝアは江戸ものよ。北「だうりで氣がきいてゐらア。親仁「モシ、其はしからどういきます。彌「その橋の向うに鳥居があるから、そこをまつすぐに。北「まがると田甫へおつこちやすよ。彌「エヽ手めへだまつてゐろへ。ソノみちをずつと行と、村はづれに茶屋が二軒有ところがある。北「ほんにそれよ。よくさつたものをくはせるちや屋だ。彌「ソリヤア手めへのいふのは右側だらう。左側の内はいゝはな。去年おらがいつた時、ぴち〳〵する鯛の燒もの、それに大平が海老のはね出るやつに、玉子とくわゐと大椎茸に、そして。親仁「モシ〳〵、わしはそんなものはくはすとようござる。そこから又どういきます。彌「そこをずつといきあたると、石の地藏さまがありやす。北「アノ地藏さまは瘡の願がきくさうだ。おらが方のへたなすがあれ

でなほつた。彌次「ほんに瘡といやア、新道の金箔屋のたぬ吉めは、草津へいつたつけがどうしたしらん。」北「あれは、大福町に所帶をもつてゐらア。」彌「大ふく町といふはどこだ。」北「大ふく町は、おいらが通りをまつすぐに當座町へ出て、判取町から店賃町を通つて、地代屋敷の算盤ばしをわたると、そこが大福町だ。」親仁「そんなことよりやア、江の島へゆく道ををしへてくんさい。」彌「ほんにさうだつけ。其地藏さまから大ふく町をまつすぐにいくとの。」親仁「えのしまへいくにもそんな町がござるか。」彌「イヤ／＼、こりやア江戸の町だつけ。」親仁「エヽ、この衆は、おえどの事は聞申さない。らつちもない衆だ。ドレ先へいつて聞ますべい（ト、ぶつ／＼こごとをいひながら行過る。」北「ハヽヽヽヽ（ト、此内、あるじのばゞだんごを四五くし、ぼん



にのせてもつて出る。」彌「こいつは黒いだんごだ、（ト、いひながら一くし取あげてみれば、けしずみの火がだんごにくつついてゐるゆゑ、わざと火のついてゐるをかくしてきた八がはうへさしいだして、」彌「コレ手めへここにげたやつがよからう。」北「ドレ＼／（ト、口もとへあてがひ、）アヽツア、ツ。ばあさんアツヽヽ。とんだめに

あはせた。コレ團子に火がくつついて、アヽひり〳〵する。彌「ハヽヽヽ手めへあつたかなのがよからうとおもつて、火のついてゐたのをやつたは。北「エヽいめへましい。ペツ〳〵。彌「サアいかう、婆さんおせわ（ト、ちや代をおきこゝを出でて、ふじ澤のしゆくへはいると、兩かはの茶や口をそろへて、）茶や女「お休みなさいやアし。醉ないさけもござりやアす。ばり〳〵する强飯をあがりやアし。馬かた「だんな生た馬はどうだ。やすくやりませう。馬は達者だ」はねる事はうけ合だ。かごかき「かごよしかの。だんな戻り駕だ。やすくいきませう。北「かごは、いくらだ。かご「三百五十。彌「たかい〳〵。百五十ならおれがかついでいかア。かご「百五十にまけますべい。彌「まけるか。ドレ〳〵此草鞋をそこへつけて下せへ」かご「おめへ乗るのかへ。百五十でかつぐといはしやつたぢやアないか。そんだんで、片棒わしがかついで百五十とるのだ。彌「ハヽヽヽこいつはいゝ。エイは、そんなら二百か。かご「やすいがいきますべい、ナア棒組。サアめしませ（ト、かごのねができ、彌次郎兵衛こゝよりかごにのつて出かける。）先ぼう「ぼうぐみや。旦那はかたいぜ。あとぼう「しつかりかまへていさしやるもんだんで（ト、此内、茶やのていしゆ駕かきのなをよびながら、）ていしゆ「ヲヽイ、梅澤の佐渡屋へちよつくりさういつてくんさい。此中の新酒はあんまり水の交やうがすくない。今度から酒をちつと交てよこしてくんさいと、いつてくんさいヨ。ソレ何かおちたア。かご「アイ〳〵（ト、かつぎいだす。）彌「コウ貴さまたちやア藤澤か。アノ宿も大分きれいになつたの。問屋の太郎左衛門どのは達者かの。さきぼう「まくだんなはしつてござる。隨分たつしやでゐられます。彌「孫七どのはまだ勤めてゐるかの。さき「アイサア、だんなはなんでもあかるいもんだ。あと「べらぼうめ、しつてゐやしやるはずだ。駕の内で道中記を見てゐさつしやるは。ハヽヽヽ（ト、此内、早くも馬入のわたしにつく。北八こゝは何といふ川と人にとひしに、只わたしばとばかりこたへけるを彌次郎きゝて、）

川の名を問へばわたしとばかりにて
入が馬入の人のあいさつ

此川は、甲斐の猿はしより流れおつるよし。やがてむかうにわたりたどり行程に、此に白旗村といへるは、そのむかし、義經の首こゝに飛來りたるを祝ひこめて、白はたの宮といへる、今にありと聞て、彌次郎兵衛、

首ばかりとんだ話の殘りけり

ほんの事かはしらはたの宮

それより大磯にいたり、虎が石を見て北八よむ。

　このさとの虎は薮にも剛のもの
　おもしのいしとなりし貞節

彌次郎兵衛とりあへず、

　去ながら石になるとは無分別
　ひとつ蓮のうへにやのられぬ

斯打興じて大磯のまちを打過、鴫立澤にいたり、文覺上人が刀作と聞えし西行の像にむかひて、

　われ／＼も天窓を破りて歌よまん
　刀づくりなる御影拜みて

春の日の長欠びに、頤の掛金もはづるる斗り目をすりながら、北「アヽ退屈した。ナント彌次さん道々謎を懸よう。おめへ解か。彌「よからうかけやれ。北「外は白壁中はとん／＼ナアニ。彌「べら坊めそんな古いことよりおれがかけようか。コレ手めへとおれとつれだつて行とかけてサア何ととく。北「ソリヤアしれたこと、伊勢へ參るととく。彌「馬鹿めこれを馬二疋ととく。北「なぜ。彌「どう／＼だから。北「ハヽヽヽ。そんならおいらふたりが國所ナアニ。彌「神田の八丁ぼり、家主與次郎兵衛店ととくか。北「エヽおぶしやれなんな。これを豕が二疋、犬子が十疋ととく。彌「そのこゝろは。北「ぶた二ながらきやん十もの。彌「おきやアがれ。コレ今度はむづかしいやつをいはう。そのかはり手めへ解ねへと酒を買せるがいゝか。北「といたらおめへ買ふか。彌「しれた事よ。北「こいつアおもくろい。彌「ちつとながいぜ。マアかうだ。おいら二人が國所とかけて、是を豕が二ひき犬ころが十疋ととく。その心はぶた二ながらきやんとをものサアこれなアに。北「ハハヽヽそんな謎があるものか。彌「べらぼうめ。ありやアこそかけるは解て見ろへ。北「どうしてそれがしれるものだ。彌「しれざアいつてきかせよう。これを色男が自分の帯をとつて、女にも帯をとらせるととく。北「がうぎにむづかしい。その心は。彌「ハテといたうへで又とかせるから。なんと奇妙か。サアサア酒をかへ／＼。北「まちなよ。意趣げへしをやらかさう。おれがのもちつくりながい。マアかいつまんだ所がかうだ。おいらふたりが國所とかけて、是を豕が二疋犬ころが十疋ととく。その心はぶた二ながらきやんとをもの。これを又色男がじぶんの帯をとつて、女にも帯をとらせるととく。又其心は、といたうへで又とかせるからサア是ナアニ。彌「ハヽヽハとはうもねへ長いなぞだぞ。北「どうだ彌次さん、しれめへ

がの。これを衣桁のふんどしとときやす。彌「そのこゝろはどうだ。北「といてはかけ〳〵。二人「ハヽヽヽ。（打わらひつゝあゆむともなく、いつの間にか曾我の中むら、小八はた八まんの宮を打過、さかわ川にさしかゝりければ、）

われ〳〵はふたり川越ふたりにて
酒匂のかはに〆てゑうたり

（此川をこえゆけば、小田原のやど引、はやくも道に待受て、）やど引「あなたがたはお泊でござりますか。彌「きさまをだはらか。おいらア小清水か白子屋にとまるつもりだ。宿引「今晩は兩家ともおとまりがござりますから、どうぞ私方へお泊下さりませ。彌「きさまの所はきれいか。宿「さやうでござります。此間建直しました新宅でござります。彌「ざしきは幾間ある。宿「ハイ十疊と、八疊と、みせが六疊でござります。彌「すゐふろはいくつある。宿「お上と下と二ツづゝ、四ツござります。彌「女はいくたりある。宿「三人ござります。彌「きりやうは。宿「ずゐぶんうつくしうござります。彌「きさま御亭主か。宿「さやうでござります。彌「かみさまはありやすか。宿「ござります。彌「宗旨はなんだの。宿「浄土宗。彌「寺は近所か。宿「イエ遠方でござります。彌「葬禮はなん時だ。北「コウ彌次さん、おめへもとんだことをいふもんだ。彌「ハヽヽヽツイ口がすべつた。ハヽヽハ（ト、だん〳〵打つれて、ほどなく小田原のしゆくへはいると、兩かはのとめをんな、）女「おとまりなさいませ〳〵（ト、よびたつるこゑかしましく、彌次郎しばらくかんがへ、）

梅漬の名物とてやとめをんな
くちをすくしてたびびとをよぶ

（此しゆくのめいぶつ、うゐらうみせちかくなりて、）北「ヲヤこゝの内は、屋根にでへぶでくまひくまのある内だ。彌「これが名物のうゐらうだ。北「ひとつ買て見よう、味へかの。彌「うめへだんか、頤がおちらア。北「ヲヤ餅かとおもつたらくすりみせだな。彌「ハヽヽヽかうもあらうか。

うゐらうを餅かとうまくだまされて、
こは藥じやと苦い顔する。

（やがてやどやへつきければ、亭主さきへかけだしてはいりながら、）「サアお泊だよ。おさん〳〵お湯をとつてあげろ。宿の女ばう「おはやうございます（ト、茶をふたつくんでもつてくる。此内、下女たらひにゆを入てもつてくると、彌次郎女のかほをよこめにちらと見て、小ごゑに北をよびかけ、）彌「見さつし、まんざらでもねへの。北「あいつ今宵ぶつてしめよう。彌「ふてへことをぬかせ。おれがしめるは。北「ソレお

めへわらぢもとかずに足を洗ふか。彌「ヲヤほんに、ハヽヽヽ。北「エヽでへなしに湯をまつくろにした（ト、こゞとをいひながらあしをあらひ、すぐにざしきへとほると、女やなぎごりさんどがさをもちきたり、とこの間に置く。）北「コレ〳〵女中たばこぼんに火を入てきてくんな。彌「ヲヤてめへもとんだことをいふもんだ。北「なぜ〳〵。彌「たばこぼんへ火をいれたらこげてしまはア。たばこ盆の中にある火入のうちへ、火を入てこいといふもんだ。北「エヽおめへも詞咎をするもんだ。それぢやア日の短い時にやア、たばこをのまずに居にやアならねへ。彌「ときに腹がきた山だ。今めしをたくやうすだ。埒のあかねへ。北「コレ彌次さんおいらよりやア、おめへ文盲なもんだ。彌「なぜ。北「めしをたいたら粥になつてしまうはな。米を焚といへばいゝに。彌「ばかアぬかせ。ハヽハヽ（ト、此内、女たばこぼんをもつてくる。）北「モシあねさん、湯がわいたらへえりやせう。彌「ソリヤ人のことをいふうぬが、なんにもしらねへな。湯がわいたらあつくてはいられるものか。それも水が湯にわいたらへえりやせうとぬかしをれ。（此内、又やどの女、）「モシお湯がわきました。おめしなさいませ。彌「ヲイ水がわいたか。ドレはいりやせう（ト、すぐに手ぬぐひをさげ、ふろばへゆきて見るに、このはたごやのていしゆ、かみがたものと見えて、すゐふろをけは上がたにはやる五右衞門風呂といふふろなり。左にあらはす圖の如く、土を以てかまをつきたて、その上へ餅屋のどらやきをやくごときの、うすぺらなる鍋をかけて、それにすゐふろをけをさげ、まはりを湯のもらぬやうに、しつくひをもつてぬりかためたる風呂なり。これゆゑ湯をわかすに、たきゞ多分にいらず、りかただいいちのすゐふろなり。くさつ大津わたりより、みな此ふろなり。すべて此ふろには、ふたといふものなく、底板うへにうきてゐるゆゑ、ふたのかはりにもなりて、はやく湯のわくりかたなり。湯に入ときは、底を下へ沈めてはいる。彌次郎このふろのかつてをしらねば、そこのういてゐるをふたとこゝろえ、何ごころなくとつてのけ、ずつと片あしをふんごんだところが、かまがぢきにあるゆゑ大きにあしをやけどして、きもをつぶし、）彌「アツヽヽヽ。こいつはとんだすゐふろだ（ト、いろ〳〵かんがへ、これはどうしてはいるのだと、きくもばかばかしく、そとであらひながら、そこらを見れは、せつちんのそばに下駄があるゆゑ、こいつおもくろいと、かのげたをはきてゆのなかへはいり、あらつてゐると、北まちかねてゆどののをのぞきみれば、いろ〳〵と淨るり。）

弥「おはんなみだのつゆちりほども。北「エ、あきれらア。だうりで長湯だとおもつた。いゝかげんにあがらねへか。弥「コレちよつとおれが手をひぢつて見てくれろ。北「なせに。弥「もうゆだつたかしらん。北「いゝきせんな（ト、さしきへはいる。此内弥次郎ゆからあがり、かのげたをかたかげへかくし、そしらぬかほにて）弥「サアへえらねへか。北「ヲツトしめた（ト、さう／＼はだかになり、いちもくさんにすゐふろへかたあしつつこみ、）北「アツアツ、、。弥次さん／＼たいへんだ。ちよつときてくんな。弥「さう／＼しい、なんだ。北「コレおめへこの風呂へは、どうしてはいつた。弥「馬鹿め、すゐふろへはいるに別にはいりやうが有ものか。先そとで金玉をよくあらつて、そして足からさきへどんぶりこ、すつこつこ。北「エ、しやれなんな。かまがぢきにあつて、これがはいられるものか。弥「はめんような。弥「むづかしいこたアねへ。いられりやアこそ手めへの見たとほり、初めの内ちつとあついのをしんぼうすると、後にはよくなる。弥「ばかアいひ今までおれがはいつてゐた。北「おめへ



どうしてはいつた。弥「ハテしつこいをなせへ。しんぼうしてゐるうちにやア、とこだ。水風呂へはいるのに、どうし足がまつくろにこげてしまはア。弥「エてはいつたとはなんのことだ。北「ハテエ塒のあかねへをとこだ（ト、心の内はを

かしこたへられず、さしきへかへる。北八いろ〳〵とかんがへ、そこらを見廻し、彌次郎がかくしておいたる下駄をみつけて、ハヽアよめたと心にうなづき、すぐにそのげたをはいてすゐふろのうちへはいり、）北「彌次さん〳〵。彌「なんだ又呼か。北「なるほどおめへのいふとほり、入しめてみるとあつくはねへ。アヽいゝこゝろもちだ。あはれなるかな石どう丸は、ツレレン〳〵。（此内、彌次郎あたりをみれば、かくしておいたる下駄がなき故、さてはこいつみつけたなと、をかしくおもつてゐる内、北八はさすがにしりがあつく、立たりすわつたりいろ〳〵して、あまり下駄にてぐわたぐわたとふみちらし、つひにかまのそこをふみぬき、べつたりとしりもちをつきければ、湯はみなながれてシウ〳〵〳〵〳〵。）北「ヤアイたすけぶね〳〵。彌「どうしたどうした、ハヽヽヽ。（やどのていしゆこの音におどろき、うら口よりゆどのへまはり、きもをつぶし、）ていしゆ「どうなさいました。北「イヤモウ命に別條はねへが、かまのそこがぬけて、アイタヽヽ。ていしゆ「コレは又どうしてそこがぬけました。北「ツイ下駄でぐわた〳〵やつたから（ト、いふに、ていしゆはふしぎさうに北八が足をみれば、下駄をはいてゐるゆゑ、）ていしゆ「イヤアおまへはとはうもないお人だ。すゐふろへはいるに、下駄をはいてはいるといふ事があるものでございますか。らつちもないこんだ。北「イヤわつちも初手は、はだしではいつて見たが、あんまりあついからさ。ていしゆ「イヤはやにが〳〵しいこんだ（ト、大きにはらをたてる。北八もきのどくさ、こそ〳〵とからだをふいて、いろ〳〵いひわけする。彌次郎きのどくにおもひければ、中へはいり、釜のなほし賃、なんりやう一ぺんつかはし、やうやうとわびごとして、）

　水風呂の釜をぬきたる科ゆゑに
　やどやの亭主尻をよこした

北「いめへましい（ト、おもひがけなく貳朱ひとつぼうにふつて、おほきにふさぎゐる。此内、膳も出そこ〳〵にくつてしまひ、しやれもむだもいつかういはず、たゞぼうぜんとだまりんなり。）彌「コレてめへなにもふさぐこたアねへ。大きに德をしたは。北「なにがとくだ。彌「かまをぬいて貳朱ではやすい。よし町へいつてみや。そんなこつちアねへ。北「エヽぶしやれなんな、人の心もしらずに。彌「イヤそれでも、手めへがそんなにしてゐると、おらア氣のどくな事がある。北「なにが。彌「さつきの女が後に忍んでくるはずにふづくつておいたから、側で手めへが氣を惡くして、なほの事ふさぐだらうと、それがどうもきのどくだ。北「ヲヤ

ほんにか。いつの間に約束した。彌「そんなことにじよさいのあるのじやアねへ。さつき手めへが湯へはいつてゐるとき、げんなまで先へおつとめを渡しておいたから、もう手つけの口印までやらかしておいた。なんときついもんか。へ、、、、。さういつても色男はうるせへのハ、、、ハもうねようか(ト、手水にたつて行、此内女きたりとこをとる。)北「コレあねさん、おめへおらが連の男になにか約束をしたぢやねへか。女「イイエ、ヲホ、、、。北「イヤわらひごとぢやアねへ。コリヤアないしやうのことだが、あの男はおへねへ瘡かきだから、うつらぬやうにしなせへ。おめへがしよつてはきのどくだから、いつてきかすが、かならずさたなしだよ。(ひそ/\ものでまことらしくいへば、女きもをつぶせしやうすに、北八づにのり、)そして足は年中雁瘡で、なんのことはねへ。乞食坊主の菅笠を見るやうに、所所に油紙のふたがしてある。それに又アノ男の胡臭のくさゝ、そのくせひつこい男で、かじりついたらはなしやアしねへ。めんようアノかさつかきといふものは、口中のわるくさいもので、おいらもならんで飯をくふさへいやでならねへが、しかたがねへ。おもひだしてもむしづがはしる。ペツ/\(ト、此内はや彌次郎てうつより出でてくるやうすに、)女「もうおやすみなさいませ(ト、さう/\たつてゆく。彌次郎さしきへはいりすぐによぎをかぶつて、)彌「ドレふところをあつためておいてやらう。北「いめへましい。こんやのやうにうまらねへ事はねへ。やけどをして貳朱かねはふんだくられる、そのうへアノうつくしいやつを、そばで抱てねられて、ほんにふんだりけたりな目にあふは。彌「へへ、、、。かんにさつし。こんやアちつとうけにくからう。ちくるゐめ、こたへられぬ。ハ、、、、。コレ北八もうてめへねるか。もつとおきて居ねへ。(北八はゐさいかまはず。)北「ゴウ/\ゴウ。彌「もうきさうなもんだ(ト、ひとりまちくらして、まてども/\おともなし。なま中さきぜにをやつて、ぼうにふるかと氣がきではなく、こらへかねてむしやうに手をたゝきたてると、やどのかみさま出てきて、)女房「およびなさいましたか。彌「イヤおめへではわかるめへ。さつきこゝの女中にちつと頼んでおいた事があるから、どうぞちよつとよこしてくんねへ。女房「ハイあなたがたのはうへ出ました女は、雇人でございますから、もう宿へ歸りました。彌「エヽほんにか。そんならよし/\。女房「ハイお休なさい

ませ(ト、かへつて行く。)北「ハヽヽヽハヽヽヽヽ。彌「べらぼうめ何がをかしい。北「ハヽヽハヽヽヽ。ハヽヽ。イヤこれで地にした。もう安堵してねようか。彌「かつ手にしやアがれ

ト、哀なるかな彌次郎兵衞、北八が奸計とは露しらず、貳百戀しやうらめしの、おじやれか無洒落か、あたら夜を、是非なくころりと、つつぶしければ、北八をかしく、又一首。

　ごま鹽のその辛き目を見よとてや、
　おこわにかけし女うらめし。

彼是興じてふしたりけるに、はやくも聞ゆる遠寺のかねに、一睡の夢は覺て夜明ければ、やがておき出、そこ〳〵に支度して立出けるに、けふは名にあふ箱根八里、はやそろ〳〵とつま上りの石だか道をたどり行ほどに、風まつり近くなりて、彌次郎兵衞、

　人のあしにふめどたゝけど箱根やま
　本堅地なる石だかのみち

北「コレ〳〵明松を買はねへか。こゝの名物だ。彌「べらぼうめ。もう日の出る時分明松がナニいるものか。北「夜があけてもいゝはな。おめへかつてとぼせばいゝ、ゆうべのかはりに。彌「おきやアがれ。北「ハヽヽヽヽハヽヽヽヽ。又こゝに湯本の宿といふは、兩側の家作きらびやかにして、いづれの内にも美目よき女二三人づゝつみせさきに出て、名物の挽もの細工をあきなふ。北八一軒々々にのぞき見て、北「ヲヤヲヤあらひ粉のかんばんを見るやうに、顏と手さきばかり白い女がゐらア。彌「なんぞ買はう。女「おみやげおめしなさいませ。おはいりなさいやんせ。彌「コウあねさん、そこにあるものを見せなせへ(ト、いふにむすめは、又外のきやくとあひ手になつてあきなひしてゐる。かつてよりばゞあ走りいで、)ばゞ「ハイ〳〵これでおんざりますか。(ばゝアではふしようちのかほつきにて、)北「それぢやアねへ。コウ姉さんそつちのをみせな。ばゞ「ハイ〳〵これでおんざりますか。彌「エヽ、それでもねへ。コウ姉さんおめへの手にもつてゐるはなんだ。娘「ハイ〳〵おたばこ入でおざりやんす。彌「コレ〳〵、この事さ。時にいくらだ。娘「ハイ三百でおざりやんす。彌「百ばかりにしなせへ。娘「おまへさんもあんまりな。あなたがたのおかげで、かやうに致してをりますものを、かけねはもうしやんせぬ(ト、彌次郎をじろりと見る、たちまちのろくなりて)彌「そんなら貳百よ。娘「もうちつとおめしなさつて下さいやせ。ヲホヽホ・ヽ(ト、ねつからをかしくもないことをわらつて、彌次郎がかほをまたじろりと見る。)彌「そんなら三百〳〵。娘「もうそつ

とでござりやんす。ヲホヽヽヽヽ。彌「めんどうな四百〳〵（ト、一本はふり出してかひ取り、）北八サアいかう。娵「ようお出なさいやんした。北「ハヽヽヽヽ、三百のものを四百に買ふとは、あたらしいあたらしい。彌「それでもをしくねへ。アノ娘はよつぽどおれに氣があつたと見える。北「おきやアがれ。ハヽヽヽヽ。彌「それでも初手からおれが顔ばかり見てゐたは。北「見てゐたはずだ。アノ娘の目を見たか。やぶにらめだ。ハヽヽヽ。（こゝにいがくりあたまの子供四五人ゐて、）子共「權現さまへ御代參、壹文やつて下されチヤ。北「ナニ御代參とはなんだ。子供「こんたしゆのかはりに參るは。北「ナニおいらがかはりに。いづれを見ても山家そだち、身がはりにするつらがあるものか。ろくなくびはひとつもない。イヤ時にアノ鉦はなんだ。

彌「さいのかはらへきたぞ〳〵。

辻堂はさすがにさいのかはら屋根
されども鬼はみえぬごくらく

お茶漬のさいのかはらの辻堂に、
にしめたやうななりの坊さま。

それより、御關所を打過て、

はる風の手形をあげて君が代の、
戸ざさぬ關をこゆるめでたさ。

斯祝して、峠の宿に悦びの酒くみかはしぬ。

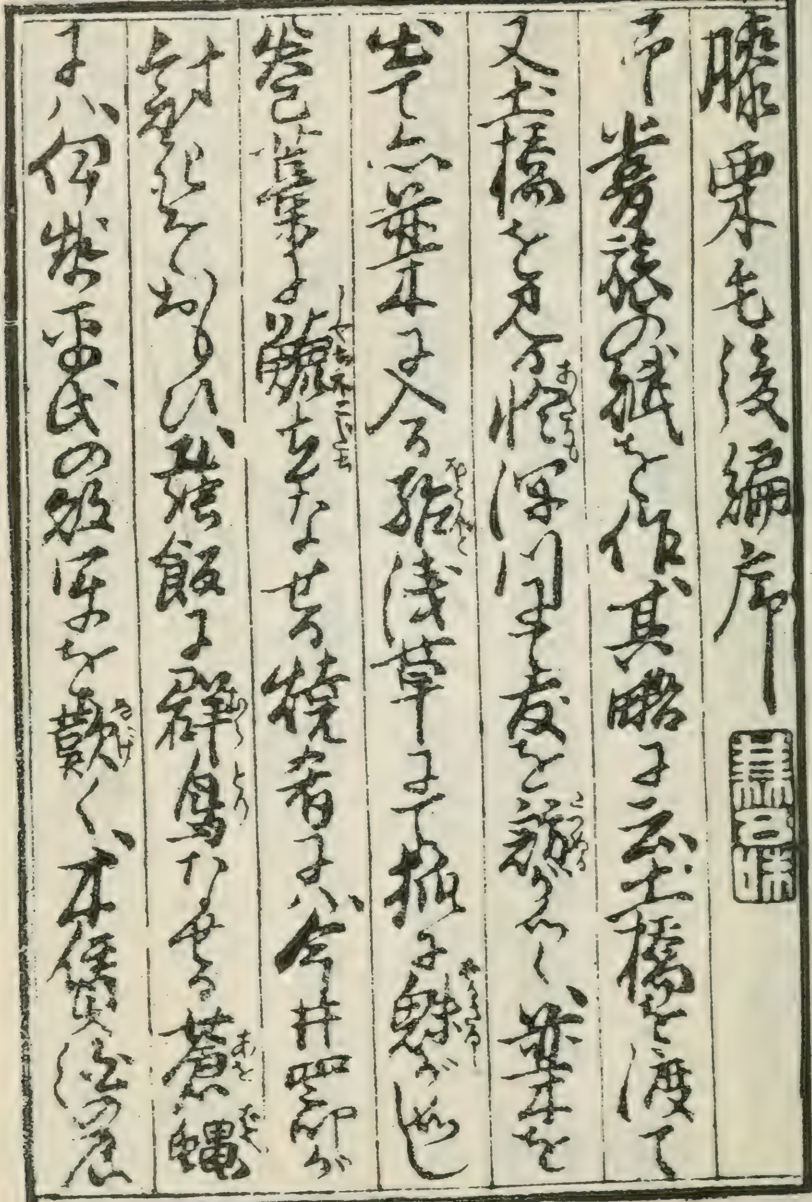
東海道中膝栗毛二編

中腹五十三次
売屁道中之記

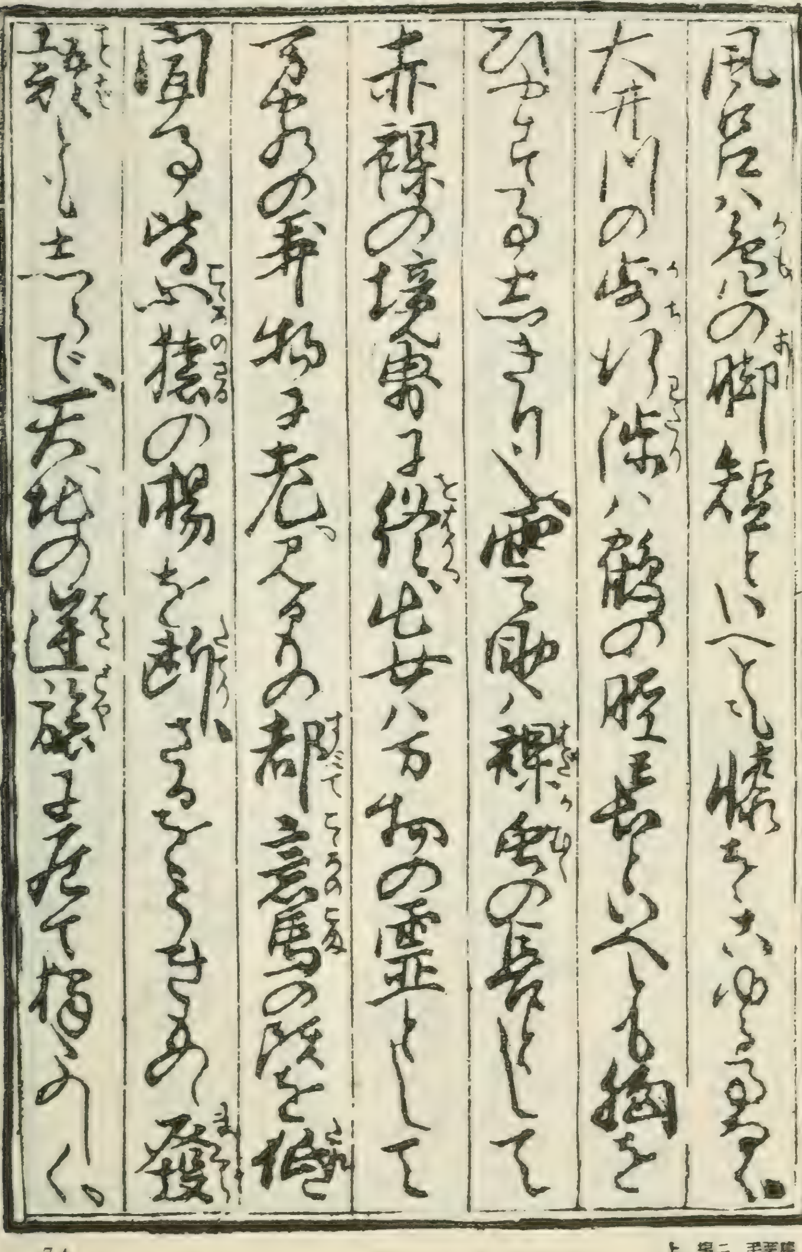
膝栗毛初編梓刊して世に行るゝ頃、則後編をと索めらる
やまし作者例の悠長にして容易の下と得いまゝ起し。今とし上
十有年の初秋、常総に遊て鳳凰甲湖来の旅續に居とゞ
雇留し。漸同篇中旬に比東都に帰る。而ふたゝび此編を
高雅花銘庵嗣筆に続て前後二まきを編輯せ
急速なりしかば。校閲の中誤数あるを只見赦し給へと
十返舎の言ふかはりて書肆栄邑堂しるす

膝栗毛後編序

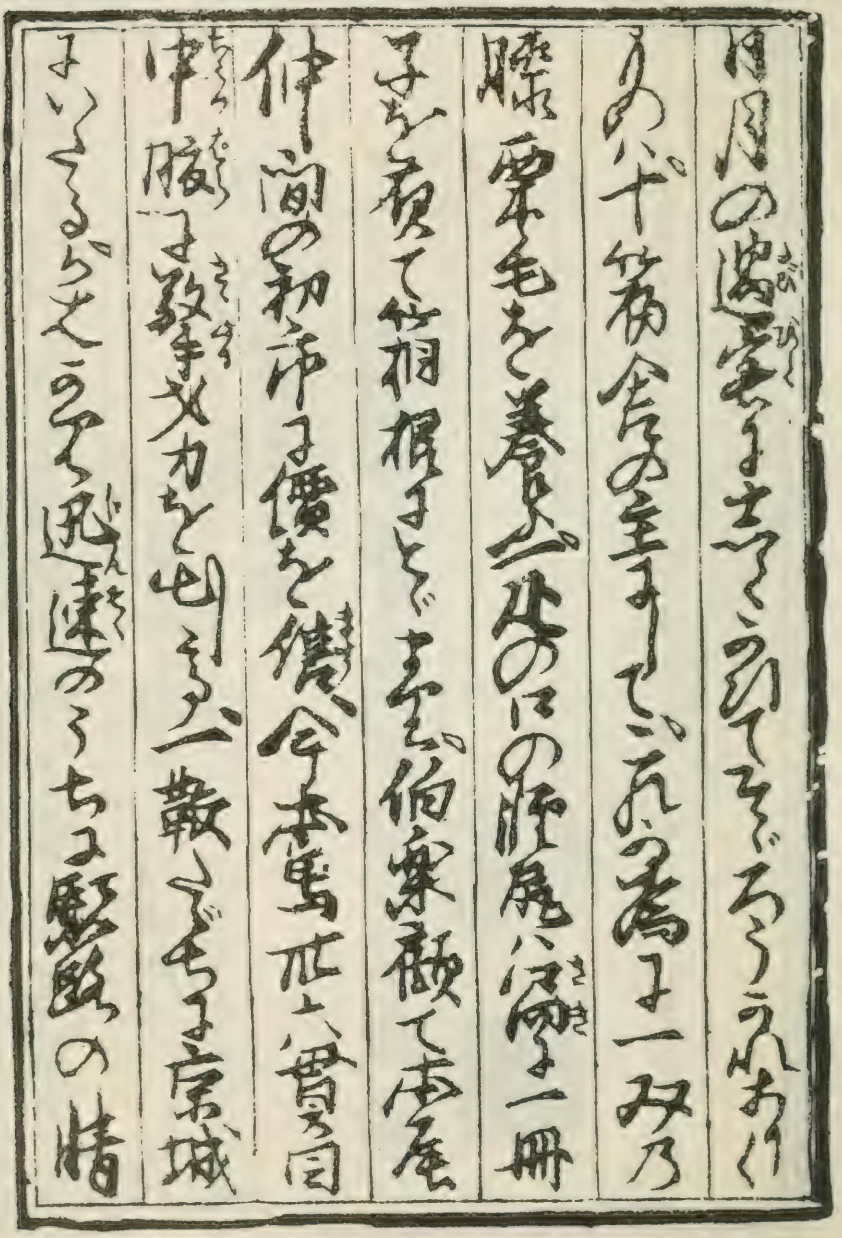
予嘗旅の賦を作、其略に云、土橋を渡て又土橋を見る、恰深川にて友を訪が如く、並木を出て亦並木に入る、殆淺草にて狐に魅が如し。巻藁に鯱立なせる燒肴には今井四郎が討死をおもひ、强飯に群鳥なせる



着蠅には伊勢平氏の敗軍を歎く。木賃泊の居風呂は、鳬の脚短といへども膝をこゆる事なく、大井川の歩行渉は鶴の脛長といへども胸をひやす事しきり也。雲助は裸虫の長として赤裸の境界に終、出女は万物の霊として万客の弄物に老。見る

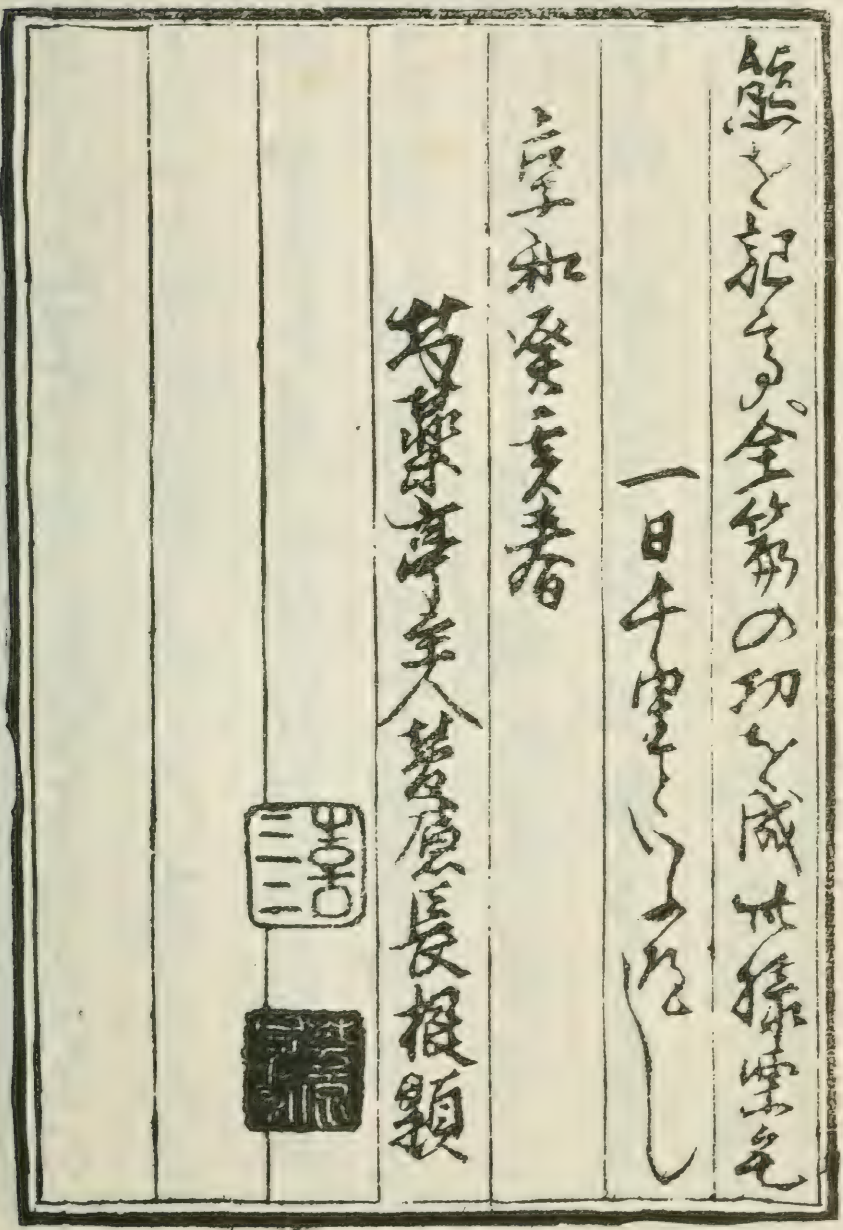


もの都意馬の頭を低閑事皆心猿の腸を斷。さるをうきものゝ發語ともしらで、天地の逆旅に居て獨たのしく日月の過客にしたがひて、そゞろうかれありくものは十篇舍の主にしてこれが爲に一双の膝栗毛を養ふ。一疋の口の輕尻は轡に一冊子



を負て箱根にとゞまり、伯樂顧て本屋仲間の初市に價を倍す。今本馬卅六貫目中腹に擎才力を出して一鞭たゞちに京城にいたる。かばかり迅速のうちに驛路の情態を記て、全篇の功を成。此膝栗毛一日千里といふべし。

享和癸亥春
芎藥亭主人
菅原長根題



道中膝栗毛後編凡例

○此膝栗毛後編ハ箱根より大井川迄にて
ぶる。駅中旅客の滑稽。途中偶然の風
流する雅情を穿て著を変ず。初編に同じ
○凡て風景を詠て音律ハ清濁の差別あり。
但し方言俗語の通称子細あるの言葉おいてハ左へ
船おど古代の調を認て因果に残りし細末葉
の謂なりけらしハ殺生を厭ひてなりとかいふものなれど
いかハわんぢきの酒を呑ぎ飯を食などとハ階前へて

吟りんずるなかれと 物類稱呼 にあんぎんとあり
○怨(かそみ)しりとりつるを捐(さう)見なではおのつからなむしらひは張(ちやう)見に
ては忍ずるをいひ寃(えん)を叫ぶにはこそ名付ふ同字にて
とけ羽をかひんなどいかをけきちじといふるハ
古今集 にうついかつるをやふるうんしつける牲ばかくよもし
そうぶ取つるさやの中山とあり
○おぞいとはふハ尾張(とりり)にて播の西(おしき)表するをいふ波(ちやう)海の辺(へん)
まてもぐ物事ノ覚(うご)きするにいふ 和名類聚 にかきて
大は大ぶぶりの貝とお仕ありてつと申す(さあん)ふよあわせて

わきまふるの意にはあらずおぼえといふ助字之
○桐壺發端をよみてまぎらはしといふ味はひあるその下字
どとりてまぎらはしといふは助字なり
○凡て和書中器根にて伊勢物語字を八馬をなまと
いひ又はまらふ 日本記 などるといはまとよませり。
○例てお馬してなましものふ
○なほをとりをあげしといふ 万葉 にあげもとも有
よしみきまさぬとあり
○うらといふは 摂政等の遊語おかりとちぢめておいらく

いひ。おしく文轉じてうつしとるを

○翻くことを綱目とせるハ翻としいひ。翻をとふハかひへるといふ名げるハ源氏に擬清しる

○なぞらへてよしとあそびしいふ綱ハ紫日記にすなはち女のまねびてとあり

○君なかるものを翻をとふてひろくしてかえるを

○なにそ本にありもなほしといふ綱ハ性理大全に塗土轍しるしたるかにし翻刻せしまた本もなほしついひまちぢまふ志学るくもなかりといふ

○ふしといふハ至なりぶしよりたしく毎人へべなり
○まをゆるせしもとかくまるしいふハ禅家にてくうしく座する
事を行座しいふ行の字ハ久しきと義なり仍て
かくはまるといふまるハ居の心にて禅まるかしたまる
のはまりなり
○蒙むりて偶るよ暇あらずして口ばしを申につけあるし
さる羽のことらるよ解く仍て擲没の源ら埋
像の礼言ふ緒のまゝを読してそのまゝを
紹へふしきし

○道旅木賃泊の懐慄ふ侍ハ弱腰乱吹け
条の患苦雲駕する士護广の胡麻の蝿を
初舞手りれたる所を亭ハ続編に編
るの末なりし

十返舎一九識

浮世道中膝栗毛後編

十返舎一九著

長明が東海道記に曰、松に雅琴の調あり、浪に鼓の音ありと。息杖の竹笛をふけば、助郷の馬太鼓をうつ。膝栗毛後篇の序びらき、ヒヤリ／＼、てれつくてれつくすつてんてん。狂言詞「かやうに候ものは、お江戸の神田の八丁堀邊に住居せし、彌次郎兵衛きた八と申すなまけものにて候。扨もわれ／＼、伊勢へ七度熊野へ三度、愛宕さまへは月参の大願を起し、ぶらりしやらりと出かけ、ねつから急ず候ほどに、えいやつとはこねの驛に着て候。謡「玉くしげ箱根の山の九折／＼、げにや久かたの醴賣や、さんしよ魚の、名所多き山路かな。あまざけうりのおやぢ「めいふつあがらしやいませ。あまざけのましやいませ。北「彌次さんちつとやすみやせう。ヲイ一盃くんな(ト、しやうぎに腰をかける。おやぢ一ぱいくんで出す。)北「こいつは黒い／＼。彌「くろいやうで甘いは、遠州はま松ぢやアないか。北「わりい／＼。コウおめへなぜのまねへ。彌「おいらアいやだ。ソノちやわんを見や。施主の氣がきかねへよ。あさがほなりにでもすればいゝに。北「さうさ是ぢやア強飯のかうのものも、奈良漬ぢやあるめへの。おやぢ「かうのもんはござらねへが、むめぼしよヲ進せますべい(ト、皿にある梅ぼしをいだす。)北「ヲイ／＼いくらだへ。サアおせわ(ト、ぜにをはらひ出て行。向ふよりくる小荷駄馬、ひきもきらず、すゞの音しやん／＼／＼。まごのうた、)「ふじのあたまがつんもえる。なじよにけぶりがつんもえる、三島女郎衆にがらゝ打こみ、こがれおじやつたらつんもえたア。しよんがへ。ドウ／＼。(こちらからゆく馬かた、互ひに行ちがひて、)「ヒヤア出羽宿の先生どうだ。向ふよりくる馬かた、「べらぼうめ。おれが先生なりやア、うぬははつつけだア。馬「ヒイソヒイン。(又むかふより來るは、お大名のお國からお江戸入の女中たち、かごをつらせて四五人づれ、さわぎつれてくるを見て彌次郎、)「ヲヤ／＼えらい／＼。北「ほんに是は皆生た女だ。きめう／＼。ナント彌次さんつかねへこつたが、白い手拭をかぶると、顔の色がしろくなつて、とんだいきな男に見えるといふことだが、ほんとうかの。彌「ソリヤア

ちげへなしさ。北「よし〳〵（ト、たもとからさらしの手ぬぐひを出して、ぐつと頬かぶりにすると、とほりすがひに女中たち、北八がかほをのぞいて見て、みな〳〵わらひとほりすぎる。）北「なんとどうだ。今の女どもが、おいらが顔を見てうれしさうに笑つていつたわ。どうでも色男はちがつたもんだ。彌「わらつたはずだ。手めへの手拭を見な。木綿さなだのひもがさがつてゐらア。北「ヤア〳〵こりやア手拭ぢやねへ。ゑつちうふんどしであつた。彌「手めへ、ゆふべふろへはひるとき、ふんどしを袂へいれて、それなりにわすれたはをかしい。大かた今朝手水をつかつて、顔もそれでふいたらう。きたねへをとこだ。北「さうよ。どうりこそわるぐさい手ぬぐひだとおもつた。彌「ナニせんてへ手めへがあたじけねへから、こんな耻をかく。北「なせ。彌「もめんをしめるから、手ぬぐひと取ちがへる。コレおいらア見やれ。いつでも絹のふんどしだ。北「それだとつて、そめ屋がながつぼねのふきかへに行きやアしめへし、きぬをしめることもねへす。エヽまゝよ。たびのはぢはかきすてだ。斯もあらうか。

手ぬぐひと思うてかぶるふんどしは
さてこそ耻をさらしなりけり

それよりかぶと石をよめる。彌次郎兵衛、

たがこゝに脱捨おきしかぶといし
かゝる難所に降參やして

斯て山中といへる建場にいたる。爰は両側に茶屋軒をならべて、「おやすみなさいまアし。くだり諸白もおざりやアす。もちよヲあがりやアし。いつせんめしよヲあがりやアし。お休なさいやアし、お休なさいやアし。彌「きた八ちつと休んでいかう（ト、ちや屋へはひる。此内のにはにつき立てたるへつついのまへに、くもすけども、ふとんをからだにまきたるもあり、しぶかみをきたるもあり、あるひはねござ、あかがつぱなどをきてよりこぞり、火にあたりゐると、おもての方より竹のきせるをくはへて、一人の雲介ずつとはひり、）「おへねへひやうたくれどもだ。あか熊やどぶ八めが、峠まで長持でやつたアな。ひとりのくもすけ「えいわ。そんだいあび手が、あんどんにげんこはふんだくるべい。（この長持といふは六百の事、あびてといふはさおての事也。）今一人「コレそりアえいが、コノやらうがおしやらくを見ろへ。しつかりもんつきをきやアがつた。雲ごもをきてゐるくもすけ「きんによう小田原の甲州屋で、やらやつと壹まい貰つて着たが、あんまり裾が長くて、お醫者様のやうだとけつかる。丈にだかの雲「やらうめ

らア工面がえいから、すきなものをきやアがる。おらアこんぢう内から　はだかでゐりやア、がら吉ばとあがぬかすにやア、古傘をやらうから、ひつぺがして着ろとけつかる。べらぼうめ、やらうの猪ぢやアあんめへし、そんなもんがきられるもんかといつたら、すんならこりよヲきろとつて、えいみしろを一まいうつくれたと思へ。そのみしろをきんによふの晩げに、畑で湯につつぱひゐとつて、ひん脱でおいたら、聞きやれ、だいじの着ものを、がらゝおまにくはれてしまつたア。いまく\しい。(彌次郎きた八、このてやいのはなしをきいてゐて、大きにきようにいり、やがてこゝを立出てゆくと、長坂大しぐれといへろあたりより、旅人壹人こんの木綿かつぱをきて、風呂敷包と柳ごりをかたにひつかけたるが、あとになり先になり、)十吉「あなた方はどこでござります。彌「わつちらアえどさ。十吉「わたくしも江戸でござります。あなた江戸はどの邊でござります。彌「かん田さ。十吉「かんだには、わたくしもをりましたが、どうかあなたがたは見申たやうだ。神田はどこでござります。彌「神田の八丁堀で、わつちらが内はとちめんや彌次郎兵衛といつて、間口が廿五間に裏行が四十間、かどやしきの土藏づくりで大造なものよ。十吉「ハアそのうらでござりますか。彌「とんだ事をいふ。うらだなは無しさ。わつちが所壹軒ですまつてゐやす。十吉「ハアそんなら、惣地代で沽券はいくら。彌「こけんは千八百兩。十吉「おめへ直でござりやすか。口錢は何朱でも二ッ割に致しやせう。彌「おめへ何をいふ。十吉「わたしは又、地面の賣買のおはなしかと存じました。彌「ナニそんなこつちやアねへ。わつちらアちよつと出るにさへ、供の五人や十人はつれてあるきやすが、それぢやア氣がつまつておもしろくねへから、此をとこひとりつれて、不自由してあるくものずきだね。十吉「なる程さやうでござりませう。イヤ又あなたのおふくろさまなそは、私よく存じてをりますが、いつぞや淺草の門跡さまの前で、お目にかかりました時、なにか包をさげて杖にすがつてござるやうす、大きにおとしがよりました。彌「ハアそれは大かた、寺參にでもいかれた時でござりませう。おめへ御存じとあれば、定めて何とか詞をかけられたで御座りやせう。十吉「わたくしを見ると直にかけてござつて、何をおつしやるとぞんじましたれば、一もんやつて下しやいませと。北「ハゝハゝゝゝ。彌「イヤおめへおいらをおつ

にはぐらかすの。北「おもしろへ〳〵。なんとおめへこよひわつちらと一しよにとまりはどうだ。十吉「ようござりやせう（ト、それよりみちすがらたがひにしやれ合、國澤といへるにいたる。こゝに法花寺といへるてらに、あしかゞぶしやうのこんりふありし七面堂あり。彌次郎兵衛はるかにこれをふしをがみて、）

足利のぶしやうの建し名にめでて、
七面堂といふべかりける

斯て三人はなしつれて、市の山にいたる。（こゝに、いがぐりあたまの子ども二三人、大なるすつぽんをとらへてもちあるき旋びゐると、北八見付て、）北「コウ彌次さん、いゝものがある。アノ泥龜をかひとつて、晩にやどやでやらかしはどうだ。彌「よからう。ナント小ぞうそのすつぽんを賣ねへか。子供「こんたしゆ、いるならうちくれべい。そんだいせによヲくれさるか。北「やらうとも、ソリヤおつきな錢をやる（ト、四文せん廿四文ばかりぬいてやり、やがてあたりのわらをろひ、かのすつぽんを藁づとに入れて引つさげ。）北「きめう〳〵。十吉「こいつは面白い。時に日がいらしつた。ちと急やせう（ト、あしばやに三人たどる。）既に其日も暮にちかづき、入相のかね幽にひゞき、鳥もねぐらに歸りがけの駄賃馬追立て、とまりを急ぐ馬士唄の、なまけたるは、ほてつぱらの淋しくなりたる故にやあらん。（此とき、やうやく三しまのしゆくへつくと、雨かはよりよびたつる女のこゑ〴〵。）女「お泊なさいませ〳〵。彌「エヽ、ひつぱるな。こゝをはなしたら泊るべい。女「すんなら、サアお泊り。彌「あかすかべイ引（ト、にげるはずみに、あんまに行あたる。）あんま「アイタヽヽタ。まなこつぶれがべら坊め。あんまアけんびきイ引せうちう〳〵のこゑ、「せうちうは入ませぬか。目のまはる燒酎をかはしやいませ。北「えいかげんにこゝへ泊らうかのなんな「サアおはひりなさいませ。おさんどんおとまりだよ。やどやのていしゆ「コレハおはやうございます。おつれさまはおいくたり。彌「かげぼし共に六人。ていしゆ「ヘイそれは〳〵。ヤレちやア二太郎はゐぬか。お湯をとつてこい。お茶は煮えてあるか。ソレ先お風呂をひとつあげろ。お飯もわいた。すぐにおはひりなさいませ。（此内、三人ともあしをあらひしまひ、すぐにおくへとほる。）やどの女「お湯におめしなさいませ。彌「ドレおさきへまゐらう（ト、はだかになりてかけいだす。）女「モシそこはかうかでございます。こつちらへ。彌「ホイこれは（ト、ゆどのへゆく。）十吉「ときにかの藁苞はへ。北「とこの間におきやした。のちの

寝酒にこしらへてもらひやせう。（此内、彌次郎湯よりあがると、つぎに十吉ゆにいりにたつ。やどのていしゆ、とひやの下やくをつれて、ちやうめんとやたてをもちいづる。これは宿帳とて、旅人の國ところをしるす事也。）てい主「御めんくだされませ。ハアおひとりはおふろか。宿帳を附ます。あなたがたお國は。北「ハイわしは泉州。てい主「泉州はどこでございます。北「せん州堺、名は天川屋義平といひやす。ていしゆ「ヘイあなたは。彌「わしかへ、城州山崎村與市兵衛と申やす。　てい主「扨は與市兵衛さまとはあなたか。うけたまりおよんだ、あなたの聟さま勘平さまはどうなされました。彌「かん平は、三十になるやならずにしにやした。てい主「ハアそれはおちからおとし。おかる様は。彌「ずゐぶん達者でゐます。てい主「そして狸の角兵衛さまや、めつぱふ彌八様はたしかあなたのお近所でゐつた。彌「さやう〳〵。てい主「アノ又猪はどこにゐられます。彌「ハアしゝはどこだか。てい主「てんつる〳〵てんつるてんはどういたしました。みな〳〵「ハハヽヽヽ。てい主「イヤまづ御膳をあげませう。彌「いま〳〵しい。けつくあつちにあそばれた（ト、此内、やどの女ぜんをもちきたり、ならべおきて、）「サアおあがりなさいませ。コレちやアおたつんどんよウ、そこの飯櫃ウもつてきなさろ。北「ときにこゝにやアしろものはなしかの。女「此あひだ、木曾海道の追分から來た女郎衆がふたりございます。おさみしかアおよびなさいませ。彌「こいつおもしろからう。器量は。女「がいにえいといふでもおざりましない。マア十人前でおざいます。北「ハヽヽヽ、十人前のめしもりか。おもくろい呼でくんな。女「すんなら只今（ト、いひすてゝたつて行。此うち、十吉ゆどのよりあがりて、）十吉「おめへがたアなにか、やぼからぬおはなしだね。彌「ぬしやアどうだ。十吉「イヤわたしはアノ内の女に、少しはなし合がありやす（ト、此内、やどの女きたりて、）「これは御如才でございます。サアおかへなさいませ。モシ今のが參ました。コレおまいちアこゝへ來なさろ。トレむかひにいかずに（ト、女はたつてゆく。すべてこのあたりより、駿州、遠州、掛川あたり迄は、行うといふことをゆかずといひ、くはうといふ事をくはずといふ。やがてかの女、ふすまのかげにのぞいて立つてゐるをひつぱり出る。）女「サアサアきなさろ〳〵。めしもりおたけ。「アレハアふとつていぎます、がいにしよびきなさんな。今ひとりのめしもり、おつめ「どうせハア、出べいとこさア出にやアならない。サアお

たけさんつん出なさゐ（ト、やう〳〵ふたりながら出かけてくる。ひとりはこんのもめんに、けんかたばみの紋のつきたるをきて、ふとりじまのおびをしめ、今ひとりはべにがら色の、あかきいとの入りたるたてじまのぬのこに、これもおびはふとりのあゐびろうど、べに木綿のふんどしちら〳〵と出しかけ、くろきらうの長ぎせるを手にもちてさしきへすわる。）北「サア〳〵爰へきなせへ。時に女中、膳はひいて酒にしやせう。女「ハイ今に出します（ト、ぜんを引いてしまひ、てうし、さかづきさかなをもちいで、）女「サアひとつあがりませ。彌「ドレドレ（ト、一くちのんで下におくと、女こころえておたけにさす。）お竹「コリヤハアわしにかへ（ト、飲むまねして北八へさす。北八のんでおつめへさす。）おつめ「おたつどんハアおりよげへだもし。北「ひとつのみなせへ。おつめ「わしらアはあがいにのみましねへ。ヤレさてこの衆は、がいにおつぎやることよ。女「お竹さんおまいちのとこぢやア、みんなこりよヲさしてゐるの（ト、おたけがつぶりにさしてゐる、銀ながしの五大力のかんさしをぬいて見る。）たけ「コリヤハアおえどでもはやるげでの、わしらがとこの金彌さんが、野尻の彦十さんに買てもらつたげで、がいに自慢らしく、内ぢうのもんにひけらかすから、わしもはアあの衆のさすものを、さゝないでもくやしいから、たてひきづくで、がら〳〵廿四文うつちやつたアもし。女「おつめさんおまいの櫛を見せなさゐ（ト、取にかゝるをいやがりて、）つめ「おらアやあだよ。ハヽヽヽ（ト、かほをそむけるを、むりに取つてみれば、朱ぬりのくしに、きんぷんにて、だきめうがの紋がついてゐる。女「ばあらやヤア、コリヤア札の辻の太郎ざゐむさんの紋所だアよ。つめ「しつちつたかやア（ト、ひつたくり、くしにてたゝくまねをして、つぶりへさす。このふたりまことに此あひだ追分からきたと見えて、是はみなあつちのことばなり。みな〳〵をかしさをかくし、だんまりにてきいてゐる。こゝにもいろ〳〵あれども、あまりくだ〳〵しければばりやくす。）女「もうおそべりなさいませ。十吉「ホンニわしはつぎのまへねやせう。彌「ナニサいつ所にこけへ。十「コレハめいわくな。女「サアおまへがたも着かへてきなさいまし（ト、よぎふとんをはこびとこをとる。みな〳〵ふとんのうへにあがりゐると、二まい折の小びやうぶにて、あひだをしきる。此うち彌次郎があひかたきたりて、）竹「モウそべらしやりましたか。がいにさぶいばんだアもし。彌「もつとこつちへよりなせへ。なにもゑんりよはねへから、ちつとはなしでもしなせへ。

竹「わしらがやうなもなア、おえどの衆にやア、こつぱづかしくて、なにもかたるべいこたアござんなへもし。彌「ナニはづかしいも氣がつえゝ。おめへもういくつだ。竹「わしやハアお月さまのとしだよ。彌「ムヽ十三七ツではたちといふことか。でへぶ(大分)おしやれだの。竹「ホヽヽヽわしらアこんぢう(此中)追分さアから來て、これのとこのきやくしゆさア、あじやうしたらよかんべいか。猶かしおえどの衆にやア、氣がつまつてなりましない。帶のウときなさろ。そしてこの足さアわしがうへへのつけ(乗)なさろ。彌「ヲイ〳〵かうか〳〵。竹「ヤレハアねづらいこんだよ。そしてがいにあとへさがりやることよ。もつとそ(上)らへつん出なさろ。彌「ヲツトしようちしやうち(と、よぎをすつぽりかぶり、しばらく無言。此うち北八があひかたのおつめもきたりて、いろ〳〵あれどもこれもくだくだしければりやくす。)はや其夜もふけゆくまゝに助郷馬のすゞの音もたえはて、脊戸になく犬の遠吼、しゝを追ふ鳴子の音まで、ふきおくる夜あらしの身にしむばかり、行燈のあぶらも盡て、いつのまにかはまつくらやみ。(このときかのつとになしおきたるすつぽん、とこのまにおきたる儘、それなりに忘れたるが、やがてわらづとをくひやぶり、そろ〳〵はひ出で、ごそつきあるくに、十吉目をさまし何やらんとかんがへゐるうち、かのすつぽんは、北八がよぎの中へはひこむと、北八びつくり目をさまし、)北「だれだ〳〵(と、あたまをあげると、すつぽんうろたへて、北八が胸のあたりへかけあがる。北八きやつといつてひつつかみはふりなげると、彌次郎がかほへばつたり。これもきやつといつて目をさまし、うろたへてひつつかみ、ゆびさきをくひつかれて、)「アタヽヽヽ。(あひかたお竹も目をさまし)「ヤレうつたまげた。あじやうしたへ。彌「火をともしてくれろ。竹「あん(何)としたへ(と、さぐりまはす手さきが、すつぽんへさはり、バアイタヽヽヽ。アチヤハアと、うしろへたふれるひやうしに、ふすまがはづれてともにばつたり。きた八むしやうに手をたゝき、)「まつくらでねつからわからぬ。竹「おたつどんおたつどん。最前から客衆がうでをたゝかつしやる。早くあかし(灯)よヲもつてきなさろ。彌「はや〳〵。アタヽヽヽ(と、むしやうにうろたへさわぐ。此ひまに十吉、彌次郎がふとんの下にいれておきしうちがへの金をぬすみ、かねてこしらへおきたると見えて、石ころをかみにくる〳〵つゝみたるをすりかへ、どうまきへいれて、又もとの如くふとんの下へいれおく。いつたいこの十吉は道中のごまのはひといふものにて、こんな

ことをするがしやうばいなれば、いつの間にかは彌次郎がかねをもつてゐるを見てとり、とちうよりつけきたりて、かくのごとし。この内、宿の女ばうあかりをもちきたり、見れば彌次郎が手にすつぽんがくつついて、ぶつてもたゝいても一向にはなれず。やどの女ばうあわてゝ、）女ばう「ばあチヤ、こゝへはどうしてすつぽんがきたやア。北「ハハアひるまのすつぽんが、つとの中から這出たのだな。コイツすつぽんとぬけさうなもんだ。彌「エヽしやれ所じややアねへ。アレちがでる、いたい〳〵。竹「あんだとおもつたら、がさだアもし。ソリヤアゆびを水の中へいれめさると、ぢつきにはなしてつんにげ申すわ。女房「ホンニさうしなさいまし（ト、あま戸をあける。彌次郎かけ出、手水鉢のなかへゆびをつけると、すつぽんはなれおよぐ、）彌「ヤレ〳〵〳〵とんだめにあつた。北「イヤはや、奇妙希代希有けれつ、ちんじちうやう言語同断なことであつた。ハヽハヽ（ト、そこらとりかたづけ、まだ夜あけにも間もあれば、又もまくらをかたぶけて、しばらくまどろみける中に、北八をかし

ち半分、）

よねたちとねたる側には泥鼈もはづかしいやらゆびをくはへた

おなじく彌次郎もいたさをこらへて、すつぽんにくはへられたる苦しさに



こちや石龜のぢだんだをふむ
玆早其夜も明行ば、寺の鐘も勤行の聲もろともに響渡り、求食鳥の軒ちかく鳴渡るに、みな〳〵目さめておき出れば、勝手より膳も出、それ〳〵に支度する內、やどの女「おひとりは、どこへいきなさつた。北「ほんに十公はどうした。彌「大かた雪陣だらう。さきへやらかせ（ト、かまはずめしをくひかゝる。十吉ははやいつの間にかは、うらみちよりにげ行たれば、いくらまつてもくるはずはなし。彌次郎あたりを見まはしふしぎさうに、）「コウきた八、アノ十吉とやらアなんだらう。北「されば。彌「ハテがつてんのいかぬ。アノやらうが風呂敷包も笠もねへ。大かたおいらが寐てゐる內、たつてしまつたと見える。北「ヤアそんなら何ぞなくなりやアしねへか（ト、そこらを見まはし、）何も別條はねへが。彌「イヤイヤ別條があるやうだ（ト、ふところからどうまきを出しふるつて見れば、紙につゝんだやつが、がつたりとおちる。あけてみればみないしころ。）彌「ヤア〳〵。北「どうした。彌「どうしたどころか、金が石になつてしまつた。エヽエヽ。北「こいつは大變〳〵。彌「くやしい。今のやらうめにすりかへられた。コレ女中御亭主を呼でくんな。はやく〳〵（ト、むしやうにのぼせかへるに、女はさう〳〵たつ



てゆくと、このやうすをきいて、宿のていしゆねまきのまゝかけきたりて、）てい主「今うけたまはりました。さて〳〵とんだことでござります。彌「イヤきさま御亭主だの。コレすまねへぞ〳〵。あんなごまのはひに宿をかすからにやア、こなたもうはまへを取たらう。なぜおいらにさたなしにさきへたゝせた。てい主「コレハけしからぬ。おつれさまとぞんじてとめたのでございます。今朝たゝしつたもさつぱりしりませぬ。大かたうら道からでも、彌「うら道からもすさまじい。そんなでいくのぢやアねへわ。なんでもアノごまの灰を出せ〳〵。コレエやらうを見そくなつたか。おえどでも神田の八丁堀で、とちめん屋の彌次郎兵衛さまといつちやア、おそらくおれが近付の人に誰しらぬものはねへわ。悪くふざきやアがると、やてへぼにようたゝきこはして、合羽干場の地請にたつのだ。足元のあかるいうち、サアごまの灰めを爰へ出せ。サアだせだせ〳〵。てい主「これは御難題。さりとてはおきのどくな。彌「ナニおきのどくの人丸さまだ。イヤ四斗樽さまがあきれらア。サア四斗樽めをこゝへ出せ。てい主「ナニしとだるとは。彌「イヤサ四



斗樽をがつてんでとめたからにやア、きさまも一ツ穴の狐だ。てい主「これは無體な。ナニわしらが四斗樽をとめませう。彌「とめねへことがあるものか。ゆうべから今のさきまで、こゝのうちにねてゐたわ。てい主「アノ四斗樽がかへ。彌「ヲ、サ四斗樽。イヤ〳〵ごまのはひだ、ごまのはひだ。北「コレ彌次さん、マアしづかにしねへ。かはいさうに、御ていしゆのしつたことぢやアねへ。道づれにしてきたはこつちがわりい。どうもしかたがねへとあきらめなせへ。てい主「さやう〳〵。是がわし共が内へござつての相宿ならば、おつしやるも尤だが、何をいふも一しよにござつたものを、申さばおまいたちの御麁相といふもんだ。北「ちげへなしさ。コレ彌次さんおめへりきんでもはじまらねへ。どうもしやうことがねへわさ（ト、いはれて見れば、彌次郎もなる程とおもつたところがつまらず、ふさぎきつてだんまりでゐる。しまひつかねばきた八、）北「彌次さんマア飯でも喰ねへ。彌「めしもくへぬ。ナントきた八かうだ。府中迄いけばちつたアさんだんするあてもあるから、先一文なしで出かけよう（ト、つかひのこりのぜにをあつめて、やう〳〵とこゝのはたごをはらひ、あとにわづかのはしたぜにのこりたるをたよりに、さう〳〵にこゝを出かけ、みち〳〵もこゝろがけて、ごまのはひのゆくへをたづぬれども、いつかうしれず。しやれもむだもどこへやら、たどうか〳〵とたどりながら、）

ことわざの枯木に花はさきもせで
目をこすらするごまの灰かな

北「彌次さんそんなに力を落しなんな。たかゞかうだ。

うき沈ある世は次第ふどう尊
いのれるかひもなき護摩の灰

彌「きたや、おらアもう坊主にでもなりたい。北「おめへとんだことをいふ。彌「いつそえどへかへらうか。北「ナニサけへる事があるもんだ。柄杓をふつても、おいせさままでいつてこにやア外聞がわりい。彌「それでも、モウひだるくてあるかれぬ。北「ハテまちなさい。こゝにえどからことづかつてきた十二銅があるから、さきへいつたらもちでも買つてくひなせへ（ト、いひつゝふたりながら、つゐにすがりてえちら〳〵とゆくむかふから、狀箱をかつぎしにんそく、）「エイさつさ〳〵。北「なんだ野郎の韋駄天さまア見るやうに、やみとかけてきやアがる。彌「アゝうらやましい。あんなにかけるいきほひだから、さだめておめしもふんだくにくつたらう。北「エ、おめへも、乞食じみたこと

をいふもんだ。御状箱のにんそく「エイさつさエイさつさ。北「ソレあぶねへ。こつちへよんな。にんそく「エイさつさ〱（ト、とほりすがいに、御状箱のかどで、彌次郎が小びん先へ、がつたりとあたる。）彌「アイタタヽヽ（にんそくはゐさいかまはず、）「エイこりやさつさ〱。彌「アヽアヽいたいいたい。なんの因果でこんな目にあふか。おらアしにたくなつた。北「エヽばかアいひなせへ。ソレ馬がきたア。彌「馬士どんさきの宿までは、まだよつぽどあるかの。馬士「ナニちつきにそこだア。彌「いくらほどあるへ。まご「たつた三里廿四五丁もあるだんべい。彌「ハツアヽ（ト、だん〱たどり行程に、やがてかまがふちといへる所にいたりて、かゝる中にもすきの道とて、又一首くちずさむ。されどもうたもその身のくるしきまゝなれば、）

名をきいてほしやこがねの釜が淵

くちに孝行したきゆゑには

此所にて餅などとゝのへ、すこしは腹の虫をやしなひ、たがひにちからをつけ合、はなしものして漸沼津の驛につく。こゝにてまづ足をやすめんと、宿はづれの茶やへはひる。ちや屋の女「おはやうおざいますチヤ。お支度でもしなさいませぬか。北「イヤあとの建場でうんといふほどくつてきやした（ト、此内、雨掛をにんそくにかつがせ、供を一人つれたる侍おくにふうの大たぶさ、もめんを片面にそめたる小もんのぶつさきばをりをきたるが、このちや屋へはひる。）女「おちやあがりませ。侍「もうなんどきだの。女「ハイヽ八ツでもおざりやしよ。侍「よいさけがあらばちく〱と出しなさろ。女「ハイハイ三十二文のをあげませうかヤア。侍「今すこし下直なのはなんぼちや。女「廿四文のもおざいます。侍「しからば、ソノ廿四文の酒と、卅二文の酒と等分にわつて、壹合五勺ばかり出しなさろ。女「ハイ〱（ト、かつてより、ちろりさかづきをもちきたり、さかなのにつけなどいだす。）侍「コリヤ〱、此煮付よつた肴共の價なんぼちや。女「三十二文でおざいます。侍「こちらは。女「十二文。侍「ムムよい〱。コリヤ傳助わごりよも一つのみやれ。供傳助「ネイ。侍「コリヤ、向ふに火をたきよるをなごどもは、奥田氏の内室によく似よつた。侍「いかさまこちらの今笑ひよるをなごなぞも、よいやうでござります。侍「どれか〱。ムヽアノはしらのねきに、よこたはつてをるをなごがよい〱。サア傳介今すこしある、呑でしまへ。供「ネイ〱。侍「サア勘定のいたさう。なんぼちや。コリヤ〱、この肴どもは手はつけないぞ。女「ハイ〱、四十二文でございま

すチヤ。侍「ヲヽよい〳〵（ト、供のものにはらはせ、こゝを出かける。北八彌次郎はちやばかりのんでたちあがり、）北「サアいかう。彌「アイおせわ。女「どなたもようおいで（ト、それよりこゝを立出、ふたりはかの侍とあとになりさきになりて、いろ〳〵はなしつれてたどり行に、ならの坂といふ所にいたり、千本の松原にて、きた八がこじつけるうた、）

この景色見ては休にやならの坂、
いざたばこにや千本のまつ。

（侍このうたを聞てかんしんし、）「ヒヤアでけた〳〵。お身たちはえどのものだな。彌「さやうでござります。私どもは夜前の泊で、ごまの灰に取つかれて、大きに難儀をいたします。侍「ハアそれは近頃きのどくぢや。なるほど、ごまの灰のさしたのはいたからう。北「イヤごまの灰と申すは、どろぼうのことでござります。侍「どろぼうとは何ぢや。北「ハイ泥坊と申は、盗賊のことでござります。侍「ハヽアなにか人のものを取よる盗賊の事を、どろぼうといふか。彌「さやうでござります。侍「ソノ又どろぼうを、ごまの灰といふぢやナ。なるほどげせた〳〵。北「ときに旦那へちとお願ひがござります。私ども右の泥坊にあひまして、さつぱり路用をとられてしまひましたから、大きに難儀をいたします。府中まで参れば、いかやうともいたしますが、それまでの所にこまります。そこで財は身のさし合せとやら、どうぞ是をうりたうござりますが、おかひなさつて下さりませぬか（ト、こしにさげたる、いんでんのきんちやくをいだしみせる。）侍「ホウそれはきのどく。途中でものを求るは如何敷が、お身たちの難儀とあれば、求てつかはさう。あたひななんぼぢや。北「ハイ三百ぐらゐにさしあげませう。侍「それは高直ぢや。北「すこしはおまけ申ませう。侍「しからばソノ巾着共のあたひな、かうと六十文のつかはそか。北「それはあんまり。侍「六十一文の遣そか。北「もちつとおかひなさつて下さりませ。侍「しからば六十二文のつかはそか。北「イエどうも。侍「左あらば清水チウ舞臺どもからとんだとおもうて、六十三文のつかはすか。北「イヤモウそんなに壹文ヅツおかひなさつては、御相談ができませぬ。かういたしませう。丁度にお買なさつてくださりませ。侍「ヤ丁度とはなんぼぢや。北「ハイちやうどと申すは、百につばまりましたことを、ちやうどと申ますから、百文なら差上ませう。侍「ムヽなにか、百のことをちやうどといふか。しからばちやうどに求めてつかはさう。

北「それはありがたうござります（ト、きんちやくをわたし、百文取り、）モシ是は安いものでござります。捨うりにしても根付ぐるみでは、四五百がものはござります。侍「イヤ身ども悴どもが、兩人罷在が、是は總領〻のよいみやげぢやて。北「ヘイあなたはまだお若うお見えなさいますに、お子達がおふたりとはよいお樂みでござります。無躾ながら、もうおいくつでござります。侍「あて〻お見やれ。北「ハイ、あなたは、コウト三十七八にもおなりなされますか。侍「身ども當年巳のとしで、四十二歳にまかりなる。北「それはおわかうござります。侍「コレハ御挨拶。しかし身ども相役の園原作野ゑもん、米木津甚太夫など、みな同年でまかりあるが、その内で身どもがいつちわけへ〳〵といひをるて。北「さやうでござりやせう。侍それに又家中うちのわけへをなどどもなぞが、身どもがことを澤村宗十郎に似てをるなぞと申す。北「ハヽアなるほど。侍「ときにお手前はいくつぢや。北「旦那おあてなされてごらうじませ。侍「ムウ、お手まへとしな、こうと廿七八にもなりをるか。北「イエちやうどでござります。侍「ナニちやうど、アノ百か。北「イヤ  是でござります。侍「ハア三百にはわけへをとだ。みな〳〵「アハヽヽ。（このはなしにまぎれて、あゆむともなしに小すは大すはを打過、程なく原の宿へつく、こゝにてつれのさぶらひにわかれて、）

まだめしもくはず沼津をうちすぎて
ひもじき原のしゆくにつきたり

北「エヽおめへまだ、そんなしみつたれをいふわ。いまの錢で蕎麥でも喰ふべい。彌「ソリヤアよからう〳〵（ト、そばやへはひり、）北「ヲイ二せんたのみます。そばや「ハイ〳〵（ト、やがてそば二ぜんを出す。）彌「ふといそばだ。くひでがあつてい〻わへ。北八もう一ばいかへようか。北「イヤ〳〵、さういちどきに錢をつかつてはならぬ。又さきへいつて、何ぞやらかしやせうから、湯でもおもいれのみなせへ。彌「そんならわけへ衆、ゆをひとつくんな。そばや「ハイ〳〵。彌ア、うめへ〳〵。きた八のまねへか。ヲイ〳〵もう一ぱいくんな。ヲツトヲツト、アツヽヽくちをやけどした。あんまりあつい。どうぞそばをちつとうめてもらひていもんだ。北「コレ〳〵わけへしゆ、たび〳〵きのどくだが、藥をのむからもうひとつゆをくんな。そばや「ハイ〳〵。北「コレたつぷりだよ。ヲツトよし。しかしわしがのむくすりは、したちのはひつたゆでなければきかねへから、とてもの事にわけへしゆ、

したぢをすこしざしてくんな。ヲツトよし〳〵(ト、ふなの水をのむやうにぐつ〳〵と呑で、)サアいかう。彌「でへぶ心がたしかになつた。

今くひしそばはふじほど山もりにすこしこゝろもうきしまがはら

それより新田といへる建場にいたる。爰はうなぎの名物にて、家ごとにあふぎたつるかばやきの匂ひに、ふたりは鼻のさきをひこつかして、

蒲燒のにほひを嗅もうとましやこちらふたりはうなんぎのたび

頓て元吉原を打過、かしは橋といふ所にいたる。此所より富士の山正面に見えて、すそ野第一の絶景なり。彌次郎取あへず、

餅の名のかしは橋とて旅人のあしをさすりて休やすらん

斯て吉原の驛につく。棒ばなの茶屋女共、いづれも黄色なる聲々に、女「お休なさいやアせ。さけウあがりやアし。こんにやくと米の飯をあがりやアし。葱のお吸物もおざりやアす。おやすみなさいやアし。駕舁「かごよしかな、かご。馬かた「ナイ旦那衆馬アどうだ。戻りだからやすい。彌「今迄乘づめにのつてきたから、ちつと是からひろひやせう。北「ころびやせうがきいてあきれらア。(それよりこのしゆくはづれに、やぶれあみがさをきたるらう人ものとおぼしく、扇をもちて、)謠「いざ〳〵酒をのまうよ。さておさかなはなに〳〵ぞ。ころしも秋のやまくさ、ききやう、かるかや、われもかう、しをんといふは何やらん。「道中わづらひまして難儀をいたします。なにとぞ路錢の御合力を願ひます。北「イヤモウ、わつちらアゆうべごまの灰に路用をとられて、壹文なしだ。どうぞもらひためがあらば、こつちへ御合力ねがひます。浪人「そんなら、コレつくなつくな(ト、さう〳〵に行過る。ふたりもをかしさ打わらひつゝたどり行に、村はづれに小屋がけして、くわんおん様のかけぢをかけ、麻の破れごろもをきたる坊さま、いねぶりをしてゐたりしが、たび人を見ると、にはかにりんをうちならし、)觀音經「妙法蓮華經普門品第始終忽多闇。世間子息大分遊與毎晩三味線。音曲滅多無正。夜前大食翌日頭痛八百。羅利古灰。笑止千萬。近邊醫者早速御見舞。調合煎藥。呑多羅久名良腹張多心經。チイン〳〵はなのした空殿のこんりふ、おこゝろざしをおたのん申ます。北八「おきやうがおもしろへから、寄進につきやせう。坊「ハイそれは御苦勞、お名をしるしませう。彌「そんなら彌次郎兵衞とつけなさい。坊「ハイ俗名彌次郎兵衞。彌「エヽま

だ死にやアしねへわな。坊「ヘイまだ死なしやらんのかな。イヤ是へは、おこころざしの戒名をしるします。北「ヲイそんなら、そけへかいてくんな。釈の急難取つめた佛果菩提のため、ソリャ一文(ト、なげだして行過る松ばらの中ほどに、十四五のまへがみ、どてをくづしてやくわんをかけ、くわしなどならべて、あそぶかたてにたび人をよびたつる。)「おやすみなさいませ、おやすみなさいませ。北「サア彌次さんくわしでもくはねへか。彌「チトやすまう(ト、どてのうすべりのうへゝこしをかけ、ふたりながらくわしをしてやり、)北「小ぞう、このくわしはいくらづつだ。小ぞう「アイ貳文ヅツ。彌「五ツくつたからいくらだ。小ぞう「わしはいくらだかしりましない。北「そんならこうと、五ツで二五の三文か。これこゝにおくぞ。彌「ヒヤアこいつはやすいもんだ。もうひとつくはう。コリャいくらだ。小ぞう「ソリャア二三文。北「ドレ〳〵うめへ〳〵。小ぞう、せんの錢はすんだぞ。あとのくわしが四ッくつたから、三四の七文五分か。エイは五分はまけろ〳〵。彌「イヤ餅もあるな。北「ドレこいつはうめへ。このもちはいくらだよ。小ぞう「ソリャア五文どりよ。北「五文ヅツならこうと、ふたりで六ッくつたから五六十五文、ソレやるぞ。小ぞう「イヤこのしゆ



は、モウ塵切記ぢやアうりましない。五文づつ六つくれなさろ。北「ヤアヽヤア錢があるかしらん(小ぞう「こヽへ出しなさろ。一ッ二ッ三ッ四ッ(ト、五文ヅツひとつヽにかぞへて、めのこさんようにひつたくられ、)彌「こいつは大わらひだ。北「とんだ目にあつた。サアいかう(ト、立あがり、四五けんもゆきすぎ、)北八「アノ小ぞうは如才のねへやつだ。アノ餅がナニ五文取なものか。二文か三もんの餅だらうに、高くうつて、しよての損をうめやアがつた。彌「いまヽしい。今くつた餅がのどにつまつた。ゲツゲツ(ト、をかしさ半分、子どもとあなどつて、おきにむくつたと打笑ひたどり行。)それより久澤の善福寺といへるに、曾我兄弟の石牌あるをゝがみて、北八、

今曾我に機縁をむすぶわれヽは
外に一家も壹もんもなし



富士川のわたし場にいたりて、彌次郎兵衛、

ゆく水は矢をいるごとく岩角に
おたるをいとふふじ川の舟

此渉を打越けるに、はや日も西の山の端にちらつき、おのづから道急ぐ馬士唄の、竹にとまる雀色時、やうヽ蒲原の宿にいたる。

道中膝栗毛後編

此宿の御本陣にお大名のお着と見え、勝手は今膳の出る最中、北八そとよりさしのぞきて、北「コウ彌次さんちよつと此ふろしきづつみをもつてゐてくんな。彌「どうする。北「イヤちつとのまだ(ト、彌次郎につゝみをわたし、御本陣へずつとはひり、勝手のどさくさの中へあがり、かたすみのはうへすわると、本陣のをんな、だん／＼ぜんをもちはこび、大ぜいへすゑると、)北八「ヲイこゝへも一ぜん。女「ハイハイ(ト、すゑる。かゝるこんさつの中ゆゑ、人もきがつかず、きた八おもふさまくつてしまひ、すきまを見て、手ぬぐひをひろげ、わんにもりたるめしを一ぜんちやつと打あけ、てぬぐひに引つゝみ、やがてこそ／＼とにげ出、まごつく内、彌次郎はむかうの軒の下に待ち、たいくつして、)「きた八か。北「ヲイヲイ。彌「どけへいつた。北「へゝ、おらア飯をくつてきたが奇妙か。彌「エ、どこで。北「本陣でどさくさまぎれに五六ぱいやらかしてきた。彌「ソリヤアいゝことをした。しかし手めへも實のねへもんだ。なぜおいらもつれていかねへエ。北「イヤおめへにやアみやげをもつてきた(ト、手ぬぐひにつゝみし飯をいだす。)彌「何だめしか、有がてへ。イヤなか／＼手めへきがきいてゐるわへ。アゝうめへ／＼(ト、のこさずくつてしまひ、かの手ぬぐひをうちふるつて、)ヤアこれはてぬぐひにつゝんできたな。エゝきたねへ。北「ナニきたねへものか。彌「それだとつて、手めへが金玉やなにかをあらつた手ぬぐひだものを、アゝむねがわるい。ぺツペツ。北「ハヽヽヽ　時に宿はづれへいつて木賃と出よう(ト、打つれて此しゆくのぼうばなへ出、そこらあたりをまご／＼して、)彌「コウどうぞいきな女のある内へとまりてへの。北「ナニ木賃でとまる内に、いきもへうたんもあるものか。ハテどこだかしれねへ(ト、あつちこつちのうちをのぞきあるき、のきの下にねてゐる犬のあしをふんで、大きにくひつかれ、)北「アイタヽヽ。犬「キヤアン／＼。すしうりのこゑ「あぢのすウし、さばのすウし。北「コウすしやさん、こゝらに木ちん宿はねへかの。すしや「アイむかふのとつぱしのうちよ。彌「アイおせわ(ト、おしへられたる内のかど口から、)北「チト御めんなせへ(ト、ずつとはひりみれば、たゝみの四五でふもしかれようといふ内にて、ぶつだんひとつとやぶれつゞらひとつのしんだい、あるじは七十ちかきおやぢ、ゐろりのきはにわらをなつてゐる。じざいにてつるしあるなべに、何かぐつ／＼にえるそばに、六部が一人

じゆんれいふたり、一人は六十餘のおやぢ、一人は十七八のむすめ、おいずるをきたまゝ、あかぎれだらけの足をのばし、火にあたつてゐる。此家のばゞア、松のえだをへしをりゐろりへくべながら、）「こつちへはひらしやりませ。北「わしらを今夜とめてくんなせへ。おやぢ「あがらしやりませ。ソレそこに水がある。あしよヲゆすぎなさろ。（あしをあらひながら北八、）「彌次さん見ねへ。いゝ順禮がとまつてゐる。彌「ホンニこいつたゞはおかれぬ。ひだるい時にやアまづいものなしだ（ト、打わらひあしをあらひて上へあがる。）六部「サアこゝへ來てあたりなさろ。北「コウ彌次さんもつとそつちへよりな（ト、娘のそばへわりこんですわる。あるじの婆は、ゐろりのなべをおろし、）ばゞ「サア粥ができた。みんなくひなさろ。彌「ソレはあつたかでよからう。ばゞ「インネこんたしゆのことぢやアござらぬ。コリヤアこのしゆのかいだアよ。順禮「イヤけふ貰つた米ア、しひなばつかしたんとあつて、そして半分は石ころだアのし。こりよヲくつたら、腹がおもたくなるだんべい。ばゞ「ろくぶさんのも三合ばかしやアあつたんべい。そこへわけてくひなさろ（ト、この内じゆん禮六部も、てんぐ〵にちやわんを出し、もつて喰ふうち、だし合の米なれば、彌次郎きた八はたゞ見てゐるばかりで、手もちなくてたばこ入のそこをはたく。六部はやがてくひしまひて、）六部「ふたりのお衆はさだめしおえどのしうだらうか、わしどもはおえどで、てんこちもない目にあつたアもし。彌「どうしなさつた。六部「わしがハアこの六部になつた因縁のウかたり申べいが、ヤレ扨人といふもなア はあ、運がなくちやアもちあげべいにも、あんとしてなづきやアあがり申さない。わしがハア、わかい時分におえどに居申たが、そのとき何でもハア夏のとつきから秋へぶつかけて、毎日〵〵ずなく風のふいたことがあり申た。其じぶんハア何でも金儲のウすべいとつて、いろ〵〵首さアひねくりまはいて、とつけもないことを思ひついたアもし。彌「はての、六部「イヤサ箱屋をおつぱじめ申たわ。あにが重箱だアの櫛箱だアのと、いろ〵〵箱共をづなくかひこんで、賣つもりだアもし。彌「ハテ風がふいたによつて、箱屋とはどういふあんじだの。六部「さればさア、わしがハアおもひつきにやアあにが扨、まいにち〵〵とひやうもなく風がふいて、おえどではがいに砂ぼこりがたち申すから、おのづと人さアの目まなこへ砂どもがふきごんで、眼玉のつぶれるものがたんと出來るだん

べいとおもつたから、そこでハアわしが工夫のウして、せけんの俄盲がほかにあでうせう事はなし、みんな三味のウならはしやるだんべい。さうすると三味せんやどもが繁昌して、せかいの猫どもが打ころされべいから、そこで鼠どもがづなくあれて、あんでもせけんの箱共のウ、みんなかじりなくすべいこたア目の前だアもし。コリヤハアこゝで箱屋商賣のウおつ初めたら賣心いこたアちがひはないと、あにがハア身上ありぎり、箱どものウ仕入たとおもはつしやい。彌「コリヤアいゝおもひつきだ。大かたうれやしたらう。六部「イヤひとつもうれましない。そこでわしもハア是ほどまでに工夫のウして、せつぴまうかるべいとおもつた事がつつぱづれ申たから、しよせんハア、あでうしてもいかないこんだと發起のウして、六部になり申た。兎角世かいはおもふやうにやアならないもんだアもし。北「ハアかんしんなおはなしだ。時に又順禮さん、おめへはどういふ事からおもひついて順禮にやア出なすつた。順禮「コリヤハアわしも序に懺悔ばなしのウしますべい。この娘はコリヤアふとりの孫でござるが、わしどもはハアかはつたこんで、佛緣のウ結び申た。わしは日光のはうでござるが、さだめてそれさまだちも、はなしに聞てゐやり申すだんべいが、わしどもが國なぞは雷がたくさんで、此二十年ばかしもあとのことであり申たが、ふと夏でかく雷が鳴申て、わしどもがせどぐちさアへおつこちたとおもひなさろ。さうするとハア其雷どのが、榎のかぶつちいで、でかく尻をうち申て癪氣がおこつたとさわぎやる事よ。あにがそこで、天ぢくのウへ歸るべいこともできないから、わし共の內で養生のウしてゐる內、恥さアかたり申さにやア理が聞え申さないが、その雷がわしどもの娘とがらりねんごろのウしまして、互にハアはなれべいやうすもおざんないから、すぐにその雷どのをむこに取たとおもひなさろ。そこでハア天ぢくの親かたどのから、夕立の時分は手傳てくれろとつて、夏中はたのまれていきやり申たが、ふと夏、上がたさアへかせぎに行とつて出たなりけりで、かへらぬとおもひなさろ。あまつさへ、その時わしが娘はおつぱらんではゐるし、あにがハア案じをるまい事か、大かたどこぞへおつこちて、腰骨がなぶんぬいて、わづらつてでもゐるだんべいとおもつたばかしで、便きくべいにもあてづつぽうなり、コリヤハアあんたるこんだとおも

つてゐるうち、友達の雷どのが來て、これのむこどのはハア熊野うらへおつこちて、鯨にがら〻呑れたとのはなし。ヤレさて悲しいこんだと娘もなきやる、わしもハア片腕のゥもがれたやうにおもひをりましたが、あんとすべい、せうことがない。そんだいにやアむすめが雷どの〻種をおつぱらんだから、鬼子でもうみをるべい。それにハア親雷の跡をつがせべいとたのしんで、あんでも鬼の子をうむやうにと氏神さまへ願のゥかけて祈た所が、因果なこたア生れた子が此娘でござり申す。そこでハアわし共もちからのゥおとして、是ほど祈たのに鬼はうまず、しかもこんなに滿足な人間の子をうむといふは、よく〱の因果だとあきらめて、罪亡しにこりよヲつれて、順禮と思ひ立つたアもし。わしども程いんぐわなもなアないとおもやア、はなしよヲするさへむねがつぶれ申わ(ト、なみだながらにはなすうち、はやよもふけければ、主のばゞそれ〲にねござなどあてがひて、)ばゞ「サアみんなそべらしやいませ。内がかいにせばいから、わしと順禮の女の衆は、天上へあがつてねますべい(ト、九ツばしごを二かいへかけて、じゆんれいのむすめとつれて上る。六部は笈のうちより紙帳など出しかぶる。あるじのおやぢもじゆんれいも、うすべらなるふとんのやうなるものをひつぱり、ゐろりのはたへころげてねる。)北「コリヤア小便がもるやうだ。彌「おいらもいつしよにいかう(ト、うらぐちへ出、)彌「アノ順禮めぶつちめようとおもつたら、二かいへ行をつた、いま〱しい。北「さつきから咄してゐる内、そつと手をにぎつたり尻をつめつたりして、ちわをしてゐたがおめへしるめへ。彌「うそをつくせ。北「うそでない。今夜アノ娘をぶつちめて見せよう。彌「早いをとこだ(ト、うちへはひり、うらぐちをしめてねる。)か〻る木賃どまりのわびしきも、はなしのたねとはいひながら、凌ぐべきむしろ屏風も、破壁をもる風の音いたく〱更行鐘に目覺て、北八あたりを伺ひ見れば、みな旅勞れのかけ合鼾ゴウゴウスウ〱ムニヤ〱〱。(時分はよしと北八そつとおきあがれども、あかりはなしまつくらやみ、そこらあたりをさぐり廻して、よう〱とはしごに取つき、二階へあがり見れば、天井は竹すのこにてその上にむしろをしきたれば、あるくとミシリ〱となるにおどろき、やがて四ツばひになつてさぐりまはり、むすめとおもひばゞアがねてゐるふとんの中へはひこみ、そろ〱なでまはしゆすりおこせば、ばゞアめをさまし、)ばゞ「だれだ、あによヲする(ト、いふこゑに、

北八うろたへ、さてはかどちがへせしと逃だすひやうしに、あしへたけのとげをたて〻ばつたりこけると、竹すのこをふみぬき下へどつさりおちるおと、ミシ〳〵ガラ〳〵ストウン。うちのおやぢめをさまし、」「あんだあんだ。二かいのばゞ「あんだかしらないがとつぴやうしもない。皆（みんな）おきなさろ〳〵。（このおとに六部も順禮もおきあがり、）六部「どえらい音がした。あかりをつけなさろ。まつくろくてあんだかかんだかしれないぞ。（こゝにあやしいかな、北八てんじやうをふみぬき下へおちたところが、何か箱のやうなもの〻中へおちて、いつかうにわからず。あしにころ〳〵となんだかひつか〻るゆゑ、さぐりて見れば、ほとけさまの後くわうなり。さてはぶつだんのなかへおちしと、くるしきうちにもをかしさ半分、このまにかけいでんとするに、はやあかりをどもして内のおやぢ」「あんだかほとけさまのなかへおちたさうだ（ト、ぶつだんのとをひらけば、おもひがけなく北八がはひ出たるゆゑ、きもをつぶして、）おやぢ「イヤ此人は、北「モシ身延様（みのぶさま）へはどうまゐります。おやぢ「ばかアいはつしやい。こんたアまあ、アゼニそこへはひらしやつた。北「イヤわつちは小便におきた所が、ツイ戸まどひをして。おやぢ「アニ戸まどひをした。



イヤこの人はほとけさまの中へ小便をしやせぬか（ト、ぶつだんの内をのぞき、）おやぢ「ヤア〳〵こんたア天上からおちめさつたな。北「アイサつひアノ猫におはれておちやした。おやぢ「アニこんた鼠ぢやアあるまい。猫におはれたたアあんたるこんだ。そしてアゼ天上へあがらしやつた。北「イヤわしはふんどしを鼠にひかれたから、もしや二階にでもあらうかとそれをさがしに（ト、いひわけをしてゐるうち、上からばゞアがおりて來り、）ばゞ「イヤ〳〵さうぢやアござらない。わしもハア六十になり申が、どこの國にか、あによヲすべいとおもつて、わしがひところへはひこみめさつた。おやぢ「ヤア〳〵こんたア氣がちがやアせぬか。わしどもは二十年もこつちイ、そんなあじやらしいこたア中絶のウしてゐますに、アノしわくたなばばアが所へはひこむといふは、イヤはやこんたはみたくでもない人だ。北「イエもう御めんなせへ。コレ彌次さんねたふりをしてゐずとおきてくんな（ト、ゆりおこされて、をかしさをかくし、）彌「どうもわけへものといふもなア、あとさきのかんげへがござりやせん。どうぞれうけんしてくんなせへ（ト、六部やじゆんれいもとも〴〵くちをそへて、やう〳〵とをさまり、きた八もゆかた一まいうりしろなして、てんじやうのつくろひちん少々出し、さらりとすんでしまひければ、程なくよがあけて彌次郎北八はさう〳〵に此所をたち出で、ゆく道すがら、）彌「北八でへぶふさぐの。小田原の泊では、すゐふろの底をぬいて貳朱ふんだくられ、又ゆうべは二かいをぶんぬいて、三百とられたもちゐがねへぞ。北「イヤ面目しでへもねへ。いま〳〵しいが一首詠だ。

順禮のむすめとおもひしのびしは
さてこそ高野六十の婆々

彌「ハヽヽヽヽ。ゆふべ戸まどひの言譯もをかしかつたが、ふんどしを鼠にひかれたとは、いゝこじつけだ。イヤそれでひとつ、咄をあんじたがどうだ。北「コリヤおもしろへ、聞てへの。彌「まづかうだ。ゆうべのやうに順禮や六部と一所に、木ちんどまりをしやした。時に手めへが夜中におきて何かまごつきやす。さうすると、みんなが目をさまして、コリヤおめへ何をしなさるといふと、手めへがいふには、イヤわしはふんどしを鼠にひかれやした。たしか二かいの方へ引ていつたやうだといふと、順禮も六部も、さういひなさればわしも枕元に置たふんどしが見えぬ。イヤわしがのもこゝにおいたがない。コリヤアみんな鼠にひかれたもんだら

う。なんでも二階へいつて見やせうと、みなつれだつてはしごをあがりやす。さうすると、二階のすみのはうで三味線の音がする。イヤこいつはふしぎだとあがり口からすかして見れば、鼠どもが大せいよつて、みんなのふんどしをひろげて見て、一びきの鼠がいふには、おいらが引てきた六部のふんどしは、振ふと三味線の音がするはどうした事だやら、がつてんがゆかぬといひ乍ら、其ふんどしを口にくはへてふるつて見ると、なる程、チヽヽ、チン〱なぞとなりやす。そこで又外の鼠がいふには、六部のふんどしに限つて、三味線の音がするもふしぎだ。ものはためし、おいらがひいてきた順禮のふんどしをもふるつて見ようと、おなじく口にくはへてふるふと、是も、チヽチン チン〱と、なりやした。こいつはめうだと又一疋の鼠が、おれは北八とやらいふ男のふんどしを引てきたが、コリヤアゐつちうだから短いだけで、鼓弓のねがするだらうと、くはへて振つてみれば、ヅヽンヅン〱と義太夫三味線の音がしやす。そこで鼠どもが、こいつはふしぎだ、六部やじゆん禮のふんどしは、みなかはいらしい歌三味線のねがするに、なぜ北八とやらがふんどしは義太夫三味せんのねがするだらうといふと、すみつこの鼠がしばらくかんがへ、ソリヤアそのはずだわへ。ナゼそのはずだ。ハテ北八とやらは大かたふと棹だらうよ。北「ハヽヽヽ奇妙〱（ト、此はなしのうち由井のしゆくにつくと、雨がはよりよびたつるこゑ）茶や女「おはいりなさやアせ。名物さたうもちよヲあがりやアせ。しよつぱいのもおざいやアす。お休なさいやアせ〱。彌「エヽやかましい女どもだ。

呼たつる女の聲はかみそりや
さてこそ爰は髪由井の宿

それより由井川を打越、倉澤といへる立場へつく。爰は蚫榮螺の名物にて、蜑人すぐに海より取來りて商ふ。爰にてしばらく足を休めて、

爰もとに賣るはさゞゐの壺燒や
見どころおほき倉澤の宿

それより薩埵峠を打越、たどり行ほどに、俄に大雨ふりいだしければ、半合羽打被き、笠ふかくかたぶけて、名におふ田子の浦、清見が關の風景も、ふりうづみて見る方もなく、砂道に踏込し足もおもげに、やうやく興津の驛にいたり、こゝにあやしげなる茶店にたちより、北「ヲイばあさん、ソノきなこをつけただんごを、二三ぼんくんなせへ。彌「さて〱、久しぶりでおめへの顔を

見たわ。いつもお達者でめでたい。時にこの子は、ちつさな時見たよりかア大きくなつた。姉娘は達者かの。ばゞ「わしは子どもはおざんない。彌「そんならまごか。ばゞ「インネ、子がなけりやア孫もおざんない。彌「ハテノおめへの孫でなけりやア、たしかどこのか孫であつた。ばゞ「インネ馬士おちやアおざんない。となりのかごやの子でおざるわ。彌「ハアさうか。コウあの子、團子がふたつ餘つた。ソレくひな。かごやの子「うらアやナだ。彌「ナぜいやだ。かごや「ナニ糠アつけただんごはやアだ。彌「ナニぬかをつけるものか。コリヤきなこだ。ばゞ「インネわしらがとこぢやア、ぬかア付てうり申。彌「エヽだうりでざら〳〵するとおもつた。ペツ〳〵。そんなら犬にやらう。コヽヽヽ。犬「わん〳〵。彌「ソリヤやるわ。あんといへ。犬「あアん。彌「アヽをしいもんだ。（ト、のこらず犬にやつてしまひ、むねをわるくしてこゝをたちいで、たどりゆくに、猶あめはしきりにふりつゞきて、いつからしやれもむだもいではこそ、たゞとぼ〳〵とあゆみなやみて、ほどなく江尻のしゆくをうち過けるに、こゝにてあめもはれければ、）

降くらし富士の根ぶとをうちすぎて
江尻に雨の霽あがりたり

雨やみたれば、おのづから行かふ人の足もかろげに、からしり馬の鈴の音もいさましく、シヤン〳〵〳〵。馬士のうた「よんべナアしのんだらアエヽ、おさんどなアヽ、まづいイあせさねてゐた、からいよなへの飯がすぎて、つつぶしたアアヘ引。ニヽこのほてつぱらア、またばりをこきやアがる。ついでにうらもやらかすべい。シヤア〳〵〳〵。（さきへゆく馬方、あとをふりかへり、）「次郎ヤイ、にしがおまア、だがおまだ。あとから行馬かた「コリヤア下町のさかやのおまよ。あしこのやらうめが、がいにづなくつかやアがつたんで、おまアゑづい。きんにようも清水へ四くらいつてかへると、役があたつて府中までとつばしらかしたア。馱ちんはみんなうらが呑でしまつて、がらおまにくはせべいもなアなし、丁場の雪陣のやによヲ、がらゝみんなくらやアがつた。さきへ行馬かた「アノ酒屋のかゝあはしよつぱいやつよ。うらがあしこにゐる時分にやア、飯の中へすさをまぜてくはしやアがつた。それにあんだかハアうらを見ると、むしやうに字を書ならべの、イヤ算盤をかじれのと、いろ〳〵な戯言をつきやアがつて、うらをあしこの伴頭に仕ようといやアがつた。其手をくふものか、業さらしナ。

ドウ〳〵。北「まごどん、火をかしてくんなせへ。馬士「アイ〳〵おまいちやアおえどだな。おえど衆は氣がづない。きんによう、うらが府中から江尻迄三百でのせた旦那が、おえど衆でえい旦那よ。長沼迄くると、その旦那がいふにやア、江尻まで三百ぢやア安いから酒てを二百ましてやらう。そんだい酒はべつにこつちかちかつて呑せるとて、吉田の的ばで、たらふく酒を振廻しやつた。それから又いはしやるにやア、コリヤまご、にしやァ一日おまを引てあゆんで草臥たらう。是からうらがおりて、にしを此おまにのせようといはつしやる。コリヤハアあんたるこんだ。うらア乘こたアやアだといつてもきかない。旦那よせつぴうらにのれとつて、そんだい乘賃を二百やらうと、梅の木の立場からとう〳〵うらをばいのせて、江尻へくると、おきつまでおまア取のだが、草臥たらうから、おまアとつたぶんでだちんやらうと、又二百下さつた。あんなえい旦那はめつたにアないもんだ（ト、はなしのうち、此馬にのつてゐる旅人、馬のうへにてそらいびきをかく。）「ゴウ〳〵〳〵。馬士「ヲイ旦那あぶない。目をさましなさろ。（たび人おこされて目をひらき、）「馬が埒があかぬからねぶけが出た。きのふ三嶋から乘た馬はよい馬であつた。そして馬士がとんだ氣のよい男よ。三嶋から沼津へ百五十でねをして乘た所が、馬士がいふには、旦那はこんなはやい馬に乘て、今に落ようか、イヤめつたにゐねぶりもならぬなどと、心遣ひして居さしやるだらう。それがきのどくだから、駄賃はモウもらひますまいといひをる。それから三まいばしへくると、旦那は馬のくらで腰がいたみませう。ちとおりてお休なさい。酒でもあがるなら酒手はこつちからあげませうと、馬かたのはうから百五十くれて、沼津へくると、さきのしゆくまでおくつて上たいが、わしが馬ははねますから、外に馬を取て乘ていかしやれ。駄ちんはわしが進ぜませうと、又百五十たゞくれた。あんな氣のよい馬士もないもんだ（ト、はなしのうち此馬をひく馬かたあるきながら、）「ゴウ〳〵〳〵ムニヤ〳〵。（此はなしに彌次郎北八も大きにきようにに入、歩むともなしに府中のしゆくにつく。先傳馬町に宿をかりて、それより彌次郎がしるべの方へたづね行。ここに金子の才かくとゝのひ、大きにいさみ出してやどへかへり、なんでもこよひはかねてきゝおよびし、あべ川町へしけこまんと、北八もろとも其したくをして、やどのていしゆをまねき、彌「モシ御ていしゆ、わつちら

ア是から二丁町とやらへ見物にいきてへもんだが、どつちのはうだね。ていキ「安部川の方でござります。北「遠いかね。ていキ「爰から廿四五丁ばかしもあります。なんなら馬でも雇てあげませうか。北「こいつはいゝ。彌「から尻にのつて女郎買もおもしろい〳〵。頓て爰より売尻馬に打乗ゆくほどに、かの安部川まちといへるは、あべ川彌勒の手前にて、通筋よりすこし引こみて大門あり。爰にて馬をおり、廓に入て見るに、両側に軒をならべて、ひきたつるすがゞきの音賑はしく、見せつきのおもむきは、東都の吉原町におほよそ似たり。客とおぼしきが、黒き木綿に紋のつきたる羽折などきて、手拭のさきを結ずしてかぶり、おくり行茶屋の女は、焼杉の駒下駄をひきずり、客人の神と見えしは、おほくは股引草鞋にて、いづれも祖父ばしよりなり。そゝりでやいに前垂がけの競あれば、棒のさきにもつかうなどくゝりつけて、かつぎあるくひやかしあり。行かふ男女は開帳参の人のごとく、更に風俗定まらず。又繁昌は言斗なし。（向ふよりくるは地まはりと見えて、かたのしまがら、かはりたるどてらをきて、山だしのひくき角下駄に竹のかはのはなをすげたるをはき、さらしのてぬぐひをゐくびにかぶり、往來の人に行あたりて、）あんだイ、コノおんちいは。まなこをはだけてとほりやアがれ。アゼおれにぶつかつた。あとからくる地廻り「ヤイ市イ、あんとした。そいつへこたらしてやらずい。（これはへこませるといふがごとし。）さきのあひて「くらがりでツイがらゝ行合ました。かんになさい（ト、行過る。それより此てやい、かうしさきをのぞき、）地廻「アノ壁のきしにゐる女のつらは、淺間さまの天の面のやうだ。アリヤ立て行ア。せいのみじかい女らだ。梶原の馬がくつた笹葉を見るやうに、半分しかア育ないわ。今一人の地廻「こゝの内の着物は、みんな七間町の硯ぶたのやうだナア。（このかぢはらの馬がくつたさゝのはといふは、きつねがさきのかぢはら堂の故事也。又七間丁のすゞりぶたといふは、きじろいろにあぶらゑのかいてある、するがさいくのすゞりぶたの事也。きもののもやうを、かのあぶらゑに見たてゝのしやれなるべし。）彌「ナントどこぞへあがらうか。北「まちなよ。たしかに爰は壹分と拾匁と貳朱だげな。壁のはうにしよう（大かた拾匁だらう。）むかうの暖簾はなんだ。しなのや、こちらがちやうじや、こゝが大和屋だな。しかしどうしてあがるのだ。勝手がしれねへ（ト、かうしさきをうろついてゐる内、客人ひとりあがるを見すまして、）北「よし

よし、サアこゝにしやせう。彌次さん見たてねへ。彌「ヲツトきまつた。サアあがらう（ト、つれだちてすつとのれんの内へはいると、わかいもの、）「コレハよくお出なさいました。先うへ〳〵（ト、二かいへあんないする。二人は見たてた女郎をちうもんすると、すぐに其へやへつれて行き、あたりを見れば、とこのまに琴もあり、花もいけてあり。すべて吉原小店のへやもちのごとし。こゝは酒代べつにかゝると見え、わかいもの、）「御酒はどう致しませう。北「酒も出してくんな。わかいもの「ハイ〳〵とつてあげませう（ト、此内、彌次郎があひかた名は小さゝの、うへだの小そで、しまじゆすのおび、そらいろちりめんのうちかけ、北八があひかたいさ川、しまちりめんにきんもうるのおび、くろちりめんの打かけ、いづれもみなもみうらなり。座につくときしろいろのたばこぼんを控へて、）小ざさの「よくおざいました。いさ川「エ、見たくでもない、ヤアノがきやアまだたばこもいれないヤア。小さめヤア引く。彌「サアおめへがた、もつとこつちへよんなせへ。わけへしゆさけをはやく。わかいもの「かしこまりました。只今（ト、いひすてゝゆく。程なくさかづきだい、てうし、すゞりぶたをもち出、おさだまりのさかづきもそれ〴〵にすんでしまひ、）彌「わけへしゆ一つのみな。わかいもの「ハイ。彌「ソレさかな（ト、なんり



やう一つはずむ。）わかい「是はハイ（ト、いたゞいてたつてゆく。入かはりてかぶろ小さめかけきたり。）かぶろ「アノヤ、今吉野屋から磯次さんがおざいまして、おまいに用がありますから、ちよつくりきさしやいましとさヤア。いさ川「今いかすに。小さゝの「ハレ小さめやア久能の仙さんはおざつたか。小さめ「インネ。小ざさの「ばあチャおらやだやア。こんちうからいかず／＼といつてよこして、がいに人をつるくるヤア。北「コウおめへがたア、もつとこつちへよつて一ッ呑なせへ。いさ「アイまあおまいちあがりまし。（此内若い者二人とやりてがつれだち、八寸のうへになにかぢうばこをさげてもちいで、）やりて「たゞ今は有がたうおざります。わかいもの「わたくし金太と申ます。是は權右衛門、已後はおたのみ申ます（ト、ていねいにれいをいつてたつ。）彌「ハヽア爰では花も、ひつぱらにもらう極とみえた。若者に金太權右衛門といふ名もめづらしい。北「コノ重箱はなんだ。ハアあべ川の五文どりか。是が二朱のかへし、紀の字やの臺といふものだの。ハヽハヽ（ト、此内、らう下何かさわがし。大勢のこゑにて、すむのすまぬのとわめきて、となりさしきへみな／＼はいる。）北「さうざうしいなんだ。いさ「なんでもおざりましない。アリャア性のわるい客衆を、



めつけて、つれてきたのでおざいますヤア。彌「こいつはおもしろい。ドレ〳〵(ト、ふすまをすこしあけて、となりざしきをのぞき見れば、大ぜいの女郎がきやくひとりを中にとりまき、)女郎「おまいこんぢうからこつちイはなせきましない。(今一人の女郎)てうじやへばつかしおざるから、とこなつさんが腹アつツたつもむりぢやアおざりましない。(此の客人は山家の人、)「ヤレさてわしはハイ、おつといもきんにようも、來ず〳〵とおもつたが、がらい用ができてこられなくなつた。ソリアハイてうじやへも川なべのをんぢいどんの附合で、いかずこたアいつたアけれど、アニハイ爰の常夏あんねへと申かはしたこたアあるし、日天さまかけてまづい心ぢやナおざらないヤア。女郎「ばあチヤ、それでもてうじやの花山さんに馴染で、いかずこたアちがひはおざりましないわ。客「アニハイそんだこたアないこんだが、づなくさういやアせず事がない(ト、しをれかへつてゐる。爰の内のあね女郎、名はとこなつ、うちかけをつまみあげ、きせるたばこ入をもちそへ、いういうとしてざしきへはいり、)とこ夏「彌弟さんこんぢうからあひましないが、よくおざいました。客「よかアきましない。かんにしなさろ。とこ夏「なにもかんにせずこたアおざりましない。わしもハイ、此内ではあんねい〳〵といはれる女郎でおざいます。こんなアに顔をへしつぶされちやア、ほうばい衆の前へたゝずやうがおざりましない。とてもハイ是つきりの縁なら、おまいちのやうな性根のわるい客衆は、見せしめのため、わしがせずことを見さしやいまし。ソレ夏菊さんさつきの剃刀を持ておざいまし。客「ヤレそりやアわしよヲどうせずと思つて。常夏「どうせずもんか髪をきらずにヤア(ト、かみそりを持つて立かゝれば、きやくはうろたへあたまをかゝへて、客「ヤアマリヤさて待なさろ待なさろ。(しんざう共くちぐ〳〵に、)「まアたずこたアおざいましない。客「そんだアとつて、此ちつぽけなまげの ちよんさきさへきらないに、そりよヲハイきらずこたアゆるしなさろ。とこ夏「ナニゆるさずもんで。客「アレこりや。とこ夏「ソレきらずに。客「ヤアレこりや〳〵(ト、にげだすを、とりまきて逃さばこそ、よつてかゝつてあたまをむしりちらかす。いつたい此客人けんつうにて、みな付髪なれば、まげもびんもおちてしまひ、客はあたまを撫でまはして)「ヤアこりやハイ、あたまアむしりなくしたわ。女郎みな〳〵「ばあチヤ、ヲホヽヽヽ。客「ヤレ笑所ぢやアない。コレわしはハイ、ちやうじやへはいくま

いから、あたまア出してくれなさろ。とこ夏「わしやアしりましない。客「アレハイ夏菊どのがかくした。サアあたまアはやく出しなさろ。とこ夏「おまいハイ、是でもちやうじやへいかずか。客「モウいかない〱。とこ夏「ほんとうにかやア。客「天照皇大神宮さまかけていかない。とこ夏「すんならなつぎくさん、出してあげさしやいまし（ト、とこ夏のさしづに、かくしたるつけ髮を出してわたせば。）客「ヤアまだたらない。なつぎく「モウそればつかし。客「アニハイ、まだかた小びんがそこらにやアないか、尋てくれなさろ。女郎「コレカあるヤア。客「それだ〱（ト、じしんにあたまをさぐり廻して、まげさきをよこちよにくつつけ、ためいきをつぎて、）客「ヤレ〱えずいめにあつた。みな〱「ヲホヽヽ（ト、これより中なほりの酒になりて、いろ〱あれども事長ければばりやくす。彌次郎北八ははらのかはをよぢり、）彌「いづくのうらでもあるやつだが、よつぽどおもしろかつた。ちやうど去年のはる、一九が中田やの勝山にしばられた時、あんなざまであつた。ごふざらしな（ト、此内わかいもの來り、）「モウお床にいたしませう。チトあつちらへ（ト、北八はじぶんのあひ方のへやへ行と、そのうちわかいものとこをとりて、ふたりながらひきわかれてしばらくまどろむ。）斯て一すゐの夢はさめてあかつきのなごりををしみ、彌次郎床を起出れば、北八も目を揩りながら爰に來りて、打つれ立梯子をおりるに、みな〱おくり出て、挨拶そこ〱にひきわかれ、傳馬町さして急ぎかへり來りければ、はやくも宿には朝めしの用意とゝのへ、膳をすうるに、支度あらましにして、やがてこの驛を打立けるが、今もどりしみちをますぐに、ほどなく彌勒といへるにいたる。爰は名にあふあべ川もちの名物にて、兩側の茶屋いづれも奇麗に花やかなり。ちや屋女「めいぶつ餅をあがりやアし。五文どりをあがりやアしあがりやアし。彌「おいらアゆうべ、二朱がもちをくつて來たからモウ爰ではくふめへ。北「さうさ〱（ト、此内、あべ川の川ごし道に出むかひて、）「だんな衆おのぼりかな。彌「ヲイきさまなんだ。川ごし「川ごしでござります。やすくやらずにおたのん申ます。北「いくらだ。川ごし「きんにようの雨で水が高いから一人まへ六十四文。北「そいつは高い。川ごし「ハレ川をマアお見なさい（ト、打つれて川ばたに出、）彌「なる程がうせいな水せいだ。コレおとすめへよ。川ごし「ナニおまい、サアそつちよヲつんむきなさろ（ト、二人をかたぐるまにのせて川へさ

ぶさぶとはいる。）北「ア、なんまいだ〳〵。目がまはるやうだ。川ごし「しつかりわしがあたまへとつつきなさろ。ア、コレそんなにわしが目をふさがつしやるな。向うが見えない。彌「なるほど深いわ。コレおとして下さるな。川ごし「アニおとすもんかへ。彌「それでもひよつとおとしたらどうする。川ごし「ハレおとした所が、たかでおまいはながれてしまはしやるぶんのことだ。彌「エ、ながれてたまるものか。イヤもうきたぞ〳〵。（ト、かたぐるまよりおりてちんせんをやり、）彌「ソレべつに酒手が十六文ヅツ。川ごし「ヘイコレは御きげんよう（ト、川ごしは、すぐて川かみのあさいはうをわたつてかへる。）北「アレ彌次さん見ねい。おいらをばふかい所をわたして、六十四文ヅツふんだくりやアがつた。

川ごしの肩車にてわれ〳〵を
　ふかいところへひきまはしたり

夫より手越のさとにいたるに、又もや俄雨ふり出して、たちまち車軸をながしければ、半合羽取出し、打かづき、足をはやめてほどなく丸子の宿にいたる。こゝにて支度せんと茶屋へはいり、北「コウ飯をくはうか、爰はとろゝ汁のめいぶつだの。彌「さうよ、モシ御ていしゆ、汁はありやすか。ていしゆ「ハイ今できず。彌「ナニできねへか、しまつた。ていしゆ「ハレちつきにこしらへずに、ちいとまちなさろ（ト、にはかにいものかはもむかずして、さつ〳〵とおろしかゝり、）ていしゆ「おなべヤノ〳〵、このいそがしいにあによヲしてゐる。ちよつくりこい、ちよつくりこい（ト、けはしくよびたつるに、うら口よりこごとをいひながらくるは女房と見え、かみはおどろのやうにふりかぶりたるが、せなかにちのみ子をせおひ、わらざうりひきずり来り、）「今、彌太アのとこのおんばアどんとはなしよヲしてゐたに、やかましい人だヤア。ていしゆ「アニハイやかましいもんだ。コリヤそこへお膳を二ぜんこしらへろ。エ、ソレ前垂がひきずらア。女房「おまい箸の洗つたのウしらずか。てい主「アニおれがしるもんか。コリヤヤイそのはしよヲよこせヤア。女房「これかい。てい主「エ、はしでいもがすられるもんか。擂木のことだわ。コリヤ扨まごつくな。その膳へつけるのぢやアないわ。こゝへよこせといふことよ。エ、らちのあかない女だ（ト、すりこ木を取つてごろ〳〵といもをする。）女房「ソレおまいすりこ木がさかさまだ。てい主「かまうな。おれが事よりうぬが、ソリヤのりがこげらア。女房「ヤレ〳〵やかましい人だ。コノ又

がきや、おんなじやうにほえらア。て主「コリヤ摺鉢をつかまへてくれろ。エヽさうもつちやアすられないわ。おへないひやうたくれめだ。女房「アニこんたがひやうたくれだ。てい主「イヤこのあまア(ト、すりこ木でひとつくらはせると、女ばうやつきとなりて、)女房「コノやらうめは(ト、すりばちを取つてなげると、そこらあたりへとろゝがこぼれる。)てい主「ヒヤアうぬ(ト、すりこ木をふりまはして立かゝりしが、とろゝ汁に辷つてどつさりころぶ。)女房「こんたにまけてゐるもんか(ト、つかみかゝりしが、これもとろゝにすべりこける。むかうのかみさまかけてきたり、)「ヤレチヤ又見たくでもないいさかひか。マアしづまりなさろ(ト、雨はうをなだめにかゝり、これもすべりころんで、)「コリヤハイ、あんたるこんだ(ト、三人がからだ中とろゝだらけにぬる〳〵して、あつちへすべりこつちへころげて、大さわぎとなる。)彌「こいつははじまらねへ。さきへいかうか(ト、をかしさをこらへて爰を立出で、)北「とんだ手やいだ。アノとろゝ汁で一首よみやした。

けんくわする夫婦は口をとがらして
　鳶とろゝにすべりこそすれ

それより宇津の山にさしかゝりたるに、雨は次第に篠を亂し、蔦のほそ道心ぼそくも、杖をちからに十團子の茶屋ちかくなりて、彌次郎おもはず、さかみちにすべりころびければ、

降しきる雨やあられの十だんご
　ころげて腰をうつの山みち

道中膝栗毛後編

(をかべのしゆくのやど引、待受て、)「おとまりでございますか。彌「イヤわつちらアけふ川をこさにやアならねへ。やど引「大井川は止りました。北「なむさん、川がつかへやしたか。やど引「さやうでございます。さきへお出なさつても、お大名が五かしら、島田と藤枝におとまりでございますから、あなた方のおやどはござりませぬ。先岡部へおとまりなさいませ。彌「そんならさうしようか。北「おめへなにやだ。やど引「相良屋と申ます。すぐにお供いたしませう(ト、打つれていそぎゆくほどに、はやくも大寺かはらのさか道をうちこえて、をかべのしゆくに至りければ、)

豆腐なるをかべの宿につきてげり
　あしに出來たる豆をつぶして

(先この驛に宿をとりて、川のあくまで、しばらくたびのつかれをぞやすめける。)

十返舎一九著

膝栗毛続編（ひざくりげぞくへん）　完二冊

右大井川の川留より大津驛まで可
笑しき弟子春日山夜佗月山家の隠れて
こらへ能

書舗

通油町

村田屋治郎兵衛版

東海道中膝栗毛三編

十返舎一九著

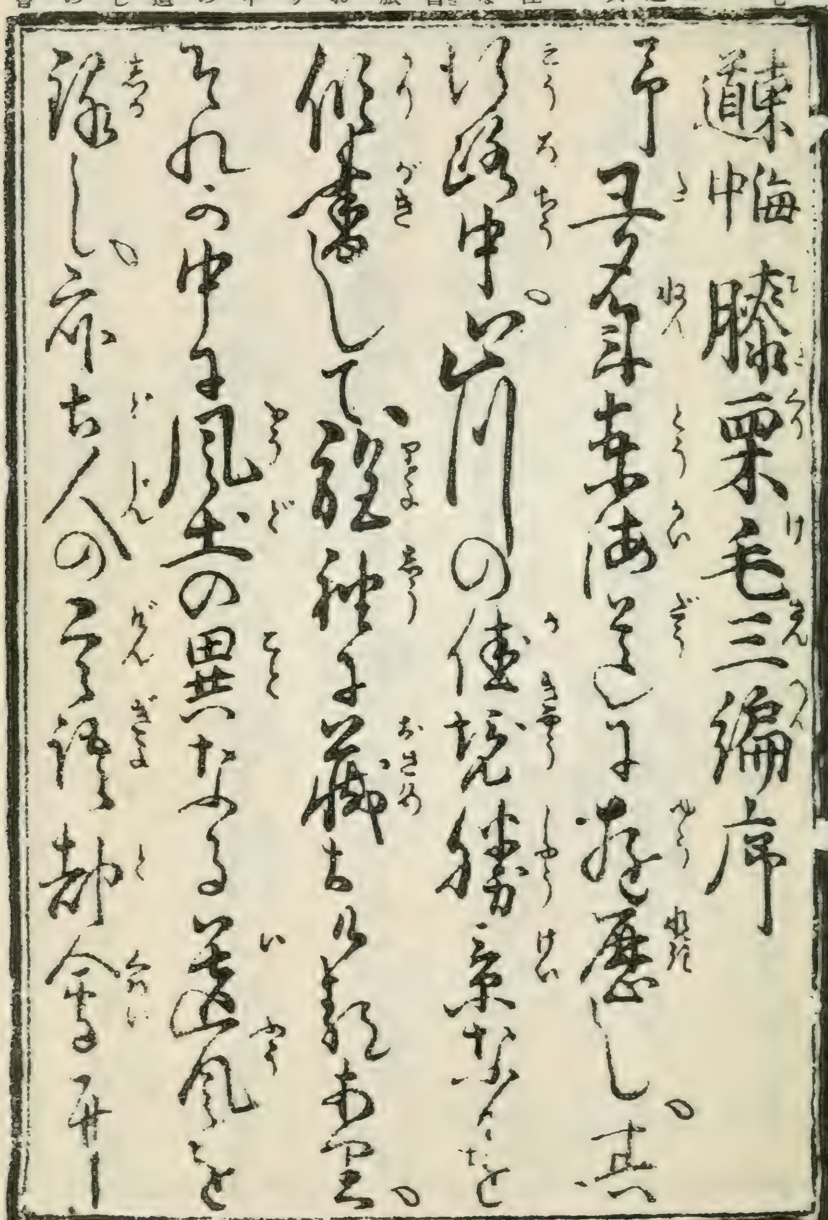
東海道中膝栗毛三編　二冊

権笛周於雲水居
記者栄雅硯作書

栄邑堂蔵版

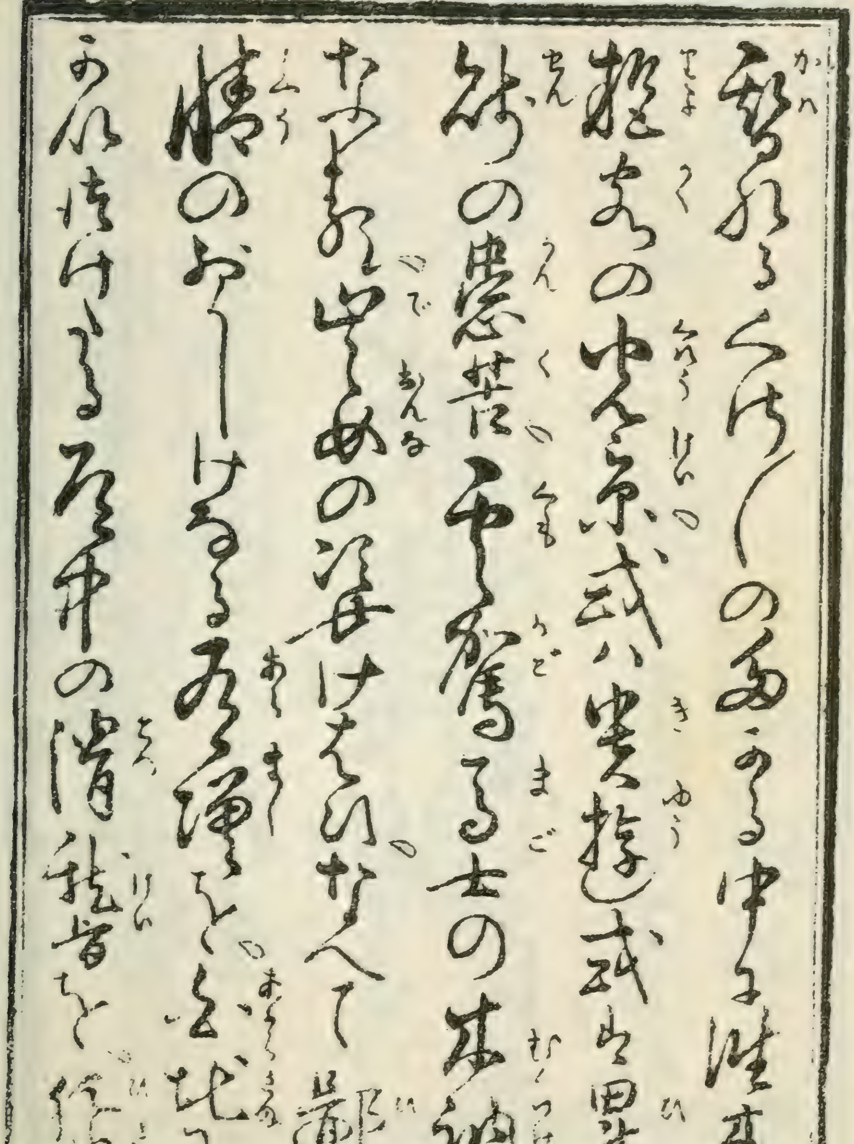
東海道中膝栗毛三編序

予多年東海道に逰歴し、其行路中、山川の佳境勝景なるを假書(かりがき)して、旅袖に藏(をさめ)おけるあり、それが中に風土の異なる遺風を錄し、亦土人の言語(げんぎよ)都會

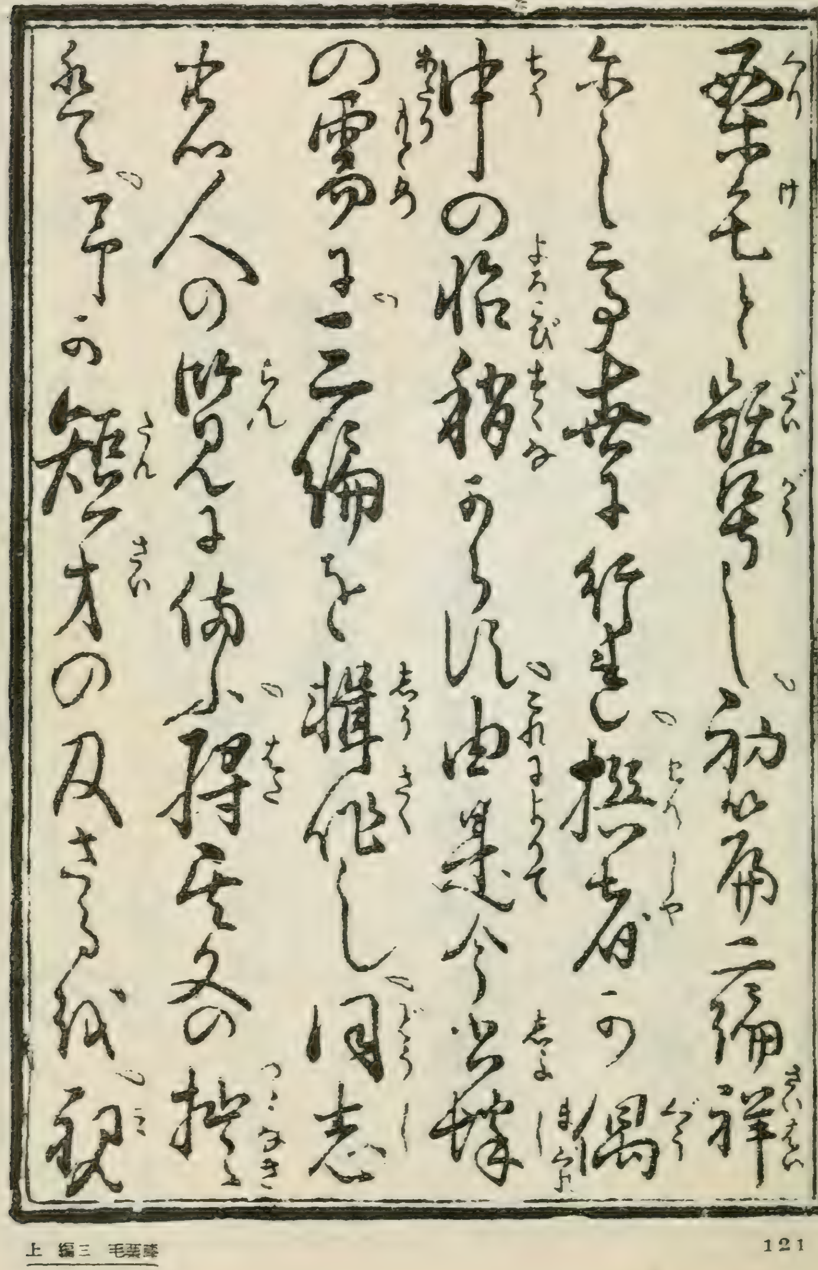

東海道中膝栗毛三編序

予多年東海道に遊歴し。其行路中。山川の佳境勝景なるを假書して。旅袖に藏おけるあり。それが中に風土の異なる遺風を録し。亦土人の言語都會

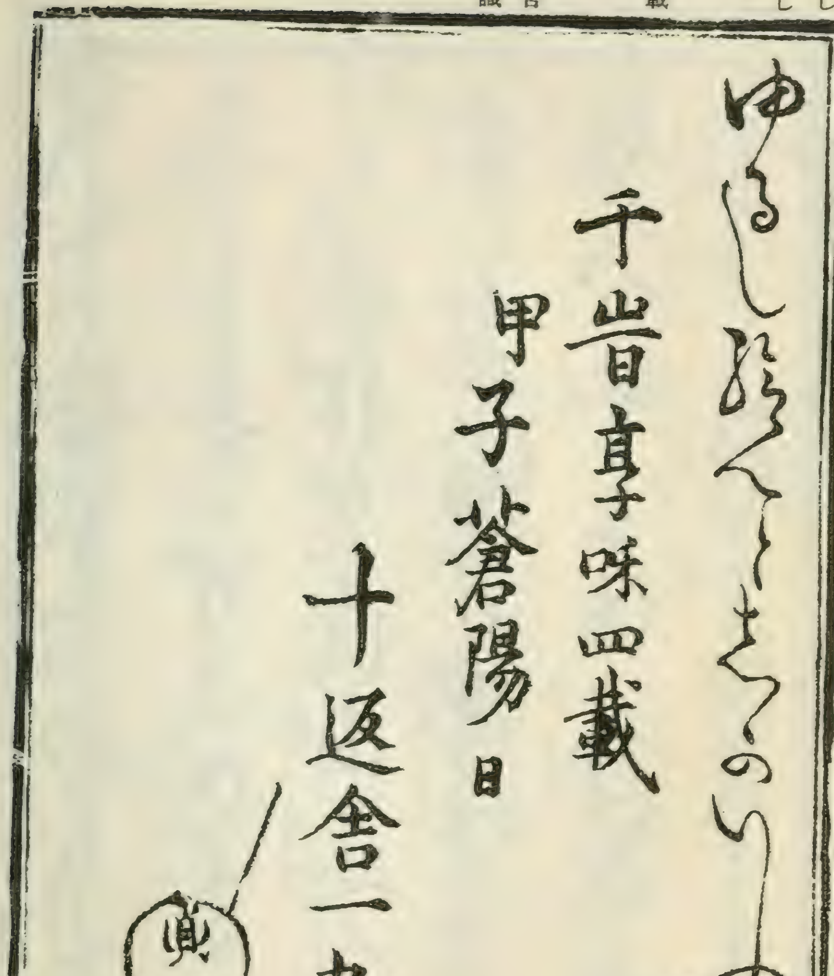
に替れるくさぐ〵の多かる中に、往來旅客の光景、或は貴遊或は卑賤の患苦、雲駕馬士の木訥なる出女の姿けはひ、なべて鄙情のをかしげなる有增を、白地にかいつけたる道中の滑稽を、



膝栗毛と題號し、初編二編詳にして世に行れ撰者が偶中の怡稍からず。由是今書肆の需に三編を輯作し、同志の人の覽に備ふ將其文の拙は、予が短才の及ざるを


膝栗毛と題號し、初編二編詳にして世に行れ撰者が偶中の怡稍からず。由是今書肆の需に三編を輯作し、同志の人の覽に備ふ將其文の拙は、予が短才の及ざるを

視ゆるし給へとしかいふ。
于時享和四載
甲子蒼陽日
十返舎一九識


ゆるし給へとしかいふ
于旹享和四載
甲子蒼陽日
十返舎一九識

凡例

此編ハ道中岡部駅より舞阪に至り。荒井渡船にして一集終る。其次草稿大概出来あれども。急迫にしていまだ校正をとるに遑なし。関る四編に悉く著し嗣に出して都而初編二篇より長途の滑稽。こす趣一にしし事称しからず好士の見るに倦ん事を恐





まで。聊趣向の轉變せることを揖む。扨四編に至てハ支盤くして。桑坂驛より漸四日市に至て終る。其六次五篇ハ伊勢路にかゝり。古市の遊楽。相の山の光景をつくし。そ余奈良戯より。大阪へ出ることを記して。全冊四に満尾せしむ

道中膝栗毛三編

十返舎一九著

名にしおふ遠江灘浪たいらかに、街道の並松えだをならさず、往來の旅人互に道を讓合、泰平をうたふつゞら馬の小室節ゆたかに、宿場人足其町場を爭はず。雲助駄賃をゆすらずして、盲人おのづから獨行し、女同士の道連、ぬけ參りの童まで、盜賊かどはかしの愁にあはず。かゝる有難き御代にこそ、東西に走り南北に遊行する雲水のたのしみえもいはれず。爰にかの彌次郎兵衞北八は、大井川の川支にて、岡部の宿に滯留せしが、今朝御狀箱わたり、一番こしもすみたるよし聞とひとしく、そこ〳〵に支度してはたごやを立出けるに、はや諸家の同勢往來の貴賤櫛の齒を挽がごとく、問屋駕宙をかけり、小荷駄馬飛で走る街道のにぎはひいさましく、ふたりもともにうかれたどり行ほどに、朝比奈川をうちこえ、八幡鬼島をすぎ、白子町にいたる。爰は建場にて兩側の茶屋女、「おちやアまゐるはア。一ぜんめしよヲまゐるはア。お休みなさいまアし〳〵。馬士のうた「うらがお長松のかゝアはたこよナア。あせさ蛸だとおもしやるへ。八間まなかに足だらけ。しよんがへ。ドウドウ。馬「ヒイン〳〵。馬かた「旦那衆おまアいらないか、二ひやくだが安いもんだイ。なんなら錢さへくんさりアたゞでもいかずに。北「エヽ二百出しやア夜るの馬にのらア。くそたれめが。馬かた「ヤイくそつたれたアあんだイ。うらがいつくそをくう。馬「ヒヽヒン〳〵。彌「ナントちよつぽりのんでいかうか。コウ姉さん。いゝ酒があらばちつと斗出してくんな（ト、茶屋へは入る。茶やのおんな）「ハイかんをしてあげずかア。彌「さうさ。時にさかなは何がありやす。てい主「アイねぶかとまぐろの煮たの斗。北「イヤねぎまのふろふきソレよからう。てい主「インネふろふきじやアござらない。たんだ醬油でにたのだアのし（ト、いひつゝてうしさかづきをもち出、まぐろを皿にもつて持來る）彌「ハヽアねぎまといふから、江戸でするやうだとおもつたら、コリヤアきじやきを煮たのだな。よしよし。北「はじめよう。ヲトヽヽヽ、イヤこの肴はおだぶつだせ。コリヤきのふのまぐろだな。てい主「インネ、ハイ

きんにようのいをじやアござらない。弥「それでもさつぱりく\ぬく\。てい主「ハアきんにようのがわるかア、おつ日（一昨日）とひのをしんぜませう。そんだいにやア酔こたアうけ合だもし。北「エ丶酔てたまるものか。そして此酒は半分水だ。ペツく\、時にいくらだの。てい主「ハイさかなが六十四文酒が廿八文。北「うまくねへかはりに高いもんだ。サアいかうと、錢をはらひ、爰を立出、はやくも鐙が淵といふ所に至り、例のすきの道なれば、彌次郎兵衛取あへず、

爰もとは鞍のあぶみがふちなれど
踏またがりてとほられもせず

それより平島口田中を打過ぎ、藤枝の宿ちかくなりて、

街道の松の木の間に見えたるは
これむらさきの藤えだの宿

（此しゆくの入口にて、ふろしきづつみちよ

[illegible]たる田舎[illegible]馬のに[illegible]たるにおどろきにげるひやうしに、北八へつきたあると、北八水たまりの中へころげて大きにあつくなり、おきあがりて田舎ものをひつとらへて、北「コノ親仁め、まなこが見えねへか。寒烏の黒焼でもくらやアがれ。おやぢ「コリヤハイ御めんなさい。北「ヤイ御めんなさいじやアすまねへわへ。コレやらうは小粒でも、ぎやつといふから、金の鯱をにらんで、産湯から



水道の水をあびた男だ。おやぢ「インネ、ハイ、水をあびたならようござるが、そんたのこけた所は、おまの小便のたまりだもし。北「エ、その小便のたまつた所へ、なぜつつこかしやアがつたへ。おやぢ「そりやハイ、わしもがらい、おまにつゝぱねられて、そんたに、いきやつたのだ。どうもせずことがない。かんにさつしやい。北「なんだ堪忍しろ、いやだわへ。ほんのこつたが、大江山の親分が、鐵棒ひいてわたりにこようが。石尊さまが、猪の熊の似づらをかゝせたてうちんで、路次口から、溝板のうへゝ、はひかゞんできても、さかねへといつちやア、久米の平内を居ざいそくにやつたよりかア、まだ、びつくともせぬやつこさまだア。おやぢ「ソリヤア、ハイ、あにか、しちむづかしいことをいはつしやるが、わしらにやア、ハイ、かいもくにしれ申さぬ。わしもハイ、此の近在の長田村じやア、名のしやくも勤めた家筋だんで、お地頭さまの年頭にやア上席ノウせる男だ。あにも、がいにけゝれなく、雑言ノウしめさるこたアござんないヤア。北「エ、わるくしやれらア。尻がかいわへ。あたまのかけでも、ひろはせてやらうか。おやぢ「エレ／＼そんたアづない人だヤア。わしにもハイ荒神さまが



ついてゐずに、がいに頤ノゥたゝかしやんな。北「エヽ此すりこ木め（ト、くらはせにかゝる。彌次郎兵衛見かねてやう／＼にひきわけて、）彌「きた八もうれうけんしろへ。とつさん、おめへがせんてへ麁相しながら氣がつえゝ。もういゝからいきなせへ（ト、北八をなだめるうち、おやぢはつらをふくらかし、ふしよう／＼に行過ると、彌次郎、）

　頭にのつてきた八に今たゝかれし
　藥罐あたまの親仁へこんだ

打笑ひつゝ瀬戸川を打越へ、それより、しだ村、大木のはしをわたり、瀬戸といふ所にいたる。爰は建場にて染飯の名物なれば、

　やきものの名にあふせとの名物は
　さてこそ米もそめつけにして

斯てこの町はづれの茶屋に、さきの田舎親仁休みゐたりけるが、二人を見つ



けて呼かけ、おやぢ「エレ／＼さつき（最前）や帰村ノゥしますは。マアあんでも禮にア無禮ノゥしました。わしもハイありやうは、一ぱいのんだ元氣で、づない事もいひ申たが、そんたしゆが了簡ノゥしてくれさつたから、へこたらずにさけウひとつしんせませう。こゝへよらつしやいまし。彌「ナニわつちらア酒ものんで來やした。おやぢ「エレチャア、せつかくわしがおもひだアのし。せつ

ひ一ツよからずに。コリヤく御亭の、味よいさけゥ出さつしやいまし。北「イヤお心ざしは忝いが、サア彌次さんいかう。おやぢ「ハテコリヤじやうのこわい人だヤア。ぢつきにやらずに、ちよつくりよつてくれされヤア(ト、むりにりもなる口ゆゑ、酒とき〻て少しこ〻ろひかされて、)彌「えいは、北八いつぱいやらかさう。しかし親父さん、おめへの御ちそうじやアきのどくだ。おやぢ「ハテコリヤよいといふのに。御ていのく、肴アじやうにつん出してくれさい。時にコリヤ、ハイ、爰はあんまりはしつぽだ。おくざしきへいかずかヤア。ちや屋の女「サアあつちイござらしやいまし(ト、出しかけたてうしさかづきをおくへもつてゆくと、三人も中にはからまはり、おくざしきのえんがはに、わらぢのま〻あぐら



をかき、彌次郎兵衛、)「サア親父さんはじめなせへ。おやぢ「アイすんだら毒見ノウしませず。ヲト、、よからずく。さて先若いの八しんせませう。北「アイわつちやア酒よりかア腹がへつた。おやぢ「アニはらがへつた。ソリヤア飯をくはつしやい。ぢつきによくなる。北「イヤ先酒にしよう。ヲツトありますく。時にこの吸ものはなんだ。たゝみ鰯のせんば煮か。おほかたこの跡ぢやア、

かぼちやのごま汁か、さつまいものよごしが出るだらう。彌「サアわるくいふせ」コレ此海老を見や。かうはねかへつた所は、がふてんじやうの天人といふ身がある。北「イヤ豊後ぶしのことかアいなア、、引といふ所もありやす。ハ、、、時におやぢさんあげやせう。おやぢ「インネへさいませう。今さかながこずに。コリヤあんねい〳〵、さつきからハイへしをれる程腕をたゝくに、あせさかなアつん出さない。女「ハイハイ只今あげずに（ト、やう〳〵に大びらとはちさかなを持てくる。）おやぢ「やらやつと持てきた。平はなんだ、たまごのぶは〳〵か。彌「おそいはずだ。今うむのをまつてゐたと見えた。北「こいつは無鹽だ。きめう〳〵。おやぢ「たんとのんでくれさつしやい。そんたアわしがた爲にやア命の親だ。よくさつきやア了簡ノウしてくれさつたのし。北「イヤわつちもツイ虫の居所がわるくつて、いひ過しました。まつぴら御めん。彌「そこは旦那どんも野暮ぢやアねへ。モシこいつはどうせ、味噌へつたり燒せうがといふをとこだから、せうどはなしさ（ト。たゞのむさけゆゑ、つゐしやうたらだらやみくもにひつかける。このうちかつてよりもいろ〳〵もち出、せんも出て、彌次郎北八すこしはきのどくながら これもくつてしまふ。おやぢ小べんに立て行跡にて、）北「コウ彌次さん、おめへこゝのわり合をおれによこしなせへ。おいらがアノおやぢをいぢめたればこそ、おめへがうてきにやらかしたぜ。彌「おきやアがれ。さういつてもまんざらぢやアねへ。アノ親仁のこぬうち、後にのむ分もやらかさう。北「おらア此茶碗についでくんな。ヲツトきた〳〵きたさの〳〵〳〵讃岐のこんぴら、たかゞ高瀬の船頭の子じやもの、おさへてどうす。ジヤジヤン〳〵〳〵。彌「エエ、、引山にきつころばした松の木丸太の様でも、妻とさだめたら、まんざらにくゝもあるまいし、やとさのせ〳〵、おもしろへ〳〵。時にこのおやぢの、べらさくのはどうした。北「ホンニながい雪隱だ。モシ女中、爰に居たぢいさまはどけへいつたの。女「たしかおもてのはうへ。彌「ハテノこいつどうかへんちきだはへ（ト、まてども〳〵此おやぢどこへいつたか、いつかうにかへらず。せつちんをさがせどもゆきがたしれず。）北「モシ女中今のおやぢが、爰のはらひをしていつたかの。女「イ、エまだいたゞきませぬ。彌「ヤア〳〵ヤア。北「いつぺいおこはにかきやアがつたな。おつかけてぶちのめさう（ト、とんで出たれども、どつちへ行しやら、いつか

うくもをつかむが如く、殊におやぢは此近在のものゆゑ、わき道へはいりしにや、さらに行へしれず。北八しよげて立歸り、）彌次さんどうもしれねへ。とんだ目にあつた。彌「しかたがねへ、手めへ拂ひをしや。アノ親仁めがくやしんぼうで、手めへに意趣げへしをしたのだはな。北「それでもナニおればかりかぶるもんだ。いま〱しい。せつかく醉た酒が、みんなさめてしまつた。彌「次郎どんの犬と太郎どんの犬と、みんなさめてしまつたか。北「エヽしやれなさんな。そこ所じやアねへ。まあなんにしろいくらだね。ていし「ハイ〱九百長五十でござります。北「かたりにあつたとおもつて、往生して拂ひやせう。いやアいふほど、ちゑのねへはなしだ。彌「さういつてもおつなおやぢだ。いゝことをしやアがつた。コウ北八、手めへの貌で一首うかんだ。

御馳走とおもひのほかの始末にて
　腹もふくれた頰もふくれた

北「へヽごふはらな。生馬の目をぬきやアがつた。

有がたいかたじけないと禮いうて
　いつぱいたべし酒の御馳走

かくよみて北八も笑ひをもよほし、ゐなかものとあなどりて、とんだ意趣がへしを、しられたるもをかしく、爰を出て行ほどに、大井川の手前なる島田の驛にいたりけるに、川越ども出迎ひて、「だんなしゆ川アたのんます。彌「貴さま川ごしか、ふたりいくらで越す。川ごし「ハイ今朝がけに、あいた川だんで、かたくまじやアあぶんない。蓮臺でやらずに、おふたりで八百下さいませ。彌「とはうもねへ。越後新潟じやアあんめへし、八百よこせもすさまじい。川「すんだらいくら下さるヤア。彌「いくらもすりこ木もいらねへ。おいらがちきにこすは。川「ヲヽ川ながりやア二百つけて寺へやるから、なんならさうさつしやい。ながれたはうが、やすくあがらア、ハヽヽヽ。彌「ばかアぬかせ。問屋へかゝつておこしなさるは（ト、云すてゝあしばやに行すぎ、）彌「ナント北八、あいつらにからかうがめんだうだから、いつその こと、問屋へかゝつて越さう。手めへの脇指を借しやれ。北「なせ、どうする。彌「侍になるわ（ト、北八がわきざしを取てさし、おのれがわきざしのひきはだを、あとのはうへのばし、長くして大小さしたやうに見せかけ、）彌「ナント出來合のお侍よく似合たらう。此ふろしきづつみを手めへ一しよに持て、供になつてきや。北「こいつは大わらひだ。ハヽヽヽ（ト、彌次郎がにもつをいつしよ

にして、北八かたにひつかけ、やがて川問屋にいたり、彌次郎おくにことばのこわいろにて、)「コンリヤとん屋ども、身どもも大切な主用で罷通る。川ごし人足を頼むぞ。　とひや「ハイかしこまりました。御同勢はおいくたり。彌「ナニどうせいな。とひや「さやうでござります。旦那はお駕かお馬か。お荷物はいく駄ほどござります。彌「本馬が三疋、駄荷がつがふ十五駄ほどありをるが、道中邪魔だから、えどおもてにおいてきた。其かはり身ども駕陸尺が八人、そこへしるしめさろ。　とひや「ハイおさぶらひ衆は。彌「侍共が十二人、やりもち、はさみ箱、ざうり取、よいか〳〵、合羽かご、竹馬、つがふ上下三十人餘りぢや。　とひや「ハイ〳〵その御どうせいはどこにをります。　彌「イヤサ江戸表出立のせつはのこらずめしつれたが、途中でおひおひ痲疹をいたしをるから、宿々へのこしおいた。そこで只今川をこさうといふ同ぜいは、上下あはせてたつた二人ぢや。臺ごしにいたさう。なんぼぢやゝ　とひや「ハイおふたりなら蓮臺で四百八十文でござります。彌「それは高直ぢや。ちとまけやれ。　とひや「エ、此川の賃錢にまけるといふはないヤア。ば



かアいはずとはやく行がよからずに。彌「イヤ侍にむかつて、ばかアいふなとはなんぢや。とひや「ハヽヽヽ、がいにづないおさぶらひだャア。彌「こいつ武士をてうろうしをる。ふとゞきせんばんな。とひや「こんた武士か。刀の小じりを見さつしやい（ト、いはれて彌次郎ふりかへり、うしろを見れば、かたなのこじり、はしらにつかへて、ひきはだばかりの所ふたつにをれてゐる。みな〳〵どつとわらひ出せば、さすがの彌次郎めんぼくなく、しよげかへつてだんまり。）とひや「かたなの、をれたのをさす武士がどこにあるもんだ。こんたしゆ問屋をかたりにきたぞ。そんではハヽイすませないぞ。彌「イヤ身どもは、みをのや四郎俊國の末孫だから、それで刀のをれたのをさしをるて。とひや「たはごといふと、くゝしあげるぞ。北「コウ彌次さんをさまらねへ。はやくいかう（ト、手をとつて引ずられ、彌次郎それをしほにこそ〳〵とにげいだす。）とひや「ハヽヽヽとはうもない氣ちがひだ。彌「ツイやりぞこなつた。いま〳〵しい。ハヽヽヽ

　出來合のなまくら武士のしるしとて
　　刀のさきの折れてはづかし。

此狂歌に雙方大笑ひとなり、彌次郎兵衛北八爰をのがれ、いそぎ川ばたにいたり見るに、往來の貴賤すき間もなく、此川のさきを爭ひ越行中に、ふたりも直段とりきはめて、蓮臺に打乘みれば、大井川の水さかまき、目もくらむばかり、今やいのちをも捨なんとおもふほどの恐しさ、たとふるにものなく、まことや、東海道第一の大河、水勢早く、石流れてわたるになやむ難所ながら、程なくうち越して蓮臺をおりたつ。嬉しさいはん方なし。

　蓮臺にのりしはけつく地獄にて
　　おりたところがほんの極樂

斯うち興じて金谷の宿にいたる。兩側の茶屋をんな、「おやすみなさいまアし〳〵。かごかき「もどり駕のつていぢやござい。北「コウ彌次さんかごはどうだ。彌「イヤ氣がないッ。手めへのるならのつていかつし。北「そんなら日坂まで乘うか（ト、かごのねだんきはめてうちのりたるに、をりふしあめふり出しければ、古ござ一まい、かごの上からうちかぶせ、かつぎ出して早くもきく川の坂にかゝると、順禮が二三人。）「ふだらくや、きしうつなみはみくまのの。アイおかごの旦那壹文下さい。北「つくな〳〵。順禮「御道中御はんじやうの旦那、このなかへてつた一文。北「エヽつくなといふにべらぼうめ。順「それにべらぼうがいるもんか。そつちがべらぼうだ。北「コノ乞食

あが(ト、りきむはずみにいかゞしけん、かごのそこがすつぼりぬけて、北八どつさりしりもちをつき、)「アイタヽヽヽ。彌「ハヽヽヽ。かごかき「エレ〳〵怪我アさつしやりませぬか。北「コレ手めへたちやアなぜこんなかごにのせた。かごかき「ゆるさつしやりませ。あんとせるもんで。北「どこぞへいつて、いゝかごをかりてきさつし。かごかき「こかア坂中でかりずとこがござらない。イヤよかことがある。ぼうぐみのしのへこをはづせ。ぼうぐみ「アゼどうせる。かご「ハテおれがせることがある。見され(ト、じぶんのふんどしをはづし、ぼうぐみのふんどしと二すぢにて、ござのうへからかごのどう中をくゝりて、)かご「サアのつていじやござれ。北「とんだことをする。これでのられるもんか。かご「ハテ外にせることがない。そんだいにやアねぶたくならしやつても、このへこでおちずやうがござらない。不肖して、のらつしやいませ(ト、きのどくさうにいふ。北八もをかしく、これもはなしのたねと打のれば、)彌「ハヽヽヽ、白いふんどしで、かごの胴中をくゝつた所は、しつかいおやしきの葬禮といふものだ。北「エヽ、いま〳〵しい。そんなことをいひなさんな。彌「ハヽ、アかごの内で、ものをいふから佛でもねへ。こいつ、きこえた。科人だな。北「エヽ、猶いま〳〵しい。おらアもうおりてゆかう(ト、こゝよりかごをおり、こゝ迄のちんせんをはらひ、かごをかへし、たどりゆくに、雨はしきりにふり出しければ、さかみちすべりて、やう〳〵とさよの中山たてばにいたる。こゝは名におふあめのもちの名物にて、しろきもちなり、水あめをくるみていだす。このふたり酒のみなれば、やうやく一ツ二ツくひける内、あめつよくなりたるに、)

爰もとの名物ながらわれ〳〵は
ふり出すあめのもちあましたり

傳へきく。無間の鐘はその寺に、名のみ殘りて今はなしと。

この寺にむげんのかねもつきなくし
今は晦日に嘘やつくらん

それより此坂を下り、日坂の驛にいたる頃、雨は次第につよくなりて、今は一足もゆかれず。あたりも見えわかぬほど、しきりに降くらしければ、或旅籠屋の軒にたゝずみ、彌「いま〳〵しい。北「はなやの柳がうてきにふるは〳〵。いつまで人のかどにたつてもおられめへ。ナント彌次さん、大井川は越すし、もうこの宿に泊らうぢやアねへか。彌「ナニとんだことをいふ。まだ八ツにやアなるめへ。今から泊つてつまるものか。はたごやのばい「この雨

ちやア、いかれましない。とまらしやりませ。北「イヤこりや泊りたくなつた。彌次さん見ねへ。おくにたぼがでへぶとまつてゐる。彌「ヲヤドレ〳〵、こいつはなせるはへ。はたごやのばい「サアおまいちとまらしやりませ。彌「さうしやせう（ト、こゝにて彌次郎北八あしをあらひ、すぐにおくのつぎの間へとほり、）彌「コレコレ女中、素湯があらば一ツぱいくんな。女「ハイ〳〵いんまあげうず。北「ひりやうずが聞てあきれらア。女「ハイおさゆ。彌「よし〳〵きた八、きのふのくすりをくりやな。北「なんだ、しんりいあんかん丹か。まちなよ。ありのとわたりからひねり出してやらう。彌「エヽばかアいやんな。腹がいたくてならぬ。北「ソリヤアおめへ、ないらのおこつたのだ。豆をくやアなほる。彌「エヽわるくしやれずと、はやく出してくれろへ。北「そんならまじ目に、ソレ田まちの反魂丹手を出しな。彌「ふたつばかりくりやれ。ガリ〳〵〳〵。コリヤ胡椒だは。ア、辛い〳〵。北「ハヽヽ、まちなよ。イヤもうない。イヤこゝに錦袋圓がある。ソレよしか。彌「からかみのかげでまつくらだ（ト、つゝみ紙をあけてくすりをとり出し、）ガリ〳〵〳〵〳〵。ア、又何をかくはしやアがつた。ペツ〳〵。北「ドレ見せな、イヤア是は観音様だ。彌「ほんに観音さまのあたまア、かみくだいてしまつた。ハヽヽ。女「御膳を上ませう。北「イヤ三ぜんくやア澤さんだ。彌「よくくちを叩く男だ。やかましいだまつてしやべれ。北「しづかにさわげがあきれらア（ト、此内膳も出ていろいろしやれながらくひかゝり、）彌「ときに女中、おくの客は女ばかりだが、ありやアなんだ。女「みんな巫女でおざりまさア。北「ナニ巫女だ、コリヤおもしろい。ちといき口をよせてもらひてへもんだ。彌「もうおそからう。七ツからはよらぬといふことだ。女「ナニまんだ八ツすこしすぎでおざりまさア。彌「そんならきいて見てくんな。おいらが山の神をよせてもらはう。北「コリヤをかしい。女「いんまきいて上うずに（ト、此うちぜんもすみ、女おくのまへゆき、かのいち女にそのことを聞合す。いちこしようちのよしなれば、やがて彌次郎北八おくのまへはいりたのむと、いち女れいのはこを出してなほすと、さしこゝろえて宿の女水をくみ来る、彌次郎すぎさりし女房のことを思ひだして。しきみのはに水をむけると、いちこは先神おろしをはじめる。）いちこ「そも〳〵つつしみうやまつて申たてまつるは、上に梵天、たいしやく、四大てんわう、下界にいたればえんまほふわう、五ど

うのみやうくわん。わがてうは神國のはじめ、天神七だい、地神五だいのおんかみ、いせはしんめい天照皇大神宮、外ぐうには四十まつしや、内宮には八十末社、あめのみや、風の宮、月よみひよみの御みこと、北にべんくう鏡の社、あまのいはと大日如來、あさまがたけふく一まん虚空藏、その外日本六十餘しう、そうじて神のまんどころ、出雲のくにの大やしろ、神のかずが九萬八千七しやの御神、佛のかずが一萬三千四れいの靈場、冥道をおどろかし、此に請じたてまつる。ハアおそれありや。このときに、この〳〵かたのそしやうりやう、だい〳〵のぶつてうし、弓と矢のつがひの親、一郎どのより三郎どの、ばんもかはれ水もかはれ、かはらぬ物は五しやくの弓、一打うてば寺々の佛檀にひゞくなふじゆ。ヤアレハアなつかしや〳〵。よく水をむけてくださつた。わしが弓取のまくらぞいどのも出やらうけれど、しやばにいた時精進がきらひで、肴は骨までくやつたむくい、今は牛鬼になつて地獄の門番をしてゐらるゝゆゑ隙がない。それでわしばかり出ましたぞや。彌「おめへだれだ、わからねへ。いち今「ハアわしは水を手向どんの爲には、からのかゞみじや、子だからどの。北「からのかゞみ



たア、彌次さんおめへのおふくろのことだ。彌「ハヽアおふくろか。そんたにやア用はない。いちこ「ハアレからのかがみどんじやア用はおざらないか。わしやアそなたのまくらぞひじや。あつがましくも能ぞ問うて下さつた。そなたのやうないくぢなしに連添つて、わしや一生くふやくはず、寒くなつても袷壹枚きせてくれた事はなし、かんの冬も單物ひとつ、アヽうらほしや〳〵。彌「かんにんしてくれ。おれも其時分はめんくがわるくて、かはえさうに、苦勞をしゞにゝしやつたが殘り多い。北「ヲヤ彌次さん、おめへなくか。ハヽヽヽこいつはおにの目に涙だ。いちこ「わすれもせない。そなたが瘡をわづらはしやつたとき、わしはあやにくひつをかく、瓜の蔓の次郎どのはよい〳〵病ひ、たつたひとりの子寶は、脾胃虚して骨ばかりに瘦こける、米はなし日なしはせがむ。大屋どのゝ店賃やらねば、路次の犬のくそにすべつても、こゝとはいはれず。彌「もう〳〵いつてくれるな。むねがさけるやうだ。いちこ「それにわしが奉公して、せつかくためた着物まで、そなたゆゑにおきなくしたがくやしい。質はさかさまにやアながれ申さぬ。彌「そのかはり、手めへは結構なところへいつてゐるだらうが、おれはい



まだにくらうがたえぬ。いちこ「ヤアレハアなにがけつこうでござらう。友だち衆のせわで、石塔はたてゝ下さつたれど、それなりで墓まゐりもせず。寺へ附屆もして下されねば、無縁どうせんとなつて、今では石塔も塀のしたの石がけとなりたれば、折ふし犬が小べんをしかけるばかり、つひに水ひとつ手向られた事はござらぬ。ほんに長死をすれば、いろ〱なめに逢ますぞや。彌「もつともだ〱。いちこ「そのつらい目にあひながら、くさばのかげでそなたのことをかたときわすれぬ。どうぞそなたもはやく冥途へきて下され。やがてわしがむかひに來ませうが。彌「ヤアレとんだ事をいふ。遠いところをかならずむかひにくるにやア及ばぬ。いちこ「そんならわしがねがひをかなへて下され。彌「ヲヽ何なりと〱。いちこ「このいち子どのへ、おあしをたんとやらしやりませ。彌「ヲヽやるとも〱。いちこ「アヽ名殘をしや。かたりたい事、とひたい事、數かぎりはつきせねど、冥途のつかひしげければ、彌陀の淨土へ（ト、うつむきていちこあづさの弓をならす。）彌「コレハ御苦勞でござりました（ト、鳥目貳百文はりこみ、かみにくるみていだす。）北「くらやみの耻をとう〱あかるみへぶちまけて仕廻た。ハヽヽヽ時に彌次さん、おめへとんだふさぐの。ナンと一ぱい呑うじやアねへか。彌「それもよからう（ト、手をたゝき女をよび、さけさかなをいひつける。）いちこ「けふはおまへさまがたア、どこからおいでなさりました。彌「アイ岡部から來やした。いちこ「それはおはやうおざりました。彌「ナニわつちらアあるくこたア韋駄天樣さ。サアといふと、十四五里ヅッはあるきやす。北「そのかはりあとで十日ほどは役にたちやせぬ。ハヽヽ（ト、此内、酒と肴を持出る。）彌「ちとあがりませぬか。いちこ「わたしはいつかう下さりませぬ。彌「あちらのおかたはどうだ。いちこ「かゝさんお出。サアおかまさんもお來なさいまし。北「ハヽアおめへのおふくろか。エヽこいつはめつたなこたアいはれぬわへ。まづあげやせう（トこれよりさかもりとなり、さいつおさへつ、此いち子どももおもひの外のくらひぬけにて、いくらのんでもしやあ〱としてゐる。彌次郎兵衛きた八は大きに醉がまはり、いろいろをかしきしやれあれども、くだ〱しければりやくす。北八まきじたにて、）「ナントおふくろさん、今夜おめへのおむすをわつちにかしてくんなせへ。彌「イヤおれがかりるつもりだ。北「とんだことをいふ。おめへこそ今宵は精進でもし

てやりなせへ。可愛(かはい)さうに、しんだ嚊(かゝ)衆(しゆ)があれほどにおもつて、どうぞはやく冥途(めいど)へこい。やがてむかひにこやうと深切にいふぢやアねへか。彌「ヤレそれをいつてくれるな。向(むか)ひにこられてたまるものか。北「それだからおめへはよしな。サアおふくろおいらにきまつた（ト、いち子のむすめにしなだれかゝるを、つきはなしてにげる。）いちこ「およしなさりませ。いち子のばゝ「むすめがいやならわたしでは。北「もうかうなつちやアだれかれの見さかひはない（ト、むちうになつてしやれる。此内かつてより膳も出、色々こゝにもあれ共りやくす。はや酒もをさまり、彌次郎北八も次のまにかへり、日がくれるやいなや、とこをとらせねかける。おくの間にもたびくたびれにや もうねかけるやうす。北八小ごゑにて、）北「なんでも巫子(いちつこ)のしんざうめが、いつちこちらのはしにねたやうすだ。後(のち)に這(はひ)かけてやらう。彌次さん、おめへねたふりなぞはとほりものだぜ。彌「おきやアがれ、おれがしめるは。北「氣のつえゝ。大わらひだ（ト、いひつゝ兩人ながらぐつとよぎをかぶりねる。）すでに夜(よ)も五ツすぎ、四ツまはりの拍子木(ひやうしぎ)のおと、まくらにひゞき、臺所にあすの支度の、みそずる音もやみければ、たゞ犬の遠吼(とほぼえ)のみきこえて、物淋(ものさび)しくふけ渡るに、（北八時分はよしとそつとおき出、おくのまをうかゞへば、あんどうきえてまつくらやみ。そろ／＼としのびこみ、さぐりまはして、かのいちこのふところへにぢりこむと、おもひの外此いちこの方から、ものをもいはず北八が手をとつて引ずりよせる。北八こいつはありがてへと、そのまゝよぎをすつぽり、手まくらのころびねに、かりのちぎりをこめしあとは、ふたりともぜんごもしらず、はなつきあはせてぐつとね入。彌次郎兵衛一ねいりして目を覺しおき上り、）「もう何時(なんどき)だしらぬ。手水(てうづ)にいかう。コリヤまつくらで方角がしれぬ（ト、小へんに行ふりにて、是もおくの間へはひこみ、北八がせんをこしたとはつゆしらずさぐりよつて、よぎのうへからもたれかゝり、くらがりまぎれにかのいちことおもひ、きた八がムニヤ／＼いふくちびるをねずりまはし、わんぐりとかみつく。北八きもをつぶし目をさまし、）「アイタヽヽ。彌「ヲヤ北八か。北「彌次さんか。エ きたねへペツ／＼。（此こゑに北八とねてゐたるいちこも目をさまして、）「コリヤハイ、おまいちは何だ、さう／＼しい。しづかにしなさろ。むすめが目をさますに（ト、いふこゑはばゝあのいち子、北八は二度びつくり、こいつ取ちがへたかいま／＼しいと、はひ出てこそ／＼とつぎの間へにげかへる。彌次郎もにげんとするを、いち子手を

とつて引ずりながら、)「おまへ此としよりをなぐさんで、今にげる事はござらぬ。彌「イヤ人違へだ。おれではない。ばゝあ「インネさういはしやますな。わし共はこんなことを商賣にやアしませぬが、旅人衆の伽でもして、ちとばかしの心づけを貰ふがよわたり。はらさん〴〵なぐさんで、只逃るとはあつかましい。夜の明るまでわしがふところでねやしやませ。彌「これはめいわくな。ヤイ北八〳〵。ばゝ「アレハイおつきな聲さしやますな。彌「それでもおれはしらぬ。エ、北八めがとんだ目にあはしやアがる(ト、やう〳〵むりに引はなして、にげんとすれば、又とりつくをつきたふして、がたびしとけちらかし、さう〳〵つぎの間へはひこみながら、)

いち子ぞとおもうてしのび北八に
口をよせたることぞくやしき

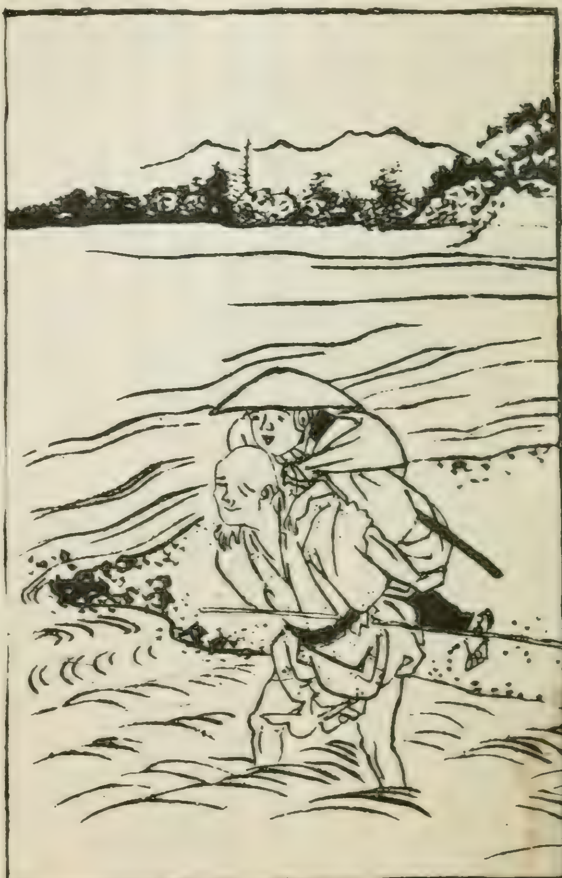


道中膝栗毛三編 下

しのゝめまだき驛路の、いそがしげにひきつるゝ朝出の馬の嘶に、旅勞れの目をこすりながら、彌次郎北八おき出て支度するうち、相宿のいち子が顔ふくらかしゐるもをかしく、爰を立出ふるみや、譽田の八幡を打過、右にしうとの畑、姫が田といへる見ゆれば、

彌次郎兵衛
干からびししうとの畑にひきかへて
水澤山のよめが田ぞよき

それより鹽井川といふ所にいたりけるに、昨日の雨つよくして橋おちけるにや。行かふ人みづから投引をとり、すそをまくりあげて、爰をわたるに、彌次郎北八も、いざや引つれて渉なんとする折柄、京上りの座頭二人づれ、此川の歩渡りなることを聞けるにや。一人の座頭、犬市「モシ、川は膝きりもござりますかな。北「さやう〳〵。しかし水が早いから、おめへがたアあぶない。用心してわたりなせへ。犬市「ハア、なる程、水のおとがよつぽどはやい（ト、いひつゝ石をひろひ、川のなかへなげこんでかんがへ、）犬市「イヤ、こゝらが、どうかあさいやうだ。コリヤ猿市、ふたりながら脚半をとるもめんどうだ。おぬし若役に、おれをおぶつてわたれ。さる市「ハハヽヽヽ、ずるいことをぬかす。拳でまゐらう。なんでもまけたものが、おぶつてわたるのだが。よしか。犬市「コリヤおもしろい。サアこんさんなむめで。さる市「りやん、どうさい〳〵（ト、かた手でけんをうちながら、雨はうから左の手を出し、たがひにけんをうつ手をにぎりあひ、）犬市「サアかつたぞ〳〵。さる市「エヽいまいましい。そんなら此ふろしきづつ



みを、きさまいつしよにしよはつせへ。ソレよしか。サアこい〳〵(ト、したくしてせなかをむける。彌次郎是はありがたいと、さる市におぶされば、さる市はつれのいぬ市とこゝろえて、さつ〳〵と川へはいり、なんなくむかうへわたると、こなたのきしにのこりたるいぬ市、)「ヤイ、猿よ、どうする。はやく川をわたさぬか。(さる市むかうのきしにてきゝつけ、腹をたて、)さる「コリヤじやうだんなやつだ。たつた今おぶつてわたしたに、又そつちへいつて、おれをなぶるな。犬市「ばかアいへ。おのればかりわたつて、ふといやつだ。さる市「イヤ、ふといとはそつちのことだ。犬市「コリヤおのれ、兄弟子にむかつて言語同斷な。はやくきてわたさぬか(ト、しろい目をむき出し、はらたつるゆゑ、さる市しかたなく、又こちらへ渡りてかへり、)さる「サアそんならおぶさりなさろ(ト、せなかをいだす。北八しめたと、手をかけておぶされば、さる市又さつさつと川へは入る。犬市は大きにせきこみ、)犬「コレさる市、どこにゐる。(さる市、川中にて、)さる「イヤ、こいつはだれだ(ト、北八を川の中へ、どんぶりおとす。)北「ヤアイ、たすけてくれ〳〵(ト、手あしをもがきながれるゆゑ、彌次郎とびこみ引上れば、あたまからほねまで、くさるほどぬれ、)北「エ、、座頭めが、とんだ目にあはしやアがつた。彌「ハ、、、、、、まづ着物をぬぎやれ。しぼつてやらう。北「ぜんてへ彌次さんがわるい。なんのおぶさらずともいゝことに、おめへが手本を出したから、ツイおれも。彌「川へはまつたか、きのどくな。ハ、、、、、それで一首やらかした。

はまりけり目のなき人とあなどりし
むくいははやき川のながれに

北「エ、きゝたくもねへ。よしてくんな。ア、さむい〳〵(ト、はだかになり、がた〳〵ふるへながら、きものをしぼる、此内ざとうは川をわたり、行過る。)彌「こゝでほしてもゐられめへから、着替を出してきやれ。どこぞで火を焚てもらつて、あぶるがいゝ。北「エ、いま〳〵しい。風をひいた。ハアクツシヤミ(ト、ぶつ〳〵こゞとを云ながら、きがへを出してきかへ、くさつたきものはしぼつて引さげ出かけるとほどなく、かけ川の宿にいたる。)棒鼻の茶屋をんな「おめしよヲあがりまアし。鯵とこんにやくと干大根のおすひものもおざりまアす。おやすみなさいまアし〳〵ながもち人足のうた「ふけばナア、ふくほどナア、ンエもつもなかるい。ナア、ンエわたをサア、いれたやナア。長持にわたをナア、ンエヨウ、しつたかど

うだか〳〵馬のいなゝき、「ヒイン〳〵。彌「ヲヤ北八、見さつし。さつきの座頭めらが、あそこに呑でけつかるは。北「こいつはいゝことがある。おいらを川へはめた、意趣返しをしてやらう（ト、つくりごゑにて、かのさとうの酒をのんでゐる茶屋へはいる。）北「ヲイ御めんなせへ。ちや屋のをんな おいでなさいまし（ト、ちやをくんでくる。北八かのざとうのわきへ、こしをかける。）女「おしたくでもなさいますか。彌「まだ〳〵腹はぽんぽこなだ。（先刻のさとう二人、此所にやすみ、酒をのみゐたるが、かの二人とはきもつかず。）犬市「ハアねつから酒がたらぬやうだ。もう二合やらかさう。さる市「いかさまなあ、御ていしゆ〳〵、もうちつと頼ます。女「ハイ〳〵。犬市「トきに、今の川へはまつたべらぼうどもはどうしたらう。さる市「それよ。ハヽハヽヽ。先かはりめをやらかさう（ト、ちよくに一ぱいついで、一口のみ下におくと、北八そつと手を出し、ちよくのさけをのんでしまひ、ちやつと本の所におく。）さる市「イヤ、ふといやつらであつた。ちやんとおれにおぶさりやアがつて。その其代水をくらやアがつた時は、たすけてくれろと、かなしいおとばねを出しをつた。なんでもかすりをとる事ばかり心がけてゐるやつだから、おほかたあいつは、ごまの灰だらうよ。犬市「さうさ、どうでろくなもんじやアない。あゝいふやつは、こんな所へ來ても、えてはくひにげをして、ぶちのめされるもんだ。イヤ時に盃はどうした。猿「ホンニわすれた（ト、ちよくをとりあげて、のまうとしたところが、さけはいつすゐもなし。「ヲヤ、こぼしたさうな（ト、そこらあたりを さぐりまはし、）「ハテめいような。あらためてさゝう（ト、又一ぱいつぎ、ひと口のんで下におくと、北八又そつと引よせ、のんでしまふ。）犬市「かうしてゐる所へ、さつきのやつらが來たらをかしからう。さる市「ナニあいつらは、おほかた着物をしぼつたり、ほしたりしてまだあつちにまごついてゐるだらう。ちゑのないべらぼう共だ（ト、いひながら、さかづきをとりあげた所が、又酒はいつすゐもなし。）「これはどうだ、犬「又こぼしたか。いくぢのない。さる「イヤこぼしはせぬが、ハテきめうちやうらいな。犬「イヤ手めへそんなことばかりいつて、ひとりでのむな（ト、此内、北八てうしを取、自分がのんだちやのみ茶わんふたつにあけて、そつとてうしをもとのところにおく。）犬「コリヤ猿よ、さかづきをまはさぬか（ト、ひつたくり、てうしを取て、ついで見て、）「ヤア此猿市め、ひとりでく

らつてしまやアがつた。さる「ナアニ、とんだことを。犬「それでも銚子がさつぱりだ。さる「なんだ銚子がない。イヤこゝの御ていしゆ〳〵、わしらを盲とあなどつて、こんな横着をさしやるか。二合の酒がたつた二口のむと、ゐうないはどうしたもんだ。ていしゆ「ハイそれは二合、しかもたつぷりついであげましたに、大かたこぼしなさつたもんだんて。さる「ナニこぼすもんだ、商人に似合ぬ事をさしやるから、此酒代ははらひませぬぞ（ト、大きにはらを立る。此ときかど口にあそんでゐる子もりが、さいぜんより見てゐたりしが、北八のはうへゆびさしをして、）子もり「ワアイ、座頭どんのさけウ、みんなあの人が、ちやわんへついでしまはつせいた。北「ヲヤ、この子はとんだことをいふ。コリヤア茶だ茶だ（ト、いひながら、のみさしたちやわんの酒をのんでしまふ。）ていしゆ「イヤ、おまひさけくさいわ。そして顔があかくならしやつたは。大かたあの衆の酒をのましやつたな。北「エヽ、この人もおなじやうに、とはうもねへ。わしが顔の赤くなつたのは、茶に酔たのだ。わしはかはつたことで、ちやをたんとのむと酔ます。酒によつた人はくだをまくが、茶によつた證據には、ちやばかりいふがくせでならぬ。そこでちやばかりながら、どなたもちややうチヤ、ハハヽヽ。さる市「イヤ、その手はくはぬ。子供は正直だ。コリヤアこんたしゆが、よこどりしてのんだにちがひはない。酒代をはらはしやれ。北「ちやれやれ。ちやりとは、ちやわいもないことをちやべらしやる。ちやつきからのんだはちやばかり、ちやとうしゆのちやけを、ちやくぶくしたおぼえはござらぬ。わるいちやれだ。チヤハヽヽヽ。犬「イヤ是、目の見えぬものだとおもつて、そのちやらくらおかつしやれ。ハテ、見てゐた子どもが證據人だ。さる「まだたしかなことは、御ていしゆ、むの衆の呑だちやわんが酒くさいか、かいで見さしやれ（ト、うごかぬ所へ氣をつけられ、北八ちやつと、ちやわんをかくさうとするを、ていしゆひつとり、かいで見て、）「ヒヤア、くさい〳〵。そして酒でにちや〳〵する。コリヤハイおまいちがのましやつたにちがひはない。酒代をおかつしやいまし（ト、いはれてきた八、こいつはをさまらぬと思ひ、）「イヤちやけはのまぬから、ちやか代は拂はぬ。茶代なら、なんぼでもはらはふ。いくらだ。ていしゆ「そんなら、茶代をおかしやいまし。茶が二合で六十四文。北「ヤなんだ、ちやを二合のんだ。とはうもねへ。

彌「エヽめんだうな。はらつてしまつたがいゝ。手めへのするこたア、なんでもをさまらねへ。あしもとのあかるいうち、はらつてしまや（ト、めがほでしらせる。北八もせうことなし六十四文はらつてやると、）さる「イヤはや、とんだ人たちだ。大かたさつきおぶさつたも、こんた衆であらう。人のかつた酒をよこどりしてのむといふは、マアどろしゆうといふものだ。北「ナニどろぼうた。このどうめくらが（ト、りきみかゝる。彌次郎おしとめ、）彌「ハテ、こつちがわるい。モシ、れうけんしてくんなせへ。こいつは茶に醉と、氣がつよくてなりやせぬ。サアちやつ〳〵といかう。アイおちやらば〳〵（ト、いひ捨て北八をむりにひつたて、こゝを立出、あしばやに此しゆくをうち過、）北「エヽ、いま〳〵しい。けふはとんだ間がわるい。錢を出して酒をのみながら、へこまされたがうまらねへ。彌「ハヽヽヽ、おれよりはよつぽどちゑのねへをとこだ。することも皆あしくぼや



ちやにしられたる人のしがなさ斯興じ、打わらひつゝ、やがて秋葉三尺坊へのわかれ道にいたり、彌次郎兵衞遙拜して、

脇差の貳尺五寸もなにかせむ
三尺ぼうの誓ひたのめば

それより澤田、細田を打すぎ、砂川の坂道にかゝりけるに、兩方より木立生茂りて、日の蔭くらく、折ふしゆきゝもとだえたるに、誰ともしれず、「コヲレ〳〵、たびの人ォ〳〵（ト、よびかけられ、兩人うしろをふりかへりみれば、かたはらの木かげより、のさ〳〵とふところ手にて出來るは、どてらぬのこに、一こしぼつこみ、山をかづきんをかぶりたる、ひげだらけのむさくろしき男、彌次郎北八がむかうへをはり、立はだかる。ふたりはびつくり、こはごはながら、）彌「コリャ晝日中、なんの用だ。かの男「イヤさか手を壹文下さいませ。ハヽヽヽ。北「なんのこつた。それこおちついた。ソレ壹文。彌「あつたら肝をつぶさしやアがつて、いま〳〵しい乞食めだ（ト、つぶやきながら、原川をうちすぎ、はやくもなくりのたてばにつく。こゝは花ござをおりてあきなふ。）

道ばたに開くさくらの枝ならで
みなめい〳〵におれるはなござ

程なく袋井の宿に入るに兩側の茶屋賑はしく、往來の旅人、おの〳〵酒のみ、食事などしてゐたりけるを、彌次郎兵衛見て、

こゝに來てゆきゝの腹やふくれけん
されば布袋のふくろ井の茶屋

此しゆくはづれより、上方ものと見えて、棧留の布子に、銀ごしらへの脇差を差、花色羅紗のしやうぞくかけし合羽をきたる男、供ひとりつれて、あとになりさきになり、上方もの「モシ、おまいがたはおえどぢやな。彌「さやうさ。上方「わしも毎年くだるものぢやが、おえどはきよといはんじやうなことじやわいの。アノ吉原へもちよこ〳〵さそはれて、晝三とやらいふおやまを買たが、いつも人にふれまはれてゆくさかい、なんぼかゝつたやらこちやしらんが、おまい方もさだめて買なさるおやあらうが、アリャなんぼ程かゝるぞいな。彌「わつちも女郎かひでは、地面の五ヶ所と拾ヶ所はなくしたものだが、ナニ晝三ぐらゐではわづかなことさ。マアひらのちうさんなら片じまいで壹分貳朱、茶屋が壹分か、藝者が一くみで又壹分。そして一斤々々でもとれば、その代が四百ヅッかゝるぶんのことさ。上「ハテノわしも大見世はしよ〳〵へいたが、其いつきん〳〵といふは、なんのことつちやいな。彌「ソリャア酒一斤、肴一斤などと、内の酒がのめぬから、別に外からとりよせることさ。上方「ハアわしがいた内では、そないなことはなかつたわいな。そしてなにも、

のめぬ酒は出しやせんわいの。えらうよい酒であつたわいな。彌「ナニ、そりやアのめる酒でも、のめねへといつて、別にとる、えどつ子の氣性さ。上方「そして上方では、みな借てもどるが、おえどの女郎は現金ばらひじやさうな。彌「ナニサあそこでも、つき馬をつれてかへりさへすりやア、いくらでも貸てよこしやす。上方「ハヽヽヽ。コリヤおまいは大みせのおきやくじやないわいの。そのつき馬とやらいふことは、わしらが店のしよく人しゆのはなしできいてゐますが、晝三かいにそんなことはありやせんわいな。彌「なくてさ。ほんにわつちらア、尻に四ッ手かごの蛸のできたほどかよつたものだ。ナニ、ねへことをいひやしやう。上方「ハア、そんなら、おまいのおなじみは何屋ぢやいな。彌「アイ大木やさ。上方「大木屋の誰ぢやいな。彌「とめのすけよ。上方「ハヽヽヽ。そりや松輪屋じやわいな。大木屋にそんなおやまはないもせぬもの。コリヤおまいとんとやくたいぢや〳〵。彌「ハテあそこにもありやす、ナア北八。北「エヽ、さつきからだまつて聞てゐりやア、彌次さん、おめへきいたふうだぜ。女郎買にいつたこともなくて、人のはなしをきゝかじつて、出ほうだいばつかり、外聞のわるい。國もののつらよごしだ。彌「べらぼうめ、おれだとつていかねへものか。しかもソレ、手めへを神につれていつたじやアねへか。北「エヽ、あの大屋さんのとむらひの時か。へヽ、神につれたもすさまじい。なるほど貳朱のつとめをおぶさつたかはり、馬道のさかやで、むきみのぬたと、から汁でのんだ時の錢は、みんなおいらがはらつておいた。彌「うそをつくせ。北「うそなもんか。しかもそのとき、おめへ、さんまの骨を咽へたてヽ、飯を五六ぱい丸呑にしたぢやアねへか。彌「ばかアいへ。うぬが、田まちであまざけをくらつて、口をやけどしたこたアいはずに。北「エヽ、それよりかおめへ、土手でいヽ紙入がおちてあると、犬のくそをつかんだぢやアねへか。業ざらしな。上方「ハヽヽヽ。イヤはや、おまいがたは、とんとやくたいな衆ぢやわいな。彌「エヽ、やくたいでもあくたいでも、うつちやつておきアがれ。よくつべこべとしやべるやらうだ。上方「ハアこりや御めんなさい。ドレ、おさきへまゐらう（ト、きもをつぶし、さう〳〵にあいさつして、あしばやにゆき過る。）彌「いま〳〵しい。うぬらに一ばんへこまされた。ハヽヽヽ。（此はなしのうち、みかのはしをうちわたり、大くぼ

の坂をこえて、はやくも見付の宿に到る。)北「ア、くたびれた。馬にでものらうか。馬かた「おまいちおまアいらしやいませぬか。わしどもは役に出たおまだんで、はやくかへりたい。やすくいかすい。サアのらつしやりまし。彌「きた八のらねへか。北「安くばのるべい(ト、馬のさうだんができて、北八こゝより馬にのる。此馬かたは、すけがうに出たるひやくしやうゆゑ、いんぎんなり。)彌「コレ馬士どん、爰に天龍への近道があるぢやアねへか。馬士「アイそつから空へあがらしやると、壹里ばかしもちかくおざるわ。北「馬はとほらぬかの。馬士「インネ。かち道でおざるよ(ト、爰より彌次郎はひとりちか道のはうへまがる。北八馬にて本道をゆくに、はやくもかも川ばしをうちわたり、西坂さかひ松のたてばにつく。)ちや屋女「おやすみなさりやアし〳〵。ば〻「めいぶつのまんぢうかはしやりまし。馬士「ばあさん、異なひよりでおざる。ば〻「おはやうおざいやした。今新田のあんにいがどうしにいかずと、まつていたアに。コレ〳〵、よこすかのをんばあどんに、いひついでくんさい。道樂寺様に御説法があるから、あすびながらおざいといつてよヲ。馬士「アイ〳〵、又このごろに來すい。ドウ〳〵。北「この馬はしづかな馬だ。馬士「をんな馬で



ござるは。北「だうりでのり心がよい。馬士「だんなア、おえどはどこだなのし。北「えどは本町。馬士「ハアえいとこだア。わしらも若い時分、おとのさまについていきをつたが、その本町といふところは、なんでも無上あきん人ばかしゐる所だアのし。北「ヲヽそれよ。おいらが内も家内七八十人ばかりのくらしだ。馬士「ソリャア御たいさうな。おかつ様が飯をたくも　大ていのこんではない。アノ、おえどは米がいくらしをります。北「マア壹升貳合、よい所で壹合ぐらゐよ。馬士「ソリャいくらに。北「しれた事百にさ。馬士「ハア本町のだんなが、米を百ヅッ買しやるさうだ。北「ナニとんだことを。車で買込わ。馬士「そんだら、兩にはいくらします。北「ナニ壹兩にか。アヽかうと、二一天作の八だから、二五十、二八十六



でふみつけられて、四五の廿で帯とかぬと見れば、むげんのかねの三斗八升七合五勺ばかりもしやうか。馬士「ハア、なんだおえどの米屋はむつかしい。わしらにやア分らない。北「わからぬはずだ。おれにもわからねへ。ハヽヽヽ。

此はなしのうち、程なく天龍にいたる。此川は信州すはの湖水より出、東の瀬を大天龍、西を小天龍といふ舟わたしの大河なり。彌次郎、此所にまちうけ

て、倶に此渉しを打こゆるとて、

　水上は雲よりいでてうろこほど
　　なみのさかまく天龍の川

舟よりあがりて、建場の町にいたる。此所は江戸へも六十里、京都へも六十里にて、ふりわけの所なれば、中の町といへるよし。

　けいせいの道中ならで草鞋がけ
　　茶屋にとだえぬ中の町客

それより、かやんば、藥師新田をうちすぎ、鳥居松近くなりたる頃、濱松の宿引出向ひて、やど引「モシ、あなたがたアおとまりなら、おやどをお願ひ申します。北「女のいゝのがあるなら、とまりやせう。やど引「ずゐぶんおざります。彌「とまるから飯もくはせるか。やど引「あげませいで。北「コレ、菜は何をくはせる。やど引「ハイ當所の名物、薯蕷でもあげませう。北「それが平か。そればかりじやアあるめへ。やど引「ハイ、それに椎たけ、くわゐのやうなものをあしらひまして。北「しるがとうふにこんにやくのしらあへか。彌「マアかるくしておくがいゝ。そのかはり百ケ日には、ちとはりこまつせへ。やど引「コレハいな事をおつしやる、ハヽヽ。時にもうまゐりました。彌「イヤモウはま松か。思ひの外、はやく來たわへ。

　さつ〳〵とあゆむにつれて旅衣
　　ふきつけられしはままつの風

（やど引さきへかけぬけて、）「サア〳〵おつきだアよ。やどのていしゆ「おはやくおざいました。ソレおさん、お茶とお湯だアよ。彌「イヤ、そんなに足はよごれもせぬ。ていしゆ「そんならすぐに、おふろにおめしなさいまし。北「湯灌場はどこだ。彌次さんマアさきへやらかしねへ。彌「いま〳〵しい事をいふ男だ。手めへさきへはいれ。やどの女「こつちイおいでなさりまし（ト、すぐにゆどのへあんないする。此内、にもつもざしきへはこばせ、彌次郎兵衛おくへとほると、）ぜにや「ハイ、兩替はようおざりますが。あんま「おれうぢをなさいませぬか。彌「ヲツト、もんで下さい。イヤ、きさま目があるの。あんま「ハイ、仕合と、かたつぽはよく見えます。十年ばかしもあとに、風眼とやらをわづらひをりまして、兩眼ともにかいもくおッつぶしてしまひをりましたが、それからこつちイいろいろとれうぢをして、やうやつと此あひだ、左りのはうがよくなりました。彌「ひさしぶりで目があいたら、みんなしらぬ人ばかりだらう。あんま「おさやうでおざります。彌「見えないはうも、ずゐぶんれうぢをしなさい。直りさへすりやア見えるもんだ。時に北八、

湯はどうだ。（北八ふろよりあがり、）「アアい丶湯だ。あんまりあつくて、骸が半分水引のやうになつた。女「ハイ、御ぜんをあげませう（ト、こゝにてぜんも出、いろ／＼あれどもりやくす。やがてぜんもすみ、彌次郎ゆにも入てしまひ、）彌「サアあんまさん、やらかしてくんな。イヤ時に今、ゆどのから見ればこの内のかみさまかしらぬが、病人と見えて、取みだしてゐるが、なか／＼うつくしいしろものだ。あんま「ソリヤア氣違でおざるはのし。北「きちげへでもでへじねへの。あんま「イヤ、き丶なさい。今にねんぶつがはなりますわく（ト、此内かつての方にて、チャン／＼とかねのおとして、百万べんはじまる。）あんま「ソレお見さい。あのきちがひどのは、こゝの下女でおざつたが、御ていしゆがふつと手をつけられたを、かみさまがひどいやきもちやきで、あの女をぶつたりはたいたりして、とう／＼さらけ出しをりましたが、とかく御ていしゆは不便がつて、それからわきにかこつゝおきをりましたを、なほせかしかみさまがやかましくいつて、とう／＼氣がちがひ、首をくゝつて死にやりました。さうすると御ていしゆは又よいことにし、あの女を内へいれると、其晩から、かみさまのいうれいがとつついて、あの女が又かみさまのやうに、氣ちがひになつたもんだんで、それであんなに毎晩百萬べんをくりをります（ト、ひそ／＼はなすに、彌次郎北八も口はたつしやなれども、しやうはおくびやうもの。）北「なんだ、幽霊がとつついたとは、爰のうちへ其いうれいが出るかの。あんま「出るだんか。彌「うそをつくせ。あんま「ナニ、うそぢやアおざらぬ。まいばんこの屋根のうへに、白いものがたつてゐるのを、見たものがおざります。北「ヤアコリヤとんだ所にとまり合せた。あんま「それにそのかみさまがくびをくゝつた時の顔色といふ物は、目まなこをくるりとあいて青涕をたらし、歯をくひしばつて、それは／＼いきてゐるやうな顔であつた。北「ソリヤアどこでゝあんま「しかもソレ、おまいのうしろのえんさきで、北「ヤアコリヤたまらぬ。どうか首すぢがぞくぞくするやうだ。彌「あやにくしよぼしよぼ雨がふり出したはなさけない。あんま「こんやなどはきつと出さうなこんだ。北「イヤコレあんまどの、もうけへつて下さい。彌「アノ又たゝき鉦のおとで一ばい氣が引いれるやうだ。北「なんにしてもいま／＼しいやどをとつた。あんま「エ、臆病なお衆だ。ハ、、、。彌「もうしめへか。北八はどうだ。北「おらアもう

ねよう。あんま「さやうなら御きげんよく〳〵（ト、あんまはいとまごひして立て行く。此内女夜具をもち出、とこをとりてゆく。ふたりともにいつにないしやれもむだもいではこそ、只まじ〳〵とね入もやらず。）彌「エヽいつその事、北八今から立うじやアねへか。北「ナニとんだことをいふ。今のはなしで、どう夜道があるかれるもんだ。彌「それにこゝの内は、なんだかだゝびろいばつかりで、人がすくないから、うそきみのわるいうちだ（ト、目ばかりぱち〳〵してゐると、鼠がてんじやうをかけるおと、から〳〵〳〵。）「チウチウ〳〵。北「エヽ鼠までがばかにしやアがつて、小便をしかけた。彌「そのねずみめがうら山しい。おらアさつきから、小便をしたくてもこらへてゐるに、ヤアなんだかやはらかなものが足にさはつた。北「なんだ〳〵。ねこ「ニヤアン。彌「コノちくしやうめ。シツ〳〵。（百萬べんのかねのおと、）「チヤアン。（のきにおちるあまだれ、）「ぼたり〳〵。（をりもをりと、まよひ子をたづぬるこゑ、）「まよひ子の長太やアい。（チヤヽヽチヤン、ふたりとも、よぎのうちへもぐりこみ、きた八よぎのそでからさしのぞき、）「どうだ彌次さん、まだいきてゐるか。彌「なんまいだ〳〵。アヽ時にこまつた事がある。もう小べんがもるやうだ。北「おたがひになんぎな目にあつた。彌「なんとおもひきつて、いつしよにいかうか。北「あま戸をあけてやらかすべい（ト、ふたり一しよに、こは〴〵おきて、そろ〳〵としやうじをあけ、）北「サア彌次さん。彌「イヤ手めへさきへ。北「なにが出るもんだ（ト、あまどをさらりとあけたところが、なにか庭のすみに、白いものがちうとにふは〳〵。北八きやつといつて倒れる。）彌「ヤアどうした〳〵。北「どうした所か、あれを見ねへ。彌「あれとは。北「しろいものが立てゐらア。そしてこしから下が見えぬ。彌「ドレ〳〵（ト、ふるへながらこはいものは見たくなり、あまどのそとをそつとのぞき、これもきやつといつて、座敷へはい込み倒れる。）北「コリヤ彌次さんどうした。ヲヽイ彌次さんヤアイ（ト、此さわぎに、勝手よりていしゆかけいで、このていを見てさま〴〵かいはうし、やう〳〵彌次郎しやうきづきければ、）ていしゆ「ヤレどうなさいました。北「イヤ小べんにいつた所が、あそこに何かしろいものがゐたと、それでこのとほり、臆病な人さ。（ていしゆえんさきへ出、これを見て、）「イヤあれは繻絆でおざります。コリヤコリヤ、おさんやい〳〵、日がくれたに、やつぱりほしものをなぜ取こまぬ。そしてさつきから雨がぼろついて

きたに、らつしくちもない女どもだ。しかしコリヤアおきのどくさまでおざります。彌「ナニサ、わつちらアこはいといふこたアしらねへものだが、なぜか今夜は、虫の居どころがわるかつたさうな。ていしゆ「ハイおやすみなさいまし(ト、かつてへゆく。)彌「エヽいまいましい。大きにきもをひやした(ト、やう〳〵に心おちつき、えん先へ出て見れば、なるほど女がじゆばんをとりこんでゐる。ふたりとも小用をしてざしきへかへり、よぎひきかぶりて、)

いうれいとおもひの外にせんだくの
じゆばんの糊がこはくおぼえた

はじめてわらひを催し、心おちつきて、とろ〳〵と一すゐの夢をむすぶに、程なくやこゑの鶏の聲、家毎にうたひつるゝいさましさ。早出の馬のすゞのおとシヤン〳〵。まごのうた「ばんにござらばナア、裏からござれよヲ。おもてくろろ戸でおとがするよヲエ引。馬「ヒインヒイン。(鳥がいたやねをつゝく音、)「コトコト〳〵〳〵。彌「もう夜が明たさうな(ト、北八もともにおき出れば、やがてかつてよりぜんもいで、いそぎしたくして立出、此宿にすは明神の社をおがみて、)



梅干のすはのやしろときくからに

まもらせたまへ皺のよるまで

斯て、わかばやしの郷をうちすぎ、篠原のとりつきにて。北「ヲヤ味さうなぼたもちがある。ヲツトばあさん少とつくんな（ト、立ながら、店さきのぼたもちをつまんでがつちり、）北「ヤアこいつはくへぬ。ば〻「ソリヤアぼた餅のかんばんでおざるわ。北「イヤほんに、木でこしらへたものであつた。道理でかたい。ば〻「いくつしんせます。北「ナニ、三ッばかりくんな（ト、ぜにをはらひ、ぼたもちをくひながらよびかけ、）北「ヲ〻イ、彌次さん〳〵。彌「なんだ。うめへものならちつとくれろ。北「がうぎにうめへ。彌「ドレひとつ。北「イヤそれから御らうじろ（ト、手のひらへのせてさしあぐると、とんびが來りちよいとさらつてゆく。）彌「ハ〻〻〻。北「いま〳〵しい。こ〻らの鳶は、みな下戸ださうな（ト、うらめしさうにそらをながめて、）

あいた口ふさがれもせぬそのうへに
はなをあかせしとびのにくさよ

ほどなく蓮沼つぼ井むらを打過、舞坂の驛にいたる。これより荒井まで壹里の海上、乘合ぶねにうちのりわたる。げにも旅中のきさんじは、船中おもひおもひの雜談高聲にかたり合、わらひのゝしり打興じゆくほどに、頓て、なかばわたりて、乘合の人々も咄くたびれ、めい〳〵柳ごりに肘をもたげて、ゐねぶりをするもあり。又この風景に見とれて、只默然としてゐるもあり。（この乘合のうちに、としのころ五十ばかりの、ひげむしや〳〵としたるおやぢ、いかにもあかづきたるぬのこをきたるが、なにをかうしなひけん、いねぶれる人々のひさのしたをさぐり、又はうすべりをもちあげ、しきりにものをさがしもとむるやうすにて、彌次郎がそでの下をさぐりまはす。彌次郎その手をとらへて、）彌「コウ、きさまはなんだ。ことわりなしに人の袂をさぐつてなんとする。おやぢ「ハイ御ゆるされまし。わしはハアちとべこ、なくならしたものがござるから。北「おめへなくなつたものがあるなら、ことわつてたづねるがい〻。此ふねの中でどつこへもゆくことではない。なんこ。てよこ入か、きせるか。おやぢ「インニヤ。そんなものぢやアござらない。北「イヤそんなら錢かかねか。おやぢ「インニヤたづねずともうよくござる。彌「たづねずとよいものなら、人のゐねぶりをしてゐるうち、そこらアさぐりまはすこたアねへ。合みな「サアなにが見えぬ。いひなさい。此なかでものが見えないではすまぬ。おやぢ「インニヤ。もうよくござる。彌「ハテい〻ではすまねへ。なにが見えやせ

ん。おやぢ「ハアそんならいひますべい。北「みんなびつくりさつしやりますな。「ハヽヽヽ。おめへがものをなくしたとつて、だれがびつくりするものだ。彌「なにが見えやせん。おやぢ「アイ蛇が一疋なくなり申した。北「ヤア〳〵とんだことをいふ人だ。へびたアなんのへびだ。おやぢ「なんだべいとつて、いきた蛇でござるは。のり合「ヤア〳〵〳〵。彌「イヤきさまも、とんだ物をもつてきた。へびをマア何にしようとおもつて。北「こいつはきみのわるい。こゝらにはいぬか(ト、たちさわげば、せんちうみなみな総立に立さわぎ。)「ヤアこの板子の下に、とぐろをまいてゐるわ。ソリヤそつちのはうへいつた。エヽこりやきみのわるい。ソレ〳〵あけ荷の下へはひこんだわ。コリヤまあ、とんだ人とのり合した(ト、せんちう上を下へひつくりかへし、たちさわぐ。かのおやぢあけ荷をとりのけ、へびをなんのくもなくつかみ、またふところへいれる。)北「コレ〳〵、おめへとんだことをする。それをふところへいれておくと、又はひ出ますは、うみへうつちやつてしまひなせへ。おやぢ「インニヤ、さてさうはなり申さぬ。わしはハア、さぬきのこんぴらさまへいくもんだが、道中路銭につきて、すべいやうがござらないから、道でこのへびをとつたをさいはひ、へびつかひになつて、壹文ヅヽもらつていくもんだから、コリヤア、わしがしやうばいのたねでござるわ。彌「イヤ、なんぼきさまがしやうばいのたねだとつて、へびをもつてゐる人と、どうしていつしよにゐられるものだ。コレ船頭どん、なぜこんなものをふねにのせた。せんどう「ハアわしらだとつて、よもやあの人がへびを持てゐやうとはしりませぬ。のり合「コレおやぢどん、なんのかのといはずとも、たせいにぶせいだ。はやく打ちやつてしまいなせへ。おやぢ「インニヤ、やアだ。なり申さぬ。北「ならざアきさまぐるめに、うみへぶちこんでしまうがどうだ。おやぢ「ヲヽサ、はめるならはめて見さつしやい。わしにも手ぶしがござるわ。北「エヽこのおやぢめはふてへやつだ(ト、北八たちかゝつて、かのおやぢのむなぐらをとると、ふところからへびのあたまがによつこり出る。北八きやつと言て飛のく。彌次郎つゞいて立あがり、きせるにておやぢを一つくらはせる。おやぢはらをたて、つかみつくと、せんちうみな〳〵とりさへるうち、又かのへびが、おやぢの袂からおちて、のたくりまはると、)みな〳〵「ソリヤ又出をつた。ぶちころせ〳〵。(北八じぶんのわきさしのこじりで、ちやつとへ

びのあたまをおさへる。へびそのまゝさやにまきつきたるを、ちよいと海へ、はふり投るはずみに、手がすべり、わきさしもいつしよに海へ、うちこみけるに、へびはなみにまかれてみえず。脇指はたけみつゆゑ、うきてながれる。北八めんぼくなくしよげてゐる故、おやぢこれにてはらをいる。（のりあひ皆々、）「エヽ、これでおちついた。しかしおきのどくな事は、あなたのおこしのものだ。おやぢ「わしは此としになるが、わきざしのながれるのをはじめて見申た。北「エヽ、けつのあなのせめへことをいふおやぢめだ。おうしうころも川で、辨慶がたちわうじやうしたときやア、太刀もよろひもながれたといふことだ。おやぢ「ハヽヽヽ、こりやアハア、よこつばらが痛くなり申すわ。やなぎ樽といふ本に、「ころも川さいづちばかりながれけり」といふ句がありまうす。辨けいのさしてお出やつたこしのものは、かねでこしらへたもんだから、ながれべいこたアござんないは。北「エヽ、いはせておきやア、よくしやべる死ぞこなひめだ。はりとばしてやらう（ト、又立あがり、つかみかゝるを、彌次郎おしとめ、）彌「もう北八いゝにしや。のり合の衆の手まへもある。しづまれ〳〵（ト、是をなだめる内、ふねははやあら井ちかくなる。）せんどう「サア〳〵、お關所までござる。笠をとつてひざをなほさつしやりませ。ソレ〳〵舟があたりまするぞ（のり合「ヤレ〳〵、とゞこほりなくついて、めでたい〳〵。（ほどなく船は、あら井のはまにつきければ、のり合みな〳〵舟をあがり、お關所を打過ける。彌次郎北八もふねをあがり、）

舞坂をのり出したる今切と
まだたくひまもあら井にぞつく。

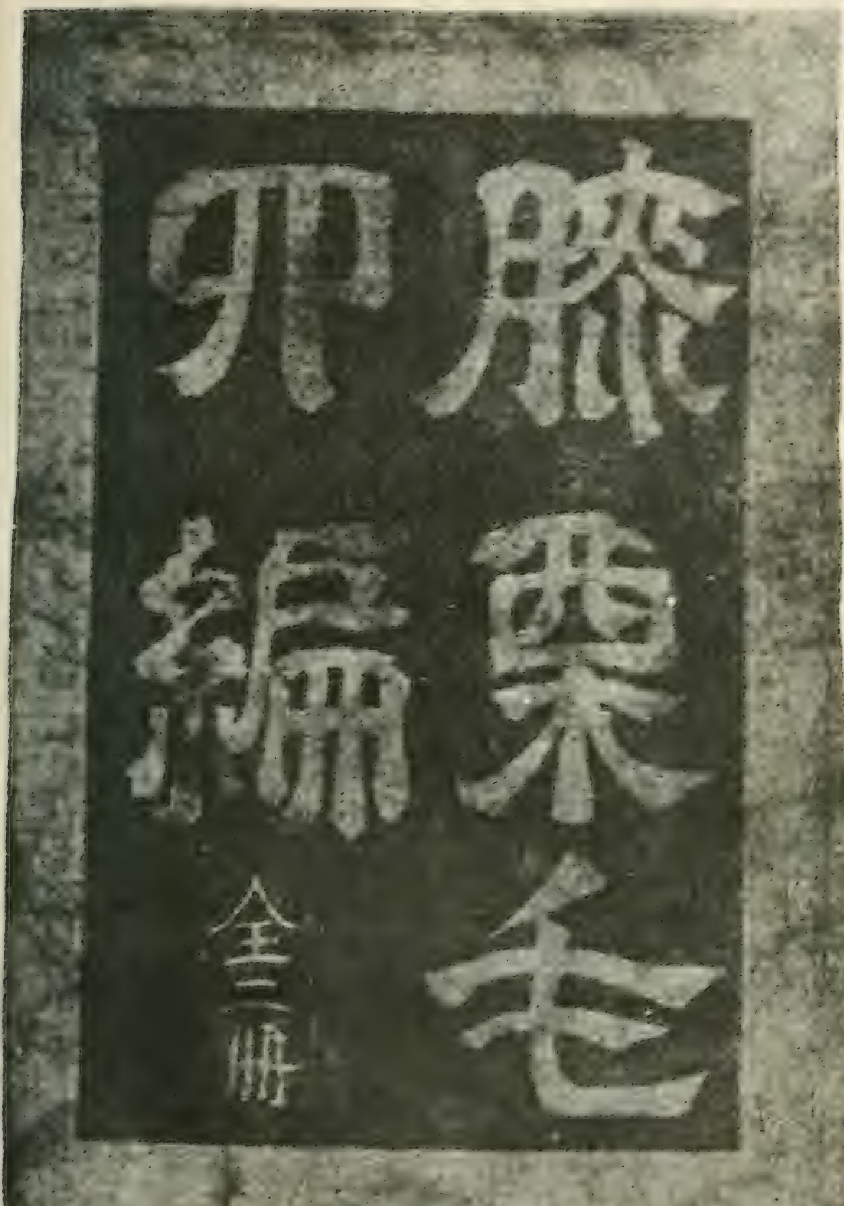
さるにても、腰のものゝながれたるは、前代未聞のはなしのたねと、みづからうちわらひつゝ、きた八、

竹篦をすてゝしまひし男ぶり
ごくつぶしとはもういはれまい

それよりふたりは、此あら井のしゆくに酒くみかはして、あしをやすめぬ。

道中膝栗毛三編

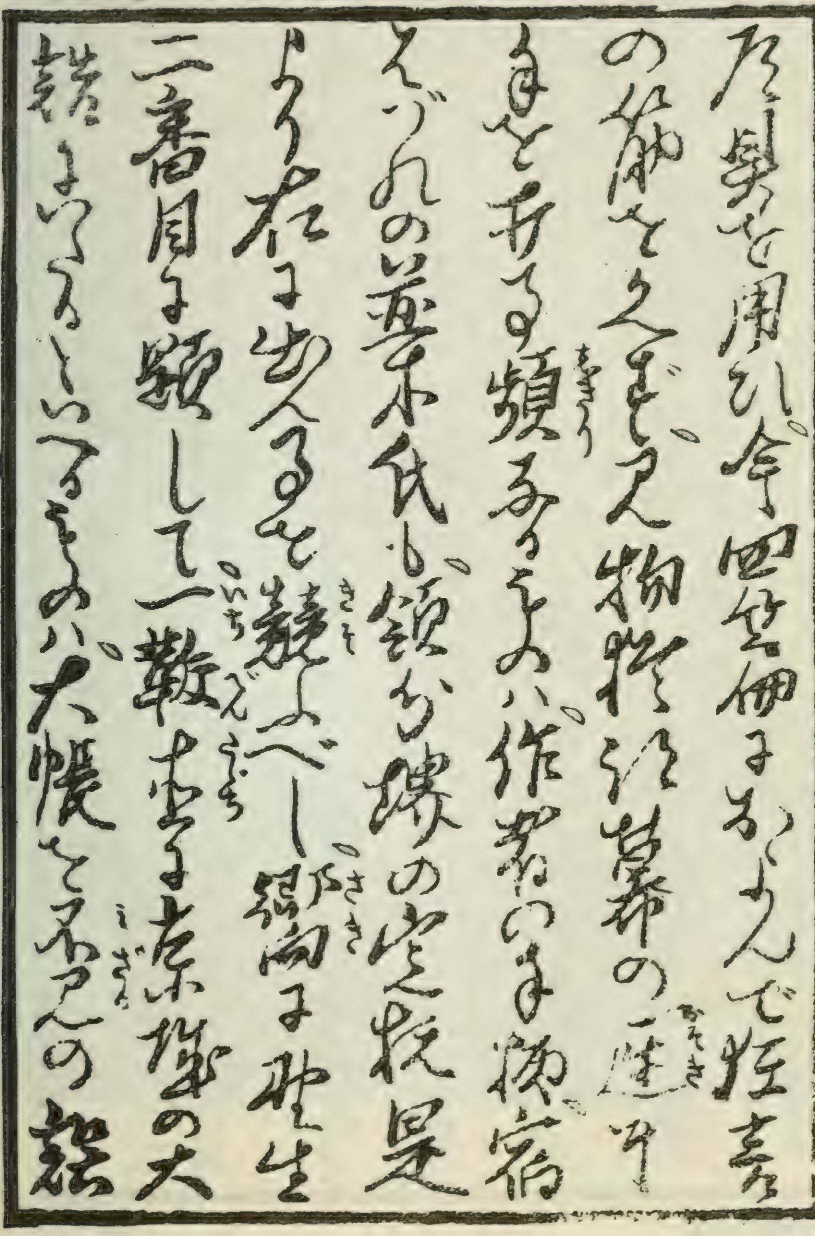
東海道中膝栗毛　四編



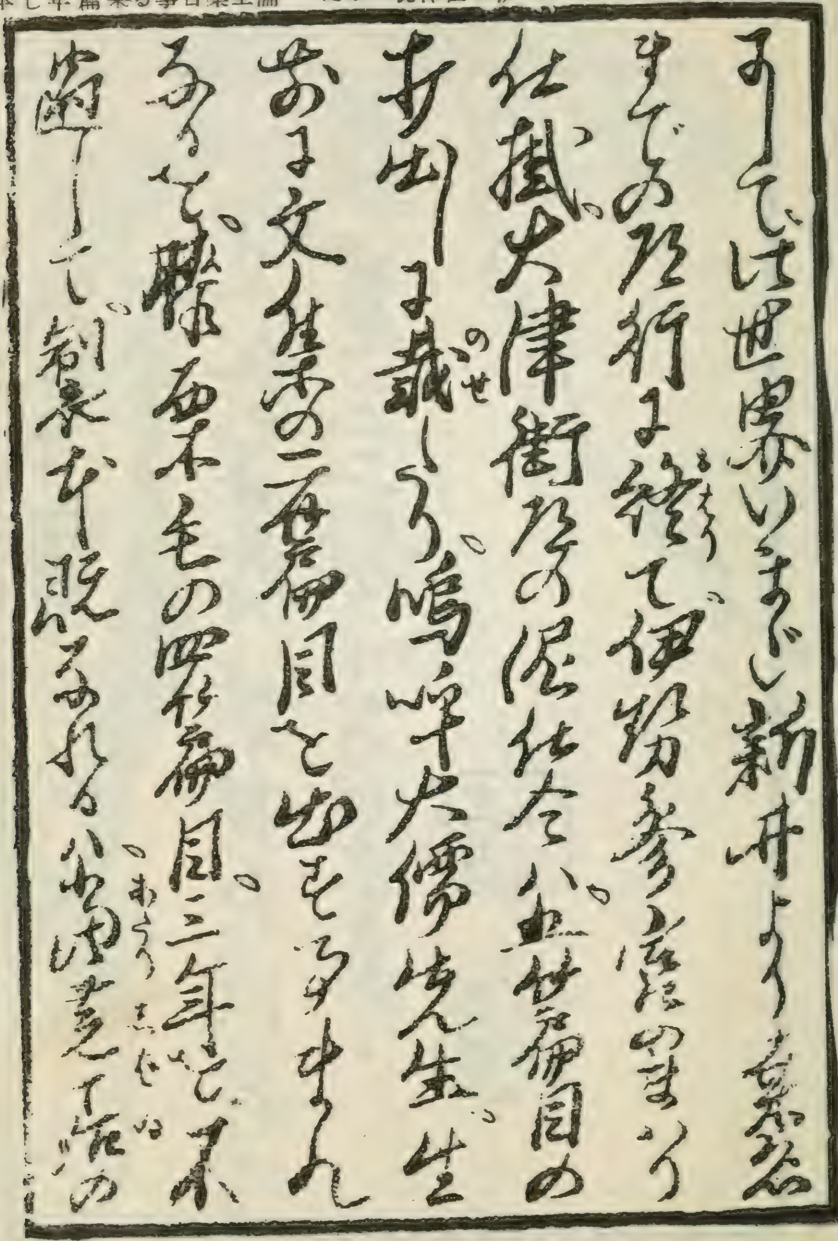
題膝栗毛四篇巻首

彼方の何件、立役の親行、十六夜の日記、東関紀行の趣、世に行るゝ多なれど、皆下役者の時代物語拵敷の耳遠きを、いかにせん、此膝栗毛の世話事は、一切落向を専として楽屋落を不顧、是八頭次、

二枚の道(だう)外方(げだ)に東海道の引道具を用ひ、今四篇におよんで狂言の筋をかへず、見物猶跡慕の遅(おそき)に手を打(うつ)事頻なるものは、作者の手柄、宿はづれの並木氏(うぢ)も、領分堺の定杭(ぢやうぐひ)是より右に出(いで)ん事を競ふべし。嚮に野生二番目に題して、一鞭直(たゞ)ちに京城の大詰に



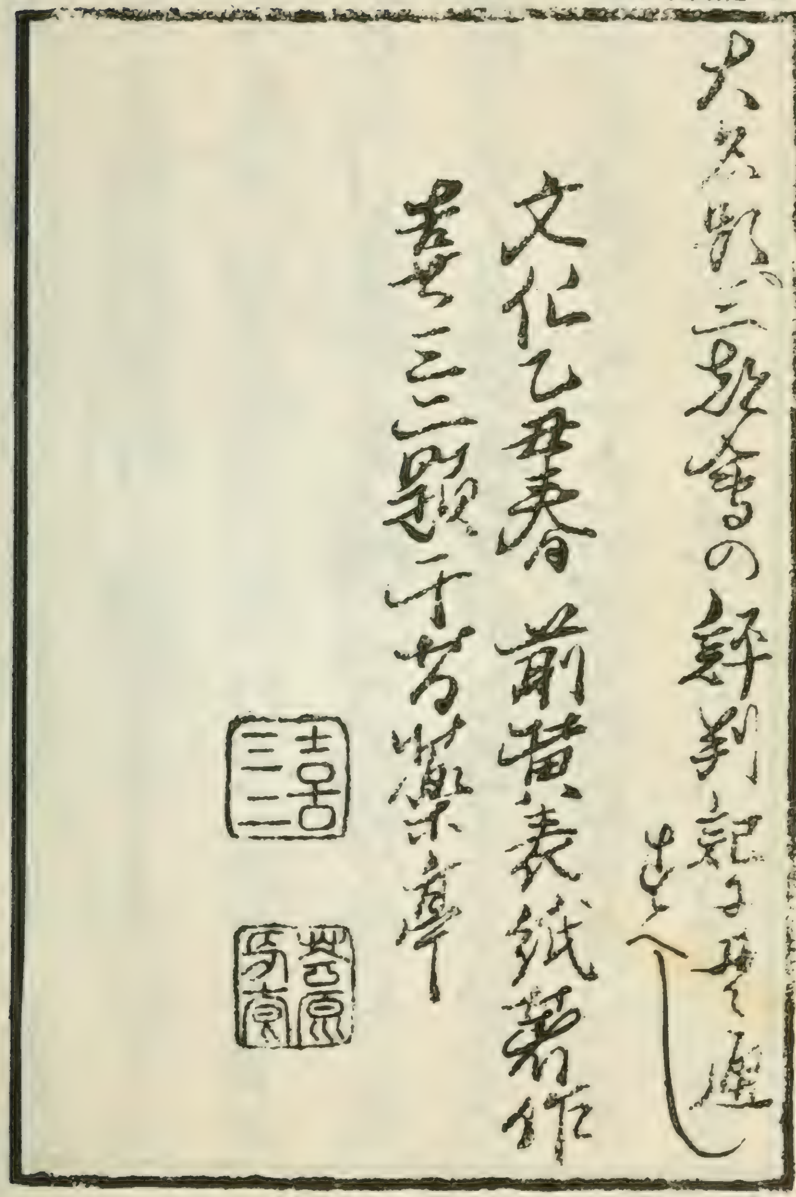
いたるといへるものは、大帳を不見(みざる)の誤にして、此世界いまだ新井より桑名までの道行(みちゆき)に終(をはり)て、伊勢参宮のまはり仕拙、大津街道の泥仕合は、五篇目の打出しに載(のせ)たり。鳴呼大儒先生、生前に文集の二篇目を出す事まれなるを、膝栗毛の四篇目、三年を不過して、製本



既なれるは、當芝居の大名題、三都會の評判記に貫通すべし。

文化
乙丑春

前黄表紙
著作
喜三二
題
干芍薬亭




十返舎一九

上巻書目

北八途中災難

赤坂酒婿礼騒動

下巻書目

弥次郎兵衛宿門争論

北八狂女ニ迷ふ

岡嵜宿の遊戯

弥次郎草履を探索

見続屋迷惑

北八伊勢音頭を踊る
宮宿瞽女強欲婦を倩て罵る
七里渡船中混雑
桑名茶店酒宴

以上　目録終

道中膝栗毛四編

由縁齋貞柳の狂歌に、螺貝の出しむかしはしらねども、今吹はよき追風なりけりと詠しは、東海道に名だたる今切の渉になん。そのかみ明應の比、山の奥より螺貝あまたぬけ出、それより海上あしくなりたりしを、元祿年中、公の命によりて、海上に數萬の杭をうち、蛇籠をふせ、往來渡船の難澁をすくひ給はりし御惠みの有がたさに、風和らぎ浪低くなりて、わたるに難なく、かの彌次郎兵衛北八、爰を打ちわたりて、あら井の驛に支度とゝのへ、名物のかばやきに腹をふくらし、休みゐたるに、げにも來往の貴賤絶間なく、舟場へ急ぐ旅人は、足も空に、出ぶねをよばふ聲につれてはしり、問屋へかゝる宰領は、口やかましく、課役をふるゝ馬さしについてのゝしる。はたご屋の、はかまごしよこちよにまげてはしり、茶屋をんなの、まへだれすぢかひに引ずつてとぶ。長もち人足横にたつてうたひ、馬士うしろをむきて、ひよぐりながら行道すがら、うた「うらが性根は、はま名のはしよヱ。今はとだえてヱ、おともせぬヨヱ。ドウ〱。ちや屋「おやすみなさりまアし〱。コレ馬士どん、おゝろし申さつせへよ。馬士「ヲットだんなさま、ソリャおつふりがあぶんない(ト、茶屋の軒下へ馬を引入る。このからしりにのりたるは、もめんのねずみ小もんに、ひうちのところ黒じゆすをあてたるぶつさきばをりをきたるお侍、馬よりおりて、北八と彌次郎がやすんでゐる向うのしやうぎにこしをかける)女「お茶あがりまし(ト、ちやをくんでくる。お侍、女のかほをじろりと見たあとにてちやわんをとり、)侍「モウ何時ぢやらう。女「九ッ半でもおざりましよ。馬士「きんにようの今時分ぢやろかい。侍「したくいたさう。何ぞあるか。女「おなぎのかばやきがおざります。侍「なんぢや、お内儀のかばやきか。馬士「御てい主のすつぽん煮はないかな、ハハゝゝ。時にだんなさま、お荷物は是におき升。お小づけがてうど五ッ。侍「その貫ざしはこれへたもれ。馬士「ハイ〱モシだんな様、ちとおねがひがおざります。へゝゝ。どうぞ御酒をいつぱいたべたうおざります。侍「ホッお身、さけがすきか。馬士「ハイめしよりはすきでおざります。侍「ゑんりよのない事ぢや。勝手にのみやれ。身どもたべうずならば、ふれまはうものを、かいもく下戸ぢやから、せひがない。馬士

「ハアだんなはあがらずとも、ハイどうぞいたゞきたうおざります。侍「ハヽア解せた。お身、酒手おくせといふのぢやな。イヤまかりならんぞ。道中御定法の賃錢ども、相はらつてまかり通る。別に酒手なぞといふことは、決してならん事ぢや。馬士「さやうではおざりますが、どうぞそこを。侍「イヤ達てといはゞ遣はさうが、請取書をしやれ。身共歸國の節、とん屋どもへ相とゞける。馬士「いつたい輕尻のお荷物には、おもすぎてをるから、どうぞ御れうけんなされまして。侍「しからばソレ八錢も遣はさう（ト、くわんざしより八文ぬいてやる。）馬士「ハイせめて十六文下さりませ。侍「しからば身共了簡のもつて、今四文遣はさう（ト、ぜに四文、はふり出してやる。馬士ふしよう／＼に取て、馬を引ゆく。）侍「コリヤまて／＼。なむ三寶、あやつ、もうどこへか行をつたさうな。身共、大切の草鞋を、馬につけておいたが、もつて行をつたさうぢや。殘念な、江戸まではかれるわらうぢぢやものを（ト、ぶつ／＼こゞとをいふを、北八をかしく、）「モシ、あなたはえどへお下りでござりますか。侍「さやう／＼。北「今承りますれば、草鞋一そくを、えどまでおはきなさると見えましたが、けしからず道がお上手でござりますの。侍



「イヤ身共、手作にいたいたわらうぢや程に、一そくあると、いつも江戸まで行戻りはきをります。彌「ほんに、わらぢのきれるはあるき下手でござりますが、あなたは道がお功者なことだ。しかし私も此わらぢは、一昨年松前へはいて參つたが、歸るまで何ともござりませなんだから、しまつておいて、去年長崎へもはいてまゐるし、そして又今度はいて出ましたが、御らうじませ。まだなんともござりませぬ。侍「はて扨、お手前は身共より道が功者ぢや。いかゞいたせば、そのやうにひさしくわらうぢがはかれますな。彌「ナニサ草鞋ははきづめにしても切れませぬが、そのかはり私は、どうも脚半がきれてなりませぬ。侍「それはどうして。彌「私は旅へ出ますと、馬に乘づめにいたしますから。北「おきやアがれ、ハヽヽヽ



ハ。彌「サアいかう。あなた御ゆるりと。アイおせわ（ト、こゝの勘定をして立出、此しゆくはづれより、二人ともふた川までの駕をとりて、打のり行ほどに、はや高師山、はしもとの北に見ゆれば、彌次郎兵衛れいの狂歌を口ずさむ。）

鳶がうむ高師の山の冬はさぞ
雪に眞白く見違やせん

此あたりにて、向ふよりくるふたつの駕に行合。ふたつの「どうぢやおやかた、

かへていかずに。こちらのかごかき「なんぼおこ
す。ふた川「げんこやらずに、それでい
ぢやござい。こちらのかご「ま丶よ、棒組まけ
てやらアず(ト、かごのさうだんしてきて、
両はうのかごかき、)「旦那さまがた、駕
をかへますから、乗かへて下さりませ。
北「ふた川まで打こしだがい丶か(ト、此
内、ふた川の駕にのり來る男、こちらのかご
にのりかはれば、北八も彌次郎も、さきのか
ごにのりうつる。北八をのせたるかごかき、)
「旦那は仕合ぢや。コリヤア宿屋駕で
おざりますから、蒲團がしいてあるだ
け、おまへがたはかへさしやつたが、
お德といふものぢや。北「ほんにさうだ
(ト、いひつ丶かごにしたじきのふとん、高
くなりゐたるに心づき、何心なくふとんの間
をさぐり見れば、四文ぜに一本あり。さては
今までのつて來た男が、爰においてわすれた
と見えた。なんでもこいづせしめうるしと、
北八そつとかの一本を、おのがふところへち
やくぶくして、そしらぬかほをしてゐる。こ
の内早くも白すかの驛に至る。はひりくちの
ちや屋女、おもてに出てよびたつるを見て、
彌次郎兵衛、)

出女の顔のくろきも名にめでて
七なんかくす白すかの宿

此宿をうちすぎ、程なく汐見坂にさし
か丶るに、これなん北は山つゞきにし
て、南に蒼海漫々と見え、絶景まこと
にいふばかりなし。

風景に愛敬ありてしをらしや
女が目もとの汐見坂には

(北八、かく口ずさみたるを、かごの先ぼう
聞きつけて、)「ハア旦那はえらい歌人ぢ
やな。アレ向ふの山を見さしやりまし。
鹿がゐをりますは。北「ドレ〱、是は
おもしろい。さきぼう「めいよう、おえど
の旦那がたは、あんなおもしろうもな
いちくしやうめを、珍しがらしやつて、
きんによう(昨日)も發句とやらを、いはつし
やれたお人があつた。北「おれも今の鹿
で一首よんだ。貴さまたちにいつてき
かせたとつて、馬の耳に風だらうが、
かういふ歌だ、おく山に紅葉ふみわけ
なく鹿の、聲きく時ぞ秋はかなしき。
なんと奇妙か〱。あとぼう「だんなはえ
らひものぢや。わしどもはかいもくし
らぬが、なんにしされ、うたが直にひ
ゆつと出るといふものぢやからえらい
えらい。北「一寸した所が、此くらゐな
ものよ。イヤ貴樣たち、あんまり讃て
くれたから、酒が呑したくなつた。爰
は建場か。さきぼう「さるが番場でおざり
ます。サア棒組、一ぷくすつていかア
す(ト　ちや屋のかどに、かごをおろしやす
む。北「みんな一盃ヅツのまつし。コレ
女中　そこへ酒を壹升でも貳升でも、

味うめへ肴をつけて、出してやつてくんな。(彌次郎兵衛かごの内にて、)彌「ヲヤ北八どうした。でへぶおうふうなことをいふな。北「ナニサ、ちよつと呑せるが、どこでもこのくらゐなものだ(ト、さきほどひろひし、四文ぜに一本をだして見せかける。)彌「手めへ、それをみんなおごるか。北「しれた事よ。彌「おもしろへ、おいらも御馳走にならう(ト、彌次郎かごを出て、みせさきにすわると、やがて女がさけさかなをもち出る。きた八をのせたるかごのさきぼう、)「是は有がたうおざります旦那いたゞきます。コリヤ〳〵ぼうぐみ、どこへいつた。ヤイみんな來されの。さつきの猿丸太夫さまが、御酒を下されるは(ト、かごかき四人、よりこぞりてのみかける。彌次郎もをかしく、おもいれのみかける。北八は一ばんへこまされてだんまり也。)彌「サア〳〵御ていしゆ、いくらだの御酒代は、駕の旦那がおはらひだ。ていしゆ「ハイ〳〵、酒とさかなで三百八十文でおざります。北「コリヤがうてきにくらやアがつた(ト、ふしようく〳〵にかのぜにを拂ってしまふ。かごかきこゝろづき、)「ヤほんにぼうぐみ、さつきの一本の錢はどうした。ぼうぐみ「ヲ、それ〳〵。モシ旦那、あなたの



乘てござらしやるふとんの間に、四文錢一本いれておきましたが、あるか見て下さりませ（ト、いはれて北八びつくりし）「ナニ爰にか。イヤ見えないわへ。

かごかき「ナニないことはあらまい。慥に入れて置ました。北「さつき見りやア、北八、手めへがふとんの下から出して、ひねくりまはしてゐた錢ぢやアねへか。

かごかき「それでおざります（ト、北八心のうちに、いま〱しいことをいふと彌次郎をにらむ。彌次郎をかしくわきのはうを、ぐつとふりむいてゐると、北八しかたなく、ふところより一本だして、ふとんのしたへそつといれ）北「ヲヽヽ爰にあつた〱。

かごかき「サア棒組、この元氣でやりからかさう。ちや屋「ようおざりました（ト、かごをかきいだす。彌次郎をかしく、こゝは猿がばんばにて、かしはもちのめいぶつなれば）

ひろうたとおもひし錢は猿が餅、
右からひだりの酒にとられた。

かく打わらひてゆくほどに、境川といふにいたる。爰は遠江三河のさかひにて橋あり。彌次郎地口にてよめる、

遠州へつぎ合せたる橋なれば
にかはの國といふべかりける

程なくふた川の驛に着く。此ところ、家毎に強めしを商ふ見ゆれば、

名物はいはねどしるきこはめしや
これ重箱のふた川の宿

旅人を見かけて呼たつる。女「お休なさりまアし。あつたかなお吸物もおざりまアす。無鹽の肴で、酒でもお飯でもあがりまアし。（此茶やのかど口にゐたるくもすけ、北八彌次郎をのせたるかごかきをよびかけて）「ヒヤア八兵衛、かへてうせたな。畜生め、はやういて嗅が番をしされ。密夫めがしけこんでけつかるは。彌次郎をのせたるかごかき「あはうめ己が所の親父めが首釣てをるこたアしらずに、くそたれめハヽヽヽ（ト、こゝを行過ぎ、とひやのすこし手前に駕をおろす。彌次郎北八こゝよりおりてゆくと、此しゆくは、いづれのとのさまにや、お小休と見えて、御本ぢんのまへにのりものたてつどき、あまたの御同勢はせちがひ、とびや、袴ごしをねぢりてかけまはり、野ばかまふんごみのお侍衆、御ほんぢんへ相つめるを見て北八、）「ハヽア、おやしきだけ、大屋樣も二本さしてゐるな。北「ばかアいふな。踏込さへはいてゐると、大屋だとおもつてけつかるさうだ。北「アノ乘かけを見な。がうぎに蒲團がかさねてあらア。彌「その筈だ。のつてゐる人の天窓を見や。叶福助といふもんだ、ハヽヽヽ。ソレ馬がきたア。馬「ヒヽヽヽ。彌「アイタヽヽ。わりい所に合羽籠を

おきやアがる（ト、けつまづいてこどとをいふを、おやとひの中間ていにみゆる男、）「コノやらうめ、合羽かごへ土足をふみかけやアがつて、ふてへことをぬかしやアがる。よこつつらアかぶりかくぞ。彌「ハヽヽ、大江山の飯時ぢやア有めへし、頬アかぶりかくも氣がつえゝ。中間「なんだ、こいつぶちはなすぞ。彌「きさまたちの赤鰯でナニきれるものか。中間「さうぬかしやア切にやアならぬ。コリヤ角助お身のこしのものを、ちよつと借しやれ（ト、ほうばいのかくすけが、こしの物をとりにかゝる。）かく助「コリヤコリヤ、切ならばお身の刄物でなせきらぬ。中間「ハテやかましい。どれできつてもいゝぢやアねへか。かく助「イヤよくない〳〵。中間「ハテしはいをとこだ、ちよつとかしやれな。かく「イヤさておぬしも氣のきかぬ男だ。おれがほんとうの脇差は、鎗持の槌右衛門に、二百のかたにとられたを、お身さまもしつてゐるぢやアねへか。中間「ホンニさうだ。エヽコリヤおのれ、打はたすやつなれどゆるしてくれう。はやくいけ。彌「イヤいくめへ。サアきれ〳〵（ト、つつかゝる。みな〳〵此けんくわ、をかしがりて、引わけもせず、けんぶつしてゐると、かのお中間、）「エヽさうぬかしやア了簡がならぬ。突殺してなとくれう（ト、引ぬいてつきにかゝる竹みつを、彌次郎ひつつかんでねじたふせば、くだんの男、）中間「ヤアレ人ごろし〳〵（ト、此内、はや殿様のおたちと見えて、おさへのひやうし木、）「カツチ〳〵〳〵。（そりやおともぞろへとさわぎたつ。御どうぜいにつれてけんくわもそれぎりとなり、彌次郎兵衛もこれさいはひに、北八もろともこゝをのがれて足ばやに行過、）彌「ハヽヽヽ、大笑ひのけんくわだ。

わきざしの抜身は竹と見ゆれども
喧嘩にふしはなくてめでたし

それより此宿を出てたどり行に、はやくも大岩小岩を打すぎ、岩穴の觀音をふしをがみて、

行がけの駄賃にをがむ觀音も
尻くらひとは岩穴のうち

げにも旅のきさんじは、差合くらず高聲にはなしものしてゆく内にも、さすがに退屈の欠びしながら、北「アヽくたびれた。ちつとばかりの風呂敷包や紙合羽も、なか〳〵邪魔になるものだ。コウ彌次さん、おめへの荷とわつちが荷を一所にして、坊主持にしようぢやアねへか。彌「コリヤアおもしろへ。さいはひこゝにいゝ竹が捨てある（ト、ひろひとりて、ふたりの荷物をたけのさきにくくりつけて、）彌「サア〳〵北八、手めへ

からもつてこい。北「とじやくにおめへはじめさつせへ。彌「そんなら狐けんでやらう。サアこい。ヒイフウミイ。おつとしめた。北「エヽいめへましい（ト、ひつかたげ行、向ふから來るたび僧は法華宗とみえて、）僧「だぶ〳〵〳〵。だヽだぶだぶ〳〵。フニャ〳〵〳〵〳〵。だぶ〳〵〳〵〳〵。北「ソリヤ彌次さんわたしたぞ。彌「ヲツト受取たりや。其つぎの坊さまはどうだ。はやくくればいいに（ト、また向ふよりくるのりかけ馬の鈴の音、）「シヤン〳〵〳〵〳〵。馬士うた「たかい山から谷底見ればエ、おまんかはいや布さらすナアエ。どう〳〵。彌「きたぞ〳〵。お繪符は勅願所、ソレ馬のうへに御出家よしか、北「あんまりはやいな（ト、うけとつて、ひつかつぎゆく道のかたはらに、）いざり、「御らんのとほり、足のかなはぬゐざりに御はうしや。北「イヤアこいつ坊主だ。壹文やれ。彌「まへから見ると坊主のやうだが、うしろを見や。ぼんのくぼに毛があるは。北「おきやアがれ、ハヽヽヽ。（此内、あとよりびくにが三人づれにて、ゆびにつけし管をならしてうたひくる、）うた「身をやつす、賤がおもひを夢ほどさまにしらせたや。えいそりや、ゆめほどさまにしらせたや。サアサさんがらへ。さんがらへ。北「あざやかな聲が



する（ト、ふりかへり、）ヒヤア比丘尼だ比丘尼だ。サア彌次さんわたしやす。彌「エヽいめへましい。北「人に荷をもたせるは中々いゝものだ。これでお供を連た心もちだ。ヤア〳〵こいつらアまんざらでもねへ。彌次さん見ねへ。こちらの比丘尼がおれを見て、アレいつそにこ〳〵と愛敬がこぼれるやうだ。畜類め。彌「あいきやうのいゝのぢやアねへ。アリヤア顔にしまりのねへのだは。北「わるくいふぜ（ト、此内、あとになりさきになり行びくには、まだ年も廿二三、今ひとりはとしま、十一二の小びくにともに三人づれ、中にもわかいびくにが、きた八のそばへよりて、）「モシあなた、火はおざりませぬか。北「アイ〳〵今うつてあげやせう（ト、すり火打を出して、かち〳〵。）北「サアおあがり。時におまへがたアどけへいきなさる。びくに「名ごやのはうへまゐります。北「今夜一所に泊てへの。なんと赤坂迄行なせへ。一所にしやせう。びくに「それはありがたうおざります。モシどうぞお多葉粉を一ぷく下さりませ。とんと買うのを忘ました。北「サア〳〵たばこ入を出しな。みんなあげよう。びくに「それでは、あなたおこまりでおざりましよ。北「ナニわつちやアよしさ。時におめへがたのやうなうつくしい顔で、なせ



髪を剃なさつた。ほんにさうしておくはをしいものだ。びくに「ナニわたしらが、たとへ髪が有たとて、誰も構人はおざりませぬ。北「あるだんか、わつちらア一ばんにかまふ氣だ。なんとかまはしてくんなさらんか。びくに「ヲホヽホヽ。北「はやく一所にとまりてへ。彌次さん此さきの宿へもうとまらうぢやアねへか。彌「ばかアぬかせ。あやにく坊主のくるがとぎれた（ト、こごといひながら行ほどに、火うち坂をうちすぎ、二軒茶屋にいたると、此所よりびくにはわき道へはひる。）北「コレ／＼おめへたちやアどこへゆく。そつちぢやアあるめへ。びくに「ハイ是からおわかれ申ます。わしどもは、この在郷へまはつてまゐりますから（ト、野みちをさつ／＼と行過る。北八あきれて見おくると、彌次郎兵衛をかしくふき出し、）「ハヽヽヽヽ北八、手めへけふは大分つけがわりいせ。北「エヽとんだめにあつた。ごふはらな（ト、うろ／＼かりしてゐるうしろから、ばつたり行あたる往來の人。）北「アイタヽタヽ。目をあいてとほれ。だれだ（ト、ふりかへり見ればたび僧。）彌「ヲツト荷物わたした／＼。北「コリヤはじまらねへ（ト、ふしよう／＼に、荷もつをひつかたげゆくまゝに、やがて吉田のしゆくにいたる。）

旅人をまねぐ薄のほくちかと
爰もよし田の宿のよねたち

（此しゆくはづれより、遠國同者とは見ゆれ共、少しきいたふうしやべる手合五六人、高聲にはなして行をきけば、中にもめひきのたてじまに、肩の所しまがらかはりたるきれをあてたるあはせをひつぱり、ふろしきづつみといとだてをせおひし男、あとのはうをふりかへりて、）「ヲヽイ、源九郎義經ヤアアイヤアイ。はやく來さいの／＼（ト、よぶこゑに彌次郎北八をかしく、このよしつねとよばるゝ男をみれば、紺の紋つきのひろそであはせに、これもつゝみといとだてをせおひ、かほは大あばたにて、少しかたこびんはげたる男、）「かめ井せなアや、片岡せなアはやヽと足が達者だアのし。うらアあくとのあかぎれさアへ、石ころがつゝぱいつて歩かれ申さぬ。かめ井「靜御前せんはどうしさつたアのし。よしつね「ヤレさてきゝなさろ。あとの建場で、靜御前が持病の疝氣さあおこつたと、金玉ノウつりあげて、うつちぬべいと、あげへこげへにさわぎやることよ。それにハア六代御前が、牡丹餅さア三十べしもうちくつたげで、食傷のウして、ぢたんばたんせつながりやる。まんだそれに、辨慶は團子のくしさアで咽笛のウつゝいたと、涙アこぼしてなきやつたげで、うらが新家の友盛どのが、三人のウ介

抱して、やらやつとあとからつるんで來申すわ。にしたちやアあにもしらずに、うつぱしつて仕合だアのし。彌次郎このはなしをかしく、あとになりさきになりて、「おめへがたアどけへいきなさる。よしつれ「お伊勢さまへ參り申すわ。彌「さつきからきけば、おめへがたア義經だの辨慶だのといひなさるが、どういふこつたね。よしつれ「ハアそんた衆の聞きやつたらをかしかんべい。コリヤハアわし共が、國さアつん出てくるまへに祭れいがあり申て、千本櫻といふ芝居のウし申たから、それでハアよしつねだアの辨慶だアのと、狂言さアおつぱじめた時、忘れないやうにと、その名をやつぺしいひつけたくせさア、今でもおどけにいふのでおざるわ。彌「きこえやした。そんならおめへは義經になつたお方と見える。よしつれ「さうでおざる。其まへにわしどもが國さアへ江戸しばやが來て、天神樣の狂言のウし申たが、きゝなさろ、たまげたりくつよ。あにがハア時平とやら五兵衞とやらいふ惡人どのが、讒言のウせられたげで、天神樣の島ながしにならしやます時、輿にのつてお出やると、あにがハア見物のウしてをるばあまさまたちも、かつさまたちも、ヤレ〳〵いとしぼいこんだと涙アこぼして、御門跡さまの通らしやますやうに、米だアの錢だアのと、舞臺さアへまきちらかいて、悲しがりやる。そこでハア見物の中から、博勞の與五左といふづないふとが、舞臺さアへかけだいていやるにやア、此しばやアならないぞ〳〵。あぜ天神樣ア島ながしにせるのだ。最前お出やつた長樂寺樣のえんまさまサ見るやうな、お公家どのが惡人だア。あにも天神樣に科アない。いかにしばやだアとつて、ふとを馬鹿にしたこんだア。天神さまのしりやア、此博勞の與五左がもつわ。時平どのはうらがあひてだと、あにハア御年貢米の二俵べしも、さしやアげる力のあるせなアだんで、誰もうつたまげて、挨拶のウせるふたアなし、見物もくちやう〳〵に、與五左どのさうだ。その時平とやらアしよびき出してぶつたゝけと、あにハア村中の若いふと達が、樂屋さアへ刎こんで、らんごくをやるどおもひなさろ。さうせるとえど役者の時平どのは、コリアたまらないと、尻のウおつぱしよつて、つんぬげ申た。それからハア名のしどんへ寄合つけて、もう此村へえど役者アいれさるなと談合のウして、わしどもが其跡のしばやさアで、狂言のウおつぱじめ申たが、江戸しばやよりかア、ぶちわ

れるほどはやり申た(ト、いきせいはつての、とはずがたり、じまんらしくはなしもてゆくまゝに、いつのまにかは大雲寺にいたる。このところは、あまざけのめいぶつなれば、彼人々は打つれて此茶屋にやすむ。彌次郎兵衛北八は、いそぎこゝをうちすぐるとて、)

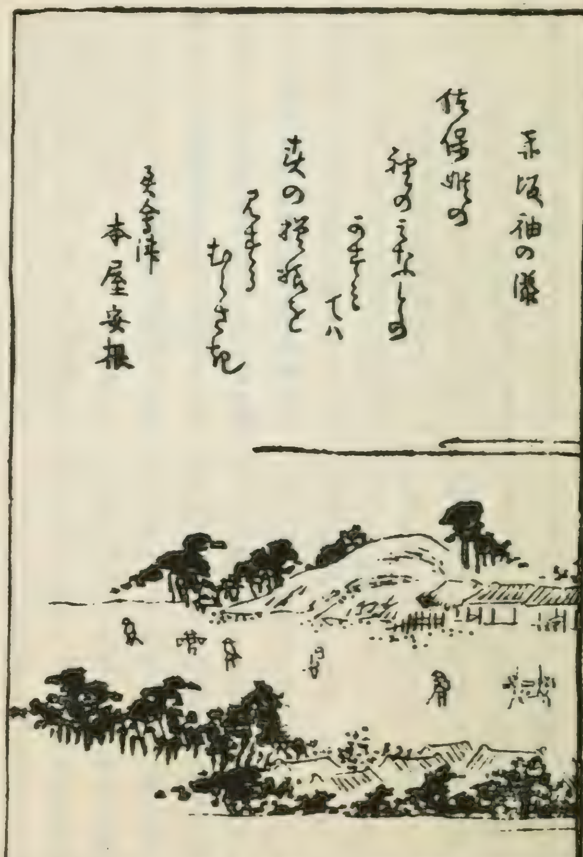
いや高き御寺のまへの名物は
　これも佛になれしあまざけ

斯て此あたりより、はや日も傾き暮に近ければ、いざや急んとて、草臥し足をはやめてたどり行道すがら、北「どうだ彌次さん、埒があかねへの。彌次「大きにくたびれた。北「なんと昨晩の泊は中ぐらゐな宿で有つたが、今夜はかうしやせう。赤坂までわつちがさきへいつて、いゝ宿をとりやせう。おめへくたびれたなら、跡からしづかに來なせへ。宿から向ひの人を出させておきやせう。彌「それよからう。しかし宿はどうでもいゝから、たぼのありさうな内にしやれ。北「のみこみ山〳〵(ト、此ところよりかけぬけて先へゆく。彌次郎あとよりたどりゆくに、ほどなく御油のしゆくにいりたる頃は、はや夜にいりて、両かはより出くるとめ女、いづれもめんをかぶりたるごとくぬりたてたるが、そでをひいてうるさければ、彌次郎兵衛やう〳〵とふりきり、行すぐるとて、)

その顔でとめだてなさば宿の名の



御油るされへと迯て行ばや。
彌次郎兵衛、あまりに草臥ければ、先此所はづれの茶店に腰をかけたるに、あるじの婆々、「アイ茶アまゐりませ。彌「モシ赤坂まではもう少しだの。ばゞ「アイたんだ十六丁おざるが、おまへひとりなら此宿にとまらしやりませ。此さきの松原へは、わるい狐が出をつて、旅人衆がよく化され申すわ。彌「そりやア氣のねへはなしだ。しかし爰へ泊たくても、つれがさきへいつたからしかたがねへ。エヽきついこたアねへ。やらかしてくれう。アイおせわ（ト、ちや代を置、此所を立出行に、くらさはくらし、うそきみわるく、まゆ毛につばをつけながら行く。はるか向ふにてきつねのなく聲、）「ケン〱〱。彌「ソリヤなきやアがるわ。おのれ出て見ろ。ぶち殺してくれう（ト、りきみかへつてたどり行に、北八もさきへかけぬけ、此所迄來りしが、これもこゝへきつねが出るといふはなしをきゝて、もしもばかされてはつまらぬと、彌次郎をまち合せ、つれ立ゆかんとおもひ、土手に腰をかけたばこのみゐたりけるが、それと見るより、）北「ヲイ〱彌次さんか。彌「ヲヤ手めへなぜこゝにゐる。北八「宿とりにさきへいかうとおもつたが、爰へはわりい狐が出るといふことだから、一所にいかうと思つて待合せた（ト、い



ふに、彌次郎心づき、こいつきつねめが北八にばけたなとおもひければ、わざとよわみをみせず、）彌「くそをくらへ。そんなでいくのぢやアねへわ。北「ヲヤおめへなにをいふ。そして腹がへつたらう。餅を買て來たからくひなせへ。彌「ばかアぬかせ。馬糞がくらはれるものか。北「ハヽヽヽ。コレおれだわな。彌「おれだもすさまじい。北八にそのまゝだ。よく化やアがつた。ちくしやうめ。北「アイタヽヽ。彌次さんコリヤどうする。彌「どうするもんか。ぶちころすのだ（ト、うつかりした所を、ぐつとつきたふして、彌次郎そのうへゝのりかゝりおさへる。）北「あいた／＼。彌「いたかア性體をあらはせ／＼。北「アレサ尻へ手をやつてどうする。彌「どうするもんか。尻尾を出せ。ださずばかうする（ト、三尺手ぬぐひをとき、きた八が手をうしろへまはしてしばる。北八をかしく、わざとしばられてゐると、）彌「サア／＼、さきへたつてあるけ／＼（ト、北八をくゝり、うしろからとらへて、おつたて／＼あか坂のしゆくにいたる。はやいづれのはたごやにもきやくをとめて、かどにたちゐる女も見えず。彌次郎は、やどからむかひの人が、もはや出さうなものとうろつく内、）北「コウ彌次さん、いゝかげんに解てくんな。外聞のわりい。人がきよろ／＼見てわりいわな。彌「エヽくそをくらへ。ハテ宿はどこだしらん。北「ナニおれはこゝにゐるものを、だれがさきへやどをとつておくものだ。彌「まだぬかしやアがるか、ちくしやうめ（此内、向ふよりくるやど屋のをとこ）「あなたがたは當宿おとまりではおざりませぬか。彌「きさまむかひの人か。やどや「ハイおさやうでおざります。彌「それ見たか。此ばけぞこなひめ（ト、北八をつゐにてひとつくらはせる。）北「アイタヽヽヽ、どうしやアがる。（やどやの男きもをつぶし、）「あなた方外のおつれさまはまだお跡でおざりますか。彌「ナニもうわつちひとりさ。やどや「ハアそれでは間違ました。私方のおとまりは、十人さまぢやとうけたまはりました（ト、此男は、さう／＼行過る。またあるはたごやのみせさきにて、）ていしゆ「おとまりかなもし（ト　かけよつてとらまへる。）彌「イヤつれのものがさきへ來たはずだが。北「そのつれはおいらだわな。彌「エヽいけしぶといやつだ。もういゝかげんに尻尾を出しをれ。イヤまて／＼、あそこに犬がゐる。コヽヽシロコヽコヽヽヲヽシキヲヽシキ／＼。ハヽア犬がきても、いけしやア／＼として居をるから、さては狐ではねへ。ほんとうの北八か。北「しれた事。わりいしや

れだ。彌「ハヽヽヽ。サアおめへの所へとまりやせう（ト、心とけて北八がいましめをもとくと、やどやのてい主、）「サアおはひりなさりませ。ソレお湯をとつてこい。おざしきはえいかな。北「ア、とんだめにあつた（ト、あしをあらふ。此うち、やどの女荷物をざしきへはこぶ。ふたりもざしきへうちとほりて、）彌「ホンニ北八了簡しや。おらア實にほんとうのきつねだとおもひつめた。北「ばかばかしいめにあつた。いまだに此手首がぴり〳〵する。彌「ハヽヽヽ。しかしまてよ。斯はいふものゝ、やつぱりこれが、はかされてゐるのぢやアねへか。どうやらをかしな心もちだ（ト、むしやうに手をたゝき、）御てい主〳〵。ていしゆ「ハイおよびなさりましたか。彌「コレどうも合點が行ぬ。こゝはどこだ。ていしゆ「ハイ赤坂宿でおざります。北「ハヽハヽヽ。彌次さんどうしたのだの。彌「エヽまだはぐらかしてゐやアがる（ト、いひつゝ眉毛をぬらして、）御亭主さん、なんとこゝの内は、卵塔場ぢやアねへか。ていしゆ「エ、なによヲおつしやる。北「ハヽヽヽ。おもしろへ〳〵（ト、此内、かつてよりやどの女、）女「おゆにおめしなさりませ。北「サア彌次さん、先湯にでも入て氣をおちつけるがいゝよ。彌「ちくしやうめが、糞壺へいれやうと思つて。その手をくふものか。ていしゆ「ナニ、湯は清水でおざりますから奇麗でおざります。マアおいでなさりませ（ト、勝手へ行。女ちやをくんできたり、）「モシお淋しかア、女郎さんがたでもおよびなさりませ。彌「ばかアいふな。石地藏を抱てねるこたアいやだ。女「ホヽヽヽホ。いなことをおつしやります。北「そんなら、さきへはひりやせう（ト、北八ゆどのへ行。この内ていしゆまたざしきへ出來り、）ていしゆ「ときにお客さまへ申上ます。今晩は、私方にすこし祝事がおざりますから、御酒をひとつあげませう（ト、いふうち、かつてより酒さかなもち出る。）彌「おかまひなさるな。なんぞおめでたいことかの。ていしゆ「ハイおさやうでおざります。わたくしの甥めに嫁を貰ました。今晩婚禮をいたさせますから、おやかましうおざりましよ（ト、いひすてゝ立て行。北八ふろよりあがり、）北「なんだ、おごりかけるの。彌「こゝの内にこんれいがあるといふことだ。コリヤいよ〳〵きやつめがはぐらかすにきはまつた。もう水風呂へもはひるめへわへ。北「エヽおめへもいゝかげんにしな。さりとは、執念ぶけへこつた。彌「イヤ〳〵、めつたにゆだんはならぬ。この硯ぶたも、こんなにうまさうに見え

ても、性は馬のくそや犬のくそだらう。北「ホンニさうだらうから、おめへは見てゐなせへ。こいつはありがてへ。おじぎなしにやらかしやせう（ト、北八手じやくにて、さつ〳〵とのみかける。彌次郎れいのいぢがきたなく、さすがに見てもゐられず、まじ〳〵して、）いめへましい。氣をわるくさしアがる。北「きづけへはねへ。一ぱいのみなせへ。彌「イヤ〳〵馬の小便だらう。ドレにほひをかゞして見せや。ムウ〳〵こりやアほんとうのやうだ。どうもこらへられぬ。エヽまゝよ、やらかせ（ト、一ぱいついでのみ、したうちしながら、）「酒だ〳〵。ドレ〳〵さかな。ヲツト此玉子はどうもいろあひが氣にくはねへ。えびにしよう。カリ〳〵〳〵。こいつはほんとうのえびだ〳〵（ト、ひつかけ〳〵、さいつおさへつさつ〳〵とのみかける。此内かつての方は、わんかぐのおとがたびしとさわがしく、とりこみさいちう、はなれざしきには、はや婚禮のさかづきごとはじまりしと見えて、うたひのこゑする。）「四海なみしづかにて、國もをさまる時津風、枝をならさぬみよなれや。あひに相生の松こそめでたかりけれ。北「ヤンヤア。彌「コウやかましいわへ。北「やかましいはいゝが、おめへさつきから盃をはなさねへ。ちつとこつちへまはしな。ホンニ馬のくそだの小便だのと、いふかとおもやア、やみくもひとりで喰ふやつさ。ハハヽヽ。彌「おらア正直化された氣になつてゐたが、今おもやア、さうでもねへ。とんだ苦勞をさせやアがつた。北「エヽ、おめへのくらうしたよりかア、おらアしばられて、へんちきなめにあつた。ハヽヽヽ（ト、此内、かつてより膳も出かれこれする内、おくのざしきにて又うたひうたふ。）「千代もかはらじ幾ちよも、さかえさかゆる松梅の、ふたばの竹のよをこめて、老となるまでと結ぞたのしかりける。めでたい〳〵。三國一の嫁をとりすました。しやん〳〵〳〵（ト、手を打たゝき、さゞめきわたる。此内かつてより女來り、）「あなた方もうお床をとりましよか。彌「そんなことにしやせう。北「コレ女中祝言はもうすみやしたか。さだめて嫁御はうつくしからう。女「アイサむこさまもよい男、よめごさまもえらいきりやうよしでおざります。おきのどくなことは、あちらの座敷にねやしやりますから、むつごとがきこえましよ。彌「なんだ、そんな手合と割床はあやまる。北「こいつは大變〳〵。女「モウおしづまりなさいませ（ト、出て行。ふたりも、そのまゝねかけると、はやふすまひとへとなりのざしきに、むことよめが

ねるやうす、ひそ〳〵とはなしするをきけば、した地からいろごとにてもらひしよめと見えて、なか〳〵しよたいめんとは見えず、ぶつたりつめつたりして、いちやつくやうす手にとるやうにきこえ、彌次郎北八はねもやらず。）彌「エヽ、とんだめにあはしやあがる。北「ホンニわりい宿をとつた。人のこゝろもしらずに、なんだかおそろしくむつまじいな。畜生め。彌「サアはなしごゑがやんだからむづかしい（ト、だん〳〵ふとんからのり出て、となりのやうすをきゝみゝたて、ねられぬまゝに彌次郎そつとおきたち、ふすまのすき間からさしのぞく。北八もはだかのまゝはひおきて、）北「コウ彌次さん、娵はうつくしいか。おいらにもちつと見せてくんな。彌「コリャしづかにしや。肝心の所だ。北「ドレ〳〵見せねへ。彌「あレサひつぱるな。北「それでもちつと退なせへ（ト、彌次郎がむちうになりてのぞきゐるを、ひきのけんとひつぱれども、のかじといぢばるはずみに、ばつたりふすまがあちらの間へたふれると、二人もともにふすまの上へころげる。むこもよめもおしにうたれてきもをつぶし、）むこ「あいた〳〵〳〵。コリャどやつぢやい。なんぜ、唐紙を打こかいた（ト、はねおきた所が、あんどうもひつくりかへしてまつくらやみ、彌次郎はちやつとにげておのがねどこへはひこむ。北八まご〳〵してかのむこにつかまさり、せんかたなく、）北「御めんなせへ。手水にゆくとつて、ツイ戸まどひをしやした。せんてへ爰の女中がわりい。夜座敷のまん中に行燈をおくから、それにけつまづいておきのどくだ。ア、小便がもるやうだ。ちよつといつて來やせう。こゝをはなしてくんなせへ。むこ「いやはやあきれたお人たちぢや。夜着もふとんも油だらけになつた。コリャ、おさん〳〵、だれぞはやうおこしてくれぬか（ト、よびたつるこゑに、かつてより下女が火をともして來り、そこらかたづけるに、北八も手もちなく、はづれしからかみをはめてひきたて、やう〳〵にことわりいうて、もとのねどころへかへり、すご〳〵とねかける。彌次郎をかしくふき出して、）

ねてきけばやたらをかしや唐紙と
ともにはづれしあごのかけがね

きた八も、夜着うちかぶりながら、

聟娵のねやをむしやうにかきさがし
われは面目うしなひしとて

斯うち興じて、夜もふけゆくまゝに、双方しづまり、只いびきの聲のみたかくなりぬ。

道中膝栗毛四編 下

鷄の聲萬戸にひゞきて、ひきつるゝ課役の馬の嘶いさましく、すでに夜明ければ、彌次郎兵衞北八もおき出て、あらましに支度とゝのへ、はやくも赤坂のしゆくを立出けるに、此宿の出端より、後になりさきになり行三人づれの旅人、是も江戸ものと見えて、すこしいさみ肌のまき舌にて、はなし行をきけば、一の男「コウ、ゆうべの泊りはをかしかつたなア。今一人「ソレヨ、なんだか奥の間にとまつてゐたやつらア、きのきかねへやらうどもだ。やどに婚禮があるを羨しがりやあがつて、襖のあいだから覗きをつてむちうになり、とう／＼ふすまをぶつこかしやアがつた。大わらひなべらぼうどもだ。今一人「それからその聟にあやまるざまア。あの騒ぎでおいらもろくにねられなんだ。いめへましい。一人男「そしてアノひとりのやらうめは、なんだか宵に宿の亭主をよびやアがつて、こゝのうちは卵塔場ちやアねへかと、いやあがつたが、あのべらぼうめは、どうでも氣がふれてゐると見える（ト、此てやい、ゆうべ彌次郎北八がとまりし内へ一所にとまつたと見えて、此はなしをする。彌次郎



聞て大きにあつくなり、あしばやにかけより詞をかけ、）彌「コレきさまたちやア、さつきからだまつて聞てゐりやあ、おいらがことをべらぼうたア、なんのこつた。さきの「ナニこんた衆の事ぢやアねへ。こつちのことだワ。彌「こつちの事といふことがあるものか。ゆうべのやどでの事をぬかすのだらう。その襖をぶつこかしたべらぼうといつたア、おれが事だワ。旅人「ハアこんたそのべらぼうか。彌「ヲヽ其べらぼうだ。旅人「ハヽヽヽべらぼうだからべらぼうといつたが、いゝぢやアねへか。彌「イヤこいつ、わるくしやれやアがる。旅人「くそをくらへ。彌「なんだくそをくへ。コリヤおもしろい。くふべいからもつてうしやあがれ（ト、彌次郎まつくろになつてりきむ。されどあひ手はけつきさかんのいさみでやい、馬のくそをつゐのさきにつつかけ、）「サアもつてきたからくらへ〳〵。彌「イヤ馬のくそはきらひだ。旅人「きらひといふことがあるものか。是非くらはせにやアおかぬ（ト、三人かゝつて、彌次郎を手ごめにする。北八をかしく中へはひり、）北「イヤもう御めんなせへ。たれでも同前でござりやす。三人「ハヽヽヽかんにんしてやらう（ト、行過る。彌次郎とても叶はぬと見て、たゞ口のうちに、ぶつくさぶつくさ。）此内、桐の木、中柴を打



すぎ、山中にいたる。爰は麻のあみぶくろ、早縄などをあきなふなれば、北八、

みほとけの誓ひと見えて寶藏寺
なむあみぶくろはこゝのめいぶつ

かくて藤川にいたる。棒ばなの茶屋、軒ごとに生肴をつるし、大平皿鉢、みせさきにならべたてゝ、旅人のあしをとゞむ。彌次郎兵衛

ゆで蛸のむらさきいろは軒毎に
ぶらりとさがる藤川の宿

それより此宿をうちすぎ、出はなれの、あやしげなる茶店にやすみて、北「なんだかがうてきにむしがかぶる。ばあさん、素湯はあるめへか。ちや屋「ハアさゆはござらぬ。水をしんぜませうか。北「エヽくすりを呑のだへ。コリヤたまらなくなつた。ときに雪陣はどこにある。彌「どこにとつて、そんなにおいへを見廻しても、雪陣が疊の上にあるものか。裏へいかつし。北「ヒヤア、つきあたりに見える〳〵（ト、うらへ出、せつちんへゆき、しばらく用たして出、あたりを見れば、此うらに物おきをすまひとせし、ひとつ家あり。内に十八九のむすめ、髪はとりみだしゐれども、なか〳〵の上しろもの、只ひとりゐるやうす、北八れいのわるじやれにて、ずつと此内へはひりて笑ひかけ、）北「モシ御無心ながら、水をひとつ（ト、手をあらふ内、娘はげら〳〵とわらつてゐる。）北「コウあねさん、おめへ何を笑ひなさる。そしてひとりこゝにゐなさるのか。無用心な（ト、あたりを見れども、外に人はなし。北八こしをかけて、たばこをすひつけ、）「へゝきみの惡い。何を見てわらひなさる。コレサ、何をわらふのだよ（ト、むすめの手をとつてひつぱるに、さすがふり切もせず、やつぱりわらつてゐる。北八、こいつは有がたい。もうしめたものだと、ぐつとひきよせる。いつのまにやら子供が見つけて、）「ワアイ〳〵。あの人はきちがひと、いろごとをせるやア。ハヽヽヽ（ト、大ごゑをあげてわらひ、かけ出す。北八びつくりして、にげのかんとするに、娘はつかみついてはなさず。娘「エヽこのをとこめ。はなさん〳〵。北「これはなさけない（ト、むりにひきはなさんとする所へ、此娘のおやぢたちかへりて、）親仁「コリヤ我徒は、わかいをなごをとらへて、何せるのぢや。北「イヤ何にもしませぬ。おやぢ「せんものが、なんせ女ひとりをる内へ、はいらつせへた。コリヤじようちならんわい。北「ナニサ、今用たしにいつて、ツイ水をもらつたばかりさ。おやぢ「インニヤ、あれは氣ちがひでござる。こなさん、氣のちがうたものをとらへて、なぐさみかけさつせへたに、

ちがひはあらまい。北「ナアニとんだことを。おやぢ「インニヤ、すまん〳〵。氣違ひとあなどつて、ひゆつと、こなさんがやりからかいたにちがやしよまい。とかういはつせるな。此分ではすまんぞ〳〵（ト、わめきちらかし、大さわぎをやらかす此内彌次郎兵衛、おもてのちやみせにまちゐたりしが、北八手水にいつてかへらぬゆゑ、あとから見にきたり、さきほどより此のようすを、かたかげに見てゐて、をかしさをこらへられず、しかしもう出かけてやらうと、うそ〳〵出きたり、）「御めんなせへ。わつちやア、此をとこの連のものだが、ゐさい聞やした。こいつめもあのやうに見えても、ありやうはちつと氣がふれてゐやす。了簡してやつてくんなせへ。エヽ此やらうめ、よくせわをやかせる。アノ頬はよ。アレみなせへ、きよう〳〵する顔が證據。むすめごは女だけまだしも。イヤモこのきちげへには、こまりはてやす。おやぢ「イヤ〳〵、さうではあるまい。ナニあの人が氣ちがひなものか。彌「ハテサあの頬付を見なせへし。アリヤ〳〵あのとほりだ。北「なんだ、おれをきちげへだ。コリアおもしろい。ハヽアふるはふるは、アレ〳〵花のふゞきが、ちりやたらり、うんきんたらり、かんきんちりヽ、ちりかゝるやうで、おいとしうてねられぬ。トヽヽ〳〵。ヤア、そこにをるは女房どもか。イヤ能女房ぢやに〳〵。コリヤ、のほい、ほヽい、さんなあろかいな。ヤンヤア。彌「アレ御らうじろ、あのとほり。其くせあのつらで、色氣違さ。それだから女と見るとびろ〳〵して、ほんに耻をいはにやア、利がきこえやせぬが、こいつめはわしが弟で、イヤモ、こんな因果こたアござりやせん。おやぢ「ハアこなさんがさういはつせると、わしもかなしい。見さつせるとほり、たんだひとりの娘が、この病で、わしはおつきな苦患でござる。彌「さつしてをります。エヽこの馬鹿やらうめ。何をげら〳〵わらうのだ。時に親父さん、おやかましうござりやした。おやぢ「マアちやでものんで、ござらつせへ。彌「もうめへりやせう。サア氣違め、うせをれ（ト、彌次郎兵衛がちやらくらに、やう〳〵とまひをさまり、彌次郎兵衛きた八をつれて、こゝをのがれ出かけ、はては大わらひとなりて、）

くどきたる娘はほんの氣ちがひに
こちやまちがひとなりし目ちがひ

かく打興じて、こゝを立出、行道すがら、彌「コウ北八、手めへもとんだものだ。氣のちがつた娘をとらめへて、どうしやうとおもつて。業さらしなをと

こだ。北「へゝめんぼく次第もねへ。しかしわつちまで氣違へとは、彌次さん、ありやおめへ一生の出來だせ。彌「酒でも買やれ。時にそれについてはなしがある。丁度手めへのやうな氣まぐれものが、きちげへの女をとらへて、じやらつきかゝると、其女のおやぢが見つけて、はらをたて、ヤイ此やらうめは、人のうちへことわりなしに牛込やアがつて、むすめをちよろまかさうとか。ソリヤア赤坂べイだわへといふと、手のへもまけぬ氣になり、イヤうぬなんだ、くちばしをとんがらかして、四ッ谷鳶のやうだとちやかすと、さきのおやぢが、ヲゝおれがよつやとんびなりやア、うぬは八まんさまの鳩だといふ。コリアをかしい。此北八がなせ八まんさまの鳩だといふと、おやぢが、ハテきさまはきちげへの豆を、くはうとしたぢやアねへかと、ハヽヽヽ。北「なんだ、市谷の地口はおそれる。ハヽヽヽ。

打わらひつゝ行ほどに、あづき坂を過、岡の江、ゆふせん寺を打こえて、大平川にいたる。

岸に生ふ芹のあをみに小鴨まで
水にひたれる大平の川

それより大平村を過行ほどに、岡崎の驛にいたる。　こゝは東海に名だたる一勝地にて、殊に賑はしく、兩側の茶屋、いづれも奇麗に見えたり。ちや屋「おやすみなさりまアし。おめしをあがりまアし。よい諸白もおざりまアす。おはひりなさりまアし〳〵。彌「ナント腹がすこしござつたぢやアねへか。北「いかさまこゝでお小休とやらかさう(ト、あるちや屋へはひる。うちの女、)「ようお出なさりました。彌「あねさん、お飯にしよう。なんぞ味へものはなしかの。女「ハイ、よい鮎のさかながおます。北「ナニ鮎のなますだ。女「ヲホヽヽヽ(ト、わらひながら、やがてあゆのにびたしをつけて、ぜんを持きたる。)彌「ドレ〳〵、こいつはうめへ。そしてかうてきにしろいめしだ。北「エヽ外聞のわりいことをいふ。アレ女が笑つていかア。あいつめは顔中がゐくぼだわへ。彌「ゐくぼならいゝが、ほうべたがくぼんで、踏返しの馬蹄石といふもんだ。ハヽヽヽ(ト、例のわるくちたら〳〵しやれてゐると、此内おくさしきには、きんさいの客三人ばかり、此しゆくにゐつづけし、かへりがけと見え、あひかたの女郎、この所までおくり來りしとみえて、わかれのさかもり大さわぎにて、此しゆくのこうきぶしうたふこゑ、にぎやかにきこゆる。)うた「菊にませがきゆひこめられて、今はしのぶにしのばれす。チツテレトツテレ(ト、大さわぎをやるゆゑ、北八彌次郎おく

の方をのぞきみれば、ひとりの客のこゑとして、）「コレ〳〵、太兵、さかづきはどうせるのぢや。太「イヤ、仁兵のねきにあらアす。仁「ドレ、おれひらはう。太「あらためていこしやれ。仁「ヲト、、、こないにうけてはとかうはあらまい。ツレさそかい。太「ヲツトうけた。ひゆつとやりからかいて、これから門もつこうへ戻らうまいか。但しは桝屋かてうじやへいかうまいか。女郎い「なんぢやいし、アノ太兵さんはナア、酔なさるとナア、あのやうなことといふてぢやがナア、外へやります事はナア、ならまいわいナア。太「イヤ〳〵、かゝる折から、橘屋で手形うけとつた、しろものがあるから、いかざならまい。女郎「ムウさうかいし。仁「さうとも〳〵。（チツテレトツテレ。）かねて手管とわしやしりながら、だまされて咲むろの梅。ハヽハヽ（ト、此内からしりの馬一二三疋、おつたて来り、此茶屋の軒につなぎて、馬士ども中庭より奥へ通り、）「旦那がたおむかひに参りました。三人「御太義〳〵。おなごりをしいが、これでわかれざならまい。女郎「ひさしぶりで是からきた、鳴海のおつるさんぢやおませんかいな。太仁「ハハヽヽ、サアいかうまいか。ちや屋の女「御きげんよう（ト、それ〴〵にあいさつするうち、三人の客はめい〳〵からしり馬にうちのり、いとまごひしてのりいだす。女郎おくり出て、さま〴〵のしやれもあれどもりやくす。弥次郎北八しじうこのていを見て、女郎かひの、からしり馬でかへるもをかしいと、打わらひながら、）

　三味せんの駒にうち乗帰るなり
　岡崎ぢよろしゆ買に来ぬれば

かくてふたりも此所を立出、宿はづれの松葉川を打こえ、矢矧のはしにいたる。

　欄干は弓のごとくに反橋や
　これも矢はぎの川にわたせば

それよりうたふ坂町、尾崎の郷、今村の建場につく。ちや屋のばゞ「めいぶつさたう餅、おめしなさりまアし。おやすみなさりまアし〳〵。北「ヲイ、この餅はいくらヅツだ。もちやのていしゆ「三文でおざります。北「こいつはやすい。こちらのうづらやきはいくらだの。ていしゆ「それも三文。北「イヤ、これは三文では高いやうだ。ナント御ていしゆ、かうしなせへ。これを二文にまけてくんなせへ。其かはりそちらの丸いもちは、四文に買やせう。（亭主、こいつはへんちきなことをいふとおもへど、どちらにしてもそんのいかぬことゆゑ、）亭主「ハイ、ようおざります。おとりなさりませ。（北八、たばこ入から、ぜに二文取出して、）「四文あら

ば、丸いのを買うとおもつたが、二文あるから、このうづらやきにしやせうト。（うづらやきをとつて、打くらひながら行。）弥「ハヽヽヽ、こいつは北八でかした。さすがのていしゆも、膽ばかりつぶしてゐやアがつた。北「ナント、ちゑはすさまじからう。弥「へヽ、べらぼうめ。おれもそのくらゐなことをしかねるものか、ハヽヽヽ。

わづかでも欲にはふけるうづらやき
三もんばかりのちゑをふるひて

かく興じ、わらひつれて、西田街道より半里ばかり北の方に、名にしおふ八ツ橋の舊跡を思ひて、

八ツはしの古跡をよむもわれ／＼が
およばぬ恥をかきつばたなれ

程なく池鯉鮒の驛にいたる。馬士の「みやで泊ろか、お龜にしようかナア。ただしや岡崎、よい女郎衆ナア。ドウドウ。弥「いめへましい。わらぢであしをいためた。ちつとの間ざうりで行う。モシ／＼、此わらざうりはいくらだね。ていしゆ「アイ／＼、十六文でおます。弥「こいつはやすい。（こゝのていしゆ、いせものにて、あきなひこうしやなり。）ていしゆ「アイ、おやすうおますわいな。わたしとこの草履は、ひゆつと丈夫で、ねからきりやいたしませぬ。北「ねからアきれめへが、さきのはうからきれる



だらう。ていしゆ「イヤ、おはきなされてはたまらまいが、しまつておきなさるといつまでもおますわいな。彌「さうだらう。そしておめへのとこの草履は、はなをがあつてちようはうだ。北「はなをのねへざうりがどこにあるものだ。彌「何にしろやすいものだ（ト、つるしあるざうりを、引きり、とつて見て、）イヤ、この草履はちんばだわへ。かた〳〵は大きくて、こつちらはちいさいやうだ。コリヤア八文ヅツにしちやア、大きなはうはやすいが、ちいさいはうはたかいものだ。ナント御ていしゆ、かたつぽの大きな方を、九文にかひやせうから、こちらを七文にまけてくんなせへ。ていしゆ「アイようおます。おめしなされ。彌「なむさん、錢がたりない。一そく買うとおもつたが、たつた七文ほつきやアねへから、アノこつちらのかた〳〵



のはうばかり買やせう。北「ハヽヽヽ、こいつは大わらひだ。おいらがまねをしやうとおもつても、餅ならい丶が、ざうりかた〳〵が何になるものだ。ていしゆ「お左様でおます。一そくおめしなさりませ。どうもかた〳〵はなしては、あげられませんわいな。彌「ナニ、かたつぽはうらねへか。さすがは田舎だけ物が不自由だ。北「エヽ、江戸だとつて、ナニざうりをかた〳〵賣ものがあるも

んだ。ていしゆ「なんならこれになさりませ。これぢやと一そくで七文にしてあげませうわいな。彌「エヽ馬のくつがはかれるものか。人じらしな。北「一そくかひな。おめへかたつぽ買つて、どうするつもりだ。彌「またさきへいつて、かたつぽ買はう。ていしゆ「ハヽヽハ、十四文にいたしませう。一足おめしなされ。彌「きさま、とつくにさういへばいゝ（ト、やう〳〵の事にて、さうりをとゝのへわらぢをぬぎすてゝ、はきかへゆく。）かくて此宿を打過、はやくも八町なはて、さなけ明神をふしをがみ、今岡村のたてばにいたる。此ところはいもかはといふめんるゐの名物、いたつて風味よしと聞て、

　名物のしるしなりけり往來の
　　客をもつなぐいも川の蕎麥

それよりおなふ村、落合むらをすぎゆきて、有松にいたり見れば、名にしおふ絞の名ぶつ、いろ〳〵の染地、家ごとにつるしかざりたてゝ、あきなふ兩かはの見せより、旅人を見かけ、「おはひり〳〵。あなたおはひり。名物有松しぼり、おめしなされ。サア〳〵、これへ〳〵。おはひり〳〵。彌「エヽ、やかましいやつらだ。

　ほしいもの有まつ染に人の身の
　　あぶらしぼりし金にかへても

北「ナント彌次さん、ゆかたでもかはねへか。彌「おもいれ、見たふしてやらうぢやァねへか。北「よからう。たんと買ふつらをして、なぐさんでやらう（ト、あちこちを見まはすうち、此町のとつぱづれに、小みせなれども、そめ地いろ〳〵おもてにつるしある内へはひつて、）彌「コレ、此しぼりはいくらします（ト、いふに此内のていしゆと見えて、しやうぎをさしてゐたる

ふ、よねんなく、うちやうてんとなりて、）ていしゆ「サアしまつた。時にお手はなんぢやいな。彌「コレサ、こりやアいくらだといふに（ト、すこしこわだかにいふと、ていしゆきもをつぶして、）ていしゆ「ハイハイ、それかな。彌「いくら〳〵。ていしゆ「コウト、あなたいくらだとおつしやる。そこでかやうにいたそかい。彌「エヽ小じれつてへ。コレうらねへのか。ねだんはいくらだといふに。ていしゆ「ハテさてやかましい人ぢや。そちらのはうへひつかへして、符帳を見せなされ。たゞしれるものぢやないわいの。彌「こいつはとんだあきんどだ。ふちやうにウのじとエのじがかいてある。ていしゆ「ヲヲさうぢやあろ。コウト、三分五りんぎれぢや。彌「たかい〳〵。まけなせへ。ていしゆ「ナニまけい。イヤならまい。此下手將棊に。しやうぎのあひ手「次兵さん、

マアあきなひをしよまいか。あなたがたがまつてござらつせる。ていしゆ「よいとても、敵等はよう買やしよまい。ハテかひたうても金銀はあらまい。ないはずぢや。彌「なんだわしが手におはしますぢやて。彌「なんだべらぼうめ。金銀があるまい。人を見くびつたことをいやアがる。あるから買はう。是はふんどしだけでいくらだへ。ていしゆ「なんぢやふんどし買はう。イヤぶしつけ千萬な。彌「こいつ、おいらをてうしやアがる。賣ものかひものに無躾も何もいるものか。はなつたらしめが(ト、大きな聲する。ていしゆ、はつと心づき、さう〳〵しやうぎをやめて、)「へイ〳〵、是は麁相申ました。何なとまけてあげませずに、おめし下されませ。北「さういひなさりやア、しこたま買つて上やすわ。彌次さん、おめへおふくろやかみさまへのみやげには、あれがよからう。いくらだの。ていしゆ「へイ、十四匁八分でおます。彌「ソレそつちらのは。ていしゆ「これは十五匁。彌「もつといゝのはねへか。ていしゆ「ありますとも。へイ、これがなア廿一匁ヅツ、こちらが廿二匁、下のがナ十九匁ヅツでおざります。彌「もつとこれよりいゝのがほしい。ていしゆ「イヤ、もうみなかやうなものでおざります。彌「ムヽヽ、そんならでへじにしまつておきな。誰ぞがかひやせう。わつちやアいつち初手に見ておいた、此三分ぎれを手ぬぐひだけ、きつてくんなせへ。ていしゆ「へいさやうかな(ト、きもをつぶし、二尺五寸切て出す。彌次郎此代をはらひてこを立出、)「とんだやつらだ。すでにいゝ三太郎にしやうとしやアがつた。きもつぶしな、ハヽヽヽ。時にでへぶ道くさをした。ちと急いでやりかけやう(ト、これよりすこし道をはやめ行ほどに、はやくもなるみのしゆくにつきければ、)

旅人のいそげば汗に鳴海がた
こゝもしぼりの名物なれば

かくよみ興じて、田ばた橋をうちわたり、かさでら觀音堂にいたる。笠をいたゞきたまふ木像なる故この名ありとかや。

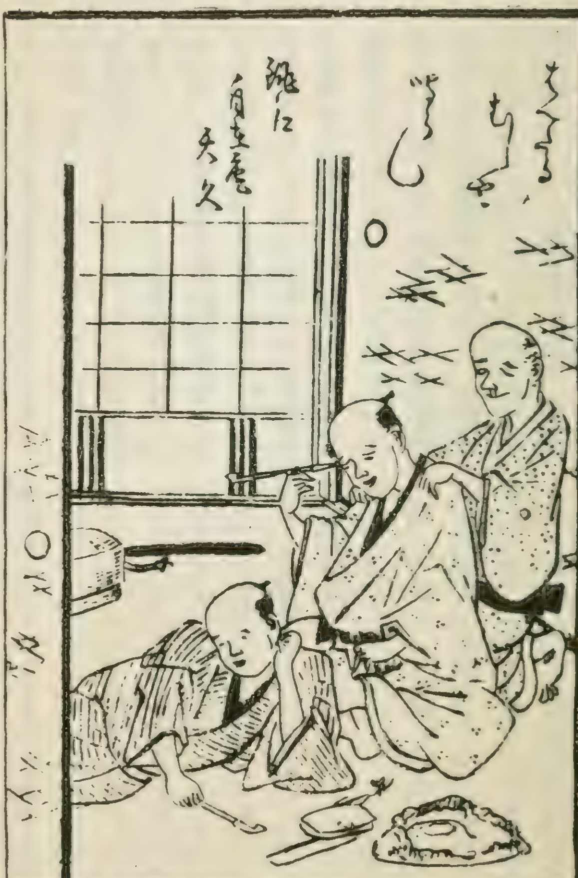
執着のなみだの雨に濡れじとや
かさをめしたるくわんおんの像

それよりとべ村、山ざき橋、仙人塚をうち過、やうやく宮の宿にいたりし頃は、はや日くれ前にて、棒鼻より家毎に、客をとゞむる女の聲姦し。「あなたがたア、おとまりぢやおませんか。お湯もちんとわいておます。おあひきやくはおません。おとまりなされませ〳〵。彌「とまりはどこにしよう。錢屋かへう

たん屋か。北「むかうのうちはなんだ。鍵屋か。女「モシおとまりかな。北「ヲイ泊りやせう。はたごはいくらだ。女「ヲホヽヽ、ようおます。おとまりなさんせ。北「なんだい、とか。たヾでとめるか。彌「むしのいゝ（ト、かさをとつてはひる。やどのていしゆ、）「おゆをあげうず。おあしがよごれてなけらにや、すぐにおふろへ御召なされませ（ト、にもつをざしきへはこぶ。此内、彌次郎北八もわらぢをぬぎ、おくへとほる。女ちやをもち來り、）「おちやあがりませ。座頭のあんま「おれうぢをなされませぬか。北「れうぢもしてへが、ヤアはらがへつた。彌「うどんでもくつてきや。こゝのめいぶつだ。あんま「さやうなら、のちに來ませず（ト、立て行あとより、二三人づれにてゆみはりちやうちんをともし、）「ハイ、おとまりでおざりますか。是は當驛のおんばこさま、手水鉢の建立、お心ざしをおたのみ申ます。彌「ハイ、北八、そけへあげてくりや。北「是はすこしながら（ト、せに八文出してやると、帳にしるし出て行。入かはりて、ばうさまが一人、）「ハイ、わたくしは六十六部の石碑をたてます。お心もちしだい、お施主につかつせへて下されませ。彌「なんだ。石塔のせしゆにつけ。いめへましいことをいつてくる。ソレもつていきなせへ



（ト、おなじく八文はふり出してやる。入かはりて此うちのていしゆ、ひよつくりかほを出せば、）彌「エ、又八文か。きさまはなんのこんりふだ。ていしゆ「イヤ、明日はおふねでおざりますか。又佐屋廻りをなされますか。北「すぐに爰から舟にしやせう。彌「舟はいゝが、おいらアどうもふねでは、なぜか小便をするがこはくて、そしてねつから出ねへにはこまる。七里のるといふもんだから、こらへてはゐられず、どうしたものだらう。佐屋へまはらうか、ノウ北八。ていしゆ「イヤ、それには能ものをあげうず。さやうのおかたには、わたくしがいつも竹のつゝをきつてあげますから、それでおせうようなされるがようおざります。彌「そんなら、それをおたのみ申やす。ていしゆ「ハイ／＼、先御せんをあげう（ト、立て行。此内、女ぜんをもつてくる。



こゝにてもいろ／＼あれどもりやくす。やがてぜんもすみたるころ、先ほどのあんまきたり、）「旦那がた、いたしましよかいな。」彌「サアやらかしてくんなせへ（ト、これより彌次郎あんまにもませる。この内となりさしきにと寄り合せしこせふたりが、なぐさみに三味せんを出し、いせおんどをうたふこゑする。うた、）「はなもうつろふあだ人の、うはきも穏といはしろの、むすびふくさのときほどき。ハリサコリヤサ。

よい〳〵〳〵よいとなアッテチレ〳〵。北「イヤ、こいつい〻こゑだ。ナントあんまさん、わしはをどりがじやうずだ。おめへ目が見えると、あのうたでひとつをどつてみせてへもんだがなア。あんま「わしもすきだがなア、をどらつせるおとをきかアず。ひとつやらつしやらまいか。北「やるはやらうが、ほめてもらはにやア、はりやひがねへから、かうしやせう。わしがをどりしまつた所で、おめへのつむりをちよいとなでようから、それをきつかけにやんやアとほめてくんな。よしか〳〵。ソレをどるぞ。となりのうた「とけぬおもひはふたつ箱、みつよつついつもとまり冊、それがくがいのゆきちがひ。ハリサコリヤサ(ト、三味せんに合せて、北八手をたゝきをどるまねをして、)北「よい〳〵〳〵、よいやさア(ト、をどりしまひ、座頭のあたまを、ちよつとあしにてなでると、)あんま「ヤンヤア、えらい〳〵、ハヽヽヽ。北「なんとおもしろからう。もひとつやらうか。又となりのうた「さす手ひく手にわしやどこまでも、浪のうきねの梶まくら。北「よい〳〵〳〵よいやなア(ト、又あしにて、ざとうのあたまをなでる。)あんま「ヤンヤヤンヤ。北「ハヽヽヽ、おもしろへ(ト、此うちやどの女)「おゆにおめしなされませ。北「彌次さんもうしめへか。しめへなら湯にいりなせへ。あんまさんがをどりをほめてくれたかはりに、是からわつちももんでもらはう。彌「ドレ、そんならば入てこよう(ト、彌次郎はゆに入に行。あとにてあんまは北八をもみにかゝり、)あんま「ときに旦那がたは、ちと當宿のおつるでも、およびなされ。北「イヤ、それよりかア、となりの三味は、こゝの娘か何人だの。あんま「あれは二三日まへから、こゝの内に泊つてゐる瞽女でおますが、よいこゑだなもし。しかし、まんだわしがじんくを旦那がたへきかせたい。北「コリヤよからう。やらかしねへ。あんま「そのかはりわしもほめてがなけらにや、はり合がない。うたひしまつたら、旦那ほめて下さるかな。北「ヲツト、しようちしようち。あんま「ドレ、やりからかさう(ト、北八がつむりをもみながら、ひやうしをとりて、あたまをぴしや〳〵。)あんま「ジヤ〳〵ジヤン〳〵、エヽヽヽゑうたよた〳〵五勺の酒に、壹合のんだらさままたよかろ(ト、うたひさして、北八が耳の中へぐつとゆびをつつこみ、)こいつがさいせん、われらがあたまを、あしげにひろいだはつつけやらうめ。うぬがよなやらうはろくではゆくまい。あげくのはてには、くびで

もつるぢやろ（ト、いひさして、耳のあなよりゆびをぬけば、みゝはポンとなる。）あんま「やとさのせ〳〵。（北八みゝのあなをふさがれて、うぬがことをわるくいはれたをもしらず、）北「ヤンヤ〳〵。あんま「ジヤ・ジヤ・ジヤン〳〵（ト、ひやうしにかゝつて北八があたまを、ぴしや〳〵とたゝく。北八顔をしかめて、）「おもしろへ〳〵。あんま「もひとつやろかいな。北「イヤ、もう御めんだ。あたまがたまらぬ。あんま「ハヽヽヽ、えらうおもしろかつた。（此内、彌次郎ふろより上り、このやうすをちらと見て、）彌「おしやう、もつとやらかしねへ。北「イヤ、おいらはもう湯にはひつてこよう。あんまさんもういゝによ（ト、いひすてゝふろばへ行。あんまはいとまごひしてかへると、うちの女とこをとりに来り、ふとんをしきてかつてへ行。彌次郎ははやそのまゝねかける。此内、きた八もふろばよりかへりて、）北「ヲヤ、彌次さんもうねかけたの。ときに、おめへとなりざしきのしろものを見たか。とんだうつくしい瞽女だ。彌「ごぜなら目があるめへ。北「目はねへが、まんざらおややねへ。今湯からあがつてくるとき、ひとりのごぜめが、手水場にまごついてゐたから、小あたりにあたつておいた。なか〳〵やぼでねへしろ物よ。彌「ドレ、ドレ（ト、はひおきてのり出し、ふすまの間からさしのぞき、）「ハヽア、うしろすがたは、なか〳〵いきなふうぞくだ。コリヤア、このまゝではおかれぬわへ。北「イヤ、さうはならぬ（ト、いひつゝよぎを引かぶり、心の内には、おのれ今にはひかけてやらうと、わざとねるふりにてよこになると、ぢきにそらいびきをかく。此内となりざしきもひそまり、ふたりのごぜもねたやうす。夜もしん〳〵とふけわたり、後夜のかね、）「ゴヲン〳〵。（彌次郎そつとおきあがり見れば、北八はほんとうにねいりし様子。してやつたりとそろ〳〵はひかけ、ふすまをそつとあけて、となりざしきへは入みれば、ごぜふたりはぜんごもしらずねいりばな、彌次郎ごぜのふところへはひらんとせしに、さすがは目のみえぬものとて用心きびしく、ふろしきづつみを兩手にしつかりかゝへてねてゐるゆゑ、これがじやまになりてはひりにくゝ、彌次郎そろ〳〵此ふろしきづつみをとりのけようとすると、ごぜめをさまし、かた手につゝみをかゝへ、かた手にて彌次郎が手をぐつととらへて、）ごぜ「ぬす人よ〳〵。おやどのしゆ〳〵（ト、わめきちらされ、彌次郎はあてがちがひ、じゆばん一ツの此なりを、見つけられてはごふさらしと、ごぜが手をたゝきはなして、さう〳〵にこなたのざしきへかへり、よぎをかぶり、そしらぬふりしてねてゐる。北八はとくより目をさまし、

くつ〳〵とわらつてゐると、此うちかつ手よりていしゆかけつけて、）「ごぜさま、どうさつせへました。ごぜ「わしが此か丶へてゐるつ丶みを、いんまだれやらがとらうとしをりました。雨戸でもあいてあるか、見てくれなされ。ていしゆ「イヤ、どこもあいてはゐをりませぬ。ごぜ「それでもいんまの盗人は、どこから來をりましたらうな。ていしゆ「ハ丶ア、ふすまがあいてある。モシ〳〵、おとなりのおきやくさまがた、およつてござらつせるか。彌「ア丶ウ丶ム ニヤム ニヤ。ていしゆ「ハ丶ア、こ丶においであるはなんぢや。イヤ、ふんどしぢやそうな。モシおきやくさまがた、これはあなたがたのではおざりませんか（ト、大きなこゑするに、彌次郎はつとおもひ、そつとあたまをあげて見れば、わがふんどしが、ごぜのまくらもとから、しきゐごしに、わが枕もとまで、ながくなつて落てゐる故をかしさもをかしく、さすがおれがのだともいはれず、もじ〳〵してゐると、北八わざといぢわるくおきあがり、）北「なんだへ、さう〳〵しい。ふんどしがおちてあるとは、ドレ〳〵それか。コリヤア彌次さん、おめへのふんどしぢやアねへか。彌「エ丶、なさけないことをぬかしアがる（ト、きた八がよぎのそでをひく。ていしゆもさてはとしようちして、）こゝろの内にをかしくおもひながら、）ていしゆ「イヤもう旅の事でおざりますから、おたがひにお氣をつけて、御用心なさるがよい。ごぜさま、もうおやすみなされ。ごぜ「きみがわるくてねつかれませぬ。ようしめていつて下さりませ。ていしゆ「さやうなら（ト、そこらをたてまはして、出て行。彌次郎そつと手をのばして、ふんどしをたぐりよせる。きた八をかしくふき出しながら、）

瞽女どのにおもひこみしは是もまた
戀に目のなき人にこそあれ

すでに夜もいたく更わたれば、みなみなやうやく一すゐの夢をむすぶ。あかつきの風樹木を鳴し、浪のおと枕にひびきて、つきいだす鐘におどろき、目さめて見れば、はや明がたの烏、「カアカア。馬のいなゝき「ヒイン〳〵。長もち人足のうた「さかはナア、てる〳〵ナアエ、すゞかはくもるナアンアエ、どつこいどつこい。（此出ふねをよぶこゑ「ふねが出る。ヤアイ〳〵。時やどやの女、おこしに來り、）「モシ、いんま一番ぶねでおます。御膳を上ましよ。彌「ヲイ〳〵、北八サアおきや（ト、ふたりはおき出て、手水つかふ内、ぜんも出、くひしまひ、かれこれする内、やどのていしゆ、）「おしたくはようおざりますか。舟場へ御案内いたしまし

よ。彌「それは御苦勞。」サア彌次さん、出かけやせう（ト、そこ〳〵にしたくして、おもてのかたへ出かける。やどの女ばうをんな、）「御きげんよう。又おくだりに。彌「アイ、おせわになりやした（ト、いとまごひして、ふなばへ行。ていしゆこゝまでおくり來り、）「せんどうしゆ、おふたりさまぢや。たのみますぞ。彌「ときにわすれた。御ていしゆさん、夕アお約束の、かの小便の竹のつゝは。ていしゆ「ホンニ、ちんときらしておきましたに、ドリヤ、取てまゐりましよかい（ト、ていしゆかの竹のつゝをとりにかへる。此わたしぶね、七里のかいじやう、一人まへ四十五文ヅツ、其外駄荷、のりもの、みなそれぞれにちんせんをはらひ、ふねにのる。此時、ていしゆ竹の筒を取てきたり、）「サア〳〵、お客樣そこへなげますぞ。北「なんだ火吹竹か。彌「これをおてがつてナ、とやらかすのだ。よし〳〵。イヤ御ていしゆさん、大きにおせわ。サア是で大丈夫だ。ハヽヽヽ。

おのづから祈らずとても神ゐます
宮のわたしは浪風もなし

かく祝しければ、乘合みな〳〵いさみたち、やがて船を乘出して、順風に帆をあげ、海上をはしること矢のごとく、されど浪たひらかなれば、船中おもひおもひの雜談に、あごのかけがねもはづるゝばかり、高聲にわらひのゝしり行ほどに、あきなひ船、いくさうとなく漕ちがひて、「酒のまつせんかいな。めいぶつかばやきのやきたて、だんごよいかな。ならづけでめしくはつせんかいな〳〵。彌「アヽ、よくねたは。いつの間にやら、がうぎに來たぞ。時に小便がもるやうだ（ト、やどやのていしゆがくれたる竹のつゝをいだし、こゝでこそと、まへにあてがひ、小べんをする。此竹のつゝは火吹竹のごとく、さきのはうにあなをあけたるなれば、ふねのふちにもたせかけて、小べんをするつもりの所、彌次郎の心には、あなのあいてあるには心つかず、しゆびんのやうにおもひ、竹のつゝへ小べんをしこみて、あとでうちあける事とこゝろえ、ふねの中にて、すぐに竹の筒へしこみければ先のあなより小べんがながれ出て、せんちう小べんだらけとなり、のり合みな〳〵きもをつぶし、）「コリヤ〳〵、なんぢやいな。水がえらうながれる。のり合「だれかどびんをうちこかいたさうな。ソレ〳〵、たばこ入も紙入もびつしよりぢや。コリヤたまらんわ。ハアおまへ小便ぢやな（ト、とがめられて、彌次郎、竹の筒をかくし所にうろたへて、まご〳〵する。）北「エヽ、彌次さんどうしたものだ。おめへ小便をするなら、そけへあがつて、竹のつゝの

ごきのはうを海へ出して、しこむのだわな。めつさうな、船の中が小べんだらけになつた。エヽきたねへ〳〵。彌「おれは又こゝでしこんで、あとでぶちまけるのかとおもつた。のり合「イヤはやとはうもない。コリヤアくさくてならんわい。船頭しゆ〳〵、もう敷ものは外にはないか。せんどう「だれぢやぞい、小べんをしたのは。船玉さまがけがれる。はやうコレふかつせいな。北「エヽきのきかねへ人だ。せんどう「エヽ拾ソレまだ竹のつゝからおちる。それをほかしてしまはつせへな。彌「イヤこれはそつちへやらう、火吹竹にならうから。北「エヽおめへが小便したものを、ナニ火ふき竹になるものだ。はやくふきなせへ。らちのあかぬ（ト、いぢめられて、彌次郎ふんどしはづし、そこらをふくうち、北八はうすべりをひつくりかへして敷なほし。）北「サア〳〵これでいゝ。どなたもおすわりなせへ。彌「コリヤみなさま御めんなせへ。とんだばんくるはせをいたしやした（ト、ついにないしよげかへりて、そこら取かたづける。のり合みな〳〵にがわらひして、だんまりでゐる。此内はやくも船はくはなの岸にいたる。）のり合「きたぞ〳〵。小便にこそぬれたれ、船はつゝがなく桑名へきた。めでたい〳〵（ト、みな〳〵これよりあがりて、此しゆくに、よろこびの酒くみかはしぬ。）

東海道中膝栗毛四編下終

東海道中膝栗毛五編　全三冊　續出

口上（こうじやう）

膝栗毛初編より三編まで追々梓行仕候所御評判宜敷有難仕合に奉存候当年四編作者例の大なまけものにて漸去春気をとし起稿未往人例備差遣頻し延引仕りし差急きし加ゟ敷今ゟ仕候

後此書写底本誤字多有之候と寛永年中
頃所々改而猶相尋如此以五編ハ
伊勢物語中ニ一ノ得撰集之事也
作者先年あまた申て伊勢物語といふ也と
我家先宗祇身を我まちにまかせ時流に
おくれ可惜作家かくれ候もさて有情ぞと将
寛永年作者のう彼地へ一見に来越る去るの
濱清音すらと申あらしの山のおもしろきを思ひ寄る家

当店試ニより大坂へ出す事を暫く相止し
候處所々の人数會所へ来る毎に種々の伝言
候哉御一覧のほど申上

板元

文化二乙丑春發兌

通油町
書房　村田屋治郎兵衛

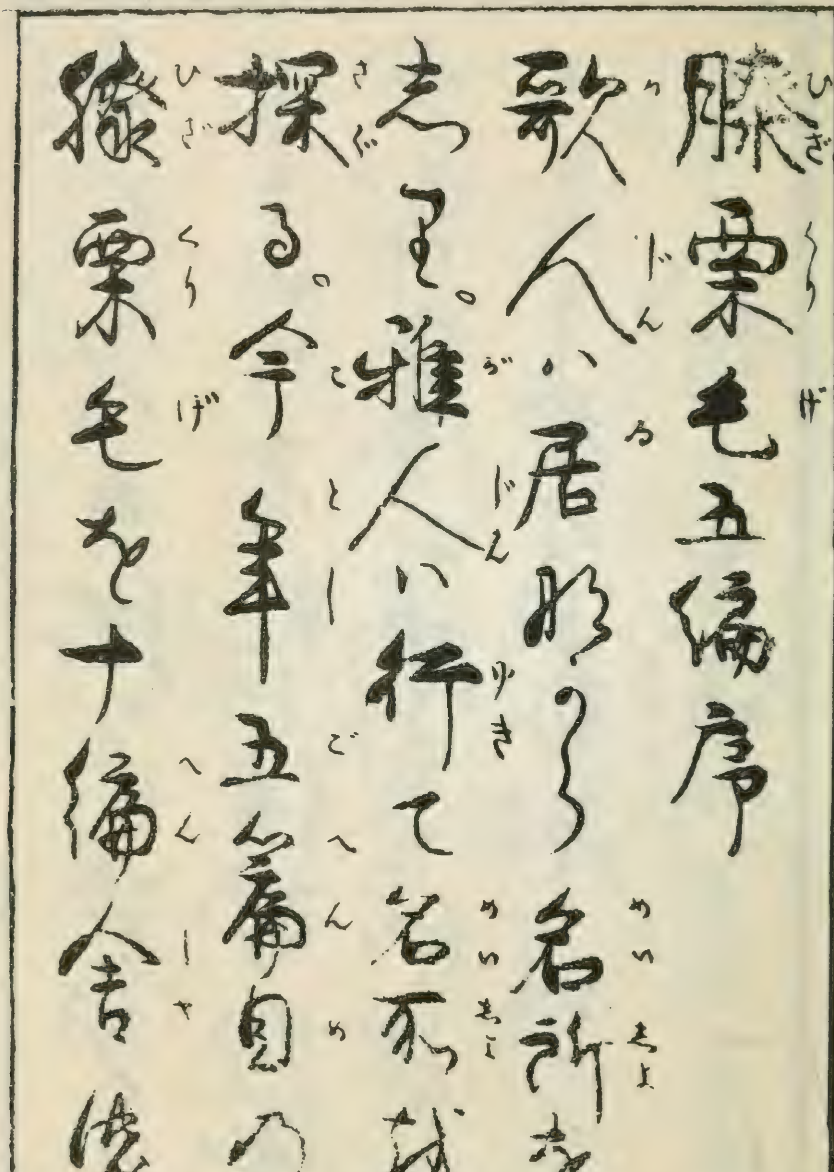

東
栗毛

東海道中滑稽記　十返舎一九著

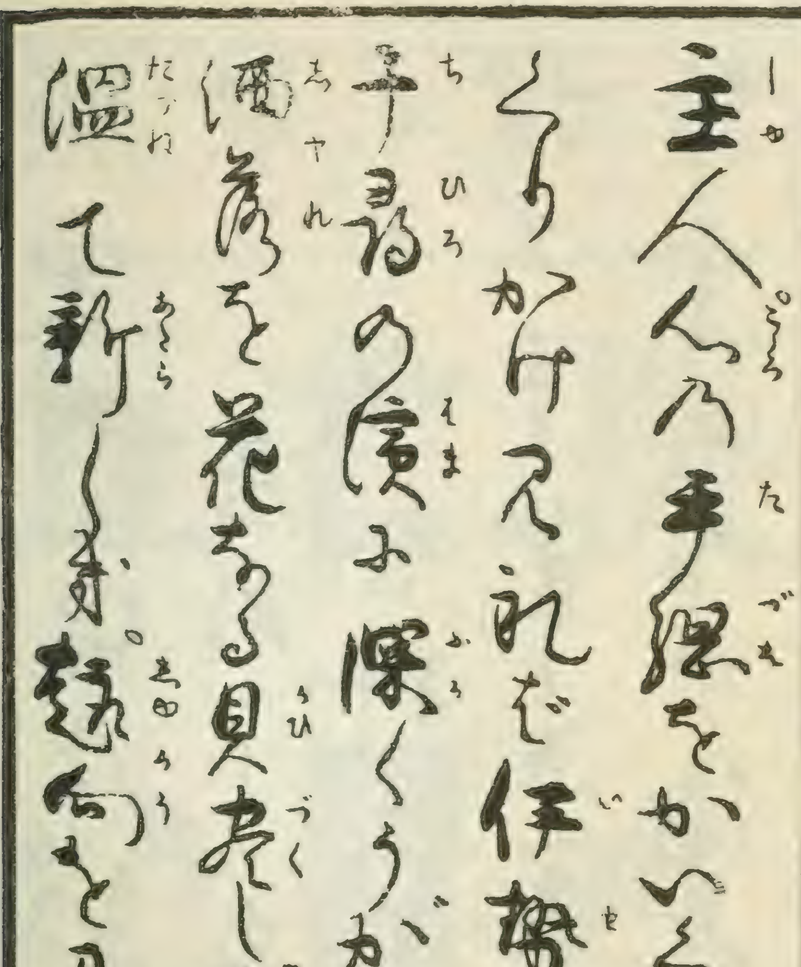
膝栗毛　五編

全二冊

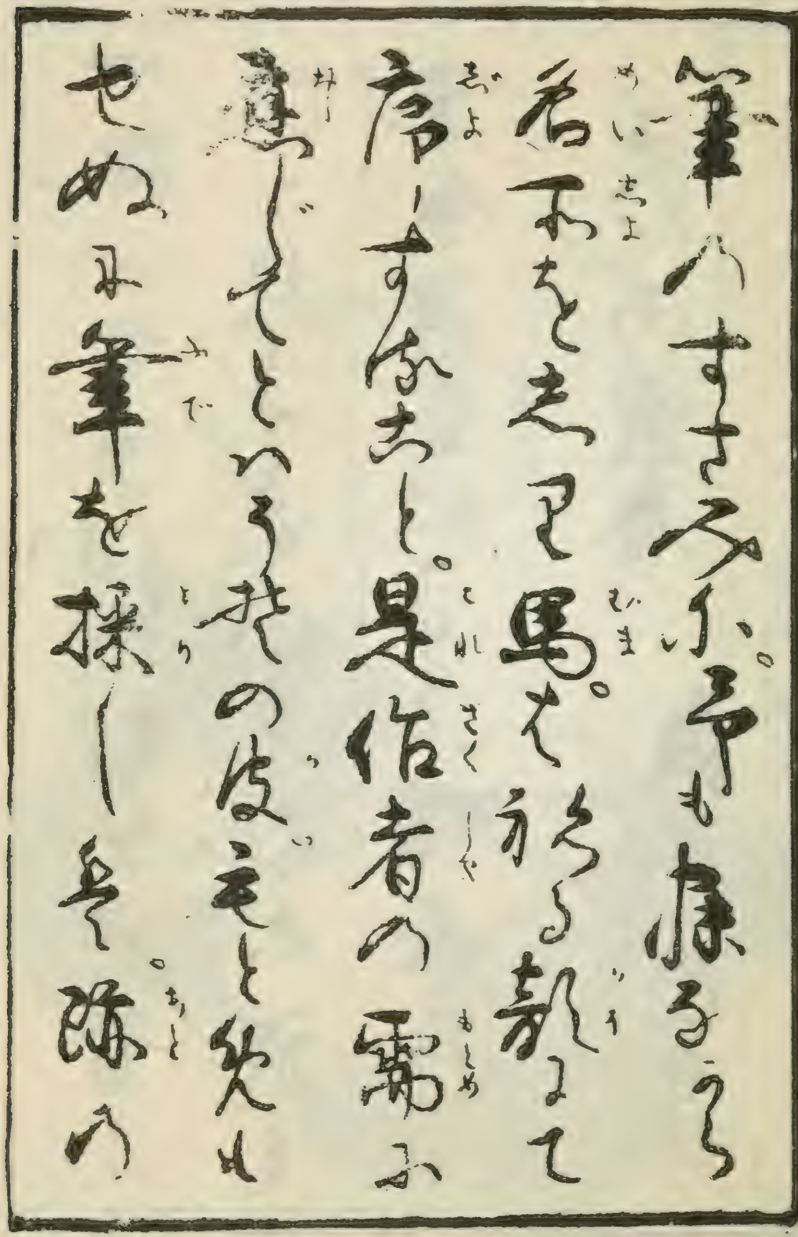
膝栗毛五編序
歌人は居ながら名所をしり雅人は行(ゆき)て名所を探る。今年五篇目の膝栗毛を十編舎



の主人心の手綱をかいくり〱くりかけ見れば伊勢の海千尋の濱に深くうがちて酒落を花なる貝盡し古跡を溫て新しき、趣向を見する



筆のすさみに予も麻ながら名所をしり馬はねる顔にて序すること、是作者の需に應じてとはうその皮もとめもせぬに筆を

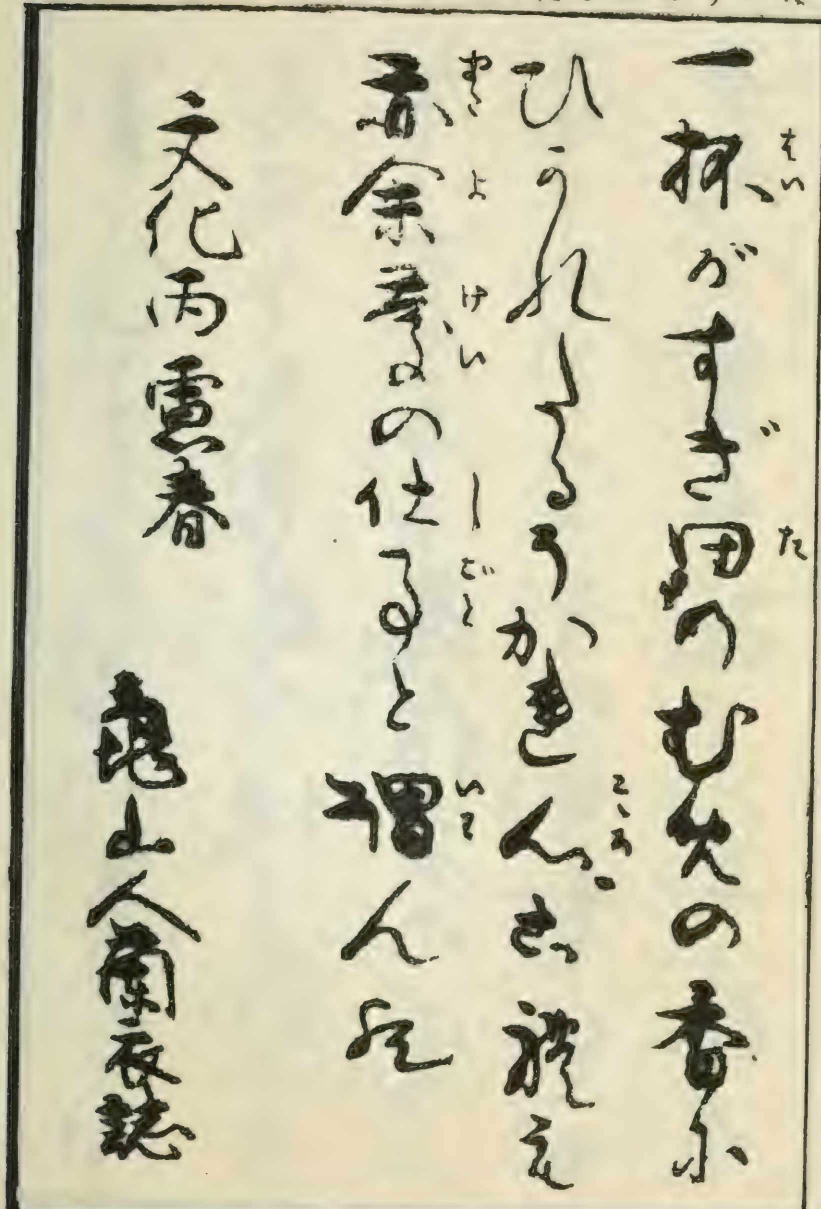


採(とり)しは跡の一杯がすぎ田のむめの香にひかれたるうかれ心、これも亦餘慶(よけい)の仕事と謂(いは)ん歟。

文化丙寅春

龜山人

蘭衣誌




十返舎一九
豊国画

附言并凡例

去年神無月廿日あまりといふ日の納あまりひさけて。南海道に杖をひきて伊勢参宮をなし。内外の宮を巡りして帰りしは雪ふりての頃なりしよりして此。編月の芸をよきまで彫工机の下にてゐて。書肆の筆をとりてはなし。枝をいづれ人の編をあらはし雪毛続編とらへたるもの草紙の出版を下しすべてを上続編。先師かの人のすゝむ。昔の月にておこしたる。昔のごとく同じき年代の撒翰にやりかして清たる…

なりし。おしはかるに。かゝる毛の文(あや)をかくしみて自然(じねん)
せざるこそ不害(ぶがい)なれ。それハ名を求(もとむ)る人を能(よく)おさめ
たまさかの流(なが)れをたゞすべし。歌されど。此道の心れありて
思ハざるの荒甚(くわうじん)ありし此間に今もみゆる
。やがて思ひそめを聞(きき)そめける人のあまねく人の
よろて喜(よろこび)を益(ます)ます毛の尾を毛をひらんてをし
たえけるいやおぼつかなし
或人同此事如佛をり四方角にみゆるを流以下多剛
此八なかるかの新月代を毛ーー而をとんぞ。一二八太

江都をたち出しより既年。おほかたハ四つの年
を重。今年参宮をとげ旅の喜をきはむしその
たのしさを見んとする。其土人情の美別。方言の
おかしさ。まづ事を以(?)これを集めてかくま
十編を出さんとす。其中その實を穿鑿して
のりこえんがための著作なりとあきらめて
さりて追加を出せり
四篇中版鑿おしいりの無類八。東海道雜
あらハしてゐやハがんぢ。こゝに作者の旅ゆ

そして。堂に夜通してくるまを仕損じしまゐるの
あかつき早々出立をいたし。海辺を南北八の四日
市場の浜向いて
まち海原を遥かに見へて上さかしく。さて伊世
路にかゝりて。志賀越えて遠く鳳山
国に入りての峯々をこえて。続編子ども所の寄
あらたなる帝の接待桐の山の麓にてありしは
続いて山へ経まて

蕭蕭聞及貴公才

一遍相逢親十回

探得神都神代究

翩翩葉鄰栗毛來

名

揚逢十返舍一九生自勞君

還戲賦以送

謝芳園草

東海道中膝栗毛五編上

十返舎一九著

宮重大根のふとしくたてし宮柱は、ふろふきの熱田の神の慈眼す、七里のわたし浪ゆたかにして、來往の渡船、難なく桑名につきたる悦びのあまり、名物のやきはまぐりに酒くみかはして、かの彌次郎兵衛北八なるもの、やがて爰を立出たどり行ほどに、此頃旅人のうたふをきけば、はやりうた「しぐれはまぐりみやげにさんせ。宮のお龜が情所。ヤレコリヤよヲしヽよし。馬士「コレ旦那衆戻り馬のらんせんか。彌「よヲしよし。馬士「やすいに。たんだ百五十でやらまいか。彌「よヲしよし。北「せうろく四文でのるべいか。馬士「そんならよヲせよせ。馬「ヒインヽ。・長もちにんそく「ふねはナア、追手にほかけてはしる、ナアンエ。はやくサア、あつ田に泊りたや、ナアンアエ。八兵衛どうした。馬でものんだか、なんだかはねらア。どつこいヽ。北「なんと彌次さん、なにもなぐさみだに、かうしよっちアないか。おめへの荷物とわしがのをいつしよにして、ひとりがひつかついで、半日かはりに旦那と家來のしうちはどうだらう。彌「コリヤおもしろい。それよからう。まづおいらから旦那をはじめるぞ。北「そりやアいゝが、けふはもう八ッだから七ッがはりにしやせう。勿論だんなと供のあしらひは、たがひにばんくるはせなしにやらかしやせうせ。彌「しれた事よ（ト、いひつゝ、あたりに竹一本をさいかくし、彌次郎がにもつと北八がつゝみを、両はうにくゝりつけて、）北「先歳役におめへ旦那よ。おいらは上下といふもので出かけよう。ナントよつぽど氣がきいてゐるだらう（ト、あとから荷をひつかたげて、）北「モシ旦那へ。彌「なんだ。北「いゝ天氣でござります。彌「ヲヽサ風が凪で暖かだ。北「さやうでござります（ト、かりにしらぐ〳〵のごとく打語りつゝゆくほどに、はやくも大ふく村安中村を打過て、町や川にさしかゝれば、彌次郎兵衛とりあへず、）

旅人を茶屋の暖簾に招かせて
　のぼりくだりをまちや川かな

かく打興じて、なを村おふけ村にたどりつく。此あたりも蛤の名物、旅人を見かけて、火鉢の灰を仰立てて、女「をはいりなさりまアせ。諸白もおめしも

ござりまアす。おしたくなさりまアせおしたくなさりまアせ。かごかき「駕いかまいかいな。これから二里半の長丁場ちや。安うしてめさぬかい。雲「イヤかごは入らぬ。かご「あとのおやかた、旦那をのせまうしてくだんせ、戻りぢや、やすめに。北「だんなはおひろひがおすきだ。かご「さういはずと、モシ旦那、やすうしてやらまいかいな。雲「やすくてはいやだ。高くやるならのりやせう。かご「そしたら高うして三百いたゞきましよかいな。雲「いやだ〱もちつと高くやらねへか。（三百五十）かご「ハアまんだやすいならやみげんこで。雲「壹貫五百ばかりならのつてやらうが。かご「エヽめつさうな。わし共も商賣冥利そないにやつとはいたゞかれませぬ。せめて五百でめしてくだんせんかい。雲「それでも安いからいやだ。かご「ナアニやすいこんではあらまい。そしたらわかれに七百くだんせ。雲「イヤ〱めんどうだ。何かなし一貫五百よりまからぬ〱。かご「はて扨こまつたもんぢや。それよりちつとゝまからまいか。雲「まからぬまからぬ。かご「エヽなんの事ぢや。かごかきのはうからねぎるといふはめづらしい。まゝよぼうぐみ一〆五百でやらまいかい。サア旦那めしませ〱。雲「それでいゝか。高くのつてやるかは



りに、酒手をこつちへ貰らはにやならぬがつてんか。かご「あげませずとも。彌「そんならさきへいつて、一貫四百五十文こつちへ酒手にさしひいて、のこり五十のかごちんだが、それで承知かどうだ。かご「エヽそんなこんであらず。とひやうもない。彌「そこでまづえんきりだ、ハヽヽヽ。北「こいつは旦那ができだできだ。

たび人をのせるつもりで駕かきの
高い直段にかつがれにけり

かくて朝飼川松寺をうちすぎ、富田のたて場にいたりけるに、爰はことに燒はまぐりのめいぶつ、兩側に茶屋軒をならべ、往來を呼たつる聲にひかれて、茶やに立寄こしをかくると、女「おはやうございました(ト、ちやを二ツくんで來り、彌次郎へ差出す。彌次郎兵衛は旦那のつもり故、わらぢのまゝ茶やの板の間にあぐらをかきて、)きた八したくはいゝか。(きた八もやくそくなれば、とものきどりにて、)北「よろしうございませう。コレ女中おめしを二せん出してくんな。女「ハイ〳〵はまぐりでおあがりなされますか。彌「イヤ箸でくひやせう。女「ヲホヽヽヽ(ト、はこにしたゐろりのやうなものゝ中へ、はまぐりを並べ、松かさをつかみこみあふぎたてゝやくうち、)彌「コウ酒はいゝのがあるかの。しかし諸白ではなくて片白には困



る。そして江戸ぢやアうめへ（厚味）もののくひあきしてゐる骸だから、道中のものはねからくへぬ。馬にのればあぶなし、駕はあたまがつかへる。店のものどもが、おやどの駕をおつらせなさるが、ようござりますといひをつたが、なるほどさうすればよかつた。不肖してのればのるものの、もう〳〵道中駕にはあきはてた　北八これからはあるいてゆかう。いゝ草履があらば買つてくりや。はきつけぬ草鞋で、コレ見や、あしぢうが豆だらけになつた。北「ほんになア、けふはじめてわらぢをおはきなさつたから、古いあかぎれが再發した。彌「とんだことをいふ。これはあんまり足がやはらかだから、わらぢのひもがくひこんだのだ。ヤ時にはまぐりは。女「ハイ只今あげます（ト、大さうにやきはまぐりをつみ重ねていだし、めしを二ぜんもつてきてするゑる。）北「コウ彌次さん見なせへ。いろをとこはちがつたもんだらう。コレ〳〵こゝのむすめが、おめへの飯はちつと盛て、おいらがのはこのとほり山もり、餓鬼道の一里塚といふもんだ。アヽうめへ〳〵。彌「へヽべらぼうめ、アノむすめが、しやくしあたりのいゝのを、ほれたのだとうれしがるもをかしい。ソリヤア手めへをやすくするのだわ。北「なぜ〳〵。彌「すべて此



かいだうでは、上下の者や、供のものへは飯をやまもりにして出すといふことだ。それだから誰が目にも、おれは旦那手めへは御供と見えるから。北「ハアさうか。いめへましい。彌「ハヽヽヽはまぐりをもつとくんなせへ。女「ハイ〳〵(又やきたてのはまぐりを、大さらにもつて出す。)彌「おまへのはまぐりなら、なほうまからう(ト、女のしりをちよいとあたる。)女「ヲホヽヽ、だんなさまは、ようほたへてぢや。北「おれもはたへよう(ト、おなじく尻をつめりにかゝれば、)女「コレよさんせ、すかぬ人さんぢや。北「どうでもおいらをば、やすくしやアがる(ト、ぶつ〳〵こととをいふうち、あたりの寺のかねがゴヲン。)北「女中あれはなんどきだへ。女「もう七ツでござります。北「しめた〳〵、約束のとほり是からおれが旦那さまだ。コリヤ〳〵彌次郎兵衛、おれはもう馬



にも駕にも乗あきた。是からそろ〳〵ひろひませう。いゝ草履をかつて來やれ。はきつけぬわらぢで、コレ見や豆ぢうが足だらけだ。彌「ばかをいふ。なるほど手めへは足だらけだ。ひとつの足がいくつにも割てゐるから。北「イヤ旦那にむかつて手めへとは何のことだ。この荷物もそつちやへやらう。彌「ハテ現金な男だ。マアそつちにおきやれ。北「イヤさうはならぬ(ト、つきつけるを彌

次郎兵衛つきもどすはずみに、はまぐりをもつてある皿をひつくりかへすひやうしに、やけはまぐりが彌次郎兵衛のふところへひよいとはいる(ト、)彌「アツ・ヽヽ、はまぐりのつゆがこぼれて、アツヽヽ。北「ドレドレ(ト、ふところに手をいれてはまぐりをつかまへ、)北「アツヽヽ(ト、取おとせば、はまぐりへその下へおちる。北八うろたへて、彌次郎がもゝひきの上から金玉とはまぐりをいつしよにつかむ。)彌「アヽアツヽヽコリヤどうする。きんたまがこげらア(ト、いふうち、やう〳〵もゝ引のまへのあはせめをひろげると、はまぐりはほつたりおちる。)北「ハヽヽヽまづは御安産でおめでたい。彌「しやれ所ぢやアねへ。とんだめにあつた。女「おけがはござりませぬか。彌「けがはせぬがまだ腹の中がぴり〳〵する。北「ハヽヽ。

膏薬はまだ入れねどもはまぐりの
やけどにつけてよむたはれうた

これより此所を立出、はつ村八幡を打過、七ツ家おくら川にいたりし頃、四日市の宿引出向ひて「是はおはやうござります。わたくしおやどをおたのみ申上ます。彌「わつちらア觜屋へ行やす。宿引「イヤ今夕はお大名さまおふたかしらおとまりで、觜屋は兩家ともおさし合でござりますから、わたくしかたにおどまり下さりませ(ト、いふはうそなり。御小身様のおとまりで、下宿にわづかなれ共、夫をいゝたてにやど引わがかたへとめんとするけいりやくなり。ふたりともばんくらなれば誠と思ひて、)彌「そんなら貴様の所はいくらで泊る。宿引「ハイそれはいかやうとも。彌「ゆうべは宮の斧屋でとまつたが、とんだ叮嚀にした。百五十で燭臺をつけてめしをくはせるか。そして酒も菓子も出したから、コリヤアだまつてもあられめへと、別に差代を貳百やるつもりの所、やつぱりみなんだから、大きに安かつた。貴様の所もそのつもりで馳さうするがいゝ。宿引「かしこまりました(ト、だん〳〵はなしながら、打つれてゆくともなしに四日市の棒鼻に至れば、やど引かけだして、)「サア是でござります。コレおとまり様ぢやぞ。やどの女房「おはやうおつきなさいました(ト、あいさつの内、ふたりはわらぢをときながら見まはせば、いたつてむさくるしき宿にて、入口にすけかへつて、よこにいがみたるせんたなと、これかゝりしへつゝいのあるうち也。)てい主「今晩はわたくしかたもこみやひました。お氣のどくながら奥のお客と御一所になされて下さりませ。彌「ずゐぶんよしさ。女房「さやうならこれへ(ハト、案内して奥の間へつれ行く。あひ宿ゐなかものふたりあり。)彌「御めんなさい。ゐなか者「お

はやうござらつせへた。北「ア、くたびれた。えいとこな。女「すぐにおふろにめしませ。御案内いたしませう。北「ドリヤおさきへまゐらう（ト、手ぬぐひをさげて湯に行く。此内十四五のまへがみ、ふろしき包の箱をさげて、）「おたばこは入ませぬか、楊枝はみがき、おはながみはよろしうござりますか。田舎「久しかぶりで吉田の大竹へのたりこんで、おやまに淺柄のたばこ貰ひをつたが、みな吸てしまうた。（今ひとりのゐなかもの）「四文粉はあらまいか。商人「イヤそれはござりませぬ。是をあがつて御らうじませ。田舎「ドレ〳〵、ハツ〳〵〳〵。こりやねからたわいがない。こつちらのはどうぢやい（ト、きせるについですつぱ〳〵。）商人「それがようござりませう。田舎「イヤこれもねから火がつかぬ。見やんせ。すうてをるうち消らかいた。商人「ソレあなたのひざにおちてをります。田舎「ヤアコリヤ〳〵大事のきりもんを燃らかいた。フツ〳〵イヤこないに膝の焦るたばこはいらない。もつていかんせ。商人「ハイさやうなら（ト、こゞといひながら出て行。北八湯よりあがりて、）北「サア彌次さん湯にはいらねへか。女「あなたおめしなさりませ。彌「イヤでへぶあだなやつらがちらつくぜ（北八こゞゑに、）「今のやつを風呂場でちよびと契つておきは、はやからう。彌「ソリヤほんとうにか、どうして〳〵。北「己が湯にいつてゐる所へ、おぬるくはござりませぬかといつてうせをつたから、すぐにそこで約束した。まだひとりいゝ年増が見えるから、おめへ湯に入てまつてゐなせへ。大かたそこへくるにはちげへはねへから、そこでくちをかけるがいゝ。彌「しようち〳〵。ドレ入て來やせう（ト、彌次郎はゆにいる。又ひとりあきん人、）「ハイ燒酎は入ませぬか、白酒あがりませぬか。北八「ヲツトその せうちうを少しくんな。ヲト、、よし〳〵（ト、ちやわんにつがせてぜにをはらひ、かのせうちうをあしにふきかけ、）「よし〳〵これで草臥がやすまるだらう。どなたも御めんなさい。ヤアえいとこな（ト、よこにねかける。此内、彌次郎は湯に入て女のくるのをまてどもまてどもいつかうに來らず。手あしのゆびを一本〳〵にあらひて、しばらくの内まちぼうけとなり、あまりなが湯をしてゆげにあがり、ふろばのはめにもたれてぐにやりとなりゐる。北八はあまりに彌次郎が長湯なる故、そつとふろばへのぞきにきたり、このていを見て、）北「ヤア〳〵〳〵。彌次さんどうした〳〵。コリア大變だ（ト、彌次郎がかほにみづをそゝぎ、）「彌次さん〳〵。彌「ヲ、〳〵ウ、ウ、、、引。北「いゝか

い丶かどうしたのだ〳〵。彌「どうした所か。手めへおれをえらいめにあはした。北「なせ〳〵。彌「湯に入ながら、もう女がくるか〳〵とおもつて、あんまり長湯をしたから。北「それでゆげにあがつたか。ハ丶丶ちゑのねへはなしだ。彌「手めへのおかげでまだ足がひよろひよろする。北「ハ丶丶丶こいつはをかしい。サアたちな（ト、やうやうにきものをきせ、北八がかたにひつかけ、ざしきにつれてかへると、彌次郎そのまゝたふれてさも力なさそうに、）「ア丶〳〵今すこしはつきりした。北「おめへもとんだものだ。いいかげんにあがればい丶に。彌「イヤおれも手めへのいつたとほり、大かた女がくるだらうと、まつた程に〳〵、向うのながしにかの年増らしいやつが、何かあらつてゐるから、コレ脊中をながして下せへといつたら、ハイとこいて六十ばかりのばゞアめが、たわしをもつてきやアがつて、おせなかをあらひませうかとぬかしやアがる。北「こいつはい丶（ト、むちうになり、ねはらばつてゐながら、足のゆびにて足のはうにねころんでゐるゐなかもの丶耳をひつぱつたりなにかして、もちやそびにする。此ゐなかものとんだきのよい男にて、そつとわきのはうへあたまをよけると、）北「それからどうした。彌「きいてくれ。おれもあんまりごふはら



だから、いまいましい婆々アめだ。たわしをもつてどうしやがるといつたら、ハイハイとぬかしてひつこんだが、やがて又庖丁のをれたのをもつてうしやアがつて、これでお脊中の垢をこそげおとしてあげませうかと、おれを鍋か釜のやうにおもつてゐやアがるさうな。いまいましい。北「ハヽヽヽ、こいつはでかしたかした（ト、むちうになりて、又田舎もの の頭をあしにてさがしまはし、みゝをいぢりかけると、こらへかねて北八があしをとらへ、）田舎「コレコレ最前からだまつてをれば、なんぜ此あしでわしが耳をなぶりものにさつせへた（ト、いはれて北八心づきて、）「ハイこれは御めんなせへ。田舎「インニャ扨御免ではじようちならまいわい。それもこなさんがむちうにならつせへて、はなしさつせる手そくぶりにやアあらまい事でもないが、こ



つちであたまをよけようとすると、又あしでさぐりまはいてはなぶりものにさつせる。なんぜ人のあたまア土足につつかけさつせへた。すまないすまない。弥「ソリヤおきのどくなことだ。御めんなせへ。此やうにおあひやどするも他生の縁とやら、どうぞ了簡してやつて下さりませ。田舎「こんたがさういはつせりやアきかまいものでもないが、あんまり人をばかにさつせるから。北「イ

ヤもう生酔だから、かんにしてくんなせへ。田舎「イヤまんだこなさんはわしどもをばかにさつせる。最前から見てをるに酒ものまないで生酔とは、猶じようちならまいわい。北「はてわつちは酒をのみやせぬが、此足がなま酔だから。田舎「ナニ足が酒をのむもんか。ばかアつくさつせるな。北「おめへでへぶ（大分）あつくなるの。あしが酔たといふは、さつき（先刻）焼酎をふきかけたから、それに此あしめが酔くさつて、ソレ御らうじろ。ひよろり〳〵、アレまだおめへのあたまにからかはうとする。コリヤ〳〵コリヤ。田舎「ほんにこなさんの足はわるい酒ぢや。北「さやうさ、あしは下戸の足がようござりやす。わつちはまことにこまりはてる。田舎「そんならようござる。モウねまらまいか。女中〳〵ねどころをたのみますト、此うち女来り、

それ〳〵にとこをとりねかすと、田舎ものふたりはそこへころげるやいなや、前後もしらずすう〳〵と高いびき。彌次郎北八この女どもに、こあたり文句もさま〴〵あれど此所と飯どきのしやれはぐつとはしよる。女どもはとこをとつてしまひ、かへつて行と、彌次郎小ごゑになりて、）「きた八〳〵實に手めへさつきの女と約束をしたか。北「しれたことよ。しかしこつちへはこぬつもりだ。此次の間の壁をつたはつてゆくと、いきあたつた所のふすまをあけろ。そこにねてゐるといひをつたから、今にゆかねばならぬ。彌「おれがさきへいつてやらう。北「そねますとはやくねなせへ、ト、うしろをふりむいてねいるまねする。彌次郎も北八がじやまをしてやらんと、ねいりしふりしてかんがへてゐる内、ふたりともたびづかれにや、おもはずすや〳〵と一ねいりし、しばらくすると彌次郎兵衛ふつと目を

さましみれば、あんどうきえてまつくらがり、あたりもひつそりしづまりたるに、じぶんはよしとぬけがけし、北八にはなあかせんとそつとおきたち、さしあしにてつぎの間に出、かねて聞おきたるとほり、さぐり〳〵壁をつたひてゆくうち、彌次郎兵衛あまりに手を上へのばしたるにや、つりたるたないたに手がつかへると、どうしたはずみやら、がたりといつてたながはづれたると見え、彌次郎兵衛大きにきもをつぶし、）「こいつはへんちきだ。あんまりおれが手をのばしたから、棚板がはづれたさうな。手をはなしたらおちるであらうし、なにかがらくたがしこたまあげてあるやうす、おちたらみんなが目をさますだらう。こいつは難儀な目にあつたト両手を棚につつぱつて立てゐても、ねからつまらず。手をはなせばたながおちる、襦ばんひとつでさむくはなるし、コリヤなさけない目にあつた。どうぞ

しやうはないかと立はだかつてかんがへてゐるうち、かくともしらず北八も目をさまし、おき出、これもだん〳〵かべをつたひてくるやうす。彌次郎それとすかし見て小ごゑなにり、）「きた八か〳〵。北「だれだ彌次さんだの。彌「コリヤしづかに〳〵。はやくこゝへ來てくれ。北「なんだ〳〵。彌「これをちよつともつてくれ。こゝだこゝだ。北「ドレ〳〵（ト、手をのばして、何かはしらずおちかゝつたたなの下をおさへると、彌次郎はそつと手をはなし、北八にもたせてわきへはづしたるに、きた八おどろき、）北「コリヤ〳〵彌次さんどうするのだ（ト、手をはなしさうにすると、上のたながおちかゝる故、）北「ヤア〳〵〳〵、コリヤ情（なさけ）ない目にあはせる。コレ〳〵彌次さんどこへゆく。ア、手がだるくなる。コリヤもうどうする〳〵（ト、うろ〳〵してゐる。彌次郎はくらまぎれ、そろ〳〵と先のはうへゆき、こしかべを傳ひてかつてのかたへ出るに、庭の向うにみゆるありあけの火かげほのかに、すかしてみればかのゆきあたりのふすまのそばにひとりねてゐるものあるゆゑ、さてこそ北八がやくそくのしろもの、しめこのうさぎと、いきなりに手をやつて探りみれば、こはいかに、石のごとくひえこほりし人たふれゐたり。さながらいきたるものともみえず。これはふしぎと、こは〴〵なでまはせば、あらごもにくるみてある故、彌次郎はつとおどろき、にはかにきみがわるくなつて、がた〳〵とふるひ出し、やう〳〵に北八がゐる所へはひもどり、はのねもあはぬふるへごゑにて、）彌「きた八まだそこにか。北「ヲヽ彌次さんおめへどこへいつた。コウちよつとこゝへ。彌「イヤそこ所ではない。あそこに死（しん）だものへ菰（こも）がかけてあるから、もう〳〵うすきみのわりいうちだ。北「ヤヽとんだことをいふ。彌「ナニサほんとうに、アレあそこに。ア、とんだうちにとまり合（あは）せた、おそろしやおそろしや（ト、さう〳〵にはひいだしにげ行。）北「コレ〳〵、おれをこゝにおいてどうする。エヽそれにとんだことをいやアがつて、どうやらきみがわるくなつた。コリヤたまらぬ〳〵（ト、がたがたふるへるひやうしに、手が緩みて、うへのたながぐわら〳〵〳〵。こりやかなはぬときた八にげいだせしが、うろたへてとまどひをし、いつかうわからずまごつくうち、このもの音に、かつ手よりはていしゆのこゑとして、あんどうさげて出くるやうす、おくの間からは田舍ものが出くるていゆゑ、いよいようろたへみせのかたへはひ出る手もとに、こも一まいありしをさいはひ引かぶりて息をころしかゞみゐると、ていしゆあかりをもち出、きもを潰し、）「ヤア〳〵〳〵、コリヤなんぜ棚がおちた。膳箱（ぜんはこ）もなにもら

りこくたいになつた(ト、そこらとりかたづけるうち、何事やらんと、ゐなかものふたりながらおき出、)「ヤレえらひおとがせるとおもうた。道理(だうり)こそ。コリヤ地藏さまのねきにまで箱どもがとびちつてをるが、ヤアく〱お鼻がぶつかけてしまうた。(今ひとりのゐなかもの)「ドリヤ〱ぼんに地藏の〻さまの鼻アな〻ならかいた。そこらにやないか。イヤこゝにねてをるはだれぢやい(ト、こもをまくれば、きた八ははつとばがりかほをあげて見るに、そばにはこもにつゝみし石ぢざうあり。さては彌次郎兵衞がしんだものゝありしといひしは、この石ざうならんと思ひゐるうち、ていしゆ北八を見て、)「ヤアこなさんは、こちへとまらせへたおきやくぢやないか。それに今時分なんぜこない(近様)な所に、コリヤ合點(がてん)がいかんわい。どうぢややらこなさんたちのなりそぶり、うさんくさいとおもひをつたが、若しや護摩の灰(はひ)ぢやないか。何(なん)ぞまたしよしめるつもりか。ありやうにいはつせへ。田舎「イヤそればかしぢやござない。大(おほ)かたこなさんが此棚(たな)をおとしたもんで、なんぜ地藏さまのおはなアうちかいた。コリヤわしどもが村で、今度建立(こんりふ)せる地藏さまぢや。きんのふ(昨日)石



屋どのからうけとつて、あしたは早々長澤寺様へをさめにやならぬが、お鼻がうちかけてはもつていかれぬ。元のとほりまどはつせへ。（これは此近在の人人、村のお寺へをさめる地藏也。石やよりもつて歸る所、おそなはりしゆゑ、こよひはこゝにとまりしと見えたり。ていしゆいよ〳〵やつきとなり、）「お地藏さまのおはなもおはなぢやが、おまいがたのお荷物なんぞなくなりはせないか。どうでもがてんのいかぬやつらぢや。ありやうにいひをるまいか。北「イヤわしらはそんなものぢやアねへ。めつたなことをいひなさんな。しらきちやうめんの旅人だ。田舍「インネさうぢやあらまい。又それでなけらにやア、なんぜ今時分そこにねてゐさつせへた。北「イヤこれはの、手水に行とつて、ていしゆ「たわけたことをつくさまい。手水場は座敷の椽さきにおるものを。さだめし宵にもいたであろに、そないな間似合くやせんわい。北「さういはれちやアわつちも面目ないが、恥をいはにやア理がきこえぬ。有體にいひやせう。ていしゆ「ヲ、サいはいでどうせるもんぢや。北「イヤどうもおはづかしいが、今頃わつちがこゝにまごついてをつたといふわけは、ツイ夜這にきて、此棚のおちたにうろたへたのでござりやす。田舍「ナニ夜這にきた。イヤはやこなさんはたわけたもんぢや。どこの國にか、石地藏さまの所へ夜這に來てどうせるつもりぢや。ていしゆ「いへばいふほどろくなことはぬかしをらぬ。北「コリヤとんだ災難にあふことだ。彌次さん〳〵（ト、よびたつる。せんこくより彌次郎兵衞はたちぎきして、はらすぢをよりゐたりけるが、よい時分と立出、）「コリヤアどなたもおきのどくな。ありやアわつちがうけ合。うろんなものぢやアござりやせぬ。れうけんしてやつてくんなせへ。又地藏さまの鼻とやらがかけたといひなさるが、どうぞわつちにめんじて、あとではどうともいたしやせう（ト、いろ〳〵ちやらくらとことわりをいひちらし、ていしゆも今はせんかたなく、さながらわるものとも見えぬ手あひ、一とほりはいつたものゝ、今はなつとくしてすましければ、）

　はひかけし地藏の顏も三度笠
　　またかぶりたる首尾のわるさよ

かく即吟の彌次郎兵衞が狂歌に、おのおのどつと笑ひをもよほし、やう〳〵いさくさをさまりけるにぞ、いまだ夜のあくるにはほどもあらんと、めい〳〵ねどころにはいりたるが、しばらくありて、はや一ばん鷄の告わたる聲々、馬のいなゝきおもてにきこえ、彌次郎兵

衛北八いそぎおき出て、支度と、のへ、
やがて此宿をたちいづるとて、

やう〳〵と東海道もこれからは
はなのみやこへ四日市なり

それより濱田村を打すぎ、赤堀にさしかゝりたるに、往來殊に賑しく、男女大せいこゝかしこにつどひあつまりたるは何事にやと、彌次郎兵衛北八も片寄行つゝ、ある親仁に向ひて、彌「モシ〳〵何でござりやす。おやぢ「あれ見さつせへ。北「けんくわでもござりやすか。おやぢ「インネ天蓋寺の蛸藥師さまが桑名へかいちやうに行しやるので、今ここをとほらつせるから。彌「ハヽアなる程向うへ見える〳〵へト、此内、だん〳〵人足しげくなり、講中とおぼしく、まつさきに村の名をそめたるのぼりをおしたて、いづれも大音にて、かう中「なアまアだア〳〵。北「たこやくしさまアゆでたのぢやアねへ、なまだと見える。かう中「なアまアだア。彌「のぼりをもつていくやつのつらア見さつし。ちゑのねへつらだせ。かう中「おさいせんはこれへ〳〵。是は海中より芋畑へ出現したまふ所の天蓋寺蛸藥師如來。御しん〳〵のかたは、おこゝろもち次第あげさつしやりませう。サア〳〵お心もちはようござりますかな。北「けさほどは中かさで三せんほどたべました。彌「ソリヤ蛸どのがござ



つたござつた（ト、此内、みづしにいれたるやくしによらい、大勢にてかつぎとほる。あとよりてんがいじのをしやう、のりものにてきたると、こゝかしこにあつまりゐるばゞかゝども、十念をねがひけるに、）わかたう「お十念〳〵（ト、いふと、のり物をおろす。わかたうかごのとを引あくれば、をしやうはゆでだこの如きあからがほにて大あばたひげだらけのでつくりをしやう、さも〳〵かつぺらしく、）「なむあみ。みな〳〵「なむあみ。をしやう「なむあみ。みな〳〵「なむあみ。（をしやうなむあみとだん〳〵となへ、十念のしまひに、どうしたはずみやら、はなのあながむづ〳〵として、）をしやう「ハアくつしやみ（ト、いふと、みな〳〵十ねんのあとゆゑ、これもくちまねすることとこゝろえ、）みなみな「ハアくつしやみ、（をしやう小ごゑにて、）「くそをくらへ。みな〳〵「くそをくらへ。彌「ハヽヽヽとんだお十念だ。アノをしやうは、くつしやみから長郎だハヽヽヽ。かう中「なアまアだア〳〵（ト、さゞめき立、行過る。彌次郎北八はをかしく、あとを見送りながら、）

十念をまうしながらのくつさめは　あつたらくちに風をひかせし



かくよみすてゝ打興じ行ほどに、はやくも追分にいたる。此所の茶屋、まんちうの名物あり。ちや屋の女「お休なさりまアせ。めいぶつまんちうのぬくといの

をあがりまアせ。おざふにもござりまアす。北「右側のむすめがうつくしいの。彌「かぎやの小ぢよくめらもあいきやうらしい(ト、ちや屋には入こしをかける。)女「おちやアあがりませ。彌「まんぢうもやらかして見よう。女「今あげませう(ト、やがてぼんにもつてきたる。このうちこんぴらまゐりと見えて、ぬのこのうへにしろきひとへのはんてんを引ぱりたるをとこ、おなじくこのちや屋にやすみ、ざふにもちをくひかゝる。彌次郎まんぢうをくひしまひ、)「もつとやらうか。いくらでもはいるやうだ。北「イヤおめへも雨風どうらんだ。いゝかげんにしなせへし。こんぴら「あなたがたアおえどかな。北「さやうさ。こんぴら「わたくしもお江戸へゐた時、本町の鳥飼のまんぢうをかけどくして、二十八くつた事がござりましたが、又かくべつなものぢや。彌「とりかひはわつちらが町内だから、まいにち茶うけに五六十ヅツはくひやす。こんぴら「それはえらいおすきぢや。わたくしももちずきで、御らうじませ。此ざふにをいきなし五せんたべました。彌「わつちやア今こゝのまんぢうを十四五もくつたらうが、まだその位はいけるだらう。ねからくひたらぬやうだわへ。こんぴら「イヤしかしわるあまいものは、もうそのやうにはあがられますまい。十四五もあがりやア關の山だ。彌「ナニまだくへやす。こんぴら「どうして〳〵、あなた口ではさうおつしやるが、そのやうにはくへぬものぢやて。彌「ナニくへぬことがあるものだ。しかし費だからくひやせぬが、誰ぞくはせるとまだまだいくらでもはいりやす。こんぴら「コレハおもしろい。モシ無躾ながら、なんとわたくしがお振廻申ませう。もうそれだけあがつて御らうじませぬか。彌「くひやせうとも。こんぴら「もしあがらぬとあなたのおたふれぢやがようござりますか。彌「そりやしれたことさ(ト、かつにのつてまんぢうをとりよせ、くひかゝりしが、十ヲばかりくつてあとはもうおくびに出るくらゐなれど、おのれこんぴら、はなあかせてやらんと、むりにおしこみなくつてしまふ。)こんぴら「コリヤたまらぬ。えらいえらい。もう〳〵わたくしはかなひませぬ。彌「おめへもやらかして見なせへ。こんなちひさなものはいくらでもくはれる。こんぴら「イヤさうはまゐりませぬ。しかしわたくしもあんまり殘念な。十ヲばかりたべてみませう。彌「ナニ十ヲぐらゐ、二十くひなせへ。そのかはりひとつものこさずくひなすつたならば、まんぢうの代はもちろん、外に百文金毘羅樣へお初穗をあげやせう。

こんぴら「そりやありがたい。てんぽのかはやつて見ませう（ト、まんぢう二十とりよせ、たゞもじ〳〵と見てばかりゐたりけるが、やがてくひかゝると、ぽつか〳〵十ヲ斗くつてしまひ、あとはいやさうなかほつきにて、やう〳〵とのこらずくつてしまふ。彌次あてがちがひ、）コリヤおそれるおそれる。こんぴら「おやくそくのとほり、まんぢう代はさしひいて、おはつほの百文くださりませ。彌「今あげやせう。しかしあんまり見ごとだからもう二十くひなせへ。今度はおはつほ三百文あげやせう。そのかはり、くはねへとこつちへ二百とりつこだがどうだ〳〵。こんぴら「おもしろい〳〵。何も欲徳、腹のさけるまでやつて見ませう。彌「サア〳〵今度は現錢だ。おめへも二百そこへ出しておきな（ト、彌次郎三百文をつきだし、なんでも今とられたおはつほの百文に利をつけてとるきになり、よもやもうくはれめへと思ひこんで、まんぢうをまた〳〵二十とりよせ、こんぴらへすゝめるやいなや、このたびはなんのくもなくたちまち二十くつてしまひ、手ばやくかの三百文をちやくぶくして、）こんぴら「これはありがたい。まんぢうの代もよろしうおたのみ申ます。ハヽヽ、思ひがけないおざうさにあづかりました。ハイゆるりとこれに（ト、おみきばこをせなにおひ、あとを見ずして出て行たるに、彌次郎はあきれはてゝゐる。）北「ハヽヽ、大かたこんなことにならうとおもつた。彌「いま〳〵しいめにあはしやアがつた。はじめの百がをしくなつて、うはのりをした。ごふはらな（ト、此内、下のかたよりかごかきぶら〳〵と來り）「だんながたはお駕はいらしやりませぬか。彌「かご所ぢやアねへ。えらいめにあつた。まんぢうのくひごつこをして、錢三百たゞとられた。かごかき「ハヽヽア今のこんぴらめぢやな。てきめはあないなふうをしてあるきをるが、アリヤ大津の釜七といふえらい手づまつかひぢやげな。こんぢうも坂の下でもちの喰くらで七十八とやらくつたと見せて、錢は人に拂はせ、もちをばみんな袂へさらひこんでうせをつたといふことぢやが、旦那も一杯はめられさつせへたの、ハヽヽ。（此はなしの内、いせまゐりの子供二人、まんぢうを三ツ四ツづつ手に持てくひながら、この門口へ來り、）「ハイ旦那さま、ぬけまゐりに御はうしや。北「コレ手めへたちやアそのまんぢうを誰にもらつた。いせ參り「ハイコリヤこのあとで、こんぴらまゐりの人が袂から出してくれました。彌「エヽそんならあいつめがくらつたと見せやアがつて、おいらをだまくらかしやアがつたか。いま

いましい。ぼつかけてぶちのめさうか。北「いゝわな。おいらも神参りだ。かんにしてやりなせへ。みんなこつちがま抜だからよ。ハヽヽヽ。彌「それだとつてあんまりごふがにえかえる。北「ゆうべの泊りでおれをえらいめに合たそのむくいだとおもひなせへ。ほんにいゝごふさらしだ。

盗人に追分なれやまんぢうの
あんのほかなる初穂とられて

彌「エヽ、おもしろくもねへ、しやれやんな。モシ〳〵まんぢうの代はいくらだね。女「ハイ〳〵のこらず〆て貳百三十三文でござります。彌「せうことがねへ（ト、ふしよう〳〵に錢をはらふと、かごかき、）「旦那まん直しに、やすくめしてくださりませ。彌「いや〳〵。かごかき「酒手でまゐりませう。彌「きさま酒をのむか。かご「ハイ酒はすきで一升ざけを下さります。彌「また酒の飲つくらしようとおもつてか。もういやだ〳〵。サア北八出かけや（ト、これよりいせさんぐうのみちへはいる。）

東海道中膝栗毛五編下

神かぜや伊勢と都のわかれ道なる追分の建場より、左のかたの町をはなれて、野道をたどり行ほどに、むかうより來る農行の馬によこのりしたる男、かんばり聲にて、うた「見てもぬくとさうなヲ、おかたとねたりやナア、手おりぬのこの一まいねつこにつんぬげた。アヽエヽヽヽヽエ。彌「コウ見さつし。アノ向うからのつてくる馬士をおろして見せようか（ト、わきざしをぐつとぬき出してさし、かつぱのそでをまへのはうへをりて、刀のつかにもちそへたるていに見せかけてゆくと、馬かたやがて馬よりちやつとおりて行。）彌「ナントどうだ〳〵。（又向うよりよこのりの馬士）「ばんにとまりにヨ、いことてやめたナア。なんぜいきやらぬ。裸でおかたにあはりよかへナア、エ。彌「こいつもおろしてやらう。エヘン。馬士「シツ〳〵（ト、にはかにうろたへおりて行過る。）彌「北八どうだきめうか。北「二本ざしを見ると乘打のできねへこたア、みなしつてゐらア。彌「それだからよ。おれを侍だとおもひをつて。北「ばかアいふせ。あとを見なせへ、侍がふたりくるから。彌「エヽほんにか（ト、ふりかへるひやうしに、このお侍にばつたり。）彌「ハイ是は御めんなさいやし。神戸へはもうどれほどござりやすな。（此さぶらひしゆは、此へんの郷士とみえて、）「ソレむこの堤からつつとそらへあがらせると、もう半道もあらずにな。彌「ハ

イありがたうござりやす。北「つゝみからそらへあがれたアなんのことだ。鰒がてんじやうしやアしめへし。ハヽヽハヽ。時にこの川は何といふ川だ。はしばん「錢橋が貳文ヅツ出ます。此川は宇都部川といひます。彌次「ソレ貳文ヅツ四文よ。」

抜まゐりならばぶさをもうつべ川
わたしの錢もかりばしにして

それより高岡川をうちわたり、はやくも神戸のしゆくにいたる。入口に寶珠山火除地藏堂あり。

安穩に火よけ地藏の守るらん
夏のあつさも冬の神戸も

かくてこの宿はづれなる茶みせによりて休ゐたるに、馬士「モシおまいがたアおまにのつて下んせんか。彌「いかさまもどりならのるべい。馬士「上野までもどるおまぢやわい。荷をつけて二百五十くだんせ。北「二はうくわうじんで百五十やるべい。馬士「けふは枠をもてこんわいの。爰からうへ野迄三里の所ぢや。白子へ一里半、代りやつてのつていかんせ。彌「ふたりのられにやアいやだ。馬士「そしたらおふたりともおまの鞍へくゝしつけていこまいか。この繩でしめりや、きづかひはないがな。北「とんだことをいふ。それぢやアたばこものまれぬ。彌「そんならかはり〳〵のらう、百五十でやるか。馬士「まゝよかし、やらかしましよ（ト、馬のさうだんできて、ふたりの荷をつけ、此所よりまづ北八のつて出かける。）彌「おらアそろ〳〵さきへいくぞ。ソレ北八、右のはうへかしぐやうだ。馬「ヒイン〳〵。すゞのおと「しやん〳〵（此内、むかうよりきたるをとこ、こんじまのせんたくしたるひきまはしをきて、ぜに壹〆ばかりさしこのふるきふろしきに包み、肩に引かけ、ざうりがけにて來り、この馬士を見つけ、）「ヒヤアのしやア上野の長太ぢやないか。今、のしが所へいた戻りぢや。えいとこでいきあうた。馬かた長太「ハア權平次樣かいな。コリアさてわしやめんぼくがないがな。ごん「あろまい〳〵。あろはずがないわい。晦日々々にいこすはずを、まんだびた錢一文もいこさんがな。どうしさるのぢや。ソレきこわい。馬士「マア〳〵こち來て下んせ。（此馬士借金のことわりと見えて、かのをとこを日あたりのよいところへともなひ、おのれも土手にいろ〳〵とこしうちかけて、）「そないにごふにやらかいてくだんすな。マアこゝへかけさんせ。イヤそこのねきには犬のくそがある。けふおいでるとしりをつたら掃除しておこもの。コリヤ〳〵權平樣へちやなとあげんか。酒かうてこいといふ所ぢや

が、こゝは大道なかでそれもでけぬくい。北「コリャどうする。はやくやらぬか。馬士「ハテせはしない、ちとまたんせ。いんまだいじのおきやくがある。さてマァきいてくだんせ。去年のふゆからうちのかゝめが病氣を煩ひをつて、がき共にはせちがはれる、雜役にさへ出やせんものを、何ぢやろとかうして下んせ。四五日のうちには、ひゆつとこちからもていこがな。ごん「イヤじようちならんわい。そないにいうても、よういこしやしよまいがな。でんないでんない。もう三年ごしといふものかした錢ぢや。利に利がくつて二十貫あまりといふもんぢやもの。いこすないこすな。そのかはりあのおまをとていのかい。ハテまさかの時は、のしがおまをわたそと證文にかいたぢやないか。そしたらいひぶんありやしよまいがな。

サア〳〵もしおまのうへな旦那さま、いんまきかんすとほりぢや。借錢のかはりに請とるおまぢや。どうぞこゝからおりさんせ、きのどくながら。北「ハアおいらもさつきにから、じれつたくてならなんだ。ひよんな馬にのり合せたは、こつちの不仕合、しかしまだ錢はやらず、是までのつたを徳にして、ドレおりて行やせうか（ト、かのごん平にロをとらせて、馬からおりると馬士かけより、）



「モシ旦那おまへがおりてはこのおまをとられる。マアのつてゐて下んせ。ごん「イヤならんわい。馬士「ハテどないにもするわいの。旦那をおろしてはきのどくな。サア〳〵めして下んせ。北「またのるのか、しつかりたのむぞ（ト、きた八又馬にのれば、權平やつきとなり、）ごん「コリヤ〳〵長太（ちやうた）どうしさるのぢや。旦那おりて下んせ。北「エヽ又おろすのか。イヤきさまたちやアおれをいいちやうさいぼうにする。おろしたりあげたり足もこしもくたびれはてた。ごん「それぢやてわしがおまぢや。どうぞかしおりてくだんせ。北「エヽめんだうだ（ト、小じれがきて、ぐつと飛びおる。）馬士「はて扨おりさんせずとよいがな。コレ權平樣かうしてくだんせ。わしも途中ぢやしよことがない。せめて内へいぬまでまつてくだんせ、そのかはり、こゝで此ぬのこを渡すに。ごん　なんなら、せう〳〵は錢を出しても、「そしたらいんで、わけつけるか。馬士　のるこたアいやだ。馬士「さういはんせ「もうよいわい。サア旦那めさぬかい。ずとのつて下んせ。もうよいがな。サ北「ナニ又のれか。もうかんにしてくア〳〵（ト、馬のくちをとりてすゝむるゆれ。おらア、これからあるいてゆかう。ゑ、きた八又しかたなく馬にのれば、ごん



「サアやくそくの布子ぬごまいか。馬士「イヤそないには いうたものの、これもうちへいぬまでまつて下んせ。ごん「イヤおのれもうれうけんならんわい。サア〳〵旦那又おりてくだんせ。北「エヽこの唐人めらア又おりろとぬかしやアがるか。もういやだ。サアはやくやらねへか。どうしやアがるのだ。馬士「だんなさうはかいの、おりずとよいに。ごん「イヤおりずとえいとはなんでぬかす（ト、まつくろになり、馬にとりつきかゝる所を、馬士つきのけて、馬のしりを思ふさまたゝきたてると、馬はいつさんにかけ出せば、北八うへにてまつさをになり、大ごゑあげて、）「ヤアイ〳〵たすけてくれ。コリヤどうする〳〵。ごん「馬をにがしてはならん。ヲヽイ〳〵（ト、おつかける。北八はどしやう大事に、馬のくらにとりつきても、馬はやみくもにはしるゆゑ、きだ八とびおりようとして、くらのなはにあしがひつかかり、まつさかさまにおちてこしのほねをうち、）「ア、いたい〳〵。だれぞきてくれ。アイタヽヽ（ト、ひとりもがきてくるしむていに、馬かた一さんにかけつけきたり。）「モシ旦那、おけがはないかな。ドリヤ〳〵（ト、手をとりて引おこすうち、ごん平は馬をとらへんとかけぬけろ。馬かたこれを見てさうはさせじと、北八にかまはずかけだして行。）北「ヲヽイまちあがれ。お



れをばひどいめにあはしやアがつた。（ト、こゞとをいひながらおきあがり、はらはたてどもせんかたなく、おつかけんにはあしこしがいたみ、やう〳〵のことにてふみしめふみしめ、そろ〳〵とたどり行つゝ、）

借錢をおうたる馬にのりあはせ
ひんすりやどんとおとされにけり

ゆくほどなく矢ばせ村といふにいたる。彌次郎兵衛は神戸の宿はづれよりさきへ來たるが、かの馬のいさくさをば露しらず、よほどさきへなりたるを、ふしぎにおもひ、こゝにまち合せゐたりけるが、それと見るより、彌「ヲヤ〳〵北八、そのなりはどうしたのだ。北「イヤもう、はなしにもならぬとんだめにあつた（ト、さいぜんよりのいちぶしゞうをはなせば、彌次郎をかしく、さいはひこの所は、かまくらの權五郎がこせきありときゝて、彌次郎兵衛とりあへず、）



權五郎ならねど馬士のいつさんに
おつかけてゆくかけとりの海

それより玉垣をうちすぎ、白子の町にいたり、福德天王をふしをがみつゝ、子安觀音の別れ道にて、

風を孕む沖の白帆は觀音の
加護にやすく〳〵海わたるらん

このしゆくをすぎて磯山といへるにつく。此所に吹矢のいろ〳〵かざりつけたる小見世の親仁、往來を見かけて、「サア

サアおたく〳〵さみにやてかんせ。外題はちうしんぐら十一だんつゞき。ソレふかんせヤレふかんせ。おあてなさるとたちまちかはる新板の上細工はこれちやこれぢや。北「ハ、アなんだ。勘平おかる魂膽夢の枕、イヤこいつやらかして見よう（ト、ふきやづつに矢をいれて、）フ、、、引カチリガツタリ。彌「何だハアえらい松茸が出た。コリヤ可笑しいハ、、、。與一兵衞子故の闇の夜は何が出るだらう。フツ〳〵フ、、、引カチリガサ〳〵〳〵〳〵ヒヤアみこし入道ハ、、、。向うのはなんだ。北八そつちへよりや（ト、ひきのけるひやうしに、あしもとにねてゐたりし犬の足をふむ。）犬「キヤアン〳〵。彌「このちくしやうめ（ト、ふきやのつゝでくらはしにかゝる。犬はワンといつてかみつく。）彌「アイタ、、タ、うぬぶちころすぞ（ト、おつかくるはずみに、どつさりところげたそばにおちてあるはたばこいれ。）彌「ころんでも損はいかぬ。爰にたばこ入が（ト、拾ひにかゝると、向うがはにゐる子どもがいとをひくと、たばこ入はする〳〵〳〵〳〵。）彌「エ、いま〳〵しい。一ばんはぐらかしやアがつた。子供「あはうよワハ、、、。北「こいつはい、ごふさらしだ。サアいきやせう（ト、ふきやの錢をはらひ、出かける。むかうに又きせる一本おちてあるゆゑ、）北「ソレ彌次さん又ひろはねへか。彌「イヤもう其手はくはぬ。アレあとからくる親父がひろひをるだらう（ト、ゆき過てふりかへり見れば、あとよりきたる親父かのきせるを拾ひて、ふところにおしこみ、さつ〳〵と行すぎる。）彌「ハアだましでもなかつたさうな。北「ハ、、、おめへがうぎにまんがわるいせ（ト、打わらひつ行ほどに、やがて上野のしゆくにいたる。こゝに此あたりの人と見え、はおりばつちにて、小やらうを供につれたるをとこ、あとよりきたりて彌次郎兵衞にちかづきて、）「卒爾ながらあなたがたアお江戸でござりますか。彌「アイさやうさ。かの男「わたくしは白子のさきから、あなたがたのおあとについてさんじたが、みち〳〵の御狂詠を承りまして、およばずながら感心いたしました。おもしろいことでござります。彌「ナニサみな出はうだいでござりやす。男「イヤおどろき入ました。先達てお江戸の尚左堂俊満先生など、當地へおいでくござりました。彌「ハアなる程、さやうさやう。男「あなたの御狂名は。彌「わつちやア十返舍一九と申やす。男「ハ、ア御高名うけたまはりおよびました。十返舍先生でござりますか。私南瓜の胡摩汁と申ます。扨々よい所でおめにかかりました。此度は御參宮でござりま

すか。彌「さやうさ、かのひざくり毛と申著述の事について、わざ〳〵出かけました。ごま汁「いか樣それは御妙作でございます。是へおこしなさる道すがらも吉田、岡崎、名古屋邊、御連中方御出會でございましたらう。彌「イヤ東海道は宿々殘らず立よる所がござれども、參ると引とめられまして、饗應にあひまするがきのどくでござるから、みな直通りに致しました。それ故御覽の通り、わざと麁服を着いして、やはり同者の旅行同樣に、心安く、なんでも氣まかせに風雅を第一と出かけました。ごま汁「それはお樂みでございます。わたくし宅は雲津でございますが、どうぞお供いたしたい。彌「おぼしめしありがたい。ごま汁「まことに御珍客、近所の社中どもへもお引合せ申たい。いづれ御一宿をお願ひ申ませう。マア〳〵ふしぎな御緣でよいとこでおめにかゝつた。時にこゝが小川と申所、まんぢうの名物、一ぷくあがりませんか。彌「イヤまんぢうにはこりはてた。すぐにまゐりませう（ト、うちつれて此所をゆきすぐるとて、）

　から尻のうまい名代をたび人に
　くひつかせんと賣れるまんぢう

これより行ほどなく津の町にいたるまへに、高田の御堂、右のかたに見ゆる。石井殿といふこれなり。

　おまな板なほしに鯉のひれふるは
　これ作用姫の石井でんかも

津の入口、ひだりの方に如意輪觀音堂あり。又かうのあみだといへるもあり。此所は上方筋より參宮の人おちあふ所にて、往來ことに賑しく、中にも都がたのわかき人々、小袖のうへに揃ひのゆかたを引ぱり、藝者めきたる男女うちまじりて、かざりたてたるつゞら馬をひきながら、うた「チヽヽヽチン〳〵エイヽヽヽ引。ござれみやこの名どころ見せん。ぎをん清水やれ音羽山。ヤアヽとこなア、ヨウいやさア、ありややこりやヽ、コノなんでもせエヽヽ引、チヽヽヽチン〳〵エイヽヽヽ引。ぢしゆのさくらにまく打まはし、霞がくれにものおもはする。ヤアとこなアヽヨウいやさア、ありやヽこりやヽコノなんでもせエ引。彌「コウ北八見や、がうぎにうつくしいたぼが見える。ごま汁「アリャみな京都のしゆぢや。あないにりつぱにしてお出やつても、ねから錢はつかやせんがな。京の人「御無心ながら火ひとつかしておくれんか。ごま汁「サア〳〵おつけなさい（ト、くはへたきせるをさしいだせば、京の人すひつけにかゝり、）京「パッ〳〵〳〵。ごま汁「まんだつかんかいな。京「パッ〳〵〳〵。

ごま汁「なんぢや、おまへのきせるにや、たばこがついでないがな。ハヽアきこえた。すひつけるふりして人のたばこをのむぢやな。モよさんせ〳〵。ノウおえどの先生、京のしゆはあないに吝いのねつこぢやわい。ハヽヽヽ。時に先生もう一ぷく下さりませ。弥「京のものをしわいといふが、おめへもさつきにから、わしがたばこばかりのんでゐる。ごま「イヤわたくしは、たばこ入をもちやせんもの。弥「わすれて出なさつたのか。ごま「ナニわすれもせんが、ありやうは、せんたいがないのぢやわいな。そのわけはわたくしはえらいたばこずき、一日に拾匁ではたらぬくらゐぢやゆゑ、コリヤ自分でかうて呑ではたまらんとおもうて、それからたばこ入はやめて、きせるばかりもてあるきをります。弥「そこで人のばかりのみなさるのだな。ごま「さようぢやわい。弥「そりや京の人へふくりんかけて、おめへがありたじけねへといふもんだ。ごま「ハアさうかいな、ハヽヽヽ。時にいかうおそなつた。ちといそぎましよか（ト、あしをはやめてゆくに、ほどたく月もとにいたり、此へんよりからすの宮へまゐる道有りと聞きて、）



照わたる秋の月本ならば今
　うかれまゐらん烏御前に

かくて雲津にいたり、南瓜のごま汁、おのが家に案内するに、これもはたごやと見ゆれど、折ふし相客もなく、おくの間に請じ入れ、かれこれともてなしければ、彌次郎兵衞はあらぬ名をいつはり、かゝるめにあふも一興なりと、北八もろとも心の内にをかしく、やがて湯にも入しまひ、いう／＼と座しゐたるに、ていしゆごま汁いでて、「コレハおくたびれでござりましよ。ようこそお入下されました。しかし折あしく此頃はしけで何もおさかながござりません。それゆゑなにも御ちさうがでけぬくいが、當所はいたつてこんにやくがよござりますから、マア是でもあげましよとぞんじて申付おきました。彌「もうおかまひなされな。イヤ御主人此ものはいまだおちかづきにならぬげな。ごま汁「いかさまあなたは。北「わたくしは十返舎の秘藏弟子、一片舎南鐐と申ます。ふしぎな御縁で御役介にあづかります。ごま汁「ナニサ、とつとねからおかまひ申さんちやて。イヤせんせいちとおくつろぎなされまいか。女「御膳がよござります。ごま汁「はやうあげんかい。御ゆるりとめしあがりませ(ト、ていしゆはかつてへ立つてゆく。女膳をもち出、彌次郎へすゑて行。)彌「まんざらでもねへの。北「いゝ女だ。しかしこゝぢやア、おめへも先生かぶだ。おとなしくせざアなるめへ(ト、此内又十一二ばかりの小ぢよく、膳をもち北八にすゑる。兩人ははしを取りてくひかゝり見るに、ぜんの向うに、ひらめなるさらのなかに、大ふくもちの大きさのごとき、くろきものをのせて出せり。ひらにはこんにやくをもり、みそはべつに小皿にあり。彌次郎兵衞小聲にて、)「ナント北八、この皿にある丸いものは何だらう。北「されば何であらうか(ト、はしにてつゝき見るに、いたつて堅く、はさめども動ず。よく／＼みれば石なりけるゆゑ、きもをつぶし、)北「コリヤ石だ／＼。彌「ナニ石なものか、ノウ女中。女「それは石でござります。北「それ見なせへ。女「こんにやくをおかへなさりませ。北「いか樣もう少し(ト、ひらを出して女のたつて行をまちかね、)彌「コウ、なんとばか／＼しい、どうして石がくはれるものか。北「イヤそれでも、くはれる仕法がありやアこそ出したであらう。さつき當所のめいぶつをあげませうといつたア、何でも此石のことだ。彌「それだとつて、ついぞはなしにもきかねへ。北「イヤまちなよ。江戸で團子のことをいし／＼といふから、大かたコリヤだんごであらう。彌「ハヽアなる程そこもあ

る。よもやほんとうの石ぢやアあるまい（ト、又はしをもつてつゝき見るに、やはり石也。これはふしぎときせるのがんくびにて、たゝき見ればかつちり〳〵。）彌「どうでも石だ〳〵。コリヤどうしてくふものだときくもごふ腹だが、どうもねつからがてんがいかぬ。（此内、ていしゆかつてより出、）「是は何もござりませぬ。よろしうめしあがりませ。イヤ石がさめはいたしませんか。コリヤ〳〵、ぬくとい石をかへてあげ申せ（ト、いはれてふたり共いよ〳〵ぎよつとせしが、いかにしても此石のくひやう、しらねといはれんもごふはらと、彌次郎兵衛これをくひたる貌にて、）「イヤもうおかまひなさるな。いしももはやよろしうござる。扨々めづらしいものを賞翫いたしました。江戸表などで、折ふし小砂利をとうがらしじやうゆで煎つけるか、又は煮豆などのやうにいたしてたべる事がござります。それに又石塔なども、嫁をいぢるしうとばゞなどにくはせたが、くすりだと申てたべまするが、わたくしもずゐぶん好物でござります。今度府中に逗留いたした時、馬蹄石をすつぽん煮にして、ふるまはれましたが、ツイわたくし四ッ五ッたべました所に、おきゝなさい。はらがおもくなつて、立うとした所が、一かうたゝれず。しかたなしに両方の手を棒しばりのやうにいたして、かついでもらつて、やう〳〵と手水にゆきやした。御當所の石ころは、かくべつ風味もようござりやすから、又たべすぎたらば御やつかいになるだらうとぞんじて、おきのどくでござりやす。ごま汁「ナニその石をあがりましたか。彌「たべましただんか。ごま汁「イヤそれはめつさうかいな。石をあがるといふは、けしからんお歯のおたつしやなことでござります。しかしやけどはなさりませんかいな。彌「それはなぜな。ごま汁「イヤあの石はやけいしでござります。すべてこんにやくといふものは、水氣のとれぬものでござりますから、あのやけ石にておたゝきなさると、水氣がとれて、格別風味がよござります。そのためのやけいしでござります。あがるのではござりませんわ、なっ彌「ハヽアなる程〳〵、きこえました。ごま汁「マアさうしてあがつて御らんなされ。コレおなべよ、石がぬくとなつたらもてこんかい、はやう〳〵（ト、此内、皿にいしのやけたるをのせて女もち出、引かへてゆく。彌次郎北八ていしゆがことばのごとくして、あのこんにやくをはさみ、くだんの石にうちつけ見るに、シウ引といふて水氣とれたるところを、みそをつけてくらふ。ふうみかくべ

つかろくして、いはんかたなければ、大きにかんしんして、)彌「まことにめづらしいおれうり、御仕法かんしんしん致しました。そしてかやうにおなじやうなる石が、さつそくによくそろひました。ごま汁「イヤ夫はかねてたくはへおきます。おめにかけませう(ト、勝手にかけいり、すひものわんをいるゝやうなはこをもちいで)「御らんくだされませ。こないに二十人まへは所持いたしてをります(ト、かのはこを見する。ふたりはをかしく、其はこのよこのはうに何か書付てあるゆゑ、よんでみれば、こんにやくのたゝき石二十人まへとかきつけたり。此内、近所の狂歌よみ、おひ／＼にきたりて、)「御めん下さりませ。ごま汁「ヤこれは小鬢長兀成様、サアサアどなたもこれへ／＼。「ハイ／＼、是は十返舎先生、はじめておめにかゝりました。わたくしは富田茶賀丸と申ます。つぎは反歯日屋呂、水鼻垂安、金玉の嘉雪、いづれもお見しりくださりませ。ごま汁「時に先生、おやかましうはござりませうが(おむづかしからうといふことを、おやかましからうといふくにことば也。)扇面、たんざくなどおねがひ申たいが、何なりともおもち合せのお歌を、おしたゝめくださりませ(ト、まふ



ぎたんざくをつきつけられ、彌次郎しかつべらしくとりあげて、なんの出はうだい、やらかしてくれんといろ／＼かんがへても、わがよみしうたには、これぞといふ歌もなく、たつそくにおもひつきもなければ、これまできゝおぼえゐたりし、人のうたをかきてさしいだせば、ごま汁これをいたゞき見て、「これはありがたうござります。おうたは、「ほとゝぎす、じいうじざいにきく里は、酒屋へ三里とうふやへ二里。」ハヽアなる程、どうかきいたやうなお歌だ。「きぬ／＼のなさけをしらば今ひとつ、うそをもつけや明六ツのかね。」イヤこれは千秋庵大人のおうたではござりませんか。彌「ナニわたくしがよみ歌。しかも江戸中大評判の歌、たれしらぬものはござらぬ。ごま汁「イヤさよぢやあろが、せんねん、わたくしおえどへさんじた時、三陀羅大人、芍薬亭大人などにもおめにかゝりまして、すなはちおたんざくもいたゞいて歸りましたが、御らんなされ、其びやうぶにはつてござります（ト、いふゆゑ彌次郎ふりかへりて見れば、なるほどびやうぶに三陀羅と書きて、右のうたあり。北八をかしくきのどくなれば）「イヤわたくしの先生は、そゝつかしいがくせで、人の歌だのわが歌だのといふしやべつは、いつかうござりやせぬ。コウ彌次さん、イヤ先生、是まで道中筋でよみなさつた、おめへのうたをかきなされば いゝに（ト、きをつけられて、彌次郎めんぼくなけれど、おしのつよいをとこなれば、いけしやア／＼として、あとのたんざくへは道中すがらの歌をかく。此内、北八も手もちなければ、はりまぜのびやうぶを見て、）「ハヽア戀川春町のゑがある。モシあの畵のうへにある讃はなんでござります。ごま汁「イヤあれは詩でござります。北「こちらのほていのゑのうへにあるは詩と見えますが、誰がいたしたのでござります。ごま汁「イヤあれは語でござります。澤庵和尚の（ト、いふ故、北八心のうちにこいついま／＼しいやつだ。さんかといへば、しだといふ。しかといへば、ごだといふ。なんでも今度は一つとんだことにいつて、まごつかせてやらうとそこら見まはし、）北「モシ、おかけものゝ畵の上にかいてあるは、おほかた六でござりませうな。ごま汁「六か何かしりませぬが、あれは質にとつたのでござります（ト、此うちかつ手よりをんなたち出、）「ハイひげつらさまから、お手紙がさんじました。ごま汁「ドレ／＼何ぢやあろな（ト、此手がみをひらきて、たか／＼とよみて見れば、）手がみ「鳥渡申上候。只今東都十返舍一九先生、私宅へ御着有之候。勿論名古屋連中并吉田大嶽よ

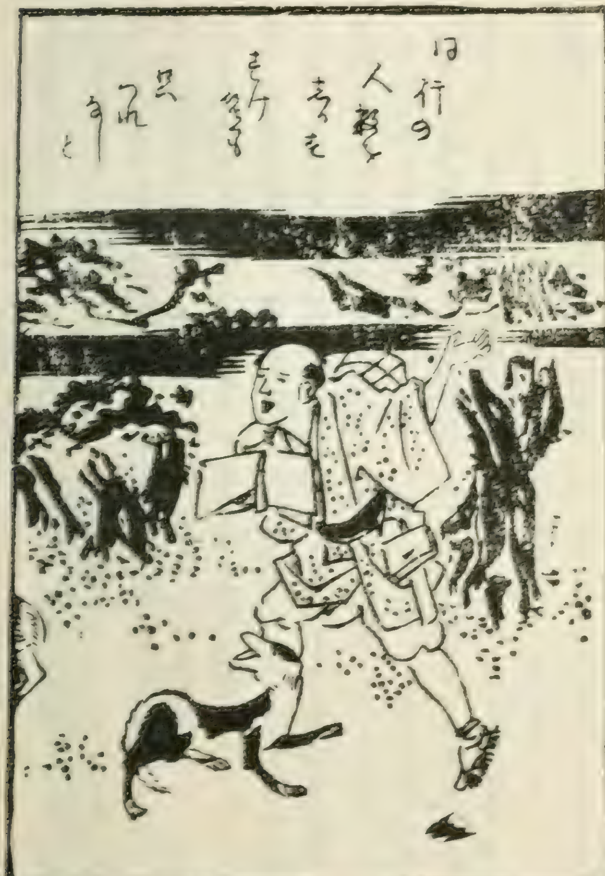
りも書狀參り申候。早速貴公御噂もいたし置候事故、追付貴宅へ同道參上可致候間、右御案內申入置候。

巳上。ごま汁「コリヤどうぢやいな。とんとがてんのいかぬ。ノゥ先生、たゞいま朋友どもから、かやうに申こしましたが、定めてこやつ 尊公のお名前をかたつて參つたものと見える。さいはひ追付これへ參るとあれば、ナントおあひなされて、なぐさんでやろぢやござりませぬか。彌「さて〳〵大變なことだ。いやはや橫着なやつもあればあるものだ。しかしわたくしはあひますまい。ごま汁「なんぜ〳〵。彌「イヤどうか先刻から持病の疝氣がおこりました。さやうでなくば、其贋ものいたしかたがござるものぞ、さて〳〵こまつたものだ「ト、おもひがけなく此しぎにおよび、さすがの彌次郞しよげかへりてゐる。ていしゆごま汁をはじめ、みな〳〵せんこくより彌次郞がふるまひ、がてんゆかずとおもひし所、さてはと心づき、こいつばけの皮をあらはしてくれんと、たがひにそでをひきあうて」ちやが丸「なんと先生、コリヤおもしろいことができました。御不快ではござりませうが、ぜひそのにせものには、おあひなさるがようござりませう。彌「ハテさてこまつたことをおつしやる。たれ安「イヤ時に先生のおたくは、江戶表ではどこもとでござりますな。彌「さればどこでかござつた。ヲ、それ〳〵鳥羽か、ふしみか、淀竹田。かゆき「やまざきのわたしをこえて、與市兵衞とお尋あれか。おきやアがれ。ハヽヽヽ。ごま汁「イヤたしかあなたがたのお笠に、江戶神田八丁堀、彌次郞兵衞とかきつけてありをつたが、その彌次郞兵衞さまといふは、たれさんの事ぢやいな。彌「ハアきいたやうな名だが、だれでかあつた。ヲ、きいたはずだ。わしが實名を彌次郞兵衞といひやす。ごま汁「ハ、アつねにやまゐらぬ、ちよつ〳〵とまゐらぬ、彌次郞兵衞でござるといふは、あなたのことであつたか。彌「さやうさやう。ちやが丸「ときに彌次郞兵衞先生、そのにせものの一九を、いんまつれてこまいかい。彌「イヤわしはもう出立いたさう。ごま汁「なんぜ今ごろ何時ぢやとおもうて、もう四ツぢやがな。彌「さればの事、わしが疝氣はかはつたことで、此やうにかしこまつてばかりをると、だん〳〵わるくなる。いつも夜分そとをあるいて冷さへすりや、ぢきによくなるから。ごま汁「ハヽア それで今立うといふのか。さうさんせ〳〵。たとへこなさんがゐようというても、ここにやもうおきやせんのぢや。はやう

出ていかんせ。ようも人の名をかたつてだまさんしたの。彌「ナニかたつたとほり　ごふ汁」ハテかたつたわいな。ほんまの十返舎先生は名古屋の川並連中から状がついてきてありや違ひはないがな。たれ安「はじめからこなさんの不都合たら／＼、こないなことであらうとおもうた。こちからほからかし出されぬうちに、ちやつ／＼と出ていかんせ。彌「なんだほかし出す。コリヤおもしろい。北「コレサ彌次さん、りきんでもはじまらねへ。せんてへおめへのおもひつきが悪い。サア爰を出てどこぞ木賃にでもとまりやせう。コリヤアどなたも眞平御めんなさりやし〳〵ト、北八がだんだんのわびごとに、ていしゆは、はらはたてどもをかしさも半分、みな／＼このふたりがはう／＼のていにて、そこ／＼にしたくし出行なりを見おくり、家内のものどもも手をうち

たゝき、どつ／＼と云ふ彌次郎は、しいうふくれづらしてりきみかへり出ゆく、をかしさ、北八あとにしたがひ、

いとはまじとほり一ぺん旅の恥
かきすてゝゆくあふぎたんざく



かくよみてあとはわらひをもよほし出かけたれども、はや亥の刻すぎたると見え、家並に戸を閉てひそまりかへり、いづれを旅籠屋とも見えわかたず、とまるべき方もなくして、うか／＼とた

ごり行ほどに、あはや軒下の犬どもがおきたちて吼かゝれば、彌次郎兵衛きよろ／＼して、「エ、このちくしやうめらアわるくふざきやアがる（ト、石ころをひろひてうちつくれば、なほ／＼犬はおこりたちてとりまく。）北「かまひなさんな、犬までがばかにしやアがる。ヲヤ彌次さんおつな手つきをして、おめへ何をする。彌「イヤ犬にとりまかれたときは、宙へ虎といふ文字をかいて見せると、犬がにげるといふことだから、さつきからかいてゐるが、ねつからにげやアがらぬ。こいつらアみんな無筆の犬ださうな。シツシ／＼（ト、どうやらかうやらおひちらかして、ゆくともなしに思はずこのまちを出はなれて、）彌「コリヤつまらねへものだ。まゝよ北八夜どほしあるかうぢやアねへか。きついこたアねへ。やらかせ／＼。北「おめへとんだ事をいふ。まだ九つにやアなるめへ。又どこぞへ泊りてへものだ。彌「それだとつて今頃におきてゐる内はなし。イヤあるぞ／＼。遥向うに火が見える。アノ火を目あてにいつて宿をたのまう。北「ヲヽサそれがいゝ／＼。しかし挑灯の火ぢやアねへか。彌「とんだことをいふ。戸のすき間よりもれる火だものを。北「ほんに家のうちでたく火だ。なんでも是非あそこをたのんでとまりやせう



、あしにまかせていそぎ行。やがてそこに近づきたるに、かの目あての火は、おのれとだん／＼先へ、あゆみ出して行ていに驚き、）彌「ヤア／＼／＼あの家がどうかあるいて行やうだ。北「ほんになアこいつはをかしい。彌「イヤをかしくない。きみがわるい。どこの國にか、家があるくといふは只事ぢやアねへ。北「ナニサこれも赤坂の泊りぐらゐで、みんな狐めがすることだらう。よわみを見せるとなほつきあがりがする。構ふこたアねへ、さつ／＼とあよびなせへ（ト、わざとりきみかへつて、足ばやにくだんの火におひつき、くらまぎれにすかしみれば、いざりの車なり。小屋のうちにて火をたき、ちやをわかしながら車をおしてゆくのなり。ふたりはをかしくこゝをすぎゆくに、折ふし月は出たれども、くさ木もねぶるま夜中のうそさみしさ、後にもさきにも只ふたり、うはべはがまんにつよばつても、こゝろはいたつてのおくびやうもの、こは／＼たどりゆくおとより一人來るもの有。彌次郎ふりかへり見れば小山の如き大をとこ、長わきざしをこしによこたへ來るは、たゞものならず。我々をめがけつけきたるならんと、北八にさゝやきて、）彌「コウあとからをかしなやつがついてくる。ちといそいでやらかさう（ト、あしばやにはしればあとの男も又はしる。）北「まちなよ。呑口がはずれさうだ（ト、小べんをすれば、その男もたちどまりまつてゐるゆゑ、彌次郎こゑをかけ、）「モシおめへ今ごろどこへお出なさる（ト、こはごはいへば、かのをとこぞんじのほか、やさしきものいひにて、）「ハイ／＼わたしは松坂へもどりをるものぢやがな、夜さりひとりこはうて／＼、モどうしよいなとおもひをつた所へ、おまいがたが通らんすゆゑ、コリヤよいつれぢやと、あとからおふたりをこゝろだよりにきんじたわいな。北「イヤおめへ、なりには似合ぬよわいねを出しなさる。そしてそんな長いやつをさしてゐながら。かの男「ハ、ア是かいな。コリヤあとでひらうてきた竹ぎれぢやわいな（ト、こしからぬいてつゑについてゆく。）彌「ハヽヽヽわきざしではねへの。わつちらア又、おめへがこはくて／＼、さつきにから、コリヤひよんなやつに見こまれたと思つたが、マアおめへおくびやうもので、わつちらもおちついた。北「もう／＼これから三人といふものだから大丈夫だ。男「イヤ／＼このさきにとつとえらいことがあるがな。彌「なにがえらい。男「きかんせ。わしやけふ江戸橋までいてかへりに、きつうおそなつてな、いんまのさきこの松原にきをつたとこが、なんぢややら向うにおほきな白いものがたつ

てゐをつて、それがあつちやへいたりこつちやへきたり、ぶうらり〳〵。もう〳〵〳〵わしやこはうて、コリヤしぬかとおもうたわいな。そぢやものどうして向うへいかれるもので、コリヤならんわいと、あともどりして、どうぞよいつれがほしいとおもひをつたとこへ、おまへがたにいきあうたのぢやわいな。彌「エヽそのしろい大きなものがゐたといふはどこらに。男「イヤ直きにこのさきぢやわいな。北「エヽなにが出るものだ。おいらが先へゆかう。おれについて來な(ト、打つれてこの松原を一丁斗も行たる時、かの男)「アレ〳〵向うに。アヽコリアたまらぬ〳〵(ト、がた〳〵ふるへる。二人もあやしく、はるか向うを月あかりにすかし見れば、何ともわからぬしろき物およそ一丈ばかりも高く、かい道一ぱいにひろがり、たつてゐるやうす。是はなんだらうとさきへもすゝまず、たち止り見れば、又きゆるやうに、はつたりなくなるかと見れば、又すつくりとたち、大きくなつたりちひさくなつたり、その形わからず。)彌「マアなんだらう。北「すごがねへから亡魂にちげへはねへ。男「アヽアレあれぢやもの。どうしてさきへいかれましよいな。彌「しやうたいがわからにやア猶きみがわりい。コリヤいかれぬあとへもどらう。男「わしもおまへがたをたよりに、又さんじたが、どうも怖うていかれんわい。あとへ戻つて又つれの人が出來をつたら、又爰迄こうわいな。二三度もそないに、いたりもどつたりしをつたら、ちやうど夜があけやうわいな。彌「なんでも白裝束だから、何ぞの亡魂にちげへはねへ。北「アレアレ青い火が見える。男「エヽどうかこつちへきをるやうぢや。彌「コリヤどうしよう。とても先へはいかれぬ〳〵(ト、三人ながらいろ青ざめてがた〳〵ふるふ。折から向うより人の來るとみえ、)うた「戀の重荷をナ、つんだらおまにへ、いく駄あろやらしれぬくい。ナアンアエ(ト、うたひながら來るは、助郷の人足四五人。)彌「モシ〳〵おめへがたアどつから來なさつた。人そく「ハアわしらア此の近在ぢやが、役にあたりをつて、津までいきをるのぢやわいな。彌「ソリヤアいゝが、こゝへはどうしてきなさつた。人そく「ハテこな人は其役で津へいくのぢやといふのに。彌「たゞしおまへがたも幽靈ぢやアねへか。どうも人間なら爰迄いきてこようはずがない。人そく「なにいはんすやら、ねからはからわからんわい。北「イヤむかうに化ものがゐるのに、どうしておめへがたアそのまへを、とほつて來なさつたといふ事さ。人足「コリ

ヤこなさんたちは、三渡の藤九郎狐がいこいたのぢやな。ハヽヽヽ。北「ナニサむかうを見なせへ。人そく「むこに何がゐるぞい。北「アノ白いものがアレアレ。人そく「しろいものとはあれか／＼。ありや道なかで、おまのくつやわらうぢがもえてをるが、其煙が月にうつつて白なつて見えるのぢやわいな。彌「ハハアさうかハ、、、。コリヤ有がたうござりやす（ト、人そくにわかれて、三人ともほつとためいきをつぎ打わらひつゝ、やがてその所にたどりつき見るに、成程わらぢくつなどをつみかさねて、火をつけもやしたるにて、其けぶりしろくたちのぼり見えたるなり。此ところをすぎて松坂にいたり、まだ夜ふかければ、道づれのかの男をたのみ、ねるばかりのことなれば、あたりまへのはたごを出すもつひえなりと、町の入口にきちんやどをせわしてもらひ、そこにとまりて一夜をこそはあかしける。）かくて月落鳥なきて、時の鐘明六ツを告わたるに、彌次郎北八はやくもおきいで、此所を立出るとて、

　鳶も輪になりて舞ふ日ぞたび人の
　　をどり出たる松坂のやど

右のかた小山の薬師を打すぎ、櫛田といふにいたる。こゝにおかん、おもんといへる二軒の茶屋あり。餅の名物なり。

　旅人はいづれにこゝろうつるやと
　　おもんおかんが賣れる焼もち

それより祓川を打わたり、齋宮をすぎて、明星が茶屋に休みたるとき、（こゝに上がたものと見えて、はでな大じまの引まはしをきて、帳めんとふろしきづつみをせおひたる男、馬のねをつけてゐたりけるが、馬士「モシ／＼おまへがたア、其荷をつけて、おひとり此だんなと、二はうくわうじんにのらんせんかいな。上がた「おまいがたもおほかた參宮ぢやあろ。わしも古市まで掛とりに行さかい、一所に乗なされ、話もてつこわいな。彌「いかさま、ゆうべの夜道で大つかれだ。北八おらアのつてゆくぞ。北「そんなら此荷をつけてもらはう（ト、此所にて馬のさうだんができ、上がた者と彌次郎と二はうくわうじんにて出かける。）馬「ヒイン／＼。上がた「おまいがたア江戸衆ぢやあろな。彌「左樣さ。上方「えどはえいとこぢやが、わしや去年いてえらいめにあうたがな。アノ江戸に似合ん、どこへいても、手水場が、とつともうえらいむさくろしうて／＼、わしや百日ほどをる内、とんと手水にいたことがないがな。それから江戸を立て、鈴が森たらいふとこへ來て、ヤレ嬉しや。こゝでこそ小用してこまそと、海の中へ、ためた

めた小用を、一氣に三斗八升ばかりしをつたが、えらうよかつた。あしこは奇麗で、えらいおつきな小用擔であつたわいな。ハヽヽヽ。彌「京では小便と菜と、とつけへこにするといふこだから、小便も大切なもんだに、おめへ海の中へ惜い事をした。その三斗八升でとりけへたら、菜が馬に五駄や六駄はくるだらうに。それだから京では屁をひるにも、出さうになると、ちやつとうらの畑へかけていつて、はえてあるだいこや菜のうへへ屁をひりかけるといふことだが、なるほど是もこやしになるだらう。上方「さうぢやわいな。其屁をひりかけた菜をよう刻んで、土にませて壁をぬりをるがな。京ではその土をへなつちといふわいな。彌「そうてへ京といふとこはあたじけねへ所よ。めへどわつちがいつた時分は、三月で花見のさい中、てん〲に幕をうつて、けつこうな高蒔繪の重詰なんどを取ちらした所はいゝが、その重のうちに何があるとおもへば、かくやへの香のものに、さらずの煮たやつはおそれる〲。上方「イヤそれよりかおえどの衆が、吉原のさくらはえらいと、いかう自慢せらるゝさかいで、わしやわざ〲吉原へいて見たが、なんのさくらはありやせんがな。彌「そりやおめへいつごろいきなすつた。上方「わしがいたは、たしか十月時分。彌「なんの十月さくらがあつてたまるものか。上方「ハアさうかいな。それでも京の小室やあらし山には、年中さくらがちんとあるがな。彌「そりやア木ばかりだらう。花はねんぢうありやアしめへ。上方「さよぢやわいな。イヤ又えど衆は長唄をようようたうてぢやが、京の宮園や國大夫はまた格別なもんぢやわいな。彌「國太夫といふはどのやうにうたひやす。上方「くに太はかうぢやいな（ト、まじめにこゑをはり上てくに太夫、）上方「やがてわたしがねんあけて、おまへとめうとになるならば、肩を裾へはまだなこと、足を耳にかけてなりともそひませう。（チン〲〲。チンチリツン〲。）彌「イヨ〲おもしろへおもしろへ。ナントわつちに一くさりをしへてくんなさらねへか。上方「そりやゝすいことぢやわいな。わしについてやりなされ（ト、此内、北八は細なが き竹一本をひろひて、上方ものがあまりにかうまんくさいことをいふゆゑ、つゝきおとしてやらんと、馬のあとからねらつてくることをばしらず、上方ものはむちうになり、又國太夫ぶし、）上方「チンチリツン〲チンチン、ほんにをなごはしうねんの、ふかいといふはうそぢやない。しんでも呵

責の夜叉羅刹、杖ふりあげてちやうどうつ(ト、いふ所にて北八手をのばし、かの竹にて、上がたもののあたまをぴつしやり。)上方「ヤアコリヤどやつぢやい。人のあたまへ礫うちをるがな。彌「ハヽヽヽもう一ぺん今の文句を。上方「ほんに女はしうねんの、ふかいといふはうそぢやない。しんでも呵責の夜叉羅刹、つゑふりあげて、(北八うしろより又ぴつしやり。)上方「アイタヽヽ、どやつぢやい、どめつさうな。えらうつぶてうちくさるがな(ト、ふり返りみれども、北八はちやつと、彌次郎がのりたる方の馬のかげにかくれて、一からみえず。)彌「おもしろいがどうもふしがむづかしい。もう一ぺんやつてくんなせへ。上方「ソリヤなんぼでもやるはやるが、又つむりをうちやしよまいか。彌「ナニサわつちが見てゐよう。上方「そんならま一度やりましよかい。しんでもかしやくのやしやらせつ、杖ふりあげてちやうどうつ(ト、こんどは北八うろたへて、彌次郎があたまをぴしやく\/\/\。)彌「アタヽヽ、北八おれだが、コリアどうする。上方「ハアさつきからわしがつむりをうたんしたのも、こなさんぢやな。何としてうたんした。北「わしはうつたおぼえはない。上方「ナニないとはいはしやせんわいな。北「ハテおいらアしらねへ。いけ



しつこいやらうめだわ。上方「やらうとはなんぢやいな。こなさんえらいおとがひたゝかんすな。北「なんだこのべらぼうめ。さつきからそうてへ氣にくはねへやらうめだ。あんまりたはごとつきやアがると、ひきずりおろすぞ。上方「おもしろい。サアおろして見やんせ。北「ヲヽまつさかさまにおつことしてやらう（ト、馬のしりをぴつしやり。馬おどろいてはね上る。）上方「ヤアコリアたまらん。何するのぢや。彌「おれもたまらん。コリヤ／＼どうする／＼。馬士「エヽちくしやうめ、ドウ／＼（ト、此内、しんちや屋あけの原をうちすぎ、小ばたにつく。此所より馬をおりて三人とも茶やにやすむ。上がたもの、北八にむかひて）「コレおまいは、なんとしてわしがつむりをうたんした。彌「もういゝにしなせへ。おたげへに旅ぢやいろ／＼なことがあるもんだ。了簡しなせへ。わつちが一ぱいかひやせう。モシ女中何ぞ肴があらばこけへ一ぱい出してくんな（ト、これよりさかもりとなり、上がた者も、ひとつなる口ゆゑ、だん／＼ゑひがまはりて、）「コリヤえらうゑうたわいな。コレ彌次さんとやら、わしやお前がえらうすきぢやが、此わろはいかんぞや。とんといかんけれど、おまいのつれぢやしよことがない。斯うしよぢやないかいな。これか



ら山田の妙見町にいつしよにとまつて、古市をおごろかいな。わしやあこではえらうきれるがな。千束屋の皷の間、柏屋の松の間、わしが案内するさかい、いかんせんかどうぢやいな（ト、やたらにおほふうなことばかりいふゆゑ、彌次郎こいつをおだてあげてあそぶつもりに、胸さんようして、）彌「きめう〳〵どうぞおとも致してへの。上方「是から世古の松坂やでしたくして、妙見町の藤屋としよぢやないかいな。サア〳〵もういこわいな。彌「ドリヤ出かけやせう（ト、このの酒代をはらひ立出る。此まちの出はなれに、宮川といふ舟わたしに至りて、）

宮川や神に機縁をむすばんと
すくへる水のかげのしらゆふ

是より中河原をうちすぎ、堤世古をうちこえて、山田の町にさしかゝりける。

東海道中膝栗毛五編下終

膝栗毛五編後序

寶暦人のまちがひ日記といふものを作者の意にてつゞるひざくり毛。年々のあゆみのたどりて。今やくも伊勢路にさしかゝりあひ。いでや天照ハ大神の御座のだく一かうんゝ宮ハ同社に伺まり。人皆り路の難ずるハ宮川のわたりあるも。あの山にあそべ。ちゞ樵夫の歌うけ松てそふみを紀。弥のほどらるハ比丘尼れ吏社

めぐりの十返舎一九、感ずるところありて。
あまりのいたとのあかくとかゞ称。かそこの海の起
とさぐりてがいあるこゝぞとこそりつゞまいあろ
なれ肉墨のい薬層まと移するこゝ宝ザ薬称。
その尾まとりつくおうげしまふ實ま宇堂ま、ふも
をとりてひざをきをする伊世街る仰山さん乙
さん仲成しるす



口上

当年中膝栗毛五編目宮迄にて全部

二冊に續て かうしん知 御伊世之事あひ見へ候

いたし 葉其侍る御座候 此次下二冊出板いたし

此次外宮より始め内宮朝熊山古市の

松坂あたりの蔵の宮稲荷の社の宮麿の

ふなあがの風景を始め 其外のうどん屋の万余年の

おくる年の後句ききて 作者の筆枝子の世てき

冊子なき直き屋那刻にあさきに續て 出来いたし

[illegible]大和巡り大坂
京都見物[illegible]衛[illegible]の清水[illegible]
追て[illegible]の[illegible]かぎり[illegible]代中の[illegible]
[illegible]板[illegible]

大坂書林　心斎橋唐物町　河内屋太助
　　　　　本石町二丁目　西村源六
東都同　　通油町　　　　鶴屋喜右衛門
　　　　　同所　　　　　村田屋治郎兵衛

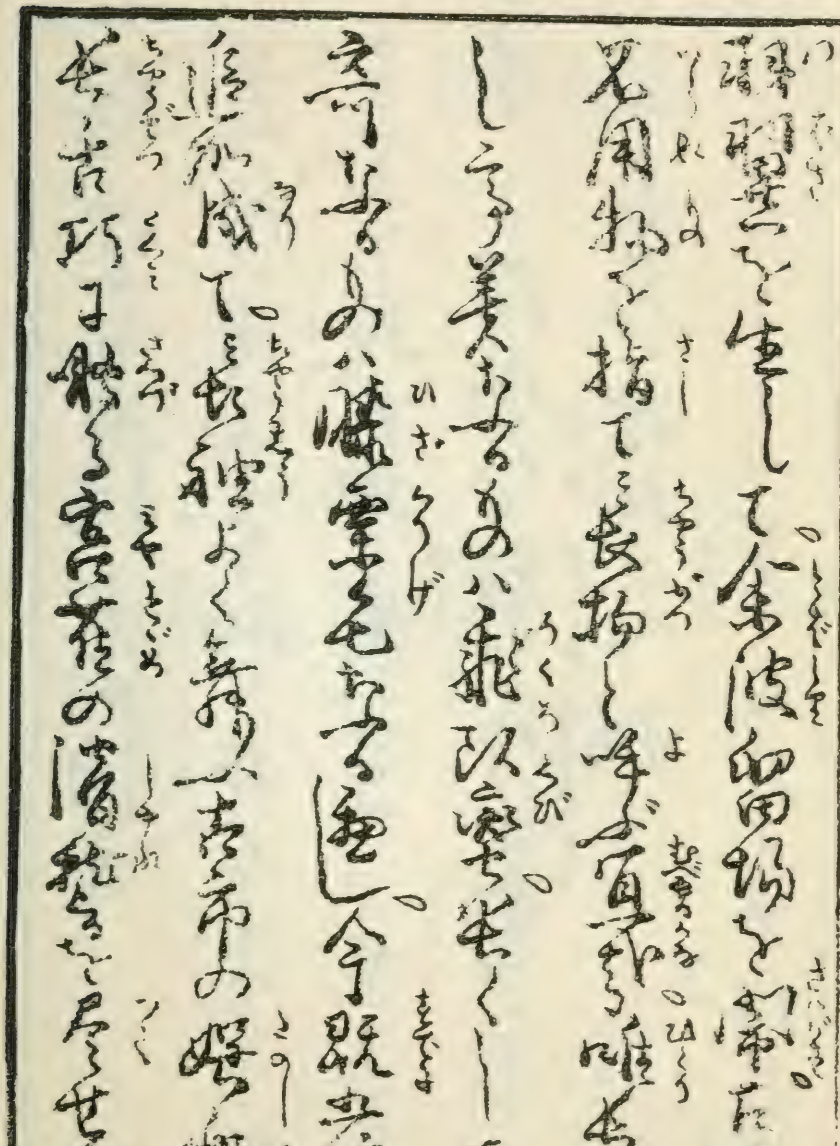
勝軍花三紗追剥

全

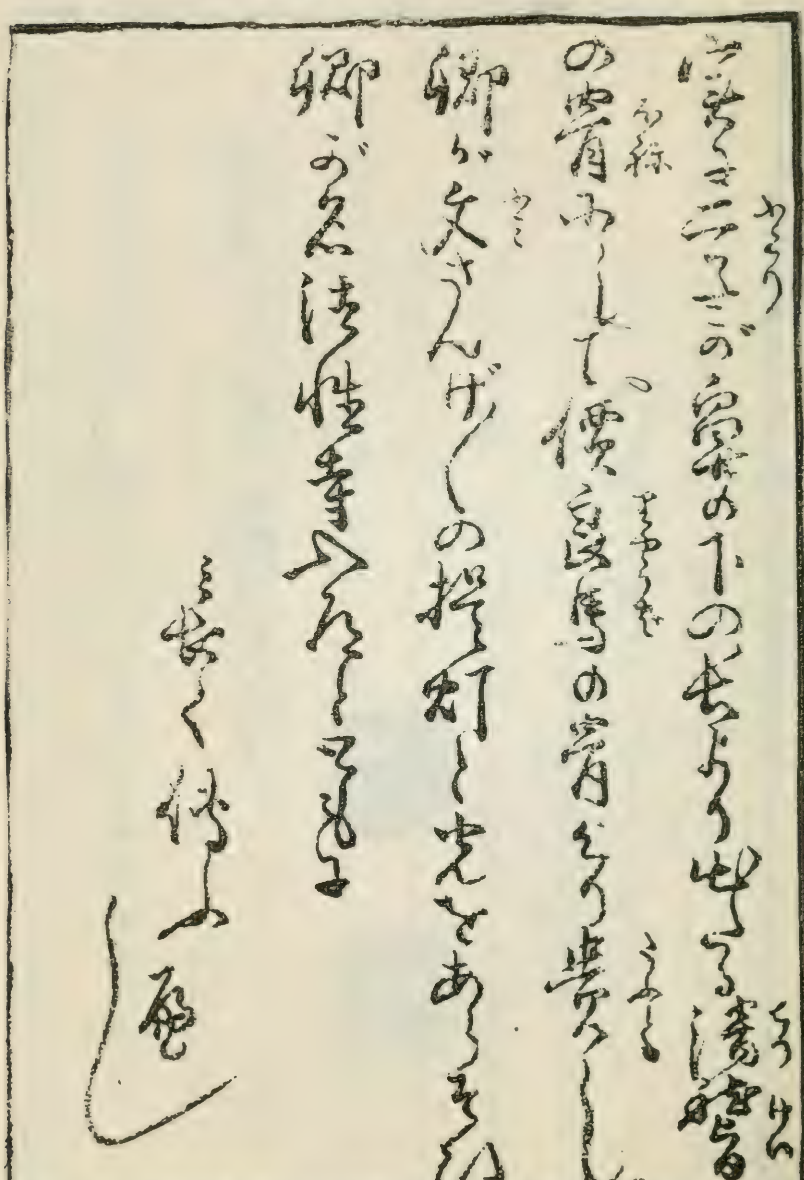
膝栗毛五編追加緒言

荒海の障子に手脚を屈(かゞめ) 乗合の實船に天窓(あたま)を掻(かく)、忠綱が齒むなしく齒磨を費(つひや)し、眉間尺が額いたづらに剃刀(かみそり)を勞す。話長ければ棕櫚箒(しゆろはうき)鯱立(しやちほこだち)をして、災害(わざはひ)はきものにおよび幕長ければ蜜柑の

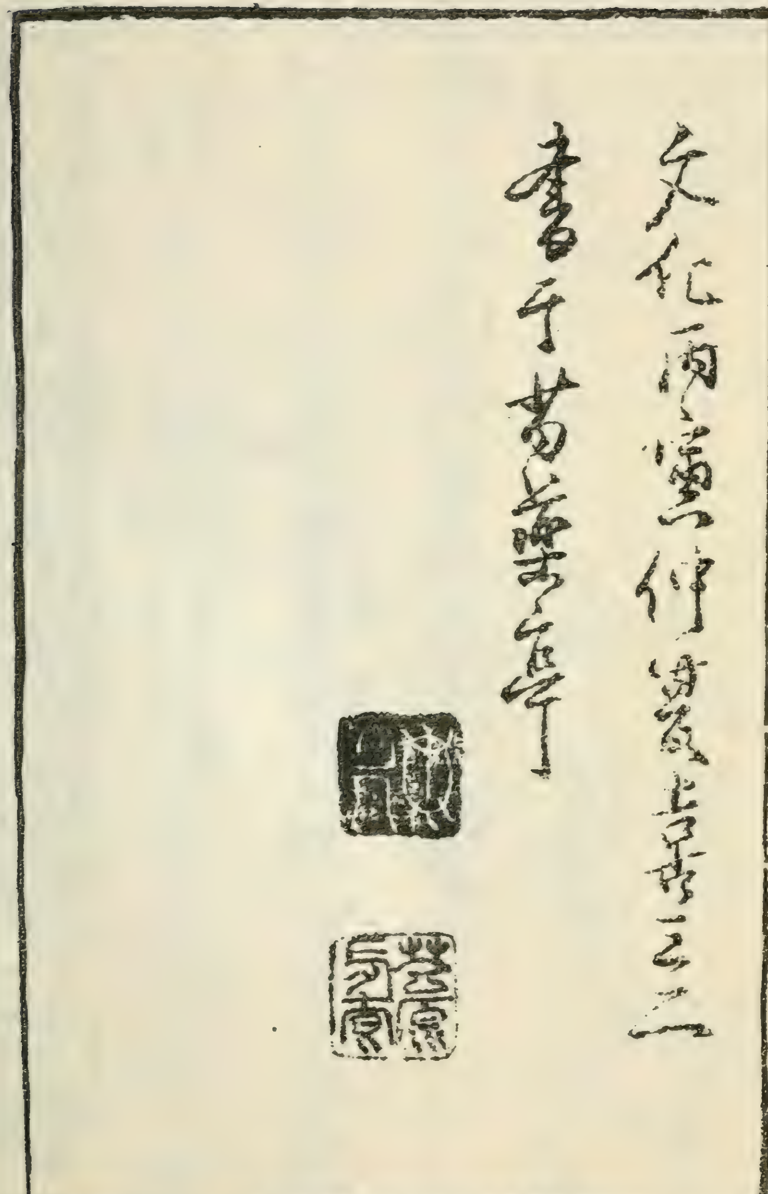
皮羽翼を生じて、余波留場を開。古人不用物を指て長物と呼ぶ宜哉。唯長くして美なるものは飛頭蠻、長くして奇なるものは膝栗毛なるべし。今既五編追加成て長袖よく舞ふ古市の娯樂、長舌巧に囀る宮雀の滑稽を盡せり。



實に二子が鼻の下の長より出たる滑稽の骨にして、價良馬の骨より貴し卿が文さんげ〳〵の提灯と光をあらそひ、卿が名法性寺入道とともに長く傳ふべし。



文化丙寅仲夏喜三二書于芍藥亭

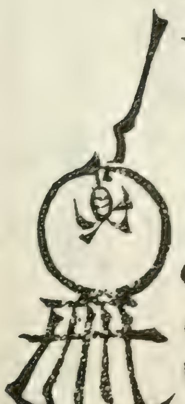


右條は上ずなし
自序もつらぬ　附言

此のさくしや作物ハ思ひをあらはして引き附る
ひるやくそくの作者筆まのって又しるす誹諧
其ノ森北八が喜多和も洒落本出五冊目
近来まれてありしのあるさきち見える八
見ますでの気をおくまでて記し滿尾し
志ちつけよれどほう見物のきびれときてもしかれ
作者三筆への筆の一作と擬まじまこのけより
書肆のかうろうみを祝ちつくしく咲の文ちなり
作者も紙の皮ひろひぞうぞこの手をとりてひと
ふ手人せしあるの二冊ハ筆ふたなる完さらしあり

くりかへして懐紙入候てまいらせ候返向ハよろこひて
おきての正月御れいハそれそれ冊ハ戸部様の
御機嫌よく候おりふし申まいらせ候 猶々まいらせ候しのさまいらせ候
きつハぎらつていつしかまいらせ候しおもとをたのみんで
そのさんぜんおまいりまいらせ候し

御のなかみのりより



東海道中膝栗毛五編追加

十返舎一九著

川崎音頭に、伊勢の山田とうたひしは、和名抄の陽田といへるより出たるにや。此町十二郷ありて、人家九千軒ばかり、商賈甍をならべて、各質素の莊嚴濃にして、神都の風俗おのづから備り、柔和悉鎮の光景は、餘國に異なり、參宮の旅人たえ間なく、繁昌さらにいふばかりなし。彌次郎兵衛北八は、かの上方ものと打つれ、此入口にいたると、兩側家ごとに御師の名を板にかきつけ、用立所といへる看板竹葦のごとく、こゝに袴はおりひつかけたる侍、何人となく馳ちがひて、往來旅人の御師にいたるを迎ふと見えて、一人の侍、彌次郎兵衛にちかづき、おしの手代「モシあなたがたは、いづれへおこしでござりますな。彌「しれた事。太神宮さまへまゐりやす。手代「イヤ太夫はどこれへ。彌「太夫は、竹本義太夫殿さ。手「ハア義太夫と申すは、どこもとぢやいな。彌「その義太といふはな、大坂にては道頓堀北「京は四條、お江戸はふきや町かしにおいて、永らく御評判にあづかりましたる、手代「かたりものはおまい方であつたかいな。北「たはごとぬかすとひつぱたくぞ。手「えらいあこちやな、ハ、、、、。上方もの「ちと休んでいこかいな。北「こゝらはきたねへ所だ。みな御師の雪陣と見えて、用立所とかいてある。彌「おきやアがれハ、、、、。

（二人とも、あるちや屋へはいり、しばらくやすむ。此内むかうより、上方だうしや大ぜいそろひのなり、女まじりにこゑはり上げ）うた「ござれ夜みせは順慶町の、通り筋からツレへうたん町を、ヤアとこさアよいとさア。チ、、〳〵。すけんぞめきは阿波坐のからす。ソリヤサかはい〳〵もヤアレかうしさき、ヤアとこさ、ヨウいとなア、ありやゝこりやゝ、コノなんでもせ、チ、ンチ、ンチン〳〵〳〵〳〵（ト、此ひとむれ通過たるあとから、太々講とみえて、二十人ばかりいづれも御師よりむかひの駕にうちのり來るが、おしの手代さきにたちて、）「サア〳〵〳〵、これぢや〳〵。まづどなたさまも是で御休足なされませ（ト、かごはのこらずちや屋のかどにおろす。此だい〳〵かうは、江戸と見えて、いづれも小袖ぐるみに、みじかいおたちをきめた手やい、めい〳〵かごを出てさしきにとほる。此

内、一人のをとこ、彌次郎を見つけて、〽「イヤこれはどうだ。彌次どの〱きさまも參宮か（ト、こゑかけられて彌次郎びつくりし見れば、町内の米屋の太郎兵衛なり。えどをたつとき、此米やのはらひをせず立たる事なれば、何となく彌次郎しよげかへりて、〽「ハア太郎兵衛さまかよくお出かけなさいました。併し爰であなたのお目にかゝつてはめんぼくない。太郎「ナニサ〱、わしも仲間の太々講で、そのくせ講親といふものだから、據なく出かけましたが、よい所であつた。旅へ出てはとかくづうくに（同國）がなつかしい。おくへ來て一ッぱいやらつし。彌「有がたうございやす。太郎「つれはたれだ。ハヽアまんざらしらぬ顔でもない。ナントきさまたちさいはひのことだ。太々講をがまぬか。それも飛入といやアちつと斗金が出るから、無躾ながらわしらが供になると、一文も入らず、しこたま（大分）ちさうになつてをがまれるといふものだから、どうだらう。彌「それは願つてもない有がたい事でございやす。しかしそれが出來やせうかね。太郎「ハテわしが講親だもの、どうでもなる。マア何にしろおくへ來さつし。彌「ハイさやうなら。モシ上方の、ちとこゝに待てくんなせへ。つれの上方もの「よいわいの、いてこんせ。太郎「サア〱



ふたりともきさつし〳〵（ト、此太郎兵衛にいさなはれ、彌次郎も北八もわらぢをとつておくへ行と、上方者は、ひとりみせさきに酒などのみてまつてゐるうち、おくはだいだいかうの事なれば、御師よりのちさうにて、さいつおさへつ大さわぎのさいちう。又おもてにひとむれのかご、十四五ちやうばかり、これはかみ方のだい〳〵かうと見えて、おしの手代さきにたちて、）かご「ホウよい〳〵。えつこらさつさ〳〵（ト これもおなじく此ちや屋にはいる。）手代「サア〳〵、御案内〳〵。ちや屋の女「おはやうござります。おくへおとほりなさんせいな（ト、此内みな〳〵かごよりおりておくへとほると、すぐにさけさかなをもち出し、だい〳〵かう二くみの大さわぎ、ざしきのしやれいろ〳〵あれども、あまりくだ〳〵しければりやくす。やがて、おくの酒もりもをはりて、サアおたちといふと、二くみのだい〳〵かうが、いつしよになり、どさくさしておくよりいづると、えどぐみの御師の手代、いちはなだちておくよりいで、）「サア〳〵お駕の衆、これへ〳〵。どなたもサアおめしなされませ（ト、あつちこつちとかけまはり、かごにのせる。此うち又かみがたぐみのおしの手代も、おなじくかけまはりて、）「こちらのおかごはこれへ〳〵（ト、よこづけにしてみな〳〵をのせる。末々の太郎兵衛なまゑひとなり、彌次郎が手をとり、）太郎「コウ



彌次公、きさまおれがかごにのつていかねへか。彌「イヤとんだことをおつしやる、太郎「ハテわしは、これからあるくはなぐさみだ。きさましやれにのつていかつし。彌「さやうならへゝゝ。こりやきめう〳〵トヽ、かごにのれば、テアおたちやと両方のかごがいちどきにかきあげ、こんさつして彌次郎がのりたるかごの人そく、とんだまぬけと見えて、上方ぐみのかごの中へまぎれこみたるにきもつかず、さつさとかいて行く。かゝるどさくさまぎれに、人もそれとこゝろづかねば、だん〳〵といそぎゆくほどに、山田のまん中すぢかひといへる所にて、江戸がたの一くみは内宮のおしなるゆゑ、左りのかたへわかれ行く。上方ぐみは外宮のおしにて、此所より右のかたへわかれ、田丸かいだうの岡本太夫のかたにつく。門前のはうき目、もり砂に水うちきよめ、げんくわんにまく打まはして、ちさうのやく



やくはおりはかまに出向へば、むう中みなみらわからず。彌次郎かごを出ておたじ〳〵さしたかごをおりて、げんくわんより打とほる。右に打通り。そこらをうろ〳〵見まはせどこのとき彌次郎兵衛もかごかきのそこうにも、みなしらぬかほばかりなれば、彌「ハテて、上方ぐみの中へまぎれこみ、こゝにきたがてんのいかぬ。モシ〳〵米屋の太郎兵れど、十四五ちやうもあるく、これがどれや衛さまはどれにお出なさいます。そばに居た男

「なんぢやいな。太郎兵衛さんとはこちやしらんわいな。そしておまいは、ねから見ん顔ぢやが、誰(たれ)さんぢやいな。彌「ハイわつちはソレ、太郎兵衛さんの町内のものぢやが、ハテどうかちがつたやうな。北八はどうしたしらん(ト、むしやうに、うろ／＼きよろ／＼とまごつきあるけば、みな／＼きもをつぶし、たがひにそでをひきあうて、にもつなどかたよせ、ささやきあふうち、此講中の内二三人立むかひて、)「コレ／＼こなさんは見なれぬ人ぢやがたれぢやいな。彌「ハイ／＼。かう中「ハテこなわろは何をきよろ／＼さんすぞいな。誰ぢやといふのに。彌「イヤわろは米やの太郎兵衛さんにおめにかかればわかりやす。かう中「ハテそないな人は、こちの講の内にはないもせぬもの。なんぢややら、きみたのわるい人ぢやわいな。御師の手代「ハアこな人は、



あなたがたのおつれではござりませんかいな。かう中「さよぢやわいな。手代「イヤそれはどしたもんぢや。とつとゝ出ていかんせ。道者「えらいへげたれぢやな。かう中「道中じらであろぞいな。ほり出してやらんせ。おたけたいな。彌「エ、そんなにいひなさるこたアねへ。ほり出すとはなんのこつた。とはうもねへ。かう中「ハヽア、おまいのものいひはおえどぢやな。それでよめたわいの。い

んまのさき、お江戸の太々講とひとつ所でおちあうたが、其時おまへの乗りした駕が、こちらの中へまぎれこんでござんしたのぢやな。彌「なるほどさやう。そんならわつちのゆく御師どのは、どこでございやすな。手代「ナニおまいのいく所をたれがしろぞいな。かう中「めん〳〵のゆく御師どのをしらんといふことがあろかいな。コリヤ我わりさまは、わざとこちのなかまへずりこんで、太々講をくひたふししようでな。かう中みな「エヽけたいなやつぢや。天窓のうてんどやいてこまそかい。彌「イヤわるくしやれらア。手めへたちのだい〳〵講、丸つきり喰倒した所が、たかゞしれてある。あんまりやすくしやアがるな。おれひとりで太々講うつて見せよう(ト、どつさりすわれば、おしの手代きもをつぶして、)「ナニおまいがおひとりでかいな。こりやたまげた〳〵。みんなごとおまいが、彌「しれたことよ。多少にやアよるめへ。これでたのみます。(ト、うちがへのぜに二百文、かみに包み出せば、おしの手代二度びつくりし)「ハヽヽ、太々講はやすうて、金十五両も出さんせんけりや、でけんわいな。彌「ナニ是ではなりやせんか。手代「さよぢやさよぢや。彌「太々講がならずば、是で蜜柑かうでもたのみます。かう中「ハヽヽヽ。べつかかうにさんせ、ハヽヽヽ。手代「イヤおどけたおかたじや。ハアよめた。おまいのいく所は、慥に内宮の山荘大夫どのぢやわいの。さつきの手代が、あこのぢやほどに、是から妙見町をすぐに古市のさきへいて尋ねさんせ。彌「ハアさうか。コリヤ有がてへ。ほんにおやかましうございやした。かう中みな〳〵「えらいあほうぢや。ハヽヽ(ト、手を打わらふ。彌次郎はらたてども、せんかたなく〳〵しを〳〵とこの所をたちいづるとて、)

鉢植のだい〳〵かうにあらねども　ちうにぶらりとなりしまちがひ

それより彌次郎兵衛は、もとの筋違に出、妙見町をさして行道すがら、北八はいかゞせしや、米屋太郎兵衛と打つれて、御師の方へ行しか、但しは上方者と妙見町に泊りしかと、おもひわびつゝたどり行ほどに、廣小路にいたると、此所のやどや「モシお泊りかいな。やどをとつてかんせ。彌「コレ妙見町といふは、まだよつぽどございやすかね。やどやのなんな「イエいんま少し此先ぢやわいな。彌「ソノ妙見町に、ア、何屋とかいつた、道づれの上方ものが泊るといつたは。ア、それよ(ト、いろ〳〵にかんがへても、藤屋といふをわすれて、さつぱりおもひ出さず、)

「ハテロへ出るやうな、何でも棚からぶらさがつてゐるやうな名であつた。モシ〳〵妙見町にぶらさがつてゐる宿屋はございやせんか。そこにゐた人「ナニぶらさがつてゐる宿やは、こちやしらんわいの。そないなこというては、しりやせんがな。彌「なるほど、こゝらでたづねてはしれめへ。もちつとさきへいつてたづねやせう（ト、それよりこゝをすぎて、いそぎたどり行ほどに、こゝに萬金丹のかんばん、みやうけん町山原七右衛門といへるを見て、さてこそこゝが妙見町ならんと思ひ、わうらいの人をよびとめて、）彌「モシここらになんでもぶらさがつてゐるやうな名のうちはございやせんかね。（わうらいの人ふしぎさうに、）「なんぢやいな。ぶらさがつてゐる内とは、何やぢやいな。彌「やどやさ。わうらい「その家名わいな。彌「家名をわすれたからのことさ。



わうらい「イヤそれいうてかんせにやアしれぬくいわいの。何ぢやろと、ぶら下つたうちというては、ハヽアむかうの角に、人のたつてをる内へ行いてとうて見やんせ。あこは去年首くゝりがあつて、ぶらさがつたうちぢやさかい。彌「イヤそんなもののぶらさがつたのぢやアございやせん。わうらい「ハテまあ行

てとうてかんせ。あこも宿屋ぢやあろわい。彌「ハイさやうなら(ト、はしり行うち、かの家のかどにたつてゐた人も、どこへかついといつてしまひ、さつぱりしれたくなり、まご〳〵して、あるうちのまへにたちて、)彌「モシ〳〵ちとものがたづねたうございやす。去年首をおくゝりなさつたは、あなたでございやすか。(このうちのていしゆゐあはせ、きもをつぶしとんでいで、)「イヤわしや首つつたことはないがな。彌「そんならどこでございやす。ていしゆ「こゝらにくびつツた内はしらんがな。此二三軒さきに、棚からおちたぼた餅くうて、咽をつめて死だうちがあるが、もしそれぢやないかいな。彌「いかさまなア、なんでも棚からぶらさがつたやうなうちであつた(ト、又二三げんさきへゆき、あるうちのかどにて、)「モシ棚からおちたうちはおめへぢやございやせんか(ト、とんだことをいふ。此うちの女ばうとみえて、)「イヽエナ、わたしがうちは、もとから愛で、ついしか、棚へあげておいたことはおませんわいな。彌「ハア外にはござりやせんか。女「ソリアおまい、きゝちがひぢやあろぞいな。山からおちた内ぢやおませんかいな。それぢやと、相の山の與次郎の小屋が、此間の風で谷へふきおとされたといふことでおますがな、大方それぢやあろいな。彌「イヤそれでもねへが、コリヤアこまつたもんだ。何だかかだか、さつはりわからなくなつて、もともこも、うしなつたやうだ。わつちもさきからたづねあぐんでもう〳〵がつかりとくたびれやした。どうぞ一ぷくのまして下さりやせ(ト、此店さきにこしをかける。ていしゆきのどくさうにたばこぼんをさげて、おくより立いで、)「サア一ぷくあがらんせ。いつたいおまいはどこを尋ねさんすのぢやいな。參宮ぢやあろが、おひとりか。但しはおつれでもおますかいな。彌「さやうさ、道連ともに三人の所、わつちはそのつれにはぐれて、こんな困つたこたアございやせん。てい「イヤそのおふたりのおつれは、おひとりはお江戸らしいが、今おひとりは京のお人で、目のうへに此くらゐな痰瘤のあるおかたぢやおませんかいな。彌「さやう〳〵。てい「それぢやと、こちの内におとまりなされたさかい、すぐにおまいさまのおむかひを出しまじたわいな。彌「そりやほんとうにか。ヤレ〳〵うれしや。そしておめへの所は何屋といひやす。てい「アレ御らんなされ。掛札に藤屋とかいておますがな。彌「ホンニそれ〳〵。たなからぶらさがつたやうだとおもつたが、その藤やよ。

さうしてつれのやつらはどこにおゐやす」ていふ「ソレおくへ、おつれさまがお出だというてかんせへト、此ところをきくより、おくから出る道づれのかみがたもの、とんで来る。)「コリヤようごんした。さだめしそこらうち尋ねさんしたであろ。こちもえらうたづねまうたこつちやないわいの。マア〳〵おくへ。彌「これはおせわになりやすトト、すぐにおくへ行、上がたものと北八は、えどぐみの太々かうについて、御師の方へ行しが、彌次郎兵衛見えざるゆゑ、しらぬ人ばかりにて手もちなく、いろいろきゝ合てもわからず。せんかたなく、この御師の方を出、たづねたくもあてどなく、かねてめうけん町のふぢやへとまらんといひたることもしようちの事なれば、大かたたづねてくるであろと、さてこそこの所にとまり一こまちかけしなり。彌次郎は太々かうのかごがまちがひたるいちぶしどうをものがたり、大わらひとなりける。北八はかみゆひをよびにやり、ひげをそりてゐたりけるが、「まあ〳〵おたけへに別條なくてめでたいめでたい。彌「いやもうとんだ目にあつたといふはおれが事よ。時にかみゆひさん、そのあとでわつちもひとつやらかしてくんなせへ。北「おめへマア湯にはいつてきなせへ。彌「そんならさ



うよ(ト、彌次郎はゆに入にゆく。北八はひげをそりかゝりて、)「ときに髮結さん、おいらがかみはぐつとねをつめていつてくんな。なんだかこつちのはうの髮は、たぼが出て、鬢がおつにながくて、とんだきのきかねへあたまつきだ。そして女の髮もがうせへに大きくいつて、なんのことはねへ、筑摩の鍋かぶりといふものだ。かみゆひ「そのかはりをなごは、とつとえらいきれいでおましよがな。北「きれいはいゝが、たつて小便するにはあやまる。かみ「イヤおえどの女中もおつきなくちをあかんしてあくびさんすには、ねからいろけがさめるがな。北「それでも女郎は又江戸のことだ。えどはいきはりがあるからおもしろい。こつちのは、誰がいつてもおなじことで、ねつからふるといふことがねへから信仰がうすいやうだ。かみ「イヤこちのはうでは、おまいのやうなお方がいかんしてもふらんさかい、それでえいぢやおませんかいな。北「きさま、おれをやすくいふな。コレほんのこつたが。かみ「ヲットあをのかんすと切ますがな。北「イヤきらなくても、がうせへにいてへかみそりだ。かみ「いたいはずぢやわいな。このかみそりはいつやら研だままぢやさかい。北「エヽめつさうな、なせ剃るたびごとに研ねへの。かみ「イヤそないにとぐとかみそりがへるさかい、ハテ人さんのつむりの痛いのは、こちや三年もこらへるがな。北「だうりこそ、いたくて〳〵一本ヅヽぬくやうだ。かみ「なんぼいたいとて、たかで命にさはることはないがな。北「エヽそりやしれたことよ。もう〳〵さかやきはいゝかげんにしてくんな。かみ「おまいさかぞりはきらひかな。北「エヽ其剃刀で逆剃にやられてたまるものか。あたまの皮がむけるだらう。もうそこはいゝから、ぐつと髮をつめていつてくんな。かみ「ハイ〳〵コリヤえらいふけぢや。このふけのとれることがおますがな。北「どうするととれる。かみ「ぼんさまにならんすとえいがな。北「エヽいめへましいことをいふ。かみ「ねはこないでようおますかい。北「イヤ〳〵もつとひつつめてくんな。とかくこつちのはうへくると、髮はへたくそだ。ねをかたくつめてゆふことをしらねへ。無器用な。かみ「さよなら、これではどうでおます(ト、此かみゆひ、これみたかといふほどぐつとねをつめると、さかやきに三ツほどひだができて、目はうへのはうへひきつるくらゐにかたくひつつめられ、北八かみのけがぬけるほどいたけれども、まけをしみにてかほをしかめながら、)「これでよし〳〵。ア、

いゝこゝろもちだ。かみ「ナントそれでよござりましよがな。北「あんまりよすぎてくびがまはらぬやうだ（ト、此内、彌次郎ゆよりあがりくる。かみゆひ）「サアあなた髮なされませんかいな。彌「イヤどうか湯に入たら、ぞく〳〵して風でもひいたやうだ。わつちはマアあしたのことにしやせう。かみ「さよならごきげんよう（ト、出て行。此うち、女膳をもち出めい〳〵へなほす。上方ものは、先刻よりねころびゐたりしがおきなほり）「ドレ飯くをかいな。女「今日はしけでお肴がなにもおませんわいな。彌「これは御ちさう。サア北八どうだ。北「彌次さんわつちが箸はどこにある。彌「エヽ此男は、ソレ膳についてあらア。北「とつてくんな。どうもうつむくことがならねへ。彌「なぜならねへ。ヲヤ〳〵手めへの顔はどうした。目がひきつつて狐つきを見るやうだせ。北「あんまり髮ゆひめが、がうぎにねをつめていやアがつて、アイタヽヽ首をいごかすたびにめり〳〵と髮の毛がぬけるやうだ。上方もの「ソレおまい、お汁がこぼれるわいの。アレお飯の上にお汁わんをおかんすさかい、アレこぼれたわいの。コリヤもうとつとやくたいぢや。北「彌次さんどうぞふいてくんな。彌「いめへましいをとこだ。そしてマアうつむかれぬほどに、なぜそんなにかたくゆはせた。もうちつとゆるくすればいゝに。手めへ大かたかみゆひをいぢめたらうから。上方「そぢやさかいそないなめにあはんしたのぢやあろぞいな。北「イヤもうものをいふさへあたまへひゞけてならぬ。彌次さんどうぞこの難義をたすかるしやうはあるまいか。彌「ドレおれがちつとゆるくしてやらう（ト、かみのねをもつて、いやといふほどぐつとひつたてる。）北「アイタヽヽどうする〳〵。彌「これでよからう。北「アヽちつとくびがまはつてきた。エヽとんだめにあはしやアがつた。

あなどりしむくひは罰があたりまへ
ゆだんのならぬいせのかみゆひ

みづから斯よみて打笑ひつゝ、支度仕廻、はや膳もひけたるに、いづれも打くつろぎて、はなしの序に、京の男「ナントこよひこれから古市へいこかいな。彌「まだ宮めぐりもせぬさきに、もつてへねへやうだが、まゝのかは、やらかしやせう。京の人「いて見やんせ。わしやあこで、年々すてたかねが千や二千のこつちやないさかい、なんぼなとわしがうけこみぢや。サアはやういかんせんかいな。彌「エヽそんならおれも髮月代すればよかつた。京「御亭さん〳〵 このやどのていしゆ ちよと來ておくれんかいな。

「ハイ〜〜御用でおますかいな。京「おえどのお客が、是から山へのぼろといな。（妙見町のつうげんに、古市へゆくを山へのぼるといふ。）てい「よござりましよ。おともしてまゐりましよ。上「アノ牛車楼か千束亭にしよぢやないかいな。北「たいこの間とやらは何屋にありやす。てい「たいこぢやおません。鼓の間の事かいな。ソリヤ千束やでおますがな。上「その千束やがよござりましよ（ト、みな〜〜したくするうち、はや日もくれて、時分はよしと、ていしゆをあんないとして三人とも出かけ行ほどに、此妙見町のうへは、すぐに古市にて、倡家軒をならべ、ひきたつるいせおんどの三味せんいさましく うかれうかれて千束やといへるに至れば、女どもみなみなはしり出で、）「ようござんした。すぐにお二階へ。ふぢやのていしゆ「おつれ申てもよいかな。サア御案内いたしましよ（ト、ていしゆをさきにおの〜〜二階へ上り、座につく、と、）京「ときに彌次さん、かうしよぢやないかいな。おまいがたを、お江戸でえらいおつきな店の、番頭衆にしよぢやないかいな。ふぢや「そないなことがよござりましよ。京「しかし、訛らんしてはあかんわいの。上店といふもんぢやさかい、京談でやらんせにや、工合が悪かろが、どうぢやいな。彌「そんな事はもつてこいだ。すつぱりとわつ



ちが上方でやらかしやせう。コレ／＼をなごしゆ／＼、ちよときておくれんかいの。わしやなんぢややら、とつともうはや、えらう咽がかわくさかい、ちや、ひとつもて來ておくれんか。女「ハイ／＼。彌「ナント京談えらいか／＼、へゝちくしやうめが。上「イヤきよといもんぢや、でけた／＼へト、此女、酒さかなをもち出で、すゝめる。ふぢや始めてだムノ／＼けしはすと、京の人引うけて、上「コレお仲居、おやまさんはどうぢやいな。コノおかたはな、お江戸のえらいお店のばんとうさんぢやさかい、なんぢやあろとおやまさんをありたけ出さんせ。お氣に入と百日も二百日も御逗留で、お金の入事はねからはから、とんとおかまひないお方ぢやわいなア」さよぢやわいな「私が去年お江戸へさんじた時、お店のまへを通りましたが、なるほどえらい大家ぢや。あなたの御支配なさるはうは両替店と見えましたが、これもおつきなお見世でおますわいの。彌「ナニサ、格別えらいみせではないわいの。間口がやつと三十三間あつて、佛の數が三萬三千三百三十三人ぐらしぢやさかい、えらい賑かなことといなア。ふぢ「京のお店は、たしか六條數珠や町であつた。彌「サイノ、わたしがとゝさんかゝさんは、さぞやあんじてゐさん



すぢやあろに、こないにおやまばかり買うて、とつともうえらいやくたいちや、やくたいぢや。女「これい〳〵みなお出んかいな（ト、よびたつるこゑに四五人たち出で、）「どなさんもようござんした。彌「ハヽアどれもえらい出來ぢやな。京「ばんとうさん、盃をちとあつちやへさゝんせ。彌「アイ、もしひとつあげうかい（ト、そのなかで、一ばんうつくしいやつへさして、にこ〳〵してゐる。）北「おいらは、太鼓の間が見たいが、どうだ。京「またたいこの間といはんす。つゞみの間ぢやわいな。女「つゞみの間には、これもおえどのお客さんがたが、子どもしゆよせてをどらせてぢや。アレきかんせ（ト、此内、おくのつゞみの間にて、をどりがはじまると見えて、さみせんのおときこえる。）「チテチン〳〵チ、、、トテチン〳〵。（いせおんどうた、）「すゞ風や、ちりもはらうて木がくれの、池にうかべる月の顔、けはひはさとのいろ〳〵に、ヨイ〳〵ヨイヨイよいやさア。京「イヤアおくで踊をはじめをつたさうぢや。こちもコリヤおもしろなつてきた。ちと、おつきなもんでやろわいな。彌「さうさ、とんだおつにうかれて來た。もう京談も何も、めんだうになつた。ヨイ〳〵ヨイ〳〵よいやさア。上「イヨ〳〵トテチン〳〵〳〵。又おくのうた「めだつうきなもおもしろき、やはらぐうたや三みせんに、足もしどろに立かへり、またもこよひのやくそくは、ヨイ〳〵ヨイ〳〵よいやさ。トテチン〳〵。京「コリヤえらい〳〵。時にと下拙の私めが、相方のおやまさんは、コレおまい名はなんといふぞいの。なんぢや、お辨、ありがたいの。誰あらう、勢州古市千づかやのお辨女郎といふ、美しいかはゆらしい、女の辨才天女様は、忝なくも尊くも、京都千本通り中立賣ひよいと上ル所、邊栗屋與太九郎さまの相方ぢや。ちとねきよらんせんかいの（ト、手をとり引よせる。此京の人は、酒ゑふと、何でもていねいにくどくいふことが癖にて、だん〳〵くだをまきかける。彌次郎は、はじめにわがさかづきをさしたるおやまゆゑ、じぶんのあひかたとおもひゐたりしに、京のをとこ、わがあひかたのやうにいふ故、やつきとして、）彌「コレ京のお客、ソリヤわしがあひかたのおやまさんぢや。京「イヤなにいはんすぞいの。コレ女中のお仲居、おまい名は何というてぢや。女「ハイきんといふわいな。京「ソレ〳〵。勢州古市ちづかやの仲居おきん女郎に、京都千本通り中立賣ひよいと上ル所、邊栗や與太九郎が、先刻内々ひきあうておいた、アノ美しい可愛らしい、辨才天女のおべん女郎といふおやまさん

は、則京都千本通中立賣、彌「エヽやかましい。千本も百本もいるものかへ。何でもから、しよてつぺんにおれがさかづきをしておいた（ト、いふは、えどにては女郎のざしきになほると、すぐにさかづきをさして、あひかたをさだむれども、このへんにてはさやうの事はなく、たゞない〳〵にて、ちや屋の女ばう、あるひは女などにささやきて、あれはたれこれはたれとあひかたをきはめておくゆゑ、京の人、せんこくなかゐへわたりて、此中にていつち上しろものを、じぶんのあひかたとさだめ、のこりを彌次郎北八とおのれがさりやくしてきはめておきしゆゑ、彌次郎はそのことをいつかうしらず、えどのかくにてさかづきをさしたるおやまを、わが相方と思ひゐたりしゆゑ、さてこそこのいさくさおこりたり。なかゐ彌次郎をなだめて、）「これいし、アノおやまさんはな、此人さんの相方、おまいさんは、こちの島田髷さんちやわいな。彌「ばかアいふな。此中で、アノおやまが目についたから、それでおれが盃をさしたにちがひはない。そこで、わしがおやまかいな。京「ハテわるいがてんちやわいの。こなさんは、アノ江戸は、どこぢやいな。彌「えどは神田の八丁堀、とちめんやの彌次郎兵衛さまといつちやアちとひねくつた奴さまだア。京「そのおえどの神田八丁堀とちめんや彌次郎兵衛どのといふ、ひねくつた奴さまが、京都千本通中立うり、ひよいと上ル所、勢州古市ちづかやの彌「エヽ何をぬかしやアがる。へんぐりやの與太九郎もあきれらア。京「イヤ、こゝな、おえど神田八丁ぼり、とちめんやの彌次郎兵衛どの京都千本通中立賣上ル所邊栗屋與太九郎を、京都千本通中立賣上ル所、邊栗屋與太九郎殿といへばまだしも、それを京都千本通中立賣上ル所、邊栗屋與太九郎と、よびずてにさんしたの。そこで以てからに、京都千本通中立うり、彌「エヽ喧しい。よくしやべる野郎だ。北「おらアそんな事より、太鼓の間が見てへ。大鼓の間はどこだ〳〵。女「太鼓の間とは何ぢやいし。鼓の間の事かいな。北「ヲヽその鼓々。京「イヤ鼓ちやあろがなんちやあろが、此邊栗や與太九郎が相方ちやわいの。彌「コレ悪くしやれるな。何でも鼓の間は、おれがのだ。わるい敵役ちやアねへが、いやでもおうでも抱てねる。ふぢ「ハヽヽヽ。あの廣い鼓の間をかいな。彌「ヲヽ廣くても狭くても頓着はねへ。おれがものだ。京「イヤ〳〵イヤ〳〵そりやさゝへんわい。彌「ナニさゝへん事があるものか。誰が何といつても、京都千本通中立賣とちめんや彌次郎兵衛さま

が相方だわ。京「イヤ此おえど神田八丁堀おかえ所、へんぐりや與太九郎の買うたのだや。北「ハヽヽヽヽ。おめへがたは、何をいふやら、どつちがどうだかさつぱりわからなく〱なつた。女「そして、此おかたは、京のおかたおやとしはんしたに、ものいひもいつの間にやら、おえどおやわいな。彌「べらぼうめ。このいそがしいに、京談がいつてゐられるものか。女「あんまりおまいさんおたがいさかうておやきかい、ソレ見さんせ、おやまさんがたは、みなにげていかんしたわいな。彌「いめへましい。もうけへるべい。女「マアようおますがな。ふぢ「モシかうしよかいな。これから柏屋の松の間をおめにかけうわいな。たゞし麻吉へおともしよかいな。彌「いやだ〱。おらアせひけへる〱。ふぢ「ハテよござります。彌「イヤとめやアがるな。いめへましい（ト、すつとたつてかへらうとする。仲居ども立かゝりて、いろいろあいさつし、とめてもとまらず、ふりはなし出かけるところへ、あひかたのおやま初江立いで）「これいし、なんぢやいし。彌「とめてくれ、よせへ〱。初「おまいさんばかり、そないになアかへる〱といはんすがな。わしがお氣にいらんのかいし。彌「イヤさうでもねへが、こゝをはなせ〱。初「わしやいやいし（ト、又かけ出しさうにするをひきとらへ、むりむたいにはおりをぬがせる）彌「イヤ羽折をどうする。よこせ〱（ト、いひながら、又かみいれたばこ入をとられる）彌「コレサ、おらアけへる〱。初「じやうのこはい人さんぢや（ト、いひながら、おびをぐつとひきほどき、きものをぬがせようとする。彌次郎はあかじみたる、ゑつちうふんどしをしめてゐたりしゆゑ、はだかにされてはたまらぬと、大きにへきえきし、きものを両てにおさへて）彌「コレ〱、もうかんにしてくれ。初「そぢやさかい、こゝにゐさんすか。彌「ゐるとも〱。仲「はつえさん、もうかんにんしてやらんせ。ふぢ「サア〱、よござります。これへ〱（ト、彌次郎が手をとり、もとの所に引すゑる）北「ハヽヽヽ。おもしろへ〱。彌次さん斯もあらうか。

　むくつけき客もこよひはもてるなり
　名はふる市のおやまなれども

此一首に、みな〱わらひを催し、藤屋の亭主、仲居どもがそこら取かたづけて、それ〱に座敷を儲け、酔倒れたる上方ものを引たてゝ案内するに、北八も倶に出行ば、あとに彌次郎兵衛ひとり残りたるに、女「サア〱、おまいさんもちとあちらへ。彌「ドレ行やせう。どこだ〱（ト、いひながら、立て行

く。此彌次郎いたつて見えものにて、かのにしめたるごときふんどししめたるが、ことの外きにかゝり、ひよつと見付られたら、はぢのかきあげならんと、ふところのうちにてそつとはづし、れんじのまどよりにはのかたへほふり出し、あとさきを見廻し、人の見ざるにさんどして、仲居の讀に引こひゆく。)かくて夜も更わたるに、おくの間の川さきおんどもおのづからしづまり、旅客のいびきの聲喧く、鐘の音も、はや七ツひゞきて、鶏の聲萬戸にうたひ、夜もしらみかゝる、あかり窓の障子におどろき、起あがりて、目をこすりながら、)眞「サア／＼とうちやいな。おきさんせ。もういのわいな。北「彌次さん日が出たア。けへらねへか(ト、両人彌次郎がねてゐる所へ来りおこす。彌次郎おきて、)「ヤレ／＼、ぐつと、ひとねいりにやらかした。おやま「これいし、けふもゐさんせ。彌「とはうもねへ。けへるけへる(ト、みな／＼したくして出かける。おやまどもおくりて、らう下に出、一人のおやま、れんじまどよりにはのかたをのぞき、)「これいし／＼、アレ見さんせ。庭の松にいもじがかゝつてあるわいなア。彌次郎のあひかた女郎初江、「のいてかんせ。ほんにいやいな。誰ぢやいな。彌「ハヽア、こいつはをかしい。羽衣の松ぢやアねへ。ふんどしかけの松もめづらしい。北「彌次さんおめへのぢやアねへか。初「ホンニそれいし、あのさんのまはしぢやよいかいな(ト、彌次郎がかほを見て笑ふ。彌次郎は宵にれんじよりすてたるふんどし、庭の松の枝に、ひつかゝりて、ぶらさがりゐるををかしく思ひながら、さすがこれともいはれず、へいきにて、)「ナニとはうもねへ。あんなきたねへふんどしを、ナニおいらがするものか。初「そぢやてゝナ、ゆうべわしや、このおきやくさんのきりものをぬがすとてなア、よう見たが、あないな色のまはしぢやあつたわいな。京「ヲヽさうぢやあろぞい。彌「ばかアいはつせへ。おらア木綿ふんどしはきらひだ。いつでも羽二重をしめてゐる。初「ヲホヽヽヽ。うそやの、あれぢやいし。北「いかさまおいらも見おぼえがある。たしかにあれだらう。それが嘘なら、彌次さん、おめへ、今はだかになつて見せなせへ。今朝ア宿入のやつこさまで、ふつてゐるにちがへはねへ。初「さうじやいし、ヲホヽヽヽ。これいし、久介どん、そのまはしはおきやくさんのぢや。とてくだんせ(ト、にはに掃除をしてゐる男を呼かけ、さしづすると、此男竹ばうきの先にて、かのふんどしをつつかけてとり、れんじのまへへぐつとさしいだし、)「さあらば、ふんどしをまゐらさ

う。ソレとらんせ。どうぢやいな。初「ヲヽ〳〵。」北「ハヽヽヽヽ。彌次さん手を出しなせへ。彌「エヽなさけないことをいふ。おれがのぢやアねへといふに、北「そんなら、おめへのをまくつて見なせへ（ト、彌次郎がおびをときにかゝれば、ふりはなしてそのまゝにげ出して行く。）みな〳〵「ヲホヽヽヽ、ワハヽヽヽヽ（ト、大わらひしておくり出る。三人とも此所を立出ると、）彌「エヽいめへましい。北八めがおれに赤耻をかゝしやアがつた。北「松にふんどしのぶらさがつたもめづらしい。

ふんどしをわすれてかへる淺間嶽
萬金たまをふる市の町

かくて、妙見町に立かへりたるに、其日は空のけしきいと長閑なれば、いそぎ内外のみやめぐりせばやと、支度あらましにして立出るに、行ほどなく、初「今度もし古市のあがり口に、はやり見せいだして、めい〳〵小屋に引たつる、いにしへのお杉お玉がおもかげを、うつせし女の二上りてうし。「ペンペラペンペラ、チヤンテン〳〵〳〵〳〵（ト、むしやうにひきたつるうたのしやうがは、何ともわからず。往來の旅人、此女のかほにぜにをなげつくるをそれ〴〵に顔をふりよける。）彌「あつちらのしんざうがゐくぼへ、ぶつつけてやらう（ト、錢二三文なげると、ちやつとよけてあたらず。）「ペンペラペンペラ。」北「ドレおれがあてゝ見せよう。ハアこれはしたり。京「なんとしておまいがたが、どないにほりつけさんしても、てきらがさすもんぢやないわいの。彌「こんどは見なせへ。ハアこれはいな。北「ヲヤ〳〵、さしぐるみやらかしたな。それでもあたらぬ。コリヤしやうがある。あんまりつらがにくい（ト、ちひさな石ころをひろひてなげつくると、かの女はた[illegible]とうけ、なげかへせば、彌次郎のかほへぴつしやり。）彌「アイタヽタヽ。北「ハヽヽヽヽ。こいつは大わらひだ。彌「アヽいてへ〳〵。

とんだめにあひの山とやうちつけし
石かへしたる事ぞをかしき

かくて爰を打すぎ、中の地藏町にいたる。左のかたに、本誓寺といふ勝景の地あり。また寒風といへる名所もあり。五知の如來、中河原さま〴〵しるすに遑なし。夫より牛谷坂道にかゝれば、女乞食どもけはひかざりたるが、往來に錢を乞ふ。又十一二三の女子ども、紙にてはりたる笠のいろどれるをかぶりて、「やてかんせ。おえどさんぢやないかいな。さきな嶋さん、はないろさん、ほかぶりさん、やてかんせ。はふらんせ。彌「やかましい。つくな〳〵。

こつじき「アノいはんすことといな。おえどさんぢや。ちやとくだんせ。「エヽ、ひつばるな。（ソレまくぞ／＼（ト、よいかげんにばら／＼とぜにをはふり川せば、こつじきどもめい／＼ひろひて、）「ようくだんしたや（ト、ひとり／＼禮をいふ。このさきに、又七八才ばかりのをとこの子、白きはちまきをして、そでなしばおりにたちつけなどはきたるが手にさいはひあふぎなどをもちをどる。うしろにあみがさきたる男さゝらをすり／＼、）「ヤレふれ／＼、いすゞ川、ふれや／＼ちはやふる神のおにはのあさ清め、するやさゝらのえいさら／＼、えいさらさ。ソレてんちうぢや、はりひぢぢや。やてかんせ／＼。北「ソリヤやてかんすぞ。しかも四文錢だ。乞「四文ぜにならつりを三文くだんせ。彌「こいつむしのいゝことをいふ。時にこの橋は、うちばしといふのか。京「さよぢや。アレ見さんせ。網でぜにをようけてぢや。北「ドレ／＼（ト、はしの上よりのぞきみれば、竹のさきにあみをつけて、おりよ人のなげ錢をうけとめる。）京「彌次さん、小ぜんがあらばちくとかさんせ（ト、彌次郎がぜにをかりて、さつ／＼とはふりなげると下にはみなうけとめる。）京「えらうおもしろいな。ようけくさる。もちつとほつてこまそかい。コレ北八さん、おまへもちとかさんせ。ソレ又、ほるぞ／＼。ハヽヽヽ、えらい／＼。彌「コレ京のお人、おめへ人のぜにばかりとつてなげる。ちとおめへの錢をもなげなせへ。京「よいわいな。おまへがたの錢ぢやてゝ、わしがぜにぢやてゝ、かはりやせんわいの。彌「それだとつて、あんまりあたじけねへ。京「ナニわしが此まい參宮したときはな、きかんせ、えらいあほぢやあつたわいな。こゝで、錢五貫か十〆ほつたわいの。あんまりつらのにくいほど、ようけをるさかい、何ぢやろとこんどは網やぶつてこまそと、ふところに丁銀が一まいあつたを、ツイほつてこましたら、やつばり網でうけくさつたさかい、コリヤどうぢやいな。丁銀ほつたら、網がやぶりよかと思うたに、ねからたわいぢや。どして、あみにとまりくさつたしらんといふたりや、下にをるやつめが、ソリヤとまるはずぢやと、ぬかしくさる。なぜぢやといふと、ハテ網の目にかねとまるぢやと、えらうわしをへこましくさつたわいの、ハヽヽヽ。サア／＼いこわいな／＼。

なげ錢をあみにうけつゝわうらいの
人をちやにする宇治ばしのもと

是より、内宮一のとりゐより四ッ足の御門、さるがしらの御門をうちすぎ、

御本社にぬかづきたてまつる。是天照皇大神にて、神代よりの神鏡神劔をとつて、鎮座したまふところなりと。

　日にましてひかりてりそふ宮ばしら
　ふきいれたまふ伊勢の神かせ

こゝにあさひの宮、豊の宮よりはじめて、河供屋ふるどのみや、高の宮、土のみや、其外、末社こと〴〵くしるすにいとまなし。風のみやへかゝる道に、みもすそ川といふあり。

　引ずりていく代かあとをたれたまふ
　御衣裳川のながれひさしき

すべて宮めぐりのうちは、自然と感涙肝にめいじて、ありがたさにまじめとなりて、しやれもなくむだもいはねば、しばらくのうちに順拝をはりて、もとの道に立いで、頓て妙見町にかへり、こゝにてかの上がたものと別れ、彌次郎北八両人のみ、藤屋を書だちとして外宮へまゐる。是すなはち豊受太神宮なり。天神七代のはじめ、國常立の尊と申せし御神なり。神璽の宮、寶劔のみや、其外あまたの末社ををがみめぐりて、天の岩戸にのぼりたるに、彌次郎兵衛いかゞしけん、しきりに腹痛てなやみける故、さう〳〵に此所をおりたち、傍に休みて丸薬など用ひ、とかくするに堪がたければ、いそぎ廣小路にいたり宿をからんと、そこ爰を見廻すうち、あるやどやの亭主「モシ〳〵、御とまりぢやおませんかいな。北「アイつれのものが、少し虫がかぶるさうだから、宿をおたのみ申やす。ていしゆ「サアおはいりなさんせ。ソレおなべ、おくへおともせんかいやい。女「ようおつきでおます。北「サア彌次さんあがんなせへ。彌「アイタ、、、。北「エきたねへかほをする。おめへコリヤアなんぞの罰があたつたのだ。彌「ナニサ、罰をくつたおぼえはねへ。大かたけさの飯があたつたのだらう。てい「おまんまもあがりつけなさらんと、あたることがおましよわいな。北「エ、コリヤ、いくぢのねへこつた。サア〳〵おくへおくへ。彌「アイタ、、（ト、北八に、かいはうせられざしきにとほる。ていしゆもにもつをはこび、）「さぞ御なんぎでおましよ。おくすりでもあがりましたか。さいはひわたくし所の妻が、今月臨月でおますがな、きのふからちとすぐれませんので、いんま醫者さまをよびにさんじたが、あなたも見ておもらひなさんせんかいな。彌「それはどうぞおたのみ申やす。てい「かしこまりました（ト、かつ手へたつてゆく。彌次郎はしきりにくるしがるやうすに、）北「どうだ、ゆでも茶でも酒でものみたくはねへか。彌「ばかアいふ

な。アイタヽヽ。むしやうにはらがごろ〳〵なる。北八雪陣はどこにある。たづねてくりや。北「おめへどこにおいた。袂にでもねへか。彌「おはうつくせ。ナニせつちんがたもとにあるもんだ。どこにあるか見てくりやといふことよ。北「ハアさうか。ドレ見てやらう。あつたあつた。アレ緣側のさきにおちてある。彌「まだぬかしやアがる。アイタヽタヽ(ト、やう〳〵せつちんに立よたり、用たしにゆく。此うち、やどやの女かつてより出、)「ハイお醫者樣がおいでたわいな。北「サア〳〵これへ〳〵(ト、此內近所のいしやの弟子と見えてこげちやのもめんもん付に、くろちりめんのかたのひけたるはおりをひつかけたるばうさま、)「エヘン〳〵、これは不順な天氣あひでござる。ドレおみやくを(ト、北八のそばへすわり、北八がみやくを見ようとする。)北「イエ私ではござりませぬ。いしや「ハテ達者な人の脉から見くらべねば、病人のみやくがわからんわいの。先さまお見せなされ(ト、北八がみやくをとりしばらくかんがへ、)「ハヽアなるほど、さきさまはなんともないやうぢや。北「さやうでござります。いしや「お食はとうぢや。北「ハイけさほどめしを三ぜん、汁を三ばいたべました。いしや「さうであろ〳〵。平は大かた一杯ぢやあろ。かへてはまゐるまい。北「さやうでござります。いしや「さうぢやあろ〳〵。此脉體ではどこもなんともない樣ぢや。北「さやうでござります。いしや「ナントようあたりましたらう。およそ醫は意なりと申て、みやくていをもつて勘考いたす所が第一でござる。きづかひない。もはやおいとまいたさう。北「モシ〳〵、病人を御らうじて下さりませ。いしや「ほんにさうぢやあつた。わしはかはつた癖で、とかく病家へまゐつても、病人のみやくを見ることを、どうもわすれてならんわいの。しかし見ずともしれたことぢやが、ついでに見てしんじよ。病人はどれにござる。北「ハイ只今雪陣へまゐつてをります。コレ〳〵、彌次さん、おいしやさまがござつた。はやく出なせへ出なせへ(ト、大きなこゑをすれば、彌次郎雪陣の中から、)「イヤまだ出られぬ。おいしやさまどうぞこれへおいでくださりませ。北「エヽめつさうな。おいしやさまがそこへいかれるものか。無躾なことをいふ。彌「そんなら、今出る出る(ト、やう〳〵せつちんより出れば、いしやしかつぺらしく彌次郎のみやくをみて、)「ハヽア、きこうはコリヤ血のみちぢやわいの。とかく臨月などにはおこるものぢや。彌「イヤ、わたくし孕だ

おぼえはござりませぬ。いしや「ナニ懐胎でない。ハテめんような。イヤコリヤわしが師匠がわるい。廣小路の伊賀越屋からよびにおこしたが、あこの病人は産月ぢやさかい、大かた血のみちかおこつたのぢやあろ。そのつもりでくすりもるがよいと、をしへておこしたが、そりやきこうのことではなかつたわいの。北「さやうでござりませう。血のみちはこゝの内儀のことでござりませう。この男はそれではござりませぬ。いしや「さよぢや。コリヤわしがまちがひぢやわいの。しかしなんなら、きさまもそれにしておかんすと、薬もるにもいつしよにして、めんだうにのうてよいがな。北「なるほど、コリヤおいしやさまのおつしやるとほり、彌次さんおめへも血の道にしておくがいゝね。彌「とんだことをいふ。男にちの道があつてたまるものか。いしや「イヤ〳〵、外の病氣もおもしろかろ。何もわしがけいこのためぢや。いつたいきさまは何病ぢや。彌「わたくしは、先刻からむしがかぶつてなりませぬ。いしや「大かたソリヤ腹のうちでかぶるぢやあろ。彌「ハイおつしやるとほり、腹のそとではござりませぬ。いしや「さうぢやあろ。コレ〳〵女中、供のものにくすりばこおこせというてくだんせ。女「ハイ〳〵かしこまりました。イヤもしおともの人は見えませんわいな。いしや「見えんはずぢや。つれてこんさかい。くすりばこはわしがもてきたわいの（ト、さげてきたふろしきづつみをひらき、くすりばこを取出す。）女「ヲヽをかし。あなたは竹の匕で煎豆もるやうにしてぢやわいな。北「ハアきこえた。藪醫者さまだから、そこで竹のさじを、おつかひなさると見えた。そしてあなたのおくすりぶくろには、繪がかいてござりますが、どういたしたことでござりますね。いしや「イヤおたづねでめんぼくないが、生得手習をいたしたことがないさかい。北「ハア・あなた無宿ぢやな。いしや「さやう〳〵。かいもく字がよめぬ、むしくぢやさかい、それでかやうに薬の名を、ゑにかいておきますぢやて。北「これはおもしろい。さやうならその道成寺の繪は、なんでござります。いしや「コレハ桂枝ぢやて。北「閻魔様は大かた大黄でござりませうが、コノ犬が火にあたつてをるのは。いしや「陳皮〳〵。北「コノ産婦のそばに小便してゐるは。いしや「しれた事、山梔子。北「印判に毛のはへたは。いしや「半夏。「おにが屁をひつてをるのは。「それは 枳殻。北「ハ、、ハおもしろい〳〵。時にお薬は。いしや

「せんじやうつねの如し。しやうがはひとへぎおいれなさい。北「わさびではわるうござりますか。彌「ばかアいふな。これはありがたうござります（ト、此内、なにやらかつてのかた、にはかにさわがしく、人のあしおととん／＼ひゞきて、ていしゆのこゑとして、）「コリヤ／＼、おなべやいおなべやい、とりあげばゞどのへ人をやれ。ソレ久介(きうすけ)はゆをわかせ。はやめはあるか。はやう／＼（ト、さわぎたつうち、こなたには又彌次郎がしきりにはらいたみだして、）「アイタ、、、。北「彌次さんどうした／＼。いしや「コリヤたまらん／＼。病人のそばにはをられぬ（ト、さう／＼にげ出してかへると、かつてのかたには、ヤレとりあげばあさまのお出と、下女のおなべがうろたへて、ばゞあの手をとり、是へ／＼と、彌次郎がふとんかぶりて、ねてゐるところへつれてくると、とりあげばゞ、）「これはしたり。ねてゐさんしてはならんわいの。サア／＼おきさんせおきさんせ（ト、彌次郎を引きずりおこせば、顔をしかめて、）「アイタ、、、。ばゞ「しんばうさんせ、コレそこな人、菰(こも)はどうぢやいな。彌「アイタ／＼。ばゞ「そこちや／＼（ト、このばゞもうろたへたうへ、いつたい目がすこしうとく、うちのさんぷとまちがへ、彌次郎がこしをひつたてひつたて、）「サア／＼みな來さんせんかいな。コレ／＼、こゝへ來て、だれぞこしをだいてくだんせ。さあ／＼はやうはやう（ト、せきたつにぞ、きた八はあきれかへり、をかしく、こりやどうしをるしらんと、とぼけがほで彌次郎がこしをだいてひつたつれば、）彌「コリヤ北八どうする。ア、いてへ／＼。ばゞ「そないな氣のよわいことではならんわいな。ぐつといけまんせ／＼。彌「こゝでいけんでたまるものか。雪陣(せつちん)へ行(いな)てへ。はなした／＼。ばゞ「かうかへいてはならんわいの。彌「それでもこゝではいけむとこゝへ出る。ばゞ「出るからいけまんせといふのぢやわいの。ソレウ、ンウ、ウ、ン／＼、そりやこそもうあたまが出かけた／＼。彌「アイタ、、、。そりや子ではねへ。それをそんなにひつぱらしやんな。ア、コレいてへ／＼（ト、もがくをかまはず、ばゞはぐつとひつぱれば、彌次郎はらをたて、）「エ、このばゞあめ（ト、よこつらをはりとばす。ばゞあきれて、）「この血ちがひは（ト、むしやぶりつく。かゝるさわぎのさいちう、かつてのかたには、はや女ばうの安産と見えて、あか子のなく聲する。）「おぎやア／＼／＼ばゞ「そりやこそ生れた。イヤこゝぢやない。どこぢやいな／＼（ト、うろたへまはるうち、彌次郎もしきりにいたみ、せつちんへはし

りこむ。ていしゆはかつてよりとんで來り、）「コレ／＼ばあさま。さつきにからたづねてをるに、もう生れたわいの。はやう／＼（ト、ばゞをひつたてつれ行ば、かつてのかたにはさゞんさのこゑ、）「めでたい／＼。三國一の玉のやうなをとこの子が生れた（ト、よろこびのこゑともに、ていしゆにこにこして立出で、）「コレハおきやくさまおやかましうございませう。先わたくし妻も安産いたしました（トいふうち、

彌次郎もせつちんより出で、）「さて／＼おめでたい。わたしも今せつちんで、おもいれあんざんしたらば、わすれたやうに心よくなりました。ていしゆ「それはあなたもおめでたい。北「おたげへにめでたい／＼（ト、これよりよろこびの酒くみかはし、とりあげばゞのまちがひやら、なにやらかやらはなしあひて、大わらひとなりける。めでたし／＼。）

道中膝栗毛五編追加終

膝栗毛五編追加漸く出来仕候
然ニ是ハ本外にもれたる所追加にて出さねバならぬ
此下も毎年引つゞき追々出し候て御覧に
さし入申候猶東海道中膝栗毛後篇乃
らちあきのへて上方見物あるべく旅行を続く膝栗毛
毛撰にて追々名づけ問見物ならびに京大坂乃
上方見物乃名所々々委しく滑稽あらはして本編続出の
のおかしき事を加へ尽し追て出板いたし候御求
ほどを願上奉り候

版元　栄邑堂

道中膝栗毛拾遺（ひざくりげ しうゐ）

上巻 [illegible]ごえより京都迄 京都より大坂迄

下巻 大坂玉つくりから長町 路町中見物

十返舎一九著 全二冊近刻

文化三丙寅歳五月發兌

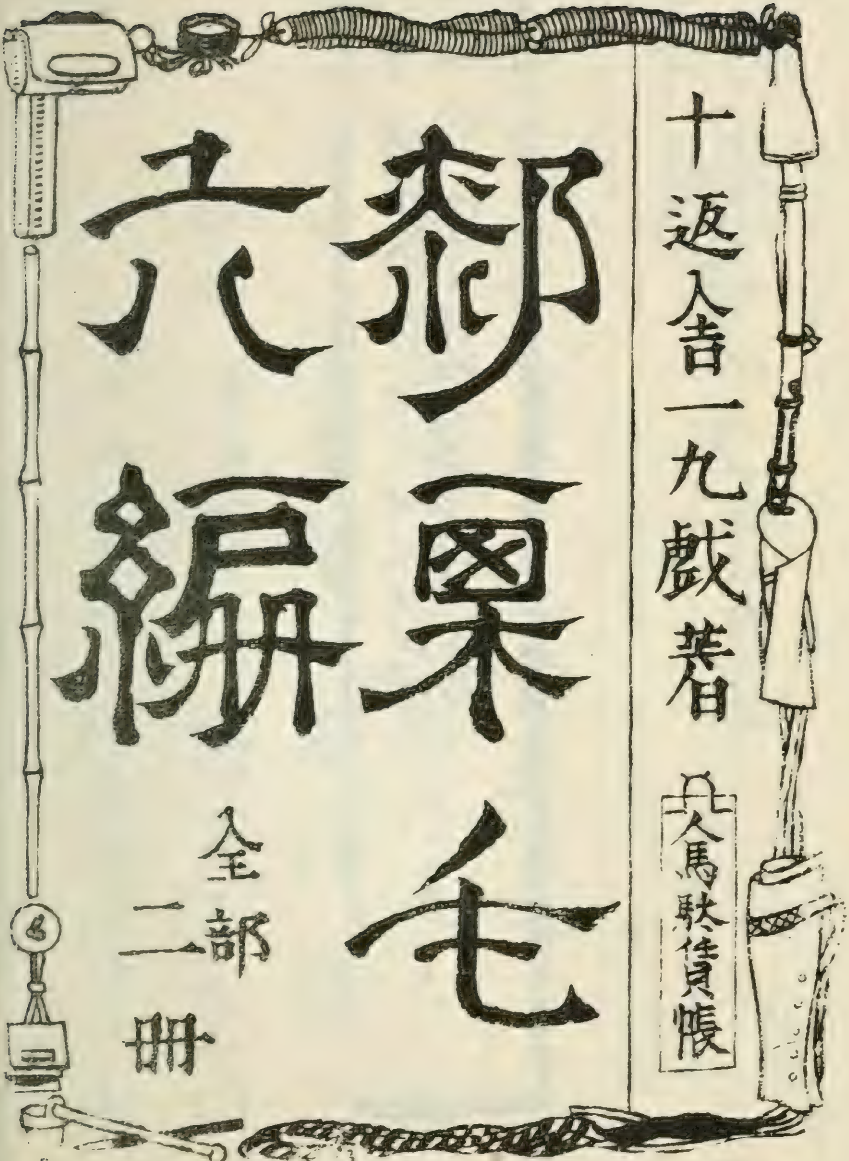
大阪書林 心斎橋南本町 河内屋太助

本石町二丁目 西村源六

東都同 通油町 鶴屋喜右衛門

同所 村田屋治郎兵衛

東海道中膝栗毛六編


十返舎一九戯著
馬駄賃帳
膝栗毛
六編
全部二冊

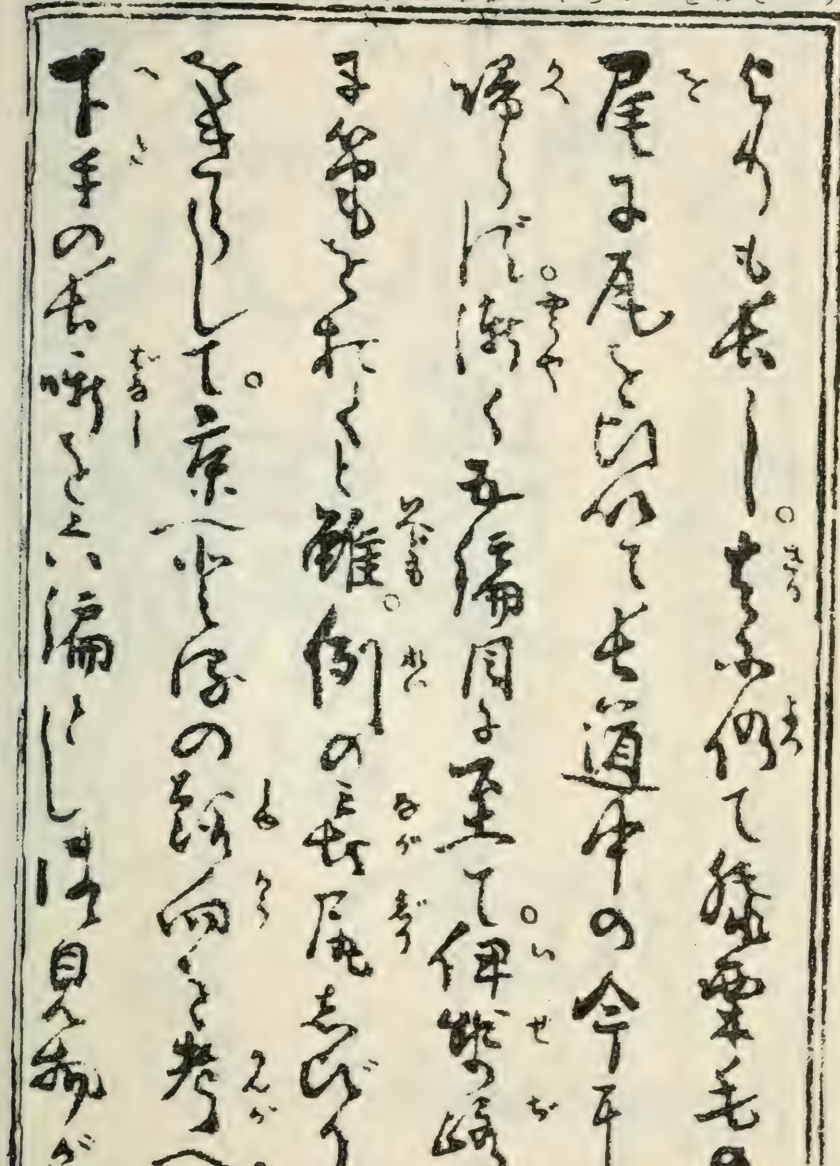
膝栗毛六編序

長いは此作者のながきこと、支躰は心と倶に長く、鼻の下は褌のさがりと倅く長し　酒のあとをひくことは、行堅を飛脚にやりたるよりも長く、借金をひきずる事は淋病やみたる牛の

膝栗毛六編序

長いハ此作者のたけながにて。支躰ハ心と倶に長く。鼻の下ハ褌のさがりと倅く長し　酒のあとをひくこと　ハ堅を飛脚にやりたるよりも長く借金をひきずる事ハ淋病やみたる牛の小便

小便よりも長し。去に仍て膝栗毛の尾に尾をひいて、長道中の今に帰らず、漸く五編目に至て、伊勢路に筆をおくと雖、例の長尻しびりをきらして、京へ登るの趣向を考へ、下手の長噺を六編とし御見物が

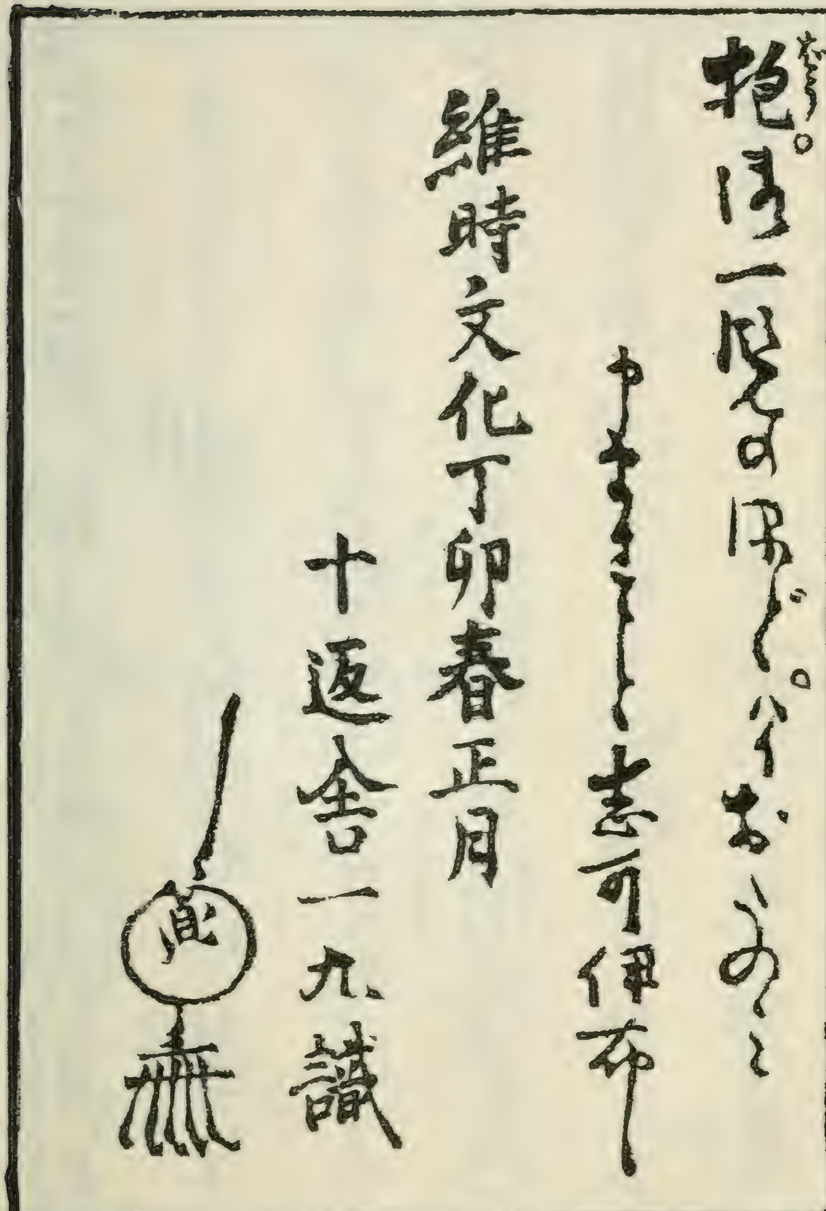


長喜世留の掃除し給ふ紙屑を賣出すも、固より爪の長き無手性、長居はおそれも承知之助、ひとつ長屋の佐次兵衛とは隣同士の彌次郎兵衛、せめて四國は廻らずとも、京大坂はあたりまへ、是だけの所御辛抱

御一覧のほど、ハイおたのみ申ますと志可伊布。

維時文化丁卯春正月

十返舎一九識





附言并凡例

○或人予に謂て曰。此膝栗毛追て著す所ハ嘗て皆拵
初編より五編目伊勢参宮までを大にもてはやされ
たるハ其頃吏花ハ字尽子流行を微辞のむだがよかりし
故にその慰みの八十分あつかざるを却て仕訳し四編
ぶり。右様ハ其下が見る所じやこのつ[illegible]今
自身もこの編を書ふもしかしそれがよし[illegible]ばよし
あるまハ其下が独の書きも。今大阪の事ハ書きてある
此よし人物ハ[illegible]の遺賞ハ事しかんぐ紙をつくし
の雑[illegible]の引きしもそハ人の事を[illegible]さい

恙なくありさん亭。爰に白河関の葉牧のでし。今日
指て立日勝る駒牛繋留ゆふしぬれば稲の葉
の露みたるも菊の花のむつむつも僅かが
のおもやしゆして蕎麦船によりむつも月ぞ。いつハ
まつん物の見もの流のきつの菜も揺 さがよれ。
あつきも様ずりけしや。あちの三益のつゝあるを敷
て下さる園目八すくせとうさぎと見えて及古渋宗
ハ扇子あるけしめさ葉様の津うつ翌日向ふてさ身く。
ここまで編目にゆるがゆ。陽沢北八が撰へ
代をせし而はじ。集邦をとゝきしより日数を経て。

そう〳〵ちかごろへいくわいやく。武人の批判(ひはん)しくあらはし

まありしとヲツト まうせしもさくさ身追従(ついしやう)妙見(めうけん)時

法の流行せしつけ情存知の通。もれども人の

情をあてまきぎる。てんしが金しかし飯縄の稲荷

身がひとつ宮の梳化(きつね)。あつりしとかが三文が知恵も

なされ。俳者のそうわんとかくのごとし

○

さて俳文は書る伊世物語の。大和廻り(やまとめぐり)宗祇の手ころ。

一ツゆきて俳名(かして)のつく宗匠にてやしきる和尚(こしやう)

又求め逃の自然(じねん)滑稽(こつけい)なるもむれ踊りしかば。当時

情けあまつらかくしりしも。以来随とぞせし人

ぐりし　まゐらする

〇大和路より大坂へ出る順路あれども。早[illegible]てあれえ。此京都伏見より舟と乗し大坂を[illegible]

〇京の名所あらく見あるきまするは[illegible]にも祇園清水知恩院大佛さまなどはもとより金閣寺銀閣寺よりの傳があるゆへいつまでもくりかへしてあるきを敷ふは此次の編に京都見物おもう平安通より淀より[illegible]八幡山崎よりを[illegible]しし作田宇治の[illegible]らうしておなじる

此間絵をそへてちかく出板いたし候や上人

甲州鰍澤雙言（かうしうかじかざはあざうち）

十返舎一九作　全二冊

一名晩鐘山寺物語　甲斐の鰍沢身代稚海の虫気をもつて口のよみ続て信楽樹の怪樹虫を云しくあるへし釈迦内素無善神が事跡をまなぶを

東曲　馬子の乳囊（まごのちぶくろ）

同著　全一冊

十返舎が旅行の記往来おもしろきをゑらみ出しおもしろき事をあつめし教訓の話説諸雑書をあつめて

此外おもしろき出板書物しゆく仕候間御求御覧可被下候

道中膝栗毛六編　上編

東都　十返舎一九著

諺に云、旅の恥は書捨てゆく、落書の國所は俯于にとゞまり、おのづから往來同國の人の目を慰め、披り行蝉の笠印は、わざとおのれひとりの心をよろこばしむるも、みな倶に驛路のわざくれ、相宿の木まくらに、結ぶ緣は出雲の帳外、二方くわうじんのとなり同士は、長家附合の外にして、其心々に出る儘をしやべり、あくまでに喰ひ、掛取道連にせざれば晦日の愁にあはずこ米櫃脊負て出ざれば、鼠追ふせわもなく、名にしおふ東男も、薩摩芋に髭を撫、花まだき京女郎も、團子のくしにつぶりをかき、しらぬ火のつくすたはけに欠落して走るあれば、雲非路のみちくさくふ遊山旅ののろつくあり。並松の根にこし打かけて、金毘羅參りの樽をひらき、街道の眞中にひよぐり出して、諸社順拜の鈴口をふる、羇中のありさま、まことに命の洗濯もの、引っぱり、股引草鞋に何國までも、足にまかする雲水のたのしみ、えもいはれずっこゝに東の都、神田の八丁堀邊にすむ、彌次郎兵衞北八といへる二人連のなまけもの、神風や伊勢參宮より足曳のやまと路をまはり、青丹よし奈良街道を經て、山城の宇治にかゝり、こゝより都におもむかんと急ぎけるほどに、やがて伏見の京ばしにいたりけるに、日も西にかたぶき、往來の人足はやく、下り船の人を集る船頭の聲々やかましく、「サア〳〵今出るふねぢや。のらんせんか。大坂の八軒家舟ぢや。のて行かんせんかい。彌「ハヽアこれがかの淀川の夜ふねだな。ナントきた八、京からさきへ見物するつもりで來たが、いつそのこと、此舟にのつて大坂からさきへやらかさうか。北「それもよからう。モシ乘合もありやすか。せんどう「さうはかいの、乘ならはやうのらんせ。いつきに出すさかい。コレ〳〵わらぢといてのらんせ。えらいへげたれぢやな。北「エヽ何をぬかしやアがる。きのつえゝべらぼうだ。彌「コレ北八、手めへのつつみもいつしよに、おれが風呂敷につつんでおかう。北「せんどうさん、コリヤアどけへすわるのだ。せんどう「そこな坊さまのねきへ割込んせ。彌「御めんなせい。ヤアえいとなへト、ふたりながらと

もの間へわりこみすわる。）のり合「コリヤえらうつめくさつた。船頭さん、ふとんひとつかさんせ。せん頭「ソレとらんせ。サア〳〵みなえいかいな。下にゐてくだんせ。苫ふくさかい。あきん人「錢かひなされ。錢はよござりますかな。同「みづからさたうもち〳〵。同「かんざけよござりますかいな。あんばいよしあんばいよし（ト、此うちせんどうも舟にとまをふいてしまひ、さをさし出して、）うた「ふねは追風に帆かけてはしる、われはこがれて身をあせる。ソウレソレ〳〵ソレ。なんぞいコリアえらう空がわるなつた。ふろかしらんわい。のり合「せんどうさん、ゆうべはちうじやう島ぢやあろ。精進が惡いさかい。コリア雨おあろぞいの、ハ、、、、。時にどなたもじようらかいてゐなさらんか。今の内あんじようせんと、後に工合がわる成さかい。京の人「コレおまい、ちと退てかさんせ。粽の上に、いしかつてちやわいな。大坂の人「コリヤ不調法、とかく乘合はおたがひに、何ぢやろと不肖してくれなされ。京「よいわいな。おまい大坂はとこぢやいな。大坂「わしや道頓堀」京「かいな、どとんぼりのしゆは、みな藝子ぢやの、ナントこゝで、何なと一つ、やりなさらんかいな。長崎の人「コリヤよかたい、船中のねぶり目ざましに、あん



たしゆひとつヅツ藝能（げいのう）やらしやつたらよかたい。うんどもは長（なが）さきのもんちやが、能毛川島（のもかにしま）のばうぶら（南瓜）まくらで、かみさし（簪）ぼつきりでもやらうばいよヲ。越後の人「コリヤえいことんし。ゑ！どもはいちご（越後）のもんだが、長崎のあん（兄）にやさがやらしやつたら、わしも國風（くにぶり）のおけさ松坂（まつさか）でゐかたゐべいここと。北八「こいつはおもしろへ。マア長崎のお客からはじめなせへ。長崎の人「よかよか、これしこやらうばい（ト、むしやうに手をうちたゝき、）うた「おまへよかはた（大分色女）わしよふりすてヽ、よんにようしやんすとちぎらんす。コリア、どん／＼（蛙）が飛（とぶ）なら桶かぶせ。それでもとぶならきねおけ／＼。コリヤ／＼／＼なんぢやいな。のり合「イヨ／＼えらでけぢや。越後の人「わしどもやるべい。みんなそれから、トコトン／＼と、はやしてくれさつしやい。長さき「よか／＼合點（がつてん）あらう。（のり合みな／＼手を打たゝき、）トコトントコトン。ゑちごうた「お長（ちよ）な、よつぱ（長久）らかんだ、まめでたかおちよな。のり合みな／＼「トコトン／＼。ゑちごうた「にがた（新潟）一ばん、すゐぎゆ（水牛）のくしを。のり合「トコトントコトン。ゑちごうた「にし（主）にさつくれべいと六百文（もん）で求めた。のり合「トコトン／＼。彌「ハヽヽ、おもしろへ／＼。京「イヤえどのお客に、何（なん）ぞ所望（しよまう）しよぢやないか



い。彌「ソリヤもう琴、三絃、鼓弓なんでもちつとづつはやりやすが、こゝにやアそんなものは、ねへからはじまらねへ。京「おまいのこうせきでは、こわいろが出るぢやあろ。誰なと、えど役者やりなされ。彌「聲色も二十や三十ばかりはつかひやすが、誰にしよう。源之助か三津五郎か、イヤ高麗屋にしやせう。しかしえど役者は、おめへ方にやア、わからねへからつまらねへ。大坂「ハテえいわいの、ひとつやりなされ。彌「みそぢやアねへが、聲色はえどでも一ばんといふ男さ。誰でもうしろをうたふ人があると、すつぱりやつて見せるがなア。京「うしろをうたふとは呼出しのことかいな。わし、やろわい。口三絃ぢや。チ、ツ、ンチンシヤン。うた「これはおえどの堺町や、ふきや町に名も高き、やくしやこわいろはどうちやいな。たれぢやいな。松本の幸四郎でせい。チ、、、、チン。のり合「イヨ松もとオ。彌「まんまとうばひとつた此一巻、是さへありやア出世の手がかり。大願成就かたじけない。京「コリアやくたいぢや。わしやえどに五六年ゐて、此間戻つたわいな。高麗屋はそないなこうせきぢやないもせんもの。大坂「わし、ひとつやろわいの。京うた「是はねつからでけませぬ。さて又つぎの役者、名はたれぢやいな。大坂「やつぱり今のぢや（ト、此大坂ものはえどにもゐて、こわいろもまんさらでなければ、わざともん句もそのまゝにいふ。）まんまとうばひとつた此一くわん、これさへありやア出世の手がかり。大願成就かたじけないトハ無調法。のり合「イヨかうらいやア。京「コリアきよとい〳〵。大坂「おさかのおかたのがほんまぢや。おまいのは高麗やどはきこえんわいな。彌「きこえんはずだ。コリヤア信州松本の者で、幸四郎が弟子の胴四郎がこわいろだ。京「そんなこつちやあろぞいな。ハ、、、、（ト、船中、彌次郎のへこんだのををかしがりどつと笑ふ。彌次はしよげてだんまり。此内舟ははや淀を過て、）彌「ときに北八、とんだことをわすれた。ふねにのるまへに小便すればよかつたものを、例のとほり、舟ではどうもあぶなくて、しにくい。こまつたものだ。コレ船頭さん、ちよつくりふねをつけてもらひてへの。せんどう「あがるのかいの。彌「せうべん〳〵。せんどう「エ、ふねべりへ、ちよ〳〵こなつて、ひよぐらんせ〳〵。彌「それができりやア、いひぶんはねへ。ア、もうもう出さうになつて來た（ト、うろ〳〵する。此彌次郎北八、ともの間とどうの間のさかひの所にゐたるが、どう間、三人前かり

きりにして、十二三のまへがみつれたる、いんきよらしきちいさま、よひより彌次郎北八と、話しなどしてゐたりけるが、せんこくよりふとんかぶりてねころびゐながら、）いんきよ「モシ〳〵おまい小用（せうよう）におこまりなら、ぶしつけながら、わしがしびん、かしてあぎよかいな。コレ〳〵長松（ちやうまつ）よ〳〵。イヤこいつもうねくさつたさうぢや。モシそこらにあろぞいの。だんない、そつちやへもてかんせ。彌「それはありがたうござりやす（ト、くらがりまぎれに、となりをさぐりまはせば、はこ火ばちのうしろに 圖のごとくのどびんあり。上がたにては、これをきびしよといふ。今えどにもたまさか見えたり。彌次郎これをしびんとこゝろえ、とりいだして、）「ハアここにござりやした。こいつはじんじやうなしびんだわへ（ト、もつ手の所をくちとこゝろえ、まへにあてがへども、あななければ、さてはくちにこめてあるせんが、おくのはうへひつこんだものであらうと、ゆびをいれてつきまはすうち、しきりにせうべんがもるやうになり、心はせく、ふたのおちたを



さいはひ、ハ、アこゝにもくちがあると、うへのはうからシウ〳〵と、せうべんをしてしまひ、）「ハイありがたうございやした（ト、となりへそつと、やつておく。いん

きよやがておきなほり、」「コリヤえらうさむなつた。長松、おきて火をともさんかい。酒などやろわい。コレ目イさまさんか〳〵。コリヤやくたいぢや(ト、そこらさぐりまはして、ひばちの火をつけ木にうつし、小ぢやうちんをともして、ふなばりにぶらさげ、きびしよをとつて、)「ヤアコリヤ何ぢやい。ハヽア茶をたくつもりで、水がな入れておきをつたさうぢや(ト、いひつゝ、とまの間からきびしよを出し、彌次郎がしこんだせうべんを川の中へうちあけてしまひ、すぐに樽のさけをあけて、かの火鉢のうへにかけながら、)「モシ、えどのお客、さけひとくち、どうぢやいな。北「コレハおたしなみでございやすね。いんきよ「もうでけたさうぢや(ト、さいろうのにしめなど出し、いんきよ、さかづきに少しついで、)「ドレおかん見ましよかい。イヤこれは、けたいな香がする。ペツ〳〵〳〵、コリヤ酒がわるなつたのか、よもやそぢやあろまい。ひとつ、おまいのんで見てくだんせ(ト、北八へさかづきをさす。)北「ハイ、これはヲトヽヽヽ(ト、引うけてぐつとのんでしまひしが、何とやら、しほばゆきやうにて、へんなにほひのするさけだと、こゝろにおもひながら、むねをわるくして、なでさすり〳〵、)「ハイいたゞきやした。いんきよ「お連のおかたへあげてくだんせ。北「そんなら彌次さん、ソレ(ト、さかづきをまはす。彌次郎はせんこくより、これを見てふしぎにおもひ、なんでもあれは、おれがせうべんをした、しびんだが、それで酒のかんをするといふは、どうしたものだ。ただしは、おれがそさうで、しびんとおもつて小便をしたのか。何にしても、とんだことをしたと、心のうちに、ふたりがかほをしかめるを見て、をかしさこらへられず、それとしらずに、あのうちのさけを、北八がのみたるを、ふきだすほどをかしく、じつとこらへゐたりし所へ、北八さかづきをさしければ、)彌「イヤ、おらア御めんだ。なぜかこよひは酒がのみたくねへ。お盃ばかり。ハイそれへあげませう。いんきよ「あがらんのかいな。北「ナニあびるくらゐさ。彌次さんなぜのまねへ。さけといふと、一ぱんに咽をぐい〳〵するおめへが、コリヤア何でもへんちきだわへ。いんきよ「ハヽアきこえたことがあるわいの。今そこつちやのお方が、くらがりでしびんとまちがへて、このなかへ小用、しこみやさんせんかいの。どうもせうようくさいとおもうたが、コリヤおまい、さうぢやさかい、のまんのぢやあろぞい。北「ソリヤしれやせん。桑名のわたしでも、此人が船の中で小便して、大さわぎをやりました。そのくらへの施

相はしかねん人さ。エヽきたねへ。ゲエイ〳〵。いんきよ「だうりこそ、きびしよに何か一ッぱいあるとおもうたが、わしや又此わろめが、水入れておきをつたと思うて、川へほつたが、どうでもせうようのおどもりが、のこつてあつたものぢやあろぞい。北「とんだこつた。むねがむか〳〵する。いん「アヽこりや、ゲエイ〳〵。長松よ脊中たゝいてたも。アヽむさやの、ゲイエ〳〵。彌「これはおきのどくな。モシ何ぞ薬でもあがりやし。然し小便のあたつたには、何がよからうしらん。モシ〳〵、どなたぞ丸薬でも御所持なら、少し下さいましな。のり合「ハイどうもせうべんのあたつたに、よいくすりはもちませんわい。彌「ソリヤアこまつたものだ。北「彌次さん、苫をちつとまくつてくんな。彌「どうする。北「せうべんを。彌「するのか。北「はくのだわな。彌「ドレふなべりへぐつと顔を出してやらつし。おれがつかまへてゐてやらう。ソレよしか、シイ引〳〵。どうだまだか。エヽ川の中だから犬がゐねへでわりい。北「ナゼ、犬がゐるとどうする。彌「てめへ小便を吐のに、白コイ〳〵〳〵〳〵とよんでやるわ。北「エヽばかアつくす。ゲエイ〳〵。(ト、此うちいんきよは、やう〳〵にはいてしまひ、川の水にうがひし、くちをあらひて、)いん「どうぢや。そつちやのお方、えいかいの。北「どうやらかうやらよくなりやした(ト、くちをそゝぎてまじめなかほ。彌次郎は心のうちにをかしさをかくしてゐる。いんきよけつこうじんと見えて、かくべつはらもたてず、)いん「イヤもうお互に、どえらいめにあうたこつちや。くちなほしにあとの酒やりたいが、かんをするものがなうなつた。どうせうぞいの。長まつ「そしたら、こつちやにあるほんまのしびんで、さけのかんいたしましよかい。いん「ホンニさうぢや。ほんまのしびんのはうがきれいぢや。藤の森でけふ買うてきたまゝで、まだ一度もせうようせんさかい、それでかんせうわい。北「めつさうな、あやまりやすね。彌「ばかアいふな。茶は土瓶のちやがうまし、酒のかんはしびんのことだわ。北「ナニしびんの酒がのめるものか。彌「そんなら、モシ御いんきよさま、やつぱり今のきびしよとやらになさいませ。いん「きびしよは川へほつたわいの。しびんのはうがあたらしいさかい、きれいぢやわいの(ト、樽のさけをしびんにあけて火ばちのうへにかけて、)いん「長松、そこな茶碗おこせ。サア〳〵ほんまのさけぢや。ソレおまいがたさそかい(ト、ちやわんをさしいだ

すと、彌次郎ちやつと引とり、）「いたゞきやせう。いん「虫のえいお人ぢや。肴あぎよかい。煎売あがるかいな。彌「ハイ〳〵、これはなんでござりやす。いん「ソリヤ鯨の、油とつたあとの身ぢやさかい、煎売といふわいな。彌「いゝものでございやすね。サア北八さゝうか（ト、北八へちやわんをまはし、しびんをとりてつぐ。あたらしきしびんときゝて、なるほどだいじもあるまいと一ぱいひきうけて、ぐつとのんでしまひ、）北「小便のまざらぬ酒は、また格別だ。ハイあげやせうか。いん「みな乗合のおしゆへ、ひとつづゝあげてくだんせ。北「さようならおとなりの（ト、つぎにゐたゐちごの人にさす。）ゐ「ヤレふとつ、いたゞくべいとことゝ（ト、ちやわんをとる。北八しびんからつぎにかゝる。）ゐちご「ソリヤ小便のする、やきたごちやアごさらないか。北「ナニ、このしびんは新しいからきれいさ（トついでやれば、ぐつとほして、）ゐちご「ア、えいことん〳〵、サアながさきのあんにやさ、やらつしやるか（ト、ちやわんを廻せば長さきの人うけて、）「ナイ、コリヤ、氣のどんくうなことばよヲ。いん「だんだんそつちやのおかたへあげてくだんせ。長「しからば、あんたへさんじますたい（ト、そのつぎの人へさす。是は病人と見えて、いろのあをざめたるあかだらけの男、えりにわたをまきて、ふとんによりかゝり、もつとも四人まへばかりかりきりにして、かいはうのおやぢと、二人づれにてゐたるが、）「わしやさけはいかんさかい、こなんひとついたゞかんせ（ト、供のおやぢにゆづる。先刻より、しびんのきれいなる事もきゝゐたることなれば、いつかうかまはず。）おやぢ「モシ〳〵はゞかりながら、そのしびんこつちやへくだんせ。手酌にやりましよかい（ト、此おやぢ酒ずきとみえて、つぎけて二はいやらかし、だん〳〵ちやわんを、元へおくりかへせば、彌次郎兵衛とりつぎて、）彌「サア、いんきよさまあげませう。いん「イヤおまい、ま一つ飲でおこさんせ。彌「ハイ〳〵さやうなら、モシ、そのしびんこちらへ　ひやうにんの所のおやぢ「ハイ〳〵それへ（ト、しびんをおくりもどす。北八とつて、彌次郎へなみ〳〵とついでやる。彌次郎ひといきにぐつとのんで、ちやわんをなげだし、）彌「エヽヽヽ、こりやとんだこつた。ゲエイ〳〵。北「彌次さん、どうした。彌「どうした所か、コリヤ酒ぢやアねへ。小べんだ〳〵。おやぢ「ハヽアこれはしたり、そさうしました。わしらかとこの御病人のしびんと、取違へました。サア〳〵酒のはこゝにある。ソレとりかへてくだんせ。北「ハヽヽヽこいつ大でき〳〵。彌「ニヽもう、どうした

らよからう。此くらへなら、おれが小便をのむはまだしも、アノ病人めが、エヽわるくさい。ゲエイ〳〵ペツ〳〵ペツ。北「ハヽヽヽあの病人の顔を見な。瘡と見えて、あたまから首筋のあたりまで、じく〳〵。彌「エヽヽヽもういつてくれるな。咽がさけるやうだ。エヽくるしい。ゲエイ〳〵。北「とかくおめへは小便がたヽる。船ではもう禁便にするがいヽ。そこでいつしゆ、うかんだが、どうだ〳〵。

せうべんを人にのませしそのむくひ
おのれものんでよいきびしよなり

此騒動に、船中おの〳〵ねぶりをさまし、大笑ひとなるうち、ふねははや、ひらかたといへる所ちかくなりたると見え、商ひ船、こゝに漕よせ〳〵。あきん人「めしくらはんかい。酒のまんかい。サア〳〵みなおきくされ。ようふさるやつらぢやなへト、此ふねにつけて、ゑんりよなくとまひきひろげ、わめきたつる。このあきなひぶねは、ものいひがさつにいふを、めいぶつとすること、人のしる所なり。うりことばにかひことばなれば、）のり合「コリヤ飯もてうせい。えいさけがあるかい。北「いかさま、はらがへつた。爰へもめしをたのみます。あきん人「われも飯くうか。ソレくらへ。そつちやのわろはどうぢやいやい、ひもじさうな顔してけつかるが、錢ないかい。彌「イヤ、このべらぼうめら、何をふざきやアがる。のり合「この汁は、もむないかはり、ねからぬるうていかんわい。あき「ぬるかア水まはしてくらひをれ。のり「何ぬかすぞい。そして、此芋も牛房もくさつてけつかる。あき「そのはずぢや。えい所はみなうちで焚てくてしまうたわい。長さきの人「イヤこやつ、ふとうなやつよヲ。いかなちうつるばつてん、そのぬかしやうばい。ゑちごの人「づくにう、にやしてやつくれべいか。あき「ちよこざいぬかさずと、はやう錢おこせやい。コレ、そこなおやぢ、錢どうぢやい。おやぢ「このがんどうめらは、たつた今とりくさつて、コリヤはやういねやい。さだめしおどれがげんさいは、晝は袖乞して生米がなくらふさかい、今ころはふつ〳〵と腹ふくらして、しろい泡ふいてゐよぞい。あき「ヲヽ、われがうちは、大かた四條の蒲鉾ぢやあろ。雨がふりさうぢや。水の出んさき、はやういにくされ。彌「イヤこいつらアいはせておきやア、とはうもねへやつらだ。よこつつらアはりとばすぞ。のり合「コレ〳〵おまい腹たてさんすな。アリヤこゝのあきなひ舟は、あないにものを、ぞんざいにいふのが、名物ちやわいの。彌「それだとつて

あんまりな。あき「ワアイあはうよ〳〵（ト、こぎだしてゆく。）彌「コリヤまちあがれ。あはうたアたれがこつた（ト、ひとりりきんで、おもはずたちあがるひやうしに、のり合のひざをふんで、どつさりこける。）ゐちごの人「アイタ、、、。コリヤわしがぶしやかぶふんだ。のさきの人「うんどもが、べんぷう、よんにようつた。アイタ、、、。彌「コリヤ御めんなせへ（ト、やう〳〵にすわる。）かくてふねは、ひらかたすぎたるころ、雨催ひのそら、俄にくらくなり降りいだし、あはやと見るまに、篠をつく大雨となり、苫をもれば、乘合はうへを下へとさわぎたち、船頭もかくては、はたらき自由ならず。やがて堤に船をこぎよせ、しばらくかかりて見合けるが、こゝは伏見と大坂の半途にして、登り船も下りぶねも、みな落合混雑し、がたびしと岸により



て、今や霽をまちゐたるに、およそ一ッ時あまり過たるとおぼしき頃、漸く雨やみ、雲きれて、月の影、八はた山にさし出たるに、船中おの〳〵いさみたち、彌次郎北八もとまひきあげ、顔さし出して、此けいしよくをながめゐたるが、彌「ハアもう何ン時だらうな。ときに北八、又こまつたことがあるわ

い。雪陣へゆきたくなつた。北「エヽきたねへことばつかりいふ。彌「どうも船ではできぬ。イヤさいはひ、こゝにかかつてゐるうち、ちよつくり土手へあがつて、やらかしてこよう。北「ホンニよその船でも、人が手水にあがるやうすだ。はやくさうしなせへ。イヤわつちもお相伴がしたくなつた。モシ船頭さん、ちよつとあがつて來たいがいゝかねへ。船「用たしにならゝ、はやういてごんせ。わしらが今めしくてしまうと、いつきに船を出すさかい。彌「わらぢはどこだ。北「ナニサはだしであがらう。乘とき足をすゝげばいゝにへト、兩人ふねよりつゝみにあがりて、」彌「ナントいゝ景色だな。どこらでやらかさう。北「ヲツトそこには水溜りがある。もつとそちらへ。アヽなるほどいゝ月だ。

一刻を千金ヅッの相場なら
三十石のよど川の月

かくくちずさみて、おもはず勝景にみとれゐたるが、このうち、岸にかゝりゐたりし船ども、追々漕出すやうすに、北八彌次郎が乘たる舟も、今出ると見えて、船頭ども、もやひ綱をとき、棹さしのべて、ふたりを呼たつるに、いづれのふねにも乘合のうち、土手にあがりたるものども、いちどきにおりたち混雑し、彌次郎北八やう〳〵のことに人をおし分、飛乘たるは、大坂八軒家の登り船なり。（此ふたり、あまりせんどうによびたてられて大きにうろたへ、今までのつて來りし伏見の舟と心得、そのつぎにならびて、かゝりゐたりし、大坂ののぼりふねにとびのりたるが、とまの内くらく、まちがひたるふねとも心付ず、ことさら此ふねにも乘合のうち、つゝみにのぼりたるものも二三人あれば、それらかとおもひて、船中にも、たがひにかほもかたちもしれざれば、これをとがむるものもなく、そのうちふねは出るにまかせ、おの〳〵宵よりはなしつかれたるにや、おし合へし合、たがひにあしをやりちがひとなし、ふしたりけるが、彌次郎北八もくらがりまぎれ、そこらさぐりまはして、手ざはりよくにたればとて、人のふろしきづつみをわがつゝみとこゝろえ、引よせて、すぐにそれをまくらとして、うちふし、それよりはぜんごもしらずたかいびきなり。）去ほどに、船は右にさをさし、ひだりに綱引のぼるに、はやくもやはた山ざきをあとになし、淀堤を打過、夜もあけちかくなりたる頃、伏見にこそは着たりける。苫もる影も白く、鳥の聲告わたるに、船つきたりと、乘合みな〳〵目をさまし立さわげば、北八彌次郎苫打ひらきて、笠ふろしき包を手に引さげ、船頭があゆみ板わたすを、打渡りて岸

にのぼり、ふな宿にいたるに、乘合の人人、つゞいて爰に來るを見れば、見しりたる顔一人もなし。是はふしぎと、そこらうろ〳〵見廻しながら、彌「ナント北八、おいらに酒をのませた隠居どのはどうしたの。北「さればの、そしてアノ長崎ものや越後同者どもは來さうなものだが、大かた爰へよらずにいつたと見える。おいらは、ゆるりと爰で、支度して出かけようさ（ト、もとの伏見についた事、一向にきがつかず、）船やどの女「どなたもおしたく、あぎよかいな。彌「ヲイ爰へ二せん、たのみます。女「ハイ〳〵（ト、たきたてのめしに、八はいとうふのひらをつけてもつて來る。これはふしみのふなやどのおさだまり也。此兩人はじめてなれば、こんなことはしらず、もとより大坂へついたことゝばかり心得、へいきにて、）彌「けふは斯いたぞ。是から長町の分銅河内やとやらいふ宿屋へいつて、あれも大和の初瀬の茶やで、よこした書付の所だから、あそこへとまつて、直に芝居でも見ようぢやアねへか。北「おいらアまた、新町とやらをはやく見てへ。彌「ヲヽそれもまんざらでねへの。アヽアツヽヽヽ、がうてきにあつい汁だ。ベツ〳〵〳〵。（此かたはらにも、ふねあがりの三四人づれ、おなじくしたくをしながら、）「太兵衛さん、おまい虎屋のまんぢうはどうしたぞいの。太「六兵衛さん、きかんせ。けたいなこつちや。きのふわざ〳〵あこへいてかうて來て、とんと大佛屋にわすれたわいの。つれの人「つい一トはしり、いてとてごんせ。兹からわづか十里ほかないもせんもの。太「ハヽヽ、さういうてもくれんがよいハヽヽヽ、（此はなしをきいて、彌次ふしぎさうに、）「モシ、あなた方が、今いひなさつた、とらやといふは、たしか大坂でございやすね。六「さよぢやわいの。彌「その虎屋のまんぢう、わすれたとおつしやつた、大佛屋とやらは、どこでございやす。六「コリヤ新町ばし西詰を南へいくとこぢやわいの。彌「その新町ばし南へいく所迄は、爰からいくらほどございやすね。六「こゝからは十里ぢやわいの。彌「はてなア、大坂は思ひの外ひろい所だ、ノウ北八。北「ナニサいいかげんにきいてゐなせへ。わつちらをひやかすのだわな。爰から十里あつてたまるものか。とはうもねへ。太「イヤおまいは、こゝをどこぢやとおもうてぢや。こゝは伏見の京ばしぢやがな。彌「ナニ伏見だ。コリヤ北八がいふ通、きさまたちやア、ひとをはぐらかすな。おいらアゆうべ、伏見から船にのつて來たのだわな。太「何いはんすやら。桃

山のけつねにがな、つまゝれたもんちやあろぞい。みなこちどいておやんせ。北「のいてゐろもすさまじい。そしておいらを狐つきたアなんのこつた。えどつ子だぞ。つがもねへ（ト、いさくさなかば、此大坂もののつれと見えて、二三人かけ來り、）「なんぢやい〳〵。何せりあうてぢや。そんなことより、こちやどえらいめにあうたわいの。こつとらがつゝみを、船でうしなうたさかい、いんまのさきまで、共せいらくしてをつたが、ねからわからしれんわいの（ト、いふうち、ひとりが彌次郎のかたはらにあるつゝみを見つけ、）「イヤ權介さん〳〵、あこにあるわいの。そぢやさかいわしがいふまいことか。さきへあがつた衆を問うて見やんせといふたぢやないかい。權「ホンニこれぢやわいな（ト、とりにかかれば、彌次郎ちやつとひかへて、）「コリヤ何ひろぐ。此つゝみはおいらがのだわ。權「ナニぬかしくさる。おどれら、やばなことはたらきくさるな。コリヤ見い。ふろしきのはしに、こちの名がかいてあるわい（ト、いはれて彌次郎びつくりし、よく〳〵みれば、じぶんのつゝみでなし。きもをつぶして、）彌「ホンニ、コリヤまちがつた。ソレもどすぞ。おいらがのはどこにある。權「あんだらつくせ。ナニおどれらがつゝみを、たれがしろぞい。彌「こいつはつまらねへ。北八どうした。北「おめへ、おれがのもとつて、一ッ所につゝんで、そばにおいたぢやねへか。どうしておいらがしるものだ。彌「ハテめいような。モシいよいよこゝは、ふし見にちげへねへかね。みな〳〵「ハヽヽヽ、何ぬかしくさるやら。アノ頬見やんせ。けたいなつらぢやな。北「イヤ、こいつらはふてへやつらだ。權「太いもほそいもいるこつちやないわい。たかでおどれらアがんどうぢや。つゝみに別條ないさかい、ゆるしてこます。とつとゝ出ていにくされ。彌「コリヤアとんだめにあふが、さつぱりわからぬ。北八どうしたのだらう。北「されば、わつちもわからぬ。せんてへゆうべは何日だつけ。彌「ムヽかうと、ゆうべあのじぶんに月が出たから、大かた廿四五日あたりだ。北「今月は大か小か。きのふはなんの日だねへ。彌「さればかうと、此間ソレどこでかとまつた時、甲子だといつたちアねへか。北「ソレ〳〵、あの茶飯はうまかつた。彌「ひらの牛房の大きさ、あいつはめづらしい。みな〳〵「ワハヽヽヽ、コリヤどうでも、てきらはほん氣ぢやないわい。ワハヽヽ（ト、はらすぢをよつて大わらひする。この中でも、としばいの太兵衛しば

らくかんがへて。)「ハヽアきこえたことがあるわいの。なるほど、あまりかしこうも見えんわろたちぢやさかい、人のもの、手まへるほどのはたらきは、ありやせんわい。コリヤかうぢや。コレそこなわろたち、ゆうべ伏見からのらんして、途中で船のかゝつたとき、用たしにがな、つゝみへでもあがらんしたことがあろがな。彌「さやうでござりやす。太「ソレ見やんせ。こつとらがのつた船にも、あの時あがりをつた人が大分ありをつたが、やがて船が出るといふと、みなうろたへてのりをつた。其時こなんたちは、下り船とのぼり船をとりちがへて、めんくの乘て來たものでがなあろぞい。北「ホンニさやうでござりやせう。わつちらも船にのつた時は、くらがりではあるし、とりちがへたとはしらず、どうやら居どころも、違うたやうでございやしたが、乘合のことだから、まゝのかはとそれなりに、くたびれまぎれに、ツイねてしまひやして、けさこゝへ來て見りや、乘合の衆のうちに、見しつた顔がひとつもねへは、ふしぎなことだと、いつていやしたのさ。彌「さういへばなるほと、今のさき船のあがり場で、ハテ見たやうな所だとおもひやしたが、見た



はずだ。やつぱり初手のふしみだもの、ハヽヽヽ。必竟それゆゑ、おまへがたのつゝみをわつちらがのだと思つて、麁相いたしやした。北「これでものがさつぱりわかつた。彌「イヤわかるこたアわかつたが、おいらがつゝみはどうしたらう。太「それもわかつてあるわいな。おまいがたの乘らんした、下り船に、包みばかりのこつて、今頃はおさかの八けんやに、ふろしきづつみがうろうろと、おまいがたを、たづねてゐよぞいな。ハヽヽヽ。北「とんだめにあつた。いめへましい。彌「まゝよ、どうするもんだ。かねは胴卷に入れてもつてゐるから、たゞ包は手めへとおれがきがへばかりだ。うつちやつてしまへ。そこらはえどつ子だわ（ト、をしけれどもせんかたなく、これから又ふねにのつて、大坂へたづねにゆくもばかばかしいと、すぐに京へ行つもりに、さうだんきめて立出れば、この人々もそれぞれに、こゝを立出けるに、北八彌次郎きぬけした顔付にて、ぶらりぶらりと京かい道にさしかゝり）



伏見出て淀の車がまたあとへ
まはりまはつて來たは何事

それより伏見のまちを打過、墨染といへる所にさしかゝりけるが、爰はすこしの遊所ありて、軒毎に長簾かけわたしたるうちより、顏のみ雪の如く白く、

青梅の布子に、黒びろうどのはんえりまで、おしろいべた〲つけたる女、はしり出て、彌次郎が袖をとらへ、「もしな、はいりなされ。ちよとあそびんかいな。彌「なんだ、よせへ〱(ト、ふりきれば、又北八をとらへ、)女「おまいさん、どうぢやいな。北「かうぢやいな(ト、べつかこうをする。)女「ヲ、すかん、にちやいやいな。北「いやいなの三郎よじ秀でも、とまらんのだ、エ、はなしやアがれ。女「ヲ、こは(ト、おつぱなしてうちへはいる。)北「ハ、ア、こゝがあとできいたすみぞめだな。

すみぞめのおやまのかほの真白さは
石灰蔵のねずみごろも歟

深草のさとは、家ごとに焼もの、土細工を商ふ見ゆれば、

やきもの丶牛の細工に買ふ人も、
よだれたらして見とれこそすれ

かくて藤のもりにいたりけるに、

稲荷山松のふぐりにかゝれるは
ふどしのさがり藤のもりかな

こゝに、いなりの社をふしをがみつゝ、北「ナント、そこらで一ツぷくやらうぢやアねへか。彌「よからう〱(ト、よしずたこかけたる、ちやゝにはいりて、)彌「ヲヤあまざけがあるの、ばあさん一ッぱいくんな。ばゞ「ハイ〱ぬくうしておぎよわいな。北「コウ彌次さん、こゝのばあさんが、おめへに氣があると見えて、アレこつちばかり見て、をかしな目つきをすらア。彌「ばかアいへ。ばあさんどうだ。はやくくんな。ばゞ「まちつとまつておくれんかいな(ト、いひつつ此ばゞ、彌次郎のかほを見てはなき見てはなきするゆゑ、ふしぎにおもひ、)彌「ばあさん、どうぞしたか。おめへ目がわるいのかね。ばゞ「わしやおまいのかほを見て、いかうかなしうてならんわいな。彌「ソリヤどうして。ばゞ「ワアイ〱。北「こいつはをかしい。ばあさん何がかなしい。ばゞ「わしが此あひだ、ひとりのむすこをうしなうたが、そのむすこにアノおかたが似たとこそいへ〱。彌「ハアおいらに似たとかへ。それぢやアおめへのむすこもいゝ男であつたらうに。をしいことをした。ばゞ「ソレそのどうまんごゑのものいひから、おまへのやうに、やつとあらいみつちやがあつて、色がくろうて、はなは獅子鼻とやらで、目のいつかい所までが、其まゝぢやわいな〱。彌「それぢやアわつちが顔のわるい所ばかりがよく似たの。北「わるい所ばかりもきがつえゝ。いゝ所はひとつもねへもせんものを。ばゞ「そればかりぢやないわいの。アノ片小鬢のはげさんした所までが、おな

いにもにるものかいな。彌「人の顔の店おろしがすんだら、その醴をはやくくんな。ばゞ「ほんにわすれたわいな（ト、ちやわんふたつに、あまざけをくんでさしいだす。ふたりながらこれをのんで、）北「がうぎにうすい醴だ。ばゞ「うすうもなりましたぢやあろ。わしやかなしうて、ツイ涙を、そのなかへおとしたわいな。彌「エ、とんだことを、涙ばかりならまだしも、見りやアおめへ、水ばなをたらしてゐるが、それも此なかへおちやせんかね。ばゞ「わしや見なさるとほり、三ツ口ぢやさかい、はな水とよだれをひとつに、その中へおとしたわいな。北「エ、コリヤなさけないことをいふ。こいつはもうのめぬ。彌「おらア、ついのんでしまつた、いめへましい。サアいかう。北「ばさんいくらだ。ばゞ「ハイ六文づゝくだんせ北「水ばなはおまけだの。アイおせわ。ペッ〳〵（ト、こゝをたち出て、ふりかへりながら、）

　くりごとに涙をませて水ばなも
　すゝりこんだるうばが醴

かくてふたりは、足にまかせてたどりゆくほどに、だん〳〵みやこちかくなりて、往來ことに賑しく、人のふうぞくも、自然と温順にして、しかも衣裳ははなやぎたる女のよそほひに、うつゝぬかして見とれ行うち、早くも大佛まへにいたりて、北「ヲヤ〳〵かうせへなお寺だ。アレ山門のうへから佛さまがのぞいてゐる。彌「ハヽアこれが、かの大佛だわへ。なるほどはなしにきいたよりは、がうてきなものだ。そしてこの石を見や。えらい〳〵。

　大佛の御堂は雲に入とてや
　これはおほきなもゝの天上

かくよみて山門のうちに入、やがて御堂にのぼりける。

道中膝栗毛六編下編

大佛殿方廣寺、本尊は盧舍那佛の坐像、御丈六丈三尺、堂は西向にして東西廿七間、南北は四十五間あり。彌次郎きた八こゝに法施し奉りて、彌「ナントはなしにきいたよりか、がうてきなもんぢやアねへか。アノかうしてござるお手のひらへ、疊が八疊しけるげな。北「たぬきの金玉とおなじことだな。彌「もつてへねへことをいふ。そしてアノお鼻の穴からは、人がからかさをさして出らるゝと。北「ソリヤアまだしも、人がさして出るからいゝが、おらがはうのぼうだら八が鼻のあなからは、疵がひとりでにふき出したわ。彌「ばかアいふな。おうしろへまはつて見よう。ヲ

ヤお脊中に窓があいてゐらア。北「あれは大かた汐をふくところだらう。彌「ナニ鯨ぢやアあるめへし。北「ヲヤ〳〵、アレみんなが柱の穴をくゞつてゐるわ。彌「ホンニこいつは奇妙〳〵（ト、此御堂のはしらのもとには、ちやど人のくゞるだけ、きりぬきし穴あり。田舎だうしやども、たけぶれにこれをくゞりぬける。北八も同じくくぐり、）「コリヤおもしろへ。しかしおいらはくゞれるが彌次さんはふとつてゐるから、ぬけられめへ。彌「おれだとつてナニこれが（ト、北八をひきのけ、四ツばひになつて、はしらのあなへ、からだ半分ほどはいりかけて、いつからにぬけられず。あとへもどらうとするに、わきざしのつばがよこはらにつかへて、いたみこらへられず彌次郎かほをまつかいになし、）「アイタ、タ、、、。コリヤひよんなことをした。北「ヲヤどうした。ぬけられねへか。



彌「コレ、手を引ッぱつてくりや。北「ハハ、、、、こいつはをかしい（ト、彌次郎が両手をぐつとひつぱる、）彌「アイタ、、タ、。北「よわへ男だ。ちつと辛抱すればい、。彌「おとのはうからあしを引てくれろ。北「しようち〳〵（ト、うしろへまはり、両のあしをとらへ、）「ヤアえんさア〳〵。彌「あいた〳〵。北「ちつとこらへなせへ。よつぽど出かけたやうだ。ヤアえんさア〳〵。彌「ア、まつてくれ

まつてくれ。腰骨がをれるやうだ。コリヤ、やつぱり前のはうから引出してくれ(ト、いふゆゑ北八、又前へ廻り、両手をとらへて引く。)北「ヤアえんさアゝゝ。ソレまたこつちへよつぽど出て來た。彌「コリヤたまらぬ。アイタヽヽヽ。北八これてはいかぬ。初手のやうに、又あとへ引もどしてくれ。北「エヽいろゝゝなこといふ(ト、又うしろからあしをとらへ、)「ヤアえんさアゝゝ。彌「まてゝゝまて。コリヤどうでも、まへのはうから引ィてもらはう。北「エヽそんなに前へまはつたり、うしろへまはつたり、引出してはひきもどし、いつまでもはてしがねへ。コリヤいゝさんだんがある。(そばに見てゐたりし、さんけいの人をたのみて、)北「モシどうぞ、こつちらからおめへひつぱつて下さいませ。わしがあつちへまはつて、あしをひきずり



出しますから。彌「ばかアいふな。両方からひつぱつては出る瀬がねへ。北「出るせがなくても、両方からひつぱると、前へまはつたり、うしろへまはつたりするせわがなくていゝわな。さんけいの人「イヤ両方から、あのさんの骸を引のばしたら、ツイ出られさうなもんぢやあろぞい。北「コリヤいゝことがある。酢を一升も買て來て、彌次さん、おめへに呑せよう。彌「なぜ。酢をのむとどう

する。北「ハテ難産のむしよ、痩るといふことだから、いんでへハヽヽヽそないなことといふたて、いんまの間にあふこつちやないさかい、かうさんせ。と、こぞへいて槌借てきさんして、つむりをあとのはうへ、打こまんしたがよいわいの。北「なるほど、こいつがはやい理屈だ。しかしそれではいのちがあるめへ。さんけい「されば、そこはどうも請合れんわいの（ト、此内田舎だうしや一人、）「コリヤハアきのどくなこんだアのし。わしはハア遠國のもんだァから、あにもしり申さねへが、ふとの難儀さつせるこんだア、愚意のういつて見ますべいか。北「どうぞあの人のたすかることがあるなら、いつてきかしてくんなせへ。だうしや「ハアそれだアからのこんだアよ。あんでもあのふとの足のさきさを切割つせへて、山椒粒のう、はさまつせへたら、ふとりでにつんぬけべいのし。北「ハヽヽヽヽ。そりや蛇が女に見こんだ時のことだらう。どうせそんなことであらうとおもつた。さんけい「コリヤわしがちゑかそわいの。何ちやろとあのさんの體を和らかにして引出すがよかろさかい、かうさんせ。土砂とて來てかけさんせいの。ゐなかもの「すんだら土砂のウぶつかけずと、一ばんの桶さア買てきたさろ。手足をちとべし、をんまげたら、はいるべいのし。彌「エヽいめへましいことをいふ。むだ所ぢやアねへ。北八、はやくどうぞしてくれぬか。北「まちなよ。ハヽア おめへ脇指の鍔がよこつ腹、こだはつていてへのだ（ト、手をさし入てひねくりまはし、やう／＼わきさしをぬいてとる。）彌「いかさま、これでどうかくつろぎがあるやうだ。北「ドレ／＼イヤときにどなたぞまへのはうから、おし出して下さいませ。わしが足をもつて、こつちへ引出しますから。ヤアえんさア／＼。さんけい「ソレ出るわいの。まちつとぢやいけまんせ。彌「アヽウヽヽヽヽ。北「ハハヽヽ、出るやつがいけむから大わらひだ。彌「アヽいてへ／＼。北「しめたぞ。えんやア／＼。ソリヤ出たぞ／＼（ト、やう／＼のことにて引出せば、彌次郎は大あせをふき／＼、ほつとためいきをつきながら、）「ヤレ／＼ありがてへ。コリヤどなたも御苦勞でございやした。わつちやァ伊勢の泊で産をしやしたが、産むよりか生れる身は、よつぽどせつねへ。コレ着物がすりきれて、あばら骨が今にびり／＼する。

　傘さして出るお鼻よりはしらなる
　　あなおそろしや身をすぼめても

かくよみ興じて大わらひとなり、それ

より御境内をめぐり、蓮花王院の三十三間堂にて、

いやたかき五重の塔にくらべ見ん　三十三間堂のながさを

是よりこの御門前を、北へさしてゆくに、往來殊に賑しく〳〵、げにも都の風俗は、男女ともにどことなく柔和温順にして、馬士、荷歩持までも、洗濯布子の粘こはきを、をりめ高にきなして、あのおしやんすことわいなと、なまめきたるもをかしく、ふたりは興に乗じ、目に見るものごとにめづらしと、たどりゆくうち、俄に往來騒たちて、老若打まじり、走りゆく人ごとに、「ホウホウホよい〳〵、えつこらさつさ。ホウホよい〳〵、えづこらさつさ。彌「むしやうに人がかけるはなんだ。イヤ向うに何かあるさうで、すさまじい人だ」モシ、なんでござりやすね。北「向うより「イカ

こにえらいいさかひがあるわいの。北　はおしわけ〳〵これを見れば、かのけんくわ「京のけんくわもめづらしからう〳〵ト、　の一人は、さかなやと見えて、そこにはんだ



あしばやに行て見るに、けんくわ山のごといなどおろしてあり。あひてはしよく人てい
く、[illegible]、ふたりのをとこ、いづれもくつきやうのわかものな

り。されどみやこは、人のこゝろもいうちやうにして、けんくわとみゆれど、さのみあたまからたゝきあひもせず、日あたりのよきところにふたり向ひ合て、）さかなや「コレイノ、わが身の方から行當りくさつて、そないな事いふもんぢやないわい。おのれ、のうてんたやいてこまそかい。しよく人「おきくされ。こなんが手のうごくのに、こちやじつとしてゐやせんわい（ト、いひつゝ手ぬぐひを、ていねいにをりて、はちまきをする。）さかなや「ようおとがひならすわろぢやな。いつたいわりや、どこのもんぢやい。しよく人「おれかい。おりや堀川姉が小路さがるところぢやわい。さかなや「名はなんといふぞい。しよく人「喜兵衛といふわい。さかなや「としはいくつぢや。しよく人「二十四ぢやわい。さかなや「おきくされ。おのれ二十四にしちやえらうわかい。うそつきくさるな。しよく人「何いふぞい。ほんまぢやわい。前厄で、ことし嚊めを死なしたわい。さかなや「ソリヤえらいちからおとしをつたぢやあろ。えいきみさらしたな。しよく人「イヤそればがりぢやない。乳のみくさるがきめがあるさかい、えらいなんぎなめにあうたわい。さかなや「そぢやあろわい。おりやわれに二つうへぢやわい。しよく人「さうぬかしくさりやわれもわかかい。うちはどこぢやぞい。さかなや「一條、猪熊どほり、東へ入所ぢやわい。しよく人「かいやい。あこに盲で目の見えん寸伯といふ針醫があろがな。さかなや「ヲヽ、針醫がありやどうすりや。しよく人「イヤこちの一家ぢやさかい、おのれ通くさるなら、言傳してこまそ。さかなや「いやぢやわい。なんのわれが言傳、たれがいをぞい。えらいあはうめぢやな（けんぶつの人、あくびしながら、）「十兵衛さん、もういのかい。十兵衛「またんせ。今に打あふぢやあろ。見物「イヤ、わしやうちに、客ほつておいてきたさかい。十兵衛「そしたら其お客つれてごんせ。序にうすべりなと、一まいくさんせんかい。（またこちらのはうにゐる見物、のき下につくばひ、ひげをぬき／＼、）「見なされ。あつちやのわろが、どしてもえらいやつぢやわいな。見物「イヤ、こつちやのをどこも、えらい頤ぢやわい。見物「ホンニその頤でおもひ出した。お家はどうぢやいな。痛所はえいかいな。見物「ハイ、おかたじけなうござります。とんとえいやうであつたがな、きのふからえらうわるなつて、ツイゆうべしにましたわいな。見物「ソリャおまい御愁傷ぢやあろ。御葬禮はいつぢやいな。「今出しをりますとこぢやあつたが、えらいけんくわ

があると、人がはしるさかい、わしもツイいて、見てもどるほどに、それまでまてというて、またしておきましたわいの（ト、おの〳〵きのながいものばかり、いう〳〵と見物してゐると、かのしよく人のをとこ、）「コリヤヤイ、まちつとこつちやへよりくされ。日向がなうなつて、さむなつたさかい。さかなや「ヲヽよつたがどうすりや。しよく人「おのれ、今おれがことを、あはうとぬかしをつたが、なんでおれがあはうぢやぞい。さかなや「あはうぢやさかい、あはうぢやわい。しよく人「なにぬかしくさる。さういふわれがあはうぢやわい。さかなや「イヤこちやあはうぢやない。賢ぢやわい。しよく人「われがかしこなりや、おれもかしこいわい。さかなや「ヲヽわれもかしこいか。そしたらこのけんくわ、やめにせうわい。しよく人「サアひよつと、たがひにせりあうて、着物でもひきさいたら損ぢやさかい、やめにしてこまさうかい。さかなや「えらうおそなつた。もういんでこまそ。しよく人「おれも、われがいにくさる道ぢやほどに、つれだつていんでくりよわい。けふはえいてんきおぢやあつたな。さかなや「あたヽかうてえいわいやい（ト、たがひにあいさつして、このふたりつれだちてかへる。けんぶつもこそ〳〵と、ちり〳〵にみなかへりければ、彌次郎北八はらをかゝへて、）彌「ハヽヽヽなるほど、かみがたものはきがながい。あんなうすのろいけんくわが、どこにあるもんだ。北「あのなかで、損徳をかんがへて、やめにしたから大わらひだ。

公家衆のゐます都はおのづから
喧嘩やめるもうたとよみなり

かくうち興じ、はやくも清水坂にいたるに、兩側の茶屋、軒ごとにあふぎたつる田樂の團扇の音、喧すきまで呼たつる聲々、「モシナおはいりなされ。茶ちやあがつてお出んかいな。「めいぶつ、なんばうどんあがらんかいな。おやすみなされ〳〵。彌「何ぞくつてもいゝが、もつと先へいつてからのことにしよう（ト、ほどなく清水寺にいたり、けいだいをめぐり、おとはの瀧を見て、）

名にしおふ音羽の瀧のあるゆゑ獻
のぼりつめたる清玄のこひ

本堂は十一面千手觀世音なり。むかし沙門延鎭が夢中にえたる靈像にして、坂の上田村丸の建立とぞ。北八彌次郎兵衛、しばらく此寶前に休みながら、

境内にうゑし櫻はすき間なく
てもたくさんな千手くわんおん

傍の小だかき所に、机をひかへたる老僧、參詣を見かけて、「當山觀世音の御影は、これから出ますぞ。誠に靈驗

あらたなる事は、盲がものいひ、唖の耳がきこえ、あるいて來たゐざりがなはる。一たび拜する輩は、いかなる無病達者なりとも、たちまち西方極樂淨土へ、すくひとらんとの御誓願ぢや。どなたもいたゞいておかへりなされ。冥加錢は澤山にお心もちしだい。御信心のかたはござりませぬかな。北「よくしやべる坊主めだ。時に彌次さん かのうはさにきいた、傘をさしてとぶといふは、此舞臺からだな。僧「むかしから當寺へ立願のかたは、佛に誓うて是から下へ飛れるが、怪我せんのが有がたい所ぢやわいな。 彌「爰からとんだら、からだがみぢんになるだらう。 北「をり〳〵はとぶ人がありやすかね。僧「さよぢやわいな。ゑては氣のふれたわろ達が來て、とびをるがな。此間も若い女中がとばれたわいな。 北「ハアとんでどうしやした。僧「とんでおちたわいな。 北「おちてそれからどうしたな。僧「ハテ、根どひするわろぢや。此女中は罪障が深いさかい、佛の罰で、目をまはしたわいな。 北「鼻はまはさなんだかね。僧「イヤ瘡と見えて、鼻はなかつたわいな。北「そして氣がつきやしたか。僧「きがついていんだわいな。北「いんでどうしたね。僧「さて〳〵、しつこい人ぢや。それきいて何さんすぞ



い。北「イヤ、わつちがくせとして、聞かけた事は、金輪際きいてしまはねば、氣がすまぬといふもんだから。僧「それなりやいうてきかそかい。それからその女中が全體其した地もあつたかして、俄に氣が違うたわいの。北「ハテナ、きがちがつてどうしたね。僧「百萬遍をはじめたわいの。北「百萬遍はじめてどうしやした。僧「かねを叩いて、北「かねをたゝいてどうしたね。僧「なむあみだんぶつ。北「それからどうだね。僧「なむあみだんぶつ。北「コレサ百萬遍のあとは、どうしやした。僧「なむあみだんぶつ。北「そのあとはよ。僧「ハテせわしない。百萬べんちやわいの。マア念佛すましてからのことといの。北「エヽ、その念佛、百萬べんすむまでまつてゐるのか。とはうもねへ。僧「イヤこなさん、聞かけたことは、根ほり葉ほりきかんせにやならんと、いうたぢやないかい。まちと辛抱してきかんせいな。退屈なりや、こなさんたちも百萬べん手傳うて下んせ。北「コリヤおもしろからう。彌次さん、おめへもこけへかけなせへ。サア〳〵、なむあみだアんぶつ。僧「とてものことに、鉦いれてやろわいな（ト、むしやうにかねをうちならし、）ハアなまいだア。チャンチャン。北「コリヤがうてきにおもしろく



なつた。なまだア〳〵。僧「わしや手水してくるうちたのみます（ト、北八にかねをつきつけ、どこへやらいてしまう。北八むちうになり、）「ハアなまだア。チャンチャンチキチチャンチキチャン〳〵。彌「手めへ、鉦のたゝきやうが下手だ。こつちへよこせ。北「ナニ如才があるもんか。チャンチャンなまだア〳〵チャン〳〵〳〵〳〵（ト、むちうにたゝきたてさわぐゆゑ、内陣の番僧出來り、このていを見て、きもをつぶし、）ばん僧「コレナ〳〵、わごりよたちはどしたもんぢやぞい。勸化所にあがつて無作法な。（ト、しかられて二人は心づき、きよろ〳〵して、）北「ハア今の坊樣はどけへいつた。まだ中回向もすまぬうち。番僧「ナニたはことといふのぢや。爰をどこぢやとおもうてぢやぞい。北「ハイ、こゝは清水、あつもりさんの墓所とけつかる。番僧「コリヤおのれ氣が間違うてをると見える。北「氣ちがひゆゑに此百萬遍。番僧「ナニぬかしくさるやら。とつとゝ出ていなんかい。こゝは御祈願所ぢやぞ（ト、こわだかにいふうち、かつてよりぼうつきて出、おひはらふに、二人はさう〳〵、この坂をおり立て、）北「づくにうめが、とんだめにあはした。

舞臺から飛だはなしは清水に
ひやかされたる身こそくやしき

此山内をくだりゆくさきに、清水燒の陶造、軒をならべて、往來の足をとどむ。此所の名物なり。

天道の惠みもあらんするもの師
大日やまの土を製せば

かくて其日も、はや七ツ頃とおぼしければ、いそぎ三條に宿をとらんと、道をはやめ行向うより、小便擔と大根を荷ひたる男「大こん小便しよ〳〵。北「ハヽヽヽ。唐茄子が笛をふいた見世ものは見たが、大こんの小便するのは、ついど見た事がねへ。彌「あれがかの、大根と小便と、とつけへにするのだらう。こえとり「おつきな大こんと、小便しよ小便しよ（ト、よんでゆくこなたより、おちうげんらしき、しみたれのをとこがふたり、）「コリヤ〳〵、わしらふたりが、こゝで小べんしてやろが、その大根、三本おくさんかいな。こえとり「マアこち來て、して見さんせ（ト、此所の辻子へふたりをつれてゆく。辻子は江戸でいふ新道なり。彌次郎北八これを見て、どうするのだしらんと、あとよりついてゆき、たちどまり見れば、）こえとり「サアやらんせんかいな（ト、小べんたごをおろしなほす、と一人の男、）「アリャわしさきやろわい（ト、このたごのうちへ、ふたりながら小べんしてしまうと、こえとりたごをかたげ見て、）「もう是限で出んのかいな。中間「うちどめに屁が出

たから、もう小便はこれぎりぢやわいな。こゑとり「コリヤあかんわい。ま一度よう骸をふつて見さんせ。中間「ハテ小便くすねておいて何せうぞい。ありたけしたんで、のけたわいな。こゑとり「それぢや大根三本は、ようやれんわいな。二本もてかんせ。中間「コレ小便はすくなうても、こちとらがのは、しろものがえいわい。よその茶粥ばかり喰てをるのとはちがうて、こちや肉ばかりくてをるがな。こゑとり「それぢやて丶、あんまりぢやわいな。中間「ハテやかましついはんすな。うちへもていんで水まぜりや、三升ばかりにはなろぞいな。はやう三本くさんせ〳〵。こゑとり「そないにくせ〳〵というたて丶、これでくさるもんぢやないわいな。そこらへいて、ちやなとのんで來て、まちつとやらんせ〳〵（ト、やつつかへしつ丶いうてゐるを、ふたりはをかしく見てゐたりしが、きた八、）「モシ〳〵、さいはひ、わつちが小便したくなつたから、無躾ながら、おめへがたに上げやせう。これをたして、大こん三本とりなせへ。中間「お心ざしはおかたじけなうござりますが、それぢやおきのどくさまぢやわいな。北「ハテい丶わな。どうせわつちもありあはせたもんだから、あまり輕少なれど。中間「さよなら、お小便いたゞきましよかいな（ト、小べんたごを北八のまへへもつて來りなほす。）北「イヤ〳〵やつぱりそれにおきなせへ。わつちがのは一二間づつ向うへはしります。こゑとり「コリヤきよとい〳〵。イヤおまいのは地ではないわい。とかく小便は關東がよござります。地のはうすうてねうちがない。北「もちつと早いとまだ出たものを。わつちは生れついて小便ちかいから、不斷小便桶を、首にかけてあるいた男さ。中間「そりやおうらやましいこつちや。こゑとり「さよなら、おまい、此たごを首にかけておいでんかいな。わしやどこまでもお供していこわいな。北「イヤちかごろはそのやうにもねへのさ。こゑとり「おつれさまもあるさうぢや。モシ、おまいもついでに手水してお出んかいな。彌「イヤ、わしは前かたは、いちどきに小便の壹斗や二斗するぶんは、ねから苦にも思はなんだものだが、どうしたことやら、きんねんは小便づまりで、さつぱり出ぬにはこまりはてる。こゑとり「ハア小用づまりならえいことがあるわいな。いつきにようなるこつちや。彌「どうするとよくなるの。こゑとり「アノ酒屋などで、酒の樽の呑口から、おもふやうに酒の出んことがあるもんぢやわいな。そな

いなときは樽のうへのはうへ、錐もみして穴あけると、ぢきに下からシウシウと酒がはしるものぢやさかい、おまいの小用のつまらんしたのも、額ぐちへ錐もみさんしたら、すぐに小用が通じるぢやあろぞいな。北「ハヽヽヽこいつはできた。時におそくなつた。サアいきやせう（ト、ふたり引わかれゆく。むかうのかたより、かつぎをきたる女の二三人づれ、さすがみやこ女郎のふうぞくしなやかにて、いづれもいろしろく、すきとほるばかりのしろもの。北八うつゝをぬかして、）「ヒャア〳〵いきた女がくる。きれいきれい。弥「じやうだんな女どもだ。みんな着物をかぶつてくるわ。北「あれが被といふものだの。アノうつくしいやつと、おれがものをいつて見せようか（ト、やがてかの女中のそばへ、はしり行て、）「モシ、ちとものがお尋申たい。これから三條へはどうまゐりやすね（ト、きくに此女中、御所がたと見えて、とんだわらへいなり。）「わが身三條へゆきやるなら、この通りをさがりやると、石垣といふ



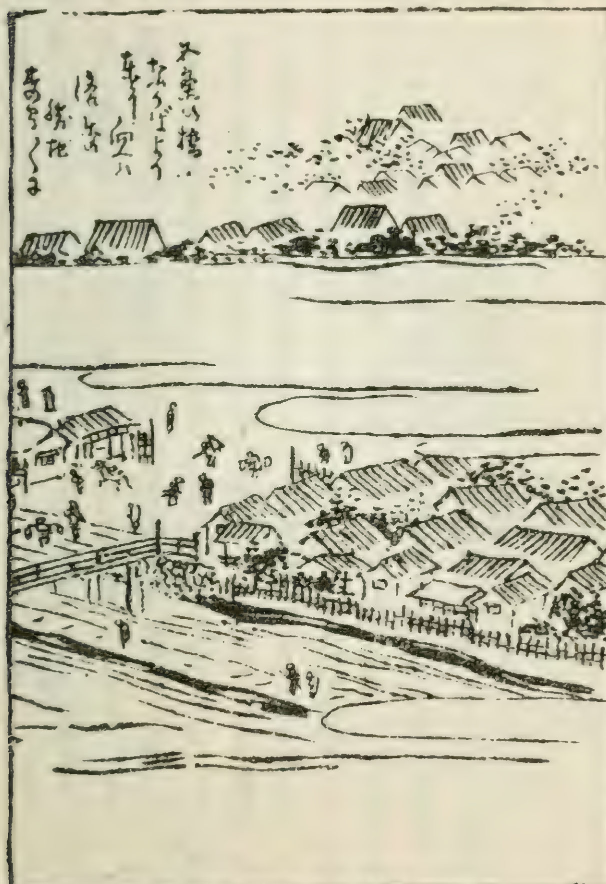
所へ出やるほどに、それをひだりへゆきやると、ツイ三條の橋ぢやわいな（ト、いつたい御所方の女中は、人を何ともおもはず、ちときいたふうのをとこと見ると、わる

くひやかすふうゆゑ、五條のはしを三條とをしゆる。）北「ハイ是は有がたうござりやす（ト、何もしらねば、禮をいつてしばらくゆきすぎ、）彌次さん、アリヤアなんだらう。がうてきにおほふうな女どもだ。彌「ハヽヽヽとんだやすくとりあつかはれやアがつた。ごふさらしめ（ト、それよりやがて、かの石がきといへるをうちすぎ、ひだりのかたへ、をしへられたる道すぢを、三條へ行とこゝろえ、はやくも五でうのはしにいたりし頃は、はや日くれて、わうらいの人、）「モシ／＼、しか谷のはうへは、どうまゐりますな。北「ハア わが身しか谷へいきやるなら、此とほりをすぐにいきやると、ツイしか谷へ出やるほどに、ソレ轉んだら起ていきや。牛のくそをふんづけたら、遠慮なしにふいていきやれ。わうらいの人、「イヤこやつ、ぞんざいなものゝぬかしやうぢや。こなあんだらめが。北「ナニあんだらたア何のことだ。道をきくからをしへてやるのだわ。往來「イヤ細言ぬかすない。どたまにやしてこまそかい（ト、此男のつれと見えたるが、二三人立かゝるを見れば、いづれも見あぐるごとき大をとこども、こしに長わきざしをよこたへ、ものゝいひかつかう、いかさまにもおの／＼すまふとりらしきものどもなれば、北八たちまちしよげかへりて、）「ハイ御免なせへ。彌「こいつは生醉だから、どなたも了簡してくんなせへ。すまふとり「イヽヤ了簡ならんわい。おどれらたちはどこぢやぞい。彌「イヤ旅のものでござりやす。すまふ「たびのものなら宿があらう。ソレぬかしくされ。彌「是から此三條に宿をとらうといふのでござりやす。すまふ「何ぬかすぞい。此三條にとは何のこつちやい。こつとらは今三條の編笠屋から出て來たものぢや。こゝは五條のはしぢやわい。彌「ヤア、こゝは三條ではござりやせぬか。ソレ見や北八。さつきの女どもが、とんだすつぽかしをしへやアがつた。すまふ「きさまたちはどつから來たのぢや。彌「きよ水のはうから。すもふ「ワハヽヽハヽ。てつきり、けつねにがな、つまゝれくさつた、もんぢやあろぞい。えらい、隙費しな。ほつておけ／＼。さりとは、あはうなやつらぢやな（ト、打わらひて行過る。彌次北八はおもひもよらず、五條のはしに來り、いま／＼しい、ばんくるはせな目にあうたと、こごといひながら、はしを向うにわたり、そこゝとまごつくうち、わうらいのにぎやかなるにうかれて、おもはずも、はしのたもとを、ひだりのかたへうかれゆくと、なにかはしらず、りやうかはにかけあんどう、のきごとに、てうし三みせんのおとにぎはしく、ぞめきうたに、ほゝかぶり

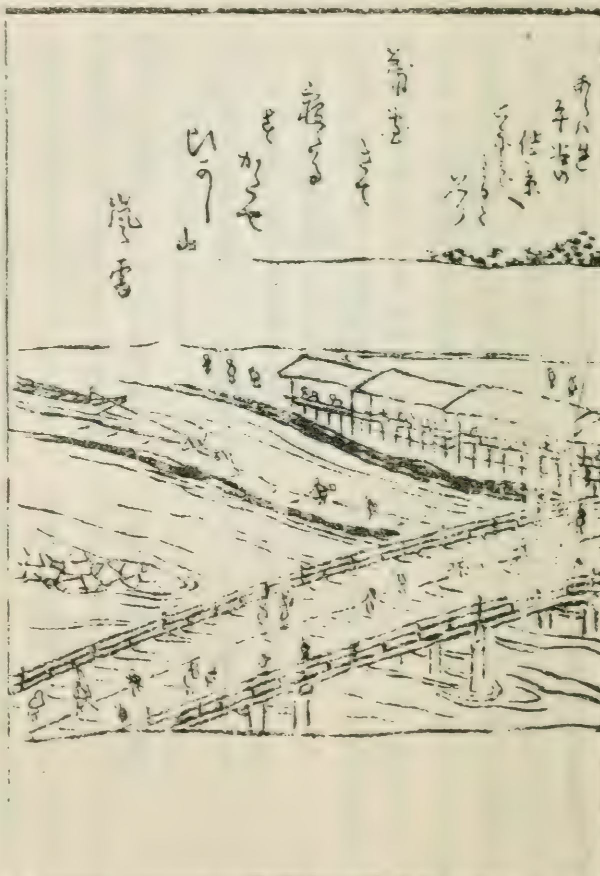
せしをとこどもの、ちらづくにまぎれて、のぞきあるく。この所は五條新地とて、すこしのながれをくむ遊所なり。家ごとにかどの戸をたてたるが、くゞりばかりをひらきて、かどぐちにたちたる女の、さゝやかなるこゑして、モシナ〳〵と、彌次郎がそでをひくに、ふりかへりて、くゞり戸の内を見れば、みせつきのおやま、ならびゐたりけるにぞ、）彌ナント北八、こゝはおやま屋と見えるが、いつそのくされに、こよひはこゝにとまりはどうだ。北「いかさま、何も荷物はなし、まんなほしに、そんな事もやぼでねへ。女「サアはいりんかいな。彌「はいることははいらうが、こゝはいくらだ。女「ヲ、かたやの。おとまりなはるかいな。彌「もちろんさ。女「まだ初夜まへぢやさかい、七夕ヅッおくれんかいな。北「上方のお山は、直切て買ふといふことだ。半分にまからねへか。彌「何がなし四百ヅッなら、とまつていかう。それで出來ずば、御緣がねへとあきらめようさ。女「よござります。おはいりなされ。北「それでいゝの。ちやうどおやまさんもふたりあらア（ト、このうちへあがると、女が二かいへあんないするに、やねうらのひくき二かいにて、彌次郎あたまをこつつり。）「あいたしこ。北「どうした。女「ヲホ、、、おあぶなうござんす（ト、たばこぼんをもつてくる。此内おやまふたり、一人名は吉彌、今一人は金五、いづれも、ふとりつむぎ縞やうのきものに、くろびろうどのはんえり、はりのつかへるほどのひくき二かいを、しやんとたつて歩くしろもの、片手にきものゝつまを、よこのはうへ引あげてきたり、ヲ、しんどといつてすわる。）北「とんだくらいあんどんだ。サアもつとこちらへよりなさらんか。吉彌「おまいさん方は、どこぢやいな。彌「されば、どこやらであつた。金五「ヲホホ、、、六角の朝市に、こないなおかたが、よう見えてぢやが、訛てぢやさかい、大かた旅のお方ぢやあろぞいな。吉「六條さまへ御出たのかいな。彌「マアそこらのものよ。吉「モシナさゝひとつあがらんかいな。彌「そうさ、酒がはやくのみてへの。吉「さういうてやろかいな。お肴は何にせうぞいな。金「かどのすもじがおいしいぢやないかいな。吉「わしやナ、かちんなんばがえいわいな。彌「かちんでも家賃でもとんぢやくはねへ。はやくしてくんな。吉「いつきにさんじるわいな（ト、此おやま、さけさかなをいひ付に下へおりる。あとにのこりしおやまは、此内、帯のあひよりかゞみをいだし、あんどうのそばへより、かほをなほす。やがて下より、てうしさかづきをいだす。大平が一人まへにひとつづゝ、ひろぶたにのせ

もち出す。彌次郎きもをつぶし、）「なんた、大平を人別割とはめづらしい。京はあたじけねへ所だと聞たが、こゝらは又がうせへだ。北「四百にはやすいもんだ（ト、此ふたりは、さけもさかなも、あげ代の四百のうちだとおもひ、むしやうにやすいとほめる。）金「サアひとつあがりなされ。北「はじめよう。ヲトヽヽヽひらはなんだ。ハヽア葱にはんぺいはきこえたが、こつちではやんぺいをやくと見えて、まつくろにこげて居らア。吉「ヲホヽヽヽソリヤ歌賃ぢやわいな（ト、これは上がたにてする、なんばもちとて、ねぎをいれたるざふにもちなり。此おやま、下戸とみえて、おのれがからぶつゆゑ、客にすゝめてとりよせたるなり。北八かちんといふことをしらず。）「ハアかちんといふはきいたこともねへ。どんな肴だの。吉「ヲヽせうし。おもちやわいな。北「ムム鱧か。ドレ／＼ヤアこりや餅だ／＼。彌「おきやァがれ。上方ものは氣がきかねへ。酒の肴にもちとはどうだ。是で酒がのめるものか。金「外のおさかな、いうてさんじようわいな（ト、すぐに下へおりたるが、ほどなくどんぶりものをもつてくる。なかには上がたにはやる鳥貝のすしなり。此おやまのすきと見えて、此すしをいひ付やりたるなり。）北「なんだ、コリヤ、ばかのむきみをすしにつけたのだな。金「とりがひのすもじぢやわいな。彌「出すものも／＼へんちきな物ばかりで、もう酒ものめぬ／＼（ト、此内むだもいろいろあれどもりやくして、こゝにふとんをしきならべ、こしびやうぶにてあひだをしきる。此うち四十斗の女、こゝの女ばうと見えて、つとめをとりにきたり、びやうぶをあけて、）「おゆるしな。彌「ヲイだれだ。女「ハイおつとめをいたゞきにさんじました（ト、かきつけを出す。彌次郎ひらき見て、）「なんだ、四匁ヅツ八匁の揚代はきこえたが、四匁かちんなんば、二匁すし、壹匁八分御酒、五分らふそく、〆て十六匁三分、コリヤとんだはなしだ。雜用は別にとるのか。おらア又、酒もさかなも揚代のうちかとおもつた。コレ／＼北八、このとほりだ。北「ドレ／＼なんだ、コリヤおめへがたア、わつちらを他國ものだとおもつて、酒代を別にとるさへあるに、がうてきにたけへもんだ。此四匁かちんなんばといふは、アノ大平のことか。餅ならたつた三ッ四ッいれて、ねぎのちつとばかりさらへこんだものを、壹匁づつとは、なるほど京のものはあたじけねへ。氣のしれた根性骨だ。らふそくまでつけるこたァねへ。こんなものはまけにしておきなせへな。女「ヲホヽヽ京のものをわるう

おしやんすおまいさんが、しゆみちや
わいな。五分ばかりのらふそく代、ま
けいのなんのと、おしやんす事はない
わいな。そしてみなあがりなされたあ
とで、たかいの安いのと、おしやんし
たてゝ、あかんこつちやないかいな。
彌「エヽめんだうな、ソレ壹分持ていき
な。はしたぐらゐはまけなせへし(ト、
金一分はふり出してやる。女ばう、ふしよう
ぶしようにとつて下へおりると、彌次郎あつ
けにとられて、かほつきぐにやりとなり、)
「アヽとんだめにあつた、ノウ北八。
北「しかしおらア惜くねへ。どうかおつ
にもてさうな安排だ(ト、此内、北八の相
方吉彌来りて、)「ヲヽしんきやの。あこ
にわたしひとりおかんして、こゝに何
してぢやぞいな。サアやすみんかいな
(ト、手をとりて、おのがかたへひきずつてゆ
く。)北「コリヤ〳〵、おれが帯をといて
どうする(ト、わざと彌次にきこえるやう
にこわだかにいふ。女、北八を引こかし、)
「よいわいな。こよひはいかうぬくひ
ぢやないかいな。おまいさんじつとし
てゐなされ。わたしがあぢようするわ
いな(ト、すべて上がたすぢのおやまは、
初たいめんから帯ひもをときて、うちとけた
るていに客をもてなすこと、さだまれる掟の
ことし。中にも此吉彌は大どしまにて、じよ
さいのなきしろもの、北八にきものをぬがせ



てはふり出し、おのれもおびをときて、きた八におのがきものをうちかけ、さながら、ふかきなじみのごとく、うちとけたるていにもてなしけるゆゑ、北八うつゝをぬかして、うちふしけるが、夜もしだいにふけゆくまゝに、犬のとほぼえものさみしく、時のたいこも、はや、うしのこくばかりなるに、吉蘭目さめしやうすにて、)「モシナ〳〵、ようねてぢやな。北「アヽムヽ、なんだ〳〵。吉「わしや手水にいてくるぞへ(ト、おきあがりたるが、まくらもとにほうり出してある、北八のきものをきて帯を引〆、)「おまいさんの着物、ちよとかしておくれや。わしやこれきて、とのたちのふりして、下の衆をだましてこまそわいな。北「よく似合た。きめう〳〵。吉「つむりがこれぢやあかんわいな(ト、手ぬぐひをとつて打かぶり、下へおりたるが、北八はそれよりねもやらず、まてどくらせど、この吉蘭はいつかうに來らず。さては外に客にてもあるやと、しばらくまちゐたるに、はや七つのかねもなり、ほどなく夜もあけなんとするに、北八こらへかねて、むしやうに手をたゝくと、下より女ばうかけあがりて、)「どなたぞおよびなされたかいな。北「ヲヽこゝだこゝだ。コレ、わつちがおやまは、さつき下へおりたが、それなりで顔出しもしねへ。ちよつくりよんでくんなせへ。女「サアそのことで、下は大さわぎでござ



んすわいな。北「なせ〳〵。女「アノおやまが、をとこのきりもんきて、はしつたさかい。北「ナニはしつたとは、にげたのか。ソリヤ大へんだ〳〵。その男のきものといふはおれがのだ。女「かいな。ソリヤ又何としておまいさんのをきていたぞいな。北「イヤ、下へいつて、みんなをだましてくるから、かしてくれろといつたによつて。女「それでかしなさつたのかいな。北「さうさ。時にそのおやまの欠落したは、こつちにやアしらねへこつたから、なんでもこゝの抱へにちげへはあるめへ。きものは、せひとも、爰の内からどうぞしてもらはにやならねへから、下へさういつてくんなせへ。はや〳〵。女「マアなんにいたせ、そないに申ませう（ト、下へおりてゆくと、ほどなくこゝのていしゆと見えて、おにぶとりのどてらをきたる、でつくりとせし大男、れうりばん、をとこども、二三人引つれ、どや〳〵と二かいへ来り、ていしゆ、北八がまくらもとに立はだかり、）「コレ吉彌にきりもんかしたといふわろは、こなはんかいな。北「ヲヽ、おれだ〳〵。ていしゆ「おどれかい。ほてくろしい事さらしたな。マアおきくされ。ドレ頬見せさらせ。北「イヤこの才六めらは、何でおれをそのやうにぬかしやアがる。ていしゆ「ぬかしたがどうすりやア。おどれ、吉彌めにきりもんかして欠落させをつたからは、ゆくさきはしつてけつかるぢやあろ。ありていにほざき出てくされ。北「とんだことをいふ。何おれがしるものか。ていしゆ「イヤ〳〵そないにぬかしさらしても、われが人にたのまれて、糸引くさつたにちがひはないわい。北「コリヤきさまたちは、おつにいひかけをするな。ていしゆ「頤たゝかすな。しよびきおろせ（ト、みな〳〵立かゝり、北八を手ごめにする。このどさくさに彌次郎目をさまし、このていを見て、はねおき、飛で出、）「コリヤおれがつれだが、うぬら此男をどうする（ト、ていしゆをつきのくると、れうりにん、）「イヤこなやつも同盗ぢやあろ。ふたりともにひつくゝれ（ト、いづれも小ぢからのあるものども、彌次郎北八を雨はうから引たて、下へおろし、ほそびきをもつて、つひにふたりを、ぐる〳〵まきにしばりたるに、彌次郎はいつかうがてんゆかず。ゐさいのことをききてぎやうてんし、北八もいまさら、おやまにき物をかしたる、あやまりを後くわいし、うたがひうけたるうへ、かゝる目にあひ、くやしけれども、りのたうぜんにいひわけたゝず、臺所のはしらに、つながれたるめんぼくなさ、ことに夜もあけはなれて、きん所のものども、おひ〳〵見まひにきたるうちに、こ

れも此しやうばいやのてい主とみえて、少し小ぐちでもきかうといふ男、名は、十吉「わしや今きいたが、吉彌めがきよといてことさらしたげな。その手引したやつらはどうしたぞいな。ていしゆ「あこにくゝつておいたわいの。十「店主よんであづけさんせ。ていしゆ「旅のもんぢやてゝ、うそつきさらして、ほんまのうちをえいはんわいの。十「ソリヤきのどくなもんぢやわい（ト、二人がしばられてゐる、そばへきたり、）十「コレこなんたちは、わるいがてんぢやわい。ソリヤはて、友だちづくなら、たのまれまいもんぢやないが、もうこないにばれては、しよことがない。ありやうにいうて、めん〳〵の身ぬけするがえいわいの。彌「イヤ、わつちらは、からきしなにもしりやせん。此男がほんのしやれに、きものかしたばつかりで、うたがひうけたといふもんだから、どうぞあなたのおとりなしで、わつちらをたすけて下さいませ。コレ手をあはせてをがみたくても、しばられてゐるから、足を合せてをがみます。コリヤ〳〵北八もおたのみ申せ。北「ハイ南無金比羅大權現さま、此災難を免れますやうに、なむきめうちやうらい〳〵。ていしゆ「エゝ何ぬかすぞい。こんぴらさま祈るなら、そないなこつちやきかんわい。さいはひおどれ裸でをるから、水あびせてこまそ。垢離とつて祈りくされ。北「イヤわつちは全體こんぴらしん〳〵でござりやすが、是まで願をかけやすに、人とちがつて、水をあびて寒い目をしてはきゝやせぬ。なんでもきものをたんときて、殼汁にあつがんをひつかけたうへ、巨燵へくびつきりのたくりこんで願ふと、すぐに御利生がござりやすから、せめてきものはきずとも、いつぱいあつくして下さりませんか。ていしゆ「エゝ、尻ねずりくされ。彌「イヤ、御尤でござりやす。わつちこそは此男めがまきぞへ、ほんの災難、そしてこんな目にあひますと、持病の癪がさしこんで、アイタゝゝゝ。ていしゆ「しやくがいたいなら、胴中の繩を、もちと堅う〆てやろかい。彌「イエ〳〵、わつちがしやくは、じんくを踊ると、をさまりますから、どうぞ、此繩といて下さりませ。十「ハゝゝゝ。コリヤねからやくたいなやつらぢやわい。勘太さんゆるしてやらんせ。たかで敵等はえらいあはうぢや。なるほど吉彌めにたられくさつて、きりもんかしたまでのこつちやあろぞいな。ていしゆ「サイナ、そないにいはんすりや、いかさま賢うも見えんわろたちぢや。べしてのこと

もありやせまい。いなしてやろかいな。北「それは有がたうございやすが、わつちやア此はだかのまゝではけへられやせん。ていしゆ「いなれざ、いなんすないなんすな。こちにもいひぶんがあるさかい。北「イヤそんならめへりやせう。十「サア／＼いなんせ。あたあほらしい衆ぢやわいな（ト、ふたりがなはをといてやると、）彌「北八、手めへのおかげで、とんだめにあつた。北「おめへよりか、おらア此とほりきものをとられて、ハアくつさめ、ヲヽさむ／＼。ていしゆ「ハハヽヽ、あんまりかはいさうぢや。何なと一枚くれてやろかい。北「ありがたうございやす。どんなものでも、どうぞいたゞかして下さいやせ。ていしゆ「エヽみだれめがいふやうなこと、ぬかしけつかる。てきに似合たやうに、納屋の菰一まいもて來てやれやい。下男「イヤここにきのふの俵がある。」これをきていかんせ。北「ナニそれをきろとか。エヽ情ないことをいふ。ていしゆ「せつかくのおれが心ざしぢや。きていなんかい。北「ハイ有がたうございやすが、わたくしは、はだかゞやはりかつてゞござりやす。彌「げへぶんのわりいをとこだ。おいらが合羽をかしてやらう（ト、彌次郎がもめんがつばをとつて、北八にうちきせながら、）

うとましやかいたる耻も赤はだか
合羽づかしき身とはなりたれ

はては大わらひとなり、ふたりはやうやうのことにて、此所をのがれ、たち出けるとなり。

道中膝栗毛六編下終

膝栗毛七編

全二冊
近刻

書肆

大阪心斎橋唐物町　河内屋太助
江都本石町二丁目　西村源六
同所通油町　鶴屋喜右衛門
同所同町　村田屋次郎兵衛

東海道中膝栗毛　十編


洛中滑稽之記
十返舎一九著
膝栗毛七編
全二冊
文化辰春新撰
書林　榮邑堂藏
版元述

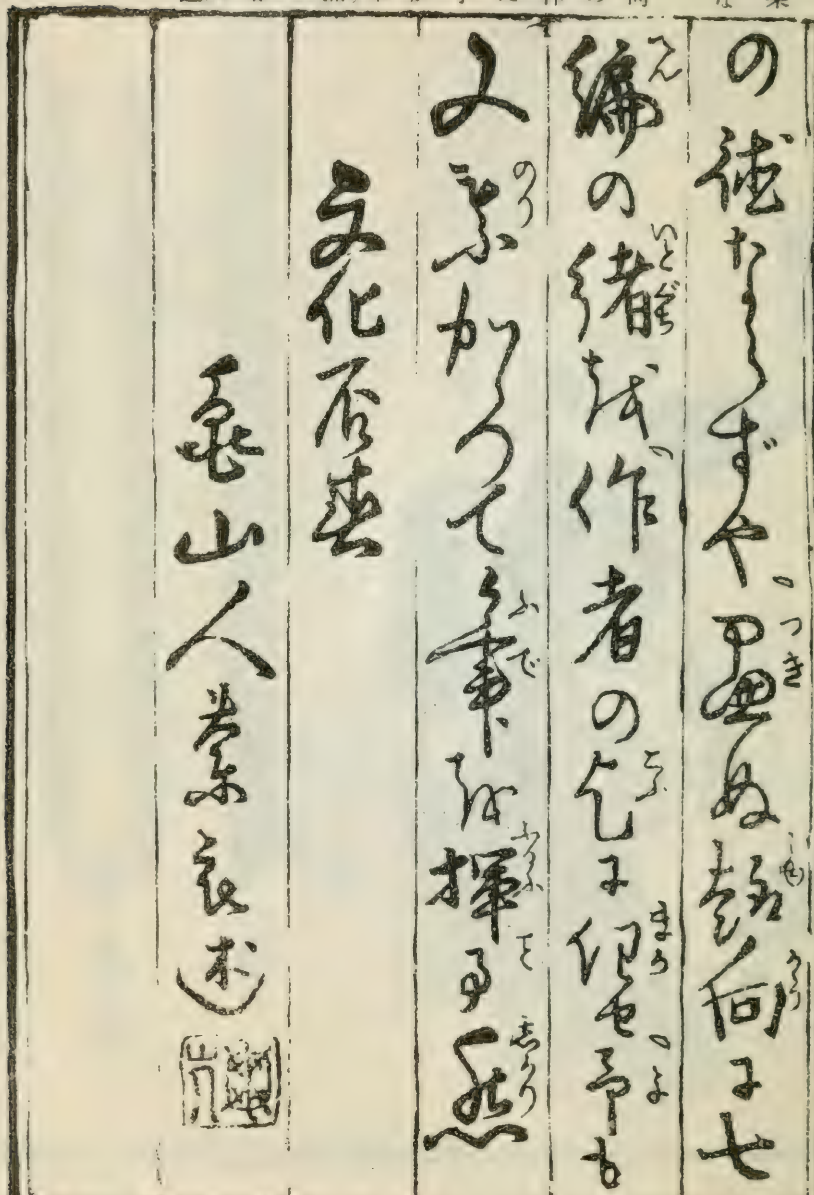
道中膝栗毛七編序

穆王、八駿に御して、王母が桃を甘じ、靈鷲の説法を聴も、ひとへに名馬の功によれり。ことに彌二郎兵衛喜多八は心の欲る所に隨ひ膝栗毛にのりか來るまゝ、

四方に奔走して果もなきは八駿にも勝てたのしかるべし。かの生喫、磨墨ならば八十うち川の争ひもあるべきに、人喰ひ馬にも合口同士、勝手次第の道艸は、こ

れ此膝栗毛の徳ならずや。盡ぬ趣向に七編の緒を、作者の乞に任せ、予も又乗かかつて筆を揮事然

文化辰春
龜山人
蘭衣述




春亭画



述意

○洛陽の名所旧跡しるきをふりし多あるに予若
年の比俳諧をこのみし時ありし上京して逗留
せしがおよそ十とせあまり以前のともがら人、
多く亡失し今此編にも書くその十が
一つをもしるすのみを
○先にいへる如く僕等俳諧せしとせあまりの昔
住せしが花洛にて唯用無の為のこゝろみなれば
一端の詞をとらず、まずせしやすでにて要し
のこす其程非道をおもはずしぐれ今の
流行に与しあらそひやすりぬきとくもの

おくれたる出ても面白かるべし
○五編目京都の部は中　おかひをそて大将手
杖とも世に云参宮道中のあとはむかし今のむかし
みなよみたるあとなれども難なりしかれども其の
のざしもはずん段々編にをよぶてきたる附
上方の念ひをおとし手を総巻のひさるがへ
のちさきも数篇ありてまのちぎれ毛もむすぼて
を得たる事がめでたし見えしおもしと書して也この
故よ今七編も右の続きにしるしたれども又その手を
さうもしゆうるぶるべし
○近江は四季のおきせし版本に記し出てしを

予嘗てかりそめに得て閑居するまゝの清暇を
其實を傳へてこれもむかしむなしく惜むべし予が
家の膝栗毛に作りし七編の趣向を以て他の
駿足くみおもふにんとを弥次編みして筆を
わくふ末ろじとおかひろりしる茶番詠風屁邑書の
あるじ連ねさせて冊中の滑稽が作もの
ほうまいらん頴かつてあめのくもふてうつる
るみかくて筆千あれと其手をあつむし

東都　通あぶら町のみどり橋

十返舎一九誌

道中膝栗毛七編上

十返舎一九著

或人の句に、花洛都に本寺〳〵かな、と詠たりしは、實も寺院堂塔の廣大無邊にして、其莊嚴魔秀なるいふもさらなり。殊に花の春、紅葉の秋は、東西南北に、名だゝる勝景の地ありて、加茂川名酒の樽とともに、人の魂をとばしめ、商人のよき衣きたるは他國に異にして、京の着だふれの名は、益 西陣の織元より出、染いろの花やぎたるは、堀川の水に清く、釜もとのおしろい、川端のふしのこは、ゆきをあざむき、御影堂の扇、伏見のうちはに、風匂ふ香堂前の粽、丸山かるやき、大佛もち、醍醐の獨活芽、くらまの木芽漬は、庭訓往來にいちじるく、東寺の蕪、壬生の菜は、名物選に、はなたかし。其外、名産奇製の品物、あまたある都に、たま〳〵入こむ騒客の兩人、彌次郎兵衞喜多八とて、ぬけ参りの刷毛序に、まぐれ出たれども、淀川の下り船に、かどちがひして荷物を失ひ、五條新地の一ッぱい機嫌に、はや呑込して丸裸となりたるきた八の名にも似ず、同行の彌次郎兵衞が木綿合羽を借着せしほどの仕合なれば、かゝる洛陽の地もおもしろからず、うか〳〵と新地もどりの朝風身にしみわたり、五條のはしにさしかゝりたるに、此所はいにしへ、牛若丸の千人切したまふ所とあれば、きた八しほ〳〵と打かたぶきて、

かゝる身はうしわか丸のはだかにて
辨慶じまの布子こひしき

かくて東にわたりて、河原院の舊跡、門出八幡もすぐとほりとなして、高瀬ぶねの綱にひかれて、たどりゆく道すがら、北「おもへば〳〵つまらねへことになつた。どうぞ、ふる着屋でも見つけたら、どんなでも綿入が一まいほしいが、彌次さん、いゝちゑはねへかの。彌「ナニかはずともいゝにしたがいゝ。えどつ子の拔参に、はだかになつてけへるは、あたりめへだわ。北「それだとつて、さむくてならねへ。彌「そんなら、さいはひ、こゝに湯屋がある。ナントちよつくりあつたまつていかねへか。北「ホンニこいつはきめう〳〵。彌次さん、おさきへありがてへ（ト、いちもくさんに、あるかうしづくりのうちの、のれんをくゞりて、すつと入、かけあがつて

はだかにならうとすれば、そこのていしゆ、）「モシ〳〵こなさん誰ぢやいな。何さんすのぢや〳〵（ト、とがめられて、北八、あたりを見廻し見るにゆやでなし。）「エ、いめへましい。湯屋かとおもつた。ていしゆ「ハ、、、こちの暖簾（のうれん）に、ゆのじがあるさかい、それでせんたうかとおもうてぢやの。アリヤ濟生湯（さいせいたう）といふ、ふり出しぐすりの名ぢやわいな。彌「ホンニこいつは大わらひだ。北「また一倍さむくなつた。いめへましい（ト、こごといひながら、ゆくさきに、しみたれのふるぎや一けんあり。見せさきに、ふるぬのこ、ふるあはせつるしあり。きた八彌次郎兵衛をくどきて、ぬのこ一まいもとめんと、くだんの見せにたち、ひねくりまはして、こんのぬのこをとつてすかし見、）「モシこのぬのこはいくらだね。ふる手やのていしゆ「ハイ〳〵こつちやへおかけなされ。コレおちやもてこんかいな。おたばこの火もないわいな。赤（あかい）のひとつ、ちやとくさんせ。北「イヤ茶もたばこもいりやせん。コリヤアいくらだといふに。ていしゆ「ハイハイそりやきやうとう、よござります。お



やすうしてあげうわいな。小ぞう「ハイおちやあがりなされ。ていしゆ「長吉（ちやうきち）、そりやおぬるいちやないかいな。なせ、あついちや（茶）〳〵あげんぞい。小ぞう「イヤおえ（家）さまが、朝はちやがゆちやさかい、茶ち

や焚(たく)なと、おつしやつてでござります。それはきのふ焚(たい)たまんまの、ちや丶でござりますわいな。彌「いかさま、きのふのお煮花(にばな)ほどあつて、とんと河童(がつは)の屁のやうだ。イヤ屁のついでに、尾籠(びろう)ながら、御ていしゆさん、手水(てうづ)にゆきたい。おうらをちよつと。ていしゆ「ハイハイ雪隠(せついん)へお出(いで)かいな。小ぞう「せつちんはぬるうはござりませぬ。よう(能)わいてちやあろぞいな。て、しゆ「ナニ雪隠を誰が沸(わか)したぞい。小ぞう「それぢやて丶、いんま(今)のさき、わたしがさんじたさかい、すぐいて(行)見なされ。ぽつぽと煙(けぶり)が出てぢやあろ。ていしゆ「エ丶、むさいことといふやつぢや。北「そんなことより此布子(ぬのこ)はいくらだへ。はやくきめてくんねへ。さむくてこたへられぬ。ていしゆ「おさむくは、もつとそつちやへよりなされ。そないによう(能)日がさしてぢやわいな。きのふも着物(きりもん)かひにお出(いで)たおかたが、コリャきやうとい(氣疎)、ぬくひ(暖)うちぢやて丶、そこに一日(にち)ひなたぼこしていなれ(歸)ましたが、そのおかたが、もう着物(きりもん)買うて着(き)いでもだんない。毎日このうちへ、日向(ひなた)ぼこしにこう(來)わいなと、こないに(此様)いうてぢやあつたわいな。北「エ丶、じれつてへ。コリャアうらねへのか、どうだな。ていしゆ「ハイ〳〵かうぢやわいな。北「やすくしてくんね



へ。ていしゆ「ソノ紺のおひえぢやな（ト、そろばんぱつち〳〵。）三十五匁とんとぎり〳〵ぢやわいな。北「たかい〳〵。わつちらはえどのものだが、古着は商賣がらで、いくらもとりあつかつてゐるから、やるもんぢやアねへ。ほんとうの所をいひなせへ。ていしゆ「ハア、御商賣がらとあれば、おまいさまも古着屋なされてかいな。北「イヤわしは質しやうばいさ。ていしゆ「しちとあれば何かいな。おとりなさるのか。置なさるのかいな。彌「おくのが此男のしやうばいさ。北「それだから、質におく時の算用からしてかゝらにやアかはれやせぬ。此ぬのこは、どうしても、一〆より外は貸めへから、貳朱ばかりにかはにやア損がいく。ていしゆ「なにいひぢやぞいな。後家のしちやへもていても、金壹分は、ものいはずかすわいな。北「とんだことをいふ。どうして壹分かされやせう。ていしゆ「ナニ壹分つかん事はありやしよまいがな。北「それともおめへ、ぢきにうけなさるか。ていしゆ「うけるわいな。北「さういつてもあてにやアならねへ。それよりか此間の股引の出入はどうしなさる。そして袷の時がしもあるし、それもおめへ、子ども衆が脾胃虚して煩つてゐるうへ、かみさまが疫病でしなれたけれど、佛かゝへて葬禮を出す工面が出來ぬと、たつてのおたのみゆゑ貸てあげたものを、義理のわるい。いつそのこと、此布子はその袷のかたに只とつておきやせう。ていしゆ「アヽこれ申、とつともう、やくたいもないこというてぢやわいな。わしが嬶が、いつ疫病でしんだぞいな。あたけたいなこといはんすわいな（ト、ていしゆ、大きにはらたてる。彌次郎兵衛をかしく〳〵）「どうも此男はくちがわるくてなりやせん。了簡しなせへ。そして何角とめんだうな。そのぬのこも壹貫にまけてやりなせへし。ていしゆ「よござります。朝商ぢや。まけてあぎよわいな。シヤン〳〵。北「まづは、ぬのこにありついた（ト、彌次郎に代錢をはらはせ、かのぬのこをきて、彌次郎兵衛に木綿合羽をかへし、此うち出ろとてのれんを見れば、とらやとあるにおもひよりて、）

和藤内三貫あまりの古布子
老一くわんにもとめこそすれ

それより、きた八は忽に元氣をえて、「ナント彌次さん、すさまじからう。古着屋めをちやらぽこで、はぐらかして、壹貫に見おとしはやすいもんだ。見なせへし、まだ衿垢もつかねへものを。彌「紺の看板と見えて、おいらがおともののやつで、ちやうどいゝの。北「ときに、

こゝらは何といふ所だの。がうてきにいきなたぼ(女)がちら〳〵するわ。彌「ハ、ア、紫ぼうしの野郎どもが見えるから、大かた宮川町(みやがはちやう)といふけんたうだ。北「くるぞくるぞ。美しい妓(おやま)どもがくる。い、ときおいらアきものを買(かつ)てよかつた。まんざらはだかのうへに、その木綿合羽(もめんがつぱ)ちやア、あいつらにすれちがつても、げへぶん(外聞)がわるい(ト、にはかにえりかきあはせて見えはりながら、向うより來るおやまげい子にすれちがひとほれば、一人のおやまふりかへり、きた八を見て、)「はつねさん、見なませ。あの人さんのきりもん(着物)に、おつきな紋がついてちやわいな。ヲ、をかし。ヲホ、、、。はつね「ホンニあほらしい人さんぢや。ヲ、すかんやの。オホ、、、(ト打わらひ行過るゆゑ彌次郎兵衛も心付て、)「ヲヤ〳〵、きた八、手めへのきものを見や。背中のよこちよに大きな紋所(もんどころ)がくつついてゐらア。北「どこに〳〵(ト、ふりかへりてよくみれば、のぼりを、こんにそめたるぬのこゆゑ、ちよつと見てはしれねども、日あたりへ出ると、大きなもんどころあり〳〵とすいて見ゆる。)北「コリヤ大變々々。彌「ハ、、、すそのはうには、鯉の瀧のぼりが見えるから、こいつ幟(のぼり)のはぐらかしものだ



な。北「エヽ、古着やめが、とんだ目にあはしやアがつた。だうりで安いとおもつた。ぶんのめして來よう。彌「ナニうつちやつておきやれ。みな手めへがべらぼうからおこつたことだ。さきは商賣だものを、しかたがねへ。北「エヽいめへましい（ト、まじめになりてつぶやきながら、四條とほりに出れば、名にしおふ川東のきつすゐ、ぎをんまちのはんじやうは、りやうかはの芝居、やぐらだいこを打まじへ、てんから〳〵のおといさましく、狂言の名代かんばんはなやかに、ついのはでもやうきかさりたる東西の木戸番、しほからごゑにて、）「サア〳〵ひやうばんぢや〳〵。今が三五郎の腹切ぢや〳〵。此あとが、あら吉と友吉が所作ごと。ひやうばん〳〵〳〵（ト、よびたつる。江戸で火なはといふは京、大坂にてはみな女なり。北八彌次郎兵衞がそでをひいて、）女「モシナおまいさん方、ひときく見てお出んかいな。北「いかさま、ナント彌次さん、京のしばゐも、ひときり見ようぢやアねへか。彌「おもしろからう。女中いくらで見せる。女「よござりますわいな。わたしがどうなとするさかい、マアお出なされ（ト、二人を兩はうの手にひつぱり、引つれてしばゐへはいり、二かいへあがると、さじきばん來り、ふたりを向ふさじきのまへがはへ入れる。もつとも幕の内にて、中うりのあきん人こゑ〴〵に、）「みづからうぢやま〳〵、まんぢうよいかいな。「茶アあがらんかいな。ちやゝどうぢやいな。「ばん付ゑばん〳〵。彌「がうぎに大入だ。しかしえどの芝居の半分でもねへ、北「アヽたいくつだ。一ッぱいのみたくなつた。彌「おらア腹がへりまの大根だ。くわしでも買てくはう。商人「みづから宇治山。彌「なんだ手づからうつちやる。勝手にさつせへ。商人「まんぢう、どうぢやいな。北「こいつがいつちわかつてゐる。「コレまんぢう三ッ四ッくんなせへ。商人「ハイ〳〵、三文ヅッでござります。（隣りさじきのけんぶつ、）「コレまんぢうやさん、どしたもんぢやぞい。こちの辨當、へしつぶしちや。商人「ハイ〳〵おゆるしなされ。彌「アイタヽヽ、がうぎに足をふんだ。商人「ハイこれは、モシちとおゆるしなされ。北「コリヤどうしやアがる。人のあたまのうへを、金玉をひきずつてとほりやアがる。エヽきたねへ〳〵。（となりさじきの見ぶつ太郎兵衞、）「ヲヽ、權兵衞さん、何買うておいでたぞいな。權兵衞「太郎兵衞さん待てちやあろ。わしや、今あこの棧敷でな、氣疎味い物くてぢやさかい、ソレ見てゐておそなつたわいな。サア〳〵こないなもんぢや（ト、竹の皮づつみを出す。）太

郎兵衛「ハア鯖のすもじかいな。コリャきよとい〳〵。その飯は辨當のかはりにして、さかなはへがして、酒のさかなにさんせ。それがよいわいな。權兵衛「さよぢや。竹の皮はもていんで、草履のはなをたてるわいな。イヤ、ときに一盃やろかいな(ト、ちいさなちよくを取出し、ふろしきにつゝみし、とつくりよりついでのむ。北八これを見て小ごゑになり、)「彌次さん見ねへ。うまさうにのみをるがうらやましい。彌「エ、、いめへましいことをいふをとこだ。北「コレ、おばうさん、おまんひとつあげやせう(ト、おのれがくひのこしたまんぢうひとつ、となりさしきの子どもにやる。これにてあしをつけて、さけをのまうといふ下ごころなり。)太郎兵衛「コレハ、お有がたうござりますわいな。北「おめへがたアよいものをあがりなさる。太郎兵衛「おまいも御酒はおすきかいな。北「さやう〳〵、めしよりは好物さ。太郎兵衛「ソリャよいおたのしみぢやわいな。コレ權兵衛さん、ゝひとついたゞこかいな。ヲト、、、コリャよい酒ぢやな。權兵衛「さよぢや。ホンニおとなりのお客、御退屈ぢやあろ。是なとひとつあがらんかいな(ト、ちやわんをさしいだす。きた八、手に取るよりはやく、いたゞきて、)「ハイ、ありがたうござりやす。太郎兵衛「しかしさめはせんかいな。モシ、おてうしごとそれへあぎよわいな(ト、茶やのどびんを、きた八にわたせば、もつけなかほしてうけとり、ついでのめばぬるい茶なり、)北「エ、、ちやださうな。ペッペ〳〵。太郎兵衛「おぬるなつたぢやあろ。北「とてもぬるい序に、どうぞ、是へその德利のをうめて下さりませ。太郎兵衛「これはしたり。コレ見なされ。こないになつたわいな(ト、とつくりをさかさまにして見せる。)彌「ハ、ハ、、、ごふさらしな。北八小ごゑに「いめへましい。まんぢう一ツぼうになつた(ト、ぶつ〳〵、くちのうちにことといひながら、ふくれてゐると、此内がくやにてひやうし木、)「カッチ〳〵。見物「イヨ、口上さまア。口上「とうざい〳〵。ひやうし木「カッチカッチ(ト、此内口上もすみ、まくのうちにて、)たいこ「てん〳〵てれつくてん〳〵。ひやうし木「カッチ〳〵カチ、、、。三味「ツツテンツ、テン〳〵。(幕ひらくと、はな道より、しだしのやくしや、大ぜい出ると、けんぶつのわる口、)「イヨ大根ウ。十把ひとからげぢや。北「ナニ大根とは、アノ役者のことか。何のこつた。見物「ヨウでけますの。北「ありがてへと申やす(ト、此きた八、いたつてしばゐずきゆゑ、まくがあくとむちうとなり、何もかもうちわすれて、むしやうに大きなこゑしてほめるゆゑ、

見物みな〳〵をかしがり、きた八のはうを見てゐると、)北「ヨウ〳〵大根(だいこ)め〳〵。(此大根といふ事は、上がたにては役者の下手なものを大根といふ。北八、そのわけはしらず、人が大根〳〵といふを、きいたふうに、やくしやさへ見ると、大根ノ〳〵とよびたつるを、見物、北八を小ばかにして、)「イヨ盲禄(まうろく)さまア〳〵、きた八をわらふ。かみがたにてまうろくといふは、えどにていふをり介といふ事也。きた八、こんのぬのこをきてゐるゆゑ、見物、かんばんきたるとおもひて、かくいふなれど、北八、もうろくのわけをしらねば、)北「彌次さんきいたか。こつちの役者には、いろ〳〵のへんちきな名がある。大根(だいこ)だの盲禄(まうろく)だのと、よもや俳名(はいみやう)ぢやアあるめへ。彌「大(おほ)かた役者の仇名(あだな)だらう。北「そんなら今出(いまで)た役者が盲(まう)ろくだな。ヨウ〳〵、まうろくありがてへぞ〳〵、いふと、見物にどつとおちがきて、きやうげんは見ずに、きた八のはうばかり見て、どつ〳〵とわらひながら、)「イヤ、向ふさじきのまうろくさま。おほでけおほでけ。見物「あほよ〳〵。向ふさじきのまうろくのあほうヤアイ。北「なんだ、むかふさじきのまうろくたアなんのこつた。はなつたらしめら。彌「ハ、、、ハはなつたらしたア手めへのこつたわ。北「なせ〳〵。彌「上がたで、まうろくといふは折介(をりすけ)のことだわ。手めへ紺のか



んばんをきてゐるから、それでみんなにひやかされるのだわ。北「エヽ、さうか。そんならとつくにさういつてくれればいゝに。見物「あほよ〳〵。北「イャこいつらはふてへやつらだ（ト、むしゃうにりきむと、見物みな〳〵さわぎたち、けんくわよ〳〵と、大さうどうとなると、さじきばん四五人來り、北八をとらへ引出さんとする。）北「コリャどうする。さじきばん「おまい、狂言の邪魔になるわいな。こちごんせ。見物「そいつ、はやういなせヤイ。北「なにぬかしやアがる。さじき「ハテよいわいな。彌「コリャきさまたち、此男をどうする。さじき「イヤおまいもごんせ〳〵（ト、ふたりをちうにつりあげ、下へかきおろし、くち〳〵に何のかのと、べちやくちや、まるめられて、のぼせあがり、せんかたなく、エ、めんだうだと、兩人こゞとたら〳〵、しばゐを出てぎをんまちのかたにおもむく。）北「エヽごふさらしな。ハヽハヽヽ。

木戸錢を棒に古手の布子にて
しばゐも紺のだいなしにせし

それよりゆき〳〵て、祇園の社にまゐる。御本社の中央は大政所、牛頭天王、東の間は八王子、西の間は稲田姫。聖武天皇の御宇、吉備大臣、唐土より歸朝の時　播磨の廣峯に垂迹し給ふを崇奉れりといふ。其外攝社末社、しるすに



いとまあらず。参詣日々に群集し、茶店あまた祇園香煎の匂ひ高く、歯磨うりの居合抜、賣藥のいひたて、うき世ものまね、能狂言、境内に所せきまでみち〳〵たり。（こゝにもさま〴〵、方言をかしみあれども、其おもむき、感和亭のあらはす舊觀帳に、ことふりたれば、こゝにりやくす。彌次郎兵衛きた八、こと〴〵くじゆんぱいして、南の方、樓門を出ると、二けんぢや屋、とうふでんがくのめいぶつにして、あかまへだれしたる女ども、大ぜいかどにたちてしやべる。）「おやすみなされ〳〵。これへおはいりなさらんかいな。コレナおしたくなさらんかいな。彌「ハヽアこゝが川柳點に、とうふ切る顔にぎをんの人だかりと、いつた所だな。アレきた八見や。こいつは妙だ〳〵（ト、のぞいて見れば、女のとうふきる音、）「トントトト、、トン〳〵。北「ホン ニおもしろへおもしろへ。イヤときに、こゝで一ぱいやらかしはどうだ。ちと腹が北野の御神木だ。女「サアおくへおはいりなされ（ト、此内、兩人おくへとほる。）女「おちや、あがりませ。北「でんがくで飯にしよう。酒もすこし。女「ハイ〳〵。彌「京では何でも、他國ものと見ると、とはうもなく高くとるといふことだから、ゆだんはならぬ。北「ホン ニそれ〳〵、三文でも割をくつちやアごふはらだ（ト、



此うち、女、さかづきをもち出、口とりに菜のひたしもの、丼に入れ持出、）女「たゞ今、おでんがでけます。マア一つあがりなされ。弥「よし〳〵。モシ女中、酒はいくらづつだの。女「ハイ〳〵、わたくし所の御酒はよござります。六拾匁がへでござりますといな。弥「エ、それぢやアわからねへ。此どんぶりはいくら。女「それかいな。五分でござりますわいな。北「めしをはやくたのみます。女「ハイハイかしこまりました（ト、ぜんを二ぜんに、めしばちでんがくを持出、）「ハイおでんが出けました。弥「こいつは變な田樂だ。女「ソリヤ葛ひきぢやわいな。おむしのは只今。弥「でんがくはいくらヅツだ。北「ハ、、、いかにさきへ直をきくがいゝとつて、田樂はきかずといゝぢやアねへか。サア一ッぱいはじめねへ。弥「オットト〳〵、なるほどいゝ酒だ。水ッぽくてねからのめぬ。もういつぱいつゞけよう。北「コレおめへ、こゞとをいひながらひとりでのむの。ちとこつちへよこしねへな。弥「ときにこれではいかぬ。モシ〳〵何ぞさかなをひとつ。女「ハイ〳〵（ト、やがてすゞりぶたを持來る。）弥「この硯ぶたはいくらだ。女「ハイ貳匁五分でござります。北「こいつはたけへ〳〵。弥「へ、うつちやつておきや。あんまりあたじけ



なくしやアがると、おれがこまらせてやる仕法がある（ト、だん〳〵肴を出すごとに、そのねだんをきゝて、出ただけのもの、のこらずくひしまひて、）彌「サア〳〵、女中勘定をたのみます。女「ハイ、それへ（ト、かきつけを、はかりにそへてもちきたる。）彌「ドレ〳〵、北八見や。ざつとした所が此書附だ。北「ヲヤ〳〵拾貳匁五分だア、がうせへにたけへ〳〵。貳朱ぐらゐのものだ。彌次さん、まけて貰ひなせへ。彌「イヽヤ安いものだ。ソレつりをもつてきな。サア〳〵きた八、荷物ができた。これをみな持てけへろのだせ（ト、すゞりぶた大ひら、どんぶりなどを、みなはながみにてふきかたづけるゆゑ、）北「彌次さん、それをどうする。彌「コレ女中、コリアみな、もつてけへりやすぞ。女「イエ、それは。彌「ハテ、さつきに、此どんぶりはいくらだときいたら、五分だといつたぢやアねへか。そして硯ぶたはといへば、貳匁五分だといふ。よしか、大平が三匁、よしか、此鉢はときいたら、これが三匁五分と、きさまがいつたにちげへはあるめへ。そこで〆た所が拾貳匁五分わたしたから、いひぶんはあるめへ。女「ヲホヽヽホ、ようちやら〳〵と、てんごういふおかたぢやわいな。ヲホヽヽ。彌「イヤ、ホヽぢやアねへ。ほんとうにもつてけへる（ト、まじめになつて、ふろしきにつゝまうとするゆゑ、女きもをつぶし、）「モシナ、わたしのいうたは、おさかなのことでござりますわいな。彌「ハテさかなの直段きく氣なら、此すゞりぶたにもつてあるさかなはいくらだときゝやす。それを此すゞりぶたはといつたら、貳匁五分だといつたぢやアねへか。女「そぢやて、それがまあ。彌「ナニ、いさくさがあるもんだ（ト、やりつかへしつ、いふところへ、ゐさいをきいてまへだれしたるをとこ、かつてより出、）「ハイこれはあなたの御尤、よござります。おもちなされませ。そのかはり、道具の代物はいたゞきましたが、おがつたもののおはらひは、まだいたゞきませんわいな。それを御勘定下さりませ。彌「なるほどなるほど、くつたものは高がしれてある。はらひやせう、いくらだ。男「ハイ、七拾八匁五分でござりますわいな。彌「とはうもねへことをいふ。おいらを盲だとおもふか。コレエ、たつた五百か六百がものをくはせておいて、大それたことをぬかしやアがる。男「イヤ、わたくし方では、何ぢやあろと、おさかなは、大坂から歩行荷でとりよせますさかい、駄賃がえらうかゝりますわいな。彌「さかなはそれにもしてや

らうが、青物はたかゞしれてある。アノはじめに出した、菜のしたしものはいくらにつく。男「ハイ、あれはな七匁五分。彌「ヤア、あれが七匁五分たア、あんまり人をうつむけにしやアがる。三文か四文がものだ。男「そないにおつしやりますな。ありや京の名物で、東寺菜と申ますわいな。わたくし方では別につくらせまして、虫のくた菜はのけますわいな。そして莖もふといほそいのないやうに、撰出してあげるわいな。むさいおはなしぢやが、糞も絹ごしにしてかけますわいな。彌「とんだことをいふ。そんなことがあるもんか。何でも、くつたものゝ代は二朱ばかりやらう。男「イエ〳〵、さよぢやなりませんわいな。ハテ、たかいとおぼしめすなら、あがつたものを殘らずおもどし下さりませ（ト、此一言にこまり、彌次郎兵衛やつきとなりて、せりあうた所が、りくつづめにあひて、大へこみとなり、まじ〳〵すれば、）北「エヽめんだうな。彌次さんはじまらねへせ。彌「いま〳〵しい。云分があれど、かんぢやうづくで恰好がわりい。了簡してやらう。よくおぼえていやアがれ（ト、にらみまはして立上り、はう〳〵この所を出れば、）女「ようお出、またおちかいうちにへ。彌「くそをくらへ。ハヽヽヽ。

又してもぎをんの茶やにでんがくの
　みそをつけたる身こそくやしき

それより境内を出、もとの四條どほりをゆくに、日もはや七ッさがりとなれば、いそぎ三條に宿をもとめ足休んとたどりゆくさきにたちて、近在の女商人、いづれも頭に柴、薪、あるひは梯子、連木、槌などをいたゞきて、四五人打つれだち、「はしご、かはしやんせんかいにやア。れん木いらんかいにやア。北「コウ見ねへ。がうせへなものをあたまへのつけてゆくわ。彌「アノまた、尻をふるざまはい、ハヽヽヽ。女商人「たきゞ、かはしやんせんかいにやア（ト、ゆき〳〵て河原に出ると、かの女ども、おの〳〵ここに荷をおろし、すり火打にてたばこなどのみてやすむ。彌「ハヽア、さすがは都ぢや。どいつも小ぎれいな面つきだ。ちと冷かしてやらうか。北「またおめへ、へこまされようとおもつて。彌「ばかアいふな。手めへぢやア有めへし（ト、きせるをいだし、女あきん人のそばへより、）御無心ながら、火をひとつ。パツパ〳〵〳〵。ときに、おめへがたア、とんだおもてへものを、よくあたまへ置きけてあるきなさるの。女「さよぢやわいな。北「ナニ此くらゐなものを。おいらなんざア、廿〆目や卅〆目ある石を、

あたまでふりまはしたものだ。女「おまいさんは、うどん屋の粉なひきぢやあろわいな。彌「エ、手めへだまつてゐろへ。女「おまいさんがたア、どうぞ此連木買うておくれんかいな。彌「ナニ、すりこ木か。アヽ、かひてへが、コリヤアほそい。わつちらが所ぢやア、なんでも材木のやうな、そして四角なすりこ木でなくちやア、間にあはねへ。女「ヲホヽヽヽ、四角にした連木で、おむしすらんすなら、大かたすりばちも四角ぢやあろわいな。彌「さうとも〳〵。おいらが所ぢやア、穴藏でみそをする。女「ヲホヽヽヽ、きやうといきさくなおかたぢやわいな。アノ連木おいやなら、梯子かうておくれんかいな。彌「ハハヽヽ、はしご、おもしろへ。いくらだ。女「けふは、何もようらんさかい、安してあぎよわいな。六匁下んせ。彌「二百ばかりなら引受ようさ。女「アノ、ちやらちやらいうてぢやことわいな。もちとかうて下んせ。彌「いやだ〳〵。女「おまいさん、こないにあぢようしてあるわいな。モシ五匁にあぎよかいな。彌「いや〳〵。女「よいわいな。是もていんだら、ひかられよう。二百にまけてあぎよわいな。彌「ヤアまけるか。情ないことをいふ。女「きやうとうやすいもんぢやわいな。彌「いくらやすくつても、



はしごを買てどうするもんだ、内もねへくせに。女「よいわいな。サアもていなんせ。彌「こいつはあやまる。ありやうは、おいらは旅のもので、今宵は三條にとまらうといふのだから、はしごをかつてもしかたがねへ。女「なにいはんすぞいな。いらんものを、つけさんすことはないわいな。彌「ソリヤもう、直をつけたが不肖だから、いらねへものでも、銕かふところへはいるものなら、買てもやらうが、何をいつても、此はしごだからおそれる〳〵。女「それぢやて丶、わたしらをなぶらんしたのかいな。こちや商賣ぢやわいな。そないなことといやぢや。もていなんせへト、女ども四五人、くち〴〵にやかましくしやべりたちて、彌次郎を中にとりまきせめたつる。すべて、此女あきん人は、みないたつてきのつよきものゆゑ、なか〳〵がてんせず。



ものみだかい京の人だち、何ごとやらんとのことなり、けんくわにもならず。せんかたをりかさなりて、ぐるりととりまくに、彌次なく、錢二百文出してやり、たうとうはしご郎兵衛にげられもせず、大きにこまりはて、をかひとり、人の見るまへすてられもせず、さま〴〵にいひわけし、又はりこみいつて見見物はどつとわらひてちる。彌「こいつはても、いつかうきゝいれず。あひてはみな女いくぢもねへめにあつた。北八、そこ

らまでかついでくれ。北「エヽ、とんだことをいふ。おめへもちなせへな。彌「又一ばんへこんだ、ごふはらな。

　いかにせん梯子の親とこのやうな
　やつかいものをひきうけし身は

かくて四條どほりを寺町へさがりてゆくみち〳〵も、梯子のもちおもりして、つぶやきながら、「カントきた八、手めへ附合をしらぬものだ。ちつとばかりもてくれろへ。北「いかさま、おめへ心がらとはいひながら、きのどくなこつた。さぞおもたかろ。かうしなせへ。アノ女どものやうに、あたまへきけてもつて見なせへ。彌「なるほど〳〵(ト、手ぬぐひをたゝみ、あたまへのせ、そのうへゝはしごをのせ、兩手にもちそへゆくと、わうらいの人、)「コリアなんぢやいな。浮雲てならんわいな。彌「ハイ〳〵、むかうがさつぱり見えねへで、あるかれぬ。わうらいの人「コリヤじやうもんがいくさうぢや。おひやもて出やしやんせんかいな。(じやうもんがいくとは、火事があるさうなといふことなり。)わうらい「どこに、じやうもんがいくぞいな。「アレあこへ、はしごもていくわいな。あほよ〳〵。彌「何ぬかしやアがる。わうらい「ふぬけなわろぢや、ハヽヽヽ。彌「イヤこのべらさくめら(ト、はしごをあたまへのせたなりに、ぐつとふりかへれば、そのはしごゝあとさきにてわうらいのあたまをこつつり。)わうらい「アイタヽヽヽ、何ぢやい、どめつさうな。此人中で、ながいもの横たはしにしくさつて、えらいあんだらぢやな。のうてんどやいてこませやい。彌「ナニたはごとぬかしやアがる。わうらい「わしが額の痰瘤がなうなつた。そこらにやないか、見て下んせ。彌「エヽ、おいらがしるものか。馬鹿な面な。わうらい「えらい頤なわろぢや。たゝんでこませやい(ト、いづれもきかぬ氣のものと見えて、大ぜいどや〳〵と立かゝれば、北八とゞめて、)「コリヤアこつちらがわるかつた。どなたも御れうけん下さりませ。サア〳〵彌次さんあゆびなせへ。彌「いめへましいやつらだ。北八、どうもひとりではもたれぬ。あとのはうへ肩をいれてくれぬか。北「ドレ〳〵、コリヤアおれまでを、とんだめにあはせる。

　是もまた咄しのたねよはる〳〵と
　京へのぼりし梯子一脚

彌「エヽ、歌どころぢやアねへ。どうぞうつちやつてしまひてへものだが(ト、今は二百の錢もをしからず、やつかいものゝはしご、うちすてゝ行かんと、往來すくなき横町へはいり、そつとすておき、にげんとすれば、をりあしく人に見付けられてとがめられ、せんかたなくかつぎあるき、又いづかたへぞ

すてん／＼とおもふりち、うか／＼と三條どほりに來りければ、やど引と見えたる男、)「モシナおまいさまがた、おとまりかいな。彌「とまり／＼。やど「こちのうちかたへお出んかいな。北「おめへどこだ。やど「ツイあこぢやわいな。サア／＼お出んかいな／＼(ト、うちつれて、大はしのかたへゆく。)

道中膝栗毛七編 下

既にその日もはや西におちて、家ごとに灯火をてらし、かどさす頃、三條小橋をうちわたりて、かの旅籠屋のかたに着たるに、やど引「サア／＼おとまりさまぢやわいな。やどの「コレハおはやうおつきでござりますわいな。彌「アイおせわになりやす。ていしゆ「お荷物は。北「此はしご一丁。ていしゆ「コレハ氣疎おにもつぢやわいな。コレ／＼おたこや、おくへ御案内申さんかい。女「ハイ／＼お出なされませ(ト、おくへあんないするにつれだちて、ふたりはざしきへとほると、ていしゆきたりて、)「今晩はお客さまが、いこおすくなうござりますさかい、お湯は焚ませぬ。ツイあこの小ばしさがる所に、きやうときれいな湯がござります。これへなとお出なされ。北「おいらアいゝから、彌次さんお前いくならいつてきなせへ。京の水で洗ふと、がうせへにいろがしろくなるといふことだぜ。彌「このうへしろくなつちや、つまらねへからよしやせう。ていしゆ「ときにあなたがたは、近在からお出かいな。北「イヤわつちらア江戸でござんやす。ていしゆ「かいな。わたくしは又、梯子をおもちなされたさかい、コリヤ近在のお方で、おやどへ買うてお歸りなさるのかとぞんじましたが、どしてえどのおかたが、はしごを何なされますぞいな。北「イヤこれには譯がありやす。アリヤえどからことづかつて來やしたのさ。ていしゆ「ソリヤなんとしてあないなものを。北「きゝなせへ。わつちらが心安いものだが、生れは此京の人で、今江戸に世帶を持てゐやす所へ、京の親元のはうから、はる／＼とアノ梯子をかつがせてよこしやした。そのわけは、かの親御が無筆といふことで、人に手紙を書て貰ふも面目ねへといふ事かして、アノ梯子ばかりよこした心は、のぼつてこいといふことゝろいきでござりやせう。そこで又その息子が返事をよこしてへが、おなじくこれも無筆で、いろはのいの字もかけねへくせに、とんだまけをしみ、わつちらが今度御當地へくるといつたら、さいはひのことだから

ことづけてへものがあるといふによつて、ずゐぶん何でもとゞけてやらうといひやしたら、きゝなせへ。きたねへ乞食坊主ひとりとアノ梯子をよこして、是を親父のはうへとゞけてくれろといひやす。そこでわつちが、コリヤアはしごはいゝが、坊様は生てゐる人だから、もつて行に難儀だといひやすと、其男のいふには、そんならはしごばかりもつていつて、京へついたなら、どうぞ坊さまをひとり頼んで、その坊さまに撞木斗もたせて、梯子と一所におやぢの所へやつて下せへといひやすから、ソリヤアなせさうするのだときゝやすと、イヤ京の親もとから、のぼつてこいといつてよこしたから、そのへんじだと、頼れてもつて來やしたのさ。ていしゆ「ハヽヽヽ、梯子をやつてのぼれといふはきこえてぢやが、そのおへんじに、はしごと又ぼんさまにしゆもく斗もたしてやるとはどうぢやいな。北「ソリヤのぼりたいが、かねがないといふこゝろ。ていしゆ「ハヽヽヽでけましたわいな。しかしはるばるの御道中、はしごのことなりや柳ごりへもようはいるまいに、さぞ御難儀にあつたぢやあろ。北「イヤなかなかさうでもござりやせぬ。道中するには梯子をもつてあるくが、いとんだてうはふなものさ。馬などにのるに



はしごをかけてのると、とはうもねへのりよくて、そして川々をこすにとくなことがありやす。大井川でもあべ川でも臺越といふをすると、川ごしの賃錢が四人まへに、かの臺の賃が一人前出やす所を、梯子持參といふものだから、川ごしの賃錢ばかりで臺の賃がかすりになりやす。おめへがたも是から、もしも道中しなさることがあるなら、かならず梯子はもちなさるがいゝ。コリヤ人の氣のつかねへてうはふなものでござりやす。ていしゆ「イヤ誰も道中するとて、ナニはしごもていこといふ氣がつくものかいな。ハヽヽヽヽ。ときに只今おつしやつた坊さまは、こゝでお雇ひなさるのかいな。北「さうさ是非やとはにやアなりやせぬ。ていしゆ「さよならさいはひのこつちやわいな。わたくし方にせわいたしてをきをります、よい坊がござりますわいな。是をおつれなされませ。只今お引合申ましよかい（ト、たちあがらんとする。きた八きもをつぶし、北「モシ〳〵まつてくんなせへ。今急には入りやせぬ。やつかいものゝはしごをひきうけてこまるさへあるに、又いきたばうさまをとりこんでどうするものだ。ノウ彌次さん。彌「イヤ〳〵ソリヤ手めへのかゝりだから、おいらはしらぬが、何にしろ其ばうさまを、早



くたのむがよささうなものだ。北「エヽおめへまでがとんだことをいふ。ていしゆ「ハテ今あなたの いうてぢやとほりなら、せひともおたのみなさるのぢやないかいな。北「それはさうだけれど、ていしゆ「なんぢやあろと、わたくしへおまかしなされ。北「そんなことより、おらアはやく飯がくひてへ。ていしゆ「御せんも今あげますが、ぼんさまはどうぢやいな。北「ヲヽサぼんさま、はやくくひてへ。腹がへつてこたへられぬ。ていしゆ「ハイ〳〵かしこまりましたわいな(ト、かつてへたつてゆくと、ほどなく女めしを出す。しよくじの内さま〴〵むだあれども、あまりくだ〳〵しければりやくす。やがてぜんをひきたるに、やどのていしゆは北八がちやらくらにのつた顔して、なぐさみはんぶん、これもぶしやれものなれば、としのころ六十ちかき、うすよごれたひげむしやくしやの大坊主壹人誘ひきたりて、)「イヤもうめしあがりましたかいな。ときにたゞ今おはなし申ましたは、此ぼんでござりますわいな(ト、引合すれば、此ばうずはなひしやげにて、はな聲なり。)「ハイ是はひやうおとまりなはれました。愚僧名はひやんてつと申ます。内かたのはんなどのがおはなしゆゑまゐりました。彌「コレハ御苦勞。サア〳〵これへ〳〵。北「コリヤ御亭主さん、だん〳〵おせわだが氣のどくなことがありやす。ていしゆ「なんぢやいな。北「イヤ無躾ながらアノおかたでは間に合ますめへ。なぜといふに、ちつとばかり素人狂言でもしたといふやうな坊さまでなけりやアなりやせん。ていしゆ「ソリヤどしたもんぢやいな。北「イヤさつきおはなし申たとほり、さきの親元へいつて、のぼりてへが金がねへといふことを返事したうへで、かのむすこが三百兩なければのぼられねへといふものだから、その心いきをせにやなりやせん。所でかの盛衰記の梅がえが、無間のかねの所作事、しゆもくを柄杓とこじつけて、チヽヽチン、アヽ三百兩のかねがほしいなアなぞと、その坊さまに、やらかしてもらはにやアならねへといふものだから、むつかしい。ていしゆ「イヤよござります。此ぼんもありやうは、馬鹿村變之助と申て、以前は宮芝居の女がたをやりをつたものぢやさかい。えらでけぢやわいな。さいはひこちの娘めが、今むげんのかね習うてぢや。何もなぐさみ、ちよぼかたらしてやらしましよかいな。丸てつ「ひやりましよとも〳〵。わしふめがえをひやるさかい、どなたぞへんたをやて下んせ。彌「コリヤおもしろい。鼻くたの梅がえに、北八、源太は手めへ

が相應だ。北「エ、ばかアいひなせへ。わるいしやれだ（ト、まじめになり、こと〳〵いつてゐるうち、ていしゆがさしづに、十三四のむすめ三みせんを抱へてくると、うちの女房、下女、めしたき迄つぎのまにかたまり、ぐわんてつばうをそゝのかしながらけんぶつする。彌次郎をかしく、）「コレ北八、アノとほりかみさまや女中たちが見物してちやが、一ばんおちをとる氣はねへかどうだ（ト、袖をひかれて北八すこしうかれがきて、）「いかさま見物が多いと、はりやいがある。まゝよ源太におれがならう。そのかはり、いひぐさは出たらめにやるがいゝか。ぐわんてつ「ひよござります〳〵ひよござります。サア〳〵おとらさん、へん太の出端からやて下んせ。彌「ハ、ハ、髭むしやくしやのむめがえもいゝが、源太が幟を染返した着物きてゐるもめづらしい。北「コレ〳〵とうざいとうざい（ト、此うちむすめじやうるりをかたりいだす。）へ夜ごと〳〵にかよひくる、梶原源太景季、ちとせがおくを伺へば、ちやうどよいしゆびさいはひと、ずつと通れば梅がえは、こたつにとんと身をそむけ、そらさぬかほでふくきせる。北「コレ何がきげんにいらぬやら、めつきりともたせぶり、われらがやうな浪にんの、黴た衿にはつかれまい。じやうるりへずんとたつを待しやんせ。ぐわんてつ「座敷ばかりをふとめるひやすで、けふ実へほらはれたは、文でひらせてがてんち



やないか。じやう「にくい男と目にもろき、涙は戀のならはせなり。北「ア、コリヤよるな〳〵、くさくてならねへ。そつちへぐつとよつた〳〵。がうせへにくさい梅がえだぞ。ぐわんてつ「ひよりやきこえませぬへんたさん。北「エ、よるなといふに、コリヤ手みじかにやつてくれう。コリヤばうず、イヤ梅がえ、產衣の鎧はどうした。ぐわんてつ「ひちなん即滅と、三百目にまげたわいの。北「ナニ打ころした。ソリヤなぜに。ぐわんてつ「そもやわたしがよこねから、ほねうになつて山歸來、のむほどに〳〵、氣種はしくしく、此ひやなをたすけたいばつかりに、ひやねならたつた三百目で、ひくいひやなをおとすか、ア、ひやながをしいなア。三下りへ二九の十八でつい其心、二八十六でふみつけられて、四五の二十なら一期に一度、わしや帶と



かぬ。ぐわんてつ「エ、なんぢやの、ひとのこゝろもひらずにふたいくつさる、ほんにひよれよ。彌「イヤまつた〳〵（ト、これもこたへられず。かつてにゆきて、いぜんのはしご、みせの間に横たふしにしてありしをひつさげ来りかもゐにうちかけ、二階のきどりにて、彌次郎ちうだんにのぼりながら、手ぬぐひをたゝんで、だいじんふうにちよいとあたまにのせて、）「サア〳〵源太が母の安壽のやくだ。サアをしやうやら

かしねへ。ぐわんてつ「つたへきく、ふけんのひやねをつけば、有徳自在、心のまゝ、ほれよりはよの中山へはるかの道はへだたれど、ほもひつめたるあが念力、此ひようづばちをひやねとなぞらへ、ひしにもせよ、ひやねにもせよ、心ざす所はふけんのひやね(ト、きせるおつとりいろ〳〵ある。此時彌次郎はしごのうへより、うちがへのぜにをばら〳〵と、なげ出しながら、じしんにじやうるりかたる。)〽そのかねこゝにと、三百文うちがへの錢なげいだす。みやまおろしに山吹の、花ふきちらすやうにはあらで、ぐわんてつ「こゝに三文かしこに五文、ひろひはつめてひやん百銅、コリヤ雇れの賃錢さきどりとはありがたい(ト、かきよせて、たもとに入れんとするを、彌次郎兵衛はしごのうへからぐわんてつをとらへ、)「ソリヤやるのぢやアねへ。おれがのだ(ト、ひつたくらうとするに、ぐわんてつは、やるまいとあらそふひやうしに、かもゐにかけたるはしごはづれて、彌次郎兵衛ひつくりかへり、どつさりおちると、はしごはぐわんてつのうへになり、むすめも、ひはらの骨をうたれてわつとなきいだせば、彌次郎こしぼねをなでさすりながら、)「アイタ、、、ぐわんてつ「ア、ウウ〳〵。ていしゆ「どしたぞやい〳〵(ト、家内ちうがうろたへたちて、たばこぼんひつくりかへすやら、あんどうをうちこはすやら、



さしきぢうたゞまつくらとなり、なくやらわめくやら大さわぎとなり、ていしゆやうやくあかりを持來り、)「ア丶コリヤいとめはどうぢやい。イヤ梅がえがをかしな目をしをるわい。コレ〳〵氣をたしかにせいやい。ぐわんてつ「ア丶〳〵くるしい。あしや悔りしてはつとはもうたへいやらして、ひんたまがうへのはうへつッたわいな。アイタ丶丶丶。彌「ソリヤこまつたものだ。モシ〳〵御ていしゆさん、梅がえがきん玉をつるしあげました。北「きん玉のあがつたにはよいことがある。さつき見れば、こゝの見せに錢膏藥といふ看板が見えたが、それをぼんのくぼへはるときんがさがる。ていしゆ「何いはんすぞいな。錢がうやく首筋へはつたて丶、何さがるものかいな。北「ハテさがる理屈さ。なせといひなせへ。錢があがればきんがさがる。ていしゆ「エ丶なんのこつちやいな。ぐわんてつ「ア丶わしやどうやらよいやうぢやが、いとさんはどうぢやいな。やどやの女房「コレ誰なと一はしり寸伯さんへいてたもらんかいな。ぐわんてつ「わしやもうよいさかい、醫者さまよんでこうわいな。其かはりお寺へは、たれなと外のものをやらんせ。ていしゆ「エ丶何ぬかしくさるぞい。北「ホンニお氣のどくなこつた。娘御はどこをうちなすつた。ていしゆ「ひはら、えらううちをつたて丶、いたがりますわいな。彌「いたいひはらは都の生れ、人にどやされ、ひよんなめにあはれて、ア丶お笑止千萬なことだ。ていしゆ「イヤおまへ、人の娘に怪我さして口合所ぢやあろまいがな。彌「ハ丶丶丶丶。人のむすめにけがさしたとは、わしやどうやらはづかしい。ていしゆ「イヤわらひ所かいな。そうたいこなさんたちはけたいぢやぞや。彌「けたいとは何がけたいだね。ていしゆ「なにがとはちよこいうてぢや。ようおもうても見さんせ。わしや此年までやどやしてをつたが、終に梯子もてきた客をとめたことはないわいな。いつたい遠國のお方が、何しにはしごをもてあるかんすやら、こちやとんとよめんわいな。もしも屋ねからをどりこむ衆ぢやないかと、家内のもんがぼやいてぢやあつたが、なるほどやばな事しかねん衆と見えるわいな(ト、ていしゆやつきとなり、すこしことばあらく〳〵しくいふ。此をどりこむとは、上方にては夜盜のことををどりこみといふゆゑなり。もとより彌次郎兵衞むかばらたちなれば、)彌「イヤおめへをかしなことをいふ。わつちらアしらきちやうめんのお旅人さまだ。おつにひねくつたことをいふと了簡がなりやせぬぞ。ていしゆ「ヲ丶いしこやの、なに

いうたて丶丶、こなんたちが梯子もてござんしたから、おこつたことぢやわいな。女ばう「是いなア、そないな人にかまはずと、こち來て下んせ。いとがアレアレひよんな目つきしてぢやわいな（ト、なみだぐみてさわげば、ていしゆもうろ〳〵）「コレ見やんせ。もしもいとめがしにをると、こなさんは解死人ぢや。さうおもうてゐやんせ。女房「アレ〳〵たはいがないわいな。ていしゆ「コリヤ目がまうたのぢや。ヤアイおとらヤアイ〳〵。女ばう「いとイのう〳〵（ト、ふうふはむすめをかきいだき、水よ、きつけよとさわぎたちてなきわめけば、彌次郎にはかにうろたへ出し、）「エヽコリヤきた八どうしたゐのだらう。おらアもうこゝにやアゐられねへ。ていしゆ「コリヤ〳〵おとら、しんでくれたな。どうぢやぞやい。女房「おとらイのう。ていしゆ「おとらやアい。彌「エヽなさけない。コリヤたまらぬ〳〵（ト、うろ〳〵してたつたりゐたりさわぎたつと、）ていしゆ「コレこなさん、どつちやへもやることならんぞ。彌「ハイ〳〵どこへもいきはいたしませぬ。コリヤコリヤ北八、せんてへ手めへがわるい。何のありていにいへばいゝものを、ちやらくら嘘をついたからおこつて、無間の鐘だのなんのと、ろくでもねへことをはじめたから、此さわぎになつた。もとは手めへが發頭人だから、解死人はそつちへゆづるぞ。北「ヲヤとんだことをいふ。當人はおめへだわな。彌「そんなら拳をしてまけたはうがげしにんだ。北「ばかアいひなせへ。おいらアしらぬしらぬ（ト、此内、いしやもきたり、くすりなどあたへ、さま〴〵かいはうするうち、むすめやう〳〵いきふきかへせば、みなみなあんどし、彌次郎むねなでおろし、おちつきて、此うへはあやまるにしくはなしと、北八をたのみ、だん〳〵詫ごとし、あやまりしようもんをかきて、やう〳〵と此いさくさをさまりける。尤北八がはんにて、しかつべらしくかきたるそのしようもん、）

一札之事

一我等此度ひらがな盛衰記淨瑠理之内、安壽の役相勤候所實正也。然る所、梅がえ無間之鐘相撞候節、其金是に罷有趣申之、打替之烏目投出し候迚、梯子爲辷候故、丸鐵どの陰囊御釣上被成、并貴殿息女へ怪我爲致候段、全右梯子鴨居へ打掛候より事起候趣、預御腹立無申譯段々誤入候所、御了簡被下忝存候。然る上は、以來御宿御無心申候とも、梯子抔決而持參致間敷候。爲後日

仍而如件。

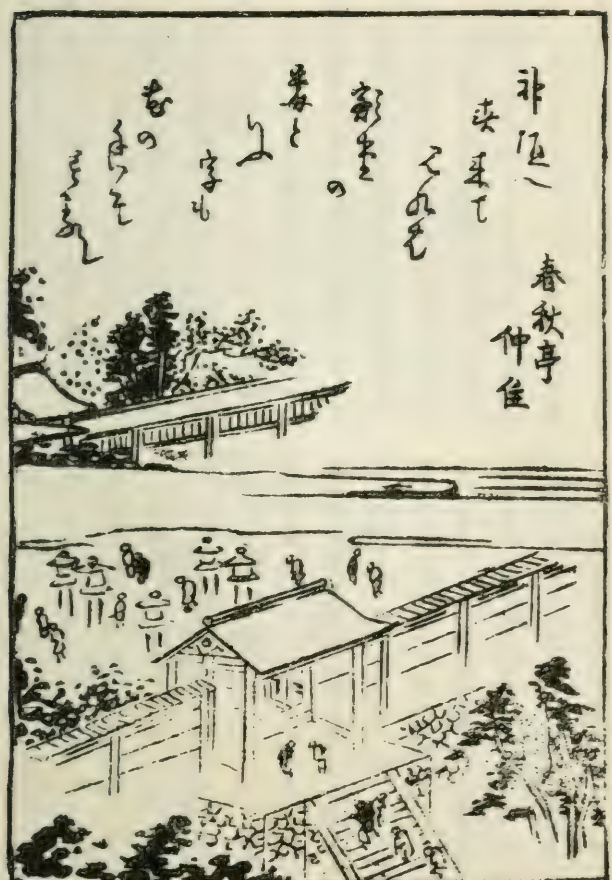
月　日　當人　彌次郎兵衛

證人　北　八

此證文にて事をさまり、やどの娘も次第に心よく、中直りの酒くみかはして夜もふけゝれば、ふたりはやがてうちふしたるに、程なく夜あけて、家内の人々おきたちたるもの音に、目をさまし、支度調へ、そこ／＼に立いづるとて、彌「コレハ大きにおせわになりやした。ことにいろ／＼なことでおきのどくな。ていしゆ「御きげんようお出なされ。女ばう「モシ／＼おはしごがござりますわいな。彌「イヤもうそれはこちらにおいてくんなせへ。けふは所々見物して、晩程またおせわになりやせうから。ていしゆ「イエ／＼おもちなされ。そしてこちやばんほどは、おさし合があるわいな（ト、いつたいていしゆはこのふたりを、うろんにおもひゐたりしゆゑ、はしごもあづかることときみわるく、いかなるこうなんやあらんと、うけつけされば、せんかたなく又かのはしごをうちかつぎ、このところをたちいで、）北「ナントけふはどつちの方へまごつくのだ。彌「イヤまだひがしに見物してへ所があるが、マアけふは北野の天神さまへいきやせう（ト、だんだんみちをたづねて、ほり川どほりに出、）北「ときにおもひ出したことがある。ソレ伊勢の古市で京の人と一座したが、慥にその人は、千本通中立賣とやらいつたが、北野の天神さまへゆく道だといつたぢやアねへか。彌「ヲヽサ邊栗屋の與太九郎か。北「ソレ／＼そいつが所へ尋ねていつて、酒でも呑でやろうぢやアねへか。彌「ナニあたじけなすびがのませるものか。北「ところをおいらが術に懸て呑倒さう（ト、わうらいの人に千本どほりをたづね、中立うりにいたり、へんぐりや與太九郎のかたへやう／＼とたづねあたりて、れいのはしごをのきにたてかけて、彌次郎兵衛、）「御めんなせへ（ト、からし戸をあけてはいれば、與太九郎、）「誰ぢやいな。コリヤめづらしい。ようおのぼりぢやわいな。彌「さてマアいせでは大きにおせはになりやした。與太「なんのいな、サアこちはいりんかいな。北「ハイおひさしうござりやす。與太「イヤこれはこれはまだおゐてに、おつれさまがあるさうぢや。北「ふたりばかり誰もをりやせん。與太「それでもアリヤなんぢやいな。彌「はしごのことかへ。與太「何ぢや梯子おもたせかいな。コリヤきよとい。北「イヤおめへのところは中立賣、ひよいとあがる所だといひなすつたから、もしも高い所なら梯子かけて登うとおもつて、わざ／＼もとめて持參い

たしました。與太「ハヽヽ、。コリヤおでけぢやわいな。時に何もお愛相がない。おしたくはどうぢやいな。彌「アイ今朝やどやでたべたまゝ、中食はまだいたしやせん。與太「ソリヤおたのしみぢやわいな。さゝなとあげたいが、此へんに酒屋はなし。北「さかやはぢつきにおとなりにあるぢアねへかへ。與太「イヤあこでは小賣は致しませんわいな。せつかくのお出、おたばこでもあがりなされ。北「たばこはこつちのだから勝手にいたしやせう。與太「おまいがたせめてもちつとさきへよつてお出なさると、きやうといものがあるわいな。かつら川の若鮎、いきてをるのを鹽燒か魚田にすると、ねからはから甘いのなんのと、いふやうなこつちやないわいな。イヤまだ四條の生洲が近いと、おともしていこもの、あこの鱣は加茂川でさらして、とつとちがうたものぢや。きやうとううまいがな。そしてあこは玉子燒を、えらうようしてくはすわいな。何ぢやあろと是ほどに大きう切をつて、ぽつぽといきの出るのを南京の薄鉢にもつて出しをるが、うまいというては、ねからくゝんでもつやうぢやわいな。ホンニそれよりまた秋にお出なさると、とりどりの松茸ぢや。當所の名物でこれがまた外にはないわいな。あたらしいのをすましのすひ物にして、ちよつと山葵おとして、さけの肴にいたそなら、とつともうなんぼくうても、ねからあきがないわいな(ト、はなしばかりしてたにも出さぬゆゑ、北八こらへかね、そつとぬけ出てとなりのさかやへのみにゆく。はなしに身をいれて與太九郎は一向北八のにげたるをしらず。)與太「イヤ最ひとりのおかたはどこへいかんしたぞいな。彌「もうかへりやした。與太「はてさてねからしらなんだわいな。いつのまにいんで、あつたぞいな。彌「今松だけのおすひものゝ出た時、中座いたしやした。與太「ソリヤ殘多い。後段にまだお菓子のおはなしいたそもの。彌「イヤもう、さき程から大きにおちそうになりやせぬ。おかげでひもじい、おいとまいたしやせう。與太「イヤおまちなされ、よい所へお出たわいな。ちとおはなしがあるわいな。アノ伊勢の古市でおつき合申たときのこといな。あの時の入用、金壹兩ぢやあつたがな。わしや算用ちがひして金壹分貳朱こちから出しておいたさかい、コレ見なされ、道中の小遣帳に、おやま屋のつけも何もかも、こないに細にかきつけておいたが、うちへ戻つて算用して見ると、おまへがたひとり前百二十四文づゝ、わしのはうへお

貰ひ申さねば、算用があはんわいな。わづかのこつちやさかい、どしてもだんないが、とるにしくはないさかい、おふたり分貳百四十八文おもらひ申ましよかいな。彌「エヽおめへも今となつてきたねへことをいふ。そればかりのこと、うつちやつておきなせへ。こつちでも、たてかへた事がありやす。與太「ソリヤあげるのがあらば上るさかい、いひなされ。算用は算用ぢや。マアこちへとるのが此とほりぢやさかい、斯しましよわいな。はしたまけてあぎよわいなっ、貳百文くれなされ。彌「エヽげへぶんのわるい。その時とればいゝものを(ト、こごと八ぴやくいへどもがてんせず。かれこれとせりあうた所が、はてしつかず、彌次郎兵衛めんだう也とて二百文出してやると、)與太「ハヽヽヽコリヤ御きんとうちやわいな。是からおまへ方は天神様へいかんすぢやあろ。そしたらついでに平野さま金閣寺へいかんしたがよいわいな。おそなるさかい、はやういてもどらんせ。彌「大きにおせわ(ト、ふくれづらして立出れば、となりの酒やより北八によこり出來りて、)北「どうだ御ちそうがありやしたか。彌「いめへましいめにあつた。なんの手めへがたづねてよらずともいゝものを、錢貳百たゞとられた。北「ハヽヽ、どうして〳〵。いゝわ其代



りアノはしごのやつかいものをこゝにうつちやつておいて、こまらせてやりなせへ。彌「ナアニこまるもんだ。ぢきに賣て錢にするわ。あのやらうめに、はしごまでたゞとられてつまるものか。やつぱりかついでゆかう〳〵ト、それより道をたづね〳〵ゆくほどに、北野の下の森といふにいたる。こゝはいたつて賑かにて、芝居などもあり、見せものまめざう、よみうり講釋、また唐茶釜と異名せし、よしず張りの水茶屋ていなるもの、ところ〴〵にあり。これにをかしき趣向あれども、作者おもふ事あれば省きぬ。これより天まんぐう社内へかゝる道に、なめしでんがくを賣る茶屋、おびたゞしくあり、おかまへだれの女のきに出て、）「あなたおやすみんかいな。菜飯おでんあがらんかいな。茶やあがつてお出んかいな。彌「モシ〳〵わつちらア天神さまへ參詣して、げへりにおめ



への處で休みやせうから、此はしごをこゝにおいてくんなせい。ちや屋「ハイハイおあづかり申ましよわいな。おはやういてお出なされ。彌「おたのみ申やす〳〵ト、はしごをちや屋のかどにたてかけておき、ゆき過て、）「ヤレ〳〵重荷おろした。なんのけへりによるものか。ナント北八はしごをすてたち気はどうだ。北「ハヽヽ、おもしろくもねへ〳〵ト、經堂前よりうこんの馬場にいたる。此處はいつ

も借馬あまた出て、馬のけいこあり。見物夥し。）北「ヲヤすさまじい人だ、なにかあるさうだ（ト、立よりて人をおしわけ見れば、馬のかけをのる人、）「ヒヤアドウ〳〵（けんぶつのときのこゑ、）「ワアイ引。見物「みなえらい下手ぢやな。七軒戻かして腰がふなつきをる。アノこんにやく玉見るやうな天窓の親父めが、えらうようのりくさるわい。見物「アリヤしれたこつちやわいな。博勞のおやかたぢや。見物「かいな。アレあつちやの男見やんせ。手綱をあやにとつてあないな手つきしてゐをる。アリヤ大かた織屋の手傳ぢやあろぞい。そしてアレ〳〵十二坊の弟子坊が、じゆずつまぐるやうなことして手綱もつてぢやわいな。北「おれもひとくら乘てへな。むかうに見てゐるあねさまに（ト、人ごみの中、女づれが二三人たつて見てゐるうしろへまはり、見物しながらまへにたてゐるむすめの尻をちよいとつめる。）娘「ヲ、いたやの。誰さんぢやいな、コレおまるさん、おまいこち來てかしんかいな。まる「なんぢやいな。娘「誰ぢややら、わしがおいどをつめつたわいな。としまの女、「ソリヤをなごのない國で生れた人さんぢやあろぞいな。かまはんすな、ほつておかんせ。娘「エエ北八か、わりいしやれをするなへ。北「ナニおいらアしらねへ（ト、いひさまにくさもにくし、かの年ま女の尻をつめつてやらうと、わきめをしながらそばにより としまのしりとおもひ、おぶつてゐる子のしりをおもふさまつめると、）子「ア、いたいいたい（ト、わつとなく。としまの女、）「たれぢやいな。わるいことさんすわいな。おぶさつてゐる子、「アノおぢさんがつめつたわいのう。女「エ、すかん人さんぢやわいな。娘「かんにしなせい。さりとは外聞のわりい男だ（ト、あしばやにすご〳〵と此所をすぎて、みなみの御門より入りて天まんぐうのほんしやへまゐる。）

おまもりを首にかけつゝたふとまん
さいふの宮をうつす神垣

北野天滿宮は、昔近江國比良社の神主良種、神勅を蒙り、朝日寺の僧最珍右京の文子等と、ちからを合せて靈祠を作り、天德三年右大臣師輔卿、巍々たる大厦をあらためいとなみたまふ。今の北野宮これなり。社頭に渡邊の綱がをさめしといひつたふ石どうろう苔むしてあり。

綱の名はいまだにくちぬ石燈籠
むかしをいまに三ツぼしの紋

東向觀音は梅櫻の二樹をもつて、菅神御手づからきざませ給ふ所なりといへり。

御利益は四方にかをれる觀世音

梅さくらにてつくりたまへば

それより社内をぬけて平野の社にまゐる。此御神は四座にて、今木神、久度神、古開神、比咩神なり。

こゝろよく飯くふために本膳の
ひら野の神を祈りこそせめ

こゝに紙屋川のほとりに二軒茶屋あり。ふたりは空腹となりたるに、支度せんと此茶屋にはいれば、女ども出むかへて、女「ようお出たわいな。ツイトおくへお出なされ。彌「なんぞうめへものがあるかね。めしもくひたし酒ものみたし。マアちよびとしたもので、一ぱいはやく頼みやすぞ(ト、おくのえんさきにこしをかけると、女てうしさかづきを、もち出る。さかなは、ほしあゆのにびたしなり。)彌「さつそく是はありがてへ。女中、ひとつつぎねへ。ヲツトありやすありやす。女「おさかな、おぎよわいな。コリヤわたしが心のたけぢやぞへ。彌「ハア、此鮎がおめへの心いきとはどうだ。女「わたしはナ、おまいさんが川鮎といふこつちやわいな。彌「コリヤ有がてへ、そんならおめへにあげやせう。ドレわつちも心いきのさかなあげやせう。女「ヲホヽヽヽ、此生姜が、なんとしておまいさんの心ぢやへ。彌「わしやはぢかみイ。北「ハヽヽヽ、こぢつけるもんだ。ときに女中、田樂でめしをはやくくんなせへ。女「ハイ〱只今(ト、やがてをんな、でんがくと飯をもち來る。ふたりはしよくじしながら見れば、ついたてのあなたに、さもむさくろしき出家二人、あさのころものよごれたるをきて、是もでんがくにてめしくひながら、一人の僧のいふをきけば、)「ナント役戒坊、きさま髪はどこでゆふぞいの。やつかい坊「ヲヽ、持戒ばうわりさまもわしがゆふ所でゆはんせ。あこはきやうとうようゆふわいの。わしやひさしう、のんこ髷にゆうてぢやあつたが、今ははやらんさかい、コレ見やんせ。雷子にゆうて貰うたが、えらう氣持がようてたまらんわいな(ト、いひつゝあさぎのづきんをとれば、此ばうさま、身にはあさのころもきながら、あたまはまきびんにて、しばゐのやつしといふかみなり。彌次郎兵衛北八これを見てきもをつぶし、をかしさ半分、ふしぎさうに伺ひ見れば、)やくかい「ハヽア、なる程ようゆひくさつた。わしや又、こちの弟子坊にゆはせをるが、もう〱月代がむちやぢやさかい、見て下んせ、いつのまにやら、こないにすりこかしをつたわいな(ト、これもづきんをとれば、わけはぼんのくぼにあるそりさげやつこなり。彌次郎あまりにがてんゆかず、こたへかねて、)「モシおとなりのお客さま、わつちらは遠

國のものでござりやすが、所〻あるいてゐるうち、いろ〳〵様々なめづらしいことも見聞しやしたけれど、御出家がたの髪ゆうたを見るは、まことに今がはじめ、どうもがてんがゆきやせぬ。卒爾ながら、おまへがたはどこのおかたでござりやすね。やつかい「ハヽア、このあたまの御ふしんかいな。こちや空也堂の僧ぢやわいな。彌「なる程な、はなしにきいてゐやした。かの茶筅うるお方だな。やつかい「さよぢやわいな。こちの宗體は、むかしから由緒があつて、こないに身には染衣をちやくしながら、天窓は大俗凡夫ぢやわいな。彌「それできこえやしたが、なせ又、おまいがたのゐなさる所を、空也堂といひやすね。やつかい「さればいな、こちのしうていでは、どしたこつちややら、代々みなえらい大食で、飯ぢやあろがなんぢやあろが、何ぼでもようくふさかい、齋非時によばれていても、しひつけられて、もつとくふやどうぢやいなと、人ごとにいうたを、すぐに空也堂といふわいな。もつかい「そちやさかい、コレ見やれせ。ちよとこゝへきても、ふたりでおはち三ばいくうたわいな。彌「ソリヤとはうもねへ大ぐらひだ。もつと



も、わつちらもくつたものさ。いつやらも信濃へ行やした、ナニガ、あつちは飯どころでござりやすから、先朝ずつとおきると、ちやうけにとて座頭の天窓ほどある、握飯を出しやすが、あつちの手やいは、子どもでさへ、それを十四五ほとづつもくひやす。わつちは折わるく氣分がわるくて、ろくに食もいけやせなんだが、十七八斗もくひやしたらう。さうするとやがてめしができたとつて、そこのていしゆのいふには、えどのおきやくは、おあんばいがわるいといふことだから、けさは麥飯をたきましたとつて、何が、とろゝ汁をすつたほどに〳〵、擂鉢の二十ばかりも、そこにならべてあるとおもひなせへ。さうすると椀へもるがめんだうだと、家内のやつらは、みなそのすりばち一ッヅヽ引うけて、麥めしをその中へ、山のやうにもつてくらひをる。わつちも絶食同前でゐたが、麥は大好物でこらへられやせんから、せめて一擂ばちもやつて見ようと、くひかゝつた所が、口あたりがいゝから、ずる〳〵と、なんのことなしにすべりこんで、たうどう、すり鉢に五六ぱいもくひやしたらうが、今ではとんと食がへりやした。やつかい「ソリヤおまへもめしは素人ぢやないわいの。ナントめしもりさんせんかいな。彌「アノ、飯盛がこゝにもありやすかね。やつかい「ハヽヽヽヽおまへのいうてぢやは、道中の飯盛ぢやあろ。そぢやないわいな。こちとらが仲間でするわ、酒の衆が酒盛といふかくで、飯をたがひにくひあふを、飯もりといふわいな。ちとやて見やんせ。さいはひ、こちもまだ飯がくひたらんさかい、あひ手ほしさの玉手箱ぢやわいな。北「どうやらおもしろさうなこつたが、それはどうするのでござりやすね。やつかい「マアなんぢやあろと、やて見なされ。モシ女中、ちよときてくだんせ。おはちのおかはりぢや。女「ハイハイ(ト、めしばちに一ぱい持來ると、)やつかい「サアはじめんかい。イヤていしゆやくにわしからやろわいな(ト、ちやづけぢやわんにめしをもつてさつ〳〵とくひしまひ、)やつかい「サア〳〵おまへ さそかいな(ト、彌次郎へかのちやわんをつきつけて、しやくしを取、)「酒もりならお酌といふ所、めしもりぢやさかい、お杓子にいたしましよかいな(ト、彌次郎がもらたるちやわんへ、めしをもりつける。)彌「コリヤわつちがくふのかね。やつかい「さよぢや〳〵。彌「ハヽアきこえやした。さかづきをまはす心だね(ト、彌次郎かの一ぱいのめしをくひしまひて、ちや

わんをやつかいばうのかたへさすと、）やつかい「コリヤきやうとい。おさへましよかい。彌「イヤまづ〳〵。もつかい「はておまへ、最一ばいかさねなされ。わしすけてあぎよわいな（ト、むりに、又一ばいもりつけると、）彌「そんなら、おめへすけてくんなせへ（ト、めしのもつてあるま、ちやわんをもつかいにわたせば、もつかいばう、三口ほどくひて、）「これも酒ぢやと、つけざしぢやけれど、めしぢやさかいくひさしぢや。彌「エ、、おめへのその髭むしやくしやと、不掃除な口中で、くひさしはあやまるの。しかも、ソレ〳〵水ばなをたらしてさ。もつかい「ナニいうてぢやぞいな。そないな事いうて、めしもり附合がなろかいな。はやうくはんして、誰になとさゝんしたがよいわいの。彌「ソリヤ情ない。さてさてめしもりといふものはきたねへものだ。もう〳〵わつちは御めんなせへ。やつかい「イヤおまい、麥めしを、すりばちに四五はいくはんしたと、いうてぢやないかいな。ひけふなこといはんす。かうさんせ、一拳いかんせ。彌「そんならけんでまゐらうか。もつかい「よかろわいの。そのかはり、否應、とんといはさんぞや（ト、かのちやわんの上へもりそへて、）もつかい「サア〳〵、さつまけんぢや。サンナ。彌「ムメで〳〵。もつかい「トウライ、えらいか〳〵。サア〳〵、あがりなされ。そのくせおはちのおかはりぢや（ト、むりむたいつきつけられ、彌次郎めんだうなりと、がまんをおこし、やうやうとくひしまへば、やつかいばう、）「もひとつやらんせ。おはちのかはりめぢや。彌「イヤ、もう〳〵御めん〳〵。やつかい「コリヤやくたいぢや。おまへは田舍ものぢやな。麥や挽割のませたのをあがりつけてゐさんすさかい。こないな一本木の米ばかりのめしは、ようあがらんもんぢやあろぞいな。彌「ナニ、わつちらア猪の牙のやうな、飯でなくちやアくひやせん。やつかい「さいな、これがしゝのきばぢやわいの。彌「そんなら、おめへ、かはりめのあいをたのみやす。やつかい「ソリヤよいわいな。とてものことに、おつきなもんでお積りにしよぢやないかいな（ト、なづけのいれてありしどんぶりをうちあけて飯をもり、ぺろぺろとくつてしまひ、もつかいばうへ廻すと、これもしこたまよそつてくひしまひ、）「サアあぎよわいな。イヤめしでにちやにちやする（ト、えんさきのてうづばちへどんぶりをいれ、あらひて、）「サアすましたわいの。おつもりぢや〳〵。彌「イヤ〳〵、もういかぬ。そしてきたねへ。人が雪陣へいつた手を洗つた手水鉢ですまし

たどんぶり、それでどうしてくへるものか。やつかい「そしたら此茶碗で。彌「イヤ、もうはらがさけるやうだ。それに聞なせへ。今の一ぱいやらかしてゐたとき、なにかふところのうちで、ぷつつりといふ音がしたから、さぐつて見たら、ゑつちうふんどしのひもが、きれる位に腹がはりきつてきたものを、もうもうお許し〳〵。やつかい「ハ、、、、もうよしなされ。おつもりぢや。コレ女中、なんぼぢや、勘定してくだんせ。女「ハイハイ、御いつ所にいたしましよかいな。やつかい「そぢやわいな。女「御酒とおでんの代もつは、八十文でよござりますが、おめしは五百七十二錢いたゞきたうござります。やつかい「ソリヤ氣疎やすいもんぢや。割合にいたそかいな(ト、此代錢かんぢやうして、半分のはらひすれば、)彌「ソリヤあんまりだ。おめしはおめへがたがしこたまあがつて、わつちは、たつた一ぜんか二ぜんくつたもの、二ツわりとはふしようちだね。やつかい「なにいはんすぞいな。一座でめしもりさんしたもの、ようくはんは、おまへがたの勝手ぢやないかいな(ト、やつつかへしつ、これもりづめに、彌次郎兵衛せんかたなく、たうとう二ツわりにしてこの所の拂ひをなしければ、僧ふたりは、はやくもさきにたちて出行たるに、)北「ハ、ハ、。い、見せものだ。サア彌次さんどうだ、いかねへか。彌「ヲ、サ、いきてへが、あんまりくひすぎてうごかれねへ。どうぞ手をひいてそろ〳〵た、せてくれ。北「エ、いくぢのねへ、サアたちなせへ。彌「コレサ、手あらくしてくれな。めしが口から出るやうだ。北「テモきたねへことをいふ。サア〳〵たちなたちな(ト、いひつゝ彌次郎の手をとりひつたつれば、やう〳〵にたちあがり出かける。)女「おゆるりとお出なされ。北「アイ、おせわになりやした。サア〳〵彌次さん、いかねへか、どうする〳〵。

　　はじめから人を茶にして何ばいも
　　　やたらにめしを空也寺の僧

是よりまた天神の社内にかへりたるが、東の門より一條どほりに出る道をしらず、うか〳〵と、もときし南向の門を出たるに、おもはずも、かの梯子を預しちや屋のかどちかくなれば、彌次郎兵衛心づきて「まて〳〵、さつきのはしごがやつぱりあそこにたてかけてある。エ、、こつちの方へ來なんだらよかつたものを。北八またあとへもとらうか。北「なるほどあそこへやすますに、すぐとほりにしたら、ひよつと見付たとき、例の梯子もつていけといふだらうし、といつて、又跡へ戻るもごふは

らだ。どうぞ、いゝちゑがありさうなものだ、（ト、立どまりて、しあんしてゐるうち、うこんの馬場の借馬一疋、ばくらうがひいてきたるを見るより、）北「イヤア、いゝことがあるぞ〳〵。アノ馬のよこつぱらのばうにくつついて、茶屋のまへをとほれば、馬のかげになつてゐるから、よもや見つけはしめへぢやアねへか。弥「ヲヽサ、それがいゝ。コリヤ大できだ〳〵（ト、あとよりきたるしやく馬を見合せゐるうち、やがてそばちかくなれば、ふたりともならんで馬のかげにかくれゆくと、ちやうどかのはしごをあづけしちや屋のまへにいたりて、馬はたちどまりてうごかず。二人はかけぬけて、茶屋に見つけられては、せんなしと思ひ、同じく馬のよこはらのはうへついて、たちどまりゐる。ばくらう、馬をうちて、）「エヽ、このならずめはなにしをるのぢや。日がくれるわやい（ト、うてどもうごかず。やがて馬はせうべんをしやア〳〵。弥次郎北八にとばしりはねて、せうべんだらけとなり、）弥「エヽ、コリヤ又なさけないめにあふことだ。北「アヽくさい〳〵。ソレ、弥次さん、



おめへのはうへなかれ[illegible]やうめが、とんだめにあはせる。これはこれは（ト、とびのけば、むかうの茶屋のかどさきにゐる女が、目ばやく見つけて、）「モシナ〳〵、こつちやでござります

わいな。サアおはいりなされ。北「ソリヤこそ見つけられた。弥「コリヤたまらぬたまらぬ〳〵（ト、一もくさんにかけいだせば茶屋のていしゆ、とんで出、）「コレナ、はしごがございますわいな。ヲヽイ〳〵（ト、よびたつれど、耳にもいれず、ふたりはまつくろになりにげる。）兩人はやう〳〵と、いきをばかりにかけいだして、下の森をうちすぎ、もとの千本どほりに出、今宵は島原の廓中を見物して、やす見世もあらば、一しゆくせばやと申合せて、往來の人に、道すがらを尋ね、千本さがりてゆくほどに、町をはなれて東寺に至る。

　手折んと手を出す人ぞ鬼ならめ
　東寺わたりの花のさかりに

それより壬生寺に參りて、こゝに葭簀かどさきにたてよせたる、あやしの茶見世に引こまれて、その夜の宿とさだめ、うちふしたるが、あくる日島原を見物し、朱雀野より丹波街道をよこぎりに、淀の大はしにいたり、爰より下り船に打のりて、大坂へとおもむきける。



道中膝栗毛七編下終

漢唐男女の清音ましく壽句のそき
にまれじみぢかくいへるがゆく作者ふう案門て
世ちかきまんだ大形ぶしてふるとおきめ世
続大臣ていそうて八作者弟子七と数時も
はに侍るさして先なきおもん所なの跡の
細なといつもきこちく世中思案の京
自南を近都極江曽根崎の風俗をやめ
ありえん一所を著して全部二冊となし

あやしむる己の此の新撰(しんせん)をくはへんとせしを
抑(そもそも)此書初編より七編に及(およ)ぶまで
祥(さいはひ)ある行れて編中(へんちう)の悦(きやうろ)猥(さで)に
流(りう)行(かう)の編(へん)をつらねて全(まつた)くしめんと欲す
るれども中やまひとするに音(いん)曲(けう)の智を経る丹(おほ)誠(えんせい)に
なもをらしして編中(へんちう)をきんとはざしらちに
黒(さし)のおやぶなきをみとある膝(ひざ)栗(くり)毛(げ)文化
のはしらざるは可(か)笑(をか)しきよりなりずなきをなしきと

弃て(まそて)まう(まうき)く(さう)おふしぬてこれくのふろ

十返舎一九著

膝栗毛八編　全

大阪町中見物之滑稽

ととくおゝつ画圖を諸し

所くの風流香く寫して

葛つしそ以出ろ板

勝川春亭画　三冊

書林

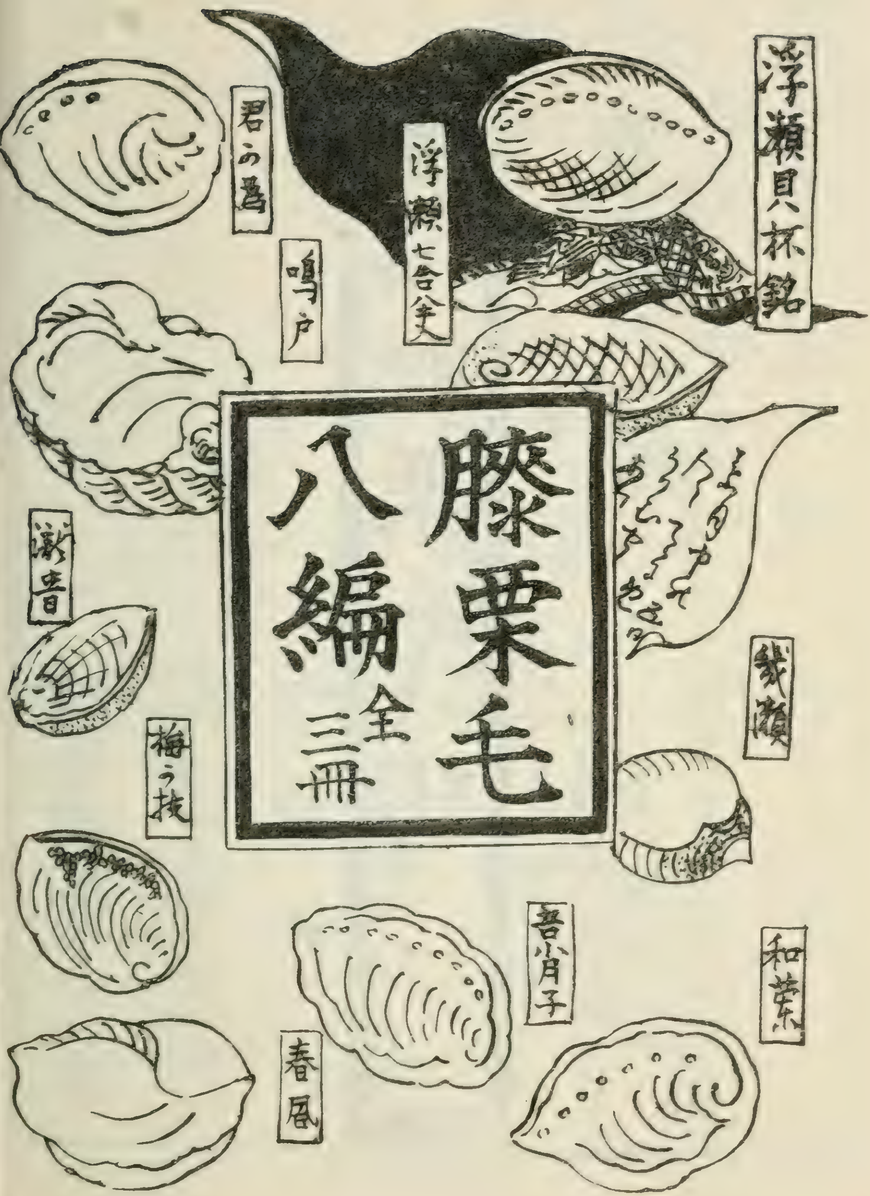
大坂心斎橋唐物町　河内屋太助

江都本石町十軒店　西村源六

同通油町　鶴屋喜右エ門

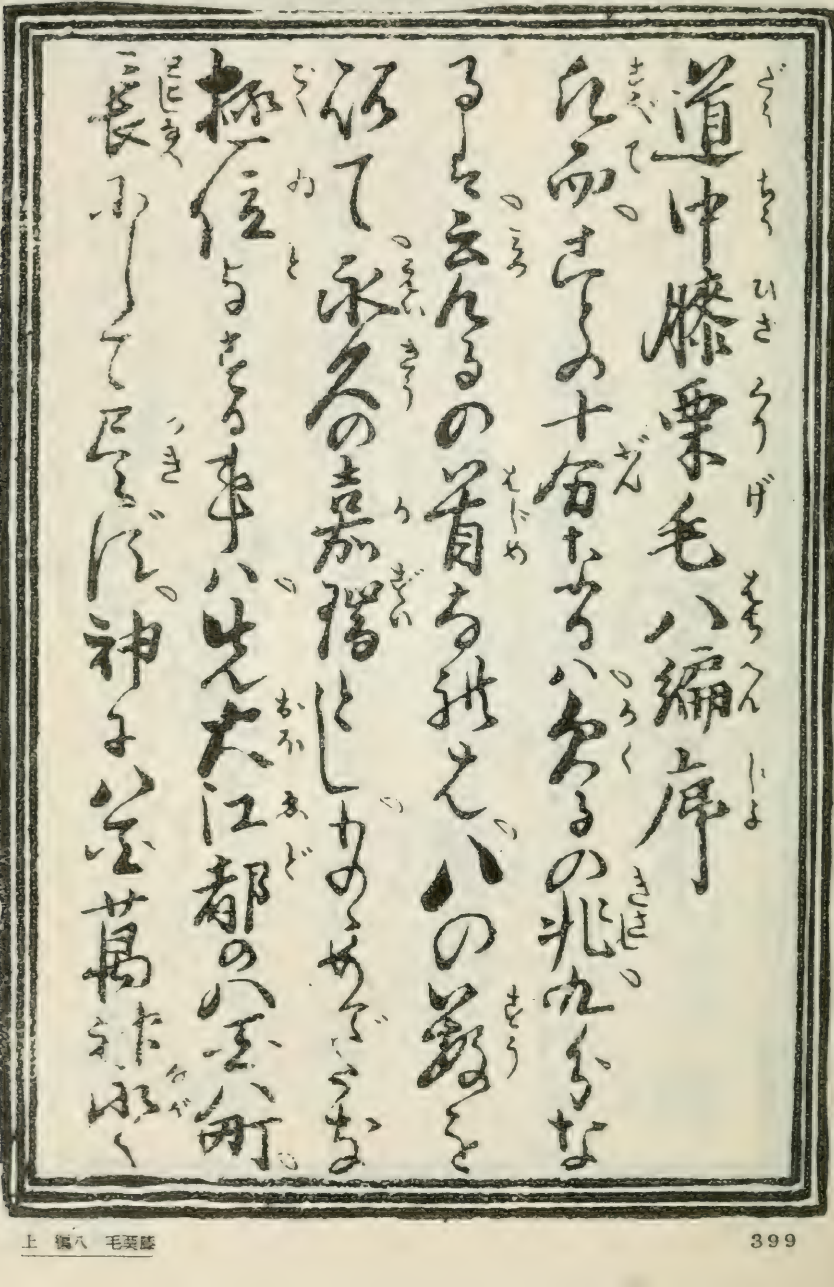
同所　村田屋治郎兵衛

東海道中膝栗毛八編

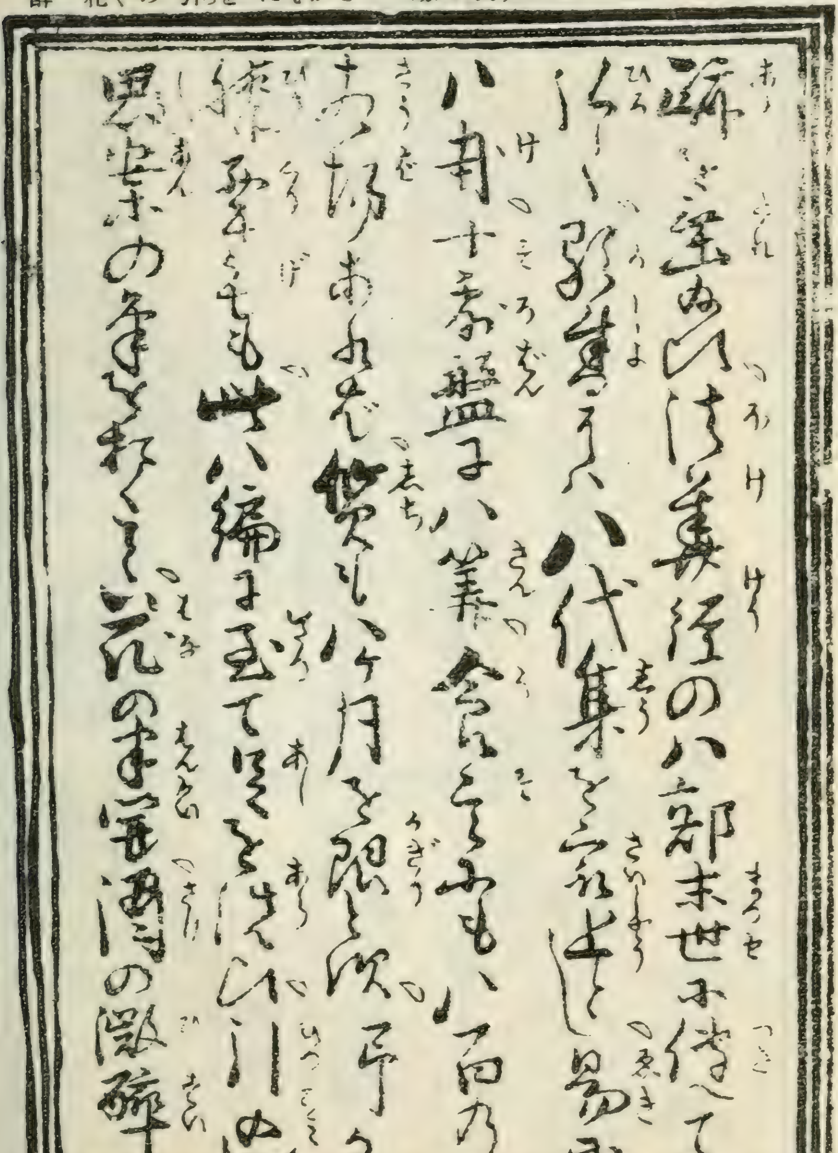

膝栗毛
八編
全三冊
浮瀬貝八杯銘
浮瀬七合半入
君の為
鳴戸
梅か枝
春風

道中膝栗毛八編序

凡而、ことの十分なるは、欠るの兆九分なるは充るの首なれば八の數を以て、永久の嘉瑞とし、ものゝめでたき極位與する事は、先大江都の八百八町、長にして盡ず。神に八百萬神永く跡



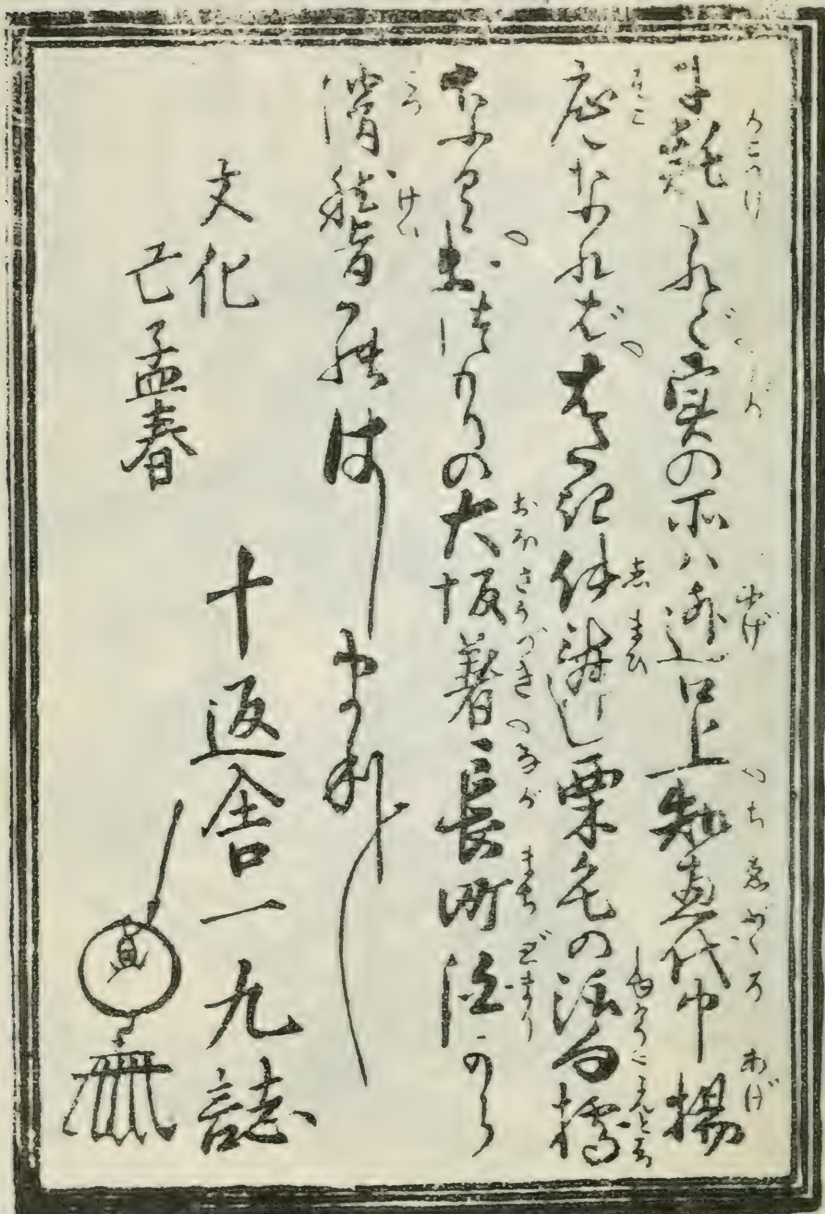
を垂給ひ法華經の八部末世に傳へて弘く、歌書には八代集を最上とし、易に八卦十露盤に八算、食言にも八百の相場あれば、質も八ケ月を限とす。予が膝栗毛も此八編に至て足を洗ひ、引込思案の筆をおくこと、花の半開、酒の微醉



に託たれど、實の所は迯口上、知惠帯揚底たれば、はたき仕舞し栗毛の趣向擽なく、おつもりの大坂着、長町泊から滑稽のはしまり〳〵。

文化
己巳孟春

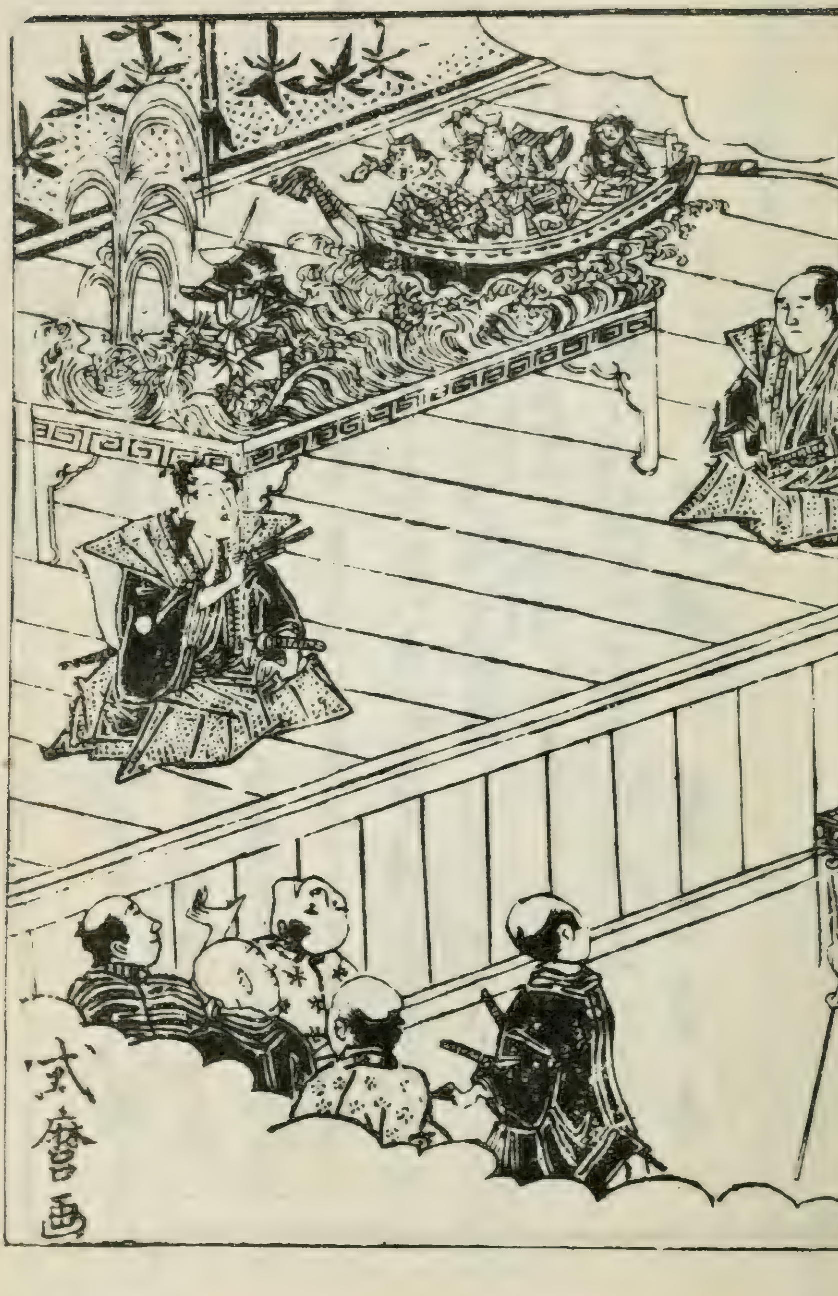
十返舎
一九誌




美丸画




竹田近江唐操之図
竹田


武麿画

附言

膝栗毛初編より京まで行きて今年八編にいたる迄漸く満尾し畢ぬ追〻道中記ハ雑録せし版本ほど彼し〻出来て其流行の景をもつさだむるよ毎年初編再版のもの得しあれどもそれに再増一冊をまして二冊となし其の続きは来年中の趣向もさまでもあらで作者困難しその肖ハさゝらひ稿のかくを読君子の倦怠をもちてかのせんとの事なほ其趣追て書披露におよぶおかのあらし

書肆　榮邑堂志

道中膝栗毛八編 上卷

東都 十返舎一九著

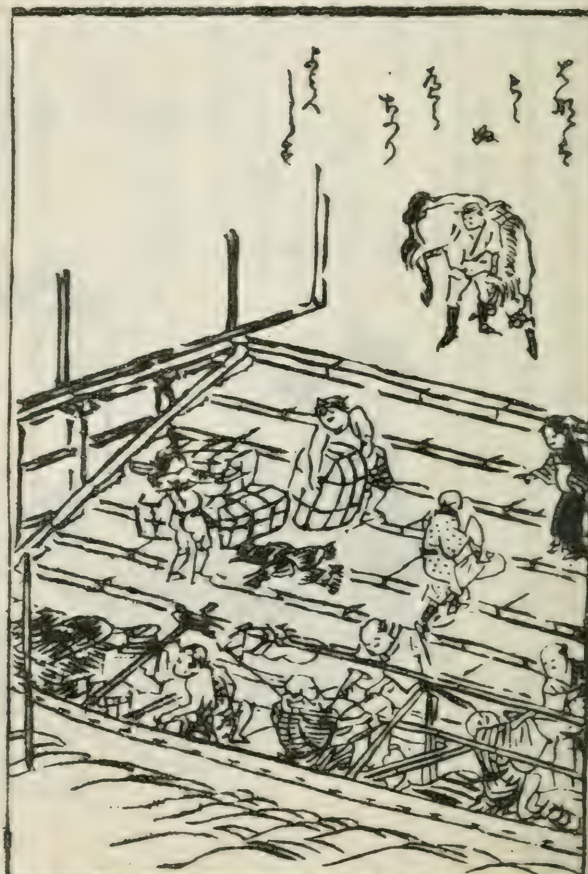
押照や難波の津は、海内秀異の大都會にして、諸國の賈船、木津安治の兩川口にみよしをならべ、碇をつらねて、こゝにもろ〳〵の荷物を闊ぎ、繁昌の地いふばかりなし。ことさら花の春は淀川に棹さして、さくらの宮にあそび、網島の鮒卯に醉をもよほし、夏は難波新地の納涼に螢をかり、豆茶やに腹をこやし、秋はうかむ瀨の月、冬は解船町の雪げしき、四季折々の詠おほかる中に、目枯ぬ花の曲中は、いつもさかりの春のごとく賑ひ、道頓堀の芝居は、つねも顔みせの心地して群集絶す。かゝる名譽の地を見のこすも本意なしとて、かの彌次郎兵衛喜多八なるもの、ふし見の晝舟に途中より飛乘して、はやくも大坂の八軒家にいたり、爰より船をあがりたるは、最早たそがれ時にして、東西をしらず南北をわきまへざれば、人に尋ねとひつゝ、長町をさしてゆくほどに、堺筋通を南に日本橋へ出たりければ、宿引どもこゝに居合せ、兩人を見かけて宿の相談をしかくるに、早速きはまり、すぐさま此長町の七丁目なる分銅河内屋といふにぞつれゆきける。(やど引さきにかけぬけて、)「サア〳〵お客樣お供して來たわいな。やどやのばんとう「是はようお出なされました。おいくたりさまでござります。彌「ヘイ同行四拾七人。ばんとう「ナニ四拾七人樣。コレ〳〵おさんどのや。大勢樣ぢや。西のおくの間を打ぬいてあげさんせ。ようきれいに掃だしたがよいわいの。コレ久三、おあしお洗ひなさるお湯はどうぢやい。ぬるてもだんない。水なとうめてあげませい。はやう〳〵。時にもし、その四十七人樣はいこおあとかいな。彌「イヤ是は先達て鎌倉へ發足。われ〳〵兩人は、これより泉州堺の天川屋へ。ばんとう「エヽなんのこつちやいな。やつぱりおふたりかいな。コレ〳〵おつんや、おふたりぢやといな、こつちやのおひとり居しやしやる、せまいとこにさんせ。おつん「ハイ〳〵。御案内いたしましよかいな(ト、此内兩人はあしをあらひ、あがりて見るに、此宿は當所ずゐ一の大家にして、およそ間かず七八十もありといへり。兩人女につれられてゆくに、おくのくちもとの、六でうばかりなる小

さしきへはいる。外に一人この間にとまり合せゐることなれば、ばんとう「おゆるしなされませ。どうぞもし御究屈にござりましよが、御一所になされて下さりませ。(此旅人は丹波の人。)「だんないてや。サア／＼こつちやへわせさつしやい。北「これは御めんなせへ。彌「モシわつちらア二三日も逗留して、所々見物がしたいから、おたのみ申やす。ばんとう「ハイかしこまりました。先御ゆるりと(ト、いひすて丶かつてゆく。)たんばの人「コリヤわごりよたちは、どこからきまりました。北「わつちらア江戸でござりやす。おめへは。たんば「わしは丹波のさ丶山在郷。今度高野へゆきよります。コリヤあぢいな縁で、相やどしよりますわいな。彌「とかくたびは道づれ、お心安いがようござりやす(ト、此内、やどの女、)「ま丶上げましよかいな(ト、三ぜんもち来りすゑる。しよくじの内、いろいろあれどもりやくす。やがてめしもすみ、湯へも入てしまふと、大あばたの女あんま、いやらしきふうにて、さぐり／＼きたりて、)「おれうぢは、よござりますかいな。

どうぞもましておくれんかいな。彌「イヤあんまさんか、おめへ女だの。しかも生てゐらア。北八どうだもまねへか。北「こつちからもんでやりてへ。あんま「ヲ丶をかし、何いひぢややら。おま



へさんがたはお江戸ぢやな。わしやァノおえどのおかたがすきぢやわいな。とのたちは男らしうて、ものいひぢやとこが、えらいすつぱりとしてよいわいな。北「おめへ、さつぱり目が見えやせんか。見えると、此うちにとんだいいをとこがゐるに、見せてへなァ。あんま「そぢやあろぞいな。彌「ナントあんまさん、此男よりわつちがいゝ男か、さうして年はどつちがわけ（若）いくあてゝ見なせへ。あたつたならふたりながら、もんでもらひやせう。あんま「ソリヤいつき（直）にあてるわいな。北「コリヤおもしろへ。サアおいらはいくつぐらゐだ。あんま「まちなされ。おまいさんは二十三四。北「コリヤきついわ。男はいゝ男だらうね。あんま「さよぢや、お顔はよう道具がそろうてぢや。北「かけてあつてつまるものか。あんま「お目がゑらいいつかいお目ぢやあろがな。そしてお鼻が、北「高いかひくいか。あんま「かういうたら、おはらがたとかしらんが、たしかにしゝまひばなぢやあろぞいな。たんば「ハヽヽヽヽ、きよとい〳〵。彌「おいらはどうだ。あんま「あなたは、いこふけてお出（いで）ぢやわいな。おとしは四十ばかりで、おいろがくろうて、はなのひらいた、髭（ひげ）だらけなおかほぢやあろがな。北「きめう〳〵。あんま「そして、ぼ



やけぶとりによう肥てゐなさるちやあろ。彌「イヤちがつた〳〵。おいらはひんなりとしていろ男。北「うそをつく。コリヤあんまさんがかちだ。もんでやりな。彌「やくそくだからしかたがねへ。爰へきてくんな。あんま「ヲホヽヽヽ、それへさんせうかへ（ト、彌次郎がうしろへまはり、もみにかゝると、此内、女のくわしうり、はこをかさねてもちきたり、）「ようおとまりぢやわいな。くわしん、買うておくれんかへ。北「ヒヤア、だんだんと出てくるわ。なか〳〵い、菓子だぞ。おめへわつちらに賣氣か。くわしうり「さよぢや。こちや、おまいさんがたに賣たうて〳〵ならんさかい、やうやうはしりまうてさんじたわいな。彌「上方の女中は手があるの。くわしうり「手もあしもないが、むちやにおまいさんがたにほれたのぢやわいな。さうおもうて、どうぞくわしんかうておくれや。ドレちや〳〵くんでさんじようかへ（ト、くわしばこをつき出しおいて、かつてへゆくと、）北「エヽ、つらのにくいほどしやべるやつだ（ト、いひつゝ彌次郎に目くばせして、そつとくわしのはこの下にかされてあるはこより、何やらくわしを五ツ六つとりいだし、うしろへちやつとかくすと、かのあん



ま、手を出して共くわしをそつとひつたくり、たもとへいろ〳〵を、北八一かうにしらず、彌次郎も同じく、くわし、三ツ四ツとり出すに、かつてより人おとするゆゑ、ちやつとはこはもとの如くかさねておき、かのくわしはうしろのかたへかくすを、あんまとり、これをもそつとせしめてたもとにいるゝを、彌次郎もいつかうにむちう作左衛門なり。此うちくわしうりの女、茶をくんで、ぼんにのせもちきたりて、」女「サア、ぬくいのをあがりなされ。彌「せつかくおめへきなさつたものを、まんざらすげなくもしられめへ(ト、くわしばこのうちより、」彌「これはいくらだ。くわしうり「ハイ〳〵、四せんづつぢやわいな。ソリヤもむない。こつちやあがつて見なされ(ト、ならべたてゝすゝむるに、彌次郎も北八もたんばの人も、てんでにとつてくらふ。」北「コウ待ねへ。むしやうにくつて數がしれめへ。

くわしうり「よござります。なんぼなとあがりなされ。こちやたゞでもあげよわいな。ノウおたこさん。あんま「さよぢやわいな。サアよござります。こつちやのお方、もみましよかいな。彌「ヲヤもうしめへか。あんま「サアあなた、わしがねきへよてかしんかいな。北「ソレ、よしか〳〵。くわしうり「ちや〳〵、最ひとつあがりなさらんかいな。あんま「おなべさん、御ちそうなされ。此お旁はえらい御心よしぢやわいな。サアあなたおよこに。北「もう肩はしめへか。がうぎにはしよるの。たんば「コリヤ、わりさまたちの、くちまつにかゝつて、えらう、くわしん喰てのけた。何ぼぞい。くわしうり「ハイ〳〵お三人さまで二百四十八せんでござりますわいな。彌「ヤアとんだことをいふ。何そんなにくふものか。きた八はいくつだ。北「さればの、いくらであつたか。たんば「わしは四文のを五つくたから、ソリヤ二十やるぞ。北「そんなら、あとはふたりで出すのか。ばか〳〵しい。菓子よりか、はたごの方がやすい。くわしうり「そぢやてて、あがりなされたものを、しよことがないぢやないかいな。ヲホヽヽ。彌「イヤ、ヲホヽヽ、所ぢやアねへ。とんだめにあはせる(ト、こゞといひながら、ぜんかたなく、ぜにをはらひやると、此うち、あんまもゝんでしまふと、きた八、」「あんまさんはいくらだ。あんま「ハイ、おふたりで、おあし一すぢおくれいな。北「ナニ五十ヅツか。コリヤたかい〳〵(ト、これもあとではぜひなく、百文出してやると、ふたりはたつてゆく。」彌「上がたの女にやアゆだんがならねへ。しかし、くわしうりめがおいらをいゝやうにしたとおもつてけつかるであらうが、さうは虎

の皮、こつちにも荒神さまがあらア。馬鹿なつらな。とつくに上菓子をこゝにはへ付ておいたを、しらぬやつ（ト、うしろをさがすに、せんこくのくわし見えず。北八もおなじくこゝにおいた筈だとたづぬるに、一から見えず。かつてより女、ちやわんとやくわんをもちいで、）「御退屈さまでござりましよ。お煮ばなかでけました（ト、おいてゆく。）北「エヽ、今のがあるとちやうどいゝのに、とうしたしらん。たんば「ソリヤいんまのあんまとりめが、とていんだもんぢやあろ。ハハヽヽ。イヤこゝにえいものがありよる（ト、うしろのやなぎごりをあけて、ちひさなまげものをとり出し、）たんば「サアサア、コリヤ道修町の店で貰うてきよつた砂糖漬ぢや。茶の子にひとつやらつしやれ。北「コリヤありがてへ。彌次さんそうだ。たんとやらかしねへ。たんば「イニヤ、そないにくてもらうてはならんわい。こちくされ（ト、ひつたくりて、さう〳〵にしまふと、この内、女ふとんを引ずり来り、）「もう御床のべましよかいな（ト、そこら取かたづけるうち、かつてより、今ひとりの女、まくらふとんをもち来り、はふりこんでゆくを見れば、やつぱり今のあんまとりなり。みな〳〵きもをつぶし、）彌「モシ女中、今そこへ来た女は、さつきのあんまぢやアねへかの　女「さよぢやわいな。北「どうして目が見える。女「アリヤ、お客さんがたへ出るに、目あきではお心おきがあつてわるいさかい、おざしきへは、あないに目の見えんふりして出てぢやわいな。爰の内かたですきられますさかい、いにしなには、いつもあないに勝手を手つだうていんでぢやわいな。彌「ヤア、さてはおいらがことをよくあてたはずだ。目が見えるものを。北「そんなら、おいらがものしたものも、ものしやアがつたにちげへはねへ。女「ヲヽをかし。おまへさんがたの源四郎してちやくわしんぢやて、わたしもこないに貰うたわいな（ト、たもとから出して見せ打わらひかつてへゆく。）北「大笑ひ〳〵。彌「やつぱり、あつちがしたつぱらに毛のねへのだわハヽヽヽ。

ろく〳〵に按摩はとらずくわし迄も
　こちに目のないゆゑにとられた

斯打興じつゝ、それより三人とも蒲團ひつかぶりうちふしたるに、丹波の人ははやさきに高鼾かき出せど、ふたりはいまだ寐入もやらず、彼是とはなしあふうち、裏通のはたけに犬の聲きこえ、割竹の音、時のたいこもはや九ツのかず打過る頃、きた八あたまをあげて、「コレ彌次さん、おめへこそ〳〵と何をする。彌「なぜか、あんまりねられ

ねへから、ふつとおもひ出して、コレ見や、足でこんなものをかきよせたわ（ト、よぎの中から、ちひさなまげものをとり出して見せる。）北「ヲヤ、そりやさつきあの人の出したさたう漬ぢやアねへか。彌「コリヤ聲がたかい。柳ごりのわきに出てあるを、さつきからにらんでおいたからよ。北「コウ、ひとつよこしねへ。彌「まて〳〵（ト、あんどうくらくとほければ、ゐさいはわからず、かのまげもののふたをとりて、ひとつつまんでくちにかつちり。）彌「コリヤかたいわ。北「ドレ〳〵（ト、まげものをひつとり、是もつまんで、くちにぐしやりにちや〳〵。）北「エヽなんだ、いつそ灰だらけなものだ。ペツペ〳〵。彌「コリヤさたう漬ぢやアねへ。なんだかをかしなにほひがする（ト、むねをわるくして、ケイ〳〵といふこゑをきゝつけ、たんばのおやぢ目をさまし、このていを見るよりびつくりしてはねおき、）「ヤア〳〵〳〵、わりさまたち、コリヤ何しよる。わしが女房をなんせくひよる。彌「ナニ、おめへのかみさまたアなんのこつた。たんば「なんのこつちやとは情ないわいの。ソリヤわしが知音女房ぢやわいな。そのいれもののふたを、よう見やしやれ（ト、いはれて彌次郎とんでおき、あんどうの前にもちゆき、かのふたのかきつけを見れば、）彌「ハア、秋月妙光信女。ヤアヤア〳〵、そんなら此曲物はおめへのかみさまの骨だな。北「ナニ骨とは、コリヤ大變〳〵、道理でむねがむかつく。エヽどうしよう。たんば「わさまたちのむねのわるなつたより、わしのむねがつつぱつたわい。コリヤわしどもの村の所法則で、その骨を高野へをさめにもていきよるのでござるわいの。ようマア大切ない佛を、なんせくひよつた。わりさまたちは眞人間ぢやありやしよまい。鬼かちくしやうか、どしたのぢややい〳〵（ト、たもとをかほにおしあて、おい〳〵となく。彌次郎もをかしさ半分にはらだちて、）彌「エヽむつかしいこたアねへ。おめへがさつき柳ごりをあけた時、ころげ出たをしらずに居たのはそつちの無調法、それをさとう漬だとおもつてくつたのがこつちの麁相、ソリヤ五分〳〵だ。何もいさくさはねへわな。たんば「イヤ〳〵きかん〳〵。もとのとほりにまどうてかへしや〳〵（ト、いきせいはつて、なみだまじりにわめきちらせば、北八いろ〳〵とことわりいひ、さま〴〵なだめすかしてやう〳〵となつとくさせしづまりければ、彌次郎も心のうちにをかしさまぎらかして、）彌「イヤモウめんぼくしでへもねへのさ。

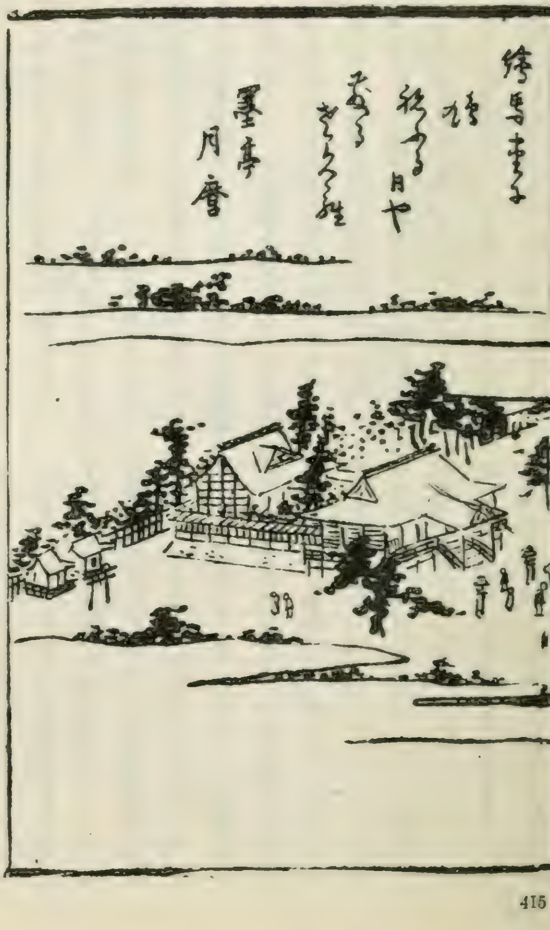
人の骨くふもことわり若いとき

親の脚をもかぢりたる身は

此彌次郎が口ずさみに、丹波の人も心とけて笑ひを催し、漸くきげんなほりて打臥たるが、程なく一睡の夢さめて夜明ければ、勝手よりおこしに來り、手水つかふやいな膳をすゆるに、三人ともくひしまひ、丹波の人は高野へ出ゆき彌次郎喜多八は二三日逗留のつもりゆゑ、けふは爰もとの名どころ一見せんとしたくするうち、ばんとう出て、「コレハおはやうござります。今日はどつちやへぞおこしでござりますかいな。さよなら御案内のものおつれなさるがよござりましよ。彌「ホンニそれをおたのみ申やす。ばんとう「畏りました。コレ〳〵左平次どの、ちよとごんせ（ト、勝手よりあんないの男をよび、）あなたがたがおんないたのむとおつしやつてぢや。北「モシわらざうり二そく買てもらひてへの。彌「イヤ一そくでいゝ。おいらは京雪駄買てきた。どうもわら草履では、みす〳〵田舎ものの上がた見物と見えてわりい。北「ナニ旅で見えもへちまもいるものか。左平次「お支度がえいなら出かけましよかいな。彌「サア〳〵、はやくめへりやせう。ばんとう女ども「いてお出なされませ（ト、これより三人打つれて、此やどを出かけて、）左平次「ナント斯いたしましよ。天王寺生玉は住吉御參詣の



ときに、おまゐりなされ。けふはこつちやの方へさんせうわいな（ト、長町どほりを北へびのうへより高津新地に出、まづ高津の御みやにまゐる。こゝはむかし仁徳天皇の、たかきやにのぼりてみればと詠じ給ひし舊地にして、今にはんじやういふばかりなし。社内に、とうふでんがくのちや屋、さんけいの人をよぶ。「サア／＼、おはいりな／＼。これへ／＼。おやすみな／＼おやすみな。（きしんじやうるりの木戸、）「今ぢやア／＼。紙屋徳兵衛天滿やおはん、かはらやばし白木屋の段、次は千本ざくらの天川屋、辨慶の腹切、出がたりぢやア／＼。（遠目がねのいひたて、）「サア、見なされ／＼。大坂の町々、蟻の這ふまで見えわたる。近くは、どとん堀の人くんじゆ、あの中に坊樣が何人ある、お年寄にお若い衆、おかはのみつちやが何ぼある、女中がたの器量ふきりやう、ほつこり買うて喰てござるも、濱側でし丶なさるも、橋詰の非人どもが繻絆の虱なんぼとつたといふ迄、手にとるやうに見ゆるが奇妙。また風景を御覧なら、住吉沖に淡路島、兵庫の岬、須磨あかし、大船の船頭が飯何ばいくた、何くた角くたもいつきにわかる。まだ／＼ふしきは、此目がねをお耳にあてると、芝居役者の聲色、つけひやうし木のかたり／＼、殘らず



きこえて見たもどうせん。お鼻をよすれば、大庄のうなぎのにほひぷん〱と、あがつたも同前。たゞの四文では見るがおとくぢや。千里一目の遠目鏡、これぢや〱。彌「めがねやさん、おとにきいた新町とやらもちかく見えるかね。めがねや「さよぢや、このお山のツイねきに見えるわいな。彌「それぢやア、ちかく見えるのぢやアねへ。とほく見えるのだ。めがねや「なぜもし。彌「ハテ、此高津と新町との間は、たつた壹寸貳參分ほかねへもせぬものを。めがねや「ソリヤおまい、おさかの繪圖で見てかいな。彌「さやう〱、ハヽヽヽ。先お宮へまゐらう。ハヽア、いかさまい〻お宮だ（ト、三人とも神前にぬかづきたてまつりて、）

もろ〱の神に脊くらべしたまはゞ
さこそたか津の宮のたふとさ

是より境内の石段を西におりたち、谷町どほりに出たるに、何とやら腹淋しくなりたれば、さいはひと居酒屋めきたる見せを見つけて立寄、彌「モシ、なんぞありやすかね、さかやのていしゆ「ハイ煎売に鳥貝、鯡の昆布まきぢやわいな。北「さつぱりわからねへ。そのうちうめへものならなんでもいゝ、出してくんな。ていしゆ「ハイ〱、いつきにあぎよわいな。彌「イヤ、いつきんはいらぬ、三合ばつかりたのみます。北「ときに尾籠ながら用たしにいつて來よう。雪隠はどこだ。ヲヽあるぞ〱（ト、えんさきよりむかうへまはりて、せつちんへはいると、此内こなたにはさけさかな出たるに、）彌「マアひとつはじめなせへ。あんない左平次「マアあなたから。彌「そんならおさき。ヲトヽヽ。アヽいゝ酒だぞ。コリヤきた八、はやく出ねへか。酒がみんななくなる。はやく〱（ト、せりたてられ、北八せつちんのうちにて、のみたくてこたへられず。）北「ヲヽ、合點だ、今出るぞ（ト、うろたへて戸をあけ、ずつと出た所が、ふしぎなるかなさかやの内にてはなし。そも〱このせつちんは、二けんまへのせつちんにて、此さかやとうらにすむ人の家と、兩はうにてつかふせつちんなれば、あなたにもこなたにも兩くちあるゆゑ、北八うろたへて、はいりしはうの戸をあけず、むかうの戸をあけて出たるゆゑ、よそのうちなり。ゐんきよらしきぢい様ひとり、何やら小さいくしてゐたりしが、北八を見てきもをつぶし、目がねのうへからじろ〱と見るに、北八もうろ〱と、いつかうにがてんゆかず、まごつくうちかのいんきよ、）「モシ〱、こなんは誰ぢやいな。北「ハイ、是はちがつたさうな。モシ、さかやへはどうまゐりますへ。いんきよ「ハヽア よめたわいの。こなんは

おもてのさかやのお客おやな。其椽側をひだりにとつてすぐにいかんせ。北「ハイ〳〵。コリヤ行どまりだ。いんきよ「その戸をあけていかんせ。北「ハヽア、またもとのせつちんへはいらにやいかれねへな（ト、せつちんの戸をあけんとすれば、うちに、）「エヘン〳〵。北「なむ三ばう道がふさがつた（ト、いふをきゝて、せつちんの内より、）彌「北八か、おつなはうへ出てゐるの。北「イヤ、彌次さんだな。おいらア戸まどひをしてとんだめにあつた。はやくそこをとほしてくんねへ（ト、戸をあけにかゝる。彌次郎うちよりかけがねをかけて、）彌「イヤ、もちつとまつてくれ。そして、いけむこたア大毒だといふこつたから、ひとりでに出てくる時節を待てゐるのだによつて、すこしひまがいる。アヽ退屈だわ。金にうらみでもかたらうか。北八そこで口三味線たのむぞ。北「エヽとんだことをいふ。はやく出なせへ〳〵（ト、そとからおせどもあかず。内にはいらう〳〵と、だうじやうじの唄、）「戀の手ならひつい見ならひて、誰に見しよとてべにかねつきよぞ。みんなぬしへの心中だて、ヲヽうれし〳〵。北「氣のなげへ、なんのこつたな。彌「するゑはかうぢやになア。さうなるまでは、とんといはずにすまそぞへと、せいしさへいつはりか、嘘か誠か、どうもならぬほどあひにきた。北「エヽ、コリヤはやく出ねへか〳〵（ト、いへども、うちにはさつぱりなんのおとさたもなきゆゑ、北八せつこみ、）北「どうだ、もう出たか。エヽ、コリヤ彌次さん〳〵（ト、いふうちしばらく、ム、トンといふおとして、）「ふウつウり、悋氣せまいぞと、たしなんで、北「コレサ、どうするのだ。彌「もうよつくにいゝが、まちやれ。山づくしまでやらかさう。北「エヽ、ばかなことをいひなせへ（ト、いひさま、むりに戸をつよくおせば、かけがねはづれて、北八せつちんのうちへころげこむと、彌次郎もさかやのかたへ戸をあけて出るひやうし、戸ははづれてたふれる。そのうへへ北八ぐるめ、どつさりと、せつちんの戸はやぶれる。）彌「アイタヽヽ（ていしゆ、はしり來りて、）「コリヤ何ぢやい。せつちんの戸がやくたいぢや。北「イヤ、全體おめへがたア、こんなに兩頭の雪陣にしておくからわるい。ていしゆ「そぢやてゝ、ふたりつれまうてせついんへゆくといふことがあるもんかいな、あほらしい。彌「かんにしてくんなせへ。わつちらがわるかつた（ト、ひざがしらをさすり〳〵、みせのかたへ出きたれば、）左平「なんとなされたぞいな。北「うち身には酒がいゝといふことだ。はやく一ぱいのましてくん

な。彌「こゝはつけがわりい。又さきへいつてのみやれ(ト、この所のかんぢやうをして、早々出かけると、さかやのていしゆ、ふしよう〴〵にあいさつもせず、こごとをいひながらふくれかへりてゐるを、ふたりはをかしく、こゝをたちいづるとて、)

出ることのおそい早いであらそひし

これ宇治川の雪陣かそも

それより、谷町どほりを安堂寺町より、番場の原に出、はなしものしてたどりゆくほどに、頓て天満橋にぞいたりける。まことや淀川の流れひろく、行かふ船どもこぎちがひ、棹さしあひてうたひ、或は遊山舟に三味せんたいこはやしたてゝゆくを、橋の上より往來の人立とまりて、「ヤアイ〳〵、おどれらそないにたてくさつても、うちへいんだら借錢乞にせがまれて吼をろがな。えらいあはうぢや。あほよ〳〵。ふねの中より「何ぢやい、そちがあはうぢやわい。はしのうへ「何ぬかしくさる。おどれらがあなやしよまいがな。はしのうへ「なんの、おどれらにまけてえいものかい。こちやあはうぢや。ふねの中「ヲヽ、いしこやの、あはうくらべせうかい。こちにはようかあはうのえらいのぢや(ト、むしやうにりきみかへる。此をとこのつれと見えて、)「ハチ



えいわいの。こなはんがえらいあはうは、みなしつてをるこつちや。ほつておかんせ（ト、ひつぱりてつれてゆくと、あとから往來の人くち〴〵に、）「ヨウ〳〵、あはうのえらいの〳〵。ハヽヽ（ト、此内、彌次郎北八もくんじゆにおされながら、このはしにさしかゝり、橋のうへとふねとのけんくわ、いづくでもよくあるやつと、こゝろにをかしく、うちすぐるとて、）

眞黒になつてはらたつけんくわとて
あほよ〳〵と烏めがする

それより、此橋を北へおり、市の側どほりをゆくに、爰は青物の市たつ所にて、殊に繁昌の地なりける。

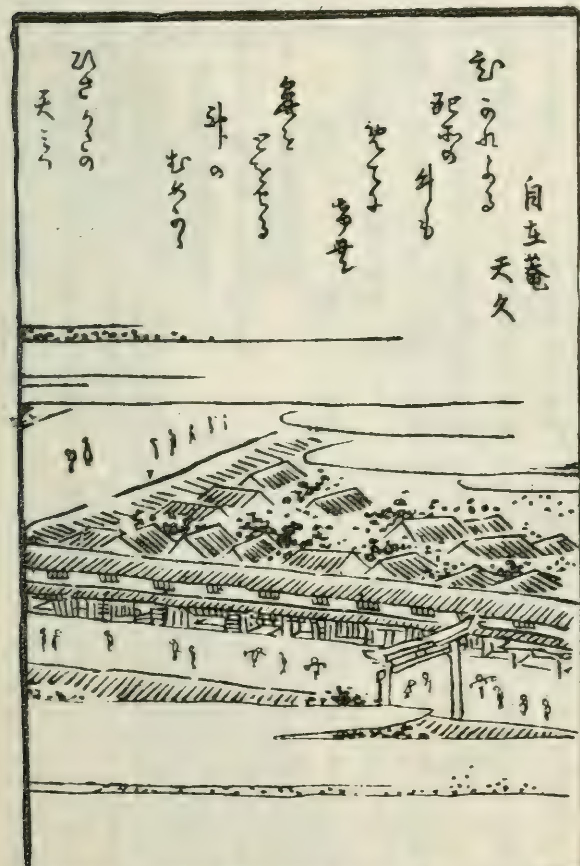
青ものの賣買ながら商人に
尾ひれの見ゆる市のかはまち

ほどなく、天滿宮の御社にいたるに、まことや神德の彰々たるは、參詣の人よみにあらはれ、料理茶屋の赤前垂かどになまめき、水茶屋、揚弓場のかんばり聲往來の心をうごかせ、あるは仙助が能狂言、忠七がうき世ものまね、其外山海の珍物見せもの、芝居、輕わざ、曲馬乘、境内に充滿たり。

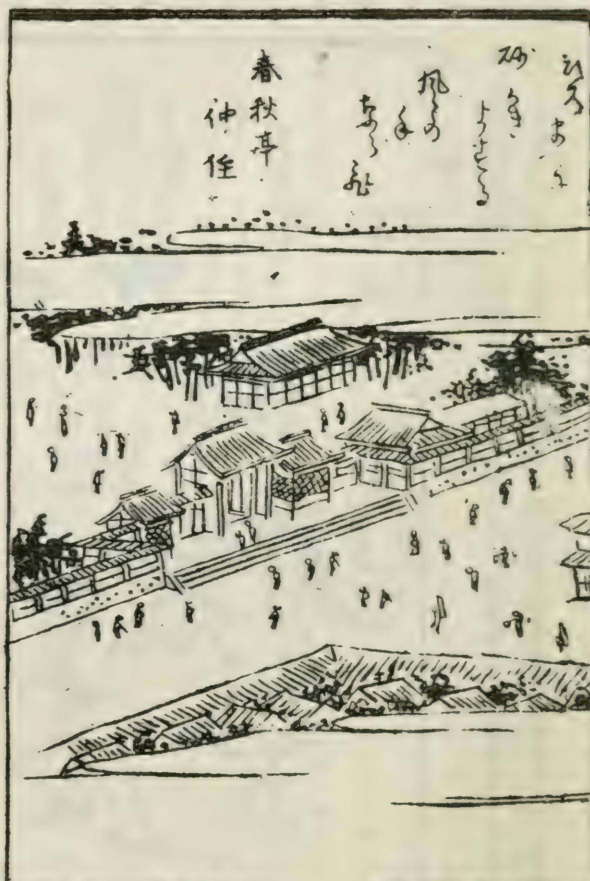
何ひとつ御不足もなき御繁昌
まことに自由自在天神

かくて、社内こと〴〵く順拜し、靈符の女のましろきかほも横目に見なし、小山屋のかどをもむなしく打過、天神ばし通りに出たるに、彌次郎兵衛のはきたる雪駄、いかゞしてや横はなをぬけたりければ、彌「しまつた。京のものはゆだんがならねへ。がうせへに請合てうりやアがつて。いま〳〵しい（ト、つぶやく向うより、かみくづかひ、）「デイ、「デイ〳〵。（是は大さかにてはかみくづかひ、かくのごとくデイ〳〵とよんであるくを、彌次郎はえどのかくで、せつたなほしとおもひ、よびかけ、）「コレ〳〵、此せつた頼みます。かみくづかひ「ハイ、コリヤかたしかいな。かたしではどうもならんわいな。見りや、そのはいてちやも、はなをがどうやらそこねさうちや。いつ所にさんせ。彌「ホンニ、こいつも今にぬけるわ。とてもの事に一所にしてくらだ〳〵（ト、いふゆゑかみくづかひはこれをかひとるこゝろにて、ひねくりまはし、）「コリヤいこ安いが、えいかいな。彌「さうさ、なんでも安いがいゝの。かみくづ「さよなら四十八文ちやが、どうちやいな。彌「イヤ、それではたかい〳〵、廿四文ばかりでよからう。かみくづ「エヽ、じやら〳〵いうてちや。彌「ハテサ、ほんとうに二十四文〳〵（ト、むしやうに、はきものをつきつけるゆゑ、かみくづかひはいつかうにがてんゆかず。うりてのはうからねだんをねぎるはめづらしいと、をかしさ半

分、何にしてもそんのいかぬことなればぜにを差出し、)「ハイ、そしたら二十四文にまけてあげて、買ましよかいな(ト、二十四文彌次郎にわたし、せつたを取、荷の中へいれてゆかうとする。)彌「コリヤ、まつた／＼。おれに錢をよこしてその雪駄をどうするのだ。くつや「ハテ、買うたのぢやわいな。彌「とんだことをいふ。はなをがぬけたから、なほしてくれろといふのだわな。くずや「イヤ、こなはん、わしをはきもん直しぢやとおもうてかいな。コレ紙屑かひはわたなべから出やせんぞへ。あたけたいなわろぢやわい。彌「イヤ、このよこつたふしめが、なぜそんならデイ／＼といつてあるくのだ(ト、りきみかゝるを、左平次おしとめ、)「ハヽア、きこえた。コリヤおまいが麁相ぢや。わしやさつきにからかはつたことぢやとおもうてゐたが、アノおえどぢや、はきもん直しがデイデイといふてあるきをるといふこつちやが、當地ではくづやどのが皆デイデイというてあるくこと御ぞんじないさかい、御了簡ちがひぢや。コレくづやさん、こちがわるい。ゆるしなされ。くつや「ぢやてゝ、あんまりなわろぢやわいな。あんだらくさい。彌「ハテ、間違ぢや。その雪駄をけへしてくんな。くつや「いやぢやわいの。こちをはきもんな



ぼしぢやといひくさつて、こちや外聞(ぐわいぶん)がわるいわいの(ト、はらたつを、北八左平次がやう〱とことわりいひて、せつたをとりかへし、それより彌次郎はわらざうりをもとめてはき、せつたをこしにはさみて、天神ばしをみなみへ打わたりて、よこぼりどほりをたどりゆくに、こゝに人だちさわがしく、けんくわと見えて、くち〲にわめきのゝしりて、うちあひ〱、わらいいやがうへにかさなり、さうどうするに、彌次郎北八も人におされて、行ぬけんとしたるが、何か紙につゝみたるもの、あしもとにおちてあるゆゑ、彌次郎何心なくひろひとり、ひらき見れば、［図 八拾八番］かくのごとくかきたる札なり。今はたえてそのことなしといへども、此時分は、ざまの宮に富のありし時節にて、わらいいの人、このくんじゆにおされてとりおとしたると見えたり。はるかにこゝをゆきすぎて㊇左平治「モシ今あなたのおひらいなされたのは、富(とみ)の札(ふだ)ぢやないかいな。彌「さうだらう。コレ八十八ばんとありやす。左平「コリヤ座(ざ)摩(ま)の宮(みや)の札(ふだ)ぢや。しかもけふつく日ぢやわいな。大かた今頃はもうついてしまうたぢやろぞいな。彌「さうさ、どうせおとすくらへのもんだものを、からつぼの札であらう。へちまにもならねへ(ト、そのまゝひねりうちすてるを、北八あとよりちやつとひろひてくわいちうしゆく



ほどに、やがてこのさまのやしろにいたりけるが、けふはくわんけ富の當日、ことに今つきしまひたると見えて、くんじゆ下向おびたゞしくおしもわけられず。その中に人のはなしながらゆくをきけば、)「ア、殘念なことしたわいな。あの八十八ばん、すでのことにわしが買ふ所ぢやあつたわいの。あれ買そこなうたはこちの運の來らんのぢや。買うたら第一ばんで金百兩とりをつたものを、けたいがわるい(ト、はなしながらゆくを彌次郎きゝつけぎよつとして、)「北八きいたか。今の札を打ちやらなんだらよかつたもの。エヽどうしよう、あとへ戻つてももうあるめへか。北「ナニ、今まであるものか。彌「エヽ〳〵、殘多いことをした(ト、あとふりかへり〳〵神前にいたり見るに、富はつきしまひて、第一ばんよりだんだんとあたりふだのばんづけ、いちいちしるして、正めんにはりつけあるをみれば、一のとみ八十八ばんと、ふでぶとにかきたりける。彌次郎あまりのことにあきれはてゝ、)「エヽ〳〵、いめへましい。おらアもういつそのこと坊主にでもなりてへ。とても運のひらける時節はねへ。北「ハハヽ。そんなにちからをおとすめへ。おれが百兩取からおめへにも三兩や五



雨はかしてやる。コレ見なせへ（ト、かのひろひし札を出しみせる。）彌「ヤアヤア、手めへひろつて來たか。出かした出かした。こつちへよこせ。北「イヤさうはなるめへ。おめへのすてたものを、あとからちやつとひろつてきたから、コリヤアおいらにさづかつたのだ。彌「イヤ〳〵、ひつきやうおれがさきへ見つけてひろつたりやこそ、又手めへの手へも入たといふものだから、もとはおいらがものだ。北「それでも、おめへ一たんすてたぢやアねへか。彌「ハテ、さういはずとマアよこせ（ト、むりにひつとらうとする。きた八いかなやるまいとせりあふを、左平次とゞめて、）「コレ〳〵しづかになされ。そないにいうたら、ひよつとすてたぬしがきゝつけて、出まいものでもないさかい。何ぢやあろとわしが挨拶ぢや。半分づつわけなされ。そしてわしにもちとはおくれぢやあろな。北「ソリヤアおいらがしようちの助だ。何にしろ善はいそげだ。金はどこで受取のだらう。左平「ソリヤあこの世話人のをるとこで、わたしをりますわいな。北「そんならそけへいつて見よう（ト、打つれてそのところへゆきてみれば、

口上
當日殊之外混雜仕候に付
當り札の御方明日四ッ時
金子御渡可申候以上
月　日　世話人

かくのごとくさげふだしてありけるゆゑ、さてはけふの事にはいかずと、まづ神前にまわりて、）

御神の利生かくべつありがたや
罰にはあらであたる富札

（かくえいじて、大きにいさみたち、社内のこらずじゆんばいして、おもてのかたにたちいで、）北「ナント　其内すてたやつが金請取にいきはせまいか。左平「ソリヤ氣道ひないわいの。いたとて、札と引替にせにやわたさんさかい、なんぼ當人でも、無證據じやわいの。彌「きめう〳〵。がうてきにおもしろくなつたわへ。北「あしたは百兩、久しぶりの對面。彌「エヽ、ひさしぶりもをかしい。ついぞあつたこともなくてハヽヽヽ（ト、いさみよろこび、やがてかしこのちや屋にはいりて、まづまへいはひと酒くみかはしぬ。）

道中膝栗毛八編　中卷

かくて彌次郎兵衛喜多八は、おもひもよらず百兩の富にあたり、たちまちいきほひをえて、座摩の社地をいでしより、蕎うり茶屋に入て酒くみかはし、ほろ酔きげんとなり、心おもしろげにうかれ立て案内者の左平次にひかれ、

難波御堂の穴門より、御境内を順拝ながら、

お婦みさまときけば女の名にも似て
あらありがたの穴かしこなり

それより仁徳天皇の社にまゐる。これは世俗に博勞の稲荷といふ。（ばくらうのいなりは、別にけいだいに見えたり。）

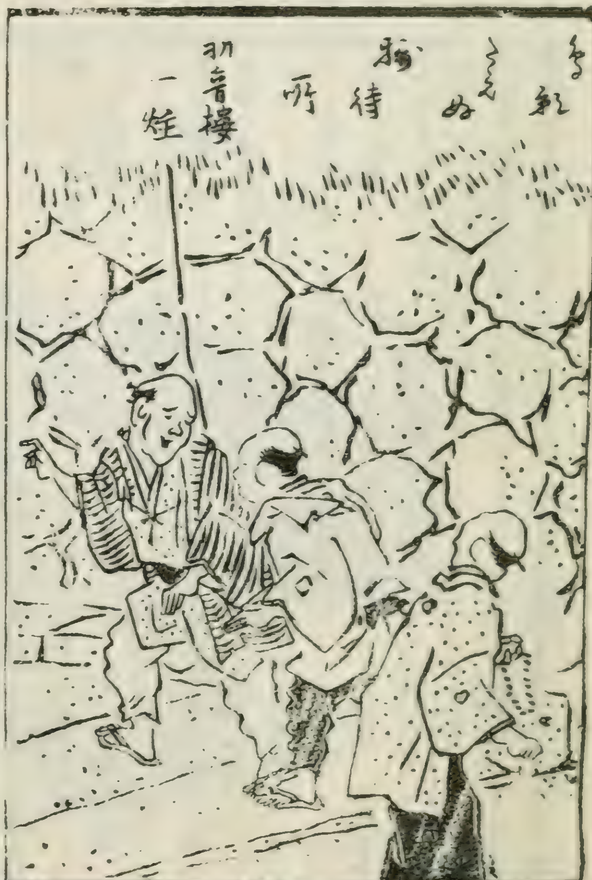
博勞のいなりといふもことわりや
繪馬うりてくふみせも見ゆれば

（門前のでんがくぢやや、）「おはいりなおはいりな。田楽のやきたてあがらんかいな。北「エヽ、しれたことをいふ。でんがくのさめたのがいけるものか。芝居の木戸「サア今が盛衰記、むげんのかねぢや。評判で〳〵。彌「むげんのかねもすさまじい。こつちは百両とつてゐるわ。とほうもねへ。コウ北八、ナント是から新町とやらへ女郎買にやらかしばどうだ。北「おもしろへ。すぐにいかうか。



ノウ左平さん。左「ソリヤお出なさるはえいが、無躾ながら、おまいさんがたのそのなりぢや、とつともうあかんぢやないかいな。ソリヤ局女郎なとおかひなさりや格別、店つきぢやてゝ、ちと身なりあんじやうして、あすの夜さりなとお出なされ。彌「コリヤなるほどおめへのいふとほりだ。ハテ、百両といふ金がとれるものを、とても買ふなら、その太夫とやらを買て見る心いき

だ。北「ヲヤもう、くらへそばへてきたの。左「ソリャ其はずのこといの。わしおともして、九軒の揚屋どつこへなとおつれ申そ。時にこれが大丸屋、ナントえらいもんぢやあろがな。（ここが大丸や）店「あなた是へ／＼。なんでござい。おはいりな／＼。彌「ナント北八、こゝへ今着物をあつらへていかうぢやアねへか。左「ハヽヽヽ。おまいさんもまんがちな。あすのことになされませいな。北「さうさ。いまにアかぎらねへ。サアサアおよびなせへ。彌「そんならあしたのことにしよう。北八、手めへは何にするつもりだ。北「着もののことか。さればの、結城のぐつといきな縞で三枚ばかり、羽折はりうもんのこり／＼するやつの芥子あられなぞが、金持らしくてよからうぢやアねへか。彌「イヤ／＼、それでは店者めく。そんなきもの着たら、コレおまい、ゆうべは何ぼ出た、ヨの字かキの字か。こちやホ久のしろもので位出たさかい、えらい徳したなどと、符帳でしやれようといふふうだからをさまらねへ。おいらはしまちりぞろへに黒羽折、お太刀一本ちよいときめの判官もりひさは妙であらう。ただしはぐつと大ふざけに、ひがのこのへりとりむく、うへにゆふきの棒島、對の羽折はあんまりきいたふうであら



うか。八丈もやぼになつた。唐棧はおやぢめく。南部じまはもうゆやにぬいであるやうになつたから、おそれるおそれる。北「さうさ、なるほど着ようといふと、まさかきるものもねへもんだ(ト、むちうになりてはなしゆく、あとから往來のもの、)「きるもんがなかア、やつぱりそのうしろにおつきな紋所のある、幟の染かへしを着てゐさんすがえいわいの。ハヽヽヽ。北「イヤ、こいつらア何ぬかしやアがる。うしろの人「おまいのこつちやないわいの(ト、いちもくさんににげてゆく。)北「エヽ、いめへましいやつらだ。今に見ろ、あしたはどんなものきるとおもやアがる。左「ハヽヽヽ。コリャ無躾ながら、おまいがたがそないにしゆんだなりして、縮緬ぢやの羽二重ぢやのというてぢやさかい、わらひくさるのぢやが、コリャ敵等がもつともぢやわいな。ハヽヽヽ。ときに、是からあみだ池へさんじて、砂場の和泉屋、おめにかけたいな。彌「イヤ、宮寺もあきはてた。それよりか、はやく新町へ行てへものだが、あすの晩まではがうてきにまちどほな。左「さよなら斯いたそかいな。わし、なんと損料のきりもん借てあげるさかい、それ着て今宵しんまちへお出なされ。おかねはあとでもだんない。わしがおやかたのしつてぢや、揚屋へゆくさかい、どしてあすは百兩お取なさるのぢやもの、なんぢやあろとさうしなされ。北「コリャおもしろへりくつだ。彌「いかさまなア。そんならすぐにかへつて、おめへにそのさんだんをしてもらひやせう(ト、うてうてんになり、しんさいばしすぢを南へ、はやくもだうとんぼりにいたりければ、まことに當地第一のさかりばにして、まへにしまの内あり、うしろに坂町あり、おやまげい子のなまめき行かふさま、にぎやか也。)

いつとても調子くるはじ三味線の
だうとんぼりのにぎはひはそも

其日もはや七ッさがり、大西の芝居打出して、櫓たいこの音喧く、評判ぢや評判ぢやの聲木戸口にあふれて、見物もどよみつれおしあふ中をやう〳〵すりぬけ〳〵ゆくまゝに、角の芝居、中のしばゐの看板さへも目につかず。角丸若太夫、竹田の切狂言もうち出しまへ、いろは茶屋の仲居、あかまへだれと倶に毛氈を引ずりてはしり、島の内の迎ひ駕、ハイ〳〵馬ぢや〳〵につれてもまれ行ほどこそあれ、此群集大かたは、おかずとも拾文のなら茶屋へはいり、或は大庄のかばやきに鼻いからして入るもあり。日本橋ちかくなりて、しばらく往來もすきたりければ、頓て

はしりいだしてゆくまゝに、はや、ながまちの宿に着たりける。左平次さきにたちて、「サア〳〵お帰りぢや。やどの女ども「おはやうござります。「アイ〳〵、是は左平さん御苦労。ときに今の損印の理屈はとうだらう。左「かしこまりました。いつきにせいらくして参上わいな。北「そんならはやく〳〵(ト、ふたりはおくへとほると、をんなきたりて、)「モシナ、お湯におめしなさらんかいな。おひもじかア御膳にいたしましよわいな。彌「イヤ、めしも咽へはとほらぬ、なんだかそは〳〵して。しかし湯へはちよつと這入てこよう。北「おそくなる、湯もいゝぢやアねへか。彌「イヤ、顔ばかりあらつてくる。北「おきやアがれ。ハ、ハ、(ト、此の内彌次郎はゆにいりにゆく。しばらくして、左平次損料ものをふろしきにつゝみて、はしりもちきたり、)「おまちかねであつたちやあろ(ト、つゝみをとけば、北八かれこれとひねくり廻し、)「モシ、ぶは、此黒紬がよかろ〳〵。北「なんだ、とはうもねへ紋所だ。そして、たけがいきものばかりだね。左「ぢやて〳〵、是がいつちえいのぢやわいな。おまいにてんつるてんで袖はてへさうに大きい。これを着たら無頼の奴凧といふものだ



らう。そつちらの嶋はなんだ。左「ふとりちやさうな。北「イヤ、この小紋がよからう（ト、引たてゝみれば、女のきもの。）左「ハ、、、。わしやをとこのきりもんかとおもうてとてきたわいの。北「よしよし、斯しよう。小袖ひとつちやアしみたれだから、此女小そでをしたに着て、うへはふとりじまときめやせう（ト、ふたつかさねてきかへ、おびをしめてゐるところへ、彌次郎ゆよりあがり來り、）「ヲヤ左平さんはやいな。エ、、きた八めがきたわ〳〵。男ぶりがいいから、どこへ出しても、借着したとやつぱり見える見える。北「しやれずとはやくしたくをしねへ。彌「おらア此黒いやつか。よし〳〵、旦那と見えるやうに、お太刀一ぽん、かうきめてゆくわ。北「コレサ、おめへきものをきねへか。裸身にその脇差をさして行つもりか。醫者が淸盛さまの脈を見にいきやアしめへし、とんだ狼敗やうだ。彌「ときにはおりは。左「おまい様は此ぬきもんにしなされ。北「けちなはおりだ。干鰯の仕切にゆかうといふなりだ。彌「人のことをいふ手めへのふうは、蔕木寸伯さまの代脈に來たといふふうだ。ハ、、、。左「おしたくがよござりますなら、さんじようわいな。北「ヲヤ、おいらはまだ湯へはいらなんだ。彌「ばかアいはずと、サアサア出かけよう（ト、打つれてこゝをたつ。左平次は、ふたりが百兩のとみにあたりしにつけこみ、なんでもわりまへをせしめんとてむしやうにおひやりちらし、このやどのばんとうへふきこみ、しんまちあげやへの手がみをもらひて、打つれ此所を出かける。）かくて三人は足もそらに長町を北へ、堺筋ますぐにゆけば、はやくも順慶町にいたりける。名にしおふ、此所は夜見せはんじやうの町筋にて、兩側に內みせ出見せ尺地もなく、萬燈を照し吳服屋、道具屋、ふくろもの、櫛笥、玳瑁、珊瑚、馬瑙の類あるかとおもへば、その隣には盥、小桶、飯櫃、すりこ木、杓子なんど、或は神棚もとめて代錢をはらひきよめて行あれば、佛像買うて尻くらひ觀音と、不足錢あたへてはしるもあり。傘の買人に下駄をはくあれば、草履の賣人にわらぢはくあり。兩替やは目を皿になして天秤を打ならし、金物屋は口を剃刀にひとしくきれものを商ひ、肴屋、しろものは腐れども賣聲大はねて呼立るをきけば、「ヤア、おつきな鯛ちやア〳〵。鱧ちやア〳〵。くるまやア〳〵。このしろやア。はつの身のきりうりやア〳〵。さつまいもうり「ほつこりほつこり。ぬくいのあがらんかいな。ヤアほつこりちやア〳〵。上かんや「ぬく

い〳〵、鯡のたいたの、あんばいよし。ごヤアまけた〳〵。しんまいの煎売ちやア〳〵。すしうり「御ひやうばんのちくらずし、鯖か〳〵、鳥貝やア〳〵。北「アレ弥次さん見なせへ。アノ鮓は京でくつたがとんだよかつた。ひとつやちかさう。夕めしもくはねへではらがへつた。弥「ホンニさうだ。モシ、これはいくらだね。すしや「ハイ、そつちやが四文 こつちやのが六文ちやわいな。弥「ヲツトよし〳〵。コウ、北八、そんなにやみとつてくふな。又長町でくわしをくつたやうなめにあはうせ。モシ、こけへ三拾貳文ばかりが包んでくんな（ト、ぜにをはらへば、すしや、竹の皮につゝみて出すを、弥次郎とりてみち〳〵くらふ。）北「コレ、おれにもよこしねへ。弥「あとで竹のかはをやらう。北「エヽ、むしのいゝ。こつちへ（ト、とりにかゝる。



弥次郎やるまいとするところに、下から犬がひよいと、とびつきひつたくると、）弥「アイタヽヽ。北「どうした弥次さん。弥「いめへましい。ちくしやうめにしてやられた。犬「わん〳〵。弥「エヽ、こいつめが（ト、あしでけると犬はにげる。おつかけるはずみに井戸がはへ又ぐわつたり。）弥「アヽいた〳〵。コリヤとんだ所へ井

戸を出しておきやアがる。四ツ辻のまん中に。左「コリヤ井戸の辻といふとこぢやわいな。北「い丶きみだ。おれにくはせねへむくいだわ。

ひとつ下され。犬めがとり貝は

さてもよいきみ團子ならねど

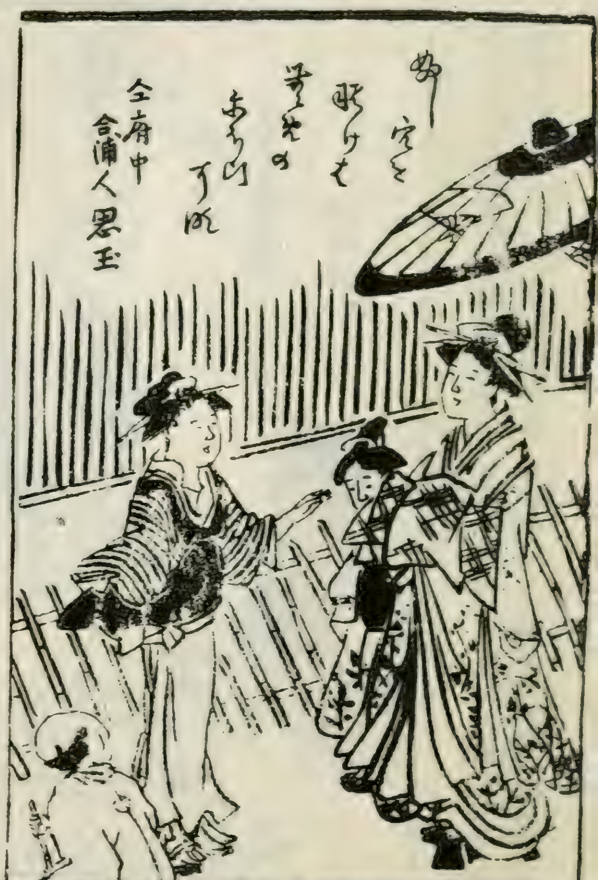
それよりも往來をおしわけゆくさきに、あみがさふかく打かぶりたる卜筮者の口から出次第。「サア〳〵、御遠慮はない。お出なされ。當卦本卦、すみいろの考、こいかうすいをあてるが奇妙、うせ物は存せず、預りものは仕らず、待人は來るか來んかのふたつ、あたるも八卦、あたらぬも八卦、どつちやでも見料は十六銅ヅッ申うくる。是ばかりは違ひはござらぬ。サア〳〵これへこれへ。彌「ナント北八、おいらがあした百兩とることゝ、しれるかしれねへか、何もなぐさみ、見てもらはうか。北「コリヤおもしろへ。彌「モシ、わつちが運を見てくんなせへ(ト、十六文出せば、うらなひしや、彌次郎のかほをよこめに見ながら、めど木をとり、さん木をならべ、しばらくかんがへ、)「ハ丶ア、是はおまい、とひやうもないえらい仕合なことがでけるわいな。彌「さやうさ、大きに心あたりがありやす。うらなひ「そぢやあろぞいな。卦は坤の卦、坤はこんくわい、俗に申す狐則狐福と申て、誠にふつてわいたやうなさいはひが來ると見えます。北「コリヤ奇妙、よくあたりやした。うらなひ「しかし變卦は乾の卦、乾は、けんけれつの象り、本卦の坤と變卦の乾と合してこれを考ふるときは、易に曰乾坤ふたつのあひだをぬけ、離の卦にあたつて中たえたり。扨は、玉なき空鐵炮と申事ござれば、萬事にお心をつけらる丶がよござります。彌「こいつはすこだん〳〵。さういふわけぢやアねへ。もうこつちの手へにぎつたもどうせんだものを、延喜のわりい。うらなひ「イヤ、そこであたるも八卦あたらぬも八卦。北「もうよしなせへ。十六文たゞすてた(ト、こごといひながらこ丶を打過ゆくほどに、はやしん町ばしを打わたりて、へうたんまちにぞいたりける。)さてこの曲輪は、寛永年中にはじめて御免許あり。田圃をひらきて新に町を建たりしより、新町とよんで廓の惣名となせりとぞ。むかしより今に至るまで、はんじやういふばかりなく。兩側の六字見世うりものに花をかざり、きらびやかにならびたるを壹軒〳〵に差覗きつゝ、それより阿波座、越後町を見物し、局女郎の袖ひくを、罵り興じてゆくま丶に、やがて九軒町にいたれば、左「モシ〳〵、こ丶がみな揚屋ぢやわい

な。北「なるほど、ごてへさうな屋てへぼねだ。左「サア〳〵、こゝぢや〳〵。おまいがたはそこにお出なされ（ト、ふたりをげんくわんにまたせおきて、左平次ひとり件のかつて口へはいり、かくと云入れる。この所は、長まちのかはちやより、をりふし客をおくりこすうちなれば、左平次手紙をもち來りてわたしけるゆゑ、ていしゆさつそくはおりはかまにてむかひに出來り、）ていしゆ「コレハはようお出下さりました。コリヤ〳〵仲ゐども御案内申さんかい。サアおとほりなされませ。彌「そんならゆるしなせへ。コウ北八來ねへか。かどぐちに立はだかつて、花屋の柳ぢやアあるめへし。左「コリヤでけました。ハヽヽヽ。サアお出（ト、玄關よりあがり、いく間も〳〵こえてゆくほどに、ぐつとおくざしきの、はなやかなる所にあないすると、左平次はわざとふたりを大じんふうにもてなし、はるか末座にすわる。仲居ども、ちやたばこぼんをもち出るうち、）ていしゆ「ていすめでござります。御ひいきにようこそ。有がたうござります。彌「御亭主さんか。わつちらア、今度江戸から仕入に登りやしたが、御當地ははじめてでござりやす。逗留のうちは、どうせたび〳〵めへりやせうから、おたのみ申やす。そのかはり、わつちらアちよつと來ても、はしたがねつかふことはきらひだから、むだ遣ひの一箱とふた箱は別に爲替にふつてよこしてあるから、そこはいつかう未練なしさ。しかし生得が商人といふものだから、はじめからさうはいきやせぬによつて、マア今宵はおめへがはうでも隨分やすあがりにまけてくんなせへ。ハテあとのためだから。ノウ左平次さん。左「さやう〳〵。斯いたしましよ。夜前お着なされて、おくたびれでもあろさかい、マア今宵は大夫さんがた借て御らうじて、御酒ひとつあがつてお歸りなさるがよござりましよ。ハテまたあすの夜さりなと、お供いたしましよかい（ト、こゝにて左平次ふと心づき、今宵かねをつかはせた所が、ひよつとあすの百兩、どういふことにて間違ふまいものでもなし、手に入らぬうちは不定なりと、順慶町のうらなひしやがことばおもひ合せて安心ならねども、今さらこのまゝにもかへられず、ちよつと一ぱいのませてつれてかへるもくさんゆゑ、かくはいふと見えたり。）彌「いづれともよろしく〳〵。左「そしたら仲居衆、大夫さんがた、マアかりにやらんせ。なかゐ「ハイかしこまりました（ト、たつてゆく。このうち酒さかな出、なかゐ共あひてにのみかけてゐると、となりざしきには、ぐつと西國がたのお侍と見えたる客人、たいこもちげ

いことも引よせて、大さわぎにしやれちらすを、ふすまのこなたよりそつとのぞきみれば、げい子のうた「二すぢほどある薄(うす)鬢(びん)のあたま、やがてずばらに鳴鐘(なるかね)ならば、権八がよからうけんれど、是から貞月(ていげつ)というておくれの神かけて、願ひたり〳〵し。チツンシヤン。惣八(たいこ)「イヨイヨおしまさん、ソリヤ南の権八めが摺(すり)もののうたぢやな。げいこ「さよぢやわいな。東南(とうなん)さんの手をつけてぢやあつたわいな。客「コリヤ〳〵、我(わい)どもが是(こ)こいからおくに踊どもをどるての、サア三味(しやみ)引(ひき)だいてたもれへト、此内客人たつて手ぬぐひをかぶり両の耳を出し、はおりを横ちよに、かたさきを出しかけ、ぢんぢばしよりして手に扇をもつと、げい子がさみせん、「トヲチテン〳〵。客うた「コリヨ合コリヨ合コリ〳〵〳〵。もちこいかソコ、ヨツチヨン。三味「トヲチテン〳〵。うた「ずやまお亀女(かめぢよ)は、ずやまの山の古(ふる)狐(きつね)、亀女(かめぢよ)しりよふれ、かんべまくれちやちよれちや。コリヨ合コリヨ合コリコリ〳〵もちこいか、コリヤせどにや小屋(こや)かけ亀女(かめぢよ)がばん、そくばつたのづうからす、ばうぶら枕にへこといて、そこねいこゝねいずりさるき、これしこよかことしてのけた。ソコ、ヨツチヨン、トチチテン〳〵。みな〳〵「ヤンヤ、でけました。客「ア、草臥(だり)がてい〳〵。此様(こんがい)ゑひ



くらひをつて、わいどものしやんすめにがらりうばあてや、おとろし／＼。げい子「ヲホヽヽヽ。何いひなますやら、こちやねからよめんわいな。客「なじかい／＼。げい子「ヲヽ、すかんやの。アノお顔見なませ。えらいおつきな目して、ひかるやうにねらんでぢやわいな。客「イヤ、こやつふとうなやつの。わいどもの頬よりお身のつらなんぢや。ふぐとうどもの横さるきさせるやうなぶつそうづらして、おもしろうないぞ。わいども最早づらんばい。づるぞ／＼（ト、もつての外むかはらたちて立あがるを、仲ゐども引とめ、）「コレイナア、おまいさん、そないになんでお腹たちますぞいな。たいこ「コリヤしま主が無調法。ナントかういたしましよかいな。どうやらおざしきがしゆんできたさかい、是からわつさりと額風呂へなりこみの、例の



フカ／＼フッ、カ、ホカ／＼けつこう／＼なぞはどでございますぞいな。客「なんちや、額風呂といふは、売ふろのことぢやいの。こやつ、わいどもをのろまぢやとおもひをるか。客どもに向ひて、あんがいおろよいことぬかいてよかばいものか。づくにうども、にやいてくれるぞ（ト、此客人はらたち上戸と見えて、むしやうにおこりちらし、みな／＼とめるをも、つきのけ／＼、ぜひかへらうと大

ちめのさい中、あひかたの大夫引ふは、かぶおかけひなへたると、てらしさかづきをべつ座敷に出、さかづきをとり、のむまねして下
ろをつれてたゝにきたると、」仲ゐソレ、にしき出。仲ゐ、ちそうめんとすゞりばこをにおき。なかゐの顔を見てにつこりとわらひ。
「ソレ太夫主が来なましたわいな。太夫「ヲヽしんど、おまいさん何ぢやいな。仲ゐ「今おかへりなますとて、えらうおはらたてゝおぢやわいな。太夫「おまいさんもマアこちや無宿のうちかたに出ておぢやるかい、ちとの間まつておくれなませというておこしたおやないかいな。それに今おかへりなますはなんのこつちやいな。それほどこちがおいやなら、サアおかへりなませ〳〵。客「イヤ、わいどもそれでづるといふではなかばい。たんだ此廓どゝ、郷ふりにづらんばいといひをつたのぢや。もうよかばいよかばい。引ふれ「ようせわやかしてぢや。サアおつちやへお出なませへト、大せいにひつたてられ、かしこのざしきにゆく。トひかへ」仲ゐ「あふぎやの折琴さん、こ立て行ト仲ゐ「つちやのひな桜さん、これてたなたには、太夫十人ばかり、次の間につれへおかしや」ト、よびいだせば、折琴太夫、へおかしや」、北門がん〳〵と、太夫ひとり



ひとりに出、はじめのごとく皆々さかづきをとり、のむまねしてゆく。彌次郎北八は是をめづらしきことにおぼえ、こゝにもさま〴〵むだあれどもりやくす。）仲ゐ「どなたぞお氣に入なましたかいな。北「イヤもう、のこらず氣に入つた。そのうち三ばんめに出だは、なんといふ女郎だの、（なかゐ、ちやうめんをくり、）「ハイ、西の扇屋の東路さんぢやわいな。左「マア、今宵は御見物のみのこつちやさかい、あすの夜さりなとおゆるりとおあそびなさるがよござりましよ。彌「ナゼ、今夜でもいゝぢやアねへか。左「ハテ、マアわししだいにしておきなされ（ト、心にいちもつあるゆゑ、これぎりにしようとする。彌次郎もくさんちがひてふしよう〳〵に。）「そんなら、酒でもたらふくやらかしやせう。仲ゐ「げいこさんはへ。左「イヤ、それもえいわいの、お急ぢやさかい。北「こけへきて、酒ばかりぢやアはじまらねへ。何ぞ呼にやアこゝのうちへきのどくぢやアねへか。仲ゐ「なんのまあ、サアおひとつお上りなませ。ホンニおはおりおとりなませんかいな（ト、仲ゐども二三人たちかゝり、彌次郎北八に羽おりをぬがせてたゝみながら、はおりのうらにしるしあるを見つけて、くつ〳〵わらひ出し、仲ゐのいさ、）「コレ見いな。十もんじの糸ぬひがあるわいな。大かた損料の着物借てお出たのぢやあろ（ト、仲ゐどしちひさなこゑにてさゝやきわらふ。すべて長町のそん料やにてはきものはおりとも、うらには白糸にて十もんじのしるしをつけおくとみえたり。をり〳〵長町どまりの旅人、是を借り着してしんまちなどへゆくことあれば、此さとのものども、みなかねてしようちしてゐることゆゑ、かくはさゝやきわらふと見えたり。左平次はこれをきゝつけ、心のうちにをかしくおもひけれども、彌次郎北八はつゆしらず。）彌「ナント女中しゆ、此くるわ中に太夫はいくたりほどある。みな惣揚にして遊んだらおもしろからう。北「わつちらが逗留の内、どうぞみんなへそろひの仕着でも殘していきてへもんだ。ノウ彌次さん。仲ゐ「ソリヤおうれしうおますわいな。ソノきりもんのうらに、十もんじの印つけてかいな。今ひとりの仲ゐ「コレイナ、そないなこといはんすな。（ト、そで引てわらへども、ふたりはいつかうしらず。）「ナニ、うらに十のじとは、何かあたりのあることだな、ちくしやうめが。なるほど、おめへなぞはいろがあらう。がうてきに仇ものだ。ドレ、おさかづきいただきやせう。仲ゐ「ヲホヽヽヽ。えらいあぶらいひなます。さよなら十の字のおかたへあぎよわいな。北「ナニ、十のじとは

おれがことか。コリヤありがてへ(ト、おのれがあそばれることはしらず、さかづきをとりあぐると、仲居てうしをとつてつぐとき、北八此なかゐのひざをちよいとつめると、)なかゐ「ヲヽいた(ト、とびのくひやうし、さかづきにさはり、北八のひざのうへへばつたりおちると、そこらぢう酒だらけになり、)仲居「ヲヽせうし。おきのどくなこといたしたわいな。今一人のなかゐ「めつさうな。きをつけさんしたがよいわいな。あなた、じみ〳〵しておわるかろ。そしてさゝのかゝつたのは、きはづくものぢや。ちやと、くゝみ水でなと洗うてあげさんせ。仲ゐ「ホンニ、ざつとなとあらうてさんじよう、おぬぎなませ(ト、立かゝりぬがさうとする。北八は、下に女のきものをきてゐるゆゑ、うはぎをぬぎてはかつかうわるしと、なかゐをはねのけ、)北「イヤ、あらはずとよし〳〵。コリヤ

ほんの不断着だ。仲ゐ「ハテ、御ゑんりよはおませんわいな。おぬぎなませ〳〵(ト、この仲ゐどもふたり、北八のきもの、これもうらに十のじのしるしあるか見てやらんとおもひ、うなづきあうて、むりにふたりしておびをときかゝる。北八きもをつぶし、)北「コレサ〳〵、よいといふに。彌「ハテコリヤ北八、えて吉ぢや。しがみついては、ナソレ、ちよつくりとそこの所ばかりゆすいでもらうがいゝわな。ハテ火ばちでなりとあぶれば、ぢきにひることだ(ト、そん印ゆゑ、あとでやましからうと目顔でしらせて、北八にぬげとをしゆる。北八大きにこまりはて、)北「エ、何の、ちつとばかりさけのしみたぐらゐ。彌「ハテさて、ちつとでもあとがきはづいちやア、ソレわるいぢやアねへか。仲居衆太義ながら、ざつとつまみあらひしてやつてくんな。仲ゐ「ハイハ

イ、サアおぬぎなませ。北「ハテ扨、なさけないことをいふ。もうよいといふに(ト、いろ〳〵いひまぎらかしてぬぐまいとすれども、とう〳〵ふたりしておびをとき、むりにぬがせた所が、下には女のきものをきてゐる。そでちひさくゆきのみじかい所をかくさんと、北八雨手をちゞめてしりごみする。彌次郎ふしぎさうに、)彌「ヲヤ〳〵手めへなんだ、女の着物をきてゐるか。北「エエとんだことをいふ。もう〳〵ひとつ脱だら寒くてならねへ(ト、だん〳〵うしろのはうへちゞまる、)左「おさむかろ。ひとつあがりなされ。北「彌次さん其盃をとつてくんな。彌「ナゼ手めへ手を延すことはならねへか。そこにある、とりやな。北「いま〳〵しい。おめへまでが、おいらをへこませるな(ト、此内なかゐ、かの酒のかゝりしきものをあらひ、火にほして干あがりたるをもち来り、)仲ゐ「サア〳〵、

十のじがよござりますわいな。ヲホ、、ホ。こちやいやいな。あなたのそのなりは、何でおますぞいな。ヲホ、、、ホ(ト、むしやうにわらへば、北八むつとして、)「コリヤ、うぬらはさつきにからおれがだまつてゐりやア、十のじだのなんのとおいらに符帳をつけて、なぐさみものにしやアがるが、なんでおいらが十の字だ。それをぬかせ〳〵(ト、何がな、あたりまなこにねぢかゝる。仲ゐどもこまりはて、)「ツイてんがうにいうたのぢやさかい、おきにあたりなましたら、かんにんしておくれなませ。北「イヤおくれなますめへ。なんでもその十のじのわけをきかねへうちは了簡がならねへわ。左「ハテ、えいわいな。そないにおまい腹立てぢやと、いんまのさきのお侍のやうに無粋ぢやぞへ無粋ぢやぞへ。北「ハテ、ぬしのしつたことぢやアねへ。ぶすゐでもさんすゐで頓着はねへ。サアふんばりめら、十のじたアなんのこつた。ぬかせ〳〵(ト、わめきちらすを、彌次郎左平次いろ〳〵にとめても、さけきげんにて一かうにがてんせず。ぜひ〳〵十のじのわけをきかねば れうけんならぬとのことゆゑ、左平次もしちめんだうになり、この上はせんかたなしとて、)左「コレ〳〵仲ゐしゆ、あないにおつしやるものを、しよことがない、十のじのことゝいはんしたがえいわいの。仲ゐ「そぢやてゝそれがまあ。北「はやくぬかせ。仲「いうたら又おはらたちなますぢやあろ。彌「はらアたつても、わつちが呑込でゐるから、念晴しにいつてしまひなせへ。おいらもどうかきゝてへやうだの。仲ゐ「さよならいうてのけるぞへ。アノナ、十のじとは是ぢやわいな(ト、ふたりのぬぎおきたるはおりのうらをひつくりかへし見せる。)彌「ヲヤ〳〵、なんで此はおりに十もんじがぬひつけてある。左「ハ、、、。コリヤモツ、とつとねからやくたいぢや。ハテ旅のおかた〳〵ぢやもの、そないに着物用意してお出るおかたばかりもないもんぢやさかい、それで損料借てお出たぢやわいの。北「ナニ、おいらが損料のきものきてくるものか。とんだことをいふ。左「イヤもう、そないにいはんしてもあかんわいな。長町の損料屋のきりもんには、みな十の字の印ついてあること、敵等ようしつてぢやさかい、それであないにいうたのぢやわいな(ト、十のじのわけさらりとわかりて、ふたりはにはかに大へこみとなり、北八なまなかのことゐひつのり、今さらはぢのうはぬりし、くしや〳〵おもふ内にもをかしくなり、さう〳〵支度して、こそ〳〵とこゝを出かけけるに、そりや

おかへりぢやとなかゐども大ぜい、目ひきそでひき、わらひをかくしておくり出るにぞ、三人やがておもてにたちいで、)

損料のきもののみかは太夫まで
かりてみたりの不首尾たら〳〵

十の字のしるしありとは露しらず
借りしはおりのうらめしきかな

かく打興じつゝ長町さしていそぎける。

道中膝栗毛八編下巻

かくてみたりは、新町のあそびに、おもひもよらず面目をうしなひしも、道すがらわらひのたねとなりてうち興じつゝ曲輪を出たりしは、最早子の刻過けるゆゑ、順慶町の夜見せもひけて、往來さびしければ、おの〳〵あしをはやめて長町に立かへり、翌日こそはかの百両をあたゝまり、今宵の恥辱をすすがんと、胸工みして河内屋のおくざしきに臥たりけるが、なにとなく心さえて、ね入もやらず、漸く一ばん鶏のうたふころ、とろ〳〵とまどろみたるが、はやくも夜明て、こゝに泊り合せし旅人の追々起出て、はなし聲するに、彌次郎兵衛北八も目さめて床を出れば、左平次目をこすりながら出きたり、はやとく〳〵とすゝめたつるにぞ、ふたりは食事もそこ〳〵に支度調へ、昨夜



の損料着物引ッぱり、立出ていそぎはせゆくまゝに、頓てかの座摩の宮なる、富會所にぞいたりける。北「急ぎ候ほどに、もうこれだ〳〵。サア彌次さんはいらねへか。彌次「手めへさきへはいね。北「へいどうやらはづかしいやうだハ、、、。モシちとおたのん申やす。わつちらア、昨日の一の富にあたりやした。金子をおわたし下さりませ（ト、いひ入れると、せわやき講中と見えたるが一人、はおりはかまにてさつそく立出、）「コレハようこそ、サア〳〵こつちやへお通りなされ（ト、げんくわんへあげてしばらくまたせ、やがて又出きたり、）「きんすおわたし申ましよ。マアこつちやのはうへ御案内いたしましよ（ト、打つれて、ぐつとおくの廿疊ばかりのざしきへとほす。三人こゝにすわりて見まはすに、りうきうおもてをけぬきあはせにしきつめ、とこの間



ちがひだなのかゝりきらびやかに、ちりひとつなきざしきのけつこういふばかりなし。此内、十三四歳ばかりのうつくしきわかしゆが、くろつむぎにもえぎちやうのはかまにて、茶たばこぼんをはこび、つぎにすひもの、すゞりぶた、てうし、さかづきをもち出ると、かう中一人、）「たゞ今金子おわたし申ましよ。先、御酒一獻めしあがりませ。彌「コレハ〳〵御ていねいな。ハ、、、ハ、、、。北「ナニそれがをかしいことか。お辭義

なしにはじめなせへ。かうぢう「まことにはやこの多くの札數のうちにて、一の富におあたりなさるといふは、御運のひらける瑞相、わたくしなどもあなたがたにあやかるやうに、お盃いたゞきましよかいな。彌「左樣なら、はゞかりながら。かうぢう「イヤまづあなたへ。北「コレハ御ちさうでござりやす。ヲトヽヽヽ（ト、したぢはすきなり、ぎよいはよし、むしやうにさいつおさへつのんでゐるうち、さかないろ〳〵出、せわやきから中、かはる〳〵あいさつにきたり、つゐしやうたら〳〵そやしたてゝ、さけのあひてとなり、大かたに生醉となりたる頃。）「御時分でござりましよ。麁末の出來合さしあげましよかいな（ト、さけをひきて本ぜんをすゑる。）北「コレハいろ〳〵御念の入たことだ。彌「もうお構なさいやすな。ハヽヽヽイヤモおもしろくてこたへられねへ（ト、三人ともおもふさまにくひしまふとやがてぜん〳〵もひけたるに、當社の神しよくと見えたるがさきにたち、かう中二三人つきそひ、南れうにて百兩さんばうにつみあげたるを、ふたわけにして目八分に持出、三人の前におく。彌次郎北八これを見るより、ぞくぞくとしてうちやうてんとなり、にこ〳〵ものにてひかへてゐると神主、）「さておのおのがたには、はじめて御意えます。拙者神職の名代でござります。先はお悦申入ましよ。おめでたいことでござります。彌「ハイ〳〵。かうぢう「金子おわたし申ましよ。北「ハイ〳〵〳〵。かう中「ときにお願ひがござります。當社御覽のとほり大破につきまして、再建のため興行いたした富にござりますれば、おあたりなされたお方へは、どなたへもお願ひ申て、百兩の內拾兩寄進におつき申ておもらひ申ますさかい、あなた方もさやうなされて下さりませ。彌「ハイ〳〵〳〵。かう中「まだ外にお願ひがござりますわいな。是もすべてさやうにいたします。金子五兩せわやきどもへ御祝儀といたして、おもらひ申たうござります。北「ハイ〳〵〳〵。かう中「まだひとつござりますわいな。今五兩あと札をおかひなされてくださりませ。彌「ハイ〳〵〳〵。かう中「さよなら百兩の內廿兩ひきましておわたし申ますさかい、それでよござりますかいな。彌「ハイ〳〵。どうなりともよろしくなされてくださりませ。かう中「さよなら、その札をこれへお出しなされ。引かへに金子おわたし申ましよ。北「ハイ〳〵。是にござりやす（ト、くだんの札くわいちうより出してわたせば、かう中手にとり見てびつくりし、）「モシ札は是ばかりかいな。北「ハイそればつかりさ。かう中

「コリャちがうたわいな。北「ナニちがつたとはへ。アノ一の富は八十八番ぢやござりやせんか。かう中「さよぢや、八十八番ぢやわいな。北「そんなら何が違ひやした。かう中「コノ十二支がちがうたわいな。當社の札にはみな番付のうへに、コレ見やんせ十二支がついてあるわいな。一の富は子の八十八番。こなさんがたのもてごんしたのは、亥の八十八番ぢやわいな（ト、いふはこの所のふだはすべて十二支をかしらにつけてあるゆゑ、おなじばんかずの札十二まいづつあるゆゑなり。北八これをしらずうつかりとして、そこに心つかざれば、このまちがひ出來たるなり。兩人これをきくより、はつとおもひぐんにやりとなげくびして、）北「エ、そんなら三文にもなりやせんか。彌次さん、コリヤどうしたものだらう。彌「ア、／＼どうといつたら、ねつからさつぱりちからがおちて、おいらアもうどうも。北「エ、なんだ。おめへ泣か業さらしな。かう中「コリヤ、こなさんたちは、よう札をあらためてごんしたがえいわいの。えらいあはうな衆ぢやわいの。神主「いこやくたいぢや、とつと丶出ていなしやれ。かう中「サア／＼いんだ／＼。彌「ハイ／＼。コリヤ思ひがけもない御馳走になりやした。なんなら十二支くらゐはまちがつてもようござりやすから、どうぞ今の金子を。かう中「あはうなことぬかしやアがれ。こ丶ならずめが。北「イヤもの丶間違といふことはありうちだ。そんなにやすくいやアがるこたアねへぞ。かう中「たはことといふと、どづき倒すぞ。左平「コレイナ、もうえいわいの。こちがわるい。ハテこないにちさうにあうて、きのどくぢやさかい、しよことがない。サア／＼こち來なされ。是はしたり、彌次さんどしたもんぢやぞい。サアたちなされ／＼。彌「ア、コレ／＼北八、おれがうしろをかゝへてくれ。左平「なんぢやいな。おまい腰がぬけたかいの。彌「はつとおもつたせいかして、どうもこしがのされぬ。アイタ丶丶。北「エ丶、いくぢのねへこつた。サア立ねへな。彌「コレサ、そのやうにひつぱるな。あいた／＼（ト、立あがりしが、ひよろひよろとしてあるかれず。せんかたなくて、四ツばひにげんくわんまでやう／＼とはひ出れば、そろひのかんばんきたるぼうつきの男ども、くち／＼に、）「えらいあんだらぢやな。敵等はおほかたあないなことというて、酒のみにがなうせをつたんぢやあろぞい。晝盗賊めがやばなことさらすな。北「なんだ、いめへましいやつらだ。ぼうつき「ア、

いしこやのどやいてこませやい（ト、みな／＼立かゝるを、左平次中にいり、おしなだめて、）「サアえいわいの。こちごんせこちごんせ（ト、むりに北八が手を引ぱりさきへやり、彌次郎がよい／＼めきたるあるきぶりをかいはうしながら、やう／＼とけいだいを出たれど、ふたりとも元氣おちてきぬけのしたる如く、ぐにやりとなりて、）「ホンニ勘平ぢやアねへが、することなすこといすかのはしだ。今おもへば、ゆうべの占者（うらなひ）めがきついことをぬかしやアがつた。

　百兩の的（まと）ははづれてあたらねど
　　よくあたりたるさきのうらなひ

彌「エ、歌どころか、コリヤもうつまらねへものになつた。ぜんてへどくなこつちやわいの。佐平「サイノおきの左平さん、おめへがわりへ。北「コリヤ全體（ぜんてへ）わつちらア他國もので、この土地の勝手はしらす、アノ札の十二支（えと）の理屈もいつてきかしてくんなさると、何もこんなにばんくるはせはなかつたものを、いめへましい。いつそのくされに、是からどこそ遊びにつれてあよびなせへ。左平「ホンニ、わしもねから氣がつかなんだわいの。まあなんちやあろと、ひとかへりもどりなされ。其着物（きりもん）のこともある



さかい（ト、一のとみのもくさんちがひ、左平次もおのれがうけ合しそんれうのこともきにかゝり、又彌次郎が、うか〳〵ときぬけのじたるていに、もしやはしのうへから、どんぶりとやりはせまいかと、こゝろのうちにゆだんせず、さま〴〵にいひくろめて、まづやう〳〵と、長まちのかはちやにつれかへりければ、ばんとうはかの富のこともしようちなれば、さだめし百兩せしめてかへりつらんと、出向ひて、）「コレハおはやうござります。ソレ、女子どももおちやあげんかい。マアおく〳〵。時にお客さまがたは、何ぢややらおめでたいことがあると、夜前ちらときゝましたが、どうでござりましたな。彌「イヤいつかうやくたい〳〵。しかし命には別條なく歸りやした（ト、ひよろ〳〵してふたりともおくへゆく。左平次ばんとうにさゝやきて、）「イヤモ、えらいばんくであつたわいな。ばんとう「おほかた十二支ちがひぢやあろぞい。ハヽヽヽ。左平「サイノウ、そぢやさかい。アノひとりの年のいたおかたが、どうぢややら氣の觸れたやうに見えるさかい、氣をつけさんしたがよいわいの。モシ、雪陣へいてなら、油斷さんすな。首なとくゝりをろもしれんわいの。ばんとう「ソリヤきみのわるい。どうぞはやうほり出してこましたいものぢや。（引わかれて、左平次おくざしきに來り、）「モシ、早速ながら損料屋が勝手へ來てゞござります。もうお脱なされて、お戻しなさるがよござりましよ。北「アイ、けへしてくんなせへ。サア彌次さん、おめへも脱な（ト、ふたりながらふしよう〴〵にぬぎて、もとの古ぬのこをきる。左平次これをそでだたみとなして、）「ハイ、損料錢の書付でござります（ト、さしいだすを、北八ととりあげ、）「なんだ、〆て一〆八百文。こいつたけへ〳〵（ト、やつつかへしついふ内、かつてより女來りて、）「たゞ今、新町の九軒から、御勘定をいたゞきにさんじたわいな（ト、かきつけをさしおく。彌次郎とりあげ、）「なんだ、拾五匁座敷代、三匁硯ぶた、壹匁五分すひもの、拾匁三分御さかないろ〳〵、貳匁五分御くわし、六匁八分六厘が酒、壹匁貳分四厘がらふそく、〆四拾壹匁四分。ヒヤア目が出る〳〵。北「コウ、左平さん、他國ものだとおもつて、あんまり人をばかにした。夕部喰たものが、何こんなにかゝるものか。惣體上方ものはあたじけねへ。氣のしれたべらぼうどもだ。左「イヤおまいがたがあたぢやわいな。何ぢやあろと、くたものをはらつて下んせにや、わしがすまんわいな。北「イヤ

おいらをあたじけねへとはなんのこつた。ばかなつらな。左平「錢出してから何となといはんせ、あたけたいな。彌「コウ、左平さん、おめへいくらりきんでも、此新町の書出しはちがつてある。左平「ちがうたとは、何がちがうたぞいな。彌「ハテ、わつちらが借て來たは、子の四十壹匁四分、此書出しは亥の四十壹匁四分とある。左平「エ 、おきくされ。てんごういはずとかね出せやい。北「イヤ、このやろうめは、ふてへやつだ(ト、立かゝれば、左平次も一すぢではいかぬやつ、たがひにまけず、すでにつかみ合にもならんかとおもふ所へ、このかはちやのていしゆ四郎兵衛かけ出、左平をしかりちらし、北八をなだめてゐさいのことをきくに、此ていしゆのやうすたのもしげに見え、ことに此家のあるじと見てとり、ふたりもおくそこなくゐさいをかたり、身の上のすかんぴんなることも打あけてたのみければ、ていしゆ四郎兵衛わけよきをとこにて、ぐつとのみこみ、」「よござります。ハテ萬兩分限でも、旅ではかねにこまることがあるもんぢやげにござります。此商賣いたせば、たとへどないなおかたでもお客はお客、飯料がないて丶そんなら出ていなしやれとは申ませぬさかい、何日なと逗留しておかへりなされ。彌「それはありがたうございやす。わ



つちらもゆるりと所々見物がしたうござりやすが、もうそんなに長逗留してもつまりやせんから、あすは出立いたしやせう。てい主ハテ、せつかくお出たもんぢや、ゆるりと御見物なされ。ホンニ住吉へはまだぢやあろ。さいはひ、けふわしも住吉へゆくさかい、お出んかいな。しかし、わしははかまや新田のかたへ用事が有さかい舟でいこが、お前がたは生玉天王寺かけて歩行でお出なされ。新家の三もんじ屋といふ茶屋にお待申しましよさかい、ノウ左平次どの、こなさんも中直りにお供さんせ。もう四ツ過たぢやあろ。のつきにお出るがよございます（ト、いふにふたりもさいはひのことなりと、そのさうだんにきはまり、左平次ともたがひにあいさつして心とけ、やがてしたくとゝのへ、ていしゆは舟にてゆくとの事なれば、こなたはいく玉てんわう寺をまはりてゆかんと、又左平次のあんないにて、こゝを立出、高津しん地にかゝりゆくほどに、はやくもいく玉のやしろにまゐりて、）



御普請もあらたに見えて金ものゝ
ひかりますなりいく玉のみや

當社は生魂命化現の靈玉を鎮たてまつるといふ。常に参詣の人多く、境内に田樂茶屋たて續き、見せもの、はみがきうり、女祭文、東清七がうき世もの

まね、その外さま〴〵あるが中にも、粟餅の曲舂は、此ところを元祖とす。（むかふはちまきに、手ぎね、しやにかまへたるをとこ、）「サア〳〵、ひやうばんで〳〵。元祖名代粟もちのきよくづきは生玉やが家の看板、ソレつくぞ、ヤヽつくぞ、アリヤコリヤつく〳〵〳〵つく、何をつく、粟つく麥つく米をつく。旦那はんがたには供がつく。わかい後家御にやむしがつく。隱居さんは、ちよちんで餅をつく。おやまはお客のえりにつく。げい子にや又してもあしがつく。コリヤ居去の金たまへ砂がつく。ヨイ〳〵、サッサ〳〵、ひやうばん〳〵。彌「おいらは年中うそをつくがきいてあきれらア。

商賣のうまみを見せて錢金を
ぬれ手でつかむ粟餅の茶屋

かくて境内を打過、馬場さきどほりに出たるに、こゝはすこしの遊所ありて、おやまげい子のなまめき行かふさま花やかなり。こゝにもゝ引はきて、ちよいとかたつまはしよりたる男、ちや屋めきたるかど〳〵に立ちていふをきけば、「イヤア新吉に、舟場邊お醫者の娘出、ぼつとりとした中年增、おねまのところは愚都々々と、煎じやう常のごとしとは申せども、そこにはちくと匕加減お用ひなされて御らうじませ。天王寺屋に是はまた、去所の飴屋の娘出、につちやりくつちやり、澤山な水飴もどきの上しろものが出ます。いづれもおたのみ申ます。（ト、ふれてゆく。）北「左平さん、アリヤアなんだね。左平「あれかいな、こゝのおきやに新造が出ると、あないにいうて呼屋をふれてあるきをるのぢやわいな。彌「コリヤめづらしいハヽヽハ。左平「ときに、わしらはちよと此裏に用事があるさかい、おまいがたは此とほりまつすぐに、さきへお出なされ。ツイこのさきが天王寺ぢや。いつきにわしおひつくさかい。彌「よし〳〵、おさきへめへりやせう（ト、こゝにて左平次に別れ、ふたりははなしつれてたどりゆくに、つきあたりて少しまがる所、いづれへゆきたるがよきやしれざるゆゑ、さきへゆくこゑとりのおやぢをよびかけ、）彌「モシ〳〵、てん王寺へはどうめへりやすね。こゑとり「わしがあとへついてごんせ。北「エ、ついてこいはあやまる。くさい〳〵（ト、あとへさがらうとするとこゑとり、ふりかへりて、）「コレイノ、わしや天王寺のツイねきぢやさかい、つれまうていこわいの。サア〳〵、ごんせ〳〵。おまいがたはどこぢやいな。彌「わつちらアえどでござりやす。こゑとり「ハアおえどはえいとこぢやげな。アノおえどは、屑が

一荷何ぼ程するぞいな。彌「わつちらアそんなことはしりやせん。北「コウ彌次さん、もつとあとへさがつてゆかう(ト、彌次郎がそでを引て、こえとりのおやぢをさきへやらんと、わざと小べんをする。此内、しばらくしてかのおやぢをさきへやり、)彌「いめへましいおやぢめだ。おいらに糞のねだんをきいたとて、何わかるものだ。氣のきかねへ。(ト、いひつゝもはやよほどへだたりしならんと、さつ〳〵とゆくむかうに、また今のこえとりのおやぢ、待うけてゐるていに、)北「エ、情ねへ。あそこにまたまつてゐやアがる。こえとり「サア〳〵、ごんせ〳〵。おまいがた、又爰で道がしれぬくかろ。サアサア、ごんせ〳〵。今見ればおまいがた、あこでしよんべんしてぢやあつたが、おえどぢや、あないにみなこきばなしにしてぢやさうな。もつたいないこと

いの。マアおまいがたは一日にいくたびほどづつ、しよんべんしてぢやぞいな。彌「ソリヤア三度する日も有、四たび五たびする時もあり、定まつたこたアござりやせん。こえとり「ふとう出るか、ほそう出るかいの。彌「エヽおめへもいろ〳〵なことをきくもんだ。わつちなどはそんなでもねへが、此男のは何のことはねへシヤア〳〵と瀧のおちるやうに出やす。こえとり「アヽ、そりやようきくぢやあろに、をしいことしてぢや。彌「ちと急いでいかうぢやアねへか。北八、ヲヤ手めへ何をする(ト、とがめられて、彌次郎のそでをひき小ごゑに、)北「アレ見ねへ。糞擔の内に、銀のかんざしのあたまが見える(ト、彌次郎はかのおやぢとはなしながらゆくうしろのかたにて、北八はあたりにありあふ竹きれをひろひ、はしとなしてかのこえたごの

かんざしをはさみとらんとしてるとき、こえとりのおやぢ、やつとこさとかたをかへんとするひやうし、北八のもちたるはしをはねとばされて、そこらあたりへとばしりかゝれば、彌次郎も北八も、)「エヽ、是はとんだことをした。(はながみを出してふく。此うち、おやぢは前のはうになりたるたごのうちに、かんざしを見つけ、)「コリヤ何ぢやいな(ト、あたまをつまみて、ちよいと引上て見れば、よほどめかたの見ゆるかんさしなれば、)肥取「コリヤえいのぢや。大かた雪陣の中へおちて有たのぢやあろぞい。孫娘にえいみやげぢや。ドレおさきへいこわい。ゆるりと跡からごんせごんせ(ト、ゐさいかまはず、さつ〳〵とゆく、)北「エヽ、ごふはらなことをした。彌「アヽてめへろくなことはしねへ。なんだかからだ中がくさくて、やつぱり、今の親仁めとつれだつていくやうだ(ト、

こごといひながら、ゆくともなしに、はやくもてんわう寺の西門にいたりければ、こゝにてな平次あとより來り、」北平「ヤレ／＼辛度やの、やう／＼のことでおひついた。コレ見なされ。此鳥居の額は、小野の道風のかいたのぢやといな。彌「なるほど、はなしにきいてゐやしたが、コリヤア何だかねつからわからねへ。

　唐めきて見ゆる文字にしられけり
　をの〻たうふのお筆なりとは

抑この四天王寺は、上宮太子の御草創にて、由來は太子傳記にくはしく見ゆ。まことに日の本最上の靈場にして、堂塔の莊嚴いふもさらなり。

　何となくこゝろはうちやう天王寺
　われをわする〻ありがたさには

御境内の廣大なる、記し盡すべからす。おほ方に順拜し、（こゝにもいろ／＼あれどもりやくす。）それより、安部街道にいで、ゆく道すがら畑うつ男のうたふをきけば、「坊樣よヲ、大ばんよヲ、ちよつちよとめさるまいかいの。コノ大ばんよヲ。彌「とつさん、精が出やすの。もう何時だへ。男「アイ、きんのふの今時分ぢやあろぞいな。彌「おきやアがれ。お定りのしやれをいふわ。ときに北八、たばこの火でもひとつうたつせへな。北「むかうに乞食が呑でゐるから、すひつけなせへ。しかも女の乞食だ。彌「ナニきたねへ。北「とんだことをいふ。こつちのきせるで吸付るものを。ドレドレ、おいらがかりてやらう。コレ、火をひとつかさつし。廿一二計の女のひにん「ハイ、いんまツイ消ましたさかい。ちよとうつてあげましよかいな。北「イヤ、うつくらゐならこつちにもある。女「そしたら、おまいさんひとつうつておかしなされ。北「い〻ことをいふ。しかしきさまのこつたものを、うつてかしやせう。ノウ彌次さん、見なせへ。乞食にしておくはをしい器量だ。彌「ホンニ仇しろものだ。コレ、手めへ男があるか。女「ハイ、亭主には去年わかれましたわいな。彌「そんなら、又あたらしく片付ばい〻に。女「さよぢやわいな。此間もせわやいてぢやおかたがあつてな、さきのをとこもよい男ぢや、年中はだかでこそ居れ、てん／＼てんまのおてこが、ねからえらい上手ぢやて〻、一生貫うてくはせかねんをとこぢやさかい、あこへいかんかて〻いうてぢやあつたが、肝心のうちがないて〻、ようさんじませんわいな。彌「おれがい〻所へせわをしてやらう。此男はどうだ。女「ヲホ、、、。あのおかたのとこへなら、わしやどうぞいきたいわいな。北「おれもうちがねへがい〻か。しかし、今晋

請さいちうだ。出來あがつたなら呼やせう。女「ソリヤどこにふしんしてぢやへ。北「イヤ所は何といふ所かしらねへが、爰へくるみちに橋普請してゐた所があつたが、あれが出來たら、そのはしの下で祝言しよう。女「そしたら、わしもあたらしい莚なと貰うて、きりもんのしたくせうわいな。北「ドレ、結納に壹文やらうか。ハヽヽヽ、おれが乞食だと、手めへを女房にするものを。殘念〳〵。女「ハア、おまいさんは、アノわたしらがなかまの衆ぢやないかへ。北「しれたことよ。おいらアしらきちやうめんのお町人さまだ。女「わしやまた、そないにあかじみた、しゆんだなりしてぢやさかい、仲間の衆かとおもうたわいな。北「エヽ、いめへましいことをいふ。彌「ハヽヽヽ。お見たて、えらいもんぢや。サア〳〵、お出んかいな〳〵。

（ト、それよりすみよし街道に出たるに、貴賤老若打まじりて此御神に歩行をはこぶ、道すがらのにぎはひ引もきらず。こゝに大盡ふうの男まつしやあまたつれたるが、さわぎたちてだんごやのかどに立どまり、おの〳〵かのだんごひとくしづつもとめて、よこぐはへのしやれと出かける。この大じんの名はかは太郎。）「コレばさまや、わしや團子より外に、かうていにたいもんがあるが、賣んせんか。ばゞ「ハイ〳〵、何なとかうておくれなされ。河太郎「そしたら、此かどにたてゝある、障子一まい賣て下んせ。是やろわいの（ト、まへさげのどうらんより、金壹歩出してやると、ばゞきもをつぶし、あきれたかほしてゐるうち、河太郎みづからそのしやうじをはずしにかゝれば、末社共おどろき、）「コレは旦那、こないな破れしやうじ、百疋とはえらいたかの數珠ぢやわいな。しかし、これには何ぞきよとい御しゆかうがござりましよいな。河太郎「わしやひなたあるくとのぼせてわるいさかい、コレ久助、コノ障子もてこんかい。コリヤ、そちにも壹分やるわ。そのかはり、住吉までコウたてにしてもてあるけ。ヲヽさうぢや〳〵（ト、しやうじ一まいをたてにもたせて、そのかげをゆくといふしやれなり。この河太郎といふは、浪花名だいのくわつぶつにて、かゝるしやれをなしてたのしみとし、その名のこりたり。彌次郎きた八、これを見てぎよつとし、）彌「イヤ、こいつはなか〳〵おもしろい。北「上がたもばかにやアされねへ、とんだしやれものがある、きめう〳〵（ト、だん〳〵此人々のあとにつきてゆけば、およそ六七丁もゆきたりとおもふところ、かのさきへゆく大じん河太郎、）「イヤ、しやうじも少しうつとしうなつたわいな。久助「ちとあけましよ

かいな。お庭はいこひろし。泉水は御前崎、淡路しまがつき山とは、えらいもんでござりますわいな。河太郎「久助、もう其障子ほつてしまへ。久助「もうよござりますかいな。河太郎「おけ〳〵（ト、いふに、かのしやうじ道のかたはらへはふり出してゆく。あとより北八、）「ナント、彌次さん、此しやうじをひろひはどうだ。彌「イヤ〳〵、京で梯子にこりてゐる。北「ハテ、ふたりでかはり〴〵持て、おいらも障子のかげをゆかうぢやねへか。おもしろいしやれだぜ。彌「なるほど、けふはがうてきにあつたかで、ひなたはのぼせる。北八もつてきさつし。北「かはり〴〵もつのだがいゝか。彌「しようち〳〵。コリヤきめうだ（ト、北八にしやうじをもたせて、彌次郎そのかげをゆくにいやがて天下ちや屋むらなる、わちうさん是斎の見せさきにいたりけるに、）

麗な天下茶屋から四方に名の
　羽をのす鳶のわちう散みせ

（此内むかうのかたより、下向の大ぜいづれ、）「てうさや〳〵、まんざいらく〳〵ぢや〳〵。ハ、、、アリヤ 何ぢやい。日がさのかはりちやなし アノもていきをるやつのつら見いやい。檀尻の印もちと、しやうじもていくやつに、賢いつらはないもんぢやゐい。ハ、、、、。北「コノさる松めらは、何ぬかしアがる。さきのあひて「何ぢ



やい、おどれ病ひづかしくさるな。聲あげさせてこませやい。北「コリヤえどつ子だわ。かたつぱしからはりとばすぞ（ト、もちたるしやうじをふりまはせば、さきの大ぜいの中に、今宮しんけの權七といふあふらがほのでつくりしたろおやぢ、北八をとらへて、）「コリヤ此障子は、どしておどれこゝへもてうせたぞい。おれがうちのしやうぢやわい。北「ばかアぬかせ。ナニおのれがところのもんか。おやぢ「イヤ、こないにおつきにかいてあるのが、おどれのまなこにやはいらんかいの。コレ見い。善哉餅三五團子、今宮新家さいかちやと、しかもわしがかいたのぢや。けふこの衆と、住吉講の月參にいたるすに、ばゞひとりおいて出たが、コリヤおどれら、ぬすみくさつてもてうせたのぢやな。北「ナニ、どろぼうしたとは、うぬふてへやつだ。



コリヤア道でひろつたのだ。おやぢ「あほなことぬかせやい。しやうじすてゝゆくもんがあろかい。あんだらつくしあがれ。左平「コレ〳〵、おつさん、コリヤかうぢやわいな。誰やら、おまいのとこで、此しやうじ買うてもて來てちやが、道へすてたさかい、このおかたが拾うて來てぢやあつたわいな。おやぢ「エ、こなんもあはうつくさんぜ。こないに書てあるは、コリヤわしがとこ

の看板ぢや。買もんぢやないわいな。北「それでも、一分出して買たをおいらア見てゐたわ。くそたれめが。おやぢ「おきくされ。こないな古障子、たれが百にもかふものかい。大かた、おどれら聞子くらひをるて丶、はづしくさつたのぢやあろぞい。なんぢやあろと、此しやうじおれが内までもてこい。サアあとへ戻りや〳〵。左平「コレれうけんさんせ。ハテおまいのしやうじなら、こ丶からもていんでくだんせいの(ト、しやうじをつきつくればつきもどし、かれこれとせりあふところへ馬かた一人、馬をひいてこゝへ來かゝり、)「何ぢやい〳〵。往來あけて下んせ(ト、ひいてとほるはなのさき、しやうじをあつちこつちへひつぱり合、はふり出せば、この馬にあたり、)馬「ヒイン〳〵(ト、おどろきてはねあがるひやうしに、馬かたはねつけられ、一二けんむかうへのた打まはり、)「あいた〳〵。左平「コリヤどうしたぞいな。馬士「イヤどした所か。あいた〳〵。コレ金玉がなうなつた。そこらにやおちてないか、見て下んせ。おやぢ「ナニ金玉が、こゝらにや見えんわいな。馬士「それでもどこへか。左平「たもとにやないか見やんせ。馬士「ドレ〳〵、ないはずぢや。



廣袖ぢや。左平「コリヤこなさん、もてきやしよまい。うちへおいて來やせんかや。馬かた「あほいはんせ。しかもわしや疝氣もちで、大金ぢやさかい、こないにふくろにいれて、首にかけてゐるわいの。おやぢ「そしたら、そのふくろふるうて見やんせ。馬かた「ドレ〳〵、イヤあるわいの。今のびつくりで、上のはうへつるしあがつたのぢやさうな。もみ出してこまそ。イヤ出てきをつた〳〵。北「ハヽヽヽ。なるほど大金だ。彌「せがきのふくろとおなじことで、ふしよう〴〵に一ぱいある。ハヽヽヽハ。馬かた「イヤきんたまはえいが、ひざのさらすりむいた。コリヤおまいがたは、何で此しやうじを、わしが馬へ打つけさんした。左平「わしやしらんわいの。馬かた「しらんてヽ、コリヤ誰がしやうじぢやい。おやぢ「わしがとこのぢや。馬かた「見やんせ。こないに疵がついてはすまんわいな。しやうじに、今宮新家さいかちやとかいてあるさかい、これがしようこぢや。サアごんせごんせ。何ぢやあろとこヽへいて、めきしやきと、せりふせにやおかんわいの（ト、しやうじをひつたくり、馬につけ、ほそびきにてからみ、ゐさいかまはず、しやん〳〵とひいてゆく。）おやぢ「コリヤ〳〵、そのしやうじどこへもて行をるぞい。まてやい〳〵（ト、おうてゆく。みな〳〵あとより、）「てうさやようさ、萬ざいらくぢや〳〵（ト、かけてゆく。）彌「ハヽヽハヽ。馬かためがおつをやつた。ハヽハヽヽ。

美濃紙の破れかぶれと喧嘩せし
　あとのしまつの障子せんばん

かくて、それより三たりは、ほどなくすみよし新家にいたりけるに、げにも此御神のはんじやうましますことは、兩側の茶屋にあらはれ、いづれも家作美麗にして、赤まへだれの女、かどに立ならび、「お休な〳〵。おしだくなさらんかいな。蛤のおすひものもござります。鯛もひらめもござります。おはいりな〳〵。北「アヽ、どれもいヽ茶屋が見える。御てへさうな。

びち〳〵と客のはねこむ賑ひは
　れうるさかなも新家町なれ

此ところの名物は、金魚、酢蛤、ごうごろ煎餅、唐がらし、昆布、竹馬、糸ざいくなど、あきなふ家あまたある中に、れうり茶屋は三文字屋、いたみ屋、こぶ屋、丸屋なんどいへるが、わきて客のたえまなく、はんじやうことにいふばかりなし。佐平「モシ〳〵爰が三もんじや。チトおまちなされ（ト、げんくわんよりのぞきて見れば、おくに長町の河内

屋、はやとゝに來りあはせ、」「コリヤ左平次どの、はよ(早)ごんしたの。彌「わつちらア、やう〳〵たつた今めへりやした。先參詣致してめへりやせう(ト、是より、打つれて御やしろにいたる、」「抑此大神は、ちはやふる神代の御時、日向の國、小戸の橘の檍原より現れ給ひて、當社の御鎭座は神功皇后紀十一年、辛卯四月二十三日とかや。四社は底筒男命、中筒男命、表筒男命、神功皇后これなり。攝社、末社、總て三十餘前、巍々として連れり。まづ御本社にぬかづき奉りて、

海上をまもりたまへる神がきや
いとおだやかに見ゆる並松

和らかに歌と出かけて樂天の
顏をよごせしすみよしの神

かくて御社内をめぐるに、際限なければあらましにして、出見の濱の高燈籠も、ゆびさし見たる迄にて、いそぎかの三もんじやにもどりたるに、女どもばら〳〵と立出、「おはやうござりました。サアあつちやへお出なされ。左平「アノ、河四郎さんはどこちやいな(トいひつゝ、打つれておくへとほると、」かはちや「えらいおはやいこつちやの。北「がうてきに腹がへつた。かはちや「マアひとつあがりなされ(ト、さかづきをさす。」北「彌次さん、おさきへ。彌「手めへの



んでさしやれ。北「もうくちをかけるの。左平「おさかなは何がよかろ。北「なんぞ、はらにたまりさうなものをくんなせへ。弥「エ、、きたねへことをいふをとこだ。北「へ、、人のこたアいひながら、ソレ、まだ盃もいかねへうちに、おめへさかなをしてやるぢやアねへか。左平「コリヤ、えらいしゆみになつてぢやわい。弥「イヤもう、かはちやのおやかたのおかげなりやこそ、こんなうめへものもくふやうなものの、なるほどせにのねへ旅は、ういものつらいものだ（ト、さすがの弥次郎、はじめてよわいねをいだし、しよげかへりていふゆゑ、左平をかしさをかくして、）「ナント、おまいがたは大坂ものにならんせんかい。北「イヤ、わつちらも何ぞおぼえた職でもあるといゝけれど、是でくはうといふことがひとつもねへから、どこへいつてもつまらねへものさ。かはちや「ホンニ、えいことがあるわいな。どうぢや、ふたりのうちひとりは賣付るくちがあるのになア。弥「どのやうなことでござりやすね。かはちや「をとこめかけの口があるが、どうぢやいな。弥「ソリヤほんにかへ。おもしろへ〳〵（ト、あつかましくもにはかにはなをひこつかせうれしがれば、きた八もずつとまへのはうへ出かけ、）「モシ、わつちがやうなもんでも



よくば、おせわなすつて下さりませ。彌「ハヽヽヽ。手めへぢやアいけねへ。しかし、御昨今のおやかたのまへで、こんなことをいふはをかしなもんだが、わつちなら、さきの氣にいるにやア、ちげへのねへことがござりやすから、どうぞそれがほんとのことならばわつちをナもし、へヽヽヽ、ハヽヽハヽ。かはちや「コリヤせいもんほんまのこつちや。しかもさきのしろものはえらいうつくしうて、年は三十四五にもなろか、船場邊で、ぐめんのえいとこの後家どのぢやわいの。わしやそこのばんとうが心安うて、いんまのさきこゝへ見えて、その話してぢやつたが、とうも役者かうて、かねつかうてならんさかい、やつかいのない男めかけ、かゝへたいといふこつちやさかい、モシいこと思うてぢやなら、わし世話してあぎよわいな。マアなんぢやあろと、その後家どの見なさらんかいな。北「ナアニ、見ずともようござりやす。せうせうはめつかちでもはなつかけでも、そこにやア頓着はござりません。かはちや「ぢやてゝ、そのばんとうが供して、あつちやの座敷へ來てぢやさかい、ドレ、わしがマアちよといて、よう聞糺してこうかいな。彌「ハイ、宜くおたのみ申やす(ト、一ばいきげんに、むしやうにのりが來てたのむゆゑ、かはちやはたつておくのかたへゆくと、あとにて、)彌「コウ北八、おれがゆくのだぜ。北「氣のつよいことをいふ。おめへ男めかけといふつらか。つひぞ鏡を見たことはねへさうだ。彌「ばかをいふな。男がわるくても手がある。手めへにやアましだわ。北「ナニましなものか。ノウ左平次さん、おめへが女なら彌次さんにほれるかわつちにほれるかどうだ。左平「わしやどつちやへも氣はないわいの。ハヽヽハ。しかし人は惚いでも、おまいがたはめん／＼が己惚てぢやさかい、えいぢやないかい。北「そんなら、男ぶりは五分／＼にしたがいヽ。年のわけへだけおれがゆく。彌「イヤ、おとしやくにおれだ。左平「かうさんせ。わしくじを出すさかい、長いのをとらんしたのがおめかけさまぢや。北「コリヤよからう。南無住吉大明神さま、わたくしへながいのをおさづけ下さりませ。左平「サア、とりなされ。えいかいな、ソレすい／＼のすウ引。彌「コリヤながいのぢや。しめた／＼(ト、うちやうてんになつてよろこぶ内、かはちや四郎兵衛かへり來り、)「サアでけたわいな／＼。ばんとうに掛合て來たが、なんぢややらうまいはなしぢや。給金は望次第で、別にまた牛房

と玉子代がなんぼやら、しきせは、後家御から年中やわらかもの、何ぼなとこしらへしだい、三臓圓と巨勝子圓は、通ひでとてのませるといふこつちやわいの。彌「えどにも、山東京傳の見世に、讀書丸といふくすりがござりやすが、コリヤアしやれでなし、ほんとうに氣根をよつくすることゝ奇妙といふくすりだから、ハテ氣根がつよくなれば、なにもかもつよくなるといふもんだによつて、是もとりよせて用ひやせう。かはちや「さよぢやわいの。ときに、今その後家どのが、こゝへ見えるはずぢやわいの。彌「ナニ、今こゝへかへ。ソリヤ大變だ。ア、このなりではつまらねへ。モシ、左平さん、こゝらに髮結床はござりやせんかね。北「エヽ、おきなせへ。むくろじは三年みがいてもしろくはならねへ。性のものを性でおめにかける

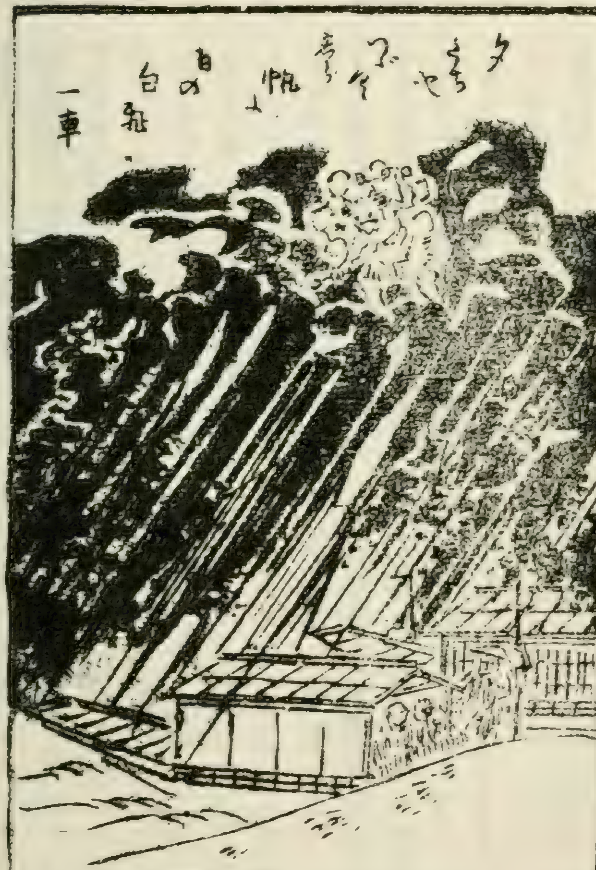
がいゝ。たとへにも、見ぬあきなひは出來ぬといふが、是ばつかりは、見たらぢきにあつちからお斷にあひさうなことだぜ。ハヽヽヽ。左平「ときにむこ向の座敷から、えいとしまが來をるわいの。かはちや「あれぢや／＼。大かたこゝへくるのぢやあろ。彌「コリヤたまらぬ／＼(ト、むしやうにえりかきあはせ、にはかにまじめなかほしてゐると、かの後家といふは、すつかりとした上しろもの、はへさがりふづさりとして、いろはゆきのごとく白く、ふたかは目にあいきやうはぽたりぽたりとこぼれおつるばかり、しまちりめんのむく三ツばかりかさねて、くろびろうどのおび、まへにむすび、もゝいろのちりめんにぬひのある長じゆばん、すそからちら／＼と出しかけ、すこしほろゑひきげんに、ばんとう引つれて來ると、かはちやのていしゆ出向ひて、ノ「コレハようこそ、サヽあつち

やへお出なされ。ごけ「おゆるしなされや。ヲホヽヽヽ。ばんとう「どなたも御免下さりませ。あつちやはをなごばかりで、ねからはから御酒のあひてがないさかい、さいはひと河四郎さまのお出で、こなたの後室の大悅び、ついてはわたしも、おあひなとゝいたそとぞんじてまゐりました。かはちや「サアサア、もちつとねきへおよりなされ。早速ながら持合たさかづき、まづあなたへ(ト、ごけのところへさゝばにつこりとしてとり上、)「わたしもいこさゝが過たさかい、もうそないにはようたべませんわいな(ト、いひつゝ、少しうけてのみ、)このおさかづき、御返盃いたしましよかいな。かはちや「イヤ、わたしも先刻から、えらうすぎました。マアどつちやへなとおさしなされ。ごけ「さよなら、あなた近頃はゞかりさまながら(ト、彌

次郎へさす。彌次郎はしじうむちうとなり、この後家のかほばかりしりめにかけて、じろり〳〵と見つめゐたりしが、さかづきをさされて、ぞつとするほどうれしく、うろたへ出し、」「ハイ〳〵〳〵、いたゞきやせう。左平「コレ〳〵、ソリヤさかづきぢやない。たばこ入ぢや。彌「ホイ、是はとりちがへて麁相千萬。サア北八ついでくりや。北「おらアしらねへ。勝手についでのみなせへ。彌「エヽ、しよにんなをとこだ(ト、仲ゐにつがせのみほし、ばんとうへさすと、おしもどしてばんとう)「えらいお手際ぢやな。最一つおかさねなされ。彌「イヤもう、わつちはいつも酒をのむと、だん〳〵色が白くなつて、後にはとんと白はぶたへのやうになりやすが、けふはなぜかこんなに眞赤になつて、たべられやせん。ごけ「おあひなといたしましよかいな。彌「ハイ〳〵〳〵、ノウ北八、あなたへおあひをおたのみ申さうかの。北「かつてにしなせへ。彌「ハヽヽヽヽ。さやうならはゞかりちやけれど。ごけ「なんのまあ(ト、さかづきをうける。)かはちや「コリヤおふたりして、あつちやいこつちやい、とんと婚禮のさかづきのやうぢや。ごけ「ヲヽをかし、ヲホヽヽヽホ。彌「コリヤこてへられぬ。ハヽヽヽハ。北「しづかにわらひなせへ。さかなのなかへ、おめへのつばきがはいらア。彌「はいつてもいゝ。だまつてゐろへ。モシ、とかくこの男めは、わつちがすることにけちをつけてなりやせん。わつちは是でも、唄もうたひやす、三味もかぢりやすから、女中がたをころ〳〵と、おもしろがらせることがえてものでござりやす。そんな時には、とかくきやつめがやきもちをやいてこまりきりやす。ごけ「ホンニおまいさんは、どうやらおもしろさうなおかたぢやわいな(ト、おもひの外うけのよさに、彌次郎は心のうちに、もうしめたとよろこびゐるうち、後家がめしつかひのをんなきたりて、)「モシ、たゞ今あら吉が見えまして、さつきにからあつちやのざしきで、あなたのお出でなさるをお見うけ申ましたが、御遠慮いたしてをりましたけれど、ちよつとなとお伺ひ申ていので、あつちやのざしきに待てゞござりますわいな。ごけ「アノあら吉が來てかいな。コレハ河四郎さん、有がたうござります。みなさんこれにへ、ハイさよなら(ト、にはかにそは〳〵としてあいさつもそこ〳〵、ばんとう引つれてたつてゆく。彌次郎はあつけにとられたかほつきして、)「コリヤ何のことだ。モシ、あら吉たア何のことでござりやすね。かはちや「ソリヤ

あらし吉三郎というて、今でのたてもの、としはわかしをとこぶりはよし、おさか一ばんの役者ぢやわいな。彌「ハア、そんなら後家どのがにはかに狼狽て立ていつたは、その役者にほれてゐると見えるわへ。かはちや「さよぢやあろぞいな。左平「コリャア彌次さん、いかいおちからおとしぢやわいな。北「ハハ、、、。おもしろへ〳〵。コウ彌次さん、ここへ來がけに見たら、このちつとさきに髮結床があつた。おめへ今いつて髮月代でもして來ねへな。彌「何とでもいやアがれ(ト、つらふくらしてこゞといつてゐる内、ばんとうまた出できたりて、)「河四郎さんきゝなされ。これぢやさかいわしや心づかひぢやわいの。アノあら吉がえらいひいきぢやさかい、さいはひのこつちや。これからあら吉といつしよに、船でもういぬさかい、わが身はひとりあるいていねてゝ、わしばかりまかれましたわいな。もう御相談のこともあかんはなしぢや。おさきへまゐりましよ。どなたもこれにござりませ(ト、あいさつそこ〳〵にして出て行と、やがておくざしきから庭におりて、かの後家はあら吉をともなひ、こしもと下女打連て、何やらおもしろさうにわらひざゞめきて出かけるていを、こなたより見て、)左平「アレ〳〵、あら吉はなるほどえい男ぢや。彌「アノ黑仕たてのやらうか。ナニあれがいゝ男。くそがあきれる。いろのなまじらけた、日影の瓢簞見るやうなしやッつらだ。仲居「おまいさんそないにいうてぢやけれど、あないなえい男はやつとはござりませんわいな。そぢやさかい、あら吉にほれんをなごは、おさかちうにはないわいな。北「アレ〳〵、彌次さん見なせへ。何か御家めがさゝやいて、こつちのはうへ指をさしてわらつてゐるわ。大かたおめへのこつたらう。彌「いめへましい。かはちやのおやかた、おめへがうらみだうらみだ(ト、むしやうにぐちをいつてくやしがる。かの後家はゐさいかまはずさわぎつれて出てゆく。彌次郎うらめしげに、)「モシ〳〵、わつちらももうけへりやせう。かはちや「えいことがあるわいな。わしがふねまたしてあるさかい、みないつしよに乘て、敵等が舟のじやましてやろかいな。彌「コリヤいゝおもひつきだ。サアそんなら出かけやせう。左平「しかしおまちなされ。どうぢややら雨がおちてきたぢやないかいな。彌「雨でも鑓でもとんぢやくはねへ。サアおたちなせへ(ト、ひとりきをもみ、さきへ出かけるところに、時ならぬかみなり、彌次郎のあたまのうへにて、)「ごろ〳〵〳〵

ごろ。みな／＼「コリヤやくたいちや。彌「拝むからもういつてくれるな。左「ソイタヽヽヽ、エ、何をしやアがる。「くはばら／＼（ト、うろたへてかけもどレ又ひかつた。かみなり「ごろ／＼／＼。あいた／＼。北「コレどこがいてへ。彌る。此うち、あめはしだいに大ぶりとなり、いなびかりすさましく、かみなりはしきりになりつゞけ、あま戸をくろやらまどをしめろやら、三もんじやの家内のものもたちさわげば、みな／＼ひとつ所によりかたまり、北「コリヤとんだめにあつた。此かみなりでうらやましいはあら吉だ。今ごろはふねのなかで、アノ後家めが、ごろ／＼ぴかりといふたびに、アノ後家めが、ヲヽこはなぞとしがみつきをるだらうの。かはちや「ソリヤさうはかいの。アノ後家はあら吉にえらはまりぢやといふこつちやさかい、このかみなりをさいはひに、くひつついたりひつついたりはなれはしよまい。北「さやう／＼。アノまた後家がひたひつきや、はへさがりのあんばい北「ヲヽこはやの（ト、ごけのものまねして「このふろしきにつゝんだ天狗の面がいでは、こたへられめへのう彌次さん。彌次郎にだきつくと、つきとばして、）「アたくてこたへられねへ。北「ハヽヽヽヽ。



コリヤそのはず〳〵。左「ときに、雨はやんださうぢや。この間に、ちやとふねへ出かけましよかい。彌「サア〳〵、はやくめへりやせう（ト、ひとりせきこみ、さきへたち、げんくわんのかたへ出かけると、大きうなるいなびかり、）「ぴかりぴかり。かみなり「ごろ〳〵〳〵ぴしやぴしや〳〵〳〵（ト、あたまのうへにおちかかるごとき大かみなりに、彌次郎わつといふてそこへへたばりかほをしかめて、）「あいた〳〵〳〵。左平「何としたぞいな。彌「エヽ、何とした所か、へしをれた〳〵。北「なにをへしをつた。彌「今のぴしやぴしやで、はつとへたばつたはずみに、かの天狗のめんのはなばしらが、ぽつきりといつたやうだ。あいた〳〵（ト、きんたまをおさへていたがるゆゑ、みな〳〵をかしさ、どつと打わらひてきようにいりけるうち、ほどなくあめもかみなりもやみ、そらもあを〳〵となりたるに、）かはちや「うれしや天氣になつたさうな。ナント最一ぱいヅッわつさりとのみなほしていのわいの（ト、又あらたにさかなをとりよせ、大わらひとなり、おの〳〵酒よきほどにくみかはし、それより打つれて北町へとかへりける。）斯て彌次郎兵衛きた八は河四郎の方にまた〳〵逗留して、所々、殘る方なく見物しけるうちにも、ふたりとも江都氣性の大腹中にて、かかる難澁の身をへちまともおもはず、洒落とほして少しもめげぬやうすに、かはちやの亭主大きに感心し、衣類などむたらしく着かへさせ、路用十分にもたせ、大坂を出立させけるゆゑ、此たびは木曾路にかゝり、草津の温泉に一回りあそび、善光寺へまはり、妙義はるなへ參詣し、めでたく歸國したりける。此紀行は追てあらはすべく、まづはこゝにて筆をさしおき畢ぬ。

道中膝栗毛八編下巻終

道中膝栗毛初編　来午　再版

前板よりの作者はぜひ為真似候て月作者みづからよお考
發端一冊本として先出板全二冊みな合せて出板仕候
伴本下る此後一の々りし

木曽(きそ)街道(かいどう)膝栗毛(ひざくりげ)　追而出版

小唄物
仕入　田舎(ゐなか)あるき　全三冊　近刻

出るかりの高く弥くのしらべきをもいまぐらの江社まで座よる
手ら唄せ拙へおのまとりら取作のおもむき流行の新作まで出す
飲酒ら目出たかしく出あるぬ湧くの清発を飛出し出版あり

十返舎一九著　栄邑堂　近刻

文化六巳己紀春正月発起

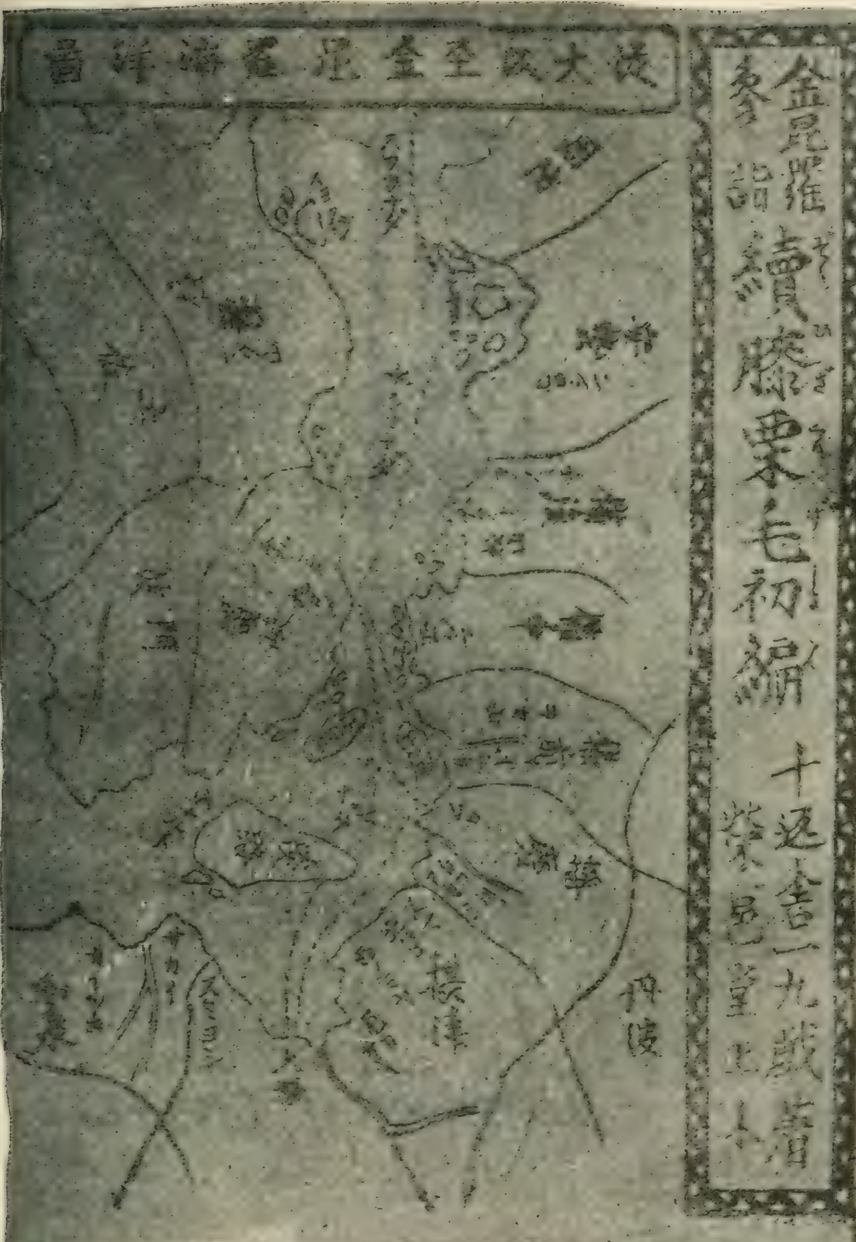
浪花書林
心斎橋唐物町　河内屋喜助

江都書林
本石町十軒店　西村源六

通油町　鶴屋喜右衛門

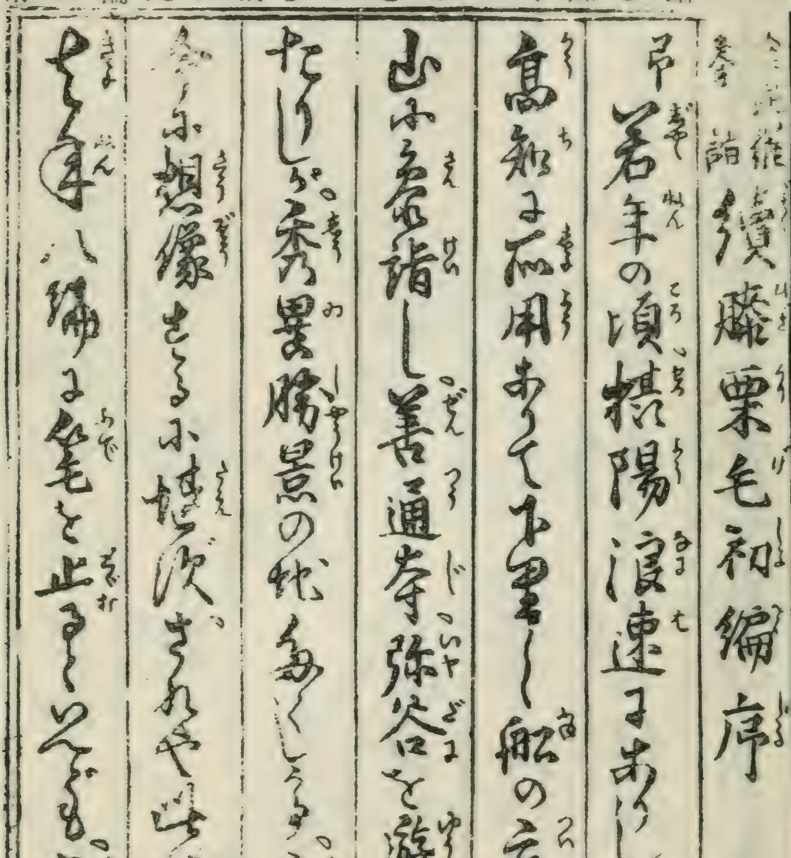
同所　村田屋治郎兵衛

岐蘇續膝栗毛初編


金毘羅参詣續膝栗毛初編
十返舎一九戯書
丹波
摂津

金羅毘参詣續膝栗毛初編序

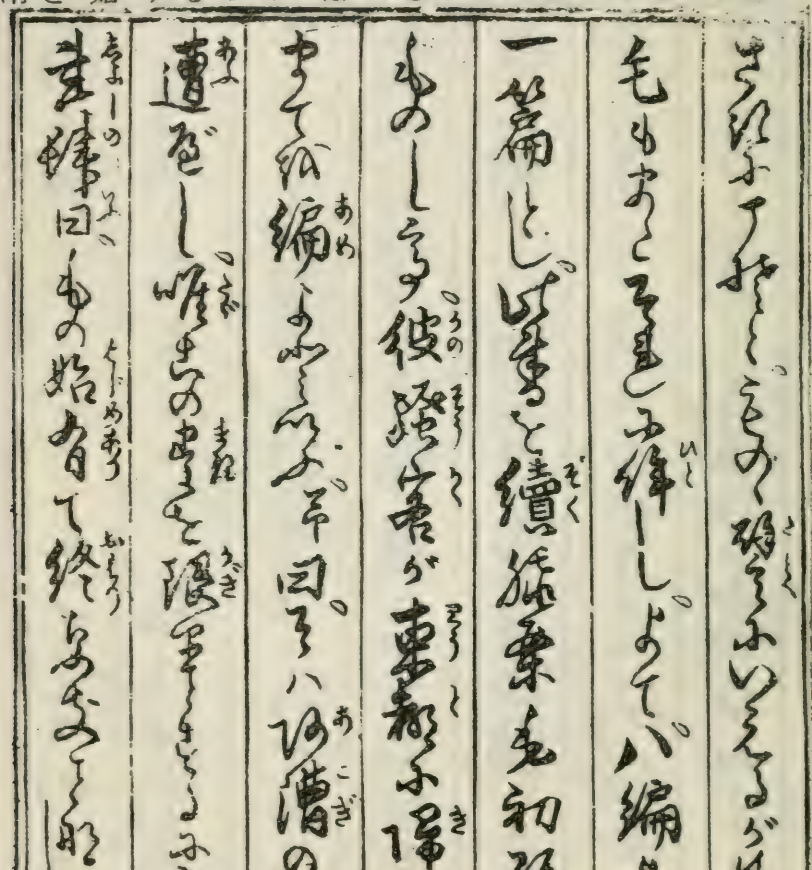
予若年の頃、攝陽浪速にありし時、一とせ高知に所用ありて下りし船の序に、象頭山に參詣し善通寺、彌谷を遊歴したりしが、秀異勝景の地多くして、其感情今に想像するに堪ず。されや此膝栗毛去年八編に筆を止るといへども、書肆常


金羅毘參詣續膝栗毛初編序

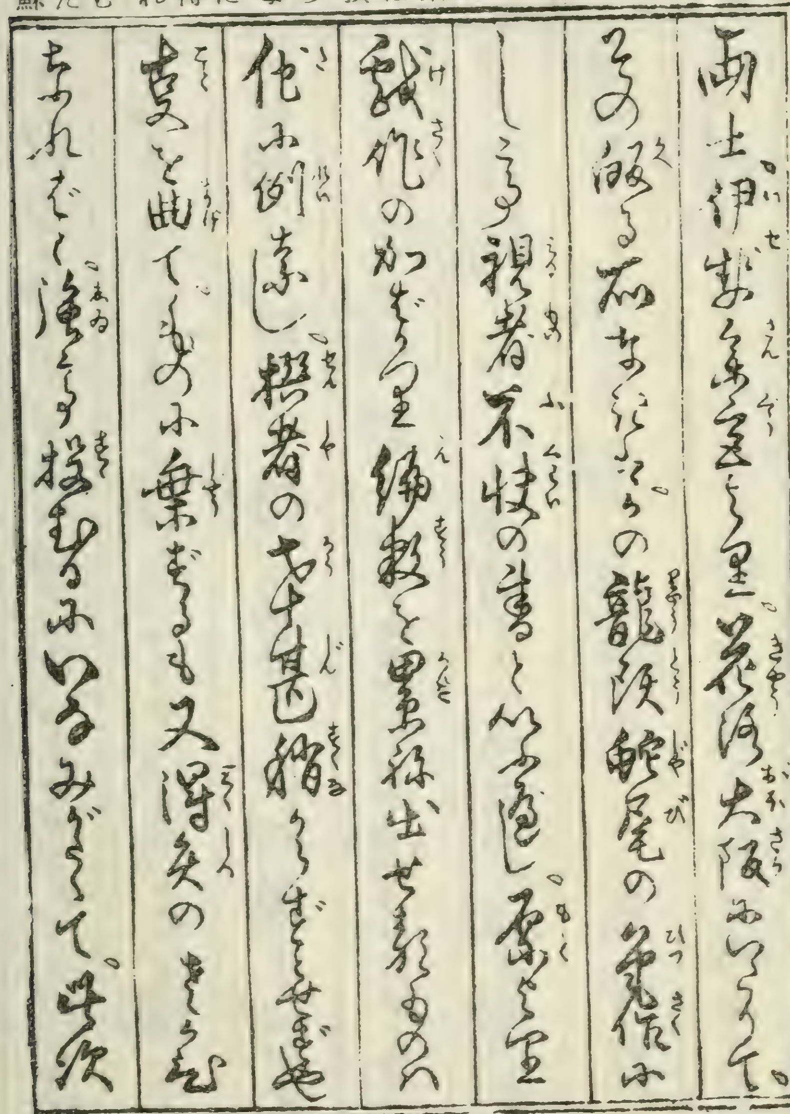
予若年の頃攝陽浪速にありし時一とせ高知に所用ありて下りし船の序に象頭山に參詣し善通寺彌谷を遊歴したりしが秀異勝景の地多くして其感情今に想像するに堪ず されや此膝栗毛去年八編に筆を止るといへども書肆常に

に予が金毘羅信仰のことを知るが故に、せめて其紀行の巻を編よと投む。予彼地理行程のあらましは知得したれど、土人の通言、凡而の風俗に疎ければと、固辭すれども、再三のせめを防ぎがたくて、竟に此二巻を編出せり。此に於て書肆又曰、諺に毒喰んものは皿迄といひ、露を厭へるものは、その濡ざるさき

にこそと、ものの譬にいへるが如く、膝栗毛もまたそれに倅し、よて、八編迄を限り一編とし、此書を續膝栗毛初編と新にものして、彼騒客が東都に帰着せむまでを編よといふ。予曰、そは阿漕の網の譏に遭べし。唯この巻を限りとするにしくべからず。書肆曰、もの始有て終なきことなし。冊中の兩



士伊勢参宮より花洛大阪にいたりて、その皈る所なきは、かの龍頭蛇尾の筆作にして視者不快の書といふべし。原より戯作のかばかり編數を累ね出せるものは他に例なし。撰者の幸甚稍からずとせずや。事を曲て、ものに乗ずるも、又得失のさかひなればと、强て投むるにいなみがたくて、此次岐蘇

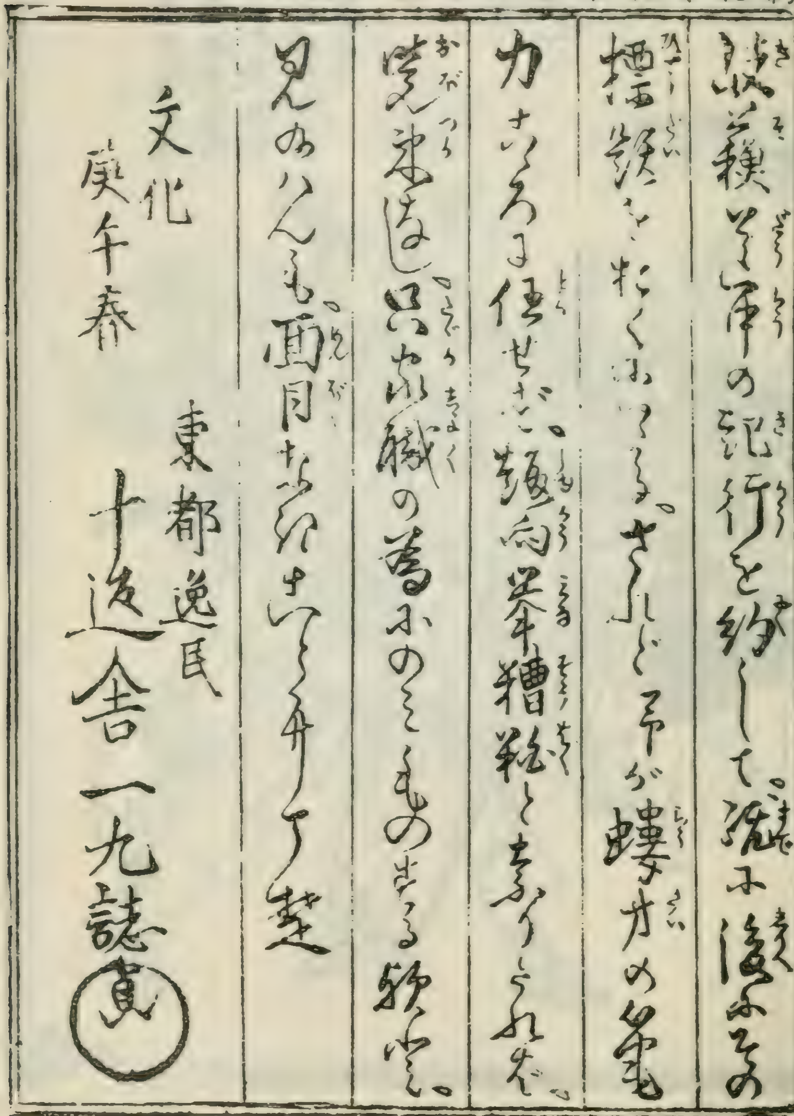


道中の紀行を約して、既に後にその標題をおくにいたる。されど予が螻才の筆力こゝろに任せず趣向擧糟粕となりたれば、覺束なし。只家職の爲にのみものする歟と、見給はんも、面目なきことにこそ。

文化庚午春

東都逸民

十返舎一九誌



道中の紀行を約して、既に後にその標題をおくにいたる。されど予が螻才の筆力こゝろに任せず趣向擧糟粕となりたれば、覺束なし。只家職の爲にのみものする歟と、見給はんも、面目なきことにこそ。
文化庚午春
東都逸民
十返舎一九誌


讃州金毘羅在鵜足郡
山形似象頭故名象頭
山相傳當山天狗名金
毘羅坊所之霊驗多
所崇亦
墨亭月麿画


月参詣

讃州 金毘羅船

此町は旅籠屋長町の二丁上方にある
此度道中絵図より其船のたよりにこと
しくも金毘羅船の出所を友のまゝに船宿と大川筋兩摂播
當播兩川口等ふくふ思ひ立る此幟を船のこしに次



せる金毘羅権現一切祈願の人さへならう
神酒を奉るとて此樽に酒を清めて海河に
流さしてもし讃岐山にいたらんと思ふ船中あまたこれを
拾ふものハ神酒頂戴し手にして口酒を呑給ふにきれ
然も美味ありあまりの酒の波濤に出しも也はれる
敬する心しきれのこ出を下りてさまにゆるそめて書る

精ぬ酒を使ふても済まざるハ現附と云ふなりけり
蟹　五十日　当山参詣の人為にしるすなり　川魚　蘇
三十五日　海鰻　二十日　いづれも喰ふべからざるものなり　遊て
喰ふと必ず船中に災あらんと言ふ故昔より　金
毘羅信人の船いちじめもちあるものなり　是非海の
損儀なく

奉納 [illegible]

濱前に有ゆくの繪馬多くハ
より渡海の船難九死一生の奇難
の危難を逃し海神に祈誓せし事見れバとく
いかなる人も其利益を奉つて末代神の思をしめす
ざるものなりとぞ

旅の条ちびしき事ハ何ひと筆も金毘羅
参詣の人の為に同じ毛絶し更ぬ初との編を大坂
川口より丸亀まで船中のことをおもしろく象頭
山および善通寺弥谷寺等を経て多度
津より丸亀の宿にて傍なる数日をおぼゆる[illegible]
備前牛窓より播磨[illegible]のおもむき
二編のおしまひに出づる[illegible]

金毘羅續膝栗毛初編 上巻

東武 十返舍一九著

抑讃岐國象頭山金毘羅大權現と號し奉るは靈驗あらたにまし〳〵て、(祭神未詳、或云三輪大明神、亦云素盞嗚尊、又云金山彦命)およそ此日の本に、是を信念拜仰せざるはなく、唐人も降神觀といへる額をたてまつりし、倭漢普通神力妙用のおん神なり。されば諸職の業に長ぜんと、裸參の元手入らずに、祈るをもあはれとみそなはし、醉倒れの酒たちて、呑たしとおもふをも咎め給はず。或は痛かきのむさくろしき、繻絆のみ著たるをも無禮と怒り給はず。あるは船中の奇難まぬがれし報謝にとて、髷ぶしを切り捧るをもきたなしと捨給はず。されどもその堪ざるに至りては、神罰を蒙る事矢よりも早く、鐵炮玉よりもすみやかなり。此故に、不知火の筑紫、雲井路の奥ふかきよりも、海陸の艱苦をしのぎて、參詣歸伏するもの絶ずとかや。

こゝに彌次郎兵衞、北八なるもの、伊勢參の刷毛ついでに、浪花長町に來り逗留し、既に歸國の用意なしける所に、相宿に野州の人の由、(名は五太平)泊合せたるが金毘羅參詣におもむくとて、一人旅なれば、此彌次郎北八をも同道せんとすゝむるにぞ、兩人さいはひの事とは思ひながら、路用金乏しければと斷たつるを、かの人聞て、その段は氣づかひなし、もしも不足の事有らば、償はんとの約束にて、讃州船の事彼是と聞あはせ、やがて三人打連、長町を立出で、丸龜の船宿、道頓堀の大黒屋といへる、掛行燈を見つけて、

野州の人 五太平「ハアちくとものサとひますべい。金毘羅樣へいぐ船はこゝかなのし。船宿「左樣ぢやわいな 五太「そんだらハア、ゆるさつしやりまし、こゝの施主どのにあひますべい。わしどもはハア、金毘羅樣へいぐのだが、船賃サアいくらつんだしますべい。船宿の亭主「ハイおいくたり樣ぢやな。五太「三人同志でござる。亭主「ハイお一人前、船賃雜用とも、拾八匁宛でござりますわいな。五太「あんだちう、ソリヤハアでこたかいもんだのし、ちくとまけさつしやい。亭主「イヤ是は定直段でござりますさかい、どなたもさよおや。ハテ高いもんぢやござりませぬわいな。船中と

いふものは日和次第で、何日かゝろやら知れんこともあるさかい。五太「それだアとつてむげちない、にしたちやアあぜうするのし。彌次「ハテお前、定直段といやア如才はあんめへ。五太「あるほど、金毘羅様へ心ざしだア、あぜうすべい（ト、打がへより金とりいだし、船賃をはらふ。彌次郎、北八もおなじくはらひて、）北「モシ船はどこから乗りやすね。」（船頭は讃州者、）「濱へおりさんせ、幟のある船ぢや、いんまいつきにづるわいな、サア〳〵みなつんのうてごんせ〳〵（ト、此うち船にはがたひしと梯をおろし、水子ども船をこしらへ、苫をふきかけると、船宿の見せさきから勝手口までゐならびたる旅人、みな〳〵うちつれて、だん〳〵とその船にのりうつる）あきんど「サア〳〵琉球いものほかしたてぢや、ほつこりほつこり。くわーうり「くわしんい　んか



いな、みづからまんぢう〳〵。上かんや「鯡昆布卷、あんばいよし〳〵。船頭「みな船賃サえいかいネヤ、コレそこの親かたちどの、えつとそつちやのねきへついてゐざらんせ。五太「コリヤハアゆるさつしやりまし、あごみますべい（ト、人をまたいでむかうへすわる。彌次北八もおなじくすわると、）遠州の人「エレハイ、どなたちもあづくみなさい、乗合だア、お互にけゝれやすくせずにヤア　時に

船頭どん　船はハイ、いづ出るのだヤア。船頭「いんまあたゞにづるわいの。船宿「サア〳〵えいかいな、えいなら出さんせ。もう初夜過ぢや。コレハあなたがた御退屈でござりました。さよなら、御機嫌よう、いて御出なされませ（ト、もやひづなをときて、船へはふりこむと、せんどう共さをさして船をまはす。此内川岸どほりには時の太鼓、）「どん〳〵どどん。按摩「あんまアけんびき針の療治、（夜まはりのわり竹、）「ぐわら〳〵ぐわら〳〵（ト、此うち船はだん〳〵と下へさがる）北「もう四ッださうな、今夜はなんだか、がうてきに暑い晩だ。モシ船頭さん、日和はどうだね。船頭「へばり東風で日直るネヤ。北「ドレすこしのぞいて見よう（ト、苫をおしひらき顔をさし出すと、霧雨が顔にかゝるを拭き〳〵、）「何のこつた、雨がふらア、しかしなまあつたかでわるかつたが、こぬか雨の顔にかゝる心持は、どうもいへねへ、きめう〳〵。彌次「とんだうそをつくぜ。今迄星だらけでゐたものを、ナニふるものか（ト、いひつゝ苫をおしあけてのぞく）北「ソレふるだらう。おいらが顔はびつしよりとぬれくさつた。彌「ハ、、ハ、、ナニ雨なものか、空を見さつし。北「ホンニナア、それでもおいらが顔に、かゝつたのはなんだ。彌「それか、



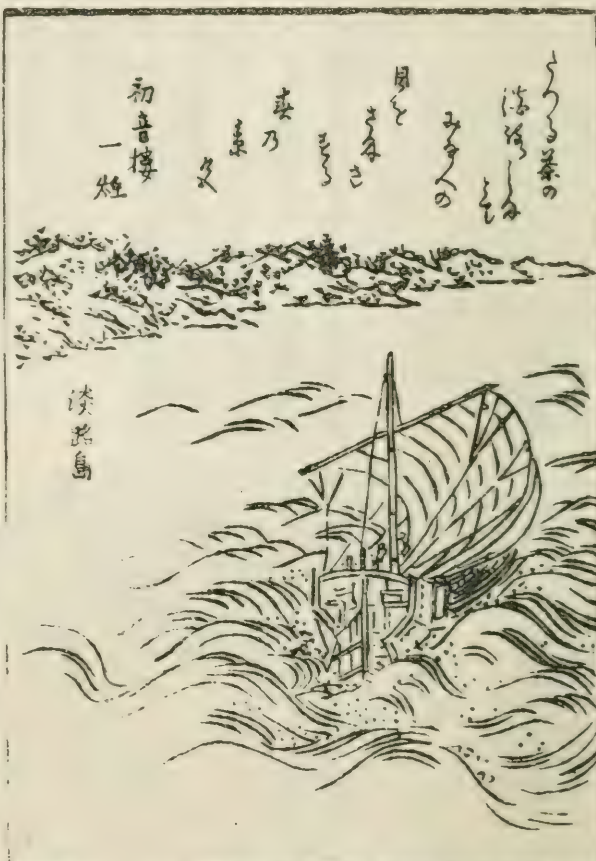
アレ風上で小便して居るから、手前の顔へそのしぶきがかゝるのだ(ト、いはれて北八はつと思ひ見れば、この船中の旅人、船端にて小便してゐる。北八は風下なる故、その小便顔にかゝりたるなれば、たちまち腹を立てゝ、)北「エヽ、此べらぼうめ。なぜ人のつらへ小便しかきやアがつた(ト、大きな聲すると、かの男はちやつと苫の中へはいる、北八いよ／＼あつくなり、)「エヽ、いめへましい、どいつだ。イヤきさまだな(ト、此ふねは諸國の人ののり合、あてづつぽうの北八に、胸ぐらをとられし人は、上總の人、)「いちやしらね、此ふとだんべい(ト、そのとなりに、すわつてゐる人をしゆる。この人は越後の者、)「コリヤてつぺいもないことんし、そんなあたけた事いひめさるな(ト、北八がつかみついたる手をふりはなせば、北八又むしやぶりつくを、船中みな／＼おしとゞめ・ろ、このさわぎに、のり合の煙管の吸殻おちて何やらもゆる。)船頭「何ちうさんすやかましい。そしてネヤ、えらけぶらくさいがな。越後の人「ホンニハア、ひなくさい／＼。船頭「ソレ／＼江戸衆の雨羽折ナウけぶるがネヤ。彌「イヤこりやとんだこつた、北八合羽がもえらア。北「ドレ／＼(ト、きもをつぶしもみけす。)彌「エヽ是だから手めへにかすめへといつたに、ろくな事はしねへ。こつちへよこさつし、いめへましい男だ(ト、大き



にふさぎ、貸した合羽をひつとり、焼穴をうらめしさうに見て著る。このさわぎに、はじめの喧嘩それなりにしまひ、大ぜいの中で北八のかりぎしたがあらはれ、しよげりかへつてゐる。のり合みな〳〵くつ〳〵とわらふ。彌次郎もをかしさこたへられず、

火のやうにおこりたつたるいさか
ひのはては合羽に焼どまりたり

此一首に、船中いよ〳〵大わらひとなりたるに、程なく船ははや木津川口にいたれば、夜も子の刻斗になりぬ。爰に風待して夜明けなば乗出さんと、船頭水子もしばらく休息めていに、船中もひそまり、おのがさま〳〵もたれあうて居眠るもあり、或は肘枕あるは荷物包やうのものに、頭もたせて打ふしけるが、頓て寅の刻にもやあらんとおもふ頃、船頭水子ども俄に騒立て、帆柱おしたて、帆綱ひきあげなどして、今や沖に乗出んとするやうすに、船中みな〳〵目を覚し、船端に顔さし出し、手水つかひて象頭山の方をふしをがむ。彌次郎北八も倶に遥拝して、



腹鼓うつ浪の音ゆたかにて
走るたぬきのこんぴらの船

斯興じつゝ船出をことぶき、彼是うちかたるうち、早くも沖にはしり出し、船頭がヨウソロ〳〵の聲いさましく、追風に帆かけて、矢を射るごとく、はや日の出たる頃は、兵庫の沖にぞ到り

けるゝ（大坂よりこの所迄十里）こゝにて四方を見わたせば東の方につゞき、甲山、摩耶山、丹生の山、てつかいが峯なんど目前にあざやかなり。

仙人の住むかは知らず霞より
吐いだしたるてつかいが峯

又陸地には西の宮、御影、神戸、須磨なんどいふ、浦々里々見わたされて、眺望の景色いふばかりなし。和田の岬烏崎といへるをまはる頃は、午の刻ばかりになん。此とき俄に風かはりたりとて、帆綱引かへ楫とりなほし、眞切走といふことをなしてはしる程に、船中には野州の人、船に醉たるにや心もちあしきとて、色青ざめ鉢卷して「アア〳〵てきないこんだア、にしたちやハアあんでも藥サア持合せがあんべいから、ちくと下さい。コリヤハアおそがいこんだアハア。彌「どうぞしなさつたか。北八手前藥はねへか。北「ありはあるが火傷の藥ちやアわりいか。彌「とんだことをいふ。モシおめへがたア何ぞ藥は持なさらんか。越後「ヤイしんぜますべいか。コリヤナ船に醉をつたどもにはきかない藥だが、よくござるか。彌「さかねへとつて、何といふ藥だね。越後「わし、けせる（喜世留）ナアつんみがくべいとつて、大坂でナア買つてきをつた眞鍮みがきだアむし。野州「コリヤハア、うらアうつちぬ（死）べいもしれない。せつない〳〵。どうぞ北八さまこのふたひ（額）を打つて下さい。北「エヽとんだおやくをいひ付るの。ソレかうかかうか。野州「ア、〳〵むげちない（情ナイ）ことだア、やかましかろが、湯サアふとつもらつて下さい。彌「ヲイ〳〵モシ船頭さん、湯が一つもらひてへの。船頭「あんちういはんす、おしやばへ（東南風）があなぜ（西北風）になつたネヤ。おまいたちの命より身が黨は船がたいせつないネヤ。彌「ホンニコリヤがうてきに船がゆさぶる。乘合「えらい風ぢや、船頭さん、コリヤどうぢやいな。船頭「どうまれかうまれ、金毘羅さんノウ、信心さんせ。コレナ和佐七、すつたり帆ノウさげんかい。水子「エイコリヤ帆綱ノウはなすな。サアサア親方、コリヤ楫がどもならんわい〳〵。（ト、船頭水子は眞黒になつてはたらく、風は次第につよく、浪煙にてあたりもくらくなり、小山のごとき大浪、折々船の中へうちこむにぞ、乘合みな〳〵夢中となり、ころげまはりてこま物見世をいだし、手足もからだもにつちやくちやと、其臭のわるさにこみあげこみあげ、おの〳〵いきたる心地はなく、彌次郎北八もかゝる目にあふははじめて、土氣色になつてうろたへ出し、）彌「コリヤもう

北八、かなはぬ〳〵。エヽどうぞじやうはあるまいか。北「どうといつたら、南無々々金毘羅さま〳〵、どうぞおたすけなされて。彌「ソレ〳〵わたくしは、好物な酒を一生たべますまい、おたすけなさつて下さりませ。南無金毘羅さま〳〵。五太「アヽウヽ〳〵うらアヽコリヤもう往生します。アヽせつない、先へ往ぎますべい。にしたちやアあとからござれ。彌「エヽあとからいつてたまるものか、心ぼそいことをいふ。しかし是ぢやアたすかるめへ。北八手めへひよつとたすかつたなら、おれが形見に伊世吉へ二朱と壹本に置た袷がある、あれをだして著さつし。北「ソリヤアありがてへが、それよりかお前、壹分にかないた機留の布子を、おれにくんねへな。彌「イヤあれはならねへ。おれが大事のいつちやうらだ。北「ナニいましぬものが、やられぬもをかしい。彌「ヤアそんならやるぞ。ホンニお馴染の大山不動明王、歸命頂禮〳〵、イヤありがてへ、向うへ來るは慥に助けぶねだらう。オヽイ〳〵。北「オヽイ〳〵、たすけぶね〳〵（ト、聲をからしてよびわめく。此難風を見かけて、小舟一艘に六丁の艪をおしたてこぎ來るは、大坂より下の關などへゆく〳〵相場しらせの舟なり。かゝる時をもかまはず、血氣さかんの船頭ども向鉢卷に大汗ながし、）「オツテウ、ヨウソロ、オツテウ、ヨウソロ〳〵。次「オヽイオヽイたのみます、たのむ〳〵。北「オヽイ、どうぞたすけて下されたのみます、これだ〳〵（ト、兩手をあはせてなみだながらよべども、いつかうに見むきもせず。かかり合てはおそくなるゆゑ、ゐさいかまはずさつ〳〵とこいでゆく。）彌「エヽいめへましいやつらだ。コリヤもう北八意氣地はねへぞ。こんなかなしいことはねへ。ワアイ〳〵。北「しかたがねへ、これまでの壽命だらう。ワアイ〳〵（ト、なきしづみ夢中になりて、急なときの神だのみと、無生に神佛の御名をとなへて、かきつくやうにいのりゐたるが、）折しも風やうやくおだやかになりて、鞍掛島、家島なんどいへる島々の見ゆるは、室の津より一里斗も手前にて、此あたりすべて怪巖奇石ども多く、風景殊に見所あれど、かゝる難澁に空しく打過たりしが、頓て平山のうへに燈籠堂の見ゆるを、あれこそ室の湊なりと、船中おの〳〵蘇生たる心地して、互に無事をことぶきあひ、船頭水子もいさみたちて、息つぎ敢ず湊口にぞ入りたりける。（大坂より此所まで三十里）爰にて皆々手あらひ口そゝぎて、象頭山のかたを拜みたてまつる。はや夜に入たれば、船

頭ども提灯を點し、そこらとりかたづけるうち、彌次郎は野州の五太平がふしゐるをゆすりて、彌「コウどうだ船がついた。サアちつとおきなせへ〳〵(ト、ゆすりおこせど正體なし。これはどうだとよく〳〵見れば、顔の色かはり、手足もひえかたまりて、いつのまにかは、こときれたるていに驚き、)彌「ヤアコリヤしんださうな。北「ナニとんだことだ、ドレ〳〵ほんにいつのまにやら、てこねられた、大へんなことだ。コリヤどうしたもんだらう(ト、うろたへさわげば、乗合みなみなきもをつぶし、いまさら藥よ水よとたちさわぎ、いろ〳〵とかいはうすれども、いつかうにかただよりなれば、船頭共あきれはてて、)コリヤたまがる、おろよい事をしたわいの。乗合「ハテ定めて、じゆつなかつたぢやあろのに、いんまのさわぎで、誰も知らなんだ、いとしいこつちや。こないにひとつ船に乗合せたも他生の縁ぢや、みな回向してやらんせ。越後の人「コノふとも國どもにやア、御女房子よんやぼらつ子もあんべいに、よつぱらかんであふべいこともならなくなつた。めごい事をしたことんし。乗合「時にこないにしてもおけんわいな。お前方二人でどないぞとむらうてやらんせ。彌「ナニわつちらがどうするものか。船頭「イヤネヤ、江戸の衆がつんのうて來



てぢやないか。北「ナニおいらアほんの道づれで、この人がどこの馬の骨か牛の骨か、しりもしねへものを。乗合「サイノ、道づれかなにかてちやしらんが、お前方三人連ぢやと言はんしたおぢやないかいな。此佛どうなと取おいてしまはんせにや、船中そう〳〵のなんぎぢや。ハテむつかしい事はないわいの往來の手形があるぢやあろ、懐中物あらためて見やんせ（ト、此内彌次郎、かの五太平が風呂敷包、懐中の紙入などあらため見るに、往來の手形らしき物は見えず、ただ脇指二ッばかり、金は二両あまり所持したり）乗合「コリヤ手形が無うてはむつかしい。したが、金さへ有りやどうなとなろぞいな。北「どうするとつて、おいらが知るものか。コリヤアこの船にのせて來たからは、船頭どののうけたまはりだ。どうとも勝手にするがいゝ。船頭「イヤほてぶとい衆ぢやないか、身が黨はいろはぬ〳〵。乗合「コリヤお前方が無理ぢやわいな。死なれた人がひとり旅でかゝり合のない人なら、いやとも船頭どのが、とりおきさせにやならんけれど、道連にせい何ぢやあろと、關屋の帳面にお前方三人連と、つけさしやつたぢやないかいな。彌「それだとつて、おいらばかりかぶるりくつはねへ。ばかなつらつな（ト、まつかになつてはりこむ



と、この船に西國方のお侍、髭むしやくしやとでつぶり肥えた顔色のおそろしき人、やつきとなり大きなるどすごゑにて、）お侍「コリヤ〳〵わごりよたちは、此者をおこずつて來居りながら、これしころあれしころと不理屈ども言うて、いかだすまんぞ。船中ども皆さぶけさんがいぢや。コリヤ船頭、かやつ共に此死人どもかるふせて、放け出せ。コナ沒落共めが（ト、此お侍目に角たてゝ、もつてのほかにやかましくいふにぞ、乘合みな〳〵これをなだめて、彌次郎北八にとくと譯をいひきかすれば、兩人せんかたなく、此湊のうちにて寺を頼み、葬らんと相談し、船頭にかれこれときゝあはせて、まづ〳〵寺をたのみ來らんと迷惑さうに兩人は船よりあがる。）扨この室の津は、西國諸侯方の船出し給ふ所にて、播州一箇の繁昌の地なれば、商家みな土藏づくりの軒をならべてたちつゞけり。彌次郎北八はうか〳〵と寺ある方を尋ねさがしてゆくほどに、小の町といふ中程より、右の方の横町に入たるに、格別こゝは往來にぎはしく、兩側に三味線引たてうたふをきけば、

唄「うらの工引 うらの山椒の木に、百舌が巣をかけ何と言うてさへづるぞと、立よりきけば、君にきんくる〳〵〳〵、くる〳〵まつたかりんとなく、一さい見たかりんとなく、あしき入道わ入道、くるまの中の輪入道。さつさびつくりたらりんしよんがへ、しよんがらりん、ほくとくりんと囀る鳥はへ、シツチヨ〳〵。北八「なんだか騷々しい所だ。イヤ女郎屋ださうな、こいつはおつりき〳〵。彌次「ホンに、たぼどもがひらつくわ、チトひやかしてやらう（ト、たちまちうかれてそこら見あるくに、遊女屋はさすがに格子づくりにて、入口のうち通ひ庭のかたをあけて、遊女ども庭にむかひて、ならびゐるさま、衣裳なんどいたつて、そさうに見えたり。藝子らしきが三味線箱をもたせて走り行く。むかうより客と見えて大の男、大縞の廣袖著たるが手拭を襟にまき、少女に手をひかれて、うかれ來り、かの藝子を見かけて、）「ヤヨ田島屋の駒吉どもな、こやつむざうなつらども、うんともが、しやんすになりをれ、よかことしてやらんばいか。駒吉「おかんせ、二の松さまノウ、ほて持つたつて、がらるゝぢやあろ、えずいこつちや（ト、にげて行く。ふたりはをかしく興に入り、かの遊女屋をのぞき見れば、うちより女出でゝとらふる。此女は大坂者と見えて、）「コレイナア、よりなされ〳〵。彌「イヤそんな所ぢやない、放せ〳〵。女「ナンノイナ遊びいな。

彌「どうだ、北八、ひときり遊んでいかうか。北「とんだことをいふ。船に

佛をおいて來ながら。彌「イヤいヽことがある。あいつを船におきざりとして、是なりにずゐとくしはどうだ。北「なにさうなるものか。箸替やなにやかをおいて來たものを。女「おつれさまはまだ船にかいな。わしおむかひに參じようわいな。北「お前むかひにいくなら、早桶でもかついでいつてくんな。女「オホヽヽヽてんがういうてぢや。彌「イヤ連は死てゐるから、それでわつちらア、ちとたづねるものがあつてさ。女「おたづねなさる者とは誰さんぢやいな彌「イヤお寺があるか、それがきゝてへ。女「お寺さんは、いんま船へいてぢやわいな。北「お寺が船へ乘てたまるものか。コリヤ大變な事をいふ。女「いんまに戻つておぢやが、おまいさん方は、おてらさんに何ぞ用がありますかいな。北「用といふは、どうぞ佛をとむらつてもらひてへの。女「オヽすかんやの。そないなお寺は此上に法體寺といふがあるわいな。北「ナンダ、法體寺のお市け饅頭があきれらア。サア彌次さんいかう。女「あたけたいな衆ぢやわいな（ト、



門口に鹽花をまきちらす。二人はそれより此町を、そろ〱と爪先あがりにのぼると、なるほど寺一二軒見ゆるに、さてはと早速入り、臺所口より入見れば、何か大勢わやくやと混雜の樣子なれど、）彌「ハイちとお頼申

ます。わつちらァ旅の者でござりやすが、和尚様へおねがひがあつて參りやした。僧「なんぢやらァ。今は取込でぢや、明日てりごんせ（播州にては明日明後日といふを、あすてり、あさつてりといふ。）彌「イヤ明日まではまたれやせぬ。わつちらが友達が頓死いたしやしたから、それでお願ひ申やす。僧「ヤア〳〵なんぢやら、葬禮か、コリャめでたいわ。さいはひこゝの住持、今日入院致された所、入院さう〳〵葬禮が來るとは、こないなめでたいことはない。今までは此寺の檀那はのこらず達者で、どれも〳〵長命、ア、しよことがない、不仕合なこつちやとおもひをつたが、これからは檀方みな夭死して寺繁昌の瑞相、和尚もさぞよろこばれませう。祝うて御酒などあげましよかいな。彌「それはありがたうござりやすが、善はいそぎぢや。わつちらが方からも祝つて、葬禮たゞいま持參いたしやせう。僧「イヤソリャ、早速なこつちやが施主がたは誰殿ぢや。彌「ハイわつちら二人でござりやす。僧「こなさん達はどこぢやいな。彌「イヤわつちらァ江戸の者でござりやすが、金毘羅參詣にまゐりやした船の中で、つれが一人てこねやしたから、それでお寺へおたのみ申ので ござりやす。僧「ハテそりやかけながしの葬禮ぢやな。しかしないよりはましぢやが、旅の衆なら往來の手形があるかいな。彌「イエ手形はござりやせぬ。僧「手形が無うてはでけんわいな。北「ソリャこまつたものだ、もしどうぞそこを、お願ひ申やす。僧「あかんこつちや。エ、やくたいな衆ぢや。せつかくうれしかつたものを。彌「ソリャァいかいおちからおとしでござります。お氣の毒な。北「へ、施主の方からおカ落しといふもめづらしい。サア彌次さん仕方がねへ、またほかをきいて見よう（ト、此寺をたちいで、うそ〳〵と見まはり、或寺へ又はいりて見るところに、これは殊の外の貧地と見え、本堂も住居もあれはてて、臺所に六十あまりのやせがれたる僧一人、圍爐裏にまたがりゐたる所へ、兩人ずつとはいりて、）彌「御めんなせへ。和尚様へちとおねがひがござりやす。旅の者でござりやすが、一人船中で病死いたしやした。どうぞあなたでおとむらひなさつてくださりませ。和尚「ハアソリャ御難義であつたぢやあろ。愚僧すなはち當寺の住職でござる。承知しました。しかしながら、葬禮もいろ〳〵直段次第でござる。經よむ僧も聲のよいのをたのめば、それだけに施物も餘慶に出ます。又引導わたすにも、イヤあら吉が

よいの、或は歌右衛門、三五郎などが聲色でたのむとあれば、是は格別高直でござるが、何もさやうなお好はござらぬかな。彌「イヤそれも面白うござりやせうが、とかく錢のいらぬやうに、お經もなるだけおはしよりなさつて下さりまし。ハテ亡者はつかまうとうかむまいと、そんなことにはかまひませぬ。和尚「心得ました。それなれば又そのやうにはからひます。もそつと物のいらぬやうにいたそならば、二三日まちなされ。こちの檀方に死かゝつてをる病人があるさかい、それと一所に割合でさしやると、いかう下直にあがります。彌「イエイエ、さうはかの佛がもちますめへ。和尚「ナニもたんことはないわいの。その亡者ちよと脊開にして、うす鹽あてゝおいたら、二三日は氣遣ひあろまい。マアソリヤどうともぢやが、かんじんの往來手形がござるかいな。彌「イヤそれがねへからまごつきやす。どうぞそこをおのみこみなさつて。和尚「よござる〳〵こないにさんせ。船頭のしつてをる問屋があるぢやろ、その問屋をたのんで貰うて、問屋からこちへ書附一本おこしてぢやと、いつきにとむらうてしんじやうわいな。北「ハイいかさまさやうにいたしやせう、ノウ彌次さん。彌「いづれにもよろしくおたのみ申やす。さやうならいつてさんじやせうへト、やう〳〵のことにすこしは心おちつきこゝを出るとて、この寺の入口の外に雨戸一枚たてかけてあるを、北八彌次郎にさゝやきて、この戸板をそつと引かたげて早々船へかへり、かくとかたりて船頭をたのみけるに、船頭もよん所なく、心やすき船宿にいたりて委細のことをかたり、彌次郎北八を五太平の親類分となし、船宿よりかの寺へかけ合、書付を出してやうやく寺も納得したりければ、やがてかの戸板に亡者をのせて、著替の布子をかさねてうちかけ、路用金、所持の品のこらず寺へをさむるつもりにて、船頭先に提灯持となり、彌次郎北八はあとさきより此戸板をつりて其寺にいたり、臺所の板の間へかきすゑて、彌次「ハイ和尚樣、わざと葬禮をさしあげます。北「おいれものはあなたのでござります。和尚「これは輕少なとむらひぢやな。しかし因縁といふものはふしぎなものぢや。此佛も、こちの寺へきてぢやこと合點と見えて、いんまのさき本堂の雨戸がぐわた〳〵〳〵といふ音がすると、ずつしり〳〵と板の間を人のあゆむやうな音したは、もう先へわせられたと見えるわいな。北「エヽ和尚さんとんだことをいふ。わつちらアもうすぐにお暇いたしやせう。後でよろしくおたのみ申や

す。和尚「ア、コレ〳〵マア、沐浴して、あつちやへつれてまはらんせ 彌「ナニサ佛の遺言でござりやすから、湯灌はせずとようござりやす。和尚「イヤそでないわいの。濁世の埃を洗ひおとすは佛のためぢや。その釜に湯もわいてあそさかい、ちよとあこへかいていて湯灌してござれ。船頭「とてものことぢや、さうしてやらんせ。サア〳〵其胴服ノウつんぬいでゆかんせ。わしが湯ノウくんでもていこネヤ（ト、此内彌次郎北八は、しやうことなしに丸裸となり、戸板を又湯灌場へつりゆき、弓張提灯を、あたりの木の枝にひきかけ、兩人して佛を裸になし、彌次郎しつかりと佛の髻をつかんで、今や湯をもちきたるかと、待てども〳〵來らず、夜もすでに亥の刻すぎたれば、そよ〳〵とふく風も身にしみ、なにとやらものすごくなり、さむさはさむし、がた〳〵とふるひだし）彌「オヽイ湯をはやくくんねへ。北「らちのあかねへ。おれがくんでこよう。彌「コリヤ〳〵おればかりこゝにゐるこたアいやだ。北「何だかうそ氣味のわりい、それにさつき和尚めが本堂へ亡者が來たといやアがつたを、おもひだしたらもうたまらぬ。ドレ湯をとつて來よう（ト、いちもくさんに駈出してゆく。彌次郎はつと思ひ、つゞいてかけいださんとはおもひたりしが、一ばんこゝは男の魂を見せつけ



る所、我慢しておもいれ、あとにてみそをあげんと、こはさをじつとこらへゐたるが、心のうちには念佛をとなへ、がた〳〵ふるひながら、しんぼうしてゐると、かの木の枝にかけたる提灯、風がふいてきえてしまひ、まつくらやみとなれば、彌次郎は一向夢中になり、ふるへ聲して北八をよびわめくうち、どうやらかの佛がひとりでにうごくやうなれば、はつとばかりにとりのぼせ、よく〳〵ためし見るに、いよ〳〵かの佛むく〳〵とうごきだしける故、彌次郎いまはたまらず、きやつというてたふれるひやうし、この湯灌場は竹簀子なる故、ふみぬきて片足床の下へふんごむと、何かはしらず其足へわんぐりとくひつくにぞ、彌次郎びつくりして）「オヽイ〳〵北八ヤアイ〳〵、はやく來てくれヤアイ〳〵（ト、わめく所へ、北八と船頭が手桶に湯をいれてさげて來る、あとから和尚提灯をひつさげてこゝに來り）「コリヤどうしたぞいな、どしたぞいな。彌「エヽ早く來てくれゝばいゝに。今此佛がいきかへつて大さわぎをやらかした。北「ナニとんだ事をいふ。彌「イヤほんとうに、この死人めがうごいたから、はつと思つてとびのくはずみに、ツイこの簀子をふみぬいたら、下屋からなんだかしらねへが、おれが足へくひつきやアがつた。ア、いてへ〳〵。和尚「ソリヤ大かた犬ぢやあろぞいな。ドレ〳〵アヽ犬ぢ



や〳〵、コレ見さんせ、簀子のくされ落た所へ亡者の足がおちてある。それを犬奴が下からくはへてひきをつたを、こなさん佛がうごくとおもうて、膽つぶさんしたのぢやあろぞいな。彌「ハアそんなら、わつちが足へくひついたも、犬めぢやな。エヽいめへましい。北「ソレそこに畜生めが（ト、ありあふ石ころをとつてはふりつくれば、）犬「キヤアン〳〵（ト、にげて行く。あとはわらひとなりて湯灌もそこ〳〵にしまひ、本堂へかつぎもどせば、和尚ねんごろにこれを回向しをはりければ、あとのとりかたづけばんじをしまひ、施物をさため、やう〳〵のことにて、二人は重荷をおろした心持になり、船頭もろとも、いそぎ船へたちかへりけるに、乗合の人々はのこらずあそびにあがりたりとて、水子二人のみ船にのこりたり。彌次郎やがて酒肴をとりよせ、船頭水子どももあひてにして、その夜は寐もやらずのみあかしける。

　死ぬものは貧乏なれや是からは
　　船に追風の富貴自在なれ

かく祝ひ直して、既に夜明ければ、船頭水子ども船中をあらひきよめ、修驗者をよび來りて不淨除の祈禱をなし、やがて翌日、朝の追風に帆かけて、このみなとぐちを乗りだし　はやくも備前の大多婦の沖に至りける。（播州室より此所まで五里）海中には小豆島の見えたるに、

　景色の寳入もよしや小豆島
　　たはらころびにねながらぞ見る

それより牛窓前といふあたりをゆくほどに、八島の矢くりが嶽、南の方に鋭く聳え、讃岐の小富士手にとるごとく、下津井の浦見えわたり、海中には飯山石島など　すべてこのあたり小島おほく　景色佳麗いはんかたなし。その日中の刻過たると思ふ頃、讃岐の國丸龜の川口にぞ著たりける。（室より此所まで二十三里に近し）

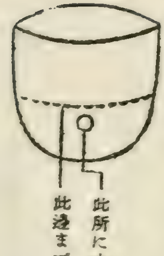
　龍宮へゆく浦島にあらねども
　　のりあふせたる丸龜の舟

折ふし汐干にあひて二丁ばかり沖の方に船を留めて滿汐を待つ、此湊は遠淺にて、いつもかゝる難澁ありといへり。暮過る頃やうやく川中にのり入、彌次郎兵衞北八は、大物屋といへる旅籠屋にやどる。是は船頭の宅のよし、案内にまかせてこゝにいり、はじめて安堵のおもひをなしたりける。

金毘羅參詣 續膝栗毛初編 下之卷

讃岐圓座の名は諸國にひろがりて、爰も賈船入津の一都會なれば、繁昌殊に

いふべくもあらず。町屋は濱邊にそひて建つゞき、旅籠屋なども多く、いづれも家居きらびやかなり。彌次郎兵衛北八は船頭の案内につれて大物屋といふに入り來るに、女ども出向ひ「コレハようお出なさんした。サアこちおあがりなさんせ。彌「アイおせわになりやせう（ト、上へあがる。このうちはせんどうの宅なれば、はゝおやらしきがはしりいでて、）「親がたちどのもどらんだか。アノネヤきのふりの大あなぜナア、たまがつたおやあろナア。船頭「サア、どりばりせうとおもひをつたわいな。それにネヤ、乘合の人が船中で死なしやつてナア、おとろしいおろよいこんであつたわいなア。コレおかたネヤ、お客さまも身が黨も小びるまノウやらんわい。あだゝに飯こしらへてあげさんせ。船頭の女房「サアお客さまナアおくへお出なさんせ（ト打つれておくざしきへつれゆく）彌「コウきた八、とんだうつくしいたぼが見えるぜ。北「もうはじまつた。女「エイ湯にお入りなさんせ。北「彌次さんいかねへか。彌「イヤぬし先へいかつし。北「女中、風呂場はどこだの。女「あこの、ねきへついてナア、ほしほしとお出なさんせ（ト、このうちきた八はゆに入りにゆく。彌次郎かの女のたもとをひかへて、）彌「モシおめへにきゝてへ事がある。あそこにゐたとしまの女中はなんだへ。女「あれはネヤ、こゝのおこれんぢやわいなア。彌「ナニおこれんだ。コリヤわからねへ、おめへはなんだ。女「わしやナ、おなごぢやわいな。（すべてかみがたへん、このあたりまでは下女の事をおなごとばかりいふ。）彌「女はしれたことだ。時にあんまり早脚な事だが、おめへにひとつねがひがある。きいてくれる氣かどうだ。女「ヲホ、、、おまいさまのこつちやものナアとふばりと。彌「コリヤ有がてへ、コウ耳を出しな、ソレよしか〳〵（ト、しりをたゝく）女「ヲホ、、、何ちういうてぢや（ト、おもふさま彌次をつめつてにげてゆく。彌次郎もたつて手水に行、かへりがけにふろばをのぞきて）彌「どうだ北八早くあがらねへか。北「コレ〳〵彌次さん、ちよつと見ねへ。コノふろはなんだろう（ト、いふゆゑ彌次郎ふろばへはいりて見れば、すやきのかめをすゑふろにしたるなり。すべて此へんのならひにて、ふろ桶のかはりにすやきのかめを用ゆ。そこよりすこしうへのかたに三所四所、やけつきたる土のあるにもたせて下す板をおく。京大坂などにていふ五右衛門ふろといふにひとし。くはしくは圖にあらはすがごとし。こんぴらさんけいの人はみなよくしるところなりとぞ。）



厚サ一寸計
口のわたり二尺深サ同断
此所に水を出すくちあり
此邊までくどにぬりこめて
下をたくなり

彌「ハヽヽヽ、なるほどこいつはめづらしい。北「もうこんな風呂にはこりはてゝゐるから、ひよつと又此瓶をうちぬいてはなるめへと外であらつていらア。ばんくるわせな。彌「ナニかまふこたアねへ、はいつて見やれ。北「そんなら はいらう。コリヤ野郎の猩々ときてゐる。彌「猩々ならいゝが、生ながら土葬にしようといふもんだ。北「エヽいめへましいことをいふ。もう出よう（ト、風呂よりあがるあとへ彌次郎入りかはりてはいる。此所にもいろ／＼あれども、さきにあらはす五右衛門ぶろのしやれとひしく、くだ／＼しければ、こゝははしよる。かくて彌次郎も湯にいりしまひざしきへきたるに、かつてよりはやぜんをもちいで、くひしまひたるころ、あるじのせんどう、ざしきへいできたりて、「エ、これは御退屈さまぢやあろ。彌「おかげで今夜こそは大船に乗たやうな心持さ。ヤ時に此海上無難についた祝ひに一ぱいやらうか。モシ何ぞお



めへの所に肴はありやせんか。せんどう「エイ茶袋とナ、どうびんノッありをつたネヤ、どうばりとも煮付てなどあげましよかいネヤ。北「茶袋と土瓶を煮付る。こいつはとんだはなしだ。そんなものがくはれるものか。せんどう「そしたらナ、とつばこのお汁はどうぢやいなア彌「とつばこひやろか。三番叟の吸もので外へはやらじと、おれ斗呑うかハヽヽ。何でもいゝからはやく酒を出してくんなせへ。北「モシ／＼その茶ぶくろや土瓶のあとで、鐵瓶をさし身にして藥罐のころいり、鍋釜のうしほ煮なんぞがよからうぜ。せんどう「ハヽハヽ、えらいひやうまづいてぢや。ドレいんまいつきにあげましよいネヤへトかつてへゆく。ほどなく女盃をもち出ると、やがてうづわのにつけたるをはちに入れて、せんどうもちいづる。あとより女ばうてうしとたこのさくらにをもち来り、〽「どうとだな。せんどう「さよぢや、サアろくにびんのふといのぢやがナ。あんじよら居ざりなさんせ。わしさきへじやうらくも、おゆるしなされ。そのだいナア、とようたけたわいなア。サアひとつおあがりなさんせ。北「ハヽアどうびんとおかたがいんぎんぶくろぢやネヤ、ハハヽヽへいんぎんぶくろとは、はかまのことは蛸の事、茶袋といふは此うづわのこ



なり。女ばうがまへだれしてゐるをしやれて、かくはいふとみへたり。）彌「おとし役においらからはじめやせう、ヲトヽヽトありますく＼（ト、いつぱいぐつとのみて北八へさす。）北「ヲットいたゞきのわたせるはしにか、ありがてへの（ト、ひとつうけてのんでゐるうち、彌次郎いかゞしてやかほをしかめて、）彌「エヽコリヤどうしたのだか、今この酒をのむと、たちまちむねがわるくなつた。コリヤたまらぬ（ト、いちもくさんにえんさきへかけいだしゲロく＼とやらかす。）北「どうしたどうした。女ばう「何ちうなさんした彌「アアくるしい。なぜかをかしな心持だ。北「酒のわるいのぢやアねへ。ハヽアきこえた。おめへこんぴら様のばちがあたつた。彌「なぜく＼北「きのふ船で、かの大變のとき好物な酒を一生たべますめへと、金毘羅様へ願がけしたぢやアねへか。せんどう「ホンニさよぢやナア、ゆうべりもチア、室で酒をのんでぢやとき、あたゞにほてノウ、おろよいと、いこおらばしやつたぢやないかいネヤ。彌「なるほどそんな事があつた。もつてへねへ事をした。コリヤどうしたらよからう。しかしおいらも酒をたつて忘れる位だから、金毘羅様もあれが酒をたつたと、いちく＼覺えてもござるめへぢアねへか。女ばう「そぢやてゝ、こんぴら様のばちナア。おとろしい。ツイ此うらのねきにゐた人がナ、そないな事で氣が間違うて死でぢやわいな。北「でへじのことだ。コリヤどうぞしておわびするがいゝ。せんどう「ソリヤナア斯ぢやわいな。こゝもとではナア、こんぴら様へ酒のうたつて破た時はナ、立待ノウしておわびするが恒規ぢやネヤ。彌「たち待とは、今夜よつぴとい立てゐるのか。ソリヤ大變なりくつだ。北「ナニそのくらゐのことは辛抱するがいゝ。このうへどんな祟があつて、おめへの身のうへにもしものことがあると、おいらがなんぎだ。彌「どうやらむねが又むかく＼してくるしい、ひよつと死んではつまらねへ。今からたち待しておわびしやせう。ヤアエットコナ（ト、立あがりて何か口の中にぶつく＼とこんぴらのかたををがむ。）女ばう「こないになさんせ。夜がよざゝらは御辛抱がでけぬくかろ、やつつまでとよござりましよ。彌「そんなら八ッまで南無金毘羅さまく＼。北「ハヽヽおいらはよく酒を斷なんだ。サア御亭主盃はどうする。せんどう「コリヤナおかた盃がふとうない。親定器が備前かとつでひゆつひゆつとやりたいネヤ、ハヽヽ。北「いかさまもつと大きなもんでやらかさう。

彌「コリヤ〳〵、もういゝかげんに酒をしまつてくれねへか。おれに見せてばかりは情ない　北「そこが辛抱だ、もちつと見てゐなせへ。ノウ船頭さん、アアうめへ酒だ〳〵。彌「立まちのおかげかして、少し心もちはよくなつたが、又今度は呑たくて胸がくるしい。北「エ、いぢのきたねへことをいふ。せんどう「しかしおきのどくぢやナ。もうとりおきましよいな。北「おもひがおそろしい。そんならおつもり〳〵（ト、こゝにてさかづきをおさめると、女ばうがかつてへもちはこぶ。女ふとんをもちきたりとこをとりながら、）三「モウおよりなさんせ。せんどう「それがえい〳〵ね間とつてあげさんせ（ト、いとまごひしてかつてへゆく。女とこをとりしまひて、これもかつてへ行と北八はそのまゝねかける。彌次郎は立待ゆゑひとりつつくりとして、）彌「コリヤ〳〵もちつとおきて居ねへか、附合をしらねへ男だ。コレサ〳〵（ト、あしでおこせど一向にたはいなく、ねるよりはやくたかいびきなり。しばらくすると、かつてのかたもねしづまりたるやうすに、彌次郎が宵のうちいちやつきたる女ひやかしに來り、あんどうの油をつぎながら、）女「おまいさままだおやすみなさんせんか。彌「おめへのくるのをまつてゐた。コレ爰へ來な。はなしがある。女「エイおきやうこつや。サアねなさんせ。彌「おめへねるなら。女「わしさきへねてもえいかいネヤ（ト、彌次郎がとこのうへゝあがり、横になつてこゝへこいと、手まねぎをして彌次郎をひやかす。彌次郎ひとりきをもみ、）「エ、情ない、そこへいつてねたくてもはじまらねへ。こんなことなら立待より寢まちにすればよかつたものを。女「何ちういはんす。わしおきらひぢやな。コレイナアどうぢやいな（ト、女はふとんの中からむしやうにまねく。彌次郎ねたさは山々なれど、）三「エ、、こんな間のわりいことたアねへ。早く八ツをうてばいゝ。もう何時だの。女「九ツでもあろかい。彌「まだひと時だな。コレありやうは今夜おいらは立待だからねることがならねへ。おめへもおきて爰へ來な、たつてゐても話が出來やす。女「あほらしい、わしやたつてゐてナ、はなしノウすることはいや〳〵。彌「エ、そんならコウ鐵槌があらばもつて來てかしねへ。女「ヲホ、、、かなさいこづちのことかいな。ソレ何ちうさんすのぢやいな。彌「イヤあの箱枕を此柱へうちつけて、立ながら寐るつもりだ。女「ヲホ、、、なんちういうてぢや。彌「エエ寳の山へ入りながら手をむなしくとはこのことだ。それにおいらばかりか、息子どのまでさつきにから立待をして、コリヤこてへられぬ（ト、えぢか

りまたしてまご〳〵するを、北八こらへず吹出し、）「ハヽヽヽおもしろへ〳〵。コレ女中、あの男にかまはずと、寝てゐるおいちが所へ來な（ト、おびをとつて引ずりこまうとする、女はきもをつぶしはねおきて、）「アレつぺノウひねつてぢや、わしやたまがつたネヤ（ト、一もくさんにかけ出してゆくと、折ふし八ツのときのかねゴヲン〳〵となる。）北「それもう八ツだ。彌次さんもう寝なせへ、御くろう〳〵。彌「いめへましい。たま〳〵あんばへよくやつたものを、おもしろくもなんともねへ

御利益を茶にせしむくいうかされて
寝られぬ罰はたちまちにこそ

斯よみて笑ひを催し　そのまゝ打ふしたるが、はやくも夜あけて起出支度ととのへ、けふはお山にまゐるべしと、船頭を案内にたのみ此宿を立出行ほどに、餘木田の郷といへるに至る。（丸龜より壹里半）それより松が鼻といふには、厄拂なりとて十歳餘りなる子供に獅子頭をかぶせ、太鼓うちたゝき錢を乞ものあり、「サア〳〵旦那さまがた、お厄ノウはらひましよ。錢下んせネヤ、トンチキ〳〵ト、ヽ、トン〳〵。頭「ナンダ厄はらひだ。晦日に來さつし、はらつてやらう、

節分の夜にはあらねど厄拂ひ



おもてに立る松が鼻かな

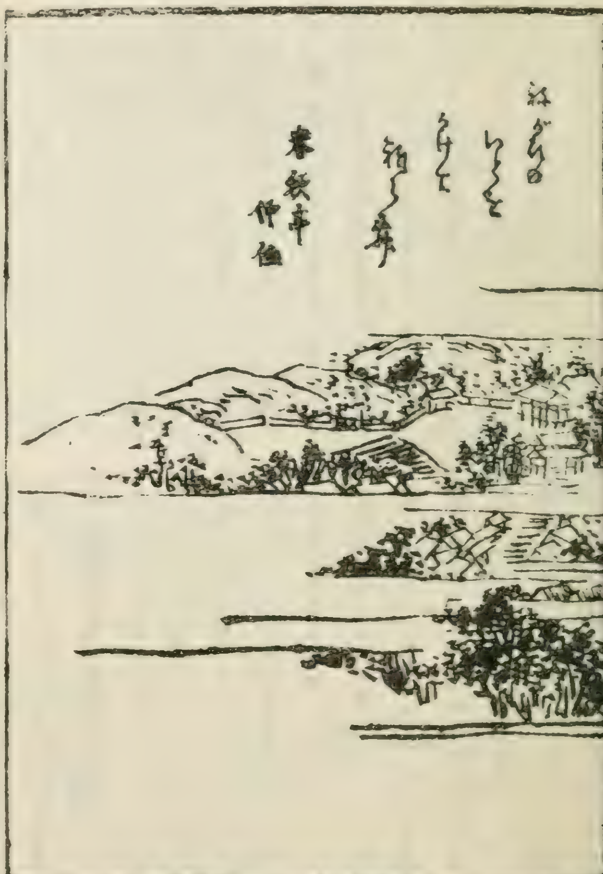
かくてしばし行ば、榎井村とて旅籠屋茶屋などおほき所に至る。途中に大なる唐銅の鳥居あり。是は東都の人々の建るよし記しあり。北「ナント爰でチト休んでいかう。彌「酒屋はごめんだ。餅にしよう（ト、そこら見廻しさたうもちとかんばんあるうちへはいり、）彌「コウあねさん、その餅を十ヲばかり盆にでものせて出してくんな。北「イヤ酒もあるぜ。彌「けふはおいらにつきやつて下せへ。そのかはり餅はいくらでも振舞ふ。女「エイおあがりなさんせ（ト、くわしぼんにあづきもちをのせてもちきたる、）彌「この事〳〵サアはじめさつせへ。北「この餅は冷だな　マアおめへからはじめなせへ。彌「そんなら一ッ喰てささう。北「ドレドレいゝ餅だ。コリヤア餅米一本木と見える。船頭さんあげやせう。せんどう「わしやゆるしなされ、彌「ホンニおめへは売無體の上戸であつた。上戸の茶かなあらしだ。茶でもおもいれのみなせへ。北「おいらももう御めんだ。彌次さん半分すけてくんねへ。彌「イヤ手めへの食さしはあやまる。犬にでもやつてしまやれ。あとはお盆限おれがおつもりにしよう（ト、ひとりむしやうに餅をくひしまふ。此内一人の男、大坂講中月参とそめたるはをりきたるが、此茶やへずつとは



いり、二「コレイナ、えい酒五合ばかりおくれんかいな、肴はなにがあるぞいな。彌「エ、いめへましいやつが來た、サア〳〵いかう〳〵。北「ハテもつと休んでいきやしよう。茶やの女「エイおさかなはナア、へうだひのお汁と、おばあの煮付とナア、はらかたのやきたてもあるわいネヤ。大坂もの「その鯛の汁よかろ。とつともう、えらあつかんにして下んせ。女「アイ〳〵(ト、やがて酒さかなをもつてくるより早く、つゞけのみに二三ばいぐつとやらかし、)大坂「ア、きよとい〳〵えい酒ぢや。モシ當國は酒のえい所でござりますわいナ。北「さやうさ。大坂「あなたおもちひなら、お慮外ながらひとつあげましよかいな。北「それはありがたうござりやす。大坂「サアあがりなされ。酒はひとりでは、とつともうあかんものぢや(ト、北八へさかづきをさす。)北「ヲト、、、ありますあります。ア、いま呑だ餅よりは又格別なもいだ。大坂「すぐにそつちやのおかたへあげなされ、彌「それはありがてへ。北「ヲヤとんだことを、おめへもう忘れたか。彌「ホンニさうだ、わつちは酒はたちものでござりやす。大坂「ハア金毘羅さまへたちなされたかいな、さだめて何ぞ願がけしておやあろが、そのぐわんはかなうたかいな。彌「おかげで災



難を遁れやした。大坂「そしたらもうえいぢやないか。ハテ願さへかなうたらこつちのものぢや。呑んしてもだんない。もし罰があたつた所がたかで命ひとつすてようとおもや、きつい事はないわいの。彌「その命を捨てたまるものか、とんだことをいふお人だ。大坂「ぢやてゝ酒たつてゐらるゝものかいな。酒の代り外におまいのすきなもの、たてかへさんしたがよいわいの。彌「外にすきなものといへばかの一物だが、こいつはどうもたゝれめへ、ハヽヽヽ時に北八いかうぢやアねへか。北「そんなら出かけよう。アイおせわ、モシ大きに御ちそうになりやした。おさきへ參りやす（ト、此所をたちいで五六丁ゆけば、こんぴらの町にいたる。丸龜より是まで三里なり。まちのなかほどにさやばしといふはしあり。上にやかたありていとめづらしきはしなり。



上を覆ふ屋形のさやにおさまれる
御代の刀のやうな反橋

是より權現の宮山に登る、麓より二三町ばかりのほどは商家たちつゞきて地黄煎薬飴を賣家多し。彌次郎その商人の白髪なるを見て、

うる人の頭の白髪大根は
ちとさし合か地黄煎見世

頓て仁王門に入　十五六町の坂をのぼ

りて御本社にいたるに、その莊嚴いと尊く拜殿は檜皮葺にしていかめしく、花麗殊にいはんかたなし。先廣前に額突奉りて、

十露盤に達せし人も神徳の
おもさはしれぬ象頭山かな

此御山より海上の島々浦々郷々一望の中に見わたされて風景いふも更なり。かくて下向の道をいそぐに、接待所神馬堂のあたりより、あとになり先になりて磴道をおりたつものは、年の頃廿二三歳と見え、大たぶさの若衆髷にしたる色白き女、布子のうへに中形の浴衣引ッぱりかゝへ帶に裾引きあげ、わらじがけにて杖にすがり行あとより六十ばかりの親仁少しの荷物を脊負ひたるが、うちつれて行にぞ彌次郎かの女にちかづきて「モシおめへがたア、此近邊の方とも見えぬが、女中の此お山へ參詣なさるといふは、たいていの事ではないに、どちらからお出だの。女「ハイわしや大坂のはうからさんじたわいな。彌「ナニ大坂から、ソリヤアとんだことだ。たつた兩人連かへ。女「さよおやわいな、アリヤわしのとゝさんぢやがな。路すがらはなしせうにもえらい聾ぢやさかい、ホンニつれといふ名ばかりぢやわいナ。彌「それは道が退屈でござりやせう。是からすぐに大坂へお歸りか、それならばわつちらと一所にお出はどうだ。女「ソリヤお嬉しい、御一所にさんじようわいな。コレナとゝさん此おかたもおさかへいきおやといな。おやぢ「ナニふるものぢや、空は青天井ぢや、氣遣ひはないわいの。女「ヲホヽヽヽ、あないな事いうておや、ヲヽしんき。北「モシおめへ、わけへなりをして、殊にその美しい顏でたつたふたりづれの道中、よく護摩の灰がつかなんだ。是からわつちらと一所にあよびなせへ、それこそ大丈夫た。女「さよぢやわいな。したがわたしどもは是から彌谷とやらへいくわいな。おまいさんがたはどつちやへお出なさるぞいな。せんどう「モシおまいがたもナア、序に善通寺から、其彌谷へ參詣ノウしてござんしたがえいわいネヤ（ト、ゆく道すぢのことをくはしくおしゆるに、彌次郎北八もさあらばとて、さやばしのもとよりせんどうは先へかへし、多度津かいだうへかゝりゆくみちすがら、）彌「ナント女中さん、今夜ァわつちらがとまる宿へ、一所にとまりなせへ。にぎやかでよからうぜ。女「ソリヤおうれしいこつちやわいな。北「さうしておめへとおいらがいつしよにねようか。女「わしや久しうお客とねたことがないさかい、どうなとして

おくれいナ、ヲホヽヽヽ。彌「イヤおめへのお里もしれた。だうりこそやぼからぬとおもつた。奇妙〱。北「ナニおめへがきめうだもをかしい。おいらがさきへくちをかけたのだ。彌「さうはいかねへぞ。とうからおれにきまつてゐる。ノウとつさんハヽヽヽ。耳が延引してゐるといふはいゝもんだ。コレおめへたばこでも呑なさらねへか。おやぢ「アイおさかは島の内ぢや、とつとえらいにぎやかなとこいの。女「ヲヽせうしやの。たばこなと呑んせというてぢやわいな。おやぢ「ナニたま子のめ。ここらになんの玉子があろぞい。牛房ならアノ畑にあるぢやあろ。ワハヽヽヽ（ト、此うちはや善通寺にいたる。本だうはやくし如來四こくへんろの札所なり。こゝにさんけいして門ぜんのちや屋にやすまんとはいる。）ていしゆ「ようおいでなさんした。

彌「なんぞうめへものがあるかね。女「わしやナ、いこひもじうてならんわいな。彌「おめへ飯にしなせへ。コレ〱御ていしゆさん、何ぞうめへさかなでこの子にめしを出して呉なせへ。北「おいらは酒にしよう。彌「酒はならねへ、たちものだ。北「ナニおめへこそたちものなれ、此子やとつさんも呑なさるだらう。女「さよぢや。とゝさんもわたしも酒はえらいすきぢやわいな。北「それ見たがえい、酒はおいらが施主につく。コレコレ酒をも出してくんなせへ。ていしゆ「エイ〱こゝろえました（ト、しばらくしてめしをもちいで、さけさかなももち來る。北八はじめて一つのみ、かのをんなへさす。）女「ヲヽしんきやの。こないなちひさいものぢやあかんわいな。コノ茶わんでやろかいナ（ト、あさがほなりのちやわんに、引うけてぐつとのみ、おやぢへやる。）おやぢ「コリヤきよといわ。御ちそうになりましよかいヲトヽヽヽ。アアえいわいの、序にかさねましよかい。女「其あとをこちおこさんせ。おやぢ「なんぢや、も一ツのめか、お辭義はせんぞト、引うけ〱つゞけてのめば、かの女茶わんをひつとりこれもつゞけてのむ。北八きもをつぶし。）北「コレ〱おいらがはうへもまはしなせへな。おやぢ「いやおてうしがないわいの。コレ〱御酒のおかはりぢや、ちつとヅヽはめんだうぢや。一升なと二升なといちどきにかんしてもてごんせ。北「イヤふるまはれる酒だとおもつて、太變なことをいふ。女「わしやもう飯にせうわいな。コノおひらはえらいあぢようでけたわいな。モシナおひらかへておくれんか。そしておはちもかへておくれいな。彌「イヤおめへ顔に似合ぬ大食だなコリヤおそ

れる〳〵（ト、ふたりはきもばかりつぶして見てゐるうち、女はゐさいかまはず、さつさつとくひしまふと、かのおやぢもたらふくのんでしまひ、）「サアえいぞ〳〵。もうお出んかいな。彌「いかさま出かけやせう。御ていしゆさん勘定はいくらだの。ちや屋「エイ〳〵六百五十文おくれなさんせ。彌「コリヤえらいわ、北八半分出さつせへ。北「エ、しかたがねへ（ト、ふしようぶしように、このところのはらひをなして立いで、曼陀羅寺へまゐりやがて彌谷寺のふもとにいたる。こんぴらよりこのところまで三里あり。にごり飯を名物としてうる茶屋あり。）既にはやけふも七ツ過たる頃となり、これまで曼陀羅寺より殊に險難の山坂を歷て來るなればおの〳〵足もつかれ、そのうへ小雨のふり出したるに、多度津の方へはまだ程遠きよしをきくより、いざやこゝに止宿せばやと相談して或茶屋のうちへはいり、彌「ナントわつちらを、とめてくんなさらねへか、ちと早いがとまりてへものだ。ちや屋のばゞ「エイお宿ノウしましよ、上らしやませ。コリヤ長松ネヤ、湯ノウくんでもてこい。サア足ノウすゝいでそらへあがらしやませ。北「アイこれはお世話、サア一所にやらかしやせう（ト、みな〳〵わらじをとき、あしをあらひて、おくのむさくろしきざしきへとほる。）女「わし



やまたおなかゞ、さもしうなつたわい
な。彌「イヤおめへあとの茶屋でおはち
をかへてくひながら、またひもじいと
はとんだくらひぬけだぞ。女「そぢやて
てなんぞくわしんかいな。彌「コレ〳〵
ばあさん、めしのできるにはあひだが
あらうから、何ぞ外にくふものはねへ
かへ。ばゞ「にぎりめしノウこゝの名物
でござる。くはしやませ。北「コリヤよ
からう。それをこけへ出してくんな。
ばゞ「エイ〳〵いんまいつきに。コレナ
おかたネヤ、はやうきやしやませ、コ
レちよまよめしびつノウもてこいやい
長松（ト、にわかにさわぎたちて、ばゞは飯びつ引
よせ、めしをやみくもとにぎりながら、）「コ
リヤちよまヨ、くわんすの下ナア棚く
べてえつとたけやい。コノ又おこれん
は何ちうしてゐざるぞい。エ、ほては
らノウにえかへる（ト、むしやうに、やか



ましくしやべりながら、ひばちにかけてやきちどけやい（ト、ふき、わらび、とうふ
たて、）「コリヤ〳〵ちよまよ、コノやけのひからびたにしめつけて、やきめしをぼん
たノウ盆にのせて、ちやとおくへもてにもりおくへもちいだす。）北「是は御くら
いけやい。コリヤ〳〵炭團のせるのぢうサアどなたもやつて見なせへ。彌「ヲ
やないわい。エ、何ちうするネヤ、こャばあさん、此にぎり飯はなぜこんな

にまつくろだの。ばど「ソリヤ黒いのはナア、はじめににぎつた三ッ四ッばかりでござる。彌「そんなら其三ッ四ッへおめへの手あかは付いてしまつたといふものだから、その跡はみなしろいのか。ばど「インヤネヤまだあとにもござろ、うちのぐはたらうめがナア。（子どもの事を川童といふこゝろにて、ぐはたらうといふ。ぐはたらうとはかつぱのことなり。）「たどんノウにぎりめしとまちがへて、盆にもりおつたがナア。その炭が盆にくつついてにぎり飯ノウ、黒なつたもござろわい。それともたどんノウくはしやますなら、こゝへもてずろかいネヤ。北「ナニたどんがくはれるものか、とんだ事をいふばあさまだ。ばど「インヤそないにいはしやますな。わしどもはくひおりますわい。きのふべりもナア庄屋どのゝうちかたにナア、心ざしノウござるてゝ、たどんノウこしらうてあづきかけてくばらしやましたわいネヤ。北「ナニうそばつかり。ソリヤたどんぢやアあるめへ、ぼた餅の事だらう。ばど「ホンニナア其ぼたもちでござつた。わしおぼえぞこなひでござるネヤ。彌「面白くもねへ何のこつたハヽヽハ。北「それはいゝが、なんにしろ此にぎりめしは爺父のひとり者ときて爺、無妻だからあやまる。もうこれぎりであとはいらねへよ。サアおめへがたはどうだ、くひなさらねへか。女「わしやなんでもよいわいな。とゝさんあがりいな。いこもむないことはないわいな（ト、もとよりおやぢはつんぼうなれば、ゐさいのことはしらず、さつ／＼とふたりしてくつてしまふ。彌次郎北八はさすがにこれを見てゐるばかりにて、）

名物とかねてはきけど婆々の手を
にぎりめしなら彌谷の茶屋

かくて日もくれたるに夜食も出てそこそこに食ひしまひ、かねて彌次郎は此大坂ものゝ女をと心がけて道々も奢りちらかせしは　なんでも本望をとげんとの下心にて、扨こそ泊りをもいそぎむりにすゝめて此處にとまりたるなり。北八これをさとり横ぐはへして彌次郎に鼻あかせんと、これもいろ／＼に魂膽してゐたるが、やがて彼是と四方山のはなしもすみて、寐る一段となり、座敷もせまければかの女と親仁は次の間に床をとらせ打ふしたり。彌次郎は北八とならびてふとん引かぶり、空寐入して人々の寐しづまるを待ゐたるに、折ふし雨はをやみなくふりてもの淋しく、勝手の方のはなし聲も次第に立消がして夜の更るにしたがひ、ただいびきの音のみ喧し。彌次郎時分

はよしと。北八が寐いきをかんがへ、そつとおきいで次の間のからかみをそろ／＼とひらきたるに、有明のともし火なければ、さぐりまはりて女の頭に手がさはり、是こそとてふとん引まくり入らんとする所、女しきりにうめくやうすに彌次郎聲をひそめて、「コウコッおめへどうぞしたか。女「たれぢやいな、ヲ、すかん何しいぢやぞいな。彌「何をするものか。内々の咄があつて來たものを、おめへも承知であらうぢやアねへか。女「わしやナ、さきにからあんばいがわるいわいな。彌「何としたのだ。女「アノナ持病の疝氣がおこつたわいな。彌「イヤわるぢやればかりいふ。女に疝氣があつてつまるものか。女「ナンノイナ、わしや女ぢやないわいな。彌「女でなくてこんなうつくしい男が、どこにあるものだ。但し女か男かドレ／＼見とゞけてやらう（ト、むりにこすりつきてそこらさぐりまはせば、手あしは毛だらけ彌次郎とはあひむこどし、つのづきあひでもしようといふやうすに彌次郎びつくりして、）「ヤア／＼／＼／＼コリヤ男だ／＼。どうしておめへが男だかおれにはさつぱりわからねへ。但しはかどちがへではねへか、合點がいかねへ。女「そぢやあろぞいな。わしや赤村鼻之助というてナ、道頓堀の舞臺子ぢやわいな。去年えらう痔を煩うてナ、もう死かと思うた程のこつちやあつたがナ、此とゝさんは、わしひとりたよりにしてぢやさかい、こんぴらさまへぐわんがけしてぢやあつたが、其お影やらしてとんとようなつたさかい、それでおれいまゐりにさんじたのぢやわいな。したが船でえらうひえたせいかして、又さきにから痔がいたうて、それに持病の疝氣があるさかい、一どきにおこつて、ヲ、いたヲ、いた、どうぞ腰さすつておくれいな。ヲ、いたやの／＼。彌「ハアそれでさつぱりわかつたが、おいらアとんだつまらなくなつた。はな「そないな事いはんせずと、ちとのまじや、こゝさすつておくれんかいな。彌「おいらアもうおめへを女だと思ひつめて、とんだ餘計なことをした。ホンニ此疝氣のかんびやうをしようとは夢にもしらなんだ。ソレこゝか／＼。はな「アイおうれしいこつちや。どうやらちとようなつた。もういておやすみなされ。彌「アイ大きにおせわ、やすまうとやすむめへと、コリヤアねつからうまらねへこつた（ト、ぶつ／＼小ごといひながらわが寢所へかへり、おもへば／＼ばか／＼しいめにあつた。こいつおればかりはぢをかくこともねへ、北八をもすゝめてやらんと心

にうなづき、よくねいりゐるをゆすりおこして〔〕彌「コリヤ北八〳〵、ちと起さつせへ。北「ヲイ〳〵なんだ〳〵。是はしたり、おいらはねいつたさうな。彌「よく寐る男だぜ。コウ手めへなんにもしらねへな。北「しらねへとは、何を〳〵。彌「いまおれがつぎの間の女の所へいつたことを。北「ヤアおめへもういつて來たか。エヽ殘念〳〵。彌「イヤ奇妙だぜ。あいつなか〳〵手のあるやつ。そのくせ大のすけしうと見える。手めへもあとへしかけさつせへ、よく寐入つてゐるから。北「ソリヤありがてへの。おらアありやうはおめへをだしぬいて、先がけをしようとおもつてゐたが、ツイ寐入つてしまつた。遲ればせにかけ出さうか。彌「はやくいかつし。北「ヲットしよう〳〵。イヤまたおいらアおめへのやうなこつちやアねへ。こつちに



手が萬とあるから、おもいれかきのめしの大よろこびに、嬉しがらせてこよう、しめた〳〵（ト、むく〳〵とおきあがり、じゆばんひとつにて、そろり〳〵とつぎのまへ、出かけるうしろ姿のをかしく、彌次郎はひとりふき出しさうになり、見てゐるうち北八はくらがりをさぐり〳〵、かのはなのすけが、よくねいりゐるやうすを考へ、そろそろとふとんをまくりかけ、うしろのかたより手をいれてさぐりまはせば、せんきにてふ

くれたるきんたまが手にさはり、北八はつとおどろき、きもをつぶし、さう〳〵とびのきて、両手をくみしばらく考へ、さてはかどちがへせしか、今のは、かのおやぢがきんたまにさうゐなし、さすればめざすしろものは、こちらのはうかとそろ〳〵はひいだし、親仁のねてゐるふとんの中へ、ずつとはいつてしがみつき、ほほべたへねぶりつけば、親仁めをさまし、）「あいた〳〵、どやつぢやぞい（ト、大聲をあげたるに北八きやつとびつくりしてうろたへまはり、にげんとするふんどしのはしをとらへて、）おやぢ「コリヤまちをれ〳〵、太夫ねてかいの、おきてくれやい。どやつぢやしらんが、わしがねまへはいりくさつて、首にかけてをる財布めがけをるやうすぢや。コリヤコリヤどこへもにがすこつちやない。サア火ィともしてくれやい太夫〳〵（ト、よぶこゑに、はなのすけおきあがり、）「何ぢやたうぞくぢやにがさんすな。何とられたもしれんさかい（ト、おくのまにゆき彌次郎のまくらもとにあるあんどうをさげてくる。北八はにげようとすれども、ふんどしのはしをとられ、しめつけられてまご〳〵するうち、あんどうに顔を見つけて、）はな「ヤア〳〵おまいかいな。コリヤどうぢやいな。おやぢ「イヤこのわろたちは、がてんのいかぬ衆ぢやとおもうたが、道理こそ、人のねてをる所へのめりこん



で、なんとさらすのぢや。コリヤすまんぞ〳〵（ト、もつてのほかこわだかにいふにぞ、かつてへきこえてはごふさらしと、北八色々にことわりいへどもつんぼうゆゑいつかうにきゝいれず、）「イヤ〳〵何といはんしてもきかぬ〳〵。コレ宿の衆、みなおきさんせ〳〵。北「コレサ〳〵先しづかにしてくんなせへ。わつちはどろばうでもなんでもございやせぬ。恥をいはねば理がきこえやせんが、ありやうはおめへの娘御の所へはいこまうと思つて、ツイかどちがへをいたしやした（ト、ゆびのさきでたゝみへかいて見すれば、おやぢりきみかへつたなりで、よみをはり、）「エ、何いふぞい。わしが娘の所へとは、コリヤわりさまは氣ばしまちがうてかいな。わしどこに娘をつれまうてきたぞい。コリヤこちのむすこぢやわいな。北「ナニ〳〵むめへのむすこだ。そんなら女ぢやァねへのか。ヤア〳〵だうりこそ、大きな金玉であつた。おやぢ「なにいうても、こちやきかんのぢや。マアわしが此財布のひもへ、何でこなた手をかけたぢや。北「わしやきんたまかと思ひやして。おやぢ「ナント。北「アノ金玉かとおもつてさ（ト、耳のはたへ口をよせていへば、）おやぢ「ナニ首すぢにきんたまがあるものかい。そないなちやらくらくふのぢやない。ありていにいはんせ。北「イヤむすこどのの金玉で、こいつまちがつたとおもつたから、それでおめへの中へ。おやぢ「ナニむすこの金玉がまちがうて、わしが中へはいるものかいの。やくたいもないことを、ぬかしくさる。そないなこつちやすまんぞ〳〵（ト、だん〳〵こわだかになる。北八いろ〳〵にいひわけし、はなのすけにも頼みて、やう〳〵おやぢをなだめなつとくさせ、すご〳〵と、わがねどころにかへりはいこめば、彌次郎こらへず、くつ〳〵とふきだし、）

　めづらしや狸寢入をしてきけば
　　とりちがへたる金玉の論

北「エ、おめへもいゝきぜんな、おれをばとんだめにあはせた。彌「ハヽヽヽこれで寢心がいゝ。サアやすまつし、御太儀〳〵（ト、はてはおほわらひとなりて、それよりはさうはう共しづまりかへつて、ひとねいりによのあくるまで、打ふしたるが、朝つとめの寺のかね耳にひゞき、からすのこゑかしましくつげわたるに、はやおきいづれど、ゆうべのいさくさ、兩方ともけさはしみじみものをいはず。かつてより膳もいでたれど、あいさつもそこ〳〵くひしまひ、したくしてたちいづるとて、）彌「サアどなたも出かけやせうか。おやぢ「イヤこなさんたちとは、もうつれまうてはいこまいわい。さきいかんせ〳〵（ト、とりあはさ

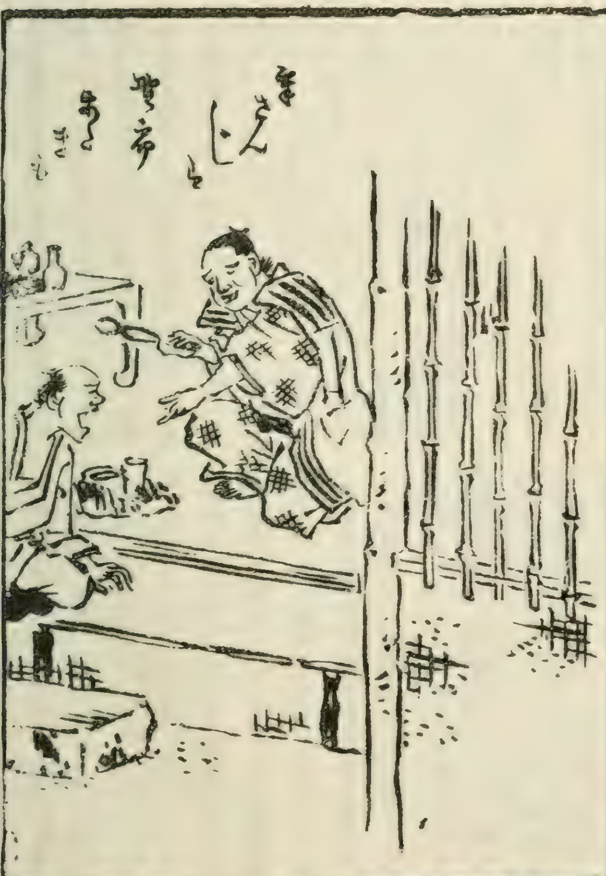
れぱさいはひと、彌次郎北八ふたりのみさきへ出かけて、かの男を女と思ひちがひせしはなしなど、かたり興じて彌谷寺の仁王門より石だんをのぼり、本堂にまゐり、おくのゐん求聞持のいはやといふに、一人まへ十二文づゝ出して、かいちやうををがみ、此たうげをうちこえて、びやうぶがうらといふにおりたつ。）

薄墨に隈どる霞ひきわたす
屏風が浦の春の景色

それより弘法大師の誕生し給ふといふ垂跡の御堂を過て十四津橋をわたり、ゆき／＼て多度津の御城下にいたる。

彌「チトそこらで休うか。北八手めへどうぞしたか、とんだ顔つきがなまけて來た。北「イヤ今朝からどうしてか、虫歯がいたくてならねへ。ひさしくこんなことはなかつたが、アヽこたへられなくいたんで來た。彌「ソリヤわりいの。金毘羅さまへ願をかけるがいゝ。北「酒をたつてか。さうはいかねへ。彌「イヤさいはひむかうに、アレこんぴら御夢想虫歯の藥といふ看板がある。買てつけて見さつせへ。北「ドレ／＼あんまりいたい。買て見ようか（ト、かのかんばんのあるいへをみれば、いたつてそさうなるかうしづくりにて、間口はわづか二間ばかりのうちなり。すこしのげんくわんめきたるところにたちより、）北「ハイちとおたのみ申やす（ト、このうち、奥よりあるじと見えたる、五十あまりの大がらなるそうはつの男、そでなしばおりの、のりこはきをきて）「どつちやからわせられた。北「アイむしばの藥を下さりませ。あるじ「エイむしばもいろ／＼ありをるが、こなさんむしばかい。北「ハイわつちでござりやす。けさからどうもいたんでなりやせぬ。あるじ「ドレ見せさんせ。北「ハイさやうなら御めんなさいやせ（ト、こしをかけてそこら見まはせば、正めんに人の胎內の圖をかきたるをかけ、かたはらにてんぐのめんをすゑて、白幣にみきなどそなへ、其ほか口中りやうぢのだうぐをならべてあり、あるじ鐵にてのべたる、ちやしやくのやうなるものを持出）「ドレ／＼ずとこちらへよつてくちをあかんせ。北「ハイ／＼アアン（ト、くちをあく）あるじ「ハヽテゑらう大なくちぢや。そしていこ不掃除なこつちやの。歯くそだらけぢや。これぢやをなごなぞはいやがるぢやあろ。彌「さやうさ。此男はとかく女にはきらはれます。あるじ「さうぢやあろ／＼。虫歯は下ばか上歯かいの。北「下歯でござりやす。あるじ「ムヽ下歯屬レ陰合レ口則陳ニ於上歯內一如向レ外挑レ之則易レ脱とある。コレカ／＼。北「アイタタヽヽ。あるじ「コリヤ藥おかんせ。なるほど一ツたんはようなつても、またわるなると外の歯へうつるさかい、コリヤぬいたがよいわいの。北「ぬくはい

いが、がうぎにいたみやせう。あるじ「ナンノイナ痛ないやうにぬいてしんぜましよ。彌「とてものことに、ふたゝびおこらねへやうに、ぬいてもらうがよからうぜ。あるじ「さよぢや。コレおかた、釘貫もてごんせ。北「エヽアノ釘貫でぬくのかへ、とんだ事を。あるじ「ナニいとないやうに、あぢようするさかい、氣づかひさんすな（トくぎぬきをとりよせ、）「サア目をねぶつて又口をアヽンとやらんせ。アヽコリヤくさい口中ぢや。此口臭胃火食鬱也 喉腥肺火痰滯也とある。ソリヤぬくぞ 北「アイタヽヽコリヤ鼻をねぢつてどうしなさる。あるじ「これはしたり、脇見して歯とまちがへて、ツイ鼻をぬかうとした、然しぬいてもだんない鼻ぢや。あるやらないやら、ひくうてしれん鼻ぢやわいの。北「イヤそんなにおめへちやかさずと、早くおたのみ申やす。あるじ「よい〳〵、いんまいつきにぬくわいの。しかしこれぢやいかんわい、あをむけにならんせ。ソレ枕やろわい、ヲヽさうぢや〳〵。ときにわしが療治はすべて金毘羅の御夢想ぢやさかい、アレ見やんせ、こんぴらさまが勧請してあるわいの。随分としん〳〵さんせ。こなさんたちもさだめてこんぴら参ぢやあろが、あこのは南無象頭山金毘羅



大権現ととなへるが、こちの所のこんぴらは、となへやうがちがふわいの。北「なんととなへやすの。あるじ「わしがとこのは、南無歯抜のこんぴらさまと。北「イヤおめへもわるくしやれなさる。もういゝかげんにして、はやくおたのみ申やす。あるじ「心得ました。そのかはりわしが療治はちと無禮なことがありをるが、れうけんさんせ。ソレぬくぞ（ト、くちのうちへくぎぬきをおしこみ、北八が顔をあしにてふまへにかゝる）北「アアコレめつさうな、人の顔を足でふまへて。あるじ「ハテそぢやさかい、ことわりいうたのぢや、じつとしてゐやんせ。からせにやぬくのにてたへがないわいの（ト、おもふさま顔をおし付てぐつとはをぬく。）北「アイタヽヽヽ、コリヤもうとびあがるやうに、ヲヽいた〱。あるじ「もうよい〱。コレ〱おかた、そ



のぬるま湯に鹽いれてもてごんせ。サア〱これであとをよくあらはんせ北「エヽ人をばかにした、いかに療治だどつて人の頬を土足にかけてとんだめにあはせた（ト、ぶつ〱こごといひながら、かのしほゆにてうがひしあらふうち、このきんぺんの人と見えたるをとこ、おもてぐちよりすつとはいり、）ヱイ岩龍さまネヤ。あるじ「ヲイ太郎太殿ようわせられた。太郎「わしネヤきのふぶりおまいが、いれ

てくれさしやました歯がナア、ゆるんでいつきにぬけおつたわいネヤ。どうぞばりと入直してくれさしやませ。あるじ「ハテぬけるはずはないがや。太郎「そぢやてゝ見やしやませ。こないにつんぬけたネヤへト、足にはいてゐる下駄を見せる。」北「イヤおめへ下駄の歯も入れなさるか。あるじ「さよぢや。わしいつたい下駄のはいれおやわいの。それからの思ひつきで　人のはもいれをるて。北「エ、だらりこそ鈍な事はしねへ。いまだにやつぱり、ア、いてへ〳〵。あるじ「ナニもういたみはしよまいが、ドレ見せさんせ。イヤアコリヤいたいはずぢや、むしばはぬかいで、ツイそのとなりのはをぬいてのけたわいの。北「ヤア〳〵だらりこそ。ア、いてへ〳〵。あるじ「ドレぬきなほしてあぎよわいの。北「イヤよしやせう　又其となりの歯をぬかれちやアなりやせん。あるじ「そしたらかうさんせ、おまいの歯をみなぬいてあぎよわいな。その中にはむしばもあろさかい、それがよかろぢやないかいな。北「エ、此男はいゝかげんに人をてうさいぼうにしやアがれ、むしばをぬくとつて、何ともないはをなぜぬきやアがつた。もとのとほりにしてかへしやアがれ。あるじ「イヤこなさん、いこはらたてゝおやの。なるほど外の歯をぬいたはこちのあやまりおやさかい、そこへ入レばしてやろわい。さいはひこゝに下駄の不用になつたのがあるさかい、これをいれてやろかいの。北「エ、とんだ事をぬかしやアがる。下駄のはがおいらのくちへ入られるものか、いめへましい。サア彌次さんいきやせう。初手よりか猶歯がいたんで来た。ヲ、いたヲ、いた。彌「ハ、、なか〳〵いゝなぐさみであつた。

　肝心のむし歯はぬかず釘貫に
　　舌をぬかるゝよりはましなれ

かくよみてうち興じたるに、きた八はなま中の事仕出して、いよ〳〵痛みつよけれどせんかたなく、頬をかゝへながらやう〳〵のことにてその日の未の刻過に丸龜の宿、例の大物屋にぞたどりつきぬ。

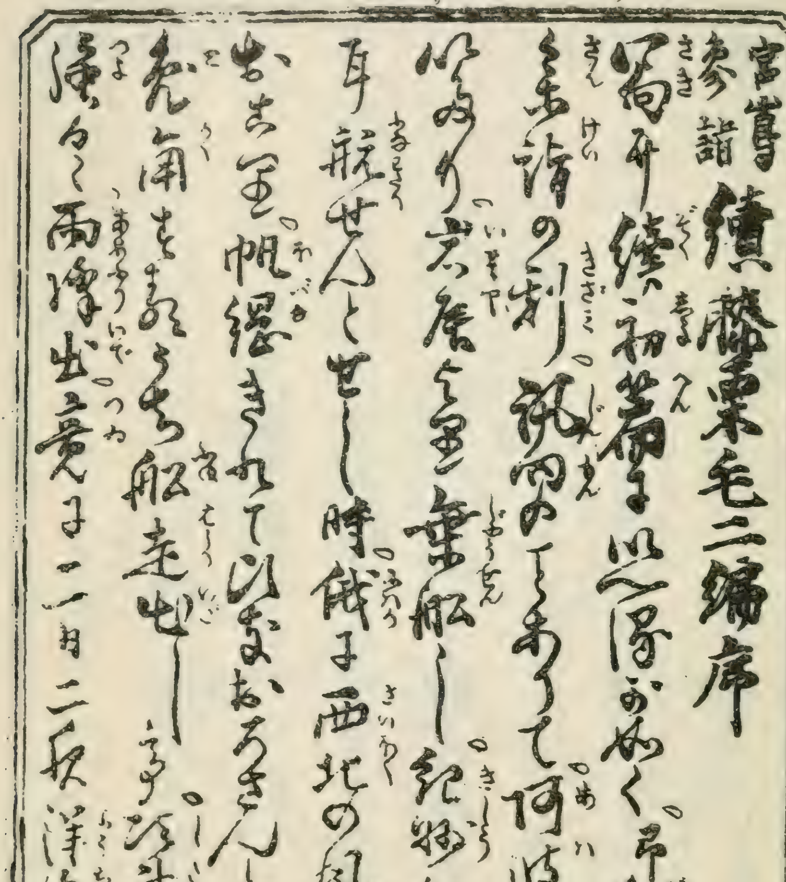
是より丸龜出船して、備前牛窓にわたり播州路のあらまし草稿大かたに出稿有たれど、彫刻出来兼候故、此餘はかさねて木曾街道のはじめにあらはし、御覧に入れ可申候、猶亦相かはらず御評判よろしく奉希上候　はんもと

金毘羅参詣　續膝栗毛初編　下巻終

續談叢書二編

宮嶋参詣続膝栗毛
二編序

嚮に続初編にいへるが如く、予象頭山参詣の刻訊問のことありて、阿波の徳嶋にいたり、岩屋より乗船し、紀州加田の浦に航せんとせし時、俄に西北の風はげしくおこり帆綱きれてひきおろさんとするに兎角するうち船走出して次第に風強く、雨降出竟に二日二夜洋中に漂ひ防州穴



の口といへるに着く。此難澁に遭て、復び乘船を怕れ上陸して浪華に歸る序なれば藝州宮嶋に詣たりしが、(穴の口より宮嶋へ四里)誠にきけるよりは視るに愕れて、拜殿廻廊の莊嚴神々敷、間毎に銅の燈籠をかけたるが日に映じ浪にうつろひて、いふべくも非ず。(祭神天照太神素盞嗚命國常立命大國主命三女神すなはち辨才天とどうたいなり)殊に汐滿る時にして御社の下まで一面にさしくる光景未曾

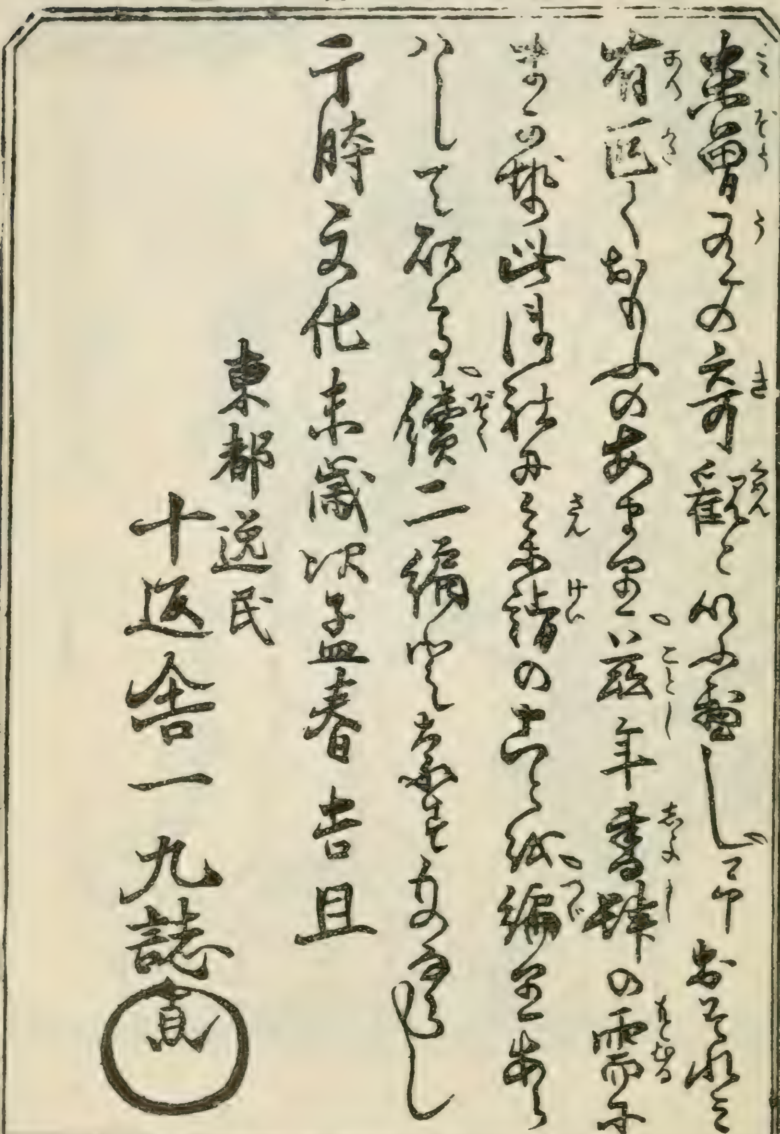
穴の口といへるに着く。此難澁に遭て、復び乘船を怕れ上陸して浪華に歸る序なれば藝州宮嶋に詣たりしが、(穴の口より宮嶋へ四里)誠にきけるよりは視るに愕れて、拜殿廻廊の莊嚴神々敷、間毎に銅の燈籠をかけたるが日に映じ浪にうつろひて、いふべくも非ず。(祭神天照太神素盞嗚命國常立命大國主命三女神すなはち辨才天とどうたいなり)殊に汐滿る時にして御社の下まで一面にさしくる光景未曾

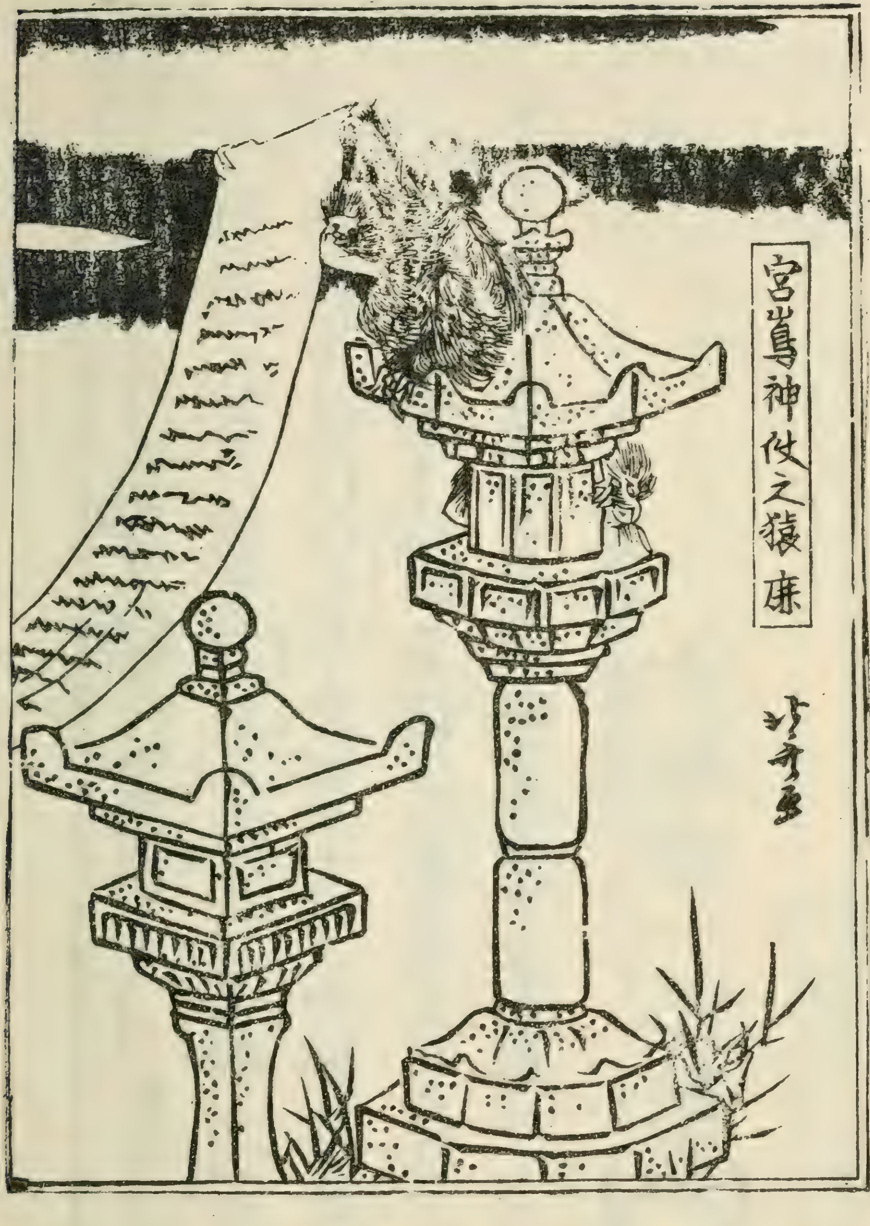
有の奇観といふべし。予おそれみ有[口]くおもふのあまり、玆年書肆の需にまかせ此御社に参詣のことを、編りあらはして以て續二編となすものならし。

干時文化未歳次孟春吉旦

東都逸民

十返舎一九誌




宮嶌神使之猿康


十返舎一九

再演

○此編に備前牛窻より、播磨路を歷て、木曾街道にかゝる紀行を物せんとて、去年上京の序あれば、往來ともに木曾路を通行し、其所限の俚言方語、土人の風俗等を細やかに見聞し、歸著の後、二編の趣向に備へんと思ひたりしが、不期にして予眼病を煩ひ、仲夏の始つ方より漸く初冬に至りて、全く平愈なしたれば、上京の心ざし空しく其事成らずして止みぬ、夫のみにあらず、凡而の著作に後れたれば、此二編今年は出板を見合せ、明年委しく物せんといふに、書肆免さず、急迫にして終に筆を執るに至れり、去に仍つて、木曾路の趣は、今年上京して後の、三編に著すべく、先當春は宮島の紀行を以て、取敢ず出板なしつれども、船中の滑稽、初編に比べて珍しからず、是止む事を得ざればなり。

○或人の曰、去年初編の上の卷に、五太平なるもの船中にして相果てたるは、甚以て奇怪といふべし、凡金毘羅參詣の船に、過なき事世の人の知る所なり、然るを、斯る趣向は如何にといふ、予曰、五太平は急症にて死したり、船の破損に會ひて死したるに非ず、金毘羅參詣の船には過なし、病によりて死するは是非なし、定業なれば、斯る變事も有るべきにや。

○初編に彌次郎兵衞なる者、船中にて象頭山に祈誓し、禁酒したりし事を記せり、されど此卷には、さる體もなく、例の生醉となる事多し、如何せしや、必定再び祈りて、他の物と禁じ替へたるにや、作者も知らず、覽者の批判有らん事、如何にとも詮方なし。

宮嶋参詣 續膝栗毛二編上巻

十返舎一九著

名にしおふ四國七島といへるは、丸亀より下津井の間にして、いづれも怪岩奇石ども多く、古松煙を含み海氣日に輝きて、船中の壯觀いふもさらなり。此頃象頭山に詣し東都の騒客彌次郎北八なる者は、同志の人のすゝむるにまかせ、またもかゝる便宜はあるまじなど思惟して、いざや藝州嚴島に詣んとて、便船に打乘り順風に帆あげて丸亀の湊を出たりしに、七島の佳景一望の中にありて、誠に名畫もおよぶまじき狀態なり。（所謂七島は與島、須彌島、和氣島、出石島、讃岐につけり。立端じま、諸木しま、かましまは備前のかたにつきて見えたり。）

摺鉢の備前沖なる島なれば
めぐりて見たき七の景色

斯てその日の未の刻ばかりに、風凪て漕しほもあしかりければ、下津井といふにいたり、こゝにしばらく船がゝりしけるにぞ。（丸亀より是まで七里）此両士が乗たる船のみにあらず、田口をさして出たりし船ども残らずこの湊にかゝりければ、所の商舟何艘となく漕よせ漕よせ。あきん人「酒のましやませ、がざみのつけやきくはしやませ。かい餅えいかいネヤ。くわしんかはしやませ、かはしやませ。彌「コリャどうしたのだへ船頭さん。北「ホンニつまらねへ、船はもうやらねへのかへ。せんどう「えいおにぎたがあたゞに止で、どうまれからまれしよことがないネヤ（ト、いひつゝそこらとりかたづけ、つりさをなどをいだし、とものかたにてつりをするやうすに、せんちうのり合の人々は思ひ〳〵にあきなひぶねをつけさせ、酒をのむもあり、もちくふもあり。きたはちもあくびしながらはい出て見れば、此あたりつりぶねひしとならびゐたり。）北「コリヤアはじまらねへ、なるほど風がさつぱりなくなつた。船頭さん何が釣れるへ。せんどう「エヽコリヤちぬやへうごがかゝりをる。北「ソレ〳〵なんだかがうてきにひつ込わ。せんどう「エイおんびきとつちやアよいきたな。コリヤアむごい麥藁鯛ぢや、ノウ親がたちネヤ。せうけなと、かゞつなとおくせ。小びるまの肴どもしめたわい。ハヽヽヽ。北「コリヤなか〳〵おもしろい。船頭さんそつちの棹をかしなせ

へ、鮫でも釣てやらう。せんどう「ナニおとろしい。のそつつたら此船がとんぼがへりおや。（北八さをかりてつりをしながら、）「ナアニかまふこたアねへ。まへかた江戸の品川の沖で、わつちらが乗た船がどうしたことかさつぱりあとへもさきへも動かなんだ事があつたが、コリヤアふしぎだと船頭がまごまごしてゐるうち、へさきのむかうへ、によいとあたまを出したその鮫のすさまじさ、乗合が女連だから皆ひとちゞみになつてゐると、船頭がいふにやア、ハアきこえた、此女中のうちで、ひとりあの鮫に見こまれたものがあると見えるから、コリヤ大ぜいの命にやかへられねへによつて、ひとり鬮取にでもして、あの鮫にくはれてやりなさるがいゝといふと、何が女の事だから、それはといつて、泣やら喚くやら大さわぎ。所でおいらが、ばかをいへ今おれがあいつめをしりぞけて見せようと、おつぱだぬいでへさきへ出、コリヤ鮫のべらぼうめ、ふてへやつだ。おれを誰だと思ふへ。あづまつ子のはへぬきだわ。くそがあきれる。アヽつがもねへと、ぎつくりやつて白眼だら、その鮫がこそ〳〵と迯て行をつて、それからは船がずる〳〵。ナント奇妙ぢやアあるめへか。せんどう「ソリヤふし



ぎぢや、ノウおまへ眞人間ぢやありやせまいネヤ。北「ナニおいらが神でも佛でもねへけれど、その時分は蒲鉾屋をして居たからさ、ハヽヽヽ。イヤかゝつたぞ。せんどう「ふといものぢや、ぼしぼしとあげさしやませ。北「ヲツトしめた、コリヤ鰒だ/\（ト、中ぐらゐの鰒をつりあげた所が、此魚はつられると、腹をたてゝふくれかへるものゆゑ、はらいつぱい飴の鳥の如くふくれてゐるを、板のまにうちつけやう/\はりをぬきとり、）北「ヲヤまだふくれてけつかる、コリヤ妙だ。彌次さん/\ちよつときて見さつし。はやく/\（ト、よび立られて彌次郎たちいで、）彌「ヲヤ/\手めへ釣たのか。コリヤおもしろへ（ト、見てゐるうち、やう/\ふくれたはらをへつたりとしてよわる。）北「もう腹がへこんだの。まだしにはしめへ。彌「ナニまだ動くわ。もう一度ふくらして見よう（ト、なんのれうけんもなく、かの鰒をつかんで、鰒のくちへおのれがくちをおしあて、あめのとりをふくきになりてぷつ/\といふと、鰒はまたはらをたて彌次郎のくちのはたへしつかりとくひつく。）



彌「アタヽヽヽ。北「コリヤどうしたどうした。せんどう「エイふぐとうどものくらひついたは離れぬもんぢや。おろよい事さしやました。北「ハヽヽヽ、コリヤ出來た/\。彌「アタヽヽヽ（ト、ばか

りほかにものがいはれず、とつてくれといはぬばかりに、手を合せてをがみたのめども、みなわらひてばかりゐてらちあかねば、彌次郎大じれにじれて、ぐつとひきはなすと、うはくちびるもしたくちびるも、ちだらけになりければ、）せんどう「アヽぼた〳〵と血がおちる。たばこなとつけさしやませ。

彌「いめへましいことをした。アヽ痛くてならねへ（ト、胴のまへはひこめば、のりあひのうちに西國がたの醫しやどのゐ合せ、）醫者「ヽかなそがいにえずいことさしやれた。北「ナニサ鰒に喰ひつかれやした。氣のきかねへ。醫「ひどういたむおやあろ。いろはずにおかしやれ。身共よか事してやらなんばい（ト、ふろしきづゝみのくすりばこをいだし、かうやくを紙にのばす。）彌「モシ大きな紙にのばしなさる、そんなに疵が大きうござりやすか。醫「見やしやい、そがいに口さなへぐるりいちめんに、鰒とうどもの齒のあとがほげたぢやなかばい。北「ホンニいち〳〵膏薬をはるもめんだうだ、べつたり壺まいではるがいゝぢやアねへかへ。彌「アノ口まではりふさぐのか。北「さうさ〳〵。彌「つまらねへことをいふ。それぢやアものがくはれねへ。醫「よかばい〳〵。くちさなへこがいにしてやらんばい（ト、かうやくをのばした紙のまんなかへ、くちの出るほどあな



をあけて顔にべつたりとはり付る。）北「ハヽヽヽこいつは奇妙な頬になつた。賢「どつくうどものつらさなへ煙艸どもふつつけたやうに、ぶつさうづらぬたのごとしツハヽヽヽ。彌「おもしろくもねへ、とんだめにあつた。

禍ひはげに口からとくはねども
かゝる毒魚にあたりはづかし

折ふし西北風の吹出たりとて纜を解て船出し、やがて備前と備中の境にいたる。北は玉島南は備前の水島なり。此あたりより備後の白石までを水島灘といふなりとぞ。

あぶなげもなき日和とて悠々と
蛙のつらへ水しまの灘

順風ながら殊にはげしく吹出して、船は矢よりもはやく瀬溝白石を打すぎ、火ともすころ備後の國柄の湊に至りける。（下津井より是まで九里餘）此あたりにすぐれて繁昌の湊なれば、陸の方家居千軒あまり建つゞき、往來しげく賑に見えたり。せんどう「ソリヤあただに來たぞ／＼。みよしの親仁「とりかぢとりかぢ ヨウソロウ／＼。かぢのおと「ギイヽ 引ほづなのくるま「カラ／＼／＼／＼。（此うち入船をみかけて、風呂をしこみたる小舟をこぎきたり、）「はやうごんした。湯どもあぢやうしうわいたケニ、いらしやませ／＼。北「アリヤア湯舟ぢやアねへか。一ぱい這入う、彌次さんどうた。彌「よからう／＼、マア手めへはいりやナ。北「コウ湯舟のとつさん、はいるべいか。湯舟のせんどう「サアござらしやませ。北「きものはこゝへぬいでゆかう。（ト、ゆぶねをつけさせ丸はだかになり、むかうの舟へとびのりながら）北「コリヤどこからはいるのだ。ゆぶねのせんどう「ひき戸あいてあるケニ、からだほとばかして、はいらしやませ。北「ヲツトよし／＼、こいつはとんだ輕少な湯だぞ。ゆぶね「じやうらくんでござらしやませ。まてな人デヤ（ト、此うちあきなひぶね）「やれいたのましやませ、餅くはしやませ。並酒紙蠟いわう薬茶いらしやませぬか。よろづやア／＼（ト、此ふねこぎよせ、湯舟のせんどうを見つけて、あきない舟のせんどう）「イヤアこのできめ、こんぢうの錢おくせ。ゆぶね「なんの事でや、どろめざこと酒の錢かい。あんなげもみないものくはせてケニ、此ほいとうめが。あきないぶね「ナニほいとう、こやつほてはらどものにえる事をぬかしをるテヤ。おらが酒たゞくらひをつて、おどれはじらぢやろ、膝の皿くれつけるぞ（ト、盗人舟のさほをふりまはし、りきむ所へまたあきなひぶね二三ぞうこぎつけ、）「イヤアそや

つは湯舟の太九郎どもデャ、うらが錢もかけておくさぬ。おろよいことしをるケニ、打ころせ〳〵(ト、五六人さををふりあげうつてかゝるに、ゆぶねのせんどう大きにうたれながら舟をこぎいだし、さつさつとにげてゆく。)商船「ヤイ〳〵はしるな　できのぼうめ。かへせ〳〵。ゆ舟「ほいとうどもヤアイ〳〵、あほよ〳〵(ト、わめきながらはるかににげのびる。北八はゆの中からくびをさし出し、此けんくわを見てゐたりしが、)北「コレ〳〵せんどうさん、こなたにげるはいゝが、おいらがつまらねへ。湯がぬるくて風をひきさうだ。もうあそこへつけてあげてくんねへ。せんどう「イヤあんなげに大ぜいゐをるケニ、うら又あこへいたらうち殺されるデャ。おとろしい〳〵。北「そんならおいらはどうするのだ。せんどう「こゝからずりこましやませ。引汐ぢやケニ、いつきにあこへながれつくぢやあろデャ。北「エ、とんだことをいふ。ハアクッサメ、そりや風をひくわ。エ、こなたおもひの外弱虫だ。何のかまうことたアねへ、やらつしやいな。せんどう「またしやませ、アノできどもが、いんまにあこを遁るケニ。もうよいサアサアやりましよ〳〵(ト、湯舟をもとへこぎもどせど、かゝり船多くならびて、いづれやらわからず。)せんどう「ハアコレハあ



んなげやらこんなげやら船がしれないケニ、よばしやませ／＼。北「エ、とんだめにあはせる。ヲヽイ彌次さん／＼、どこだ／＼。彌「きた八か、爰だ／＼（ト、いふをあてにこぎつくれば、北八さうさう、もとのふねへとびこみ、）北「ア、さむい／＼、いめへましい目にあつた（ト、こどとたら／＼きものをきてゐるうち、乗合のひと／＼、此みなとの遊女町けんぶつせんとて、おもひ／＼に出ゆくにぞ、彌次郎北八もともにしたくして小舟に打のり、くがのかたへあがりてみれば、）此湊商家いづれも美麗にして、世に備前焼といふ陶器、保命酒、疊の表、七嶋莚など名物なり。町屋をはなれて濱邊のかたに、裏町どほりとて遊女屋のあるところに出れば、女どもかどぐちにならびたちて、女「あのさんおよりなさんせ、おあそびなさんせ（ト、彌次郎北八をとらへてひつぱる。）北「コリヤ／＼つれがさきへいつた、はなせ／＼。女「彌助いひなさんせ。おふたりつんのうてぢやろケニ、おはいりなさんせ／＼（ト、大ぜいよりてむりむたいに、ふたりをひきずりこむ。）彌「どうしよう、きた八氣があるか。北「しかたがねへ、ちよつぴりあがらうか。女「サアおいでなさんせ（ト、うちつれておくの中にかいへとほれば、あそこ爰のさしきにて、引たつる三みせんのおと、）



「チャンチャチャンチャンラ〳〵。げい子のうた「るゝてるてしよ、かまくらめつきりしよ、めきりめつきりしよ、よゝふく風に、ふくかゝいろ、おりしよ〳〵、さはりこ〳〵、でん〳〵くりでんのぼ、なゝんしよ、なんのぼ、すぎなはての三ぶくつる、つんさいろ、きやらもどきのりん〳〵、いとしうてならぬへ、ャンャ〳〵。北「ハヽヽ、こいつはねつからおもしろへ。時に座敷はどこだ〳〵。女「爰にゐしかりなさんせ。彌「コウ女中此うちは何屋といふ。女「まんぢうやといふケニ、是から來ておくれなさんせ（ト、此うちさかづき出、さけさかないづると、わかいものめきたる男さきにたちて、あさのころもをきたる、だうしん坊主をつれて來り。）若い者「コレハようお出さしやました。此坊さまは當所盆德寺の觀音堂建立さしやますケニ、お客さまたちへ多少によらず奉加どもお願申ますデヤ。彌「アイ寄進につけとかへ。とはうもねへことをいつて來るハヽヽ。少しばかりだが十貳銅はづみやせう。だうしん坊「コレハ御太義でござらしやます。回向しましよ。只今のお心ざし現當二世安樂先祖代々の諸精靈、安養極樂佛果菩提、なむあみだぶつ〳〵（ト、ゑかうして出て行。）北「なんのこつた。女郎買に來て、回向におふも珍らしい。若もの「モシおごうさま、おやまさまはどなさんども出さしやます。女「ホンニお客さんがた、どんなげな子がようござります。彌「なんでもいゝからはやく出しなせへ。女「コレ金太どん、筆鶴さんと琴浪さんをおこづつて來さんせ（ト、いひつけてやると、そのふでづることなみをつれてくる。ふうぞくは田舍めきたれども、ふたりながらいたつてのきりやうよし。座につくとさかもりになり、おもしろをかしくもてなさるゝをりから、らうかのかたにて此家の女ばう、しんさうをとらへて、女「コレコレ春部野や、わごりよはそんなげにぶつさうづらしてなんの事でや。うらがいふことをどうまれかうまれと、ほてはらのにへる、おだれ下のむぐろもち見るやうなつらどもしてケニ、もうちかづき男ぢやの、戀ぢやのとほたへまはるげな。おいてくれ、コヽナけんたんめが（ト、よこつらをひとつくらはせて、かつてのかたへゆくと、かの女郎はわつとなきだして、おくのかたへ走りゆく。彌次郎兵衞北八があそびゐるとなりざしきの客は西國がたのお侍にて、このはるべのきやくなれば、女ばうの太へいらくにあひかたの女郎、へこまされしをきゝてはらをたて、むしやうに手をたゝく。）男「エイお呼しやりましたか。士「コリャ〳〵わがたうどもにはい

ろはぬ。こゝのばばう女にづれといへ。身どもこんがいにさんてつまごらでいふぢやなかばい。春部野は身共が買うた女郎どもぢや。則今晩は身がおとも女郎・御妃も同前ぢやテャ。むぞうげにあゑがいふとい聲ぶちあげて、おぐりをるは、身どもに對して失禮ぢやなかばいか。別當よべ、きかないぞ〳〵。

男「エイあれは、こゝもとのおごれんでござらしやます。はるべのさまをひからしやましたが、お氣にあたらさしやましたら、御ゆるさしやまして下さりませ。

圭「イニャすまない〳〵。それにきけば其おごれんが、はるべのどもに對してぬかしをるには、ちかづき男ぢやゝ戀ぢやのと、ぐぜごとぬかいたは、身どもにあてつけてぬかいたに相違なかばい。身共客ぢやぞ。傾城遊女どもと色戀する身がたうでない。金錢をもつて求る客どもにむかつて、あんがいおろしいことぬかいてよかばいものか。づくにうにやしつけてやらんばい、別當こゝへづれといへ。づらにや身どもからづらんばいか。サアづるぞ〳〵(ト、もつての外のはらだちに、したくして出かけるを、男いろ〳〵になだめるうち、あひかたはるべの來りて、さま〴〵わびごとしてやうやうとをさまり、あとはひつそりとしづまりたるに、)

彌「ハヽヽヽ、いづくのうらでも、あんなに野暮をいふ人があるものだ。時にもうさかづきはおつもりかよからう。おめへがたも退屈だらうから(ト、こよいのあひかたいづれもうつくしきに、ふたりはえつに入、女郎のきげんをとりてさかづきをさめると、やがて女のあんないにつれてとこへはいる。彌次郎のあひかたは筆づるなり。)

彌「サアもつとこつちへよんなせへ。わつちらア遠國ものだが、斯して所々をあるいて見ると、おめへがたのやうな美しいものも、あればあるものだ。

つる「彌助いひなさんせ。おまいさんのくちのねきは、なんとなさんしたへ。

彌「コリヤアあんまり鹽辛いものが好だから、しほかぶれが出來たのだ。

つる「あじやらいひなさんせ。ちかづきの女郎さんがたに、くひつかれなさんしたものぢやあろ。おまいさん肌着一つになりなさんせ(ト、おびをとくゆゑ、彌次郎こよひこそおもしろだぬきのはらつゞみと、にこ〳〵ものでゐるうち、をとこはしりきたり、)「筆鶴さま〳〵、ちよとござらしやませ(ト、よびいだしてつれてゆく。屛風ひとへへだてゝあちらはきた八)「どうだ彌次さんおつりきだの。

彌「いめへましい、今どこへか行をつた。

北「おいらが女郎も内證から呼びに來ていつた

か、おめへの女郎とおいらが女郎はほんたうの兄弟だといふことだ。彌「道理こそよく似てゐるとおもつた。それぢやアおれが姉聟さまだな。ハヽヽヽ（ト、此内ふでづるかほにそでをあてゝ、しく〳〵なきながらきたり、）「お客さん、うらもうかなしいことが出來をりましたわいな。彌「なんだ、どうした〳〵。つる「うらのてゝらさんが、きのふてり死なさんしたと、今いうておくしたわいな（ト、すゝりあげてなく。）彌「てゝらたアなんだ。つる「うらの男親ぢやわいな。彌「ソリヤアちからおとしだの。つる「ほんにうら、たんだひとりのてゝらぢやケニ、かなしうて〳〵、つんのうてお出なさんした、あちのお客さまへ出た子も、うらが妹ぢやケニ、かなしぼがつて下におちんでないておぢやわいな。彌「ソリヤもつともだが、しかたがねへとあきらめて、マア爰へ來て寐るがいゝよ。つる「ほんに此正月てゝらさんが來なさんした時、いひなさんしたは、うらこんなげに病身ぢやケニ、お身たちやつと灸でもすゑて、病ぬやうにせいといひなさんしたが、その時ほつたりと涙をこぼしなさんしたを、今目のさきに見るやうぢやわいな。彌「さうだらう〳〵。つる「こんなげになることはしらず、ぶつさうづらして、ひどうつらく



て、てらさんへあたりをつたが、おろよい事したわいな。彌「さうだらう〳〵。おめへかゝさまはなしか。うちはどこだ。つる「此むかうべりの飛鳥嶋ぢやわいな。彌「なんならあした、わつちが寄てやらう。親仁どのの名は何といふ。つる「彌次郎兵衛といふわいな。彌「なんだ彌次郎兵衛とか、ハテさて似た名もあるものだ(ト、此うちはうばい女郎はつ風來り、)初かぜ「筆衛さん彌次郎兵衛さんが死なさんしたさうぢやが、どうまれなさんしたのぢやな。つる「昨日てり、宮嶋へいきなさんすとて、船からおちて死なさんしたげな。初「アノ彌次郎兵衛さんが宮嶋へいきなさんすとて、船で死なさんしたぢやへ。どうまれした事か、彌次郎兵衛さんと名のついたお人に、直な者はないわいな。うらが在所にも彌次郎兵衛さんといふ人がありをつたが、瘡を病でくちのねきがうじようらうじようらと崩れてぢやケニ、おごれんさんがほかにちかづき男をつんなうてはしつてぢやを、その彌次郎兵衛さんが、ほてわるうして、氣が間違うて首つつて死なさんしたわいな。彌「エヽこいつらは、おれが默つて聞てゐれば、いめへましいえんぎのわりい事をぬかしやァがる(ト、すこしこわだかにいふと、びやうぶのあちらよりきた八とんでいで、)北「どう



したく〳〵。彌「コウきた八、今夜ァどうせはじまらねへ晩だわへ。この女郎のひやうたくれめが、親がしんだとつてめろ〳〵と、ほえてばつかりゐやァがるっ北「イヤおいらが女郎もそんな事をぬかしていきをつたが、今にうせをらねへ。是から見立なほしにして親のしなねへ女郎を買うぢやァねへか。彌「いめへましい、もう歸るべいか（ト、立あがれば、そでにすがりおしとめ。）つる「お客さんがた、そんなげにほてはらたてて通なさんすと、うらひかられますケニ、堪忍してくれなさんせ（ト、はうばい女郎もろともいろ〳〵なだめるうち、きた八のあひかた女郎もきたり、さま〴〵あやまりわびけるにぞ、彌次郎きた八も心のうちには、さすがこのまゝにてかへること殘りおほきほどに思ふことなれば、とめるをしほにきげんをなほせば、女郎どももおちつきたるやうすにて、かなしきなかにもせんかたなく、ゑがほをつくりて二人を又、とこのうちにいさなひ、びやうぶひきまはすをりしも、いづくともなくほらのかひをふく音、ぶう〳〵ときこゆる。これはかゝりふねの出るをしらするためなれば、此うちにとまりあはせし旅人すはや船の出るぞと、にはかにおきたちうろたへさわぎて、たちかへることなれば、さしきさしきのばたくさ、廊下のあしおとやかましきに、彌次郎は何事やらんと、あたまをもちあ



げ」彌「コレ〳〵アノ人のばた〳〵さわぐはなんだらう。つる「アリヤナ、船のづるしらせのほら貝がなつたケニ、お客さんが皆いになさんすのぢやわいな。彌「ナニ船がもう出るか。つる「こゝにかゝつてをる船どもの、づるしらせぢやケニ。彌「ホンニぶう〳〵と螺の貝がきこえる。コリヤ北八〳〵船が出るとよ。北「ソリヤたまらぬ、もちつと遲く船を出せばいゝことに。彌「ソリヤおたげへ長左衛門だ。仕方がねへ、サアいかうか（ト、思ひきりておきたち、したくしてうろたへまはり此内を立出とちうにて、）彌「ばんくるわせな目にあつた。北「さうさ、どうでもおいらは女にやア縁がないと見える。もちつとの所で本望とげずにしまつた、殘ねんな。そのかはりコレ見なせへ（ト、たもとから人形に着物をきせたるを出し見せる。）彌「ヲヤ〳〵どうしたのだ。北「ふんばりめが、此人形を抱へてきやアがつて、宵に蒲團のあひだに入れておきをつたを、あんまりいめへましいから、歸りがけの駄賃にはへつけて來たわ。北「かはへさうにとんだ事をする男だ（ト、此はなしのうち、ふなばへ來り丸龜のふねをよびて乘うつれば、乘合みな〳〵食事などしてゐるに、ふたりもとも〳〵したくしてしまふうち、せんどうは出ふねのこしらへをしてゐたりしが、又には



かに風あしくかはるやうすに、しばらく船出を見あはせけるうち、夜はほの〴〵とあけにける。乗合みな〳〵よも山の話しのうちに、大坂の人）「モシナおえどのお衆、夕アはえらいもてくさつたの。北「おめへどうしてそれをしつて居る。大坂「おまいがたのいてぢやまんぢうやへ、わしもいたわいな。そぢやさかいようきいてしつてゐるわいな。北「ソリヤ面目次第もない。大坂「アノおまいのあひかたは、としは若いがえらい評判のおもしろいおやまぢやげな。北「イヤもう、まんと手のあるしろものさ。あたまからほれたとかなんとかいつて、イヤもう〳〵ちとおはなし申にくいほどもてやした。それといふも、あそび一ト通りには如才のないわつちだから、おもいれかきのめしてやると、ほんたうにしをつて、ホンニたつた一ト夜さでもまんざらでないとおもふ客は、あつちもたのしみだと見えやす。大坂「さよぢやわいな。北「そこで今朝の別れにほえだしをつて、とても又お目にかゝる事はあるめへから、是をわたしが記念だとおもつて持ていつてくれろと、コレ見なせへ此人形をわつちにくれやした。ハヽハヽ（ト、此はなしの内ゆうべの女郎ふで鶴、琴なみふたりうちつれ、男どもにこがせて小舟に打のり、むかうより來ると見えたり。すべてみなとの遊女は、船の滞留を見かけては、ふみを遣して客をむかへ、又其身みづからむかひとして來る事なれば、それらのおもむきにや、こなたよりとほ目に見つけて、）大坂「ヒヤアなんぢややら、うつくしさうな玄妻めが、見えるわ〳〵。北「ヤアゆうべのだ〳〵。コレ彌次さん、おめへのあひかたと、おいらがしろものが、むかうへ來るわ。大坂「それかいな。ヲヽイ〳〵（ト、手まねきすれば、かの小ぶねをこぎつけて、こなたのふねへ乗うつり、せんちうへそれ〴〵にゑしやくしてすはる。なか〳〵湯あがりのうす化粧に、かの夜ぜんよりのしうしやうにや、雨がんをなきはらせしは なほ〳〵うつくしく見えたり。）つる「モシィ風がおろよいケニ、けふてりは御逗留ぢやあろ。おむかひにずりをつたわいな、サアつんのうて來てくれなさんせ。北「イヤ〳〵もう、御めんだ〳〵。大坂「モシいてあげなされ。おまいは、いまのおはなしのわけもあり。彌「ホンニ琴浪さんとやら、おめへこの男に、いいものをやつたの。琴「なんでや。うらあのさんにあげたものはないわいな。彌「かくすもんだの。北八今のを見せやれ。北「アヽコレ、とんだことをいふ。コリヤもう、そんな事いひつこなしさ。大坂「ハテいうてもだんないぢやないか

いな。わしはいふわい。北「コレサ〳〵それをいつて、たまるものか。をがむをがむ。琴「なんでや、いうてきかしてくれなさんせ。北「イヤ〳〵誰もいふめへぞ。彌次さんなぞは、何もかも承知で居ながら意地のわりい（ト、目まぜでしらせながら、かの人形をうしろのかたへかくしおきたるを、そろ〳〵たもとへ入にかゝる。琴浪ちらと見つけて、）「モジイ、そのできのばう、こちおくじなんせ（トとびついてひつたくれば、）大坂「その事〳〵。おまい今朝、此おかたへ記念ぢやとおもうて、持ていんでくれてゝ、あげなさつたぢやないかいな。琴「あじやらいひなさんすな。このできのばうは、うらが大切ないのぢやケニ、ようべり、蒲團のあひだにおいたもの、あのさんがぬすんでいになさんしたのぢや。えずいことデヤ。うらこのできのばうがないと、おろよい事があるケニ、とりかへしにづりをつたわいな（ト、いふはすべて、これらの女郎の爲になる大事の客といふは、皆大船のせんどうなり。をり〳〵そのみなと〳〵に來り、なじみの女郎へつかわしたる品、いつにても其客のきたりしとき、見せざればがてんせざること、せんどうのならひにて、みな〳〵かくすること故、此人形も琴浪がためになるせんどう客に、もらひし物と見えたり。さるによりてその客の來らんとき、人形なくてはたちまち、客の手まへをしくじること故、たしかに北八のとりかくしかへりしとすゐりやうして、姉女郎といひ合せ、人形をとりかへさん爲に、わざとむかひに來りしと、いつはりしものと見えたり。）大坂「ハハヽヽヽ、スリヤ、おまい貰うてごんしたのぢやない。破端な事さんすお人ぢや。手まへてごんしたのぢやな。コリャやくたい〳〵ハヽヽヽヽ。つる「うらてゝらさんの死なさんしたケニ、今うちへづるのぢやわいな。皆さんおさばへ（ト、いとまごひして、もとの小舟にのりうつれば、男ろをおしぎりて、あすかじまのかたへゆく。これは此女郎の親もとへゆくと見えたり。彌次郎兵衞をかしさをこらへて、）

塗立の胡粉じたての人形も
　そろ〳〵はげてきた八の咥

此狂歌に船中みな〳〵北八の顏を見て、どつと笑ひを催しける。やがて風なほり汐もよしとて、船頭ども帆を引きあげ楫とり直し、此湊を出るとて、鞆の明神のかたを、みな〳〵遙拜して、

青疊敷たるやうな備後沖
　居ながら拜む神のめぐみに

かくて船ははるかに沖なかにはしり出、前觀音飛鳥嶋をうちすぎ、阿伏兎といふところにいたる。爰に海潮山磐臺寺といふ寺あり。其庭より廊下の礎

道をのぼれば、海岸のうへに觀音の堂のたてるあり。彌次郎北八は乘合の人人と、倶にこゝに參詣し見るに、山の尾崎海底にのぞみたるうへに、常夜の燈籠あり、觀音堂より見おろせば、白浪足元に涌かへりて、目も眩き、足の骨もかゆきばかりに、

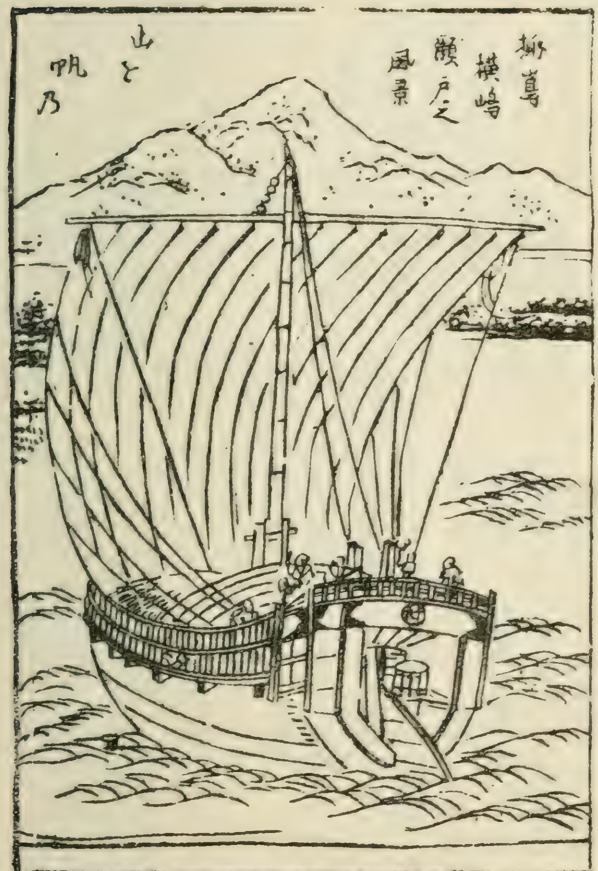
　石垣はさながら蜂の巣にも似て
　　光明のさす阿伏兎觀音

かくて此所より、年の頃五十歳あまりの和尚めきたるが、供の男に着がへやうのもの、そのほか一升樽に、藁苞などを一荷にもたせ、宮嶋のこなたまでゆくものなりとて、便船を乞ふに任て、倶に打乘せ船を漕出しつゝ、矢嶋を過ぎて田の嶋といふにいたる。桃嶋しなき嶋などいふあたりより、伊吹嶋、丸龜嶋、股嶋すべて此邊を横嶋の瀬戸といふとぞ。

　行船は竪横島の瀬戸なれや
　　かすみの糸におれるしら浪

宮嶋參詣 續膝栗毛二編 下卷

かくて阿伏兎を乘出し、横島の瀬戸をわたり、繪の島沖の島のあたりにいたりし頃、西國方の御大名の御船なりとて、紫の幕打まはし、鳥毛の鎗馬印など舳のかたにおしたてたるが、紅白の



吹流し風にしたがひ、空にひるがへりて美々敷いさましげに見えたり。此おん船を小船あまた二行にならび、艪拍子をそろへてひきわたすさまめづらしく　板子を踏ならす音「グワタン〳〵」。(みよしのおやぢ、さいはいうちふり、ふなうたのおんど)「めでたの〳〵エイソリヤ、若枝もエイ〳〵エヽイエイ、枝もさかえ葉もさかえ、納る御代のナ、鶴はちとせよ、龜は萬年や。エイソリヤお船は玳瑁水晶琥珀や、ヤヨエイヤたん〳〵玉の光ノンキヽヨウコン唐木づくりノホンホホンホウほゝほんいよへヱイコノ「グワツタン〳〵。　彌「ナントはなやかなもんぢやァねへか。　北「さうさ、いゝ見ものだ。是を肴にかういふ所で、一ッぱいやらかしてへものだ。大坂もの「さよぢやわいの、とんとわすれてのけた。酒買うて入れて來たらよかつた



わいの。彌「せつかくわすれて居たものを、わりいことをいふから呑みたくなつた。船頭が酒をもつて居るか、きた八きいて見さつせへ。北「イヤ奇妙なことがありやす(ト、かの和尚がぢさんの酒樽へ、ゆびをさすゆゑのり合みな〳〵これを見れば、いつのまにやらをしやうも供の男も、ふなばたにもたれて、たわいなくいびきをかいてゐる。)彌「コリヤおもしろい。アノをしやうが目をさまさぬうち、そ

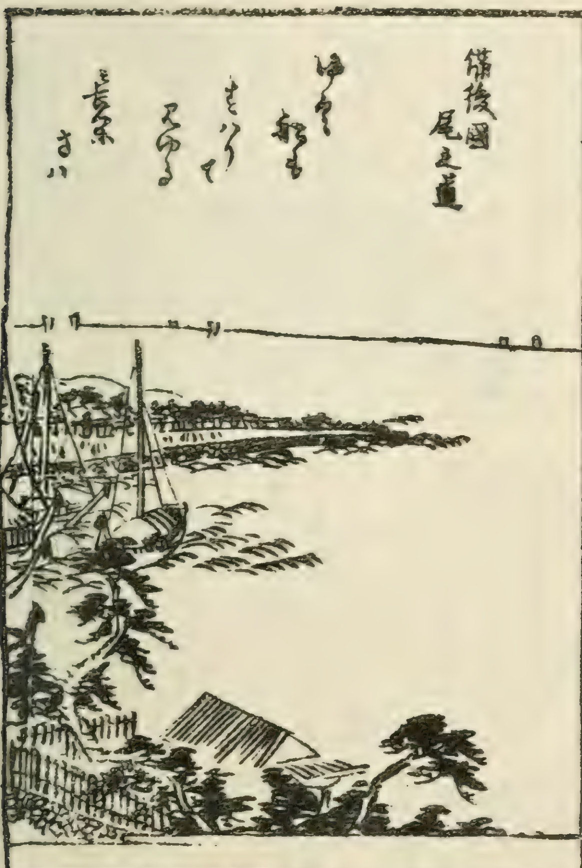
つと樽をはづしなどはおつりきだらう。北「おいらがいゝやうにする。しかしなんぞいれものがほしい。大坂「わしこゝに辨當箱のあきがらがある。よう洗うて置たさかい。彌「ゆうべの人形の手並で見た。はへつけることは北八の得手ものだ。そつと手めへ合點か。北「しようちのすけ承知のすけ。しかし何も肴がねへの。彌「イヤ肴はおいらがにらんでおいた（ト、をしやうが供のかたげ來たりし、わらづとをそつとはづしてひきあけ見れば、）「コレ見なせへ生嗅ばうずめが。蛸のあしを三本まで御持參はありがてへの（ト、中にて大きなるあしを一本はづして　わらづとはもとのごとくになしおくと、此うち北八はさか樽をゆひつけたるなはをときて、べんたうばこのなかへどく〱〱。）北「ヤアこれは、水のやうな酒だわへ。大坂「とうせ並酒ぢやあろ、しよことがない。モウよかろ〱（ト、五合ばかりもつぎとりて、これももとのごとくそつとなほしおき、）北「サア〱どなたぞはじめなせへ。彌「おいらが毒味いたさう。ヲトヽ、ヽ、ヽ、アヽコリヤさつぱりいけねへ酒だ。大坂「ドレ〱ほんにもむない。ひとくちもいけんわいの、ペツ〱〱（ト、いひつゝも、ひだるい時のまづいものなしにて、こゞとをいひながらさへつおさへつ、茶碗酒のぐい〱のみ。此うちふねは高井百貫のあたりをうちすぎ、尾の道にぞつきたりける。鞆より此所まで五里餘。）此所北東は山にて、みなみは入海の湊なり。鞆よりは猶まさりて繁昌の地なれば、よろづの商家殘るかたなく、殊に築出しの新地には、遊女町などありて、中國第一の湊なりとぞ。

日の影は青海原をてらしつゝ
光る孔雀の尾の道の沖

これより鯨嶋をうち過ぎ、南の方山伏の瀬戸めかりの瀬戸、鼻ぐる瀬戸なんどいふを見つゝ、砂見嶋、能地嶋をすぎて、瀬戸田といふあたりにいたりし頃、（かのをしやう目をさまし、）「コリヤ久三ネヤ、目をあけんかい。もうどこもとへづりをつたぢやあろ。久三「エイ何ちうどもいふところか、ばゞいくてよう見えませぬわい。をしやう「一盃やろかい。こりやそのすぼどもてゝへづらせやい。久三「エイこれかネヤ（ト、かのわらづとをとりいだせば、和尚中をひらき見て、）「コレ久三ネヤ、わごりよは、此どうひんども喰やせんかい。久三「エイ、うらいろうても見ませぬわい。をしやう「おどれ嘘かたりをるネヤ。三本の足ども二本あるわい。しかもノヲふといあしがないわい。おどれくらひをつたぢあやろ（ト、供の男を大きにしかるを見

て、こなたには心のうちにをかしく、今にまた酒樽を見ておこるであらうと　目ひき袖ひきして見てゐると、をしやう）「コリヤその酒どもこゝへづらせ。時に乗合のお衆、酒一つどうぢやいな（ト、いふに、みな〳〵せんこくの悪酒にこりはてしことなれば、）彌「ハイ有がたうござりやすが、一向無調法でござりやす。をしやう「そつちやのねきのおかたは。北「イヤわつちも下戸で、一雫も下さりやせぬ。大坂「いひあはせたやうに、みな不得手でござりますわいな。をしやう「ソリヤいかな事。さけといふものは、相手がなうてはいかんものぢや。どうまれかうまれしよことがない。コリヤ久三、ついでたもれ。久三「エイ〳〵。をしやう「コレ〳〵その樽ぢやない。ソリヤ彦十が折角たもつたが、あこの手造でもみない。こがいな船どもで、その酒呑をつたら、頭痛がしてたまるものぢやないわい。包の中の竹筒どもづらせやい（ト、さしづしてふろしきづゝみをあけさせ、すゐづゝをだしてつぐ。）をしやう「ア、是は格別えい酒ぢや、うまい〳〵。エ、お客がた、みな下戸で殘多い（ト、したうちしてうまさうにのむを見て、今さらすきだともいはれず、せんこく悪酒をのみたるをくやしく、彌次郎北八はのどをぐひ〳〵としてゐるうち、かの手づくりの酒のゑひあたまにのぼり、づつうおこりてこらへられず、）彌「イヤもう下戸の正銘、酒を見てさへ頭痛がして來た（ト、はちまきをすれば、）北「わつちもなぜか頭が破れるやうになつて來た（ト、おなじくはちまきをする。大坂者はかほをしかめはらをかゝへ、）「ハアわしやなんとしてやら、腹がぐはら〳〵となつて　むしがかぶるやうぢやわいの。ア、じゆつない〳〵。をしやう「コリヤおまいがた、よく〳〵のきらひぢやな。そしたら爰もとにえいものがありをる。かい餅やらんせネヤ（ト、小重箱ひとつ出すを見れば、ぼたもちなり。彌次郎もとよりいぢきたなく、なんでもござれといふどろばう上戸なれば、ひとつとりて、）「コリヤうまい〳〵。北八どうだやらねへか。をしやう「それもネヤあぶとで貰うて來をつたが、わしきらひぢや。遠慮なしにどうばりと、みなくうてしまわんせ。北「なるほど彌次さん、おめへは盗人下戸だぞ。なんでもよくとりこむわ。しかしおいらもひとついたゞきやせう。コリヤうまいわ。彌「コレお供の衆の分はのこしておきや。久三「イニャうら、そのかいもちむさいけに、ようくひませぬ。彌「ナニこれがむさいことがあるものだ。をしやう「むさいとも〳〵。きかんせかうぢやわい。阿伏兎のわしが念

頃にする所へいたら、かいもちこしら
うてぢやあつたが、そこのうちのおご
れんどのが、葉釜の中のかいもちを、
まはし木もつてついてぢやねきに、ち
つさめが這をつてあそびをつたがネ
ヤ、ちやうどさいこづちのあたま、こ
ろばかしたやうな屑どもふたつ三つた
れをつたを、御亭が見て、コリヤむさ
いことしをつたと、その屑どもせんば
もつてひつさらへて、ほかしをつたは
えいが、まだそこに、へばりついてを
る上へ、おごれんのついてをるかい餅
が、ひよいとはねづり出をつたを、手
ですくうて葉釜の中へ入れをつたが、
そのすくうた餅へ屑ども、くつゝいて
をるぢやあろに、それもいつしよにつ
きまぜをつて、こしらうたかいもちぢ
や。わしにくへてゝたもつたが、わし
それを見をつたケニ、むさうてどうば
りともしよことがない。貰うていのう
てゝもて來たのぢやわいの。彌「ナニ此
ぼたもちの中へ、子供の糞が交つて居
やすか。おめへとんだものをくわせ
た。北「イヤこのをしやうどのは、きた
ねへとつて、うぬがくわねへものを、
なぜおいらにくわせたのだ。とはうも
ねへづくにうだへ。をしやう「ハヽヽヽ
ハおまいがたそれしらんケニ、えいぢ



やないかい。北「ナニわらひごどぢやアねへ。酒といやアろくでもねへさけを、イヤろくでもねへ餅を、人にのませやアがつて、いめへましい。ア、胸がわるくなつた。ゲエイ〱ゲロ〱〱（ト、悪酒のうへぼたもちのゆらいをきゝて、おもはずけんぶつをはきいだすと、その中へたこのあしもまじりてはく。）をしやう「コリヤ何ちうさんした。エヽむさいことてや。コレおまい下戸ぢやというたが、ひどう酒くさいへどぢや。そしてこがいにどうびんのあしどもはきづらんしたわ。ハアきこえをつた。わしが此すぼどものどうびんとてくはんしたな。北「イヤ此すりこ木め。ナニこなたの蛸をとつてくふものかへ。をしやう「イヤ〱くうたに違ない。北「ばかをいふな。コリヤゆうべ鞆のまんぢうやでくつたのだわ。をしやう「ハヽヽヽ、唫かたりをる。どうばりしたことか、昔から鞆では、明神様のきらはしやるてゝ、どうびんくはんケニ、うりもせんわい。ナンノまんぢうやで、くはしてたまるものかい。その酒くさいへども、それでしれた。久三、樽こゝへづれやい。エイコレ見い、樽もひどう輕なつた。酒もどうびんも、わごりよがぬすみをつて、打くらうたのぢや。さすおくせ。うちたやいてくれう（ト、このをしやう天秤棒い



つぱいきげんにて、とんだきのつよいばうずなれば、やつきとなりたちかゝるを、とものをとこ、かれこれととゞむるうち、）彌「エ、此けづりまはしめ、おらがつれの男を、どうしようとおもやァがる。ふてへやつだ。よこつゝらア、はりとばすぞ（ト、おなじくたつて、つかみかゝらんとして、きた八がへどにすべり、どつさりしりもちをつくひやうしに、彌次郎もおなじく。）「ゲロ〳〵〳〵。大坂「コリヤやくたいぢや。をしやう「ソレ〳〵わごりよも、そがいにどうびんのへど、はきくさつた。コリヤすまんわい（ト、いひさま、このをしやうもへどにすべりころげまはりて、みな〳〵からだぢう、へどだらけになりてさわぐを、のり合の人々あつちこつちをなだめて、やう〳〵にしづめる。此うちふねは忠のうみをすぎ、二股といふ小湊につく。尾の道より七里餘）

蛸のあしくひし喧嘩の根もなくて
いぼあひもちの船の乗合



それより坤の風おこり、汐もよろしからねば、柴浦といふに船をつけて、その夜はこゝにとまりける。翌日北嵐のふくを追風なりとて乗出し、かまかりの瀬戸を打過、平相國清盛の、嚴島のおん神をがまんと祈誓ありしに。明神大蛇のかたちを現じ給ひければ、相國おそれ給ひて、東の方へ漕戻させ

給ふに、折ふし向ひ汐にて、船のぼりがたかりしかば、相國いかり給ひて、海上をにらませ給ひしかば、汐逆さまに上のかたへひきしとなり。さるによりて一名を、清盛のにらみの瀬戸といふなりとぞ。

清盛のにらみの瀬戸もけふは又
ふき出し笑ふ山の追風

是より館岩廿日市をすぎて、ほどなく藝州宮島にぞ着たりける。（忠の海より二十里餘、おんどより七里）

女神にてわたらせ給ふ宮島の
沖はことさら乘ごゝろよし

此所よりみな〳〵陸にのぼり、それてれに挨拶して、おもひ〳〵にわかれゆくにぞ、彌次郎北八はそこらうろ〳〵と見あるきつゝ、やがてある旅籠屋にたよりて。彌「モシ御めんなせへ。どうぞ今夜、わつちらをおたのみ申やす。やどやの男「ヱイおとまりでごいすか。おふたりぢやな。お國もとはどつちやでごいす。北「わつちらア、武州えどでござりやす。男「サアおあがりなあれ。コレおちやんどの、おもて二階どものふた間めへ、おこづり申ていかんせ。女「ようお出なあれました。こつちやへお來なあれませ（ト、あんないして二かいへつれ行。）北「なるほど宮島は、女のいゝ所だときいたが、まんざらでねへしろものだの。彌「ヱヽもう、すわるかすわらねへうちから、女のことをいふうるせへ男だ。北「へゝおいらをたしなませておいて、先がけをしようでか。さううまくはさせねへぞはゝゝゝ。（此内ていしゆ來り、）「コレハようお泊でごいす。まだお宮へは御參詣でごいせんかな。北「イヱすぐにこゝへめへりやした。ていしゆ「さあつくならば、今夜うらどもかたのお客さまから、お燈明をお上なあれますケニ、まあ御膳どもつかはされまして、夕さりゆるりと、御參詣なあれませ（ト、いひすてゝかつてへ行、ほどなく膳もいで、くひしまふと、はや日もくれければ、女きたりて、）「うらおこづり申ますケニ、お宮へおまゐりなあれませ。彌「アイいきやせうか。モシ錢を貳朱が買てくんなせへ。そして草履を一ッそくたのみやす。女「ヱイヱイうらなしでようごいすかへ（ト、南鐐一片うけとりてゆきしが、ほどなく來りて、皮ざうり一足と、錢四百文ばかりに、銀札二まいをもつてきたる。）彌「コリヤ錢は是ばかりか。女「さあつくでごいす。彌「なんのこつた、わからねへ、此紙札は。女「壹匁と三匁の札ぢやケニ、それで貳朱分でごいす。彌「ハヽ銀札か、よめた〳〵。サア北八出かけようか。北「コ

リヤ女中おめへつれていつてくれるのか。女「いつきにお來なあれませ(ト女のあんないにうちつれて、たちいで、まちはづれの松ばらをすぎて、御境內にいたり見るに、社頭の花麗いふばかりなく、御本社の內陣廻廊に、百八燈づゝのあかしをかゝげ東西の松の木の間ごとに、石燈籠おびたゞしくともしつらねたるけしき、まことに奇觀といふべし。此御燈の料、すべて銀六十匁なり。これは今宵獻燈の施主ありて、ともしそろへたるなり。先ひろまへにまゐりて、)

琵琶もたせ給ふゆゑかや諸人に
ばち利生ある神ぞ尊き

こゝに彌山の宮巡りといふ事あれども、夜中のことなれば、先御境內の末社のみ、あらましに巡拜してかへる道すがら、松ばらにさしかゝり。北「なるほど、はなしにきいたよりかは、お宮も結構だが、又此姉さまも結構だ。コレおめへを此男が念がけてゐるから、油斷しなさるなへ。彌「ナアニもうとつくに承知して居るのう。サア手をひかう。こつちへよんなせへ(ト、かの女の手をとりて引よせんとすれば、)女「ヲホヽヽホおろよいことしてぢやと、うらくれつけるに(ト、彌次郎をつきとばすと、うしろのかたにねてゐる鹿のあしにつまづけば、鹿おどろきてすつくとたちあがるに、彌次郎はなほびつくりして、)彌「ヤア〳〵なんだなんだ(ト、きもをつぶせば、鹿いよ〳〵おどろきてとびいだすと、きた八もうろたへていつさんにかけいだす。)女「ヲホヽヽヽひどうたまがつてぢや。アリヤ爰の鹿でごいす。彌「ナニ鹿がこゝらにゐやすか。女「明神さまのつかはしめぢやケニ、なんぼもあんなげに居をります。彌「ハアそれで落ついた。さうとはしらずに、つれの男はむしやうに、先へ迯出したはさいはひ、ナントおめへ、今宵おいらが無心があるが、きいてくれねへか。女「なんぢやへ。彌「なんだとはしれたこつた。善はいそぎ、あたりに人はなし、ちよつと手附受取うか。そのかはり右から左猿が餅だ。是をおめへにたのみのしるしだ(ト、せんこくの銀札を紙につゝみ、女のふところへねぢこんでだきつくと、女きもをつぶし、)「うらそんなげな事をすると、おごれんさまがくじいくるケニ、はなしなあれ(ト、ふりはなして、かの銀札を彌次郎にうちつけ、かけいだすを、彌次郎とらまへんと、四五間ばかりおつかけたりしが、銀札を打つけられしまゝ、そこに落して來ることとなれば、あとへ引きかへして、うろ〳〵たづねゐるうち、さきへゆきこしたるきた八は、女とつれだち彌次郎が來らざるゆゑ、いかゞせしやとたちもどり、このていを見て、)北「ヲヤ彌次

さんなにをたづねる。彌「さつきの銀札をおとした。女「アレ〳〵あれぢやごいせんか。彌「ドレ〳〵どこに（ト、ふりかへり見れば、又鹿が來りて銀札を、むしやりむしやりとくつてゐる。）彌「ヤア〳〵〳〵、此ちくしやうめ。三匁を棒にふらせやアがつた。いめへましいやつだ（ト、石をひろひて、やたら鹿にうちつけると、所のものども、四五人とほりあはせ、）「ヤイ鹿に礫どもうちをるは、どやつぢや。どたまくれつけるぞ（ト、ばら〳〵立より彌次郎をとらへる。）彌「ナニこいつらは、おれが石をぶつたがどうした。とはうもねへ。所のもの「明神さまのお鹿ぢや。ほでさいたやつは、會所へおこずつて、所の恒規どほりにする。うせけつかれ（ト、彌次郎を手ごめにするゆゑ、北八もこらへず、かれこれとあらそへども、多ぜいにぶせいかなはず、つかみあふを女やうく〳〵と、所のものどもにあいさつして、なつとくさせ引わける。是は此ところのおきてにて、鹿は明神のつかはしめなりとて、人これにかまはず、もし鹿をあやめしものは、社司よりそれ〴〵の過怠をいひつくる事ゆゑ、此ものども、かくはのゝしりいひたると見えたり。）

礫もて鹿はうてどもこなたこそ
痛入たる三匁ふだ

かくてそのまゝ旅籠屋に歸りたるに、亭主出むかひて、「是はおはやうおかへりなあれた。サアお湯が涌ましたケニ、お入なあれ。彌次「アイとんだ災難にあつて、砂まぶれになつた。おいらさきへはいるべいか（ト、すぐにゆどのへはいる。きた八はもとの二かいさしきへ來ると、かつてよりたかつきに、もちぐわしをつみ、にばなをそへてもつてくる。）北八「アイこれは御てへねへな（ト、いひつゝ二ツ三ツくひて、あとはみな紙につゝみ、かくしてしまうと、やがて彌次郎湯よりあがり來り、北八かはりて入りにゆく。このとなりざしきに、西國がたの侍衆二三人、とまりあはせたるが、この人は定宿にて、彌次郎北八よりはおそくとまりたれども、となりのたび人さきに湯へ入りたるをいきどほり、ぶつ〳〵こゞといひたるが、やがてていしゆをよびよせ、）「コリヤ〳〵わが黨は、何と心得てをるテヤ。身ども國屋敷どもの出入ではなかばいか。旅人ども相宿をせることも、此方家風でならないことぢやが、我黨も家業の事ぢや、そんがいだけはゆるす。なじかい外の旅人ども、身共等よりさきへ風呂さまへ入れをつた。いかだすまないぞ〳〵。ていしゆ「エイ、是はうら無調法でごいす。御めんなあれつかはさあれませ。侍「イニヤまかりならない。身がたう今日はよんによ

大分

う、さるきだつたほどに、湯どもはやくにやせとアつけた。それになじかい、こんがいにせるのぢや。以來此方出入どもぶちあげるぞ。ていしゆ「エイ〳〵、さあつくども仰られましては、うら迷惑どもいたしをります。あつちやのお客ども、さきへ入れましたは麁相ぢやケニ、いつきにその湯ども、ほかしづつて汲替、あたらしうたかせますケニ、おゆるされてつかはさアれませ。侍「イニヤ身がたう、只今より、外宿へまかりづらんばい。こんがいな宿氣にいらないぞ。ていしゆ「こんなげに、さあつくもうつくと、いろ〳〵おわびこと申ても御得心がないケニ、しよことがごいせん。御勝手次第どこもとへなと、ござあれませ（ト、ごふはらまぎれにやつてのけられ、いまさら今宵も五ツすぎ、爰を出てほかへゆくこと太儀の體なれど、さうともいはれず。）侍「よかばい〳〵、わがたうは年來此方の定宿いたしをりながら、身共等をほうけづらすな。今日遠足どもいたして、だりがてい所を見こみそつて、いよ〳〵こやつふたうぢやなかばいか。もうづらんぞ〳〵。旅籠錢どもとらせて、身がたうの借うけた此座敷ども、すなはち今晩一夜は此方の宅も同前ぢや。づらんぞ〳〵。ていしゆ「なるほど、お宿賃どもいたどき



をりまして、お宿申た座敷ぢやケニ、今夜ばかりはあなた方のお座敷、爰(こゝ)もとにごいさるとも、お勝手でごいす。どうばりとなあれませ。侍「しからば身がたう爰(こゝ)さまにをらして(居)も、申分なかばいか。ていしゆ「さあつくでごいす。侍「ときにていす、雪隠(せついん)どもは此ざしきさまについてをるか。ていしゆ「エイそこもとに。侍「ありをるか、よかばいよかばい。此座敷さまについてをる雪(せつ)隠(いん)ぢやほどに、今晩(こんばん)中はアノ雪隠も、身がたうの雪隠ぢや。只今たれに罷(まかり)こすが申分はなかばいか（ト、いひつゝ、紙をもみながらゑんさきにいで、せつちんの戸をあけんとすれば、うちより、）「エヘンエヘン（ト、人のはいつて居るやうすに、いよいよやつきとなつてたちもどり、さしきぢうをきよろ〳〵見まはし、）侍「ムウ此方のものではなかばい。コリヤ〳〵ていす、わがたうはいよ〳〵身共等をあつうらそんじをりませぬ。侍「しらんではかひをるな。風呂さまへは、外(ほか)の旅人(りよじん)すまないぞ。アノ雪隠ども、只今くみどもをさきへ入れをる。また雪隠(せついん)どもだいて、建(たて)なほせ。ていしゆ「エイ〳〵へ、なじかい、身共より餘人(よじん)をさきへくみづらすことは、どうばりと致すケやりをつたテヤ。ていしゆ「エイそれは、ニ、たてなほすことは、今いつきには、



でけぬくいでごいす。侍「いかさま建直すかはりに、身共垂なほしてやらんばい（ト、此うちせつちんより、出てくるものはきた八なり。ちらと見て、）侍「あやつ何ものぢやテヤ、身がたうの雪隠どもへ、挨拶もせないで、無作法千萬な、沒落どもぢやなかばいか。身ども了簡どもありをるが、只今過急になつて參つた（ト、そのまゝせつちんへかけだしてゆく。此うち女ども膳をもち來りするゐると、すこしはきげんなほり、きふじをあひてにむだなどいひてわらふこゑするに、彌次郎北八は、ふすまひとへへだて此いさくさを、をかしく聞きゐたるうち、をんなふとんをもち來り、）「もうおよりなあれませ。北「ヲイ〳〵あねさん、さつきわつちがいつたこと承知だらうの。女「ヲホヽヽヽ、どうばりともせうケニ、まあおよりなあれ（ト、とこをとりあてがひ、ふたりをねさせて、あんどうはかつてへもちゆくと、あとはくらがりにて、きた八はせんこくかくしおきたる、もちぐわしを出し、ふとんのうちにて、むしやり〳〵とくらふ。）彌「コリヤ手めへ何をくふへ。北「なんでもねへ。彌「むしや〳〵おとがするは、おれにもちつとくれろへ。北「おもひが恐しい。ひとつやらうか、ソレなげるぞ（ト、まんぢゆうひとつはふりなげてやる。すべて此ところは、猿と鹿おびたゞしく、鹿は犬のごとく町中にはいくわいし、猿は家々の屋根にあつまりゐて、二かいざしきにくひものゝあるをかんがへ、うかゞひよりてはこれをとりくらへども、鹿猿ともに神使なりとて、所のものこれにかまはざれば、いつかうに人をおそれず。こよひも此やどの窓より猿とびこみて、此ざしきのくらがりまぎれ、しよくもつをたづねさぐりまはりてゐるうち、きたはちがなげたるまんぢゆうを、手ばやくとつてくらふ。いつたい猿利口にて、手のはやきものなれば、そのなげ出したる音をかんがへ、たちまちとつてくらふを、彌次郎いつかうにしらず、そこらあたりをさぐりまはして、）彌「コリヤ〳〵どこらへなげたか、さつぱりしれねへ。北「うそをつく、ひとつくへば夫でいゝにしな。彌「イヤまだ、ほんたうにくはねへ。もう一ツくれろへ。北「そんならまたなげるぞ（ト、又ひとつなげてやると、猿ぢきに拾ひてくらふ。）彌「やつぱりしれねへわ。手めへどこらへなげたぞ。北「イヤ〳〵その手はくはねへ。もうお休みにしよう。彌「エ、ばんくるはせな、どこらへなげをつたやら（ト、おきなほり、そこらさぐりまはす手さきが、かの猿の毛にさはり、びつくりして手をひつこませば、猿もこそ〳〵にげて行。）彌「何だ猫ださうな、シツシ〳〵（ト、此うちはや北八はねいりたるやうすに、彌次郎もふとん引かぶり、すや〳〵とねむる

うち、何とやら、人の來るあしおとのやうに、みしり／＼とたゝみのなるおとを、北八きゝ耳すまして、さてこそやくそくせし、かの下女のしのび來るならんと、まちゐたるに女にはあらでせんこくの猿、北八のふところに、餅ぐはしのあることしようちせしにや、そろり／＼とはひより北八のえりもとから、ふとんの中へ手をさしこむと、北八こゝろえ、引こまんとその手をとらへ、ぎやうてんし、わつというてはねかへせば、猿もきやつとさけびて、彌次郎のかほにかじりつく、彌次郎おどろきこれもまた、わつというてはねおきるひやうしに、猿をとつてはふり出すと、猿もうろたへがさ／＼／＼とふすまをつたひ、かもゐの上へ駈あがり、らんまよりとなりのさしきへとんだりしが、そこにふしゐたりしお侍の、小びんさきへとびつけば、これもわつとばかりおどろきて、おきあがると、みな／＼ねみゝにおどろき、何ごとやらんとおきたつ。このさわぎに猿もうろたへ出ばをうしなひ、あつちこつちへとびあるく、くらがりまぎれ引かゝれて、こけるやらおきるやら、へだてのからかみもはづれて、よこにたふれ、さうどうするうち壹人のお侍、すり火打うちつけ、くわいちゆうつけ木に火をともし見れば、犬のごとくなる大猿一疋、うらの窓より出ゆくにぞ、みな／＼さてはとあきれはて、大わらひするに、しきりのからかみもよこにたふれて、こなたにも彌次郎北八、たがひにかほを見合はせ、此ところの猿、いつもかやうのわるさをなすことありと、はじめてきゝて大わらひをなし、さるにてもせんこくの饅頭まで、大かたきやつのしわざならんと、をかしさいはんかたなければ、）

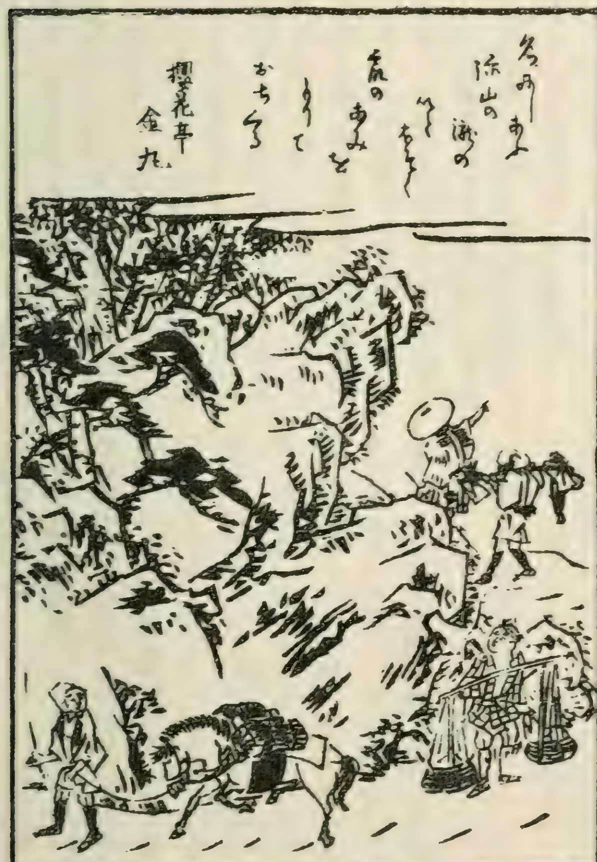
うか／＼と猿にとられし饅頭の
あんに相違な顔の赤恥

かく打興じて、北八もおもはくのちがひたることをかたりなぐさみて、打ふしたるが、一睡の夢のうちに、遠寺の鐘ひゞきわたり、鷄の聲家毎にうたひて、夜もあけたるに、やがておき出れば、宿の亭主來りて、けふ逗留し宮めぐりし給へと進むるに、彌次郎は鞆の遊女がいひしことば、何となら心にかかりたりしも、かく無難にてこの島につきたるよろこびに、いかさまそれにまかすべしとて、食事とゝのへ、案内者の六七といふをたのみ、打ちつれて爰を立出ゆくに、靑物肴など、すべて女の賣あるく見えて、めづらしく、又此ところの名物とて、染楊枝をうる家おほし。

愛敬をまゐらせ給ふ神の町
しろい歯見せてやうじうる見ゆ

かくて彌山にのぼり、弘法大師の寶塔を過て、瀧の宮のあたりにいたる。北「モシ案内のお人、此宮は何さまだね。六七「さればわしやようしらんわいの。北「そして道が二筋ある。コリ

ヤアどつちへいつていゝのだへ。六七「わしそれもしらんさかい、それでこないにおまいがたのあとについて、ゆきをるわいの。彌「なんのこつた。きさま案内に雇れて來たぢやアねへか。六七「さよぢや、わいの。彌「それに道をしらねへとは、どうしたものだ。六七「サイナわしや上がたからやう／＼此間さんじたがな。此さきの大日堂のねきまで、四五日あとにいたことがあつたが、それもわすれてようおぼえてぢやないさかい、わしやいこまいというたら、あこの宿屋の旦那どのが、えいわいの、道はしらいでもあの衆のいてぢやはうへ、ついていけばえいさかい、ひらにいけてゝ、むりにおこしてぢやしだ。マアさしあたつて此道がしれねへ。ばんくるはせな。六七「アノ誰になと問ふて見やんせ。それぢやといつきにしれるさかい。北「べらぼうめ人に尋ることに、こなたの差圖をうけはしねへ。六七「そしたらわしとうて見やんしよ（ト、このうちむかうより、女まじりの大ぜいづれ、供の男にべんたうさゝえなどもたせて、いづれも酒きげんのちどりあしにて、）彌「よそのおごれん見て、こちのおごれん見れば、こつぺふといヶエ、ほてはらつんづつて、あきやるきやくると



おもうたうちに、爺に似たやうな子がでけた。しよんがいな。しよがいな所ぢやござりや申さぬ。何にもつけずに、やうら〱と、そつこでかいろにきやら〱きやん。きるにきられぬ、お稲荷様の御見廻ぢや、トントコ〱トントコナ、クワイ〱。六七「モシモシ此道いたら、何といふところへ出るぞいな。さきの人「何でや、此道ゆきどまりぢやないケニ、どんなげな所へなと、づりたいはうへづるでごいす。六七「それぢやわからんわいな。わたしどもは、宮めぐりするのぢやが、こないにいてえいかいな。さきの人「そんぢやまたうにつといきなあれ（ト、此うちさきのびとむれのうちに、十八九ばかりのうつくしき娘がゐるゆゑ、きた八これに見とれて、むすめのかほをじろり〱と見てゐると、さきのむすめも、北八をじろり〱と見



てゐるゆゑ、北八彌次郎のそでをひきて、）「アレ見ねへ。アノ娘がおいらにほれたかして、さつきからおれが顔ばかり見てゐるわ。ナントどうだ〱（ト、そろ〱むすめのはうへよりさうにすると、むすめはきみわるさうに、としまの女のたもとをひかへて、）「をかしな人さんぢや。おちよんさん、つむりのものに氣をつけなされや（ト、めい〱あたまをさぐりまはしながら、ゆきすぐる。）北「なんのこつ

た。いめへましい。彌「ハヽヽヽヽヽ手妾ほしいて丶、わしたのんでぢやさかい、あこの娘やつてこまそと、親たちへいうたら、ソリヤえいこつちや、支度金次第でやろわいて丶、相談はでけたがな、その旦那どんが、娘見にいこて丶、いんまに來やしやれんさかい、あこの内では、どうぢやいな〱と、毎日わしの所へ、まゝにわせるさかい、けふは旦那どんつれまうていこ、あすは是非いことというて置たさかい、今い

めへの頰付ぢやアむすめの見たてきついものだ。ハヽヽヽヽ（ト、此うちしらいとのたきのあたりへさしかゝれば、）

　拜殿の朱を奪ふやむらさきの
　　かすみに染る瀧のしらいと

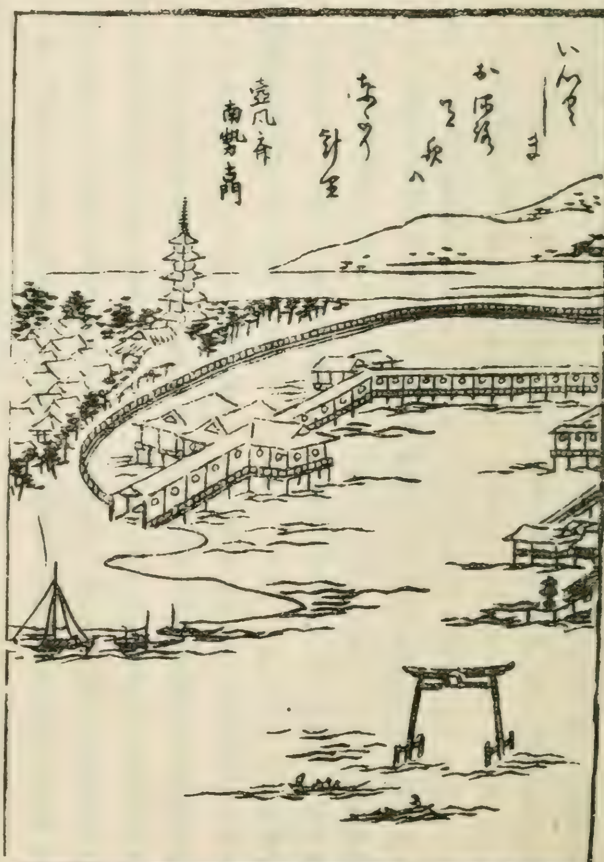
此さき文珠堂薬師堂のある所に、ちから餅とて名物のもちをうる茶屋あり。

　餅の名のちからまかせに夜はさぞ
　　ねばりつきてや夫婦ねるらん

それより兩顔大日堂のあたりにいたる。これより上の山五町ばかりの間、種々の末社多し。是を巡拜するを宮めぐりといふとぞ。彌「ナント一杯呑たくなつたぢやアねへか。さいはひ向うの茶屋に、いゝ娘が見えるが、北八どうする〱。六七「イヤわし、あこの茶屋へはいけんわいな。彌「なぜ〱。六七「サイノ聞なされ、此近在のさる金持が、



たら又そのこと催促しをるぢや　あろと、わしそれがめんだうぢやわいな。彌「ハアそんならいゝことがある。向うてはその旦那どのしらずか。それだとけふの所はおいらをその金持にして・つれていきはどうだ。さうするとたしかに、酒を出さうから、只のまうといふかすりばかりだ。六七「ホン　ニコリヤえらい。大でけぢやわいな。さいはひその旦那どんといふは、髭がむしやくしやと、色が黒うて目が大きうて、鼻が横にひらたうて、不男ぢやさかい、娘の氣には入まいけれど、はてレコサのたんとある人ぢやさかい、辛抱さんせと娘へいうておいたが、とんとおまいがそのちゆうもんどほりの顔ぢやさかい、コリヤよかろ。サアお出なされ（ト、さきにたちて、かのちや屋へはひると、）ていしゆ「ヤヨ六七どのテヤ。よう



來なあれた。六七「アイ地の御前の旦那どのを、やう〳〵けふ爰へつれまうて來たわいな。ていしゆ「何でや、お客さまが來なあれたか。コリヤ〳〵お坪のう、おうへはきづつて、おこづり申せ。サアゝ〳〵六七どの、あがりなあれ。六七「アイ〳〵モシ旦那おあがりなされ。彌「コリヤゆるさつしやい（ト、うへへあがり、ざにすわると、むすめはさすがはづかしさうに、顔をあかくして、茶たはこぼんを、もち

來るを見れば、そのつくりは田舎めきてをかしけれど、きりやうは十人まへのしろものなり。）彌「御ていしゆはきさまか。コリヤはじめて逢ます。六七「此おかたが、かの地の御前の權太左衞門さまぢや。兼て相談のとほり、おむすめを此おかたの所へやらんすと、こなさんがたまでふんだくに、喰扶持貰うて樂隱居ぢや。彌「ホンニ六七どのがしられるとほり、田地の壹萬や二萬は、わしが小づかひれうにのけておくしんだいだから、きさまたちは勿論おむすにも、此やうなものぐさいなりさせてはおかぬ。京の染屋へいひつけて、きたいものは望次第、あたまの道具も長崎から、鼈甲の引おろしたまゝでとりよせるし。北「なんにしてもうめへはなしだ。前祝ひに御亭主御酒でもしつかり出しなせへ。ていしゆ「エイ／＼、こゝろえました。彌「というもんだから、おむすもまんざらいやぢやァあるめへ。なんなら今宵わしが泊つて居る宿へ、おむすをつれだつていつて、とつくりと相談きめようか、ノウ六七どの。六七「ハヽヽヽうまいこというてぢや（ト、此うちていしゆ、酒さかなをいだしすゝむるにぞ、みなみな時ぶんはよし、やたらに引かけゐる所へ、四十あまりのいなかもの、おもてよりうろうろと、このうちをのぞけば、六七とんでいで、）六七「ヤァ／＼、ほんまの權太左衞門さまが見えたわいの。サア／＼こつちやへ／＼（ト、この權太左衞門といふは、六七がかゝつてゐるやどやの定客にて、大の金もちなれば、六七にはかにもてはやし、手をとりて彌次郎の上座にすわらせると、）權太「六七どの、けふうらはわりさまところへずりをつたら、客衆つんなうて宮巡りぢやときいたケニ、さいはひのことでや、かのはなしのおごうを、見ておこかと、あとからいつきにおつかけづりをつたが、えい所ですつたりあうたわい。六七「わたしも、毎日／＼あなたのお見えなさるをまちをりましたわいな。ちやうどあんぢやういた。モシおはなし申たおむすは、是でござりますわいな。ていしゆ「ヤヨ六七どのあのさんは。六七「ホンニ、このおかたが、ほんたうの權太左衞門さまぢやわいな。ていしゆ「イヤ／＼そんぢや、あつちやのお人は。六七「コリヤうその權太左衞門さまぢや。わし爰へくるに言譯がないさかい、アノお人を、權太左衞門さまぢやというて、けふの間を合さうとしをつたのぢやわいの。ハヽヽヽコレほんまのが來てぢやさかい、もうおまいはいらんわいな。そつちやのねきへ、よつて居てくだんせ。座頭の中

ざしきで、おまい邪魔になるわいの。彌「なんのこつたいめへましい。六七「サア／＼ほんまの旦那、ひとつあがりなされ。権太「ヱイコリヤ、早速御造作ぢやわい（ト、引うけてのむ。此内六七はやたらにもてはやし、さへつおさへつ酒もりのうち、彌次郎きた八はあけらくわんとしてゐたりじが、）彌「コリヤとんだめにあはせる。六七どのもうい丶かげんにしていかねへか。六七「マアえいわいの。わしこのお客を、ほつたらかしてはいけんわいな。おまいがた勝手に、さきへいておくれなされ。彌「イヤ此べらぼうめ、おいらをてうさいばうにしやァがる。六七「なんぢやいな。おまいがかうかうしようて丶、もくろまんしたこつちやないかいな。彌「ナニこいつふてへやつだ（ト、たちまちふみたふして、一ツふたつくらはせると、六七持病のてんかんおこり、目を見つめ、くちよりはあわをふく。）北「ヤア／＼／＼どうした／＼。彌「コリヤ大變だ。ヱ丶とんだことをしてのけた。ヲ丶イ六七ヤアイ、六七ヤアイ（ト、にはかにうろたへ、ていしゆもともどもさわぎたち、さま／＼かいはうして、）ていしゆ「ヤヨコリヤ死をるさうぢや（ト、かほに水などふきかけ、聲のかぎりよびいけても、いつかうにしやうきなし、）彌「コレハつまらねへ。どうしたもんであらう。ていしゆ「こなさんたちのつんなうて來た人ぢやケニ、はやういつきにおこづつていかんせ。彌「それだとつて、こんなになつて居るものをどうするもんだ。きさまも、しつてゐる人のことだから、マアちつとの間、爰においてやるがい丶。おいらはさきへいかうから。ていしゆ「インニヤまちなあれ。うらしつてをる人でごいすが、つんなうて來た人のごいせんぢやなし。爰において、もし死をつたら、うらのうちが穢れるケニ、そんなげなことでけんわい（ト、いふはすべて、此宮島の地は神不浄を忌たまひ、子をうむものあれば、その日のうち他所へおくりつかはし、七十五日すぎて島にかへすとぞ。又人の死たる時も、すぐにその日赤といふ所へつかはしてはうむる。其家は勿論おくりにたつたる人までも、それ／＼に忌をかうむり忌あけざるうちは、他へ出ずしてつ丶しみをるならひなれば、此ていしゆこれらをはゞかりて、いつかうにがてんせず、「何であろと、こなさまたちがくれつけたものぢやケニ、爰で死をつたら、こな様たちもむづかしい。病氣のたいにして、おこずつていかんせ。北「いかさま、コリヤア何かなしに、とちうで病氣がおこつたと、おいらふたりがつれて歸るがよからうぜ。彌「それだとつ

て、こんなに生躰がないものを、どうして。北「ハテ駕でもやとつて乘せるがいゝ。ナント御ていしゆ、こゝらに駕はあらうかの。ていしゆ「ナンノ、爰もとにやないケニ、島へいてやとうてごんせ。北「それぢやァつまらねへ。彌次さんどうする。權太「イャ氣のどくな事でや、こんがいさんせ。うらそこまで駕で來をつたケニ、その駕どもかしてやろ、乘せていかんせ（ト、いひつゝ、おもてのかたへたちいで、ヲ、イ〳〵とよぶこゑききて、むかうより駕かきひとり、かごをかつぎてかけつける。）彌「コリャありがてへ。そんなら、おかり申やせう。權太「ヤヨ太郎兵のう、此衆島までのらうてゝぢや。うらひとりさるきをつてもどるケニ、そんがいさあれ。彌「そんなら、おめへたのみやす。時に今ひとり棒組どのは。權太「イニャ片棒はごいせん。アノ男ひとりぢや。彌「ヱヽ何の事だ。駕かきがひとりでつまるものかへ。北「ホンニ棒組なしに、おめへどうして乘て來なさつた。權太「うら乘て來をつたぢやごいせん。アノをとことふたりでかいて來をつたのぢや。錢がづるケニ、なんの乘てなるものかい。牛王さまのねきまで、坊さまのせて來をつたのぢやてや。彌「あひ棒がなくちやァはじまらねへ。北「ヱヽこの六七めが、癲癇がおこらねへと、こいつに片棒かつがせるものを。彌「しかたがねへ。北八手めへとかはり〳〵に、片棒いかう。しかしついぞ駕をかついだことはねへが、マァやつて見よう。サァ棒組どのたのみます。北「それできまつたといふものだが、乘るのは誰がのる。おいらが乘うか。ていしゆ「ヱヽめつぱふかいもない。此てんかんどのをのせるぢやごいせんか。彌「ホンニさうだ〳〵（ト、六七をかきいだき、かごにうちのせ、やがてこのところをかきいだし、もとのみちへひつかへして、）彌「ア、コリャ肩がめりこむやうだ。がふてきにおもい佛めだ。もういゝかげんに氣がつきさうなもんだに。北「さうさ、癲癇で死ぬものはねへといふから、今に氣がつくだらう（ト、はなしのうち、駕のうちにて、ウウ〳〵とうなるこゑするに、もうしめたものだと、さゝやきあふむかうのかたより、來るをとこ六七を見つけて、）「ヤヨコリャ六七め。駕どもに打のりをつて、えい氣もちぢやな。わりさまのおごれんが東町の金太とつんなうで、觀音堂のはうへいきをつたが、わりさましらずかい。ふといあはうぢや（ト、うちわらひて行過る。六七かごのうちにて、）「ヱエなんぢやい。わしがかゝが金太めと

つれまうていたとは、にくいやつの。コリヤかうしては居られんわい（ト、いひさまかごをとび出して、いつさんにかけいだす。彌次郎きた八きもをつぶし、さてこそいつぱいくはせしてんかんやみめ、のがさじとふたりとも、いちもくさんに追かけたりしが、つひに見うしなひてせんかたなく、さうさうやどへかへりける。これより中國すぢの紀行は三編にくはしくすべし。まづ此本はこれぎり〳〵。）

續膝栗毛二編下卷終

昭和二年九月十一日印刷
昭和二年九月十四日發行

日本名著全集
第一期出版
江戸文藝之部
第二十二卷
膝栗毛其他上
（非賣品）

編輯發行兼印刷者　東京市日本橋區馬喰町二丁目一番地
日本名著全集刊行會
代表者　石川寅吉

發行所　東京市日本橋區馬喰町二丁目一番地
日本名著全集刊行會
電話浪花一八四〇番一八四一番
振替東京一八四四番

日本名著全集 第一期出版

「江戸文藝之部」全廿七巻及追加篇二巻 書目豫定一覽

（但し種々の事情により多少の變更あるべし。）

第一巻 第二巻 西鶴名作集 上下

○好色一代男 ○好色二代男 ○好色三代男 ○好色一代女 ○好色五人女 ○男色大鑑 ○武道傳來記 ○武家義理物語 ○新可笑記 ○西鶴諸國咄 ○懐硯 ○近代艶隠者 ○日本永代藏 ○世間胸算用 ○織留 ○本朝二十不孝 ○本朝櫻陰比事 ○西鶴置土産 ○萬の文反古 ○名殘の友 ○俗つれ〴〵 ○一目玉鉾

第三巻 芭蕉全集

正篇 ○芭蕉一代の句集 ○連句集 ○文集 ○句評 ○紀行 ○消息 ○遺語

外篇 ○冬の日 ○春の日 ○初懐紙 ○曠野 ○ひさご ○猿蓑 ○深川集 ○炭俵 ○別座敷 ○續猿蓑

附錄 ○枯尾花 ○芭蕉翁行狀記 ○芭蕉翁繪詞傳

第四巻 第五巻 近松名作集 上下

○花山院后諍 ○世繼曾我 ○賢女手習并新暦 ○門出八島 ○凱陣八島 ○源氏烏帽子折 ○出世景清 ○團扇曾我 ○蟬丸 ○最明寺殿百人上﨟 ○曾根崎心中 ○薩摩歌 ○雪女五枚羽子板 ○用明天皇職人鑑 ○心中二枚繪草紙 ○兼好法師物見車 ○碁盤太平記 ○卯月紅葉 ○堀河浪鼓 ○卯月の潤色 ○心中重井筒 ○傾城反魂香 ○心中萬年草 ○丹波與作待夜の小室節 ○淀鯉出世瀧德 ○五十年忌歌念佛 ○栬狩剣本地 ○今宮の心中 ○百合若大臣野守鏡 ○心中刃は氷の朔日 ○夕霧阿波鳴渡 ○吉野都女楠 ○嫗山姥 ○長町女腹切 ○冥途の飛脚 ○大經師昔暦 ○生玉心中 ○國性爺合戰 ○槍の權三重帷子 ○山崎與次兵衛壽の門松 ○曾我會稽山 ○傾城酒呑童子 ○博多小女郎波枕 ○雙生隅田川

○心中天網島　○津國女夫池　○女殺油地獄　○信州川中島合戰　○心中宵庚申　○關八州繫馬

第六巻 第七巻 淨瑠璃名作集 上 下

○雪女　○本海道虎石　○心中涙の玉井　○金屋金五郎浮名額　○金屋金五郎後日雛形　○椀久末松山　○お染久松袂の白しぼり　○八百屋お七　○笠屋三勝廿五年忌　○心中二つ腹帶　○傾城思升屋　○愛護若塒箱　○富仁親王嵯峨錦　○鬼鹿毛無佐志鐙　○大塔宮曦鎧　○須磨都源平躑躅　○壇浦兜軍記　○廬屋道滿大内鑑　○苅萱桑門筑紫𨏍　○敵討襤褸錦　○御所櫻堀川夜討　○釜淵雙紋巴　○ひらがな盛衰記　○鵺山姫捨松　○夏祭浪花鑑　○菅原傳授手習鑑　○義經千本櫻　○假名手本忠臣藏　○双蝶々曲輪日記　○一谷嫩軍記　○本朝廿四孝　○奧州安達原　○關取千兩幟　○近江源氏先陣館　○神靈矢口渡　○妹背山婦女庭訓　○攝州合邦辻　○新版歌祭文　○伊賀越道中雙六　○近頃河原達引　○絲櫻本町育　○繪本太閤記

第八巻 歌舞伎脚本集

○參會名護屋　○兵根元曾我　○源平雷傳記　○百夜小町　○傾城淺間嶽　○成田山分身不動　○中將姫京雛　○丹波與作手綱帶　○傾城壬生大念佛　○鳥邊山心中　○嫗髮歌仙櫻　○心中鬼門角　○伊勢頭戀寢刃　○漢人漢文手管始　○五大力戀緘　○金門五三桐　○四谷怪談　○與話情浮名横櫛

第九巻 浮世草子集

○傾城色三味線　○傾城曲三味線　○傾城歌三味線　○世間息子氣質　○浮世親仁氣質　○世間娘氣質　○咲分五人娘　○傾城禁短氣　○商人軍配團　○棠大門屋敷　○鎌倉諸藝袖日記　○日本新永代藏　○御前義經記　○好色萬金丹

第十巻 怪談名作集

○伽婢子　○狗張子　○怪談全書　○英草紙　○繁野話　○怪談楸笊　○雨月物語　○唐錦　○莠句冊　○垣根草　○漫遊記

第十一巻 黄表紙廿五種

○金々先生榮花夢　○親敵打腹鼓　○長生見度記　○啌多雁取帳　○狂言好野暮大名　○大悲千祿本　○江戸生艶氣樺燒　○莫切自根金生木　○文武二道

万石通　○孔子縞于時藍染　○心學早染草　○卽席耳學問　○盧生夢魂其前日　○馬鹿長命子氣物語　○世上酒落見繪圖　○桃太郎發端話說　○十四傾城腹之内　○金々先生造化夢　○忠臣藏前世幕無　○世諺口紺屋雛形　○稗史億說年代記　○御誂染長壽小紋　○的中地本問屋　○人間萬事吹矢的　○人間萬事吹矢的（草稿）

第十二卷　洒落本集

○傾城買四十八手　○契情買虎の卷　○嫖客三體誌　○娼妓絹篩　○遊子方言　○月花餘情　○百花評林　○大抵御覽　○異素六帖　○廓中奇譚　○辰巳の園　○和唐珍解　○通言總籬　○辰巳婦言　○令子洞房　○寸南破良意　○仕懸文庫　○猫射羅子　○道中粹語錄　○聖遊廓　○錦の裏　○三敎色　○契國策　○眞女意題　○甲驛夜の錦　○田舍芝居　○婦美車紫鹿子　○起承轉合　○粹町甲閨　○古契三娼　○濟都洒美撰　○夜半の茶漬　○志羅川夜船　○穴學問　○狂訓彙軌本紀　○娼妃地理記　○遊僊窟煙の卷　○女郎買糟味噌汁　○美地の蠣殼

第十三卷　讀本集

○櫻姫全傳曙草紙　○昔話稻妻表紙　○本朝醉菩提　○三七全傳南柯夢　○占夢南柯後記　○天羽衣　○飛驒匠物語

第十四卷　滑稽本集

○風流志道軒傳○古朽木○阿多福假面○指面草○人遠○茶懸物○無彈砂子○小紋雅話○奇妙圖彙○浮世風呂○早變胸機關○客者評判記○浮世床○人間萬事虛誕計○同上後篇○假名手本藏意抄○一盃綺言○古今百馬鹿○八笑人○七偏人○柳巷訛言○市川評判圖會室の梅○福來雀○一雅話三笑○言葉の花○鯛の味噌津

第十五卷　人情本集

○春色梅曆　○春色辰巳園　○春色惠之花　○英對暖語　○梅見船　○閑情末摘花　○假名文章娘節用　○八萬鐘

第十六卷　第十七卷　第十八卷　南總里見八犬傳　上中下

第十九卷　狂文狂歌集

○古今夷曲集　○萬載狂歌集　○萬代狂歌集　○四方のあか　○四方の留糟　○千紫萬紅　○萬紫千紅○めでた百首　○かくれ里の記　○（石川雅望の作では）狂文あづまなまり　○吉原十二時　○（風來山人のものでは）風來山人六々部集（前篇）○風來山人六々部集（後篇）○風流志道軒　○（手柄岡持のものでは）我おもしろ

第廿卷　第廿一卷　偐紫田舍源氏　上下

第廿二巻 第廿三巻 膝栗毛其他 上下

○東海道中膝栗毛 ○續膝栗毛 ○續々膝栗毛 ○南總記行旅眼石 ○江戸前噺鰻 ○落咄彌次郎口

第廿四巻 第廿五巻 和文和歌集 上下

○眞淵歌文集 ○廬庵六帖詠草 ○桂園一枝（景樹） ○うけらが花（千蔭） ○琴後集（春海） ○宗武歌集 ○曙覽歌集 ○藤簍冊子（秋成） ○言道歌集 ○良寛歌集 ○女流歌文集

第廿六巻 川柳雜俳集

○武玉川十八篇 ○柳多留三十一篇 ○誹風柳多留拾遺十篇 ○川傍柳五篇

第廿七巻 俳文俳句集

○五元集（其角） ○五元集拾遺（同） ○五元集脱漏（同） ○雜談集（同） ○類柑子（同） ○玄峰集（嵐雪） ○其袋（同） ○去來丈草發句集 ○ひとりごと（鬼貫） ○鬼貫句選（鬼貫） ○七車（同） ○とくとくの句合（素堂） ○韻塞（許六） ○風俗文選（同） ○葛の松野（支考） ○笈日記（同） ○雜文消息（許六・野坡） ○蛙合（仙化） ○俳諧職人盡（寥和） ○鶉衣（也有） ○蕪村句集（蕪村） ○蕪村文集（同） ○新花摘（蕪村） ○寫經社集（同） ○十番左右句合（同） ○明鴉（几董） ○續明鴉（同） ○新雜談集（同） ○井華集（同） ○太祇句集（太祇） ○春泥句集（春泥） ○三春日記（寥太） ○芙蓉文集（耳得） ○白雄句集（白雄） ○骨書（樗良） ○俳ざんげ（大江丸） ○はいかい袋（同） ○曉臺句集（曉臺） ○佐渡日記（同） ○おらが春（一茶） ○一茶句集（同） ○鼠の道行（成美） ○成美家集（同） ○蔦眼集（道彥） ○鶴芝（士朗） ○斧の柄（乙二） ○續繪歌仙（宜麥） ○居龍の技（抱一）

追加篇 第廿八巻 歌謠音曲集

○義太夫（近松名作集及淨瑠璃名作集と重複するものは之に採らず。）

○傾城阿波の鳴門（八つ目・順禮の段） ○艶容女舞衣（下の巻・酒屋の段） ○戀娘昔八丈（下の巻・鈴ケ森の段） ○桂川連理柵（下の巻・帶屋の段） ○廓文章（吉田屋の段） ○傾城戀飛脚（下の巻・新口村の段） ○碁太平記白石噺（七つ目・揚屋の段） ○花上野譽の石碑（四つ目・志渡寺の段） ○木下蔭狹間合戰（七つ目 竹中陣屋の段） ○蝶花形名歌島臺（八の切・小坂部館の段） ○三十三間堂棟由來（平太郎住家の段） ○玉藻前曦袂（三の切・道春館の段） ○八陣守護城（八の切・正清本城の段） ○生寫朝顔日記（宿屋の段） ○壺坂靈驗記（澤市内の段） ○近江源氏先陣館（八つ目切・小四郎切腹の段） ○

鎌倉三代記（七の切・三浦別れの段）○加々見山舊錦繪（六の切・草履打の段）○太平記忠臣講釋（七つ目・喜内住家の段）○祇園祭禮信仰記（四の切碁立の段）

○河東節

○松の内 ○神樂獅子 ○隅田川舟の内 ○禿萬歳 ○灸すゑ巖の疊夜着 ○酒中花 ○水調子 ○うかぶ瀬 ○ぬれ扇 ○亂髪夜編笠 ○助六所縁江戸櫻 ○常陸帶花橋 ○道成寺 ○淨瑠璃供養 ○邯鄲 ○熊野 ○泰平住吉踊 ○浮世傀儡師（外記物）○小鍛冶名劍卷（半大夫物）

○一中節

○辰巳の四季 ○松づくし ○泰平船づくし ○高砂松の段 ○神樂高砂 ○曙繪の島臺 ○萬屋助六心中 ○自然居士過去物語 ○源氏妹が宿 ○夕霞淺間嶽 ○尾上雲賤機帶 ○源氏十二段 ○賴光大江山入 ○鉢の木 ○與作小萬夢路の駒 ○道行三度笠 ○鵜飼石和川 ○お夏笠物狂 ○蘂牡丹 ○源平妹脊の鷄合

○常磐津節

○老松 ○子寶三番叟 ○蜘蛛絲梓弦（仙臺淨瑠璃）○積戀雪關扉（關の戸）○四天王大江山入（古山姥）○雨顏月姿繪（葱賣）○戾駕色相肩（戾駕）○帶文桂川水（お半）○倭假名色七文字（源太）○壽靫猿 ○松色操高砂（太神樂）○再夕暮雨の鉢木（雨の鉢木 ○寄罠娼釣髭（釣狐）○後之月酒宴島臺（角兵衛獅子）○恩愛瞳關守（宗清）○顯絲絲苧環（おみわ）○忍寄戀曲者（將門）○花舞臺霞猿曳（新うつぼ）○新色雪間の市川（新山姥）○乘合船惠方萬歲（乘合船）○其扇屋浮名戀風（夕霧）○景清 ○勢獅子劇花籠（勢獅子）○釣女 ○戾り橋 ○三保の松 ○松の島 ○三世相錦繡文章（おその六三）○大森彥七

○富本節

○年朝嘉例壽（長生）○四十八手戀所譯（相撲をし鳥）○百夜菊色の世中（關寺）○夫婦酒替ぬ中仲（鞍馬獅子）○其俤淺間嶽（淺間）○道行戀飛脚（梅川忠兵衞）○[illegible]連理橋（蟲賣）○新曲高尾懺悔（高尾懺悔）○花川戸身替の段（身替お俊）○春夜障子梅（夕霧）○新曲かぐら獅子（神樂獅子）○徒髪戀曲物（松風）○茂懺悔睦言（扇賣高尾）○道行念玉蔓（長作）○幾菊蝶初音道行（忠信）○拙筆力七以呂波（乙姫）○草枕露の玉歌和（玉川）○奈須野 ○御代榮益穗富種（豐の前）○高砂女夫

○清元節

○梅の春 ○榮能春延壽（長生）○北州千歳壽（北州）○四季三葉草 ○其小唄夢廓（權八）○絲の五月雨（小菊半兵衞）○深山櫻及兼樹振（保名）○御名殘押繪交張（鳥羽繪）○月雪花名殘文臺（玉兎）○詠梅松清元（茶筅賣）○色山解深川（待人）○大和い手向五字（子守）○色彩間刈豆（かさね）○法

花姿色同（山歸り）○月花茲友鳥（山姥）○筐花手向橋（吉原雀）○復新三組盞（大山参り）○道行浮塒鷗○道行旅路の嫁入（八段目・おかげ参り）○六歌仙容彩（文屋・喜撰）○彌生の花淺草祭（惡玉）○おどけ俄煮珠取（玉屋）○道行旅路の花聟（落人）○再春菘種蒔（舌出し三番）○初霞淺間嶽（淺間）○〆能色相圖（神田祭）○造鈨菊睦言（菊畑三菊）○菊嬉閨睦言（お岩）○倭假名色七文字（手古舞）○重棲閨の小夜衣（白絲）○明烏花濡衣（浦里）○梅柳中宵月（清心）○日月星晝夜の織分（夜這星）○初櫓噂高島（三人三吉）○貸浴衣汗雷（夕立）○忍逢春雪解（三千歳）○色増艶夕映（雁金）○花雲助相肩（雲助）○青海波○助六曲輪菊（助六）

○新　内　節

○二重衣戀占（花咲綱五郎）○若木仇名草（蘭蝶）○千日寺名殘鐘（三勝半七）○眞夢血染抱柏（花蘭平三）○歸咲名殘の命毛（尾上伊太八）○傾城音羽瀧（おとは七郎兵衛）○膝栗毛「赤坂の段」○膝栗毛「市子の段」○明烏夢泡雪（浦里）○明烏後眞夢○累身賣の段

○薗　八　節

○道行相合巨蓬（梅川）○桂川戀の柵（お半）○鳥邊山○花街の色糸（植木屋）○道行菜種の亂咲○江戸の繪姿（おひな吉三郎）○道行綠花房（お花半七）○口舌八景（小いな半兵衛）○小春治兵衛巨燵の段○夕霧

○江戸長唄（めりやす大薩摩を含む）

○矢の根五郎○無間の鐘○傾城道成寺○風流相生獅子（相生獅子）○二人椀久○英獅子亂曲（枕獅子）○百千鳥娘道成寺（さなきだ道成寺）○高尾さんげの段（高尾懺悔）○天人羽衣○京鹿子娘道成寺（娘道成寺）○英執着獅子（執着獅子）○風流妹脊の柱建（柱建）○門出京人形（水仙丹前）○亂菊枕慈童（菊慈童）○鐘入解脫衣（解説）○劒鳥帽子照葉盞（劒烏帽子）○柳雛諸鳥囀（鷺娘・うしろ面）○初咲法樂舞（法樂舞）○ねこのつま○乘掛情の夏小立（與作）○鞭櫻宇佐幣○百夜車○姿の鏡關寺小町（關寺）○春調娘七種（七種）○童子戲面被（めんかぶり）○衣かづき思破車（やれ車）○童獅子○敎草吉原雀（吉原雀）○相生獅子○嫐染分紅葉（うはなり）○隈取安宅松（安宅）○御代松子日初戀（小松曳）○其容形七枚起請（こもそう）○關東小六後雛形（淡島）○其面形二人椀久○黑かみ○女夫松高砂丹前（高砂丹前）○菊壽の草摺○勢五大力○吹雪の雛形（雛形狂亂）○三重霞嬉敷顏鳥（三重霞傀儡師）○舞扇蘭生梅（舞扇）○濱松風戀歌（濱松風）○ゆかりの月○美面より○七枚續花の姿繪（汐汲・猿廻し・老女）○遲櫻手爾葉七字（花かり初め傾城・越後獅子・橋辨慶・相撲蚤）○戀男調松風（調松風）○再春菘種蒔（舌出し三番叟）○戀罠奇掛合（犬神）○四季詠寄三大字（門傾城・鹿島踊）○閨茲姿八景（節季候・心猿・晒女）○正札附根元草摺（正札附）○寄三津再十二支（小原女・乙姫・四つ竹）○其九繪彩四季櫻（丁稚・天下るの傾城）○

新獅子 ○三升猿曲舞（猿舞）○石橋（外記の石橋）○老松 ○不動 ○七所御攝初鐵漿（西王母・藪入娘）○大和い手向五字（官女・牛若）○外記猿 ○復新三組盞（初雁の傾城）○廓三番叟（廓三番）○歌へすゞ餘大津畫（藤娘・關三の座頭・關三の奴）○月雪花蒔繪の巵（月の巻）○拙筆力七以呂波（芝翫の傾城・供奴・浦島・瓢簞鯰）○八重霞賤機帶（賤機）○後の月酒宴島臺（角兵衞獅子）○御歳玉海老手遊（とんび奴）○吾妻八けい（八景）○六歌仙容彩（業平小町）○姿花後雛形（小鍛冶）○初子日 ○俄獅子 ○外記の傀儡獅 ○初しぐれ ○巽八景 ○花翫曆色所八景（助六・景清・新鷺娘）○勸進帳 ○花兄弟十二月所作（若菜摘・鍾馗・雷）○島臺 ○軒端松 ○士農工商 ○秋色種 ○雛鶴三番叟 ○花見車 ○手習子 ○織どの ○常磐庭 ○鶴龜 ○五色の絲 ○今樣小鍛冶 ○柳糸引御攝（裸三番叟）○壽 ○鞍馬山 ○翁千歳三番叟 ○廓丹前 ○菖蒲ゆかた ○喜三之庭 ○紀州道成寺 ○連獅子 ○時雨西行

○歌　澤

寅派、芝派の歌詞を全部收める。

○小唄・端唄・雜曲集

江戸時代から唄はれて今日に尙唄はれてゐる雜曲三百餘を收む。

追加篇
第廿九卷

謠曲三百番集

○脇能物

○高砂 ○弓八幡 ○志賀 ○淡路 ○御裳濯 ○代主 ○佐保山 ○松尾 ○養老 ○老松 ○白樂天 ○放生川 ○鶴龜 ○東方朔 ○白髭 ○大社 ○寢覺 ○源太夫 ○道明寺 ○難波 ○鵜祭 ○輪藏 ○富士山 ○江島 ○賀茂 ○嵐山 ○氷室 ○逆矛 ○要石 ○和布刈 ○竹生島 ○九世戶 ○岩船 ○金札 ○呉服 ○西王母 ○右近 ○繪馬 ○鱗形 ○玉井 ○內外詣

○修羅物

○田村 ○八島 ○箙 ○忠度 ○俊成忠度 ○經政 ○通盛 ○兼平 ○賴政 ○實盛 ○巴 ○清經 ○朝長 ○敦盛 ○生田敦盛

○三番目物

○野宮 ○井筒 ○芭蕉 ○采女 ○東北 ○梅 ○佛原 ○墨染櫻 ○身延 ○半蔀 ○夕顏 ○定家 ○江口 ○揚貴妃 ○雪 ○二人靜 ○千手 ○六浦 ○藤 ○杜若 ○羽衣 ○誓願寺 ○小鹽 ○雲林院 ○遊行柳 ○西行櫻 ○陀羅尼落葉 ○源氏供養 ○大原御幸 ○吉野靜 ○住吉詣 ○松風 ○熊野 ○草紙洗小町 ○山姬 ○祇王 ○胡蝶 ○吉野天人 ○鷺 ○葛城 ○龍田 ○三輪 ○卷絹 ○檜垣 ○關寺小町 ○鸚鵡小町 ○姨捨

○四番目物

○三井寺 ○櫻川 ○柏崎 ○百萬 ○飛鳥川

○雲雀山○隅田川○蟬丸○花筐○班女○加茂物狂○水無月秡○籠太鼓○富士太鼓○梅枝○玉葛○浮舟○三山○卒都婆小町○碪（砧）○求塚○水無瀬○藍染川○竹雪○鳥追舟○籠祇王○室君○初雪○花車○女郎花○戀松原○善知鳥○阿漕○藤戸○松虫○錦木○船橋○綾鼓○戀重荷○雨月○鐵輪○葵上○道成寺○木賊○景淸○弱法師○俊寬○攝待○鉢木○土車○高野物狂○芦刈○盛久○春榮○小督○七騎落○仲光○切兼曾我○安宅○木曾○元服○曾我○小袖曾我○重盛○楠露○櫻井○正行○藤榮○放下僧○花月○自然居士○東岸居士○歌占○蟻通○三笑○唐船○邯鄲○枕士童○菊士童○天鼓○咸陽宮○大佛供養○夜討曾我○橋辨慶○湛海○忠信○錦戸○禪師曾我○關原與市○現在巴○正尊○草薙○泰山府君○現在七面○調伏曾我○望月

○五番目物

○鵜飼○野守○鍾馗○昭君○松山鏡○壇風○烏帽子折○熊坂○鞍馬天狗○車僧○善界○大會○第六天○葛城天狗○殺生石○小鍜冶○鵺○舍利○谷行○雷電○國栖○春日龍神○大蛇○龍虎○愛宕空也○飛雲○現在鵺○大江山○土蜘蛛○羅生門○安達原○紅葉狩○船辨慶○山姥○項羽○碇潜○一角仙人○張良○皇帝○融○須磨源氏○絃上○海士（人）○當麻○來殿○松山天狗○石橋○合甫○猩々○大瓶猩々○翁○大典閑曲曲舞獨聟○護法○豐干○千引○常陸帶○空蟬○鷄龍田○阿古屋松○紫式部○鷄○松浦物狂○鵜羽○布留○丹後物狂○牽牛花○十番切○笠卒都婆○隠岐院○明智討○柴田○北條○吉野詣○高野詣○池贅○鞠○碁 其他

以上日本名著全集、第一期出版「江戸文藝之部」全廿七卷及追加篇二冊は、第十一卷黃表紙廿五種を第一回配本として每月一冊乃至二冊宛を刊行するもので、豫約申込は、大正十五年六月十六日を以て一旦縮切りましたが、會員數の增大に件ふ多量製產の利得を以て、益ゝいゝ本を作らんがため、その後も、また現在も、おそらく當分は將來も、會員の御紹介による新入會員の申込を歡迎致します。

○豫約會員外には頒たず、分賣の需めに應じ得ぬこと、また申すまでもなし。

○會費は一冊あて一圓六十錢。外に申込金一圓を申受ける。但しこれは豫約權ともいふべきもので每月の會費とは別。從つて一時拂の會員でも、二回拂の會員でも同樣に申受く。

○送本料は、會費の外に一冊あて金十二錢を要す。

（終）



